
LR

闇戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LR

【Nコード】

N1239U

【作者名】

闇戸

【あらすじ】

世界の主導権が人類から超越者と呼ばれる存在に移り変わって25年。魔法と魔構を手にした人と神と転生者が戦乱を生き抜くこの時代、西の果ての少年と東の果ての少女の出会いが、新しい時代の幕を開ける。

この物語はフィクションであり、実在するまたは歴史上の人物、国家、宗教、団体、神様または英雄の人格、その他の固有名詞など一切関係はありません。ただの妄想の産物です。

少し過去の話（前書き）

この物語はフィクションであり、実在するまたは歴史上の人物、国家、宗教、団体、神様または英雄の人格、その他の固有名詞など一切関係はありません。ただの妄想の産物です。

少し過去の話

東京湾のある倉庫街の一角で、重火器で武装した白人の集団が走り回り、しきりに無線で応答を取り合っている。その内容からすると、黒髪で着物姿の小さな娘を生かして捕まえる、というものだ。そして、一緒にいる者がいれば銃殺しても構わないとも。

そんな集団から離れた倉庫の一つで、白人達の無線で情報が飛び交っている問題の少女は、小さい身体を震わせて座り込んでいた。

その少女の傍らには、少女よりも少し年上と思われる少年の姿がある。

倉庫内に差し込む日差しで、少女の緋色の着物と少年の金髪と紫の瞳がよく映える。

少女は一度、あの白人達によって誘拐されたが、この少年が白人の油断を突いて助け出し、今ここに隠れている。

(俺に父さんやヴィオのような魔法が使えるればこのまま助けられるかもしれないけど、俺にはそれ以外の一つしかない)

不意に裾を引っ張られる。少女が少年のシャツをギュツと握りしめていた。それを見て、少年は焦りを引っ込めて少女に笑いかける。

「大丈夫だって、ヒルメのことはちゃんと護るからさ」

少女は更に強くシャツを握る。

「りお、ひるめじゃないよ？」

そう言う少女の目には涙が浮かぶ。

少年は一度目を伏せてから「悪い」とニヤツと笑った。

「他の子と名前間違えちゃった」

少女は目と口を大きく開けて「ひどいよ!」と少年をポカポカと叩いた。

「まあ、あれだ。りおはちゃんと俺が守るから、泥舟に乗った気で安心しろって」

「どろぶね?」

「瞬きよとんとして」「ちがうよ」と少年の言葉を訂正してくる。

「おおぶねっていうんだよ」

「そうなんか。神州語しんしゅうごは難しいなあ。こんな難しい言葉知ってるなんて、りお、すごいな」

ほめられて「えへへ」と赤くなってほほえむ少女には、もう怖がつている雰囲気はない。そんな少女の首に少年は自分が首から提げていた紐を提げる。碧い勾玉が一つ繋がっていた。

「お守りだ。ちゃんと持ってここに隠れてるよ」

「え、……ちゃんは？」

「俺は悪い奴らをやっつけてくる」

そう言つて、左手で少女の頭をポンポンと撫でてから離れる。

「絶対にここ動くなよ？ 大丈夫、俺を信じる。お守り握つて、ただ信じてればいい」

少年は年に似合わない妙に大人びた眼差しで少女を見つめてから背を向ける。そして外へと走つていった。

外に出ると、ちょうどその倉庫に足を向けていた白人達にみつかるが、彼らには意識を向けずに、ただ、自らの内側に意識を向け左肩に右手を添える。

「Shift!」

強く声を出して右手を一気に右側に引く。その様は自らを脱ぐような動作。ただそれだけで少年の姿が一気に青年へと変化する。

白人達は目を見開き息を飲んで立ちすくんだ。

「Reincer」
転生者

誰かがそう口にする。

動きを止めたのは数える程度だったが、その間に、空から飛来した二筋の銀光が白人達の身を切り裂いた。

青年は白人達を肉塊へと変えた銀光を両手に持ち、一気に飛翔。

青年の鋭い視線は眼下を編隊組んで行動する彼らの仲間達を捉える。

集団は二つ。否、青年の更の上に、上空に戦闘ヘリの姿があり、青年の姿を捉えるとすぐさま旋回を開始する。

「穿て」

ヘリは後回しだと両手の銀光を地上の部隊に向けて放り投げる。着弾。地上の倉庫を巻き込んで、白光に包まれ破壊をもたらした。光の後、人がいた痕跡すら残さずクレーターが残る。

続いて空中で身を翻し、ヘリに対して行動を移そうとした矢先、青年の意識とは無関係な角度から閃光が放たれる。ヘリが爆散した。閃光の元へと首を巡らせば、強化された視覚はその先で弓を片手に残心する銀髪の乙女を認識。青年はその姿に表情を険しくするもそのまま落下。着地した。

「あれは ぐっ」

途端に苦しみだし膝をつく。

そのまま意識を周囲に向け殺気を探る。殺気がないことを確認すると、姿を少年へと戻してその場で這いつくばった。

全身の筋肉が、骨が悲鳴を上げている。

しばらく痛みをこらえていると、少女の護衛達が走ってきた。

少年を知る護衛に少女の居場所を教えた後も、少年は痛みで動くことができない。

やがて少女が護衛達に付き添われて外へと出てくる。少女は少年の姿を確認すると走ろうとしたが護衛に阻まれ、そのまま車に乗せられていつてしまった。

少年が父の実家へと帰宅した時、父は少年の頭を撫でて一言「よくやった」とだけ言った。

その後、少年と少女が会うことはなく、少年は父と共に神州しんしゅうを離れ、その数日後になって、少女は少年がいないことを他人から知らされた。

LR16年7月の出来事であった。

出会い（1）

25年前にあった大戦により世界の主導権が人類から超越者へと移り、当時ネットに出てきたラストラグナロクという造語を元に、世界の暦はLR（Last Ragnarok）と呼ばれるようになった。

多くの国は別名で神とも呼ばれる超越者を頂点とした政府に支配された。それはここ極東も例外ではなく、旧暦では日本と呼ばれた国も今では神州と呼ばれていた。

神州は天津神々の直轄である神祇院を政治頂点とし、その下に内閣政府が置かれる。

その政府とは別に、九曜と呼ばれる九つの旧家がある。彼らは代々その身を契約した神の器として差し出してきたことで、神々の覚えよく、内閣も神祇院も通さず直接神々と交渉が可能であるとされる。

九曜の一。九曜天宮家の一室で、少女が緋色のブレザーに袖を通してしている。その髪は濡烏色で少女によく似合い、仕草には艶がある。そこは少女の自室。少女の名は天宮璃央といった。

愛用の机には写真立てが二つ。
一つは二人の少女が写ったもので、少女達は同じ顔をし違つ制服に身を包んでいる。

一つは緋色の着物を来た少女がラフな格好の少年から少し離れて笑う。少女の笑顔は硬く少年は笑顔を引き攣らせている。少年は金の髪と紫の瞳がよく目立つ。

璃央は写真立てを背に、首に碧い勾玉を提げて制服の下へと入れる。そして写真立てに振り返ると、幼い自分と少年が写った写真に向かつて「いつてきます」と告げて部屋を出た。

上野から本郷へと抜ける坂には、璃央と同じブレザーに袖を通した少年少女の姿がまばらにあった。

「璃央、おはよ」

後ろから挨拶をされて振り向けば、ママチャリを押しってくる同年代の少女が一人。

「おはよ、澄」

ママチャリ少女梧桐澄は璃央の隣に並ぶ。

二人ともスマートな美少女で違いがあるとするれば、澄の方が若干背が高く髪が青みがかっているくらいか。ともあれ、一人ずつよりも二人揃っただけで周囲から溜息が漏れるような光景となる。周囲の雰囲気には見向きもせず、違う意味の溜息を澄は吐きだした。

「初等部からずっと天宮だけど、やっぱりこの坂道はきついわ」

「いつも言ってるよね」

「いつも言えば、いつか誰かがここをエスカレーターにしてくれるかもしれないじゃない？」

拳を固める澄に璃央は苦笑いを浮かべる。道幅が狭い割に二車線あるこの坂に、そんなものが設置されるはずもない。

「正門登校にすると余計坂きついし、坂が嫌なら電車やバスの通学にしると色々ツツコミは受けますが、我が家は通学費の支給はないのでありますよ」

転じて、トホホと脱力した友人の頭をポンポンと撫でる。こういう流れは子供の頃からの通例である。

澄の実家は決して貧乏ではない。むしろ裕福と言える。

大戦以降、澄の父梧桐葉月は軍を引退した後、実家の旅館を一代で巨大なホテルグループへと成長させた。

なので澄は、金持ちのお嬢様に当たるはずなのだが、家の教育方針で余分な金を持たされていない。乗っているママチャリは旧暦モノの骨董品、父が使い姉や兄も使った所謂ひとつのおさがりである。「魔構機能付きの自転車は買えないの？」

「高いつて。旅行費用全部飛んでも足りないよ」

「あ、まだ諦めてなかったんだ」

「諦めないよ!? 雨月姉さんとの約束金までもうすぐなんだ。夏

休みまであと一ヶ月。バリバリ稼ぐよ！」

「お兄さんに会うために」

「そう！ あ、いや、それだけじゃないよ？」

即答しておいて、はたと内容に気づいて違うんだと弁解をする澄。それを受けて静かに笑う璃央であった。

そうこうしている内に学校裏門に到着する。

私立天宮学園。九曜天宮を中心に複数の九曜が出資している学園で初等部から大学までが敷地に入っている。教わるものは、LRになって世界に普及した文化であり技術。魔法。今ある世界を生き抜くために必要となった戦闘技術。魔法と科学が融合して誕生した魔構。この三つである。

この学園の理事は先々代の九曜頂（九曜本家の家長には頂が付与される）天宮央輝の孫娘に当たる。政財への繋がり求めて接触しようとする者もいるが、九曜怖さと璃央の色々な事情が怖くて手も出せない。教師陣などは大抵。

「おはようございます！」

裏門で生徒の服装チェックをしていた体育教師が敬礼して挨拶を口にした。こんな感じの反応を示す。璃央としては不快だが、いい加減、慣れた。会釈で返して、そのまま澄に付き合っつて駐輪場へと向かう。

「……こ、これは」

澄はソレを見つけて呆然。璃央は澄の反応が分からなくて、肩越しに視線の先を追う。そこには一台の二輪車があった。鋭角なデザインの白金のそれに、澄の他にも数人の少年少女が目輝かせて眺めていた。

「オートバイ？」

「魔構バイクだよ」

刻まれるエンブレムは杖を掴む鷲。それを確認して、澄の目が輝いた。

「ちょ、これ、クロケット社製だ。わあ、ネットでしか見たことな

いよ」

イギリスのウェールズに拠点を置く魔構企業の名だ。

魔構企業は企業によって、科学寄りか魔法寄りに分かれており、商品の性能にそれが顕著に表れる。

現在、世界での魔法学レベルはイギリスがトップを独走している。そこを本拠地とするだけあってクロケット社は魔法寄りの魔構製品を多く排出していた。

つい、ある生徒がバイクに触れようとしたその時、裏門でチエックをしていた教師達がやってきて予鈴も鳴る。敷地が広いせいか、駐輪場から各教室まで、予鈴が鳴ったら走らないと間に合わない。

まだ興味津々な澄の手を引っ張って、璃央は高等部一年一組の教室まで走るのであった。

「きやつ」

高等部校舎の玄関にさしかかったところで、璃央は何か白いものと衝突。転びそうになって無言で伸ばされた手に支えられる。

「す、すみません」

前方注意を怠ったとして謝って相手を見れば、長身の男。白基調のタクティカルベストを身につけた黒髪碧眼で縁のない眼鏡をした少年だった。

（うわ、イケメン）

璃央に引つ張られていた澄が少年を見て抱いた最初の感想がそれである。璃央の感想も似てはいたが、その前に思わず口にした言葉は違う。

「え、日崎先生？」

言っておいて即座に否定。自分の知る”日崎先生”にしては若すぎる。

「なんだよ、澄タン。それに天宮も。さすがにもう遅刻だぜ？」

少年に対して二人が何かしようとする前に、少年の隣にいたジャージ姿の女教師に声をかけられる。

梧桐穂月、天宮学園の教師にして梧桐家の長女。末の妹や弟にしてタンをつける澄の姉である。多くの人は彼女の一部分を見て同じ感想を得る。巨乳だ、と。

「もう遅刻？」

「うむ。今日の凜ちゃんは早いぞ」

「やっぱ」

妹は姉の情報に、慌てて上履きに履き替える。

「璃央？ 早く行こうよ」

「あ、う、うん」

璃央は少年に対して改めて頭を下げると、澄の後を追っていった。

「廊下全力ダッシュすりゃ平気平気」

教師らしからぬ穂月の言葉に少年は苦笑を浮かべる。

「ウゲツよりもホヅキの方がシユウに似ている」

「そりゃ、まあ、そうだろうなあ。」

真面目一辺倒のうげっちゃんに、不真面目一辺倒の秋が似るはずないっしょ。あ、だからってあたしに似てるからって、別にあたしが不真面目ってわけじゃないからな？」

「心得た」

軽く笑みを作って答える少年の顔に、遅刻ギリギリで走り込む数人の生徒が目を奪われる。その様子に穂月は肩をすくめて少年を連れて歩き出す。

「して、ヒザキ先生よ」

「残念ながらライセンスは持っていない」

璃央の言葉を使つての冗談など解さず、少年は速攻で否定。穂月は頬を引き攣らせた。

「悪い悪い。」

で、書類なんだけどさ。ミミズ文字ばっかで分からないから聞くんだけど」

ポケットから出した書類の氏名蘭の筆記体を指してミミズと言う。少年は吐息。

「セイジ」アステール・ヒザキと書いてある」

「お、サンキュー。なるほどアステール、ね。」

「どう呼ばばいいんだい？ 堅苦しく九曜頂？」

「アステール、で。そもそも、自覚のない九曜頂で呼ばれても困る」
ははは、と笑って「そりゃそうだ」と穂月は頷いた。

教員棟へと入り、理事長室を目指す。

生徒も多ければ教員も多いこの学園で、職員室を含め教員用施設をまとめた棟がある。その最上階に理事長室はあった。

授業が開始されているせいか、ほとんど人とすれ違わずに理事長室に到達する。ノックした穂月を先頭にして入室すれば、割と質素な洋室でがたいの良い和服の老人が茶を啜っていた。

私立天宮学園理事長、天宮央輝である。

「よく来たのう。この度は僕の依頼を受けてくれてうれしく思うぞ。イギリスから神州まで遠かったじゃろう？ 船旅しかないのが辛いところじゃ」

「空路で来た」

「空路じゃと？ よく撃ち落とされなかつたな」

旧暦からの航空路線には、空の化け物や空賊や地上からの攻撃が頻繁するため、よほど強力な魔構エンジンを積んだ飛行機でもなければ空の旅など出来ないと言われる。それでも最長、イギリスからであれば地中海までが限度とも言われている。針路を西回りを取った場合、大戦以降、超越者や神々に支配された国と関係を絶って敵対化したアメリカが広大な制空権を誇示するため、ある意味東回りよりも危険とされる。

そういう事情もあって、遠方の国へと出かける際に使用される移動手段は陸路または海路が選択されるのである。

「神聖メシーカを経由すれば問題はない」

（旧メキシコか。それはそれで危険地帯だねえ）

神聖メシーカ、旧メキシコはアメリカとは常に戦争状態を維持している。そこを経由するなど自殺行為にしか思えない。央輝も穂月

も唾然とする。少なくとも、常人が通る道ではない。

「こほん。まあ、突っ込んで聞くとこっちが心臓麻痺起こしそうじやし」

「依頼の話を聞こう。詳細が聞けるそうだが？」

「うむ。梧桐先生は外してくれ」

穂月が退室すると、央輝はセイジとソファーに向かい合って座る。

「この国の政府については分かるな？」

「天津神どもにへつらう人間が神祇院とやらを名乗って律を敷いている」

「その通りじゃが、どもはやめんか。役人の前で言ったら不敬罪で即刻処断じゃ」

「それは失敬」

「まあいいわい。で、この国の転生者の事情はどうじゃ？」

「生まれた子供がリンカーである場合、超越者の自我が表に現れる前に記憶を封じると聞いてはいるが……」

超越者の生まれ変わりを転生者またはリンカー、超越者が自らの力で肉体を再構成させて出現した存在を降臨者またはライナーと區別して呼ばれる。彼らに対する対応は国によって様々である。

神州では転生者に対してのみ、幼児の内から記憶を封じて自我の発現を抑え、人間として生かしている。この場合、神魂を宿す魔力の強い人間となる。成長すれば、国の戦力となる可能性があるからだ。下手に超越者自身の自我があると、現政府を瓦解させざる存在になる可能性があるために施行したとされる。

自我を封じられることなく成長した者に共通することと言えば、外見年齢の割に大人びている。というより爺臭い。不敬。などなど。「うむ、そこが分かかっておれば問題ない。ここで本題じゃ」

コンコンとノック。

スーツの女性が茶菓子和緑茶を置いて出て行った。セイジは添えられた菓子楊枝に視線を落としてから求肥で餡を包んだ菓子和菓子に視線を移す。ちよっと目が輝いているが、央輝は気づいていない。

「最近、神州の転生者が殺害されるという事件が起こっておつてな」
「モンスターにでも殺されたか」

大戦以降、世界中で出現し退治の対象となつている化け物は幻獣と呼ばれる。ヨーロッパでは幻獣をモンスターまたはファンタズムと呼ぶこともある。これらは神話上の怪物の姿をしており、姿は出現する地域によって異なる。

「いや、手口は人じゃな」

ふうん、と和菓子に菓子楊枝で切断しようとする。

「報告では、生きたまま神魂を抜かれたことによるショック死らしい」

菓子楊枝を持つ手が止まる。一考し再び手を動かす。

「犯人を見つける。依頼はそれか？ 警察の仕事だろう、それは」

「護衛じゃよ」

「あんたの？」

「残念ながら、僕は転生者ではないのう」

セイジは和菓子に菓子楊枝を刺して顔を上げた。

「LR8年。神州において、九曜天宮に双子の姫が生まれる。姉には天照、妹には月読の神魂が確認された」

吐息。

「神州が勢いづいた要因の一つであり、世界的にも有名な事柄だ。

その対象を害しようとするなら、国も護衛に力も入れようというものだろう。いちいち外に依頼することではないな」

「犯人は国、と言えば、どうじゃろう？」

「考えすぎ……いや、待てよ？ あんたはこの依頼、最初はタツヤにしたらしいな」

「九曜頂神薙殿じゃな。結果、ミスロジカル魔導学院のクエストを紹介されたわけじゃ」

ふむ、と視線を落として思い出す。セイジが見た依頼書の条件についてだ。

（依頼書には元々誰かを指定するものではなかった。しかし、タツ

ヤを経由した依頼書には俺かシユウの名指しだった。俺達の神魂を
知っていてこの仕事を回したとするよ）

「護衛対象は二人か？」

「妹の方は、ミスロジカル魔導学院に留学しおったわい。じゃから、
姉の璃央を護衛してほしいんじゃない」

双子というからには歳は十五。そこから十五期生か？ と推測す
る。正直なところ、それらしい生徒を見た記憶はない。同期は少な
いが、後輩が多いためそのすべてを把握しているわけではない。

「依頼を正式に受理する。手続きは学院の受付に連絡すれば完了だ」
「すまんの」

「では、失礼する」

立ち上がる前に和菓子を口に突っ込んで、颯爽と退室していった。

出会い(2)

本来であれば昼休みだが、本日の授業は午前中で終了とされ、手持ちぶさたになった生徒達は下校するか食堂へ行くか駄弁るかでその行動はまちまちだ。

姉に使いを頼まれたという澄と別れ、璃央は一人でマテリアルを買いに購買部へと来ていた。

LRに入って世界に普及した魔法には使い捨ての触媒を必要とする。

触媒はマテリアルと呼ばれ、これは火や水といったものから魔力を抽出したものである。抽出の仕方によっては、宝石のような外見にもなる。

抽出にはそれなりに技術と時間が必要で、密度に比例して高額になるが、外見の美しいものもまた密度に関わらず高額である。密度の高い物はそれだけで十分な兵器として、美しい物は美術品としての違いはある。

もっとも、学校の購買部で扱われているマテリアルは安価で、授業で使われる物は大体消しゴムを買うような感覚で扱われていた。

棚に陳列するのは一見するとビー玉にも見える。実際、ビー玉と呼ばれてもいる。

(綺麗だな)

色とりどりのビー玉を見て、素直にそう思う。

しばらく眺めていると「天宮さん」と声をかけられる。呼んだのはショートヘアの元気の良さそうな少女。生徒会書記の武本梢(二年)であった。肩に竹刀袋を提げている。

「? 武本先輩、剣道部に入ったんですか?」

竹刀袋を見てすぐに思いついたことを聞いてみる。聞かれた方も、璃央の視線が竹刀袋にいったことに気づいて、にやははと笑って「違うよ」と答えた。

「道場通いさ。」

ほら、うちの実家つて剣術道場っしょ。俊太郎のヤツ、小学生相手に手にも手抜きしないからさ」

「武本君の代わりと」

「そんなとこ。」

まあ、最近の小学生も結構やるようになってきたし、相手も楽しやないよ。

「そいじゃ、また明日ー」

「はい、また」

先輩を見送り、再び棚に視線を戻し、鞆からメモを取り出す。そこには必要なマテリアルの種類と数が璃央の字で書かれていた。

買い物を終えマテリアル入りの袋を鞆に仕舞い、裏門へと足を向ける。

今日は予定外に時間も空いたということで、少し寄り道をするこ
とにした。行く場所は秋葉原、目的は魔構製品のウインドウシヨッ
ピングである。

裏門にさしかかると駐輪場がなんとなく気になって足を運ぶ。ひ
よっとしたら澄が目的のバイクを鑑賞しているかもしれないと思っ
たからだ。

だが、駐輪場に友人の姿はなく、あったのはあのバイクと見知ら
ぬ白い背中。そう、今朝璃央とぶつかったあの少年の背中だ。

セイジは気配に振り返り、璃央と目を合わせた。眼鏡の奥で目を
細める。

(いや、どうせ今は何も視えない)

やろうとしたことは放棄して、小さくかぶりを振る。再度、璃央
に顔を向け、穏やかに笑みを浮かべる。

「君は？」

「え、あ、あの……」

「失礼。アステールだ」

「あす……てーる？」

「俺はアステール。先に名乗るべきだったな」

「アステール……さん」

(日崎先生の関係者じゃない？　こんなに似ているのに)

偽名という考えは浮かばず、ただ彼の名乗った音を何度か心で復唱する。

「私、は……天宮璃央、です」

「りお」

「え？」

その呼び方が懐かしすぎて、何故だか一瞬、涙が出そうになる。アステールと名乗った少年の顔が、かつて七年も前に出会った、日崎先生に紹介された先生の息子に似ていなくもない。しかし、色が違う。

(似ているだけ。違うんだ)

人違いだと納得させる。

「りお……りオ、ね。うん、覚えた。そうか、君が理事の孫娘か」

理事の単語に璃央は吐息。

「お祖父様のお客様ですか？」

「うん？　んー、そうなるか」

とぼけたような感じで応じる相手を、改めてよく見てみる。

服装は上から下まで白い。腰に剣帯、足にエンジニアブーツ、そこは白金。彼の左手中指に光る蒼珠の指輪が特に目立つ。何故、右にナックルグローブをしているのに、左には指輪しかしていないのだろうか。

セイジは璃央の視線には敢えて気づかず、バイクを押して璃央の隣までやってくる。

「ところで、タカミヤの本家とやらにはどう行けばいいのかな？」

ホヅキは裏門からが近いと言っていたが

「ご案内します」

「悪いね」

秋葉原行きを諦めて案内役を買って出る。家人を呼べばいい話で

はあるが、直接訪ねられて呼ぶのは失礼かと思ったからだ。
並んで歩く。

坂を下り、不忍池に入ろうとして足を止める。連れはバイクを押している。通る道を変え、上野公園を突っ切る道ではなく大通りとは逆の回り込む道を選択する。

「少し遠回りしますね」

「こういう時はバイクも邪魔だな。シユウなら、ああ、いや、友人だが。友人なら担いでいくんだろうが、俺には無理だな」

「これを、ですか？」

ものすごく重そうだ。というより、バイクを担ぐという発想をする人が……。

（ああ、いた）

澄の兄に思い至る。

（世の中、あの発想をする人が他にもいるんだ）

ある意味驚愕である。

「アステールさんはどちらの方なんですか？」

そんな問いが口をつく。

祖父の客人相手に会話など望んでいなかったが、この少年が普段祖父を訪ねてくる背広達とは、雰囲気というものがまったく違っていたから、つい気が緩んだといったところだ。

「ミスロジカルだ」

イギリスが魔法の知識水準トップを独走するのは、世界で最初の魔法研究機関を発足し、研究機関を母体とした学院を創設。学院の卒業生が研究機関に入って更に研究を重ねている実態があつてこそのものだ。

その研究機関を母体とする学院の名をミスロジカル魔導学院という。

それはコーンウォールの西端のセントマイケルズマウントに存在する。イギリスへの渡航手段さえ確保出来れば、世界中から入学希望者が集まるとされる人気校である。

「ミスロジカル魔導学院？」

「うん」

「あ、ひよっとして、十三期生……ですか？ 梧桐って先輩が留学しているんですが」

澄の兄が第十三期生として留学している学院でもある。あの発想者は彼かも知れない。

「そうか。君はあいつの知り合いか。意外に狭いな」
「じゃあ」

「ああ。俺も十三期生、ミスロジカルの現三年だよ。で、バイクを担ぐ友人はシュウ・アオギリ、俺のパートナーの一人だ」

梧桐秋の名を聞いて、ここで共通の話題を得て、璃央はなんとなく安心する。少なくとも、家路に無言を貫く必要はなくなった。

「パートナーって、一人じゃないんですか？」

「こつちでは二人一組と聞いていたが、そうなのか。うちじゃ三人一組が基本だな。だからパートナーは二人だ」

「パートナーというと……それじゃ、梧桐先輩も神州に帰ってきている？」

「シュウにそんな暇はない」

即答。

「俺は単位充足して暇だからいいが、シュウは今頃必死だろう。」

まったく、俺とコトハに教わっておいて、なんで落とすかねえ」

セイジは肩をすくめて盛大に溜息を吐く。

(璃摩しま、大丈夫かな)

留学中の妹が心配になってきた。

「妹がミスロジカルに留学しているのですが」

「らしいね」

確かに、理事はそんなことを言っていた。

「英語とかあまり話せる子ではないので、授業についていけなかったら」

「言葉の壁、か。それは平気だな」

「え？」

「ミスロジカルというか、ブリテン全域はバベルシステムの影響下にある」

「ばべるしすてむ？」

「大戦で接収されたアーティファクト。言語の統一というより、意志疎通の障害を取り除くことに特化したシステムだな。

異存在との意思疎通を可能とするんだ、人種の言葉の壁などあつてないようなものだ」

「そんなすごいものがあるんですか？！」

驚くのも無理はない。そんなものがあれば、外国語の授業など必要なくなる。

イギリス　ブリテン連合王国はこのアーティファクトを有するために、特異な共生を実現している。大ブリテンに人を小ブリテンに超越者をと棲み分け、政治は両島の合議で行われている。

「アーティファクトって、解析不能の遺物でしたか」

「そうだな。神の英知によるものか、はたまたまずこからもたらされたのか。

魔法研究に協力した超越者達でさえ、その存在を知らないらしいし、本当に謎な遺物だよ」

（そんなものを制御しているというんだからな。その術はどこで見つけたのやら）

解析不能だが制御が出来る。その矛盾。

ミスロジカルの卒業生でも、その矛盾を解き明かそうと研究所入りをする者は少なくない。

そんな会話をしながら、旧家が立ち並ぶ通りへと到着する。九曜天宮までそうかからない。

と、セイジはある門の前で立ち止まる。表札には『日崎』とある。璃央もセイジの行動に気がついて。

「アステール、さん？　もしかして、本当はこの」

セイジは小さくかぶりを振って、またバイク押しに戻る。

「うちの魔法学教師の実家がここらにあると聞いてたものでね」

「実は日崎先生のご家族とか」

「似ているとは言われるけどね。いかんせん、彼は東洋人だろう？」
自分の目を指して「残念ながら、色が違う」と言って笑う。

「まあ、彼の娘は金髪紫眼だし」

「え？ 息子ではないんですか？」

「……両方いるな。息子の方は出来が悪いから、忘れていたよ」

「出来が……悪い？」

璃央の足が止まる。その表情は若干ムツとしたものだ。セイジも足を止め、璃央が歩き出すのを待つ。

「学院では有名だよ。」

父親は至源しげんの称号を持った高名なウィザードだが、息子は源理魔法の一切を使えない出来損ないだったな。

娘の方は逆に、源理魔法のすべてに対応していて、天才とも言われている」

世界に広まった魔法は大きく分けて三つ。地水火風気の理に通じる源理魔法エレメント、魔構の制御などサポート系の総合とされる構想魔法サポート、世界の根源に繋がる幻想魔法ダイアト。幻想魔法は人行使不可能とされるため、実質は二つである。

源理魔法の五つの理に、人はいずれか二つ以上に繋がっているとされ、よほどのことがないかぎり最低でも一種類の系統の源理魔法は行使出来る。自らが繋がる系統に反する系統は苦手とするものが多いため、すべてを行使することはとても難しい。

故に、すべてに対応するとされる”日崎先生の娘”は天才と呼ばれているのである。

歩みが再開される。

天宮家の門前に到着。そこまで交わされた会話はない。

セイジは少し離れた地点にバイクを駐輪して戻ってきた。

「助かったよ」

「どういたしまして」

答える璃央は表情を変えず「では」と玄関をくぐってしまふ。セイジは苦笑を浮かべて吐息を一つ。

出迎えていた家人は「話は聞いている」とのことで、二、三会話を交わしてから、適当にぶらつく感じで屋敷の周囲を散策。

木や壁に時々左手で触れながら歩いて行って、庭にさしかかる。そこには璃央が制服のまま縁側にぼんやりと座っていた。

璃央はセイジに気がついて、名を呼ぼうとして躊躇。最後の会話を思い出し、下唇を噛む。

日崎先生の息子を馬鹿にされたのがどうしても許せない。彼こそが、かつて自分を助けてくれた恩人なのだ。

セイジから視線を外して立ち上がる。屋内に入ろうとして、地響き。音は遠い。しかし揺れは唐突で、バランスを崩してしまう。後ろへと、縁側の外に向かって落下。

「きゃ……あ？」

短い悲鳴。それは後に続かず、疑問に変わる。背中を支えられていた。ゆっくりと押し戻されて、その場に座り込む。

そっと支えが離れる。振り返れば、セイジが背を向けて南の空を見つめていた。

(今のは……なんだ?)

携帯電話が鳴る。ツーコールで出れば、相手は梧桐穂月。

【悪いアステール君。今いいかい?】

「今の地響きのことが」

【話早くて助かるよ。今頃は天宮家だろ? あたしが知ってる中で

一番近いのが君でさ】

「要件は?」

【末広町で転生者殺害が実行されたようなんだけど、町が一個消されちまったようだね】

その言葉を裏付けるように遠くでサイレンが鳴り響く。

璃央は不安そうな顔で南の空を眺める。

【あそこは秋葉原が近くて、うちの生徒も結構な数が今行ってるら

しい】

行って助けてほしい。それが依頼の内容だろう。セイジの今の仕事を知った上での依頼だ。

穂月自身がそうとう切羽詰まっているようだ。

「断る」

それでも解答する内容は変わらない。拒否だ。

【そう言わず頼むよう。澄タンが、妹がおつかいに行ってるんだよう】

耳元の鳴き声に、セイジの眉がピクリと動く。

穂月の妹、つまりは梧桐秋の妹である。

(しかし……、位置として、何かしらの陽動の可能性も否めない) 見捨てる選択を取ろうとして、ふと、携帯を顔から離して璃央を見る。ちょうどそのタイミングで目が合った。

「 スミ・アオギリというのは」

「 スミ……澄が何か? 」

璃央の口から出たのはファーストネーム。

璃央はセイジが電話に出てすぐに口にした地響きという単語を思い出して目を見開けた。

「澄が、澄がどうしたって言うんですか?! 」

思わず身を乗り出してセイジの服を掴む。顔が、近い。セイジは璃央を見下ろしながら、携帯を耳に当てる。

「受ける」

【ほんっ】

穂月の返事も聞かずに携帯を切った。

「最初に言っておくが」

セイジは璃央を離して座らせながら、前置きをする。

「俺は理事に雇われた君の護衛だ。だから、君を危険にさらすわけにはいかない」

「護衛……? 」

これまでも璃央の護衛とやらは何人かいたが、いずれも長くは続

いていない。璃央と合わないというのもあるが、近年では誰かに狙われること自体がなくなっていたため、護衛を必要としなくなっていた。

ここで転生者殺害　　転生狩りのことを知っていれば、自分に護衛がついた理由を察することも出来たのだろうが、璃央というか一般にそういう事件があることは知られていない。それが、自分に護衛のつく理由を不透明にし璃央も訳の分からないといった顔をする。「君が自ら危険に飛び込もうと、嫌でもそれを護ろうという仕事だよ」

（私が危険に飛び込む？ それって）

「澄が危険？」

そんな呟き。漏れたものではあったが、聞いていたセイジは頷いた。それを見て、息を飲む。

「足はある。盾もある。で、君はどうする？」

「そんなもの、決まっています」

立ち上がり、セイジを見下ろす。

（この人は気に入らない。でも）

この気に入らない相手が道を示していた。

地獄

「そこは、地獄絵図だった。」

末広町、上野から秋葉原まで抜ける途中にある町。があつた場所。燃えさかり、瓦礫だらけで、血の海で、一步でも遠くに逃げようとする人々の阿鼻叫喚。人の群れに突き飛ばされて踏み殺された塊も転がる。中には天宮学園の制服も見られる。

「なに……これ……」

「スミに電話を」

呆然と立ちすくむ璃央にそう声をかけるが、返事はない。

「電話をするんだ。幸い、電波は死んでいない。かかれば絶望は一つ減る」

茫然自失。

セイジは璃央のスカートから顔を出していた携帯を出して『梧桐澄』をリストから選択。通話ボタンを押す。

トーンの後、かかる。そのタイミングで鳴り出す着信音はこの近くにはない。少なくとも、既に動かない肉塊が澄である可能性は消える。消音にしていれば話は別ではあるのだが。

【璃央?!】

相手が出た。

「ほら、生きていたぞ?」

携帯を璃央の耳に当てる。

【もしもし?】

「あ……。澄? 今何処にいるの?」

セイジから携帯を引いたくって、強く耳に押さえつける。携帯の向こうからも、やはり絶望感を感じられないような叫び等が聞こえてくる。

【明神裏。璃央は?】

「湯島の辺り」

【なんでそんなところに……いい？ 明神付近には来ちゃダメだか】

通話が切れ、ツイッターとだけ響いてくる。

「場所は聞けたか？」

「明神裏だと」

「ミョージン？」

セイジから携帯を受け取って仕舞い込む。

澄の声を聞いて少し落ち着く。

「アステールさん、行きまっ!？」

「あまり見ていたい光景ではないが、前ぐらいは見る」

「す、すみません」

つまづいて、怒られた。へこんだ璃央を尻目にセイジは周囲を見渡す。その表情は厳しく目が鋭い。

(この炎、魔法の類だな。視れば種類も分かるんだろうが)

眼鏡を外せば視界はぼやけ遠くが見通せない。吐息を漏らして眼鏡をかけ直す。

(コトハの魔薬は効果が強い。まだ解けそうもないか。いつ解けるのやら)

やれやれと肩をすくめるセイジを置いて璃央は歩きだす。走るには路面が悪すぎる。バイクを乗り回す路面でもない。

「急ぎましょう」

「急ぐには賛成だ。方角は？」

「方角？ それならあちらでひゃっ」

澄がいると思われる方角を指差した直後、璃央をグツと片腕で抱え込む。

前傾、跳躍して瓦礫の上を移動しだす。逃げ惑う人々の頭上を越えて、傾いた電信柱を蹴り進み、倒壊していないビルの屋上に立つ。眼下は酷い有様だが、そこで一つの事実を確認出来る。逃げ惑う人々を襲う集団がいるという事実を、である。

老若男女関係なく、視界に入れば殺す。視界に入られれば殺す。

そんな感じで殺し続けている。焼き殺し、刺し殺し、撃ち殺し、斬り殺し、踏み殺す。

「ひどい」

璃央は涙を流し口を押さえる。

集団が身につけるのは、赤黒いコート。皆、顔の半分を覆うサングラスで顔を隠している。その姿にセイジは唖る。見覚えがあった。

「ロート・ラヴィーネ？」

呟きは璃央には届かず、阿鼻叫喚でかき消される。

（犯人は国？ 依頼が国で実行は国外の傭兵、これが答えか？

しかし、まだ生き残っていたんだな）

移動を再開。

襲われる者を助ける時間は、その分、目標を助ける時間を減らす。現状、助ける対象は二者択一にしなければならぬ。

だから、セイジは璃央の嗚咽を無視して、眼下の光景を、見捨てることを選択する。

（シユウであれば、どっちも救うんだらうかな）

いつでも我が儘に自分の心を曲げない友人を思い、自分は違うのだと納得を得ようとする。

そうして移動していると、高い場所だからこそ、ひっくり返った自動車越しに、ブロードソードを携えてゆっくり進む虐殺者の様子を窺う存在を見つけることが出来る。

「澄！」

「あれか」

躊躇なく飛び降りる。虐殺者の頭上へと。

グシャ、ガリガリガリ

何とも気持ちの悪くなる音を立てて、虐殺者をボードにしての短い波乗りを終える。地面に、摺り下ろされた肉と赤い溜池がじんわりと広がる。

血を避けて璃央を下ろすセイジ。

いきなり目前で展開された状況と二人の姿に澄は口を開けて幽鬼

のようにゆらりと立ち上がる。

「なんで」

泣きそうな友人を璃央は力一杯抱きしめる。

「助けにきたよ」

「来るなって言ったのに」

「聞こえないよ、そんな無理」

セイジは、抱きしめあう二人の少女をしばらく眺めていたが、改めて周囲に目を向ける。

（状況は最悪だ。せめて転生狩りが行われた状況でも聞いておけば、もう少し準備も出来たんだろうが。

せめて、誰かディスプレイ使えないもんかね）

細い階段を見つめる。それは神田明神の裏参道で境内に繋がっている。そんなことを知らないセイジは、一段目に足を乗せて硬直した。

（くっ、気持ち悪い。この先は神域、か。一体、誰だ）

吐きそうになり、堪えて二人の傍らに戻る。

「どうしたんですか？ 顔色が」

「気にしなくていい。あの上はどこに繋がっているんだ？」

「明神様の境内で、抜ければ反対側の通り 本郷通りに出られま
す」

飛び降りる前の時点では、ここの反対側は瓦礫に埋まってなかったのを確認している。常であれば、ここを抜けて反対側と選択するのだろうが、セイジは澄のことが気になる。自分を助けに来たという友人に対して、ずっと申し訳なさそうにして、泣くことも出来ないでいる少女をである。

（畏、だろうな）

危険を抜けてたどり着いた場所には、その先に安息を期待させる道がある。そうすれば、その道を使う可能性は少なくはない。

（冒険をしなければ宝は得られない。しかし、宝など欲さなければ、そもそも冒険など不要）

「来た道に戻るぞ」

セイジの言葉に、璃央と澄が反応を示すよりも前に。

セイジは横から来た衝撃に吹っ飛ばされた。瓦礫に叩きつけられて呻きが漏れる。

虐殺者が三人、セイジがいた位置に向けて掌を向けていた。

「アステールさん?!」

「あ……あ……あ……」

璃央がセイジを呼ぶ横で、澄が彼らを恐怖で見開かれた目で凝視する。

「この人達が」

璃央はポケットから赤いビー玉を取り出し、澄の前に出る。その裾を澄は掴んで首を激しく横に振る。

「ダメ、ダメだよ。あいつらに魔法なんか効かない。それに戦技だって遠く及ばない。梢先輩も俊太郎だって」

思わず友人を振り返ってしまう。

澄は思い出してしまう。涙が溢れさせてしまう。彼らによって斬り伏せられた、武本梢と武本俊太郎という二人のことを。

「武本先輩が?」

名を問えば、頷きが返る。璃央はここがどこかを思い出す。武本道場が近くにあるはずだった。だが周囲は瓦礫ばかりで、道場と思われる家屋はない。

あの三人がこちらに足を踏み出した。足音を聞く。前を見れば、一様にブロードソードを携えて、一步一步確実に二人の元へと否、歩みが止まった。そして、ある方向に向けて構えを取った。剣先を下に、左手でマテリアルを持って前へ。

彼らの向く先を見れば、セイジがかぶりを振って立ち上がるのが見えた。落ちた眼鏡をかけ直し、口に入った砂をペツと吐き出している。

「くそっ、思ったより鈍い」

無駄口を吐く間に、虐殺者達の左に構えたマテリアルが輝く、赤

青緑の三色。赤と緑が消えて、紅蓮の暴風が吹き荒れる。

（掛け合わせとは容赦がない！ 狙いはスチームボム？ 確殺コー
スカ！）

セイジが正面、三人を視界上で薙ぐように右手を一閃するのと、
青の輝きが消え強烈な衝撃とドンツという衝撃音が響くのが同時に
行われた。

空間限定の水蒸気爆発^{スチームボム}。セイジの立っていた付近の瓦礫を砂に変
え、おびただしい土煙が巻き上がるが、それはすぐに上下に分かた
れる。

前に出ていた虐殺者二人がビクンと跳ねる。二人は顔を下に向け、
その反動で上半身がゴロリと空中に転がった。

パリンとガラスでも割れるかのような音が響き、上を失った下半
身の横に上半身が落ちた。

残された一人がぐくもった声で何事か呟き、四つの肉塊から離れ
防御を固めて警戒。自分達が発生させた土煙が邪魔で敵の姿が見え
ていなかった。

やがて土煙は風に流されて晴れ、どこから出したのか、煤けた口
ングコート^{ロングコート}を左肩に背負って立つセイジの姿があった。ロングコー
ト以外、どう見ても無傷。

「敗因は」

呟き、上を指差す。釣られて見上げた虐殺者は直後にその場で縦
に潰された。セイジの指は下に向けて振り下ろされていた。

「過度の警戒だ」

短い戦闘の終わった空間から琥珀色の砂が風に吹かれて四散して
いった。

猫？

天宮家では、穂月が青い顔をして待っていた。

澄の姿を見つけると、走り寄ってきつく抱きしめた。

「ごめんよ、おつかいなにか頼んじやっでごめんよ」

「く、苦しい……」

姉の胸で窒息しそうになりながらも安堵から泣き出した澄。そんな二人を眺めつつ、璃央も自分が安堵するのに気づく。大切な友人がいなくならずに済んだと。しかし。

（武本先輩と武本君が……死んだ？ 本当に？）

あまり話さない同級生のことを思う。確か、澄とは古くからの友達だったはずだ。澄曰くの幼なじみらしい。

妹を抱きしめながら、穂月はセイジに顔を向ける。

「ありがとう。本当に、ありがとうな」

「決めたのは俺じゃない」

「何が原因かなんて問題じゃないよ。あんたがいなけりゃ、澄タンはこうして帰ってこなかったんだからさ。」

でもまあ、天宮にも感謝してるよ。頑固者の決定曲げてくれたんだもんね！

「え、ええ」

セイジと目を合わせようとしない璃央と、無然と穂月に応じるセイジ。あの短い戦闘からここに帰ってくるまでも、こんな感じであった。

「梧桐先生、澄を休ませるためにも、今日は当家にお泊まりください」

璃央の申し出に穂月は一も二もなく頷く。穂月からすれば、おそらくここが一番安全と踏んでのことだった。たとえ璃央が狙われていても、セイジさえいればどうとでもなると。

明神裏の戦闘については知らない。しかし、セイジの素性を知っ

ているからこそその信頼でもある。だから末広町の惨事を聞いてすぐこの少年に連絡をしたのである。

澄を支えた璃央が玄関をくぐるのを見送って、穂月はセイジに並ぶ。

「どうしたんだい？　ありや」

「血塗れの手はお嫌いらしい」

「そゆことか。勘弁してやってくれよ。神州じゃ、学生が血にまみれること自体マレなんだ」

「そんなことはどこも同じだ。その手のクエストがある、うちやノイエが珍しい。」

まあ、そういうクエストは単位充足者しか受けられないがな」

つまりと穂月に補足する。あんたの弟はまだだと。

それがなくさめと穂月が気づいた時には、セイジの背中庭に向かつて消えていくところだった。

セイジは屋敷周囲の木に、先程のように触れながら移動する。

（仲間が死に、餌が消えたことを知れば、次の手を打つはず。連中の巣が分からない以上、引き込んで対処するしかないわけだが）

ふむ、と思案顔で佇んでから、携帯を取りだしてメールを送信する。返信は一分とかがからずに届く。

送った文章は【魔薬はいつ解ける？】で、返事は【時間。それが解呪または解魔】だった。

セイジは肩を落とした。

（デイスベル・カースもデイスベル・マジックも、そんなレアなもの使える奴がここにいるとは思えんし、どうしたものか。本当に）

澄を寝かしつけて庭に出た璃央は、木に寄りかかって考え込むセイジを見かける。思い出すのは、明神裏で虐殺者達を片付けた彼に対して自分がした行動だ。

手をさしのべたセイジの手を払ったばかりか「近づかないで」とまて言ったこと。

彼は恩人である。いなければ、友人もまたあそこで見た死体の仲

間入りをしていたことだろう。それは分かっている。頭では。

縁側から庭に降り、近づこうとして 足が止まった。

「え？」

セイジの髪が金色に見えた。ほんの一瞬の出来事だった。瞬きの前後にあつた出来事。

（今のは、なに？）

目を見開く璃央に気づき、セイジは顔を上げた。

「何か用か？」

聞きつつ、璃央が何を見ているのか気になって、一応背後を確認してみるが、何も無い。

「なんでもありません」

見間違いと思うことにして、何か会話の種を探す。

セイジは、目を泳がす璃央をしばらく眺めると、木から身を離れた。

「少し出かける。念のための結界は張ったから、今日はもう外には出るな。アオギリにも伝えておけ」

「あ、ちよつと待っ」

呼び止められて、訝しげに璃央へと顔を向ける。そして、再び問う。何か用か？ と。

「用はありませんが」

「用がないなら後にしてくれ。俺は用がある」

「私の護衛よりも大切な用事なんですか？」

「ああ。君に張り付くよりも大切な用事だ。理解したか？」

「護衛なのに……」

「護衛だからだ」

互いに無言になる。璃央は下を向き、下唇を噛む。どうしてか、理由も分からず泣きたくなる。

やがて、璃央は吐息を聞く。顔を上げると、セイジがコートの内手を入れて、明らかにおかしいモノを取り出した。それは金毛の猫。いや、猫？ 猫にしては大きい。

「 は？ 」

自分でも間抜けと後悔しそうな声を出してしまい、ちよつと赤面でも目の前で行われた奇行に比べればどれくらいマシだろうか。

セイジは猫型の獣を璃央に抱かせる。

「とりあえず、こいつをそばにおいとけ。キオン、ちゃんと護れよ？ 」

「にゃー！ 」

ビシイと前足で敬礼する獣。

「いやいやいや、なんで猫？！ 」

「フーツ！ 」

猫と言われて怒る胸元の獣。

「一応、獅子なんだがな。人語を解するから、下手なことは言わない方がいいぞ 」

やることは終わったとばかりにセイジは直接扉を乗り越えて、璃央の前から去ってしまう。放置である。

璃央はセイジがキオンと呼んだ獅子（？）に視線を落とす。獣は璃央を見上げて、くあつと欠伸をした。

夜半過ぎ、璃央は寝室で金の獣を前にして、浴衣姿で布団の上を転がっていた。それをまったり眺める獣。璃央が右に行けば右に、左に行けば左に頭を動かしている。

（寝られない。原因は第一にあの人、第二に……やっぱりあの人、か）

転がるのを止めて獣を眺める。

（この子、どこから出てきたの？）

まさかコートのポケットから出てきたわけでもあるまい。

（世の中には透明化の魔法もあるし、隠されてたとか？）

一体どこにだるうか？

無言で獣を見つめれば、獣も見つめ返してくる。ふと、獣は璃央から視線を外し、枕元の時計を見て、また璃央を見つめてきた。そ

して、布団をバシバシと叩いた。

「寝ろつてこと？」

「んにゃ」

璃央の言葉が分かっているらしく、獣は頷いた。

布団から降りて畳の上で丸くなる。しばらく璃央が動かないでいると、機敏に身を起こしてまた布団をバシバシ叩く。

試しに布団に入ってみると、トコトコ枕元までやってきた。

何をするつもりなのかと様子を窺っていると、獣は息を吸い込み「にゃおーん」と鳴いた。それは屋敷中に響き渡るかのような大きさであった。

「こんな時間にそんな……」

叱ろうとしたはずなのに、唐突に睡魔に襲われて、意識を刈り取られる。

鳴き終わって数秒。

獣は璃央の頬を肉球でプニプニ押ししてみる。反応はない。完全に寝入ったようだ。

獣は、もう確認は終わったと、窓を器用に開けて部屋を出て行った。

獣の姿は、どことも分からない奇妙な空間にあった。

それはどこかの洋室。カッチカッチと時を刻む針の音。四方の壁に背の高い本棚が配置され隙間無く分厚い洋書が入れている。

獣は部屋の中央の長机に飛び乗る。

横のソファーには、血塗れの少年が寝かされていた。着衣は天宮学園の制服だ。上に、炭化して元の長さの半分にも満たない竹刀が置かれている。

「寝たか？」

声をかけられる。かけたのは壁よりの机に腰掛けて、分厚い洋書に目を通していたセイジ。

「にゃにゃ」

「よし」

短いやりとり。

「にゃ？」

「拾い物だ」

洋書を閉じて獣の元までやってくる。手には小さな革ベルトを持っている。

ベルトを確認すると、獣は首を伸ばす。セイジはそこにベルトを巻き付けて、隙間に折りたたんだ紙を挟んだ。

「ラフィルの元に運べ。手紙を読めばよくしてくれるだろ」

「にゃ！」

前足で敬礼。獣は少年の裾をくわえると、自分よりも遙かに大きいそれを悠々と引きずっていった。どこから出たのか、姿はもうない。

机へと戻り、机上に載せられた物を見る。

虐殺者のサングラスと血に濡れた鋼鉄の胸当て。胸当てをひっくり返せば『SGA-V1300』という刻印を見つける。

(どこの製品なんだ？ これは聞いた方が早いかな)

携帯で電話帳リストを上下させ『Crockett』を選択しようとして指を止めて一考。更に動かし『T.Kannagi』に選択し直して通話ボタンを押した。

開花（1）

起床。

（いつ寝たんだろ？）

寝た時の記憶がない。

首をかしげるも、洗面所へ行って顔を洗い、部屋に戻って着替えを済ませて写真に挨拶。澄を寝かせた部屋へと迎えに行く。

澄は浴衣姿で布団に座り、ぼんやり外を眺めていた。穂月が寝ていたと思われる布団はたたまれている。穂月は朝早く呼び出されていったことを家人に聞いた。

「澄？」

返事はない。もう一度呼びかける。ゆっくりと、緩慢に、璃央へと身体を向ける。

「おはよ」

挨拶にいつもの元気はない。目が赤く、頬には涙の跡が残る。

「今日は休む？」

「？ あ。学校」

聞かれて、キョトンとしてから問いの中身に気づく。

「支度しなきゃ。ごめんね？ すぐ支度するから」

照れ笑いを浮かべて、いそいそと立とうとする。気づけば、そんな友人を、璃央は抱きしめていた。きつく、抱きしめる。

「どうしたのよ、璃央？ やだなあ、着替えられないよ」

「ごめん。もう少し」

どれくらいそうしていたらだろうか。

廊下を誰かが歩いてきて、璃央の背後で止まる。澄にとっては正面。澄は視線を上げて相手を確認。セイジが紙袋を二つ手にして、不機嫌そうな顔で見下ろしていた。

「アステールさん？」

「いつまで遊んでいるんだ？ さっさと学校へ行け」

澄への返事は突き放すような言葉。背中であらう聞いて、璃央は奥歯を噛みしめる。

「あなたね」

ゆらりと澄を放して振り返る。拍子に澄の浴衣の帯が解かれた。振り返った璃央は気づかず、澄は下に視線を向け、ゆっくりとセイジを見上げた。璃央はセイジが頬を引き攣らせるのを見てキョトンし、その後ろで、ババツと乱れた前を合わせて赤面で黙り込む澄の姿があった。

セイジが足早に立ち去ると、澄は凄く早さで制服を着て支度を終える。璃央は状況が理解出来ず、澄に背を押されて屋敷を出て、門で待っていたであろうセイジと出くわした。

「さっきのはなんですか?!」

「さっき?」

璃央にしては珍しい大声の抗議。掃除中の家人達がビクツと跳ねて注目してしまう。

「ああ、あれか。あの程度で怒るなよ。早死にするぞ?」

「ぐっ、この」

まったく、これっぽっちも悪びれていない様子のセイジの言葉に、さすがの璃央も青筋浮かべて拳を握るが、その手を押さえたのは澄だった。

「こういう人にはちゃんと言わないと!」

「大丈夫だから。ありがと、怒ってくれて」

「でも」

「いいから。私、先行くね?」

「ちよつと」

澄は璃央を置いてセイジの隣まで歩いてくる。そのまま抜けようとして「待て」と止められた。止まれば、紙袋を一つ手渡される。

「これは?」

開けてみれば、中には紙と錠剤の入った瓶が一つ。紙には携帯電話のものと思われる数字の羅列が書かれており、その数字を見て澄

は慌てた感じでセイジを見た。

「レンのルームメイトからだと言えば分かる。連絡は早めにな」

しばしセイジを見つめていたが、無言で頭を下げ、走り去った。

「何渡したんですか?!」

「内緒。まあ、君には一生縁のない物ではあるな」

「はあ? どういうことですか、それ」

馬鹿にされた気がしてムツとセイジを睨むが、睨み合いに発展することはなく、相手はさっさと門の外へと出てしまう。

「だから、護衛対象を残して、どこに行くんですか!」

それを追って飛び出していった璃央を見て、家人達は口を揃えてこう言った。

「お嬢様のキャラが壊れた」

「うん……うん、ありがと、兄さん。それじゃ、また後で」

澄は携帯電話をしまい、職員室のドアをノック。失礼しますと入室する。

時間はまだ八時前だが職員室は慌ただしくフル回転中。緊急職員会議の直中であつた。

議題は昨日の、ニュースで言うところの末広町崩壊事件についてだ。まだ生死不明の生徒もいて、空気は緊迫中である。

穂月の席に近いドアから静かに入る。めざとい教師は注意してくれるが、曖昧な笑顔で回避して穂月の傍らまでやってくる。

「ん? ああ、澄タン。もう平気なのかい? あ、なに、あたしに用事?」

「少し話したいことがあるの」

「急ぎ? 今結構忙しいって分かるだろ?」

「すぐ終わるから」

「んー、じゃあ、生徒指導室でな」

そそくさと姉妹連れだつて、生徒指導室までやってくる。

穂月は澄に座るよう促すが、澄は座らず、真剣な表情で姉を見つ

めた。

「ねえ、姉さん。昨日、私の目の前でね。梢先輩が……俊太郎が死んだよ」

「うん。武本道場の残骸と武本家の面々の死体は発見されたって報告は聞いた」

「梢さんは私達をかばって、生きたまま燃やされて。俊太郎は泣きながら向かって行って、それで……それで斬られて」

思い出して、泣きそうになる。でも涙を堪える。泣いたら、聞きたいことが聞けなくなると思ったからだ。

「私もね、学校で習ったとおり、テストで満点取れるくらい全力で魔法使って戦った。でも、あいつらには全然効かなかった。」

あいつらさ、私の気弾を受けて見せて、笑ったんだ。笑いながら、私の目の前で、まだ息のあった俊太郎を、足を刺し、手を刺し、お腹を刺して、なぶり殺したんだ。

ねえ、どうして？ どうして学校で習ったとおりの魔法が、あいつらに効かないの？ 少しでも効いてたら、もう少し長く、みんな生きていられたよ？」

「そりゃ、澄タンだって卒業する頃には」

「あと二年勉強して、テストがんばって、昨日助けられなかった俊太郎達を助けられるくらいに、本当に強くなれるの？」

私、兄さんと同じ母さんから生まれたんだよね？ 私だって、兄さんくらい強くなれるはずなのに。分かるよ。今の私、兄さんの中等部時代よりも弱いつて」

妹から向けられる言葉に穂月は答える言葉を探す。

「秋はほら、規格外って言うか」

困る。神州の魔法学の教育事情もレベルも教師になる前から知っているだけに、妹の疑念を晴らせる言葉を思いつけない。

抑揚もなく淡々と告げられる疑問は、他国の状況を知れば誰もが抱く疑問でもあった。

姉の困り顔に、妹はギュッと手を握りしめる。

どれくらいそうしていただろうか。時計の針の音だけが支配する教室に、登校してきた生徒達の声が聞こえ出す。溜めていた息を長く吐いて、澄は手を開いた。

「ごめん」

「いや、こつちもごめんよ。その」

「時間を取ってくれて、ありがとね」

無理矢理の笑みに、穂月は言葉を詰まらせる。何か、嫌な予感があった。

生徒指導室のドアに手をかけた澄を呼び止めようとするが、タイミング悪く校内放送がかかる。呼び出した。

「ちよ、ちよっと待って」

職員室に急ぎつつ、澄を呼び止めようとするのだが、澄は穂月を見ず教室へと歩いて行ってしまった。

高等部一年一組の一時間目、魔法学の授業が開始され……否、開始前に魔法学担当である担任の凜が、視線を教室の後ろに向ける。向けられて、セイジは「気にせずはじめてくれ」と手を軽く振って答えた。

「理事の許可は得ている」

「む。いや、話は聞いているが」

教室全体の注目を授業ではなく、理事からのお達しで見学することになった少年に持つてかれていて、どうにもやりにくい。

教壇を教科書で叩いて咳払い。生徒達の注目を集める。中には璃央と澄の姿もあるが、生徒数は昨日の事件によって三分の二に減っていた。

「ん、では始める。」

源理魔法であれ、構想魔法であれ、その使用には三段階を経ることが、世界的にも認められている魔法の基礎だ。

第一に自らの精神上において式を構築。

第二に手にした触媒に式を込めるイメージ。

第三に触媒がイメージを受けて式の解答を形にする。

ただし、神州においては第一段階の時、精神上でのイメージに加え詠唱を行うことで式を複雑化し、最終的な威力を底上げするものである」

まあ、と補足する。

「学生の中には詠唱するのが恥ずかしくて、威力の底上げをマテリアルの密度で補おうとする者もいるようだが、そんなのでは財が保たない。

期末試験で詠唱付をさせる。自分に合った詠唱を編み出すことも課題なので、しっかり図書館で資料の確認を行うこと。

最初は短くてもいいから、気楽にいけ」

授業に耳を傾けつつ、セイジは近くにいる生徒の教科書を後ろから眺める。

(ハイスクールで集中補正の授業だと？ いや、一学年目なら・・・しかしなあ)

まったりと、そんな言葉が合いそうな感じで授業の流れを眺めている。

そして朝から持ち歩いていた紙袋を開けて、中から菓子をつまみ出す。一口サイズの上生菓子である。口にして幸せそうに「うん、うまい」と漏らした。

それを視界に収めて凜の額に青筋が浮かんだ。

「アステール君と言ったか」

「うん？ なんだろう？」

「つまらなさそうだな？」

「まあなあ」

「ぐっ」

凜が掴んでいた教壇の端がミシツと音を立てた。

(アステールさん、正直過ぎる)

璃央は気が気でならない。

「君はミスロジカル魔導学院の出だそうだが」

「出？ いや現在三年だが」

「ほう、まだ学生か」

「そうなるな」

二個目を食べた。

（ああ、美味いものというのはいい。帰る前に作り方でも調べるか）
「で、何か答えるものでも？」

名指しされたということはそういうことなんだろう、と身構える。
「ミスロジカルでは魔法の威力を上げるには、どういう教育を受けるのか。ご教授願えるだろうか？」

「ご教授、と言われてもな。ライセンスはないというに。ったく」
学院の名が出ると、生徒達に注目されてしまう。セイジはやれやれと肩をすくめた。

「そうだな」

自分の頭を指差し「算術のお勉強だ」と言う。

「源理魔法とは、いかにして魔力を増大させ、マテリアルを弾けさせるかにかかっている。算術が出来れば公式を複雑にして、より高度な魔法も使えるからな。」

もちろん、高密度ないし高純度のマテリアルを用意することが最短の手段ではあるが、そこは先生が言ったように散財が切ないところだ」

こんな感じだ、と両手を広げて掌を見せた。

「何も特別なことはない。もちろん、集中補正として詠唱や印を行うことも推奨している。」

それで、ご教授とやらは終了でいいだろうか」

チャイムが鳴り響く。

「ご教授、助かりました」

凜はそれだけ言って教室を出て行く。うなだれているのは気のせいだろうか。特別な手法を引き出そうとしたのが失敗してのうなだれか。

生徒達のセイジを見る目が違う。授業中に最後列でお弁当を食べ

るだけの不良ではなかったらしい、と。

休み時間になって、生徒達がセイジの周りに集まってくる。しかし、困いが出来る前にセイジは手を掴まれて教室の外に引っ張り出された。掴んだのは璃央、ではなく、澄だった。

「今、いいですか？」

「あ？」

真剣な表情で問われ、セイジは璃央に視線を移す。璃央は面白くなさそうに不機嫌な顔で、次の授業の支度をしていた。

「本当に、やれやれだ。ここでする話じゃなさそうだな」

「ええ」

「そうか。それじゃ、場所を変えるか。というか、休み時間中終わる話なのか？」

休み時間は五分。真剣さから、どう考えても五分で終わりそうではない。

まあいいか、と澄に連れられて廊下を歩いていく。到着したのは屋上であった。

澄はセイジを掴んでいた手とは反対側で携帯を操作して通話ボタンを押す。

「まずはこっちをお願いします」

「電話？ ええっと、ハロー？」

【よう、俺俺】

ブツツと電話を切った。すぐにかかってきた。

【何いきなり切ってたよ、おい！】

「つい」

電話の相手は、澄に連絡を取れと指示した相手。梧桐秋、澄の兄であり、セイジのパートナーの一人である。

【ついじゃねえよ、ついじゃ】

「無駄話がしたいのか？」

【お前のせいだろうが。相変わらずひどい。要件を単刀直入に言うんだな】

「妹に半神としての力の使い方を教える、か？」

【手っ取り早すぎる！】

「促進剤渡してお前に連絡取るように言ったのは俺だからな」
吐息。

「正直なところ、俺よりもお前の方が適任だと思っぞ？」

「亜神化にしたって、俺とお前じゃ方法も違うんだし」

【俺もそうしてやりたい。だが、今の俺には使命がある。そう、魔法学理論応用の単位を修得するという、超重大な使命が！】

「……」

【……いや、ちょっと、黙るなよ】

「お前がその使命を最短で終わられる手段を教えてもいいか？」

【そんなのがあるのか？ 是非教えてくれ】

「セレスに雨を降らせてもらい、亜神化したコト八にシフトしてもらった上で学食Sランチを三食食わせ、傾向と対策を練ってもらっ」

【……】

「セレスは物では動かないが、クエストの手伝いを約束すればなんとかなる。あいつはクラスメートには甘いからな」

【その手は考えてなかった。うっし、んじゃ早速行ってくるぜ】

「これで落とすようなら、もう知らん」

【サンキュー。】

おっと、言い忘れた。妹の再教育のことだけどな 手は出すな

よ？ それだけがもう心配でな】

「お前は俺をなんだと思っっているんだ」

電話を切って澄に返す。なにやら信じられない物を見る目でセイジを眺めていた澄に携帯を返した。

「なんだよ？」

「へ？ ああ、いやあ」

曖昧な笑みでセイジの問いを受け流す。受け流された方は怪訝。

「一応聞いておくが、良いんだな？」

この国では転生者が記憶や力を取り戻そうとするのは禁忌らしい

が、半神が力のコントロール方法を学ぶことに関してはグレー。半神の存在自体が世界でもまだそれほど認知されているわけではないから、仕方がないんだが。

で、だ。

学べば周囲とのレベルに格差が生まれ、君を奇異な目で見るばかりか化け物扱いする輩も出る。間違いない、な」

それでも、いいの？ と。

澄の素性のことは、澄の兄である秋をよく知り、片親が人ではないことと同じ立場の妹と弟がいることを、秋本人から聞いて知っていた。

片親が人ではなく、神や妖怪である子を総じて半神という。

力の使い方を知らない半神は心身が不安定となった場合、暴走の危険を持つ。それを知るが故に、昨日、目の前で友人を亡くしたという澄に促進剤 神を許容する部分を一時的に広げて暴走の危険性を緩和する薬を渡したのであった。

「イギリスはそうでもないが、超越者そのものを排斥しようとする人類至上国家アメリカなんかは、素性がばれた時点で殺される。半神も、リンカーやライナー同様、人ではないとな」

人以外、別のナニカ、そういうものになってしまってもいい、それが澄の、今の考え。

(何も護れないなんかよりも、よっぽどいい)

無力さがその身に浸透しきる前に、目の前で大事な人達を失うことの方が辛い。それが澄を突き動かす悲しみ。それはきつと、時が経てば悲しみと一緒に薄れ、やがて消えるだろうきつかけ。

「お願いします！」

「まあ、本人が構わないなら、いいけどな」

時計を確認。十時になったところだ。今は二時間目の半ば辺りだろうか。

「ありがとうございます！ ええっと、先生？」

「だからライセンスは……」

「じゃあ、師匠で」

「決定なのか」

「はい！ 先生オア師匠です！」

梧桐秋が一年時に戦技の教官相手にやっていたやりとりを思い出
し、兄と同じノリだな、と諦めた。

開花（2）

四時間目になっても、澄の席は空席。教室の後ろにはセイジの姿もない。

（二人ともどこ行つたの？）

不安げに窓の外を見ると、ベランダの柵に一羽の鳥が留まっていた。こちら辺では見かけない鳥だから、妙に気になる。

全身が白く、嘴が陽光で金に輝く、威風堂々としたやけに貫禄のある鳥だ。

（鷹？ じゃなくて、ええっと）

鷺である。

鷺は教室の中というより、璃央をじつと見ていた。

璃央が首をかしげると、鷺も首をかしげた。

授業終了のチャイムが鳴り、教師への礼を終えて視線を戻すと鷺の姿は消えていた。

首を捻りつつ食堂に来ると、一角に妙に空いたスペースがあることに気がつく。

「なっ」

原因が目に入って、璃央は凍りついた。

やっとの思いで動き出し、ツカツカとその席に近づいていった。

「君、ちょっと、変わりすぎじゃないか？」

「なにがですか？」

「なにがって、鏡見るとか……いや、それじゃ分からないか」

「おかしな師匠だなあ。疲れたとか？」

「ある意味 んあ？」

「？」

カツツと傍らに立った人物を見上げれば、璃央が引き攣った笑みを浮かべてセイジを見下ろしていた。目が笑っていない。

「人の護衛をほっぽり出して、あなたは何をしているんですか？」

「……」

「アステールさん？ ちょっと、聞いてるんですか？」

無言で自分を見上げるセイジに、更に口調をきつくして問いただそつとすると。

「どうしたの？ 璃央」

セイジの前に座る、今まで学校にこんなに綺麗な子いたか？ と怯んでしまうほど綺麗な女生徒が璃央に話しかけてきた。一瞬、誰だろう？ と疑問に思ったが、一拍後。

「え、澄？！」

「そうだけど、本当、どうしたの？」

（ええええええ？ どうしたのってこっちの台詞だよ?!）

驚愕の凝視。次いでセイジに移すと、セイジは璃央から視線を反らした。

「あ・ん・た・か」

「さあ？」

「違うと言うなら、どうしてこっちを見ないんですか？」

「君が怒る理由が分からないな。見つめ合う趣味でもあるのか？」

「見つめ合う……？」

単語の意味に思い至り、璃央の顔が瞬間沸騰した。

「わ、わわ、私には、心に決めた方がいますので、あなたなんかと見つめ合っても、なな、何も問題は、ありません。」

そ、そう！ あなたはただの護衛ですから！」

ざわ。食堂中の生徒のざわめきがヒートアップするに足る発言であつた。

璃央の様子に澄は「ああ、やっちゃったよ、この子」と遠い目をした。

璃央とも初等部以来の付き合いで、心に決めた方というのも聞かされて知っている。七年前に璃央がアメリカの特殊部隊に誘拐された時、単身助けに来た少年のことだ。

二、三年前に許嫁を決められそうになった際「じゃあその少年を」

と言ったら、分家親族他の九曜と悉くに猛反対されて号泣し、梧桐家に出してきたりもしている。

(まだ諦めてなかったのね)
当手を思い出して苦笑。

そうこうしていると、何の騒ぎかと教師達が騒ぎを収めに来た。その中には、担任の凜や穂月の姿もあった。

「天宮、お前　　な……に？」

璃央に注意しに来た穂月が澄を見て言葉を失った。妹の正面に座るセイジなど目にも入らない。

(蓮華……さん？　いや、違う。そんな)

幼少時、父が連れてきた女性がいた。女性は後妻になって子を産むと姿を消し、後には母の違う弟が二人と妹が一人残っていた。目の前にいる少女が、その女性と見間違えた。確かに妹は彼女の面影はあったものの、ここまでではつきりと見間違えるほどではなかったはずだ。

「澄タン……か？」

「どうしたの？　なんか間抜けっぽいよ、姉さん？」

プツツと笑う澄。仕草こそ妹だが。

朝の出来事が頭を過ぎる。あの時に、懲罰覚悟で妹に本当のことを話していれば。

(いや、話して本当に止められた？　これじゃ、澄まで秋と同じ目
に)

秋は中等部時代、一時的に力を暴走させてある烈士隊員を再起不能にし、神祇院の追求を逃れるために留学させた。澄と弟の渡には暴走の兆候もなく、完全に人としての力しかなかったから、追求の対象にもならなかった。

その暴走を抑制するための処置をした結果であることなど、穂月
が知るはずもない。

穂月の様子がおかしいと見に来た凜も澄を見て啞然。

【理事会の決定により、午後の授業はなくなりまし。全校生徒は

速やかに下校の準備をしてください。また、今日より一週間、二三区内の学校は強制休校となりましたので、自宅での予習復習は必ずするようにしてください。繰り返します。理事会の
】
そんな放送が入る。

「下校かあ。じゃあ、続きどうしましょ？」

「俺は彼女の護衛に戻る」

「璃央はまっすぐ帰宅？」

「う、うん。秋葉原どころじゃないし。澄もまっすぐ帰った方がいいよ？」

「んー、そだね。そうするよー」

セイジと璃央の答に、澄は肩を落とすが、そこに穂月が割り込んでくる。

「いや、澄タン。しばらくはうちに帰っちゃダメだ。頼むから帰らないでくれ」

「む。どういう意味？」

「あ、ああと、色々あるんだよ。色々」

「色々って」

「天宮、うちの澄タンのことよろしく頼むよ！」

手を握られてのお頼みに思わず「は、はい」と答えてしまう。それに安堵して「じゃあ、よろしく頼んだよ！」と走り去ってしまった。

「えちよ、穂月？ 待ちなさい！」

穂月を追いかけていく凜。二人の教師が走り去った方を、璃央は啞然と澄は怪訝に見つめていた。

「ねえ」

「なんだ？」

互いに無言になって後が続かない。澄は自販機で買い物中である。無言に耐えきれず、璃央は溜息を吐く。

「澄に何をしたの？」

「自分でどうにかする、を手助けしただけだ」

「手助けって？」

「それこそ君には関係がない」

ムツとした璃央を横目に鼻を鳴らす。

「スミのアレは、それなりの葛藤が形になったものだ。その葛藤に、友人だからと、君は踏み込むのか？」

葛藤。その言葉に思い至るのは、昨日の数時間で友人が体験したことだ。その体験が、友人に有り様を変えさせてしまったのだろうか。

缶を三本胸に抱えた澄が戻ってきた。

「璃央は苺牛乳と」

璃央にピンクの缶を手渡し、セイジには緑の缶を差し出してくる。

「師匠は」

「俺はいらんと いや貰おう」

缶を引っ込めるに引っ込めなくなつて目を潤ませた澄を見て、セイジは缶を受け取った。その態度に澄は顔を明るくしてみせた。それを、璃央はなんとも言えない感じで見守った。

「これは……グリーンティーか？」

「だって師匠、和菓子食べてたじゃないですか。和菓子には緑茶が合うんですよ」

「次に試すか」

「是非試しちゃってください」

セイジは緑茶をジツと見つめ、澄はトマトジュース片手にニコニコ笑っている。二人から少し離れて寂しそうに眺める璃央の姿があった。

天宮家の庭にて、璃央を縁側に座らせて、セイジは澄への続きとやらを開始する。セイジの傍らには何故か彼の魔構バイクが置かれている。

「ついでに面白いものを教えてやる」

セイジの言葉に興味を持った結果が、縁側で若い男女をまったり見守ることになった。

「師匠、私、そんなに変わったんですか？」

周りの反応が未だよく分かっていない澄である。

「それを今から頭に分からせてやる。しばし待て」

言つて、バイクに触れると、速度モニターの上に半透明のパネルが表示された。

【Confirmation your ether（あなたの魔力を認証しました）】

「Start BABELtypeT」

【Allright】

鈍い駆動音。バイクを中心に何か奇妙な感覚が駆け抜けていった。

（今、バベルつて言った?!）

セイジとの会話でイギリスを共生国家にしたシステムのことは聞いている。それと同じ単語をセイジが口にしたのだ。

「これでいい。さて」

意味ありげな視線を璃央に送り、セイジはフツと小さく笑った。

それが璃央には「その想像は正解だ」と言われたような気がした。

「さっそくだ。魔法学の基礎である三段階を成立させるにはどうすればいい？ 何が必要だ」

「想像力と計算とマテリアルと魔力、です」

「そうだ。例えどれほどに脳内でイメージが精巧であっても、魔力がなければマテリアルにイメージを送り込むことは出来ない。では、魔力とは何か」

「生命力を交換した異能です」

「それが神州の教えか。残念ながら、それは違う」

セイジの答に、璃央と澄は揃つて「え？」と反応を示した。

「変換によって魔法を発現させる力は魔力とは異なる存在だ。代用品とでも言えばいいか。代用品を使うかぎり、魔法の出力などたか

が知れている」

「じゃ、じゃあ、魔力ってなんなんですか？」

「そうだな、スミ。君は既に答をその身で体現していると言っ
て分かるだろうか」

「体現……ですか？」

澄は自分の身体を見下ろす。そんな友人を見て、澄は思う。

（体現というと外見？ 綺麗になった？ ううん、澄は元々綺麗だ
からその表現は変だ。変わったのは外見ではなくて）

一分ほど見つめていただろうか。唐突に「あ」と漏らした。

（昨日の救出直後に比べると、今の澄はとても元氣に見える。それ
を指して体現というのだとしたら）

「元氣……いえ、生命、力？ 生命力が魔力ということ？」

若干自信のない解答ではあったが、セイジは璃央を指差して「正
解だ」と答えた。

なにやら今日は冴えていると思う璃央であった。

「超越者 すなわち、神、英雄、半神、転生は人を強く惹きつけ
る魅力を持つ。」

魅力とは原初よりの美しさである生命そのものを指す。強さは外
見であったり見る者を引き込む誘惑であったりと様々だが、一言で
言えば魂の強さだ。

そして、それらは一様に、強い魔力を有する」

「はい、先生」

「先生言うな、護衛対象」

「……。転生者ですが、澄のようではありません」

「記憶を持たない転生者は神魂の力を引き出すことは出来ない」
「力を引き出す？」

「今から説明する。黙って菓子でも食ってろ」

むすつと煎餅を手にする璃央である。

「スミ、俺の護衛対象は君ら兄妹のことは知っているのか？」

「天宮の双子姫には劣るけど、そこそこ有名ですからねえ。てか、

兄さんの大活躍で有名になりました。そして、璃央にもっと優しくしてください」

「優しさなど母の腹に忘れてきた」

「プイツと顔を背けるセイジ。」

（それが嘘だと知りましたけど。てか、この人、時々すごい面白いっていうか可愛いつていうか）

「言えば確実に怒らせることを思って、自分が師匠と呼ぶ人を楽しげに見つめる。」

「半神が強い魔力を持つのは、親となる存在に繋がる道が、自らの魂に繋がっているからとされる。これにより、魔力の性質は親とほぼ同じになる。」

そして転生。半神が持つ親との繋がりに相当するものが過去の記憶に当たる。

分かるか？ どれだけ大容量のタンクを持っていたところで繋げるべきパイプがないんだ」

「あれ？ でも師匠？ 転生者は普通の人よりも魔力強いですよ？」

「カレー屋の前を通ると匂いで腹が満ちる、で分かるだろうか」

「なんとなく分かるけど納得はしたくない例えですね。」

つまり、神魂から漏れてる魔力を使用しているってこと、でいいんですか？」

澄の答はセイジにとって満足のいくものだったらしく、無言で頷く。

「とりあえず、魔力とは生命力である、は理解出来たか？」

二人の少女が頷くのを見る。

「では、代用品を生み出さない、本来の魔力運用の教授と行こうか。これは単純かつ最初の難関と言われる。まあ、この国での初等部くらいの子供の頃に家でやらされるような教育だ」

天宮学園産のビー玉は璃央と澄のそれぞれに手渡す。

「掌に載せ、己に触れる異物を感じ、感じる一点に意識を集中し、崩せ」

「意識だけでマテリアルを崩壊させるということ?」
璃央の問いに頷いて、セイジは緑茶に手を伸ばす。

(しばらくはこれで時間も取れるだろ)

「こんな感じでいいの?」

(早いな、おい)

差し出された璃央の掌には、砕けたビー玉が載っていた。対して澄は眉間に皺を寄せて集中の最中である。

「どうやった?」

「異物の構造の間、力の流れを強くするように願っただけ」

「……」

「違うの?」

「いや。誰かに習ったな?」

「小さい頃、日崎先生に軽く手ほどきを受けたんだけど」

「ツカサ・ヒザキ?」

「ええ、そう。あの頃はあまりよく分からないでやっていたし、先生もあまり神州に來ないから、いつの間にか、アステールさん曰くの代用品での魔法行使をしていたようね」

「なら、これからは当時の教えというものをよく思い出すんだな。」

今ある魔法の基礎を編纂しミスロジカルにおいて行われる魔法修練を編み出したのは彼なのだから。

というわけで」

もう一回、とビー玉を追加した。

「時間、かかりすぎだ」

(厳しい)

璃央が肩を落としたと同時に、澄が「出来た!」と声を上げ、すぐに「追加」「んぐ」というやりとりが交わされた。

夢

天宮家の風呂は広い。大体十四畳くらいだろうか。

セイジから一応の及第点もらい、まだがんばる澄を残して汗を流しに来たのであった。

湯船でグツと伸びをして、脱力。

「はあ。記憶、か」

正直なところ、転生者などと言われてもピンとは来ない。それはやはり、前世の記憶がないからだろう。記憶なんて、物心ついた辺りからのものしかない。

(記憶の封印、か。どうやってたら解けるんだろう？ っ、駄目だ。禁忌なんだった)

イカンイカンとかぶりを振って、湯で顔を洗う。

ふと、食堂で自分が大声で言ってしまったことを思い出す。

心に決めた方がいます。

それは、変えようもない事実。

七年前の恩人で、最後に見た時、彼は何か、すごい痛みに耐えていた。

(あれは、私さえ誘拐されなければ、あんな痛そうな顔を見なくても済んだこと)

あれから会っていない。

あの日の内に、日崎先生に連れられて神州を出てしまい、行方は分からない。名前も分からない。人に聞いても誰も教えてくれない。否、名前は聞いたはずだ。知っているはずなのに、どうかんばつても思い出せないのだ。

日崎先生の息子は異人だから九曜にはふさわしくない。皆がそう言っ、璃央が関わりうとするのを止めさせようとした。部屋の写真が、最後に残った関わりの証。

「会いたいよ。写真だけじゃ忘れちゃうよ」

のぼせたのか、なんだか眠い。ウトウトと、体育座りで膝にアゴを乗せて少し意識が飛んで、璃央は変な夢を見た。

どこまでも広がる草原で、どこまでも広がる青い空を眺めていると後ろから声がある。

「よう、ヒルメ」

ああ、この声は、振り返らなくても分かる。絶対に間違えない。

「もう子供じゃないんだから、ヒルメは止めてよ」

嫌がって見せても、本当は嫌じゃない。この人にならいつまで呼ばれたっていい。

「そうは言ってもなあ」

振り返れば困った顔をしているに違いない。

「子供として呼ばれなくなけりゃ、それ相応の言葉遣いをだな」

「公私分けてるだけだもん」

「だもんって、お前」

皆は彼も臣下として扱えと言う。臣下の前だったら公用の言葉遣いで対応するけど、今は自分とこの人しかいない。

「それより、明日には遠征なんですよ？」

「応。まあ、お前らは後からのんびりやってくればいいさ。俺がお前の先を行って露払いをする。これが俺のお仕事だからな」

「うん。相変わらず、頼もしいね」

本当はそばにいてほしい。でも言えない。だって。

「お前の道は俺が切り開いてやる。お前は俺は護る。それが俺の、生き甲斐だからな」

いつもこの人はそう言っただけ。

その笑い顔が好きだから、本当に、ずっと見ていたくなるくらい好きだから、何も言えなくなってしまうんだ。

なにやら涼しい風が顔に当たり、気持ちよさにこのまま寝ていたくなる。

「まったく、お風呂で寝るとか。自殺願望でもあるのかつつの」
澄の文句に、ハッと目を覚ます。

「起きたな？　このお馬鹿さん」
「澄が私を？」

「他に誰がいるのかと、小一時間問い詰めてもいいのかな？」
自分を見れば、浴衣を着せられている。澄を見れば、団扇片手に憤慨中。セイジの姿は見当たらない。

「あの人は？」
「師匠なら電話中」

澄は閉められた障子を指差す。その向こうは庭がある。障子が閉まっているのは冷房のためだろう。

「私がやっとなり点もらっとなりお風呂場来たら、体育座りで寝てるん

だもん。そりゃ驚くわ。しかも、幸せそうにエへエへ笑い寝してさ」

(うわあ)

赤面ものである。

「どんだけ良い夢見てたのかと」

良い夢、なんだろうか？ 誰かと話していたような気はするが、よく覚えていない。

ただ、とても幸せだったことだけは確かだ。あんな気持ちははじめてのことだった。

電話（１）

【ＳＧＡというのはセカンド・ギア・アームズでV1300はバリージョン1300だな】

「第二の魔構兵器？」

【ギアが魔構を指すのは半分当たりと言える】
「半分？」

【ギアはな、大戦を生き抜いた連中にとって、最も忌むべき名前らしい。】

うちの総帥が名前聞いただけで、ワイングラス握りつぶしたからなあ。つたく、ホテルの備品になんてことを】

電話の向こうで乾いた笑いが響く。電話の相手は若い男の声だ。

【ワールド・ギア。名前ぐらい聞いたことあるだろう？】

「アメリカが本拠地の魔構企業？ 確か、ギア財団というのがあったな」

【それだ。魔構に魔法研究に傭兵斡旋。手広くやっているよ】

「傭兵斡旋？ 真海がやっているような？」

【真海が傭兵斡旋業の光だとすれば、ギアは闇だな。暗殺、襲撃、強盗、国潰し、世界でも悪名高い傭兵達に仕事を流している】

「闇、か」

【聞きたいのはロート・ラヴィーネだな？】

俺とリチャードがお前の師の指揮でやったイーバーン掃討作戦で、殲滅したはずだったんだが。指揮官ミヒヤイル・マルゴットは影武者で、部下数名と共にギアに拾われていたらしい】

それがワールド・ギア製の魔構製品を使っていた理由だろうか。

【半年前、神州側防犯カメラに当の本人が神祇官と仲良くちゃんと映っていた。】

問題は、その場にロイド・ギアがいたことか。ロイド・ギアは財団ナンバーズリーに数えられるいわゆる幹部だな。

傭兵幹旋のためだけに、事実上の敵国にやってくるとも考え難い【
「接触していた神祇官から調べてみるか？」

【いや、調べるのはこっちでやる。少し、気になることもあるから
な。お前は自分のクエストに集中しろ】

「分かった」

【あとな。琴葉の魔薬解呪方法について、うちの総帥からの伝言が
ある】

「メルカードの魔女が俺に？」

【魔女と呼ばれるだけあって、魔薬には詳しいんだろうよ。で、そ
の方法だが】

内容を聞いて、吐息。

【確かに伝えたぞ。じゃあな】
電話を切って一言。

「それは……盲点だった」

襲撃

唐突な破壊に襲われた末広町は、丸一日経って、ようやく烈士隊救護班が町内へと侵入を開始した。

理由としては、上空写真により虐殺行為が認められなくなったからだと、各隊員は理解している。

救護班とはいえ、軍人としての教育を受けている彼らでさえ、その凄惨な現場を見て嘔吐する隊員が出た。五体満足な死体が珍しい現場など、遭遇したくて出来るものでもない。

神州の軍人が青い顔をしている場所からそれほど遠くない一室で、彼らは装備の点検を念入りにこなしていた。

そこは秋葉原の町を見下ろせる一室。

床に並べられた装備は、赤黒いコート、鋼鉄製の胸当て、ブロードソード、マテリアル。

点検する彼らは一様に顔を半分隠すサングラスをしていた。

彼らの中の一人が装備が並べられた場所から離れ、椅子に偉そうにふんぞり返り、足を組んで受話器を耳に当てている。そいつは、一見して、異様だった。

サングラスを通して右目の奥が赤く光り、長い犬歯が口からはみ出ている、首には縫った後が一周している。全身、服のそこかしこに銀の鎖やら十字架やら釘やらをぶら下げて、身動きする度、チャラチャラと音がする。

そいつは拳大のケースに入った虹色の珠を恍惚と眺めながらお話中であつた。

「リンカーが魂抜かれて魔力暴発させるなんざ、想定内だろうが。こつちや、てめえらの要求通り、破壊がリンカーの暴走以外に見せかけたただけだぜ？」

あ？ 知らねえよ。リンカーの記憶封じるとか訳わかんねえ法敷いてるてめえらの自業自得じゃねえか。

それよかよ、てめえらんとこに、俺らを殺れる実力持った奴がいるとか、聞いてねえぞ。

一晩だ。一晩でこっちゃん部下が半減しやがった。

どうしてくれんだ、あ？ 人材育てんのも上に要求すんのも、タダじゃねえだぞ？」

ケースをラックの上に置いて、缶ビールを開ける。

「作戦は問題なく時間通りに実行はする。

ただし、ただしだ。

てめえらんとこの人材は盾にさせてもらうかな。

九曜が畏れおおい？ 馬鹿か、てめえ。

てめえらは既に、口を血で汚して何人ものリンカー殺してんだ。

今更だろうが」

受話器を置き、代わりに缶ビールを持って立ち上がる。

「さあて、本命抜きに行きますか。依頼は手早く安全に、だ」

気分は野ウサギを追い回す狩猟犬か。

犬歯をむき出しに、獯猛な笑みを浮かべるのであった。

「これ、なんですか？」

食卓に置かれた食べ物の前に、置いた少年に璃央は素朴な疑問をぶつけてみた。

「チキンティツカだ。気に入らなければ食べなくてもいい」

「食べないなんて言っていないじゃないですか」

電話を終えたセイジはシートバッグからタツパを一つ取り出してきて、レンジで解凍していたかと思えば、こんなものを並べた。

本人として、たんに小腹が減っただけなのだが、一人で食べて後でばれると面倒だからという行動であった。

一個食べて、澄が「おお」と目を輝かせた。

「辛そうな見た目なのに辛くないですね！」

「兄と同じ台詞だな、おい」

「おいしい、これ、癖になる」

(一言目まで……)

セイジは軽くデジャヴを覚えた。

璃央は小さく切り分けたそれを口に入れる。ゆっくり嚙んで、飲み込む。

「カレー味ですか」

「ああ。マサラ用で煮込んだものだからな」

「おいしいです」

「それはどうも」

「？ ひよっとして、アステールさんが作ったんですか？」

「まあな」

答え、半分に切った肉を口に入れる。

「あれ？ なんか、疲れが取れた？」

澄が手をワキワキ動かしている。

言われてみれば、と璃央も手を見つめる。

「食肉とは、他の生命力を己の内に取り込む行為だ。生命力が魔力とイコールなのだから、魔力を消費すれば生命力も消費し、生命力を補えば魔力も補われる。」

食肉によって疲れが取れたというのなら、それは君らが魔力を正しく身体に流しているということだ」

「へもへふほ？」

「口に物を入れてしゃべるな」

セイジと璃央の注意が同時に発せられた。

(なんか息合ってるし?!)

驚きはさておき、澄は慌てて飲み込んだ。

「でもですよ？ 魔力使って食べるとか繰り返してたら太っちゃうんじゃないですか？」

「そもそも、生命力を消費することと空腹になることは別問題だからな。消費と取り込みを繰り返そうにも、腹に入らん。」

取り込みを食肉だけに限定せず、よりより循環を模索することも魔法を行使する側の修練だ。

例えとしては、疲れは時間が経てば癒えるのかな」

時間をかけて、澄が三個食べる間に璃央は一個を食べながら、セイジが魔法学の授業で言っていたことを思い出す。

（魔法の威力増加に算術が必要というのは本当に基礎の基礎。

そして多分、マテリアルを弾けさせる、というのが最も特別なこと。神州ではマテリアルはただ使うだけの消耗品と教えられる。それだけじゃ駄目なんだ）

更に思い出すのは、日崎先生の言葉。

マテリアルは筆。絵の具は君自身。世界というキャンパスに心の絵を描きなさい

子供に分かりやすいように例えたのだろう。難しい手順でもなんでもないそれを、ずっと忘れていた。やっと思い出せたことを安堵していた。だから。

「魔法とは世界に描く絵だと思え。魔力を絵の具に公式で溶き伸ばし、マテリアルを筆にして描ききる。最高の魔法は芸術と思えるほど美しい」

だから、友人にそう教えた少年が、魔法を芸術と言った時に見せた優しそうな笑みが日崎先生に重なって見えた。

「マテリアルが筆で、魔力を絵の具ですか。なんかそれだと分かりやすいですね。

絵の具を伸ばす水を公式に例えてるんですね。

あ。魔力を少量にして公式で水増しする、でいいんですか？ それなら魔力の消費も抑えられるから」

「そういうことだ。まあ、俺には描けない芸術だから、せめて君らは最高の芸術家になれ」

呆然と、そんな感じで見つめられる視線に気づき、セイジは璃央と目を合わす。セイジの様子は怪訝。

「師匠、実はお絵かき苦手とか」

「そんなところだ」

「ふうむ。でもなんでそっちで教えないんですかね」

澄の問いに、再び顔をそちらに向けてしまう。

「ああ、それは」

答えようとして、口を閉じる。そして、おもむろに立ち上がる。

「師匠？」

澄には答えず、障子に手を添えて璃央に振り返る。

「おい、屋敷から出るなよ？」

「え？」

ハッとセイジを見上げ、呆れられる。

「だから、屋敷から出るなど。庭にも出るな。分かったな？ 護衛

対象」

「どこに行くんですか？」

「用事が出来た」

「わた」

「ああ、君の護衛よりも大事な用事だ。スミもだぞ？」

問いなど言わず、背を向けてさっさと居間を出て行く。

ついでのように言われて「えー」と不平を漏らす澄と、セイジが消えた障子の先をジッと見つめる璃央の姿があった。

外は既に夕方。西の空を見つめて舌打ち、そこにはまだ何も見えない。

「キーン」

セイジの呼び声に、バサツと羽音を立てて白羽の鷺が舞い降りて、セイジの前で金毛の猫に姿を変えた。

「数は？」

「にゃ。にゃにゃ」

「赤いのが六で、青いのが十？ 青いのってなんだ？」

「ふにゃ」

「いや、お前を責めているわけじゃない」

「にゃあ」

「既に張り付いてる？ 夜襲ではないのか。人目をばからないと

「いうより、人目がない？」

神祇官と写った映像の話の思い出す。

（昨晩数を減らした結果、神祇院経由で人員補充をしたか）

「まあいい。どうせやることは変わらない」

「にゃー！」

セイジの隣に並んで行こうとした獣を見下ろし、屈んで持ち上げる。

「お前はこつちだ」

居間に向けて座らせると不満そうに「にゃう」と鳴いた。

襲撃は突然に、洋装の上に青金の武者鎧を身につけた烈士隊員達が塀を越え、天宮家の門内に侵入する。

侵入してすぐに彼らは異常に気づく。

音が消えていた。遠くで鳴いていた鳥の鳴き声も、耳元から聞こえていたいけ好かない赤黒い彼らの命令も、何もかも音がない。訝しんで周囲を窺えば、そこは時の止まった世界。木々も鳥も虫も、すべてが石で出来た世界だ。

「が……ああ……ああああ」

誰かの声が聞こえる。それはこの任務についた同僚の声だ。確か、自分とそれほど離れていない場所にいるはずだ。首を巡らせばすぐにでも発見出来るはずだ。

だが、首が 動かない。

（この場から離れなければ）

だが、足が 動かない。手も動いてくれず、いつの間にか口を開くことも出来ない。まだ喉だけが声を出せた。

「あ……あ……」

そうか、同僚もという考えが最後の思考となった。

「はあ？ 突入直後に交信途絶だあ？ 全員か！？」

銀装飾の男は突入直後の報告を聞いて、天宮家の塀を凝視する。

神祇院から回された人員は、実力こそ自分達には劣るが、悪くないと感想を持てる程度には使える連中だったはずである。それを速攻で根絶やしに出来るとなると、それなりの腕を持った存在があの屋敷にいることになる。

「はっ、ははははは」

そこで唐突に思い至る。一晩で部下を半減させた奴がそこにいる。それは想像で、なんの確証もない。ただの、勘にすぎない。

「隊長」

「ああ、わあつてるつつうの。ちゃんとして仕事はするぜえ？ 巻き込みまやあいつてんだろ？」

なに、お仕事のついでに、ここら一帯虫けら一匹生きられない地になっても、全っ然、気にしねえよ」

「作戦の変更を？」

「つたりめえよ。ギアへの請求額上乘せしときな。最高密度のマテリアルの使用を許可してやんよ」

「了解」

部下に指示を出し、自分も色鮮やかに輝く宝石にも似たマテリアルを取り出した。

敷地内に、入り込んだ烈士隊員達の姿はない。ただ、堀には侵入に使われたとおぼしき金具だけが残されていた。

セイジは庭の真ん中で瞑目する。

（プレイン・オブ・ゴルゴーンの崩壊を確認。十人まとめては多かっただか。残るは）

設置しておいた結界を確認し直そうとして、止める。

目を開き、堀の向こうを窺う。まだ六人はいるはずなのだ。

（本来であれば、視えるはずのものが視えない。くそっ、コトハめ。本当に洒落にならん）

内心で悪態をついて集中を乱したが故に。

「アステールさん」

呼ばれ、振り返ってしまい、塀が粉碎されてからの初動が送れた。
「なん……で？」
見張りを立てたはずだった。しかし、天宮璃央はそこにいる。自分の目の前で、粉碎された塀とその向こうに姿を現した、昨日の悪夢に立ちすくんでいる。

「猫ー、猫だー」
「フギヤー」

澄に抱きすくめられて身動きの取れない獣は、必死になって抵抗を試みていた。

居間に外の音は聞こえない。破壊が及ぶこともない。それがセイジの施した仕掛であった。

璃央は縁側より外、庭に立っていた。セイジの仕掛の外、破壊の恩恵を受ける場所。

璃央の視界の中で、昨日の悪夢の中心に立つ者が手を空にかざし、頭上に巨大な火炎球を生み出すのを見る。それはまるで、もう一つの夕日のようで。

「この、馬鹿！」

夕日を最後まで見ることなく、視界が白で覆われる。浮遊感と落下を感じるが、そんなものは強く抱きしめられる感触で気にもならない。

セイジは璃央を抱え込んで塀の外へと跳躍。璃央を彼らから離し、より戦いやすく護りやすい場へと移動しなければならぬ。

跳躍中に西の空を確認。そこに輝くものを見て、口を真一文字に引き締めた。

（イメージするのは錠前と鍵。開くは扉。母の根源へと繋ぐ道）

璃央は膨大な魔力の流れを目の前の白に感じ、そして耳元でセイジの呟きを聞く。

「我が母ウエヌスの力、我を通して地に満ちよ」

(ウエヌス?)

聞いたことのある名だ。それがなんだったかに思い至る前に路面へと下ろされる。見上げて見るのは、今まさにセイジへと着弾せんとする巨大な火炎球。

「アスっ」

「問題ない。俺の後ろが一番の安全地帯だ！」

璃央を下ろして振り返る動作に、右手を火の玉に向けてかざすことを加える。

着弾。

爆発 は生じず、一拍後、赤光に輝く宝石が路面に落ちた。

「ばっ?! 冗談だろ?! 構成済みの魔法をマテリアルに戻しやがった!」

火炎球をぶつ放した男、ミヒヤイル・マルゴットは目の前で起こった出来事に驚愕で返す。

「エンチャント・ヘイスト」

速度強化の魔法を自分に向け、黄金の燐光を纏ったセイジの姿が消える。路面に落ちたはずの宝石も同時に消えたのを璃央は見た。

目の前で消えた少年を警戒してミヒヤイルは部下の影に隠れようとし、横にいた部下が一人爆炎に包まれるのを見る。

あの少年が前傾姿勢で部下の一人に向けて掌底を叩き込んでいた。掌底を叩き込まれたから起きた爆発ではない。マテリアルを直接ぶつけて発生させた爆発だ。高密度どころじゃない、高純度のエネルギーに近い状態のマテリアルでのみ可能とする、エネルギー兵器としての使用方法。原始的な破壊エネルギーだ。

セイジは、爆炎に爪を立てるように身を翻し、ミヒヤイルが隠れた部下への間に紅蓮の三線を生み出す。そこに左拳を打ち込むと、紅蓮に燃えさかる極薄の三枚の火壁が打ち出される。また一人の部下が爆炎に包まれ、四枚に下ろされてミヒヤイルの足下で炭化する。(こ、こいつ、この戦い方は!?)

自前のブロードソードで斬りつければ、左の蒼珠が輝き白金のガ

ントレットを出現させてこれを受け止める。

ガントレットは凝った意匠の使い込まれたもので、甲に蒼珠が埋め込まれている。ミヒヤイルの記憶を揺さぶる。

（レイ・オン・ハンド!? 間違いねえ、こいつ）

激突の衝撃を利用してセイジから距離を取って構える。残る部下達が自分の斜め前に展開するのを確認し、再度セイジに目を向けると、ここで彼に変化が訪れる。

黒かった髪が根元から黄金へと変わっていく。自分達を睨みつける青い瞳が紫に変わる。

見た顔だ。

五年前、ドイツの田舎町で、この少年と連れれの少女を襲っている。その後、少年と少女の師が率いる化け物連中に敗北したのだ。忘れるはずもない。

「てめえ、ロウ・エクシードの徒弟だったガキか!」

大戦の折、ヴァチカン政庁より出奔した聖戦士がいる。

その名前がロウ・エクシード。白金のガントレットと人類最強の人造聖剣を輝かせ、最初の神殺しを達成した、パーティーの前衛係

（奴の弟子は二人。一人はあん時の化け物の妹。もう一人がこの）

「至源の出来損ないが!」

「覚えよろしく痛み入る!」

（セイジ!! A・ヒザキ。ロウのゲートスペルを受け継いだ。たった一人の化け物!）

目の前で、セイジの両手にそれぞれ赤光と蒼光が生まれる。

何も無い空間から、温と冷の熱から生み出された純度百パーセントのマトリアル。あんなものを叩き込まれたら、存在が消し飛ぶ。

部下を残して更に後退。

「隊長、離脱を」

「わあってる! 最期までデータは送信しろ!」

「了解」

ミヒヤイルへの道を塞いで、赤黒い彼らは左右と前の三方から斬

りかかる。

左右はブロードソードごと赤と蒼の輝きで消滅させ、前からの斬劇は仰け反るように避けて後ろへと三步下がる。下がり際、右腕を下に振って袖から金属製の棒を出して掴む。

金属の棒は一束の柄。身を翻すとともにロングコートから琥珀色の砂が舞い、柄に琥珀色の刃が形成されていく。まさに最後の部下に到達する直前に琥珀の長剣となり、その首を斬り落とした。

「データ……送信……完了」

頭は宙を舞いながらくぐもった音声を発し、身体はガラガラと音を立てて崩れ落ちた。

続けてミヒヤイルの姿を探すが、この場には既に見えないことだけは分かった。

長剣を振ると刃は再び琥珀の砂へと変わり、セイジの周囲を舞ったかと思うと、そのまま溶けるように消えていった。

（周囲に魔力反応は視えない）

セイジの視界に、色が戻っていた。

生きる者すべてが纏う命の光、魔力の流れが視える。

「よし、戻った」

意志の力で、魔力の流れを視界から消せることを確認する。

魔薬の効果は亜神化で解除可能。

たまにはアドバイス通りにやってみるのも悪くはないと感じるセイジであった。

ふと、眼鏡がないことに気づく。強化された速度に耐えきれず、どこかに落ちてしまったようだ。どのみち、もう視力も戻っている。必要ないものとして、考える。

本来の視力に戻ったことに安堵して吐息。

璃央の元へと歩いて戻ってくる。その途中で、纏っていた黄金の燐光が消えていく。

自分の前へと立ったセイジを無言で見上げる。

魔力とマテリアルの例えを聞いて、予想は出来た。

点灯した街灯が、セイジの髪と眼の色を際立たせる。

その色は、あの写真の少年と、記憶の中の少年とまったく同じ。表情は笑みではなく怒りで違うものだけど、予想は絶対に間違っていない。

「なんで、人の言うことを聞かないんだ！ そりゃ、護衛対象との信頼関係を築かない俺にも責任はあるだろうが、外出禁止くらい素直に聞け！」

璃央の目から涙が落ちる。

（泣いた?!）

これにはセイジも頬を引き攣らせる。

「別に怒ってるわけじゃない。あ、いや、怒ってはいるんだが」

（何を言ってるんだ、俺は。まだ本調子じゃないのか？）

困惑する自分に困惑。

「名前を聞いても、いいですか？」

「……名前？」

「あなたの名を」

アステール。そう答えようとして止める。璃央の目を見れば、涙に濡れていてもその真剣さが伝わってくる。

自分を照らす街灯を見上げ、嗚呼と思う。

天宮璃央は覚えているのだ。自分の本来の色を。これは記憶のすり合わせ。記憶の大事さを知るからこそ、彼女の真剣さに応える。

「ツカサ・ヒザキとアウレア・フェリクスの子、セイジ」アステール・ヒザキ。それが俺の人としての名だ。

七年前も、俺はそう名乗ったはずだ。ヒルメ」

「私、ヒルメじゃないよ？」

「すまん、間違えた」

そう言って、璃央の頭をポンポンと撫でた。

悪巧み

部下も装備も残っていないはずの部屋に駆け込んだミヒヤイルは、駆け込んだ姿勢のまま、部屋の入口で硬直した。部屋に先客がいたからだ。

「困りますね、マルゴット隊長。大切な商品を放置したままというのは」

先客は、水色のスーツ姿のビジネスマン然とした白人の青年だ。人なつっこそうな笑みを浮かべて、透明のケースに入った虹色の珠を右手で掲げて覗き込んでいる。

「放置が嫌なら大事にしまえる金庫でもよこしやがれ、ギアの大將」
「はっはっはっ、大將はやめて下さい。僕はただの使いっ走りですよ？ 父のね」

ロイド・ギアは爽やかに笑ってみせる。

(魔構開発班の総大將がよく言うぜ)

「ところでマルゴット隊長？ 衛星写真で面白いのが撮れたんですが」

そう言っってロイドが取り出した写真には、ミヒヤイルの部下がセイジによって消滅させられるワンシーンが写っていた。

「受信データによると、この子、半神ですねえ。この子の手で光っているのはなんですか？」

「超高純度のマテリアルだ」

「ああ、なるほど。マテリアルを構成する際、拠り所にする物質が無ければ純度の高いエネルギーとして発現する。ガイラル・ギア叔父さんの理論にありましたねえ。」

しかし、エネルギー体に触れては如何に半神でもただじゃ済まないはずですが」

「そりゃ、こいつがゲートスペルの使い手だからだろ」

「ほう！ ゲートスペル！ 天定の幻想魔法、天幻！ 興味深いで

すねえ」

目をキラッキラさせて写真の中のセイジを見つめるロイド。まるで恋する乙女のようにだ。

「ミスロジカルで天幻の基礎が編纂されたものの、性能がピーキー過ぎて人類に行使不可能とされたとは聞いていたのですが。」

編纂したのが確か　そう、至源殿のご子息でしたか」

ミヒヤイルはロイドの持つ写真を指差して「そいつだよ、そ・い・つ」と暴露する。

「なるほど。この子が化け物揃いの、ミスロジカル十三期生最凶の盾ですか」

「最凶の盾だと？」

「アンチマジック、ソーサルキラー。魔法を得意とする者が最も苦手とする相手」

思い出されるのは、自慢の火炎球がマテリアルに再構成された場面。

(なるほどな)

納得する。得意な魔法が無力化されてしまえば、よほど戦技と両立していなければ相手にはならない。

「たーいちよー」

「おわっ?!」

顔を上げてみれば、ムフフと含み笑いしながら、顔を近づけていたロイドに、びっくりしてひっくり返る。

「僕、この子ほしいなあ」

「生け捕りしろってか!？」

「生け捕り、良い響きですねえ。」

ほら、どのみちこの子どうにかしないと、アマテラスの神魂を頂戴することは出来ないわけです。お願いしますよう」

エへへと涎を垂らしそうな勢いだ。

「半神の魂ってどうなってるんでしょう?　亜神化とかどうやって発生するのも興味津々です。」

それに、人行使不可能の魔法を使えるとか、魅力満載じゃないですか！」

ウへへとついに涎を垂らす。ヨダレ滴るイイ男である。汚い、とミヒヤイルもドン引きである。

「生け捕りしようにも装備はねえぜ？」

少なくとも、奴のマテリアル爆弾を防げるだけの装備は必要だ」

「軍でもマテリアル爆弾は採用されてはいますが、あれはエネルギー兵器ではなく純粋な爆弾ですし。」

ああ、帰ったら頓挫したエネルギー兵器の再考でもしてみましようか。宇宙戦艦の破壊光線とか夢は広がります」

「爆弾の最高威力は？」

「神聖メシーカのライナーを一体消滅に追い込んだくらいですか」
「核の効かない相手をかよ」

過去に数度、アメリカ軍は神聖メシーカとの戦闘に核兵器を使用しているが、どれも効果が得られなかった。その相手に対して効果を発揮したとすれば、それはかなりの威力である。

「爆弾を運んだ戦闘機には、幾層にもプロテクトをかけて送り出し、ちゃんと帰還しました。装甲も無傷。ええ、実験も兼ねて持ってきてるんで、試用してください」

「あんなら、先に言えや」

「ゲートスペルは、まあ、がんばって避ける方向で」

「それしかねえが、言われるとむかつくぜ」

「本当にがんばってくださいよ？ 今回の神州からの依頼には、我が社長年の開発が一つ終了することにも繋がってるんですから。」

あ、これが装備の置いてある倉庫です」

ロイドはミヒヤイルにメモを渡す。

「装備次第で人類でも半神だの転生だのの化け物に勝てるってのを証明するのが、俺ら聖堂帰りの矜持ってもんだ。」

ギアの大將、帰ったらちゃんと人員の補充やれよな？」

「もちろんです」

ミヒヤイルを見送って、ロイドは窓の外、眼下に小さく見える秋葉原を、ゴミでも見るかのように見下ろす。

「もちろんだよ、ミヒヤイル・マルゴット。」

ロート・ラヴィーネよりも優秀な駒を補充するさ。君達よりも優秀な駒はまだまだたくさんいるからね。

くつくつくつ、転生狩りは君の領分ではあるが、果たして彼のよ
うな異例とちゃんと戦ったことはあるかな？ あれこそ、真性の化
け物だからねえ。

せいぜい、僕達が腹を抱えて笑えるような実験データをお願いします
るよ」

月光に照らされて、ロイドの影が床に映し出される。

それは、大口を開けて笑い転げる、コウモリのような翼と蛇の尻
尾を持つ化け物の姿をしていた。

真世の視界<一つの綻び>

天宮家の縁側で、金毛の獣はうなだれてカタカタ震えていた。その前ではセイジが腕を組んで獣を見下ろしている。

「キーン、お前な」

「ミーミー」

「ガキのふりして甘えるな」

「ふにゃあ……にゃにゃ！」

獣は澄の方を前足で指す。

「スミが悪い？」

お前、俺達が戻った時、背中撫でられてへヴン状態だったじゃないか。逃げもしないで、お前という奴は」

「にゃ……うにゃあ」

一見して猫と話すイケメンである。そうとしか見えない。

澄としても、友人と戻ってきた師匠が金髪紫眼の超美形になっているのには驚いたが、目の前の光景に啞然とするしかない。

璃央は二度目になるが、先程の体験がなければ、なんとほほえましい光景かと思っていたに違いない。

セイジの足下には、最後に倒した相手のなれの果てが落ちている。それはがらんだどの鎧だった。セイジによれば、中には精霊に近い魔力の残滓があるとのことだ。

「星司ちゃん、その子も反省してるみたいだし」

「ちゃん言っな」

即答。

「それそれ」

澄が璃央のセイジを呼んだ名を聞いて、ある疑問を口にする。

「師匠がセイジ=A・ヒザキさんってことはさ。あの、九曜頂日崎星司さんでいいの？」

それがこの国に登録されている、セイジの立場と名前である。登

録したのは父親。神州の言葉での名前が日崎星司なのだ。

「その通りだが、九曜頂の立場に関して言えば、父がほっぱり出した立場を便宜上継承したただけだ。確か分家の……」

「九曜日崎の分家というと、御崎ですね」

璃央の補足にセイジは「それだ」と反応した。

「父の弟が家長をしている、そのミサキだ。」

ミサキからの要望で、空席をなんとかしろとか。分家を据える訳にもいかんと、長兄の俺が据えられたというわけだ。

俺には自覚もなければ、一族を治める気もないから、立場のことを言われても困るぞ」

「ミスロジカルを卒業したら神州に帰ってくるとかじゃないんですか？」

「生まれはキプロス、育ちはマラザイアン。帰る場所があるとすれば、そのどちらかでしかないな」

「や、九曜頂として神州にいれば、富も権力もウハウハですよ？」

しかもモテモテです」

「こんな魔法後進国に住んだら、研究どころじゃなくなるだろうが」

「研究？」

聞き慣れない単語に、璃央と澄が八モる。

「師匠、ライセンスがないとか言ってますでした？」

「教員のはな。俺が持つのは魔法学系統研究の教授資格の方だ」

「えちよ?!」

澄がワナワナと震える。璃央も友人の反応が分からなくもない。

魔法学系統研究の教授資格とは、源理魔法、構想魔法、幻想魔法のいずれかの系統を研究し編纂することを、最低でも五国以上の国家に認可されなければ得られない資格である。認可した国は、その者の研究した内容を優先的に知る権利を持つ。

「現在の学術機関における単位には源理魔法の実践は必須事項だが、それを免除するために必要なのがこの資格だ。一種の奨学制度みたいなものだな。」

俺は源理魔法が一切使えないからな。俺にとっては必須の資格と
いうことだ」

軽い口調で言っただけだが、最難関の奨学制度である。驚かない
方が無理がある。

「てか、教授って普通先生とか兼ねませんか？」

「甘いな。研究に没頭して成果さえ出していれば、他人に勉強教え
る面倒を請け負わなくていいのが、教授だ。」

まあ、必須単位を取り終えているから、研究に没頭しなくても卒
業は出来るんだがな。一応の成果も出し終わっているし」

「それで、系統は何ですか？」

「天定の幻想魔法、天幻だ。」

天幻を単体で行使するには消費魔力が高すぎて、超越者でもない
かぎり魔力が枯渇して衰弱死する。また、特定の因子を持たない者
では例え魔力を確保出来ても、やはり行使は無理だ」

「つまり、使い手を選びすぎる魔法ということですか？」

「その通り。」

まあ、源理と組み合わせることで、各理の結界系の魔法強化が成
功しているから、十分に成果として認められている。

確か、去年の系統更新で追加されているはずだ。もともと、認可
国以外だと更新にはあと数年が必要だが」

系統更新とは、魔法知識、魔法構成の公式に新情報を追加更新す
ることを指す。

(神州に結界系の強化に関する更新がされていないということとは、
神州は星司さんの認可国ではないということね)

つまり、結界系の魔法や魔構の新開発をしている国が認可国とい
うことだ。

「ところで、星司さん。先程使用していた魔法はなんですか？ 源
理魔法に見えたんですが」

「うん？」

はて、とセイジは首をかしげて璃央の指摘を考えてみて「源理じ

やないな」と答える。

「あれはクリエイト・マテリアル。立派な構想だぞ？」

（確かにマテリアルには、爆弾代わりに投げつけたりする使用方法はあるけど、あれはそういう類のものなの？）

「そもそもクリエイト・マテリアルって、無から生み出したり出来ないものじゃ」

「無？ ああ……、あれか。そうだな、これは知っておいた方がいいか。今後のためにも」

チヨイチヨイと璃央と澄を手招きするセイジ。そばに来いと。

二人は顔を見合わせてから、セイジの前に並ぶ。

澄がハツが何かに気がつく。

「まさか、人体マテリアル化とか?!」

「せんわ！ 何怖い発想してんだ！ シュウでもしなかったぞ、おい！」

斜め上を言った予想に、セイジも仰天して思わず地を出した。そして、コホンと咳払い。

「君、シュウとは別の意味で疲れるな、本当に」

「いやあ」

「褒めてないぞ」

澄はしばらく照れ笑いしていたが、やがてシヨンボリとうなだれる。

「澄？ 大丈夫？」

「うん、平気」

声をかけられて、エヘへと友人に対して愛想笑いを浮かべる。

「ほら、始めるぞ。目を閉じる。」

セイジは溜息を一つ吐いてから、璃央と澄の額に中指を接触させる。

「開け、心の扉」

呟きと共に接触箇所がほのかに光を灯す。

「世は夢幻、眼は夢幻に繋がりにて、心に真世しんせいを映す

目を開

けていいぞ」

心に染み渡る声と言葉。それは短い詠唱の形。

詠唱を終えると、セイジは二人に目を開くように促す。言われるがままに目を開けて、璃央は絶句。澄は「わあ」と目を輝かせた。

木々や草に宿る命の光、色宿す風が運ぶ赤青と色づく燐光にも似た輝き、物という物は光を宿し、その光が魔力であると認識出来る。（なんて幻想的な光景なの？）

澄はそこにうつとりと眺め続ける。しかし、璃央は目を見開いて周囲の光景に没頭する。

（嗚呼、世界の輝きは、こんなにも薄れて 違う。何この感情？ 私、この光景を……知ってる？ 知らない、知らない、知らない！ 天宮璃央ははじめて見る光景だよ？）

「構想魔法のサイト・マジックだ」

「デイトクト・マジックじゃないんですか？」

「ああ。デイトクトは感知 認識強化系、サイトは視野強化系と分類される」

セイジと澄の会話が遠くで聞こえる。

「通常、人は見ることによってマテリアルを認識出来る。物質に強く宿らせた魔力を、だ。」

サイト・マジックは視覚の魔力を捉える部分を強化する。これにより、物質にただ存在するだけの魔力を光のようなものとして見ることを可能とする」

「色を認識出来ない裸眼に認識を可能にする色眼鏡を装着するみたいなもの、ですか？」

「そうだな。実際、そういう魔構は開発しようとはされている。

構想はマテリアルを使用しないからな。公式の疑似回路を源理の魔構同様に作ることは出来ても、起動の魔力を確保出来ない。装着者が対象に魔力を流すだけでは、起動しても視覚とのリンクが確保出来ない。と、まあ、問題は山積みらしい」

「自分で身につけちゃった方が早い」

澄の結論にセイジは頷く。

「かつては、自然神 旧暦の神話でいうところの多神教の神々が普通に持っていた、魔法ではない技能と言われる」

「かつてって、転生したら使えないんですか？」

「神の肉体がそういう回路を持っていた、と言えればいいか。転生すれば、その器となるのはあくまでも人間の肉体だ。回路など持っているはずもない。」

半神はギリギリ似た回路があるが、中身は人間。そもそも見えな
いことを疑問にも持たないだろう」

（かつて、見ていた光景？ 見たことのないこの光景が？ どうして私、こんなにもこの光景が落ち着くの？）

ふらりと膝から崩れ落ちそうになるが、その身は支えられる。

セイジは璃央を一切見ることなく、澄と会話しながらも、その手は璃央の背を支える。右で璃央を支えながら、左掌を澄の前に持ってきて、風に乗ってきた青い燐光に触れる。光はやがて、より青を濃くした結晶へと変わる。

「世界には、多くの命が満ちている。そこから力を一滴借りて、人は魔法へと昇華させる」

結晶を握りつぶせば、破片は風に吹かれて、やがて再び光へと帰る。

「使用された魔法は、やがてただの命に戻り、世界へと還る」

ここでようやく璃央へと顔を向ける。

「分かるか？ 無からマテリアルを、命を生み出すことなんて出来ないんだ」

やがて、二人の視界から、世界が纏う光を見る力が失われる。魔法が切れたのだ。

セイジは言う。構想魔法を身につけると。

「源理にマテリアルは必須。それを生み出すのも、見るのも、構想があつてこそだ。あるのとないのとは、魔法関係の成長速度はまったくの 別物と違っていい」

と、庭に置かれたバイクから着信音が聞こえてくる。セイジはベストに触れて自分の携帯を探すが、ない。どうも前回の電話から置きっぱなしにしていたようだ。

やれやれとバイクに向かって歩き出す。

セイジの手が、支えが消えて、璃央は「あ」と漏らす。そこにあった熱を失うだけで、なんだかとても寂しいと思える。

おかしい、と自分の変化を思う。

気に入らない護衛が、ずっと霧はかかっていたけど思い続けたあの時の少年だった。再開できたら何をしようという妄想くらいはしていたが、いざともなると、どう接していいかさっぱり分からない。それに、入浴中に見たあの夢だ。あれを見たことも原因なのではないとも考ええる。

夢では自分は『ヒルメ』と呼ばれていた。そしてセイジもまた、七年前と今回も間違えたと訂正はしたものの璃央を『ヒルメ』と呼んだ。

セイジは転生者で、自分の中にある神魂天照と近い関係だったのだろうか？

しかしそんな考えは否定する。

(あの人は半神。転生者じゃない)

そう、半神の転生者など、聞いたことがない。

電話(2)

セイジが電話に出ると、相手は例の情報提供者。昨夜セイジから連絡をした『T・Kannnagi』であった。

【リーマンプロジェクトだ！】

「……ビジネスマン？」

【ん？……違った。ええつと？ そう、ReHumanProjectだ】

「別物だな」

【うるせえ。データを送ったから参照しろ】

携帯をスピーカー設定にして、バイクのシステムを起こす。

「サー……あつと。End BABELtypeT。Start search」

機能を切り替える。

(バベルは便利だが、容量食い過ぎだな)

【お前、バベルなんか起動して何やってたんだ？】

「勉強」

【はあ？】

スピーカーから璃央の知らない声が聞こえる。誰だろうかと疑問を感じる璃央と違い、澄がこの声に反応する。

(これって、龍兄？)

姉、穂月や担任の凜とは中等部時代の同級生であり、凜の従兄で、しかも九曜頂の一人として名を連ねる人の声に似ている。高等部からは兄同様、ミスロジカルに留学して、そのまま姉の前に帰ってこなかった男の声にだ。

「この報告書。シユウか？」

【一発で分かるのは、お前と琴葉くらいだな。いい加減、名前欄に俺と書くのはやめると言っておけ】

「タツヤから言ってくれ。俺もコトハも、もう諦めた」

【酷いパートナーだ】

タツヤ、とセイジの口から出た名前。

フラフラとセイジの元へと近づいて、澄はバイクにもたれかかる。セイジは怪訝そうに澄に顔を向ける。そして、そう言えば思い出す。

（シユウはタツヤと知り合いだと言っていたが、スミもということか。タツヤからの依頼書をホヅキが持っていたことといい、おかしいことでもないのか）

ふむ、と納得する。

「スミ、今少し、大切な話をしている。後にしてくれないか？」

言われて「そうですね」と引き下がろうとする澄。そこに。

【すみ？ 梧桐……澄？ 穂月と秋の妹の？ そこにいるのか？】

「龍兄？」

【おお、久しぶりだな、六年ぶりか？ 電話でなければその姿も見れたんだろうが。

なんでセイジといるんだ？ デートか何かか？】

その声はともうれしそうで、本当に懐かしいものだった。

「半神修練の基礎を教えた」

【心浸食の防衛術か。確かにあれはやらんと。神州じゃ教えないからな、あれは。

しかしそうなると……】

無言が生まれる。

【いや、なんでもない。とりあえず、澄ちゃん。後で話でもしようか。ちょっと今は、な】

「そう……ですね。じゃあ、後で」

澄は庭に、スカートが汚れるのも構わず座り込んだ。

（なんだ？ シユウとは反応が違うな）

気を配りつつ、パネルに表示されている報告書を読み進めていく。

「半年前？ この時のメンバーはシユウとオリヴィエか。また面白いチームだな」

【GS (Garden of Strikers) によるギア保有の工場に対する襲撃作戦を補佐するクエストだった。

その工場で生産されていたのが、ギアボディ魔構鎧。ReHuman Projectにおいて、人の魂を入れるための器となるものだ】

セイジは縁側付近に転がる鎧の残骸に目を向ける。おそらく、あれがそうなのだろう。

【専門家ではないから構造などは何ともよく分らんが、人の魂を肉体より抜きだしてデータ複製し、元となる人間の記憶、能力、人格を持つ存在を生み出す計画らしい】

「肉体の複製には時間がかかる。故に鎧という器を用意するのか」

【機械の身体に人の心、存在のデータ化、かつてはトンデモ科学者が夢見たことも、魔法などといったオカルトが現実を浸透したこの世界になって、ようやく実現したってことだな】

それでか、とセイジは思う。

報告書にある頃、秋がそういう内容のアニメを見ていた。

普段からネットで落としたアニメをセイジのルームメイトと見たりはしていたが、その時期に見だしたのは、そういうクエストをしていたかららしい。

「魂を抜きだして別の存在に入れ直す。ReHuman Projectの本質はそこか？」

【うむ。おそらく、今回、根幹となっているのはそれだ】

セイジは縁側に座って獣と戯れる璃央をチラリと見てから、スピーカーを切って携帯を耳に当てる。

「神魂を……入れ直す？」

【降神器という存在もある。不可能じゃない。

もつとも、開発に成功していればの話だが】

降神器とは、神や精霊といった存在を受け入れられる器であり、形状には様々ある。武器や道具、像、神を憑依させたシャーマンさえも降神器と呼ばれる。

ただし、現在確認されているシャーマン以外の降神器は、すべて

LR以前、神話や伝承の時代からの遺物のみで、新たに開発に成功したという話は聞かない。

【神の記憶を封じ護国時にのみその封印を解いて、神を戦力としよ
うとする神祇院。

おそらくは欠陥でも見つかったんじゃないか？

何年も人間として生きてきて、いきなり過去の、自分の記憶には
ないものを見せられて、力があるからと、速攻戦力として機能する
とは到底思えん】

「記憶の齟齬か」

【よほど柔軟に受け入れようとする精神がなければ、まあ、悪くて
発狂するだろうな】

「良くて？」

【意志の弱い方が消失。普通に考えれば、人間の十数年が超越者の
無限に敵うはずもない。

とはいえ、前例がない。うちの総帥やお前の親父さんが打ち立て
た理論に基づく想像にすぎないから、実際にはどうなるかさっぱり
分かん。

記憶封じちまおうなんて、そんな面倒なことするのは神州くらい
だからな。国内にでもいなければ、前例知ることも出来ないし】

「神祇院のそれ。神魂の入れ直しは国策なのか？」

【少なくとも、九曜神薙と九曜霧崎には神祇院からそういう達しは
ない。九曜緋桜院にも確認済だ。

うちの神和かなぎのように分家が勝手に動く可能性も否めないが、そこ
を考えればキリはなくなる。

で、お前のところは】

無言で応じる。

【そうな。分かんよな。

九曜の中で最も神祇院との結びつきの強い、九曜鎬木と九曜不破
は分かんが、今のところ連中が兵を動かしたという報告はない。

九曜久我が救護隊を末広町に派遣したとは聞いているが、あそこの

姐さんは陰謀とか嫌いだからなあ。九曜祠上はよう知らん。

で、九曜天宮は狙われ中と。いい加減誰が九曜頂なのか公表してほしいもんだ】

「リンカーがいるのはタカミヤだけ……いや、キリサキもそうか」

【確か、鎬木と不破がそうだったはず。まあ、あそこを襲撃する馬鹿はいまい。烈士隊の総本部だからな。

転生狩りが神州国内に限定されている以上、九曜頂霧崎 悠は

安全だ。俺らと一緒に今モナコのカジノでお仕事だ。ちなみに俺は全額スツタよ、ドチクショウ】

「魔女の趣味は本当によく分からん」

【資金作りに余念無しだ。建国宣言出したもののまだ国土は開発中だし、金はあるからな。

お前もうちへの進路を希望したと聞く。精々、何を要求されるか覚悟くらいはしておけ】

「心得た。とりあえず、問題の解答を考えるか」

【解答はそれほど難しくはない。

例えば記憶の封じによる問題があるからと、神魂を人間の自由にしようとする行為は、超越者達に対する反逆でしかない。統括者アマゾンにバラせば終わる。

ただ、神祇院がどこまで関与しているか分からない以上、九曜を使うしかない】

「俺は無理だぞ」

【分かれている。うちの将来の戦力をこんなところではなくしてたまるか。総帥に殺されるわ。

お前がやることは二つ。天宮璃央を護ること。そして、現状奴らの戦力となっている存在を潰すことだ】

「ならば、政治手段に関してはそちらに任せる」

【応。というわけで、穗月の妹に変わってくれ】
「分かった」

漫食

携帯を澄に手渡し、璃央の横まで来て縁側に座る。

「長かったですね」

「ああ。だが、護衛の方は案外早く終わりそうだ」

「え？」

聞き間違いだろうか？ 思わず聞き返す。

「君を狙う輩がいなくなれば、護衛も必要ないだろ？」

「そ、そうですね。良かった……本当に」

確かにそうだ。これでまた護衛はいなくなる。自分に護衛なんて必要ない。

（でも、もっと）

護衛でなくてもいいから、もっとそばにいてほしい。それが本音。時間があれば、長いことしたいと思っていたことだって全部出来る。

時間があれば、助けてもらった時にしてしまったことを謝れる。

時間があれば、もっと。

「どうした？」

気がつけば、璃央は俯いたまま立ち上がっていた。

セイジの問いには答えず、足下に獣を置いて、自室へと歩み去っていた。

璃央を見送ったセイジの耳に、電話に対応する澄の声が聞こえてくる。

「おつかい、ですか？ ええ、紫さんなら知ってますけど……。でも京都ですよ？」

しばらく無言でいたが、唐突に「え?!」とセイジを見てくる澄。見られた方はキョトンとしてしまう。

「いやいやいや、確かに免許は父に取られましたけど、いくら魔構が年齢制限なくても。」

え？ 経験って、そんな」

(そういうことか)

電話相手の彼は澄に、セイジから魔構バイクを借りて京都までおつかいをしると言っているのだろう。京都にいる九曜の元へ。

(京都の九曜。ヒョーインだったか？ 確か、シユウのフィアンセ)

梧桐秋が密に文通する相手の名が、緋桜院紫。九曜頂の一人で、祖父の代に決められた秋の許嫁らしい。

(フィアンセの妹がわざわざ京都まで訪ねてくれば、会見まで待たされることもないだろう。それにおそらく、九曜頂であれば昨日の事件のことは耳にしているはずだ。スミが巻き込まれたことも)

澄の立場を利用し尽くす気なのだ。

(スミは聡い。それにはもう気づいているだろうが、彼女は拒絶すまい。友人のためと言われてしまえば。

既に大事な存在を失ったからこそ、友人のための行動と言われれば拒絶するわけがない)

常であれば、酷いとさえ思える策だし、璃央自身、聞けば反対するだろう。しかし、心情を汲んでは達成出来ないことの方が世の中には多い。

セイジはバイクの元へと行き、データを読み送っていく。

最新のデータの中に、九曜頂神籙の名で現車両への超法規許可が下りる一歩手前のデータがあった。超法規許可には二人以上の名を必要としているらしく、まだ入力可能な状態だ。

許可証パネルの声紋入力箇所を叩く。

「九曜頂日崎の名において、現車両の超法規を許可する」

【照合 データ確認しました】

【九曜頂神籙也様及び九曜頂日崎星司様の許可が下りましたので、現車両のあらゆる違反を認めます】

「え、師匠?! あ、いや、師匠というのはそのですね?」

セイジは澄の下半身へと目を向ける。

(高いか)

「Strat Custom」

【Allright Please Driver ether】

「スミ、手を」

「へ？」

澄の手を掴み、有無を言わず半透明のパネルに押しつける。

【Complete】

「少し離れる」

「あ、はい」

セイジと澄が離れると、魔構バイクは変形を開始する。

バイク前面に集中していた白金のアーマーが全体に分布される。

車高は若干低く、シートの高さも調整される。

【Please change material】

セイジはシートを開く。そこには透明なケースと複雑にそこに絡みつくコードの束。ケースには琥珀色に輝く結晶が浮いている。

左手の袖から刃のない柄を取り出してから、ケースからも結晶を取り出し、結晶を柄へと押し込む動作をする。やがて結晶は砕け、輝きが柄の中へと消えていった。

（琥珀？ あんな色のマテリアルなんてあったっけ？）

自分が師匠と呼ぶこの少年となると、未知なことに多く出会っているような気がする。

セイジは庭の花壇に掌を向ける。

風が吹き、花々が揺れた。

サイト・マジックもかかっていないのに、セイジの掌に瑠璃色の輝きが生まれたのを見る。

輝きは拳大の結晶へと変化する。結晶をケースに収め、シートは閉められた。

【ALL Complete】

「End Custom」

【Allright】

そしてデータの検索を再開し、九曜緋桜院家へのナビを表示させ

る。

「乗る覚悟が出来たら行け。速度は気にするな」

「ほ、本当にいいんですか？ 乗り回しちゃいますよ？」

「出来るものならやってみろ」

澄にとつてははじめて聞くセイジの挑発的な言葉。自然と、口の端が歪む。

「乗りこなせたら？」

「今日教えたことの応用を教えてやる」

「人に教えるのが嫌でライセンスを持たない師匠がですか？」

「このじゃじゃ馬を乗りこなせる奴なら、教えを与える価値がある」

ロングコートの内からライダーグラブを取り出して澄に与える。

澄はバイクに跨がり、ライダーグラブをはめてハンドルを握る。

「聞け。こいつは姿こそバイクだが、中身は別物だ。構造は魔鋳剣とほぼ同一の存在。魔鋳剣は分かるな？」

「スペルブレード。魔力伝導率の高い鉱石で構成された魔構の剣にして魔法使いの杖。とネット知識をひけらかしてみせますが」

「そう、魔力運用の応用を知る者に許された現代の魔法使いが持つべき杖だ。」

魔力運用とはすなわち、循環だ」

魔力の循環。つい先程、セイジが見せたマテリアルの生成から崩壊までの流れのことだと思に至る。

「こいつは鉱石に相当する箇所を純度九十九パーセントのマテリアルで補い、ボディが柄の役割を果たす。そのグラブとハンドルを通して魔力を流し込め。」

配分を調整し、モーターを回し、排気された魔力を己の身に取り込め。

ぶつつけ本番だが、それでも出来ると、乗りこなしてみせるといふのなら」

セイジが手を澄に向かって差し出す。求めているのは、澄が持つ携帯電話。行くなら会話は必要ないだろうと。

「聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「師匠って、実はかなり、璃央のこと好きですよね？」

「あ？ 目ん玉腐ってんじゃねえか？」

（よっし、龍兄の言ったとおり、素の師匠キター！ すごい、一発だ）

澄はセイジがムツとするのを見て、口を にしてフンと笑った。「師匠、璃央とはもっと砕けて話してあげてください。璃央の思い出の中の師匠って、もっとこお悪ガキというかなんというか。

ともかく、なんかよそよそしすぎるんですよ！」

よそよそしいことを指摘すると同時に、携帯をセイジの手に叩きつける。

「ちゃんと伝えましたからね！ そいじゃ、行ってきます！ って、うわあ！？」

勢いつきすぎてウイリーさせてしまいが「フンツ」と身を捻ってバイクの向きを変え、襲撃時に崩れた塀の瓦礫上に乗っかる。

ビー玉を崩す修練を思い出し、セイジが柄と表現したバイクのボディ全体に、自分の魔力を浸透させていく。ゆっくりと確実に、隙間のないように。魔力が通った箇所がすべて自分の身体の延長のよう感じる。

（やっぱ、これすごい）

人馬一体。魔力と魔構のサポートによって、その言葉が実現されるかのようだ。

セイジは澄とバイクの一体化を視て、目を細める。

（兄妹、か）

魔力の輝きに、澄の向こうにパートナーの姿を見る。

「そ、それじゃ改めて！」

ちよつと恥ずかしそうに「いつてきます」をした澄はバイクを飛ばさせた。

見送って、携帯を耳に当てる。

【行ったか？】

「ああ。あんた酷いな」

【お前は甘いな】

無言。そして同時に「ほっとけ」と言った。

友人が屋敷を出たことにも気づかず、璃央はぼんやりと机に向かう。

階下が騒がしい。家人達が、今回の襲撃を耳にした祖父の命令で動いているのだろう。

ポケットから外で拾った物を出して写真立ての隣に置く。それは縁のないシンプルな眼鏡。

吐息。

我が母ウエヌスの力、我を通して地に満ちよ

セイジの言葉を思い出し、分厚い国語辞書を出してページをめくる。

ウエヌス、ヴィーナスの別名。

(ヴィーナスまたはアフロディテ、愛と美の女神。金星を司るオリオンポス十二神の一柱)

それが母だという。容姿の良さは遺伝か。

金星。その単語がひっかかる。神州の神々にとって、金星は鬼門。禁忌の名に繋がる。

(禁忌？ そんなわけがない)

違つと否定して、ハツと顔を上げる。どうしてそんなことを思うのか。

(さっきから、どうかしてる。知らないはずの、思うはずのないことばかり)

頭が痛い。違つ、心が痛い。

(心？ どうして?)

世界が宿す命の光。

(知っている 知らない)

かつて、神々が見ていた光景。

(懐かしい 知らない)

頭を抱える。呼吸が荒い。

(なんなの？ なんでこんなに)

思考が止まらない。助けを求めて視線を彷徨わせる。写真立ての、七年前のセイジの姿を捉える。

(助けて、星司さん 違う、そのような名ではない)

心の底が否定する。

(違う、あの人はちゃんと名乗った 彼には本当に名乗るべき名がある)

「名乗るべき、名？」

(まだ隠されてる？ 隠している。思い出せ、その名を)

自分の中に、誰かがいる。誰かが答を誘導している。そんな気がした。

(誰なの？ 私を揺さぶるあなたは誰？)

応じる声は。

「知りたければ思い出すのだ」

心の中ではない。自分の口がそう告げた。自分の耳がそう聞いた。目が、見開いていく。

それは紛れもなく自分の声。

ガタツと椅子を倒して立ち上がる。

ノックが響く。

「お嬢様？ いかげなされましたか？」

室内の音に驚いた家人の声だ。

(助けて)

思いとは裏腹に、応じるのは違う言葉。

「椅子に足をぶつけただけです。私は大丈夫ですから、お祖父様の指示を全うなさい」

「はい、失礼致しました」

(待って！ 助けて！)

足音が去っていく。

璃央は椅子には座らず、普段使わず布をかけたままにしている姿鏡の前に立つ。布を取って自分の姿を見る。

普段と変わらない姿。しかし違和感がある。それは目。璃央の目は黒かったはずだ。それが今は朱を帯びている。

「ふむ」

自分の隅々まで確認するかのように、ポーズをつけたりターンしたりする。

「良い感じだ。これならば問題はないが」

自分の胸を掴んで揉む。

「ちと、小さいか？」

普段なら怒るところだが、璃央は自分の目を通して、鏡の中の自分を見つめるのみ。考えることと聞くことしか出来ないでいた。

「ふふ、しかし半神とはな。この世界、面白いモノに溢れておるな」
その存在は璃央の知識を体験を吸収していた。それが、中の璃央にはよく分かる。璃央の記憶を知らなければ、あそこまで家人が疑問にも思わない対応など出来るはずもない。

璃央の赤いビー玉を取り出す。

「火、か。安易な。真にふさわしきは火などではないわ」

言って、窓の外に顔を向ける。外は夜。街灯の灯りが闇を消す。

「うむ、今は無理か。これではみすみす殺されに行くようなものだ。何せ、この身は弱い故なあ」

（殺されに？ ま、まさか、あの人達に）

「うむ。やられたらやり返さねばな」

（敵うわけではない！）

「汝はそうであろうよ。だが、妾は違う。」

しかし、彼の者から半日教えを受けただけで、この身の淀みとなっておった魔は失せ、流れは正常となるか。教えが良いのか、はたまた素質か。否、汝は幼きに魔法使いの教えを受けておったのであったな」

素直に関心しているらしい。腕を組んで、うんうんと頷いている。

「おかげで妾の力も行使出来るというものよ」

（身体を、返して）

「返そう。しかしそれは、汝が思い出してからだ」

（何を思い出せっていの？）

「決まっておる。汝が何者か」

（私は天宮璃央よ？ それ以外の何者でもないわ）

「なんと強情な。だが良いのか？ 汝が天宮璃央以外の何者でもな

いかぎり、汝は彼の者に愛されることはないぞ？」

（彼の……者？）

「そう。異郷の神を母に持つ、彼の者だ。汝が汝自身を知らない内は、アレが汝を愛することはない。」

自らを知らない転生者など、自らを知る者どもと同じ土俵には立
てん」

転生という言葉。

自らを知るという言葉。

自分は目を背けていただけなのかもしれない。今自分を動かすの
が何者か。どうしてそうなったのかは分からない。

「そら、疾く眠れ。人の子よ。妾の乙女日記を見せてやろう」

乙女日記に突っ込もうと思ったが、意識を強制的に驚掴まれて、
刈り取られた。

その頃、セイジは縁側で電話を再開していた。内容は襲撃者の潜
伏先についてである。

周囲は騒がしく、セイジの後ろを走り回る家人の姿はあるが、セ
イジの電話の内容に耳を傾ける者はいない。

【ミヒヤイル・マルゴットのその後だが、足取りは掴めていない。
が、ワールド・ギア名義で貸し出されている倉庫周辺の防犯カメラ
が破壊されている】

「なんだそのあからさまさは」

【あからさますぎるんだが】

電話相手は言葉を濁す。

【壊されたカメラが最後に映したのが、なんというか、招待状？】

「疑問形とか。言語は？」

【英語だな。署名はLloyd Gearだ】

「ロイド・ギア？ 財団ナンバースリーからの招待状とだけ聞くと、立食パーティーを期待してしまうな」

【ロードウエルの舞踏会じゃあるまいし あ？ 呼んでないぞ】

電話の向こうで、若い男同士の会話がなされる。さすがに聞き取れない。

【まあ、パーティーがあるとすれば、それは立って食い合う大宴会か】

「一方的に食い尽くして終わりにしたいパーティーだ」

【違うい】

招待状には、ゲーム難易度とか秋が好きそうな言葉が羅列してるが、ようするに、来るのが遅くなればなるほどラスボスは強くなると言いたいようだ】

「ギアがラスボス？」

【いや、うちのラスボスとかあるからミヒヤイルじゃないか？】

まあ、どのみち今回の情報が上に行くか、穂月の妹が緋桜院を動かした後でもないかと攻められないし。下手に手を出したらこっちに不利な状態で上が動くからな。適当に寝て待つてろ】

「適当はない」

【そこは冗談なんだから流せよ】

しょうがないなと電話を切って脱力。

時間を潰すかとコートの内より一冊の本とガラス玉を一つ取り出す。

ガラス玉を爪で弾くと懐中電灯よりも遙かに明るく光る。それを傍らに置いて読書を開始した。

捕捉

外が明るくなる頃、璃央の身体を借りた存在は天宮の制服へと着替えを済ませる。

押し入れに入っていた予備の運動靴を履き、窓の縁に足をかける。

（あなた、ヒルメね？）

そこで璃央の心の声が聞こえてきた。

「うむ。何を見た？」

ヒルメはニツと笑みを浮かべ、窓から跳躍。庭とは逆にある道へと降り立った。

璃央が見たのは戦争の夢。それもただの戦争ではない。

（反乱制圧の夢）

「ああ、そこか」

どこことなく暗い。暗くなる理由は璃央にだけは分かる。

「さて、と。本気の走りを見せてもらおうとしよう」

路面を蹴って靴の具合を確かめる。

（走り？ 私はそんなに早くないかな）

「ふっ、昨日、日崎の末が使った魔法を見たであろう？」

なあと、妾の力を使う故、汝は乙女日記の続きに耽るがよいわ」

ヒルメは自信に溢れる笑みを浮かべ、全身に魔力を漲らせる。その奔流に璃央はたやすく飲み込まれそうになるが、必死に耐える。

（まさか神魂へのパイプが繋がった？）

「馬鹿者め。あやつの言っておったカレーの匂いとやらに決まってるだろう。行くぞ！」

ヒルメは前傾で、短距離走のランナーがそうするように、下肢に力を溜めて構える。

（いくら魔力の本当の使い方を教わったからって、こんなに早く、こんなにたくさん魔力を使えるはずが）

「妾が使い方を知っているだけだっ」

ロケットスタート。その後を訪れる速度はなんと例えればいいだろうか。少なくとも人の足で出すものではない。

二本足で、獣のように疾駆。

「そうら、加速だ！」

全身に瞬発力が漲る。セイジが使用した『エンチャント・ヘイスト』と同じ魔法が使用されたらしい。

(一度見ただけで?)

「公式とやら自体は何度も教科書で見てるだろうが」

確かにそれはそうだが、見て使えるようになるなら誰も苦労はない。

(どこに向かっている?)

「妾を襲った馬鹿者を潰しに行くに決まっている!!」

(な……)

絶句。

(そんなの無理に決まっている! というか、場所も分からないのに?)

ヒルメは走りながら失笑。

「この地、この時間にあつて、妾から隠れられる場所などないわ！」

(じゃあ、せめて星司さんと一緒に)

「あやつに教えたら妾が活躍出来なくなるではないか」

それと同じ台詞は夢もとい乙女日記でも聞いた(口にした)。でもその時は、どうしても反乱をしたあの人に会うために、そのためにだけに前線に出ようとしてのも。

あやつの対象は違う。

一言一句まったく同じ台詞だと、夢で見るヒルメとこの自分を動かしているヒルメが同一人物であることを否定したくなる。もつとも、公用以外の口調はまったく違うのだが。

「そら、さつさと他の場面も知るのだ。出来れば甘ったるいコイバナが良かるう」

また驚掴みされる感覚に襲われる。

(せめて強制はやめっ)

璃央の意識は、再び夢の中へと落ちていった。

バサツと本が庭へと落ちる。

セイジは立ち上がり、屋敷を挟んだ反対側に唐突に発生した魔力の奔流に驚愕する。

「アマテラスだと?! まさか!」

土足で縁側を上がり、璃央の部屋のドア(日本家屋なのに璃央の部屋のドアだけ洋風で鍵がついているようだ)をノック。立て続けに強く三度ノックをしてから、開ける。鍵はかかっていない。

部屋はもぬけの殻。

開け放たれた窓から朝日が差し込んでくる。

「あんの、馬鹿。いや、その前に、なんであいつの魔力が」

璃央は記憶を持たない転生者であり、神魂からの力は使用出来ない。感じてすぐに対象を特定出来るほど強い魔力など、発せられるはずがない。

「くそっ」

荒立たしく縁側へと戻り、未だ微睡む獣をコートの中に投げ込む。家人を起こし、央輝に璃央が出奔したことを伝えるように頼み、天宮家を飛び出した。

路上で東の空を見る。

陽光まぶしく色を持って見ることは出来ないが、存在自体ははっきり感じる。

昨日の襲撃時は閉じていたがために開く手順を踏まなければならなかったが、あれから鍵はかけていない。

力を使いこなす半神は、親の能力発現に合致する条件を得た時、亜神化を可能とする。

亜神化した時、魔力の総量は跳ね上がり、超越者の力を発現させた転生者と互角に渡りあえるほどの力を得る。

セイジの亜神化の条件にはいくつがあるが、内の一つが天に金星

を確認した時である。

「mode Quasidentity」

呟きで、自分の中で魔力が満ちると肉体が強化されるのを感じる。セイジの周囲に黄金の燐光が発露し、陽光を受けてキラキラと輝く。

「サーチ・エーテル！」

感覚が一気に円状に広がっていく。

セイジを中心にして、水面に広がる波紋のように東京全域のすべての魔力反応を把握する。その中に一際強く輝く存在を見つける。それは高速で移動中。位置は既に湾の縁に到達している。

ヒルメはハッと顔を上げて東の空を見る。

「もう見つかった？！ なんてこと」

グツと奥歯を噛みしめる。

「しかし、もう追いつくものか！」

したり顔で更に速度を上げていった。

「見・つ・け・た！」

両腕袖から刃無き柄を取り出す。黄金の燐光とは別に、琥珀色の輝きが周囲に満ち、柄へと向かって収束していく。それは琥珀の刃を形成していき右に長剣左に小剣が紡がれる。

双剣を振るい、自らの前方の空間を斬りつける。剣線は宙に十字の傷を描く。

「馬鹿を拘束するぞ、キオーン！」

呼び声に応じ、キュイイイイイと甲高い鳴き声を上げ、羽ばたきが前方に生まれる。

傷が消え、代わりに出現した大型のバイクよりも大きなソレにセイジは飛び乗り、速度強化の魔法をソレに付与した。

ヒルメは湾港の倉庫群を前にして、唸っていた。

「屋内とは予想していなかった。さて、どれの中にいるのだ？」

大見得切ったはいいが、陽光の届かない場所にいるかまでは考え
ていなかった。

「感想はどうした」

問いかけても無言。ただ感情だけは受けてヒルメは頬が熱くなる
のは感じ取る。そしてようやく。

（破廉恥！ 破廉恥！！）

璃央は心でそう叫んだ。

「何が破廉恥か。ただ抱き合っただけではないか」

（うそつき！ き、ききき）

「猿？」

（キスです！ あ、いや、その）

「汝とて、彼の者との再会では似たようなことを妄想」

（や、やめてー！）

「どれだけウブなのだ……」

やれやれと天を仰いだヒルメは、何か輝くモノが遙か上空から滑
空してくるのを見た。

「なんだ……？ くっ」

速すぎる。

動けず、身構えるだけで精一杯だ。

ソレはドンツと音を立て、地に揺れを起こす。バサリバサリとの
音と巻き起こる暴風。うっすらと目を開けて突然の急襲者を見る。

「なんだ、こいつは」

雪のように白い翼を羽ばたかせる鷲の上半身と大地を踏みしめる
黄金に輝く獣の下半身を持つ、幻獣。

（グリ……フォン？）

中で璃央が呻く。実物などはじめて見る。伝えられるものよりも
遙かに小さいが、王者の風格は健在。

幻獣は羽ばたきを解いて、ヒルメにのしかかる。前足 かぎ爪
で両肩をガツシリと掴む。

「こいつ！」

組み敷かれ、身動きを封じられる。どんなに筋力を強化しようと、今の状態の限界では幻獣はピクリとも動かせない。

「無礼な」

「無礼で結構」

声は幻獣から、否、幻獣の向こうから聞こえた。

(星司さん?)

聞き覚えのある声に璃央が解答を導き出す。

亜神化は既に解け、黄金の燐光は消えてはいるが、代わりに琥珀の輝きを纏い、両の手には大と小の剣を握る。

セイジは幻獣の背から下り、ヒルメの頭の横に立って、見下ろした。目が合う。眼の奥に怒りを見てヒルメは頬を引き攣らせる。物凄く、怖い。

セイジは璃央の身体を流れる魔力を見定める。昨日の襲撃後に比べて、明らかに魔力の扱い方が違う。

「おい……、これは一体何のマネだ？」

怒鳴りつきたい感情を押し込めた低音。手元でググツと柄を握りしめる音が漏れる。

ヒルメはフンと鼻を鳴らして顔を背けた。

「何故、アマテラスの力を使える？」

(パイプは変わらず繋がっていない。これは、なんだ?)

「何をするつもりだ？」

「疑問ばかりだな。聞いてすべての解を得られると、思っているわけではなからう？」

昨日までと話し方がまるで違う。歳不相応の威圧感を感じる。これではまるで………。

(リンカーだと?)

ゆつくりと、ヒルメはセイジへと向かって顔を向け、自分から目を合わせる。朱の瞳が紫の瞳を捉えた。

(星司さん！ 助け)

「て！」

「あ？」

唐突に、璃央は自分の口が自分の叫びの末を発するのを聞き、セイジは不機嫌全開の返事をした。

璃央の瞳が朱から黒へと戻り、全身に漲っていたあらゆる強化が消失する。魔力の奔流だけが続いている。璃央は幻獣の重みに「づっ」と呻いた。

（逃げた?!）

璃央は心の奥に引っ込んだヒルメがニヤツと笑うのを感じた。

「星司さん……」

威圧感の消えた。昨日までの璃央の声色。

「キユイ？」

苦しいな璃央を見下ろしていた幻獣がセイジを窺う。セイジはただ無言で璃央を見下ろす。

「た……すけ……」

吐息。

「キオン、い」

いいぞと言おうとして、ハツと周囲を見回す。

前方倉庫の影からガチャガチャと不快な音が聞こえる。気づくのが遅れた。

舌打ち。

（困まれてはいないが、あれは？）

璃央は地に縫い止められたままセイジの見る方を見る。

「あれは……足丸?!」

バスケットボールのような身体に足軽兵の甲冑と傘ほどの長さの槍を装備した警備メカ。人工の脳髓に精神を繋げて動かす。神州の魔構企業である魔匠御影が烈士隊に卸している立派な魔構製品である。

【警告！ 警告！ 警告！ 警告！】

機械音声で警告を連呼しながらジリジリとこちらを取り囲もうと

している。

「星司さん！ 足丸は烈士隊を呼びます！ ここだと来るのは九曜不破の直属です！」

取り囲もうとする行動、相手が警戒する可能性、間合いを計ると思われる時間。それらはすべて時間稼ぎ。

幻獣は璃央からかぎ爪を離し、羽ばたいてみせる。その隙に璃央は幻獣の下から這い出て足丸から距離を取る。

肩は思っていた程痛くはない。重かっただけで、掴み自体はかなり加減されていた。

（ヒルメの実力は間違はなく中等部時代の梧桐先輩並だった。それを加減された？）

それとも璃央の目算自体が甘いのか。

（とにかく足丸をなんとかしないと）

しかしマテリアルは持つてきていない。一体、ヒルメは何を触媒にするつもりだったのか。乙女日記をいくつか覗いても、ヒルメがどんな魔法を使用していたのかが分からない。

知ったのは、ヒルメがある男性を好きだったことだ。ひよっとしたら、そこだけを見せられているのかもしれない。

幻獣の羽ばたきが強くなる。それはやがて突風、竜巻となって二人と一匹を覆い隠す。

と、セイジが璃央のそばまで退く。

「キオン、役割分担だ。分かるな？」

言つて、璃央を自らのコートで覆いその場に膝をつく。

「キュキュ！」

幻獣の返事らしい鳴き声を聞く。

（この子、あの猫なの？）

セイジが呼ぶかぎりは同じ名だが、姿がまったく違う。存在自体が別物とも思える。

璃央の疑問など露知らず、セイジは地面に左の小剣を叩きつけて砕いた。刃が粉塵となって周囲に舞う。周囲の光を乱反射しセイジ

と璃央の姿を消していく。

幻獣は竜巻を消失させ飛び出した。

足丸達の頭上を飛び越え、この場から遠ざかる。

足丸は遠ざかるうとする幻獣と今までいた場所とを交互に確認。

やがて数体を残してゾロゾロと幻獣の後を追っていった。

「魔構兵は苦手だ。これだから科学寄りは」

呟きを耳元で聞く。ヒルメに支配されている間、ずっと助けてほしかった相手がすぐ近くにいます。状況を考えれば近いのはそうなんだが。

「星司さん」

「後で聞く。まだ残ってる」

ゆっくりと璃央を抱えた状態でコンテナの影へと隠れる。そのまま徐々に距離を離していく。足丸の駆動音が聞こえない位置まで来て、セイジはようやく溜息をついた。

ピリリリ。

ビクツと二人とも震える。

ピリリリ。

セイジは咄嗟に音源を探し当て触れる。胸ポケットに入った携帯の音。慌てて切って、周囲にまた足丸の音が出てこなかったかを確認。かけ直す。

「誰……、なんだラフィルか。いや別に、落胆してるわけじゃ」

携帯から璃央が聞いても可愛らしい女の子の音が漏れ聞こえる。

会話の内容までは分からないが、セイジの声が優しいことだけは分かる。誰だろうか。

「目覚めない？ ならタツヤ経由でメルカードの施設を借りる。今立て込んでるんだ」

電話が終わった後、しばらく無言が続く。

セイジはついでに着信履歴を確認。メールが一件。

T・Kannnagiからで、招待状の示すパーティー会場の地図のようだ。しかも会場の写真付き。その写真はどうみても、ここ

ら一帯にある倉庫の一つにしか見えない。

(下手したら一触即発じゃないか。なんでこんなところに)

ここに来ることになった原因である璃央を見下ろして、硬直。璃央はむくれてセイジを睨んでいた。

(な、かわ……いやいや待て俺。そんなことを考えてどうする。状況をちゃんと考える)

イカンイカンとかぶりを振り、璃央を見ないようにして会話を振ってみる。直視したら、また何を考えるか分かったものじゃない。

「何故君は漏れた魔力だけでアマテラスの力を使えるんだ？」

答えはない。

「ここに来たということは仕返しなんだろうが、今余計なことをされても困る」

やはり答えはない。

やれやれとゆっくり視線を下に落としていけば、やはりむくれていらつしやる。

目を合わせないよう視線を彷徨わせて、ガツと頭を掴まれた。そして、強制的に目を合わせられた。心臓が跳ね上がる。

(ヒルメ?)

璃央の行動に、遙か遠い過去に共に過ごした少女が重なって見えた。

(いや、違う……違うはずだ)

先程、明らかに璃央のものとは思えない言動をしていたが……。

というより、ヒルメの公用の言動に一致していたのだが、神魂そのものの魔力が璃央に宿っていない以上、ありえないとしか思えないセイジであった。

「どうしても聞きたいことがあるんですが？」

「なんだ？」

応じ、別れ際に澄が言っていたことを思い出す。

(ミスロジカルや家族間で使っている口調でいいのだろうか?)

神州へと来る前に父親から忠告されている。

天宮のお嬢さんは色々と難しい立場だから、フランクに対応したら駄目だよ？

気持ちも隠すこと。え、気持ち？ 僕は君のお父さんだよ？
ちゃんと知ってるって。

許嫁とかいたら、下手したら璃々……いや、家の人にえいやあつてされちゃうからね。

えいやあつがよく分からなかったが、ともかく硬い口調でいけばいいかと実行してきた。それをそれを崩せという。

(優しくしろということか？)

ふむ、と考え込んでしまう。

「あの……」

「どうした？」

穏やかに、滅多に見せないほど優しく涼しげな表情で返事したら、璃央はしばらく停止して、やがて、ボツと音が立ちそうな勢いで赤面し頭から湯気を立てた。

「ふえ？！ そ、その、あ、わ、わた、わた」

(ちよっ、変われ！ 汝、妾と変わるのだ！)

(やだ、やだやだやだ！ 絶対変わらない！)

(ええい、変われー、かーわーるーのーだー。間違いない！ カガト！ カガトだ！)

(そんなの関係ない！ 星司さんはヒルメに言ったんじゃないもん！)

まあ、つまるところ、テンパった。テンパって、口にしたのは。

「せ……カガトさん！」
間違えた。

(あ、ああああ、あああああああ)

璃央とヒルメは心の中で一緒になって頭を抱える。やっちゃまった感全開である。

対してセイジも軽く混乱をきたす。

(なんでその名を知ってるんだ？ 記憶もなくて、なんで)

そして、思わず璃央の魔力を視ようと視界を展開させて、更に驚く。

(パイプが……繋がった?!)

真世の視界の中、璃央の中に神魂からの魔力が流れ出すの確認した。

(あれ? ヒルメ? どこ?)

気がつけば、心の中に一人取り残されていた。自分の中には自分以外誰もいない。

「なにが起きたんだ? それに……? リオ?」

璃央がグツタリともたれかかっていた。顔が赤く息が荒い。額に触れればひどく熱い。

(風邪か!?)

多分違う。

セイジも璃央の魔力の流れを確認し、風邪を引いている者の流れではないことを確認する。

携帯を取りだして、電話帳のリストを開こうとして、着信アリの表示を見る。相手はT・Kannagi。例の連絡だろうか。

急いでかけ直す。相手はツーコールで出た。

【やっとかよ。例の】

「リオが倒れた! どうすればいい?!」

【はあ? ええっと?】

「だから、リオが倒れた。魔力の流れは風邪のそれじゃないが、症状は風邪にしか見えない。どうすればいいんだ?!」

電話口ではしばらく無言。

【ちょっと待ってる】

ガタゴトと音だけは聞こえてくる。しばし待つこと数分。

【状況を言いな、日崎の倅】

それは若い女の声。ややというか結構高圧的である。セイジはそれがT・kannagiの上司であり彼がよく言う魔女であることに気がつく。知っている理由は簡単。ほんの数週間前に面接であ

ったから。

璃央の様子がおかしかったことと倒れるまでの詳細と症状を教える。

【神州の悪習の被害者が、記憶を持つ奴しか知らないことを口走った拳げ句に倒れた、ねえ。で、神魂が開いた、と。

そりゃあれだ。知恵熱だね】

「は？ なんだって？」

魔女は電話の向こうで喉を震わす。

【記憶の処理に脳が追いついてないんだろっさ。

本来であれば、リンカーは生まれた時点で前の記憶はすべて持ち、それが人格に現れる。人としての肉体年齢に精神が引かれはするがさしたる問題はない。

そして、人としての営みで構築された記憶は、根底となる前の記憶に積み重なっていく。上書きはされずにな】

だが、と続く。

【神州の記憶封じは、リンカーの記憶のスタート地点を人と同様の位置に引き戻す。蓋をして鍵ガツチャン。鍵は神祇院でのみ所有する。ようするに、これをされた転生者は人となんら変わらん。脳も人の物だしな。

で、そこに前の記憶という奴をいっぺんに入れられてみる。人生よりも長い記憶をだ。時代に生きる者の時間は一日二十四時間。許容量二十四時間に五十時間を超っ込むとでも思えばいい。

あ、梧桐の悴やクロケツトの若造は一日二十六時間とか言うがアしは無視していい。ゲームは一日二十四時間とか言う連中だからな】
最後の戯れ言（真実）は脇に置き、許容量を考えれば、それは辛いことだと素直に思う。

【故に、記憶を無理矢理突っ込まれたら発狂もんだとするわけだが、天宮璃央の現状の前段階を聞いて思うのだ。

記憶の発現の前に何かきっかけがあり、封印に傷をつけ、魔力の一部に流出していた人格の断片が天宮璃央を支配したのではないか。

前というものの力にもよるが、天宮璃央の場合は、私が言わなくても君なら分かるだろう?】

「主神クラス」

強力故に敵わない。

【うむ。それがどうして神魂への経路が開く結果になったか、それは君には分からないかもしれないが、おそらく、前と今とで精神の根底を揺さぶる感情が合致したというか、恋は最強というか】

「何か強力な感情が合致した?」

【そういうことだな】

「原因はよく分からんが、分かったことにして聞く。で、どうしたらいいんだ?」

【そうさな。ほつといた結果、脳を壊されてもかなわん。精神感応で助けたまえ】

「俺にそんな芸当が出来るとも思っているのか?」

【思ってるよ? だって君、アウレアの息子ではないか】
ここで母の人としての名を出されても困る。

「セツナじゃあるまいし俺に母の力なんざ使えないぞ」

【半神が親の能力を使えないはずがない。

ほれほれ、騙されたと思って私の言うとおりにやるがいい。今はそれしか方法はない】

もとよりセイジには他に選ぶべき方法がない。

「くっ、ここは騙されてやる」

【よく言った。ではまず、手で良いから素肌を合わせよ】
左掌を璃央の右掌に合わせる。

【次に 君、天宮璃央のこと好きじゃろ?】

「おい」

【違うのか? そうか。じゃあ諦めろ】

「ちよ……いや、まっしてくれ」

【ほれほれ、七年前からずっととかなんとか言ってしまうよ】
遊んでるとしか思えない。

「……………」

【なんだって？】

「べ、別にあんたに言わなくなつていいじゃないか」

【へー？ ほー？ ふむふむ、まあ良かろう。デレは当人達同士でやればいい。】

では次に、天宮璃央を真剣に想つて】

「想つて？」

【ちゅーをするのだ】

「あんた絶対遊んでるだろ？ なあ？ ホント勘弁してくれ」

【いやいやいや、こつちも真剣だぞ？ この条件を満たした状態なら亜神化出来る】

「亜神化？」

思わず空を見上げて金星を探すが、見当たらない。

【そりゃ確かに、ちゅーはふざけたが、接吻は愛を伝える方法でだな？】

「愛？ 愛……愛、ねえ」

【気づいたか。愛神の息子】

「はあ。そういうことか。これは確かに亜神化するだろうなあ」

【うむ。それで、記憶分野ということで額でも合わせてマインド・サルベージを使え】

「マインド・リンクじゃないのか？」

【ようは超越者の精神に埋もれた天宮璃央の精神をフィッシュすれば良いのだから、サルベージが妥当だ】

「分かった」

【それと出来れば急いでやれ。例の件が上に伝わった途端、九曜の不破が待っていましたとばかりに動き出したそうさ。神州の勢力とぶつかる前に終わらせておけ】

電話を切つて、璃央を見る。症状に変化はない。

(やるか。ようは心を伝えればいい)

セイジは璃央の手を取りその甲に接吻し、額を合わせて目を閉じ

る。

「カガトは確かに俺の前の名の一つだし、カガトはヒルメを愛してもいた。だが、日崎の末、セイジである俺が、この世に生を受けて最初に心を惹かれたのは君なんだ。」

リンカーであるせいも記憶力だけは確かで、七年間忘れることなど出来なかった。クエストで神州へ行けば君に会えると思った。護衛対象が君と知って、役割にかこつけた。

今の俺ならあの時のように、ただの一度のシフトで痛みへのうちまわることもない。シフト以外の戦う術もある。

馬鹿みたいだろ？ 君の前で、君に対してつつけんどんにしていた俺が、こんなにも君への欲でまみれている。

だからこそ、天宮璃央は消させない。壊させない。独りよがりでもない。

君の精神は、必ず、引つ張り出す」

それは誓言。

心の奥、どこかで繋がる母親が「ナイス告白！」とか親指を立てた幻影が見えたが、あえて無視した。下手に構うとつけあがる。だがそれでも、セイジの精神に一つの魔法が刻み込まれる。

セイジ自身が意識したわけでもないのに、黄金の燐光が出現する。集中、全力で魔力を練り上げ、刻み込まれた魔法を使用。手をもしたエネルギー体をイメージし璃央の精神に突き入れた。

一時、一面闇になっていたが、やがて大量の映像が流れ込んできた。様々な映像に璃央は押し流された。

映像の多くは戦争、政略、謀略といったもの。中には乙女日記で見たものも混じる。

天より降りて地を支配した。

多くの神との間に新しい神を産んだ。

その後はもつと多くの地を求め領を広げた。

神の肉を失ってからはただ見守り、時には加護を与えた。

多くは、戦争の、侵略の記憶。数百年、いや長さとしてはゆうに二千を超える年月の記憶。天宮璃央として生きた十五年など瞬きに等しい。

記憶は激流。璃央自身の記憶は中州の小島の如く削られていく。浸食されている。すぐにも飲まれないのは、ヒルメが零した防波堤のため。

璃央はただ、徐々になくなりつつある領域で体育座りをし、カタカタ震えながらも流れてくる映像を見続ける。現実には数分。しかしここではもう、何十年も見続けている気がする。

（カガトを失った後は孤独。弟はカガトを追って出奔。周りに悩みを打ち明ける相手はなく）

ヒルメの、天照の心情に最初は涙こそ流したものの、既に涙は涸れ、ただ映像を目で見て記憶していくだけの作業。

ふと、中州の一端が目映る。

それは璃央自身のかつての記憶。七年前、たった三日間だけの大切な思い出。思い出は今まさに、流されようとしていた。

「あ、だめ」

座りを崩し、手を伸ばす。届かない。グツと身を乗り出して、更に伸ばす。

思い出がグラリと落下を開始した。

「やだ。それは、取らないで！」

更に身を乗り出して　　足場が崩れた。でも構わない。手を、身体を伸ばして記憶の端に、届いた。下は激流。この記憶を護つても飲まれればどっちにしろ助からない。

落ちながら、記憶を引き寄せようとする。空いた手で記憶に更に触れようとして。

「捉えた！」

ここで、聞くはずのない声。触れられるはずのない手が、記憶に伸ばした手を掴んだ。

転神<シフト>

ハッと目を開ける。

ちようど自分から遠ざかる、金髪紫眼の少年の顔が最初に映った。

「せいじ……さん？」

璃央の声を聞いて、セイジは安堵の表情を浮かべる。

手に熱を感じる。見れば、セイジと手を合わせていた。璃央の視線に気づいて、セイジは慌てた感じで手を離れた。

「気分は？」

頭が重い。身体がだるい。長湯した時のような吐き気がある。しかし、妙に心が温かい。

「よく、分かりません。でも……」

ヒルメを見失った後、長いこと酷いものを見続けた気がするが、最後になにやらすぐく安堵したような気がする。それに。

「少しだけ、すっきりしました」

「そうか」

記憶の激流の直中にあつた璃央はセイジの誓言など聞こえていないし、それはセイジも分かっている。

(あれは本人に言わなくてもいい。言えたものでもない)

結論づけて、セイジは立ち上がる。璃央が戻った今、例の件を片付けなければ終わらない。

「とりあえず、君はここら辺で隠れていてくれ。九曜不破が動き出したとも聞く。運が良ければ保護してもらえる」

「星司さん　でいいですか？」

呼び方だろう。

「カガトは止めてくれ。あまり、知られたい名でもないからな。カガトでなければ、なんでもいい」

「あ……そ、そう、ですね。それなら、これまで通りに星司さんで」「うん。そうしてくれ」

「はい。それですね、星司さん？ 不破さんに保護されるくらいなら、このまま星司さんに護衛されていたいのですが」

「保護が嫌なのか？」

「はい」

即答である。

「九曜頂不破さんの御次男が、その、私の許嫁候補でして」

（保護した手柄で要求を通されても困る、か）

「分かった」

「なので……え？ いいんですか？」

「ああ。ただし、今度はちゃんとこつちの言うことは聞くように」

「はい」

璃央はともうれしそうに笑みを浮かべた。セイジはそんな璃央から顔を反らす。頬が少し赤い。

二人は倉庫の陰に隠れて移動し、問題の倉庫の戸口までやってくる。

中からヴヴヴと低い機械音が響いてくる。

「ここか。リオ、戦闘中はどうしたい？」

「一緒に」

「そうか。ならシフトだけはするなよ？」

「シフトというと、転神ですね？」

半神の亜神化同様に、転生者にも力を引き出した状態がある。それをシフト、神州においては転神という。

超越者としての過去における全盛期の肉体へと化身し、全力で超越者としての実力を発揮する。デメリットは、現在の肉体が全盛期の肉体と差違が大きい時、化身終了後に強烈な痛みを伴う。また、長時間の化身も出来ない。

「星司さんから見て、私は転神出来そうではないですか？」

「へ？……うん、まあ、その」

「どうしてそこで赤く……ハッ?!」

ヒルメが言っていたことを思い出した。

「胸が……小さい……」

どんよりと、がっくりと肩を落とした璃央に、セイジはフォローを入れる。

「大丈夫だ。シフト後の姿はリンカーが成長可能な姿だ。もう少し成長出来る！」

「どうせ……現状、小さいですよ」

フォローになっていなかった。

「全体のバランスは悪くないのだから、そこまで落ち込むことでもないだろ？」

「じゃ、じゃあ、星司さんが知ってる他の女性転生者の方も、こんな感じなんですか？」

問われて無言。セイジの目が泳ぐのを璃央は見た。

「い、いや、俺が知るの一人だか二人程度で、そいつがたまたま

……コホン」

咳払いを一つ。

「脱線させないでくれ」

「う、すみません。ともかく、転神はなしの方向で」

「ん。じゃあいくぞ？」

戸を静かに開ける。

中は明るく広い。学校の体育館としても使えそうだ。

所々にGearのロゴが入ったコンテナがあり、身を隠すのにはちょうど良い。コンテナの陰を移動して奥へと進む。

「先程の隠れるのは使えないんですか？」

「あれは隠れることに徹するならいいんだが、状況に合わせて対応するには、ふさわしくはない。ある意味、迷彩服にも劣る」

答え、コンテナの隙間から奥を覗く。

「な……んだ？ あれは」

セイジが驚きを漏らす。同様に奥を覗き見た璃央が息を飲む。

奥に、巨大な人影が胡座をかいて座っていた。

それは、鋼鉄の板を皮膚に持つ巨人。塗装はされておらず無骨に

青い皮膚を晒し、頂垂れるように座る。その腹が魚の干物のように開き、人らしき姿が巨人の胎内から伸びる無数のコードで繋がっていた。

繋がれる人は時折、ビクンビクンと跳ねている。跳ねるタイミンに連動しているものを探せば、巨人の胎内に向かわないコードが一本あり、その先にはガラス状の筒を備えた箱に繋がっている。

ガラス状の筒には虹色に光る球体が浮かび、筒が箱に押し込まれる時に繋がれている人が跳ねている。既にすべて押し込まれた筒は二本。現在、三本目が半ばまで入ったところだ。

セイジは確認がてら魔力の流れを確認する。

まず人。巨人へと魔力が流出するだけで逆はない。あれではもう枯渇して死ぬだけか。

巨人。どういう仕組みかは分からないが、人体に流れる時と同様のコースを保って魔力が流れている。魔力は色々混ざりすぎて人なのか超越者なのか判別がつかない。

(というか、あれは……超越者なのか?)

次にあの箱をと視線を動かして頬を引き皺らせた。

虹色の球体は神魂にしか見えない。神魂から抽出したと思われる魔力がコードを通じて巨人に流れ込んでいた。それは他の魔力と混ざって別物に変換されている。

「ReHumanProject?」

「りひゅうまん………なんですか?」

セイジの呟きを拾って、璃央は首をかしげる。その時、倉庫内に設置されていると思われるスピーカーから声が響き渡った。

【YahYah! ごカップル、入場来場センキューでえす】
「なに?!」

セイジは見回して、カメラを見つめる。熊の木彫りが抱えていた。【どうです? ツカサ君が見たら狂喜しそうな魔構ロボ。ご子息ならやはり父同様、旧暦然のロボット好きなんでしょうか?】

魔構はいいですよねえ。重力だのエネルギーだの空想科学でしか

プロテクト済みの装甲だよ？ ただの公式もない破壊エネルギーじゃ傷なんかつかないって】

耳障りな解説だ。

（マテリアルの効かない装甲？ それだけ硬いと方ほっ！？）

巨人の裏拳に吹き飛ばされる。防御は間に合わず、コンテナに叩きつけられた。

「ぶっ！」

着地。骨は……折れていない。

爆発。巨人が大きく仰け反った。

どこからか璃央が放った一撃が効いていた。

（やはり源理は効くか。それでもあの装甲にほとんど防がれるが）

「だが、いい威力だ」

仰け反り巨人に隙が生じる。

巨人の背後の回り込み、左足の関節部分に冷氣から構成したマテリアル、青い輝きを放り込む。装甲の下が瞬間凍結された。

「エンチャント・パワー」

左にガントレットを出現させ、拳を握り込み「フンツ」と殴りつける。巨人が左足を滑らせたように体勢を崩し背中から落ちてくる。コンテナに飛び乗ってこれを避ける。

ずきりと左拳が痛む。骨が逝ったようだ。

（こいつ、力はそれほどでもないが、硬さは異常だ）

右に柄を出し、琥珀の刃を構成する。

（斬りつけても効果はないだろうが、戦いようはある）

急激な魔力の増大を感じ、巨人から距離を取る。巨人に、紅蓮の雨が降り注いだ。それは豪雨となって巨人の装甲をやや溶かす。

（さすがに魔力運用は上手い。父さんから習ったものが、記憶の半覚醒とビー玉崩しで今になって目を覚ましたか）

コンテナに剣で傷を付けて移動を開始する。

壁を切り、床を切り、コンテナを切り小さくても確実な傷を周囲につけていく。これはマーキングだ。

地を揺らす咆吼に爆音など響いていては、ここが問題の場所と喧伝しているようなものだ。

「正義様、配置完了しました」

先頭に立って戸を前で待機する青年に敬礼をして、隊員が報告をする。

不破正義（ふわ まさよし）。九曜頂不破の長男、烈士隊の中でも精鋭百人を率いる軍最強と呼ばれている男である。

正義は背に背負った大太刀を抜き放つ。

「中が静かになり次第突入する。何者が戦っているか知らんが、巻き込まれる訳にはいかん」

「承知致しました」

漁夫の利を狙え、それが上からの命令でもあった。

「地を這い進み絡め取れ　火蛇」

璃央が放つ紅蓮の蛇が、放り出された巨人の右足に絡みつき、立つことも出来ずにもかく巨人をジリジリと引き寄せる。

巨人は上半身を起こし、胸元がカパツと開いてそこに虹色の輝きが集中し出す。

「あれはイカン！」

セイジはコンテナを蹴り飛ばし、巨人の頭にブチ当てる。と同時に、虹色の太い光線が璃央のいる位置よりも上へと解き放たれた。

カツと光る虹の光線は、コンテナの反動で天井までを焼き切つていった。空いた穴から陽光が降り注ぐ。

【H A H A H A、神魂砲（仮）の威力はどうですか？】

おっと、そろそろ時間のようです。この分じゃミヒヤイル君も目的果たせそうにありませんし、今回、僕は帰らせていただきますね？】

「ろいどてめええええええええええ、ぜってえええええころすつうつうつうつうつう」

【無理無理、だってもう機内ですから。

でも大丈夫、君のデータはちゃんと受信してますから。
ではツカサ君の坊やもまったねえん】
途端、スピーカーが爆散した。

ロイドの戯れ言は気にならないが、神魂砲という名前には興味を覚える。巨人の大暴れで床に落ちて転がるあの箱は、神魂入りの筒を既に二本使用済み。それとあの光線が連動しているとすれば、少なくともあと一発は撃ってくるはずである。

（使用される前になんとか）

セイジは消失した天井を見上げ、璃央へと視線を移す。降り注ぐ陽光がスポットライトとなって璃央を照らす。

ハツとして巨人を見れば、巨人が獯猛に嗤ったような気がした。巨人が上半身だけでバウンドして起き上がり両手について固定。再度、胸元に輝きが出現する。

その行動は予想外。だが、巨人が飛び上がったせいで位置はズレた。

セイジは長剣をコンテナにぶつけて破碎させる。

「咲き乱れるガーランド！ 葬送の花環よ！」

柄だけの剣を下から上へと振り上げる。

壁から、床からコンテナから、琥珀の輝きが起爆し、琥珀の粉塵を巻き起こして無数の極薄の壁が生まれ出る。それらは巨人の全身を突き刺し切り刺し滅多切りにして固定する。串刺し刑の如く押し上げられ歪な花環を作り出す。

「あれは」

璃央は明神裏で見た虐殺者二人が両断される場面を思い出す。自宅の襲撃時に見た攻撃よりも、こっちの方がしっくりくる。

セイジはユラリと巨人と璃央の間に立ち、右手で左肩を掴むように構える。

巨人は固定されて尚、反らされた上半身をググツと無理矢理戻そうとする。胸の輝きはまだ途絶えていない。

セイジはその様子をまっすぐに見定める。そして、一気に自分を

脱ぎ捨てる。
「シフトだ」

セイジを中心に半神化とは異なる威圧感が吹き荒れる。
紫の瞳はより暗く輝き、金色の髪はより明るく輝く。
璃央は胸元のお守りがぼおつと光を灯すのを見る。

「明星、夕星、来い」

押し殺された怒りを吐き出すその言葉は低く、鋭く、聞く者の臍を鷲掴む。

天井を突き破り、二筋の銀光がセイジの前に浮遊するように止まる。それは二振りの直剣。一振りを口で噛み、一振りを右に持ち、柄頭同士を叩きつけて連結。両刃の槍へと姿となる。

「我の名は天津甕星。この名を札に黄泉路を逝け」
宣言。

琥珀の壁の隙間へと踏み込み、超至近距離で開かれる胸へ向けて投げ槍の構えを取る。

「死ぬのはためええだ！ 化け物めええええええええええええ！！！！」

「穿ち貫け、カカセオ」

放たれる銀光と虹色の光線が激突。拮抗は一瞬。天津甕星は腕を振り抜く。銀光が巨人の胸から頭にかけてを飲み込んで背後に存在していた倉庫の半分もろとも吹き飛ばす。

銀の閃光が空へと消えていった。

銀光は消え、倉庫は半壊し、陽光が照りつける。

倉庫を囲んでいた烈士隊の姿が露わになる。突然の大破壊に隊員達は腰を抜かしてガタガタ震え、出現した巨人の下半身とその前で振り抜いた姿のままの白衣の青年を凝視する。

ガラスの割れる音がして琥珀の壁が一斉に砕け、残された巨人の身体が地に落ちる。中からコードに繋がれ声も発すことの出来ないほど衰弱したミヒヤイルが投げ出された。

その身体は顔も腕も機械化されており、煙を立ち上らせている。赤く光る目が巨人の上を吹き飛ばした張本人を見上げ、張本人はそれを見下す。

「貴様はただでは殺さん。この国の法で、裁かれる」

吐き捨て、背を向け歩き出す。璃央の下へと。

璃央の前に立ち、一度目を閉じて開けば威圧感は消え、髪と眼の輝きも元に戻る。同時に璃央のお守りも光を失った。

「がんばったな、リオ」

「星司さんも、お疲れ様です。でもずるいですよ？ シフトなんて」

「俺はいいんだ。少し老けるだけだからな」

璃央はセイジの左腕を見て、手を添える。

「まだ私では治すことは出来ませんが、痛みを消すくらいなら」

戸をゆっくりと開け正義は中へと入り込む。

音を立てず、陰を進み、進んだ先でソレを目撃する。

天宮璃央と白衣の少年。そして、璃央が少年の腕に触れた時、彼女の周囲の陽光が強くなったことを。

「これでよし、です」

「動かないぞ？」

「だから治ってませんって。で」

璃央とセイジは共にコンテナの陰へと視線を送る。

「仕事しろ」

「仕事してください」

揃ってそう言った。

エピソード

烈士隊はほぼ廃人と化したミヒヤイルを連行し、半ばまで神魂を差し込まれた箱を回収していった。

正義は厳しい表情でセイジと璃央の前に立つ。

「九曜頂天宮璃央、状況を説明していただきたい」

「え、九曜頂？」

正義の言葉にセイジは思わず璃央を見る。その視線を受けて、璃央は苦笑した。正義はセイジを睨みつける。なんだこいつは、と。

「星司さんだつて九曜頂じゃないですか。そんなに驚かないでください。」

説明もなにも、こちらの九曜頂日崎星司さんと共に、転生狩りと九曜天宮の屋敷を襲撃した犯人を討伐しにきただけです」

「九曜頂……日崎？」

正義は胡散臭そうにセイジを見る。その視線に、セイジではなく璃央はムツとする。

「お祖父様が保証してくれますし、九曜頂クラスの保証がほしければ、九曜頂神籬籠也さんにお聞きすればよろしいかと」

「いえ、九曜頂天宮殿のお言葉を信じます」

敬礼で答えた。

「それでは私達はここで失礼させていただきます。よろしいですね？」

「はっ、承知致しました」

正義は敬礼を続け、足早に立ち去る二人を睨み続けた。

「ピー……！」

もの悲しい鳴き声を上げて、グリフォン型幻獣がセイジと璃央の前に降り立った。そこに向けて十数名の烈士隊員が殺到してくるが、璃央の姿を見つけると急ブレーキした。

「天宮様！ その幻獣は危険ですのでお下がりを！」

忠告に、璃央は「危険なんですか？」とセイジに訪ねる。

「キーンは元々そんなに戦う力は持っていない。まだ子供だしな」
まだ納得のいっていないらしい烈士隊を下がらせる。

「キユ！」

「怒るなよ。子供なのは事実だろうが」

「キユキユ」

「そりゃ、まあ、そうだが」

「キユイ」

幻獣は璃央を見つめる。

「ええつと？」

「俺と君を乗せて飛んだら成長を認めろと」

「乗れるんですか？！」

璃央の言葉に頷き、璃央を前にして幻獣の背に乗る。二人を乗せて幻獣は飛び立った。

東京の町を見下ろして感動する璃央。それをセイジは優しげに見守った。

やがて天宮の屋敷に降り立つと、幻獣は二人を下ろして姿を消した。

屋敷には央輝と澄がバイク共々集まっていた。

「お祖父様、ただいま戻りました」

「うむ」

セイジは澄に「よくやった」とねぎらいの言葉をかける。

「大変でしたが、ちゃんと乗りこなしましたよ？」

「往復出来たのが証拠だな」

「はい！」

「もし覚悟があるなら、ミスロジカルに来るといい。渡航手段はこちらで用意する」

「マジですか？！ じゃ、じゃあ、夏休みに行っても？」

「クエストは受けずに空けておこう」

「やったああああ……って、なんか師匠、感じ変わりましたね」
飛び跳ねたかと思うと、唐突にヒソヒソ声でセイジに囁く。近づいた澄に、璃央が若干柳眉を逆立てた。

「そんなことはない」

「本当に？」

「本当に」

セイジは澄から離れて央輝の前、璃央の隣に立ちミスロジカル魔導学院の学生証を渡した。

「転生狩りの犯人は逮捕。今回の件に関わった神祇官はまとめて一掃され、ギアの関係者は逮捕前に国を出た。」

なんにしても、クエストは終了じゃな。護衛の任はこれで解く。学院に戻りたまえ」

央輝はセイジの学生証にクエスト終了の判を押した。

「ああ。短い間だったが世話になった」

「星司さん、私も澄と行ってもいいですか？」

「俺は構わないが……」

二人とも央輝を見る。見られて央輝はヒゲを撫でた。

「ふむ。どうせなら、夏休みの間だけの短期留学もありじゃな」

セイジは小さく頷き、璃央は本当にうれしそうに表情を輝かせた。ほんの数日前までは見ることもなかった、孫のうれしそうな顔であった。

epilogue: tab

アメリカへ向かって飛ぶ個人所有の飛行機で、ロイド・ギアはノ

ートパソコンでデータをチェックしていた。

と、モニターが暗転し、銀刺繍の黒いローブを身につけ、顔をベネチアンマスクで覆った怪人が表示された。

【サイクロプスは回収されたぞ】
機械的な音声がパソコンから漏れる。

「そのようだねえ。彼も案外甘い。跡形も残さず消してくれると思っただんですがねえ」

【あの傭兵はこちらで処理する】

「そうしてもらえると助かります」

【天照はどうする？ アレは確実に覚醒した。時が経てば神魂を使いこなすぞ？】

「その方が面白そうですね」

まあ、しばらくは、そちらも手を出さないように。

なに大丈夫です。かの悪神はそちらでも確認出来たのでしょうか？

もう天照を護る者は神州には入ってこられません。月読が戻る前に片は付きますね」

【アレを使うのか】

「ええ、アレです。今回のデータが役に立つでしょう。散財の甲斐ありますね」

【道楽者め】

「どうせなら、道化と呼んでほしいものです」

【理解出来ん】

モニターが再び暗転し、怪人の姿は消えた。

【理解など不要です。僕はただ、この顔を楽しんでいるだけなのですから】

エピローグ（後書き）

一章終了です。お疲れ様でした。

魔剣の使い手

イギリスはロンドン、ドッグズランにて建造中の巨大人工島にそれはある。メルカード財団が経営する治癒魔法研究所（WizMEDic Labo）である。

治癒魔法は魂の幻想魔法、魂幻の下位魔法とされ、未だ解明部分は少なく目下研究中とされている。この研究所はその治癒魔法を専門とする研究所である。

研究所のベッドで、東洋人の少年が一人、昏々と眠り続ける。その横で、金髪翠眼の小柄な少女が椅子に座る。その背には一對の純白の翼が生えている。

少女はミスロジカル魔導学院の制服である群青のブレザーとグレイのスカートを着用していた。

膝の上では携帯電話を握りしめている。着信記録では直前に『bro.Seiji』とあった。ドアが開かれる。

少女は腰を浮かせるが、入ってきたのはスーツの上に白衣を着る女性。見るからにガツカリして着席する。

「失礼だぞ、ラフィル・エル」

少女、ラフィル・エル・ヒザキは「すみません」と女性に謝る。

女性は少年の傍らに立ち、持ってきた紙の束に目を通す。

「外傷はすべて治癒済だが、やはり精神がここにはない」

「脳死のようなものでしょうか？」

「精神の死亡か。それとも違うな。脳死が確認された場合、マインド系は一切かけることさえ出来なくなるが……」

この少年には作用する。

「それと……いや、これはセイジ君が到着してから話すか。担当も遅れているしな」

そう言って、女性は隣のベッドに視線を移す。そこには少年の所

持品が置いてある。数は少なく、身元を確認する物は、唯一、赤黒く変色した天宮学園の制服のみである。学生証はなかった。

(しかしこの少年。似ているな)

かつて出会ったある男によく似ている。年頃としては息子かとも思えるが……。

「ラフィル・エル。君がこの少年を外傷完治させるのにかけて時間は？」

「そうですね……、半日でしょうか。治りが異常に早かった気がします」

「治療には聖歌を？」

「それが私の治療方法ですから」

にしても早すぎる、と女性は思う。

服の切り刻まれ具合に出血量。死んでいてもおかしくはない。

ラフィル・エルの使用する聖歌は対象の自然治癒能力を数倍速にする。瀕死であれば基本、死の瀬戸際を防衛するようなものである。(それが短時間で完治にまで行くのは、よほど相性がいいということだが、天使であるラフィル・エルと相性がいいとなるとやはり……あの男の、奴らの関係者なのか?)

少年は外傷が治癒した後も眠り続け、既に一週間経とうとしていた。その間、衰弱する様子は見られない。

「セイジ君からの連絡は？」

「昨日一度。その時点ではまだ神聖メシーカにいるとのことでした」
ふむ、と女性が一考しようとした時、窓ガラスがビリビリと震え、ゴーツと外で風が吹き荒れるのを聞く。建物がやや揺れた。

「軍の飛竜か？」

イギリス国防軍で使用される幻獣を予想するが、女性はかぶりを振った。ここらを飛行するには財団の許可を必要とし、今のところそういう話は聞いていない。

何者かが無断で通ったのだろうか。

「何にしても神聖メシーカからはキオーンを使っても三日はかかる。

君は少し眠りなさい」

告げて、女性は部屋を出る。

一方その頃、人工島の地下を縦横に走る地下道にセイジ・アステール・ヒザキはいた。

超高速の移動手段を神聖メシーカで確保し、ミスロジカル魔導学院には寄らず、まっすぐにこの人工島へと来たのである。かかった時間は僅か半日。ラフィル・エルへの連絡はまだしていない。止められていたからだ。

セイジは一人ではない。

白衣の下に緑のジャージでサンダルを履く。無精ひげは生やしっぱなしで黒縁眼鏡をかけた見るからに冴えない青年が共にいた。ボサボサの赤毛を申し訳程度に輪ゴムでまとめ、青い目は眠そうに細められている。

二人が向かうのは人工島の地下格納庫の一つ。通称、宝物庫と呼ばれている区画である。

「財団の幹部でさえここへの侵入は制限されてるんだけど、君ら、内定済の十三期生は総帥のお気に入りだからさ。ここへもこうして将が一緒なら入れるのさ」

「その分、よく働け、だろ？」

「まあね。さあ着いた」

そこは壁。壁に二十センチほどのパネルが備え付けられているのみ。

青年はパネルに掌を当てる。

【DEATH・ヴィクトル・ライコフ様の魔力を認識致しました】

【入室を許可します】

目の前の壁が一瞬歪んだ。

「はい、ご苦労さん」

青年、ヴィクトル・ライコフは歪んだ壁の向こうへ向かって歩き出す。セイジはその後をついていく。

到着する。そこは僅か三メートル四方の石室。最初に気がつくのはガチャガチャという金属音。

奥に干からびたミイラが倒れ伏し、ミイラは奇妙な両手剣を握りしめていた。

全長1.5メートルほどで水晶の埋め込まれた黄金の柄を持ち、赤黒い鞘に収められていて、剣は振動しガチャガチャと鞘を鳴らし続けていた。

セイジは剣の魔力を確認してみるが、すぐに顔を背けた。一目で気持ち悪くなったからだ。

「これは？」

「大戦以降、ありとあらゆる組織が躍起になって、アーティファクトやら伝承上の物品やらを収集している。まあ今更な歴史のお勉強みたいなもんになってしまったけど、メルカードは大戦以前からそれをしていてな。こいつはその成果だ」

「華美な柄だな。聖剣か？ 魔力は異常だが」

セイジの問いに、ヴィクトルはフツと笑った。

「そのミイラはね。こいつの外見に騙されて握った後、自分の家族も友人も何もかもを斬り殺しこの石棺に逃げ込んで果てた古代人さ。正体は分かるだろ？ そう、魔剣さ。」

確保出来たのはいいけど、怖くて誰も抜けなくてね。ずっと放置プレイ……じゃなくて、管理してたんだよね」

「魔剣、ね。で、別に俺に抜けというわけではないんだらう？」

「うん。僕が総帥から言われているのは違うね」

そう言っつて、ヴィクトルはポケットからクシャクシャになった紙を取り出して、セイジに寄越す。

汚いと思いつつも目を通し、「これは」と片眉を上げた。

「この剣はさ、もう一週間ほど、歌い続けてるんだ。雛鳥が餌を求めるようにね。」

「だからもう、管理部はね、餌がキター！ っで大騒ぎでね」
「餌って」

ヴィクトルは咳払いで誤魔化する。

「まあまあ、確保しずつと反応がなかったものが反応したとなれば、そりゃテンションも上がるよ。」

んで、テンションを上げた餌を寄越した君を呼びつけたわけだ。

学院に戻るのを後回しにしたらちやっつてごめんね。なんか怪我もしてるみたいだし、手早く終わらせようか」

セイジの左腕を見てそう言った。左腕はずつと力なく垂れたままである。

腕など気にせず、セイジは紙を見つめる。そこには、ラフィールに預けた少年が人工島に入った瞬間から、今から三十分前にかけて観測された魔剣のデータであった。

一週間前、神州東京の末広町において、セイジはあの少年と出会ったことを思い出す。

瓦礫に埋もれた町でロート・ラヴィーネの調査に来たセイジは、澄を確保した場所からそう離れていない場所である現場に遭遇した。木造の家屋は焼け崩れ、その前には十数名の小さな焼死体。傍らに日本刀を握ったまま焼け崩れた人の残骸。虐殺者達の行為の痕だ。そして、そこで焼け崩れ人の形をしていないナニカを抱きしめた血塗れの少年を発見する。ナニカは手らしきもので炭化した竹刀を握っていた。

その少年を今まさに斬首しようと刀を振り上げる黒装束がいた。考えるまでもない。すぐさま駆けつけ、振り下ろされた刀を、出現させたガントレットで防ぐ。甲高い金属音。刀を受けている間に、右に長剣を構成し左肩口を斬り裂いた。

背後で音を聞く。

左に小剣を構成し、今斬った相手を右で牽制しながら、振り向かずに肩越しに左を構えて背後からの一撃を受けた。弧を描いて左右をいなして両側の相手を斜め前へと持つてくる。ともに同じ黒装束。

(NINJA?)

見た目からそう連想する。

忍者Aは斬られた肩を押さえ、忍者BはAを護るように刀を構え、間合いを計る。

遠くからピー！ となにやら笛の音が聞こえたかと思うと、忍者二人は迷わず刀を収めて姿を消した。周囲を窺うが、それらしい気配も音もない。剣を収めて少年へと駆け寄った。

「生きてるか？」

「あり……が」

少年はそのまま意識を失い前のめりに倒れた。少年が抱くナニカはその反動で崩れ、炭化しかかった竹刀が地に落ちた。

セイジはしばたく少年を見下ろしてから、竹刀とともに少年を担いでその場を立ち去った。

（あの時のNINJAはなんだったんだ？ 烈士隊のようなものなのか？）

九曜頂のくせに神州の事情に詳しくないセイジは首をかしげる。

（そもそも、何故あの少年を襲ったんだ？）

謎は多い。とはいえ、とヴィクトルに答える。

「あんだ達のモルモットにするために、あいつを治癒させたわけじゃない」

思い出は一瞬。

「そうは言うけどね。彼はすごいよ？ 君の妹弟子のあの子、アリシア・ロードウェル。彼女同様、彼もまた剣に選ばれるタイプの使い手って奴」

「ソードマスター？」

「それだね。その資料にもある通り、彼を求めたのはこの魔剣だけじゃない。宝物庫に収められる剣の内、神剣以外のすべてが反応した。これは異常だね？」

今のところ、この魔剣以外が鳴いていないところを見ると、コレの貪欲っぷりに他の剣がドン引きしたと見ているんだよね」

(魔剣が反応し、NINJAにも襲われるか。魔剣というかNINJAの方はうちの父にでも相談した方が良さそうだな)

「うちの財団としては、あの少年に魔剣を抜かせてみたいわけか」
「本題を言ってしまうと、その通り。君が連れてきたらしいからね。君の許可がほしいんだ」

「俺が許可しなくても、本人を目覚めさせて直接許可を取ればいいのでは？ 目覚めさせたいから、ここへ行くよう指示したんだからな」

「案外お堅いね」

「魔剣に取り殺された奴がいることを聞いて、はいそうですかと渡せるわけがない」

「これは失念」

失念などと言ってはいるが、セイジの答は予想していたらしく、ヴィクトルはさして心外な表情はしていなかった。

セイジがその部屋に入ると、そこには総じて三人の人物がいた。

ベッドで、あの少年が眠っている。

ベッドの傍らにラフィル・エルが座って、コックリコックリ船を漕いでいる。

ベッドの傍らでビジネススーツの男性がタイムズ(英国新聞)を広げている。

「父さん？」

「うっ？」

ビジネススーツの男性はセイジの呼び声に振り返る。神州において、髪と眼が黒かった時のセイジを老けさせたような感じを受ける男性だった。老けていると言っても三十後半にしか見えないのだが。

「やあ、星司君。おかえり」

父・日崎司は新聞を畳んで隣のベッドに置いた。

その前で、ハツと目を覚ましたラフィルが右を左を見てから、入口のセイジを見て腰を浮かす。顔は輝いている。

「兄様、おかえりなさい！」

「ああ、ただいま。ラファイル。妙な頼み事で授業に穴を空けさせて悪かったな」

「いいえ、兄様のお頼みであれば、父様を殴り倒してでも駆けつけます！」

「えちよ、ひどくない？」

司、涙目。

「ところで父さん」

「璃央君との交際は」

「そうじゃなくて」

「なんだ違うのか（ホッ）」

「何故、安堵を？」

「え？ いやいや、べ、別に璃々君が怖いんじゃないんだよ？

本当だよ？」

司は前から異様に璃央の母親を怖がる。

「屋敷にいなかったが、会わなかったことは正解だったかもしれない。」

「いや、本当にそうじゃなくて」

「じゃあ、なんだい？」

「この少年を助けた時、少年はNINJAに襲われていた。あれは、烈士隊とは違うのか？」

「忍者？ ひょっとして、短い刀じゃなくてこんくらいの刀使ってた？」

両手をグツと伸ばして長さを伝えてくる。それは確かに忍者が持っていた刀と同じくらいの長さだ。

「じゃあ、それはおそらく、直毘衆だね」

「ナオビシユウ？」

「うん。彼らは本来、天照の転生者に仕える実戦部隊なんだけどね。大戦以降はもっぱら神祇院に従っているはず。」

お仕事は、諜報、伝令そして暗殺。黒々としてるけど、まあ、忍

者だしね」

「さすがに詳しい」

「そりゃ、まあ、お父さんも彼らに狙われたことあるしね！」

「何やったんだ、この人。二人の子供が親にそんな感想を抱く。」

「しかし、そっか、朱翠君を消しにきたかー」

「しゅすい……というのがこの方のお名前ですか？」

「ああ、なに？ ラフィールもーこの子、気になる？」

いきなり父が娘に絡んだ。

「そりゃ、まあ、その、不完全な治癒をってしまった方ですから」

「そういうことにしておこうかな。うん。」

この子は榊朱翠（さかきしゅすい）。星司君も榊朱禪（さかきしゅぜん）には会ったことあるでしょ？ ロウと一緒に」

榊朱禪。その名前には覚えがある。

セイジが師や妹弟子共々旅をしている時に会った相手である。師の友人。

「ヴァチカンの裏使徒、アポクリファ所属の剣聖」

「当たり前。ついでに言うと、ラフィールの姉妹、柚樹君の養父でもある」

ラフィールの姉妹と聞いて、セイジは義妹の羽に目が行く。

ラフィールには他に三人姉妹がいる。それぞれが異なる養父に預けられているが、この少年の父親がその一人らしい。そしてラフィールはこの司を養父としていた。

「ではこの方は、ユズのお兄さん？」

「んー、年一緒だから、どっちがとは分からないなー」

榊さんは柚樹君に剣を教え、朱翠君は榊さんに教わった剣で母さんの翠さんを護っていたらしいんだけど、その翠さんも去年亡くなって、その後は翠さんのお兄さんの家で暮らしていた」

詳しいな、とセイジは思う。

これは何かある。

「本当は翠さんのお葬式の時に取り取るはずだったんだけどね」

「そうきたか」

「うん、そうきた。」

榊さんからの依頼だったし朱翠君もOKしてただけど、ね。ミ
スロジカル入り。

翠廉さん……翠さんのお兄さんが無理に引き取ったんだ。で、一
家惨殺に繋がったというわけさ」

「父さんは彼が狙われた理由を？」

「いや、僕は、君から直毘衆のことを聞いてやっと合点がいったく
らいだね。榊さんは九割方の確率でそうなるくらいの予想はしてい
たっばい」

セイジが榊朱翠を助けたのは偶然だが、奇妙な縁はあったらしい。

「まあとりあえず、彼を起こそうか」

「だから起こせないから困ってるんじゃないか」

「空気を読めといったところですね、父様」

日崎家は親へのツッコミが容赦ない。ここにセイジの双子の妹が
加わるともつと酷い。

「誰に似たのやら」

まったくである。

セイジは隣のベッドに顔を向ける。朱翠の所持品を眺める。

制服、折れた携帯、財布、炭化して短くなつた竹刀。

試しに魔力を視て「ん？」と気づく。竹刀に魔力が宿っている。

司に言ってみる。

「し、竹刀セイバーか!？」

「絶対違うと思います」

「やれやれ」

「いつにもましてお父さんに敵しくない？」

空気を読まないからだ。

「このバンブーソードに彼の精神でも宿っているんだらうか？」

「そうなのかなあ？他にありそうな場所もないしねえ」

「魔剣……とか」

「魔剣はないかな。今のところ。」

まあ、彼が目覚ましてから、そこは話すよ。

よっし、じゃあ、ラフィル!」

いきなり名を呼ばれて「はい?!」と飛び上がった。羽がパタパタ動いて落下は遅い。

「朱翠君を起こすには体細胞の活性化は不可欠だからね。万全を期すために、今の内にご飯を食べてきなさい」

「は、はい!」

パタタと飛んで部屋を出て行く。

「で、星司君。竹刀の魔力は何個かな?」

「数か」

竹刀を持って見つめる。血のようにドロツとしたものと清廉な光の二つの力が存在する。若干、混じっているようにも見える。

「二個だ。少し混ざってるな」

「じゃあ潜って引つ張ってきて」

「ああ……なんだって?」

返事しておいて、耳を疑う。

「大丈夫。今ならラフィルいないから多少の無理も止められないよ。こういうことを見越して義妹を追い出したらしい。ラフィルは食事が遅いから時間はたっぷりある。

「サルベージ、使えるんでしょ? アウレアはしっかり刻んだって言うてたよ?」

「うん、まあ、刻まれたけどな」

璃央の時は魔力で生成した手を入れたが、潜れということは精神そのものを入れるということだろう。

「サルベージは本来潜るものではないけど、触診じゃどっちがどっちって見分けることが出来ないからね。まあ、せつちゃんは見分けるようだけど」

「グイオとは誰も比べちゃいかんだろ」

天才は伊達じゃない。

「しかし精神ね。まあ、やってみるか」

竹刀を額に当て集中する。まだ少し苦手がある。

やがて、竹刀に引き込まれていき、その大地に立つ。それは奇妙な幻想。

木造の家屋。壁に武本道場と書かれた板が打ち付けられ、中から「一、二、一、二」と幼いかけ声が聞こえてくる。

空は青空で、周囲に他の家屋はない。ただ、武本道場だけが存在している。

外に気配はなく、セイジは道場へと踏み込む。そこで、さすがのセイジも口を押さえて息を飲む。

焼けただれた幼い子供と焼けすぎて人の輪郭を保っていないが天宮学園の女子の制服を着たナニカが、榊朱翠と呼ばれる少年を組伏して、赤黒く腐臭を放つ塊と化していた。

少年は藻掻いて出ようとしているが、手をついた先から道場の床が崩れては生え崩れては生えと、無限の地獄のようになっていた。

かけ声は道場のそこら中から聞こえ、あの塊から発せられるものではない。塊から発せられるのはただ「熱い、熱いよ。兄ちゃん、

熱いよ」「俊、痛い助けて、置いてかないで」と呻いている。

「やめろ、やめてくれ。もう、やめてくれ」

少年はしきりにそう呟き嗚咽を漏らしながらも、ただ藻掻く。

【これはひどい】

父の声が頭に響く。

「それ一体なんて魔法？」

【今、即興で作った。名付けるとすれば、そうだな。あなたの夢に超介入、ドリーム イン】

「絶対に学会で言うな」

【いやいやいや、正確には】

「視界はどうなってるんだ？」

【んー、星司君の視界を借りてる形だね。だから、星司君がおにやのこの胸元とか見ると成長したなと思ってしまっわけ】

父の戯れ言を無視した。見ていないから。

【しかしこれは、直毘になんかされたねえ。獏でも埋め込まれたかな？】

「ドリームイーターか。となると、それを探して撃破だな」

【ご名答。武器は持ち込めてないから、素手でどうにかしちゃってね】

「もとよりそのつもりだ」

道場内を一周して、首をかしげる。それらしき姿がない。中央のアレが異常すぎて気にならないのだろうか。

【というより、あれがそうかな？】

「あれを素手でか」

両の手を見下ろす。

「左手が動く？」

【精神が傷ついてるわけじゃないからねえ。あれ、なんか光ってるね？】

父の指摘通り、左上でが緋色に光っている。やや暖かい。

思い至るのは璃央による痛み止めくらいだ。

「ふむ。アマテラスの本質は成長と浄化。いけるか」

というか、武器になりそうなのはこれしかない。

左手に右手を添え、この光を、宿る魔力を剣型へと変化させ右に握る。剣が一番しっくりくる。そして、異形の塊に向けて踏み出す。

敵意を向けた瞬間、子供の腕を繋げたような形状の触手が数十本と伸びてきた。

切り払い近づく道を模索する。

人や幻獣が相手であれば、相手の関節の裏に回れば隙は生じる。

だが、この触手は人体の腕が連結しているように見えて、関節の裏にも鞭のように攻撃してくる。その際、骨の碎ける音と塊からの悲鳴で不快な気持ちにさせられる。

切り払えば、緋色の炎に焼かれてボロボロと崩れるのだが、次々に触手は追加される。これではトカゲの尻尾切りではない。

「もう一振りあればな」

【お父さんがイイ物をあげよう！】

左手になんか生えた。

その外見はどう見てもハリセン。

「これでどうしろって言うんだ?!」

【あれ? まち……いけるいける!】

無責任なエールに口元を歪め、ハリセンを握りしめる。正直、父親の頭を張り倒したいセイジである。

襲い来る触手をハリセンでまとめていなして踏み込む。そして、

左下から右上への一閃。塊を斜めに斬り裂いた。

一瞬、塊の動きが止まる。

ゴツと音立てて、斬り裂かれた一線から上、上半分が燃え上がり唐突に弾け飛んだ。続いて下半分が炭化して崩れ去る。

【まだだよ!】

「分かっている!」

まだ天宮学園女子の制服を着たアレが残っている。

そちらとの間合いを計って向き直り……セイジは剣とハリセンを下ろした。

少年がアレを抱きしめていた。

強く抱きしめ、アレ……梢の姿を模したそれはボロボロと崩れる。

「俺が知ってる梢は、人を害したりはしない。梢の姿をしてるお前にも、俺が、させない」

抱きしめて、少年はそれにトドメをさした。

「おはー」

最初に聞いたのは父の声。

かぶりを振って起き上がる。

「終わったのか?」

見れば、少年はまだ眠り続けている。

「うん。朱翠君に精神は戻ってるね。見てごらん」

言われて確認。確かに精神を司る魔力が正常に働いている。

「しかしあれはない」

「ええ？ ちゃんと使えてたじゃないか」

司は朱翠の傍らでPDA（携帯情報端末）を操作しながら応える。司のそれは大戦の頃から愛用する物で、中には多くの魔法知識が詰め込まれ、これを使って新しい魔法を構築したりしている。

「お、おまたせしました」

ラフィルが帰ってきた。

「おかえり。あ、精神見つけて戻し終わっちゃった」

「ええええー!？」

父の告白にラフィルはその場でorzの格好で頂垂れた。

「まあまあ、精神戻しただけで肉体への再リンクは完全には終わってないから、そこはラフィルやっちゃってよ」

「ううう、がんばましゅ」

ラフィルは少年の傍らに立って、羽を大きく広げた。

「〜」

天使ではない司やセイジには認識出来ない歌を歌い出す。

羽が純白に輝き出し、やがて朱翠も光に包まれる。光は暖かく、歌は心を静める。

朱翠の瞼が微かに震える。

涙が、落ちた。

そして、その目が開かれる。

「てん……し？」

最初に映るのは聖歌歌う天使。光と暖かさ、一生懸命に歌う姿に目を奪われる。

その暖かさに落ち着き、吐息。

義妹が発するのは裂帛。同じ天使でもここまで違うのかと聞き入ってしまう。

歌が終わり、光が収まる。

朱翠は身を起こした。

「やあ、おはよう」

自分に挨拶をしてきた男を見てすぐに相手が誰なのか思い出す。

「母さんの葬式では、どうも」

両親の知り合いで、父に身元引き受けを頼まれた人だ。

「確か……日崎、さん？ 九曜の」

「九曜の、はいらないよ。そっちはこっちの長男に押しつけたから、なにがあつたか思い出せるかな？」

「はあ。それは……」

あの末広町の事件の日、目を覚ましたら既に町は燃えさかり、力も入らず満足にも動けなかつたところを赤黒いコートの男に襲われ、自分をかばった従姉は燃やされ、従姉と一緒にいた幼なじみを逃がした。

その際、全身を切り刻まれたがトドメを刺されずに放置され、従姉の骸を抱いたところあたりから記憶が曖昧だという。

気を失う直前に白い誰かに助けられたことは覚えていた。

「あとは、夢でそちらに……」

「そっか。目を覚ましたという寝てたのかな？」

「下校途中で新作玄米茶の試飲をした辺りからどうも体調が」

「ハハハ、どう考えても、それだねえ」

何かしらの毒を盛られたらしい。下手をすれば、先程の化け物はそこから寄生したのかもしれない。

朱翠はセイジに頭を下げる。夢で助けられたことをよく覚えている。そして司から、神州からここへ送つたのもセイジと聞いて、また頭を下げた。

「治癒したのは、そのラフィルだな」

「柚樹と同じ、天使？」

改めて、ラフィルという天使をマジマジと見つめたら、照れられた。

司に顔を向け、本日何度目かの礼をするために頭を下げる。

「日崎……さんたちには助けてもらってばかりだ。その、本当に、

礼……」

「いやいやいや、いいつて礼なんて。

とりあえず、葬式の時と同じことを聞くけど

うちくる？」

確かに同じことを聞かれた。

養子ではない。ホームステイのようなものだと言っていた。

神州を離れ、ミスロジカルで学び、鍛えろと父も言っていた。

自分ではどうしようもなかった状況を打破したのは、彼らで、彼らといることは自分にとってプラスにもなると判断出来る。

(それにもう、帰る場所はない)

伯父が神の血ほしさに従姉の梢と付けようとしたことは理解しているし、それを責めようとは思わない。少なくとも、一年は本当に家族だった。だが、その家も人も既に亡い。

「俺でよければ」

「よつし、決まり。用事を終えたらさっさと我が家……ああ、いや、学院だねえ」

長期の休みでもないかぎり、マラザイアンの日崎家にはお掃除妖精、シルキーしかない。父母はミスロジカルの研究施設で寝起きし、兄妹達も寮にいる。

「君の部屋は一年前から確保して、ずっとシルキーのお世話状態だからすぐ入れるよ。」

服はとりあえず、学院の制服を用意させよう」

「ありがとうございます、日崎さん。」

それで、以前話に出たアレは」

「アレね。もちろん渡すよ。」

ってことで、地下格納庫へ行こうか」

地下格納庫と聞くと一つしか思い浮かばない。

「魔剣か？」

「星司君、ヴィクトル君と既に見てきたんでしょ？ どうだった？」

「どうと言われてもな。いくらあれが彼に反応しているからといって、人を取り込む物のとくに連れてくのは、な」

「ソードマスターと聖剣魔剣の関係性は常人の及ぶところじゃないんだよねえ。まあ、大丈夫だよ。そこはメルメルさんとも一致してるから平気かな」

「いつ聞いてもその愛称とあの魔女が合致しないのは何故だろう？」

メルメルさんとは、セイジの両親やその世代の知り合い達が、メルカードの魔女と呼ばれるメルカード財団の総帥を呼ぶ時に使う愛称である。

司は「詳細は行く道で」と三人を地下へと連れ出した。

「朱翠君が神州に狙われたのは、神州とヴァチカンとの政治状況の悪化が関係してるんだ。榊さんは悪化することを見越して、早い内に朱翠君を神州の国外に出そうとしたわけだね」

政治状況の悪化と聞いて、三人が考えるのは一ヶ月前に行われた、神州軍と大中連軍との戦闘である。場所は尖閣諸島。

両軍の戦闘に、大中連と戦時同盟を結んだヴァチカンから正十二使徒カノンが派遣された結果、神州軍が敗北している。

これにより、ヴァチカンへの怒りを燃やした神祇院が裏十二使徒・榊朱禅の息子が神州にいることを突き止め、報復としてこれを殺害しようとしたようだ。

「報復で敵の家族に手を出すなんて」

ひどいとラフィルは言うが、司は首を振る。

「指示したのは神祇院の上だろうね。榊さんの血が有する技能を考えれば、神祇院だってそれはほしいと考える。」

でも、朱翠君は聖者とのハーフだけあって、その存在を上神々が認めたくなかっただけでもあるね」

「聖者の血を引く者　メサイアンか」

セイジは呟いてラフィルを見る。ラフィルはパタパタ飛びながら朱翠を眺めていた。その目に映る感情は……セイジは首を振って顔を背ける。自分では理解出来ないという風に。

「榊の血とは？」

「うん。星司君はデータ見せてもらったでしょ？」

「剣の歌？」

「そう。榊さんの血統は剣に愛され、その力を限界まで引き出す力」
魔剣の石室に入る。

「そしてメサイアンとしての力が呪いに耐え抜く防壁となる。」

さあ、朱翠君。これがメルメルさんが見つけ、榊さんが君に渡す
ことを約束させた、君を全力で呪う（愛する）魔剣だ」

司は呪うことを愛するという。

魔剣は所有者を愛し過ぎて、所有者に栄光を与えた結果、取り殺
してしまうものなのだ。

「君、本当にそれを所有するつもりか？ 父さんや魔女の戯れ言に
付き合うことはないんだぞ？」

「心配ありがとうございます。でも、これは、母の葬式の時を決め
てあったことなので」

「そうか」

四人が入り、ヴィクトルもいるので石室は窮屈だ。最大の窮屈原
因は、ラフィルの羽なのだが。

ラフィルはハツと気づいて、いそいそと石室を出て入口から中を
窺う。

ヒョッコリ頭を覗かせる養女を「かわいいなあ」と眺める養父が
いた。

「通報する？」

「勘弁してやれよ。なんか変なことしたら、息子の俺が引導渡
すから」

ヴィクトルとセイジの会話に、司は遠い目をした。

朱翠が魔剣の前に立つと、剣の振動が強くなりミイラが崩れ去っ
た。

右手で柄を掴む。

「くっ」

剣が勝手に鞘から抜けようとする。これを許してはならない。許せば、支配される。

鞘からは、自分で抜かなければならない。

グツと左手で鞘を掴む。魔剣が大きく、身悶える。今度は抜かせまいと鞘に入ろうとする。

(大丈夫、大丈夫だ)

心で魔剣に語りかける。

グググ、と剣を抜き始める。その瞬間、鞘から赤黒い液体が飛び出し、朱翠の腕に絡みついた。それは先端を鋭くして皮膚に食らいつく。

(ああ、俺はお前の愛を受け入れる。もっと来い)

次々と液体は噴出し足下に血だまりを生み、朱翠を引き込もうとする。液体が外に出る量と反して、鞘から赤黒さが消えていく。

現れるのは、柄の黄金と相対する銀装飾の鞘。

(まだだろ？ 俺のことは気にするな。もっと、もっと吐き出せ) 血だまりは身を起こし、朱翠の腹を貫いて潜り込む。腹が、熱い。徐々に剣を抜いていく。今はまだ半ば。

セイジ達は朱翠の髪が赤く変質するのを見る。

腹が熱く、中で暴虐を尽くし痛みを振りまく呪いに、朱翠は口元を笑みに歪め、剣を抜く。残るは切っ先。

そして、鞘から抜ききって、剣を振り下ろした。

途端、腹の中で暴虐を尽くしていた痛みと熱が消えた。代わりに、目の色が血の色を帯びた。

朱翠は鞘を見る。

(俺にお前は華美過ぎる)

思えば、鞘はただの黒金へと変色する。

(洋剣。それもいいが、俺の使いやすい姿は……分かるだろう？) 剣は長さそのままに大太刀へと姿を変える。

(さあ、お前の名前を教えてください)

魔剣が震える。

「テイルヴィング……嗚呼、良い名だ」
呟き、自らの指から血を与え、鞄に収めた。
髪と眼の色が、黒に戻っていった。

マラザイアンへの直通魔構列車の個室で、セイジとラフィールと朱翠は向かい合って座っていた。

司は人工島でまだやることがあるらしく、この列車には乗っていない。

「朱翠、でいいの？」

「構わない。ラフィール・エル？」

「ラフィール。家族なんだから、そう呼んで」

ラフィールの注意に朱翠は頷く。

「星司さんとあともう一人いると聞いた」

「刹那姉様だよ。姉様は、かつこいいの」

「かつこいい？」

「うん」

うれしそうにラフィールが頷くと羽がピクピク動く。感情に連動もしているようだ。見ているとなかなか面白い。

「朱翠、君の神州での名はなんというんだ？」

「名？」

朱翠は自分の身を見下ろす。

群青のブレザーにグレーのチノパン、ミスロジカル魔導学院の制服だ。天宮学園の制服を含めて所持品はすべて研究所で捨ててきた。朱翠の今の所持品は、制服と傍らに立てかけた黄金の柄を持つ大太刀のみであった。

「俺はもう、榊朱翠以外の何者でもない」

「そうか……これからよろしく」

セイジの挨拶に頷く。

魔剣の呪いを受けた影響か、朱翠は少し無口になった。
魔剣を押さえた朱翠はその場でセイジに剣を捧げた。

大したことはしていないと言うセイジだったが、すべては明神裏で助けられてこそだと強情だった。武士道とは報恩に生きてこそだと。

「どうやら、榊朱禅の教育らしい。」

その場は結局、その申し出を受けた。家族として生活していれば、やがて変わるだろうという考えもあった。

「なんにしても、たった二週間で色々変わったもんだな」

セイジは駅弁の蓋を開けて、そう言った。

超鬼ごっこ in ミスロジカル(前書き)

舞台は西の果てに移ります。

超鬼ごっこ in ミスロジカル

槍の使い手と大剣の使い手がクロスアーマーで身を固め、対峙する。

槍の突きを下から振り上げた大剣で弾く。弾いた勢いのまま、槍の下を刃で走らせそのまま首を落とすに行く。

弾かれた槍を引き戻さず、弾かれた勢いを殺さず、使い手は自らを軸にして槍の柄頭で大剣の使い手を背後から叩きに行く。上半身は仰け反り、鼻すれすれを大剣が通り過ぎた。柄頭は大剣の使い手の背を叩き、相手は宙を飛ぶ。

大剣を地に立て柄の上を飛び越えて方向転換。槍の使い手を身体の正面に置く。

石畳が火花を散らした。

アクロバティックな動きに槍に使い手は失笑。周囲からは歓声が沸く。

ここはミスロジカル魔導学院の地下闘技場。

一年十五期生に模擬戦を観戦させるための授業中である。

「梧桐、この馬鹿たれが！ 模擬戦でそんな動きするなと何度言えば分かる！」

担当教官である和装の老人が怒声を放ち、十五期生達をびびらせた。

怒られた大剣の使い手、梧桐秋は青みがかった黒髪をガシガシ掻いて「すみません！」と謝った。そしてニヤリと悪ガキのように笑った。

「でもですよ？ 戦闘では何があるか分かんないんすから、時にこういうのも必要だと思います！」

敬礼をしても言うことは反論。

槍を肩に背負った茶髪の少年は「あゝあ」と溜息。

「ほお？」

老人が腰から木刀を引き抜いた。

「やべ！」

秋は大剣をその場に残し、回れ右をしてスタートを切った。

「待たんか、この馬鹿たれが！ 魔法学理論応用の単位取ったからと余裕こきおって！」

老人が草履を脱いで秋を追っていった。

残された茶髪紅眼の少年、ホリン・マルキスは十五期生に向かつてこう言った。

「じじいが馬鹿殴って帰ってくるまで、自習」

ミスロジカル魔導学院はコーンウォールの西端セントマイケルズマウントにある。

校舎は石造りの城だが、地下に広大な空間を有し、そこに地下闘技場や円卓会議室などが備わり、地上部分には学科棟、研究棟が詰まっている。城の離れに当たり場所には学生達が生活する学生寮が四棟あった。

学生寮は玄関と食堂と談話室を挟み男子寮と女子寮が繋がっている。

ここは第三学生寮の談話室。

秋は黒髪碧眼の少女、神薙琴葉に治療されていた。

リボンで束ね肩より前に垂らした長髪からは、シャンプーの香りが匂いたつ。休憩中を呼び出されて少し機嫌が悪い。

治療といっても魔法ではない。絆創膏を貼られているだけである。ただし、薬学専攻の琴葉が調合した薬を塗っているため治りは早い。

「はい、おしまい」

パンツと肩口に貼った絆創膏を上から叩く。

「いつて」

秋は思わず悲鳴を漏らす。

「まったく、模擬戦の規定外の動きをした挙げ句、お祖父様に反論するなんて」

「いいじゃねえか。神薙教官の予想以上の動きとかやってれば、龍也さんより強くなれるかもしれねえだろ？ なあ？」

秋は後ろで缶紅茶を開けたホリンに話を振る。振られた方は肩をすくめた。

「やるなら十三期生だけの戦技でやれ。といつても、今は全員単位取り終わって、選択してる奴はいないけどな」

「じゃあ、自主練どうよ？」

「悪いな、俺はこれからガーデンだ」

飲みきって缶を捨てる。

「なんかあつたのか？」

「最近、西から偵察機とやらが飛んでくるせいか、妖精達が不安がっついてな」

「妖精の騎士様は大変だな」

「まあな。夏休みまであと二週間程度、休みまでには戻る」

「じゃあ、しばらく相手減るな」

秋は残念そうに肩を落とした。

「そろそろセイジが戻ってくるはずだ。あいつに相手してもらえよ」
「うっん」

「嫌なのか？」

「嫌じゃないんだが、あいつ、本気でやらねえからさ。」

一度、去年に本気でやった時、次やるなら卒業試合だって約束してから、ほんつとに本気でやりやがらねえの」

それに対し、ホリンだけでなく琴葉まで吐息。

この二人に共通することと言えば、セイジ「アステール・ヒザキ」という転生者と幼少の頃からの付き合いがあるという点だ。いわゆる、幼なじみに当たる。

「そりゃ、そういう約束するのが悪い」

「そうよね。本気でやる予定の相手と予定を無視して切磋琢磨するほど、セイジは熱血君ではないものね」

「まったくだ。」

だが、良かったな。卒業試合ではガチで本気のあいつとやれるぜ」
慰めにもなりはしない。

「くっそ、こうなったらあと半年ほどであいつの弱点見つけてやるぜ」

「ま、がんばれよ。ロードウエルの奴と切磋琢磨してみればいいと思うぜ。」

結局のところ、あのお姫様がセイジの戦術を一番理解してるからな。同門様々だ」

じゃあな、とホリンは自室に荷物を取りに行き、そのまま談話室には寄らず学院を出て行った。

「なあ、ガーデンって俺行ったことないんだけどさ」

「そうね。あそこはオベロン王の許可を持たない者じゃ、クエストさえ受けられない場所ですもの。」

行ったことがない人は無理矢理立ち入らないかぎり、一生行ったことがないで終わるでしょうね」

小ブリテン島。大半を森で覆われ、妖精と神々が暮らす地はガーデンと呼ばれ、交易用に開放された港以外は森……妖精王国に一步でさえも立ち入ることは出来ない。例え入ることが出来ても、方向感覚を狂わされて出られずに彷徨うのがオチだ。

「琴葉もたまに行ってるよな？」

「魔薬の材料をティタニアから受け取りに行ってるわね」

「俺も行ってるいい？」

「いいんじゃないかしら。許可もないから入ったら二度と出てこられないでしょうけれど」

「樹海かよ！」

秋は富士の樹海をイメージして言ったが、あながちそのイメージも間違いではない。

「星司もあそこ入れるだろ？」

「レンメルは出入り禁止になったけれど、ホリンと私と星司にとってみれば、あそこは子供の頃からの遊び場なのよ。」

星司はああいう外見だから妖精達にモテモテで、ティタニアの覚えも良すぎてオベロン嫉妬で大変だけど」

「レンの出入り禁止の理由が想像出来そうで怖いな」

「彼らの使う初期の魔構家電を勝手に改造。出力十倍にして暴走させた拳げ句、吐き出されたCDが大木切り倒して大目玉。そのまま出入り禁止になった。」

と言ったら信じるのかしら？」

「悪い。予想の斜め上だった」

セイジのルームメイトであり、四人目の幼なじみは幼い頃からの発明好きでしたと。

「で、そのレンは？ 姿見ないけど」

「クロケット本社に呼び出しよ。ついでに試作品何個か持ってくるとか言っていたわ」

「試作品の辺りが本命と見た」

「どうかしら」

唐突に携帯を取り出す琴葉。メールが着信していたらしい。

「星司、今日は実家に泊まるそうよ」

「マジで？ それじゃ戻りは明日か」

「でしようねえ。ラファイルも一緒なのだし、そんなに休ませるとも思えないわ」

「明日か。帰ってくる時間次第で全校競争の餌役が変わるか？」

「諦めて餌役に集中なさい。今年は多いのだから、気を散らしたら怪我するわよ」

パートナーの忠告に秋は「へいへい」と答えて叩かれた。

翌朝、学院地上戦技グラウンドには体操着に着替えた二百名余りの一年である第十五期生。それぞれの勝負服に着替えた三名の第十三期生の姿があった。

グラウンドを囲む城壁の上には、このイベントに参加しない他の第十三期生と来年餌役になる第十四期生が、紅茶とスコーンを用意

して観戦ムードである。

【さあ、やってまいりました！】

理論筆記や魔法実践、戦技などなどテストを終えてやってここのイベント、ミスロジカル魔導学院夏の陣！ 学内競争超鬼ごっこ！ 逃げる最上級生を捕まえた生徒にはもれなく、ブリテン連合王国女王陛下への謁見と立食パーティーへの参加券が与えられます。はりきりましょう！

解説はこのわたくし、第十四期生ブライアン・オットーと】

【第十三期生神薙琴葉がお送り致します】

【では今回の逃げ役、通称餌役の紹介といきましょう。

まずはこの方、十三期生ロウエンド、シユウ・アオギリ先輩です】
青いレザージャケットにレザーパンツ、鉾付ナツクルグローブにライダーブーツ。そんな格好の秋が城壁上の解説席に手を振った。

【あれ、すべてプロテクトがかつてるから、第五階級までの魔法撃つても無効化されるのよね】

ミスロジカルでは源理魔法は公式の威力別に階級が分けられており、最大第七階級まで存在している。

【ミスロジカルでの最大を考えると、一年生では、ほぼすべての魔法が封じられていると見ていいでしょう】

【つまり、構想で強化して追い詰めるしかないわね。しかし、いつ見ても、いつの時代のヤンキーなのかと】

「聞こえてんぞ、てめえ！」

秋が息巻いているが、解説席までは聞こえてこない。

【次はこの方、十三期生ハイエンド第二位にしてコーンウォール公の姪御様であらせられるアリシア・ロードウエル先輩です】

男物の赤い剣士服の上に右手に白金のガントレット、左手に竜紋の赤いナツクルグローブを装着した金髪碧眼の少女は、自分の紹介に吐息。ガントレットの甲には蒼珠が埋め込まれ、陽光にきらりと光る。

肩まで伸びた髪を百合装飾のバレットで留めた少女は物憂げに解

説席を見上げた。

【おや？ 調子でも悪いのでしょうか】

【彼女は出自言われるのが嫌いだから、あなたを睨んでるのよ】

【こ、これは失礼を！】

【尚、馬鹿とお姫様は愛用武器が危険すぎるため、今回は素手での参加となります】

【はい、ではラスト。この方を捕まえますと、特別報酬としてゴロン・ヘイヴンの1日貸し切り権が与えられます。

では紹介します。十三期生ハイエンド一位にして学内最強の魔法使い、セツナ・ヴィオ・ヒザキ先輩です！】

白いチャイナドレス、両手に茶のナックルグローブをしたグラマ―な金髪紫眼の美少女が腕を組んで紹介を待っていた。長い前髪を掻き上げて、そのまま説席に向けて親指を立てた。

【ところでどうしてチャイナドレスなんでしょうか？ いえ、見る分はとてもセクシーで目の保養にはなるのですが】

【幼少時、うちの母がプレゼントしたところ、大層気に入ってしまったようなのよ。

ちなみに、普段、あの上に更にブルゾンとか着てるわね。どっかセンスはおかしいと思うわ】

【普段、制服やチャイナドレスの上に白衣を着ている、カンナギ先輩にだけは言われたくないと思います】

琴葉はここでセツナとアリシアを見比べる。

【こうしてみると、セツナのせいでアリシアの胸の薄さが本当に強調されてしまうわね】

「ほ、ほっとけ！」

アリシアは胸を隠し顔を赤くして叫んだ。

【確か、先輩方の勝者はホリン・マルキス先輩とセイジ・A・ヒザキ先輩でしたね】

【伝統で行けば、この二人も餌役になるはずだったのだけど、生憎、二人とも留守ね。

片方は今日辺りにでも帰ってきそうなのだけど】

【間に合いませんでしたね。一年生が見えない壁で迷宮化した学院で半ベソかくの見たかったんですが】

【そういえば、あなた、去年星司がお遊び協力で作った迷宮で、マジ泣きしてたわね】

【良い思い出です。それにわたくしだけではないですよ？】

観戦ムードの同期生達に「ねえ？」と振って、皆が「こっち見んな！」といきり立った。

【さて、では本イベントの原則において、餌役側の半神化、シフトは禁止。

追う側はハンデとして禁止されているものはありません。単騎駆け、団結、裏切り、なんでもありですね。

尚、ここセントマイケルズマウント内でのみのものですので、島から出るのは禁止。周辺の海に叩き落とされても失格となりますので【ご注意を】

このイベントの趣旨は、ようするに、最上級生と最下級生の実力の差を実感させることにある。

最上級生の成績上位者を相手にして、どれだけの時間で捕まえられるか、または捕まえられないかで判断される。

紹介時に言われたロウエンド、ハイエンドとは、入学時の成績で分けられた所属クラスのことであり、クラスは卒業まで変わらない基準は入学試験の平均点である。

これまでの学院で、ロウエンドで学年上位に入ることとはあまりないため、それを知る一年達の間からは驚きの声が漏れている。もっとも、十三期生ロウエンドは総勢十三人。全員が上位半分以内に入っているのだが。

【まあ、この人数だと、敷地や通路の狭さを考慮して動かないとならないわね。下手をしたら肉の壁、誕生よ】

【時には協力も必要ということですね。

さあ、そろそろ時間です！ 皆さん！ 張り切ってどうぞ！】

観戦席となっている城壁付近に複数のパネルが出現する。それは学院中に設置されたカメラの内容を映す物である。

琴葉は打棒を手に取り、解説席上のゴングを無表情に叩いた。年度前半期最大のイベントが開始された。

「グラウンド・ブレイク！」

開始早々、そんな叫びが響き渡る。と同時にグラウンドが割れた。速攻で秋を追おうとしていた集団を分断するような地割れで半数が飲み込まれ、気絶。

セツナが地面から手を離し、立ち上がる。

「悪いね。数は減らさせてもらったよ」

握り込まれた拳骨には三種のマテリアルが輝き、一カ所に空白が出来ていた。やがてそこに黄のマテリアルが再構成される。

一年生、啞然。

その際に三名は離脱。学科棟、地下、地上に散開。やや遅れて持ち直した一年達がバラバラとそれぞれを追っていった。

【二百名中八十名が開始即気絶！いきなりすごいのかましてきましたね】

【集中も練り込みもなしに使用したようだから、すごいのは見た目だけね。足止めの効果として絶大だけど】

【そのようで……おっと、ここで十七名が棄権した模様。やはり地割れが原因か】

ドンツ！ ドンツ……ドカッ！

学科棟で爆発が起きた。二度、三度、と続き、地響きに揺れる。

映像では強化されて光るモップを手にしたアリシアが、一年生が立て続けに撃ってきた『フレーム・バレット』を打ち返し、廊下や壁で爆発している光景が流れた。

ある映像では唐突に急成長した雑草に足を捕らわれて身動き不能になった一年生達が映る。その間をリターンしてきた秋が走り抜けていった。

抜けた先で待ち構える三名を、

一人はスライディングで倒し、

一人は飛び起き首に足を巻き付けて絡め落とし、

一人は起き上がる流れで肘打ちで悶絶させ、

全滅させてから駆け去った。

ある映像では地下闘技場では、セツナが掴みかかる一年生を優雅に避けた後、吹雪を発生させ闘技場が雪に埋もれた。

【えー、ただいま開始から三十分が経過。手元の資料に寄りますと、第十五期生残り十九名。なんと開始三十分で十分の一まで減っています。第十三期生、容赦なし!】

【けれどこれで、例年通りの数になったということにもなるんじゃないかって?】

例年の新入生は大体二十から三十名程度。今期の新入生が多いだけで本来はこれくらいの数である。

【残った一年もなかなか見事に先輩の攻撃を避けているようだし、一人くらい捕まるんじゃないかしら】

【捕まった最上級生はイベント後の宴会で散財ですから、その分全力。その猛攻から三十分生き残るのも実力の内ですからね。

現段階で生き残ってる学生にはそれなりの内申点が加味されるのも伝統と言えるでしょう】

超鬼ごっこはここから更にヒートアップしていく。

一方その頃、マラザイアンからセントマイケルズマウントへの橋を渡りきった三人がいた。セイジとラフィルと朱翠である。

「今日だったか」

白金のバイクを押していたセイジは歓声に包まれる校舎を見上げて呟く。

「あれは?」

「前半期を終えての実力判断、を建前にした前半期テストのストレス発散イベントだな。」

超鬼ごっこ。

参加資格は、追う側は一年であること。追われる側は、三年の成績上位者であること」

ルールを説明し、在学中、どの立場であれ一度しか参加出来ないことも教える。

朱翠はラファイルを見る。見られた方は首をブンブン振った。

「参加したら死んじゃうよ?!」

必死な様子に朱翠は「確かに」と頷いた。

ラファイルは飛ばずに歩く時、いきなり何も無いところで転ぶことがある。追いかけっこななどそんな余裕もないだろう。

そのことは一日一緒にいて、なんとなく理解出来た。

【えー、ただいま開始から三十分が経過。手元の資料に寄りますと、第十五期生残り十九名。なんと開始三十分で十分の一まで減っています。第十三期生、容赦なし!】

解説が入る。

そして、城壁を凄く早さで横に駆け抜けていく秋の姿を三人は見る。

セイジは「ふむ」と一考。

「朱翠。参加したいか?」

「出来るのか?」

「バイク置いてくる。教員観戦席で待っていてくれ。ラファイル、連れてってやれ」

二人と別れて、セイジは研究棟へと消えていった。

見送り、二人は観戦席へと向かう。

「ところで、刀どうしたの?」

聞かれて、朱翠はワイシャツから首に提げたネックレスを見せる。そこには剣型の銀十字が付いていた。

「ふわあ、便利だね」

コクリと頷く。

「壁を走っていたのは……梧桐秋?」

「知ってるの？」

コクリと頷く。頷いて腕を組み一考。

前の名は制服と共に捨てた。ここで古い知り合いに会うのもなんとなく嫌である。

教員席に到着。

いかにもな魔法使いローブを羽織る老人の前に来る。

ゴート・マルクス、ミスロジカル魔導学院院長である。

「ツカサから話は聞いておるよ。我が学院はシュスイ・サカキ君の入学を歓迎する」

「感謝」

学院長はウンウンと満足げに頷いた。

「質問がある」

「何かな？」

「一部の人間に顔を知られたくない。どうすればいい？」

朱翠の素性については聞いているため、その質問も妥当な物と判断する。

「顔を隠したまえ」

「では」

待ってましたとばかりに、黒金のマスクを出現させる。それは顔の下半分を隠す鋭角なマスクであった。

マスクを出すと、朱翠の髪が赤に目が血の色に染まる。

「ひよっとして、鞄？」

ラフィルの問いに、コクリと頷く。

セイジがやってくる。

学院長から説明を受け「了解」と頷いた。

「顔を火傷したから隠してる、という設定！？」

「ラフィル、あまりシュウの持ち込んだアニメばかり見ると、単位落とすぞ」

「あっ」

兄の忠告に、羽が力なく下がった。

「それで学院長。シユスイをあれに参加させたい」

「行ってきたまえ、一年生」

「許可は出た。魔剣は抜くなよ？ これを持っていけ」

セイジは朱翠に木刀を渡す。神州土産である。

朱翠は木刀を掴むと、手元から赤黒い液体が木刀を浸食し赤黒い木剣が誕生した。

シャツの裾をズボンから出し、ネクタイを緩め、第二ボタンまで外し、マスクを装着。

「行ってくる」

そう言つて、城壁からグラウンドに飛び降りた。

「ヒザキ君は参加せんのかね？」

「兄様は腕が治つたばかりなんです。無茶させないでください！」
学院長の言葉にラフィルが猛反対した。

【えー、ただいま学院長から人員の追加が発表されました。
本日付で転入しました一年生シユスイ・サカキが追加参戦すること
のことです】

解説が学院長からの電文を読み上げると観戦席が沸き立った。一年生が十人を切っていたからである。

学院長の隣に腰を下ろしたセイジに学院長は話しかける。

「例の神州からの件。再来週には実施されるそうだ」

「結局、何人くらい来るんだ？」

「十程度。」

ただ、リオ・タカミヤとスミ・アオギリの二名は来られないことになった」

「神祇院が動いたかな？」

「おそらくな。君としては想定範囲内だろう？」

「結果として、ここの技能を学ぶ彼女の護り手が増えることになる。

渡航手段は分家に用意させた。南米沖周りでの一週間足らずの航海になるから、まあ、そろそろ出航と行ったところか」

「神聖メシーカ経由は危険になったからのう。」

いつの時代も、結局のところ、アメリカの動向が世界に影響を及ぼすものだ」

老人と少年はやれやれと肩をすくめてグラウンドを見下ろす。ここではちょうど、秋の進路上で朱翠が上段の構えを取っていた。

観戦席から「OH SAMURAI」と歓声が上がった。

進路に見たことのない生徒が赤黒い剣を上段に構えているのを見て、秋は攻撃手段を考える。

（この勢いでスライディングしてもいい、轢いちまっても、いや、跳び蹴りでいいか）

勢いを緩めず、跳び蹴りの射程に入り「食らえ！」と跳躍。

生徒は微動だにしない。

「吹っ飛べ！」

蹴りがヒットする直前、目にも留まらぬ速度で振り下ろされ、秋は撃墜された。

上からの衝撃で地面に叩きつけられついでに頭を打ち、自分の勢いでそのままスライディングしていつて、止まる。

「あんの、馬鹿者め」

観戦席で和装の老教官が頂垂れた。

【おおっと、アオギリ先輩、撃！ 墜！ されたああああああああああ！！！！】

勝負は決まったと大歓声が沸き起こる。

しかし、朱翠は振り返り、秋に向けて正眼に構えた。剣の先で、秋がゆらりと立ち上がった。

「じじい！ 桃華を貸せ！」

秋は観戦席、和装の老教官に向けて手を伸ばす。

老教官は腰から木刀を抜き、放り投げる。地に落ちる前に、秋はそれをキャッチした。

右手一本で木刀をブンと振り、剣先をダラリと垂らし 消

えた。否、スライディングで離れた距離を瞬時に詰め、木刀を叩きつけてきた。

朱翠はそれを受け流す。

罅迫り合いなど一切せず、叩きつけられる木刀を自らの木刀の反りによって、すべてを外へと受け流す。

秋の動きに型はなく、朱翠の動きは木刀の形を最大限生かす型である。

互いに無言。

(狙われている)

朱翠は受け流しながらそれを感じ取る。

(いいだろう)

狙い手の思惑に乗ってみることにする。

次の秋の一撃を、左手を滑らせ峰に添えて受け、流さず反動を利用して背後に飛ぶ。秋は朱翠の突然の変化についていけず、木刀を振り抜いた。そこに。

銀の一閃。

秋に直撃する直前、一閃はパンと弾けて網目となり秋の身体を拘束した。

沈黙は一瞬。ワツと学院が歓声に包まれた。

【な、なんと、サカキ君が離れた隙を狙って飛来した攻撃で、アオギリ先輩、確保おおおお！

確保したのは】

映像に学院尖塔の上で弓を構えた少女の姿が映し出される。そこにはカメラが設置されていないため、望遠での撮影となる。

【あのような距離から狙い撃つとはなんて腕でしょうか！

ええっと、あれは……十五期生ロウエンドのリマ・タカミヤさんです！】

解説の直後、歓声の中で、セイジがガタツと立ち上がる。

「兄様？」

兄の反応に、ラフィルが心配そうに見上げた。

「あれがリオの妹……ツクヨミのリンカー？」

視力を強化し、リマの魔力を確認したセイジは「なん……だと……？」と奥歯を噛みしめる。

【おや？ サカキ君ここで棄権だそうです。

この時点で第十五期生は、アオギリ先輩を確保したりマ・タカミヤさん以外が全滅！

超鬼ごっこ！ しゅうつうつりよおおおおおおお！！！！

【はい、拍手】

この後、唯一の確保者である天宮璃摩は学院長直々に表彰され、拍手と歓声の下に閉幕した。

表彰されて拍手を受ける天宮璃摩に、セイジは怒りを込めた視線を向け続けていた。

齒車の動向

ワシントン、ホワイトハウスの大統領執務室にて

二人の男が執務机を挟んでいる。

一人は初老の男、マイケル・ラックスター合衆国大統領。

一人はメタルアーマーを着込んだ青年、トロイ・ギア。ワールド・ギアの私設武装部隊の責任者である。

「ミスター・ギア。君達をもたらした兵器により、神聖メシーカもはや風前の灯火のようだな。感謝している」

「はい、大統領。祖国のために役立つことが出来、ロイド共々光栄であります」

ワールド・ギアがアメリカ軍にもたらした新兵器、鋼鉄の巨人サイクロプス。これが十体投入されて3日で神聖メシーカの国土を半分掌握した。

神聖メシーカは未だ多くの超越者達を有するが、国土を半分失わせたことで、アメリカ軍も勢いに乗っている。これを指して風前の灯火と言っているのだろう。

「さて、今日来てもらったのは、ロイド殿の情報についてだ」

「神州の動向ですか」

「うむ。あのサイクロプスを僅か二人で倒すリンカーの存在。そして、記憶を封じたと喧伝していた彼らの女神が蘇り、軍備の増強を開始したという話。事実かね？」

「はい、大統領。私もデータを確認し事実であることを誓います」
正確には違う。

東京の湾港で行われたサイクロプスの戦闘は、神州政府の与り知らぬことであり、天宮璃央が天照の記憶を覚醒させたこと自体、未だ知る者は少ない。

軍備の増強は疑心暗鬼が生んだ、ただの噂である。

それを知って尚、この部分的な情報を事実として納得するふりをする。

「サイクロプスを大量に派遣したとして、勝てると思うか？」

「残念ながら、難しいかと思われます。」

記録映像において、リンカーが一人シフトを行った後、サイクロプスは一撃で破壊されておりました。神州に対抗するには現状の戦力では足りないでしょう」

大統領は唸る。

神州と国交を絶つてからはや十五年。

神州が戦力を整え次第、攻めてきて広島長崎の報復をされる。そんな古い恐怖を抱き続けてきたが、今まさにその時が来たと震え上がる。

「ですが大統領、提案がございます」

「聞かせてくれたまえ」

「はい、大統領。」

我が国は幻獣兵器が不足しております。兵の生存率を上げるためにも幻獣兵器を補う必要があります。そこで我々ギアは、ガーデンを攻め幻獣を捕獲することを具申致します」

「しかしガーデンには幻獣の他にも神々がいるのではないかね？」

「その点のご安心を。彼の地の神々は世界中に散らばり、各地でそのリンカーを確認しております。」

我がアメリカの進行を彼らが阻むことなど出来ません」

「ふむ……。よろしい、では空挺母艦ハルパーを用い、ガーデンを強襲したまえ」

「はい、大統領。お任せを」

トロイは敬礼し大統領執務室を退室した。

副大統領オフィスにて

恰幅の良い壮年の男が応接ソファに座る。その向かいにはロイド・ギアの姿があった。

壮年の男はエドワード・ギア、副大統領である。

ロイドは携帯をしまつとケタケタ笑った。

「あの無能、トロイの案を飲んだってさ」

「ふん。ガーデンを攻めて、たとえ妖精を筆頭にする幻獣を捕獲したところで、人的損害は計り知れまい。」

彼の地の間近にはミスロジカルが存在するのだからな」

「ま、あの無能の脳内には、ガーデンの防衛はイギリス国防騎士団くらいしか思い至らないだろうさ。」

まさか、学生が戦力になるとは思ってもいないだろうからねえ」
「意図的に彼らのことを隠しておいて、よくも言つ。」

時期的に見て、ガーデンとの戦闘に入る当たりに神聖メシーカの反撃も始まる。軍は東と南で大打撃を受け、大統領は責任を取らされよう」

狙うはトップの失脚。大統領が失脚すれば、権限は副大統領に引き継がれる。

ギアの狙いはそこにある。

「好き勝手したかったら国の頭取らないとねえ？ 財団はそのためにエド叔父さんに援助してきたんだからさあ」

「分かっている。すべてはギアのため。我々はただ歯車であれば良いのだ」

オフィスの屋上で、ロイドはワシントンという町を見下ろす。

（違うな、叔父さん。）

我々ではない。歯車は君達でいいんだ。

我々、指揮者の演奏会のね）

指で銃を作り、ホワイトハウスに向けて「バンッ」とやってみた。

月下の再会

学院地下闘技場は、今、派手に飾り付けられ、全校生徒、全教員が集まっていた。

「超鬼ごっこの終了により、ミスロジカル魔導学院は前半期の正規授業を終了とし、明日から二週間後の夏休みまで補習帰還する。補習を必要としない生徒は夏休みに片足突っ込むことになるが、本格的な帰省はまだしないように」

乾杯と言おうとして、またマイクを握る。

「言い忘れておった。」

本学院が夏休みに入る頃、夏期講習を受けるために遠く神州から、短期留学生在が十名ほど来ることになった。興味のある生徒は力比べしてみるのも良かろう。

ということで、乾杯」

「かんぱ〜〜〜い」

大宴会が始まった。

長いテーブルの隅に朱翠が座り、その隣にラフィルが座っている。

朱翠はまだマスクを着けている。

「取らないと食べられないよ？」

朱翠は秋の姿を探し、教員のテーブルにおいて、桃華を貸した老教官の前で正座させられているのを確認してマスクを外す。

そんな朱翠の周りに学年関係なしで生徒達が集まる。

お前凄いな、と。

「膂力の剣士が技巧の土俵に降りてきた故の結果だ。先輩の憂慮に感謝」

よつするに、慣れない得物で自分のレベルに合わせた梧桐先輩に感謝する、という意味だ。

朱翠は棄権したものの、最上級生相手にほぼ互角の戦闘を行ったとして、健闘賞とやらをもらっていた。

朱翠は渡された目録を見て、首をかしげ、ラフィルに渡す。

「どういう意味」

「えと、クロケット工房で試作品のテスター権を与える？」

「あ、これは兄様も同じもの持つてるよ」

第十三期生レンメル・クロケットが、学院から預かる工房で発明する魔構具をテストする代わりに、優先して専用装備を与えられる権利を与えると書いてあるのだ。

「レンメル先輩は兄様の幼なじみなの。」

しかも、魔構企業クロケット社の若社長でもあって、試作品を学院で研究・開発しているんだよ」

ここで声を潜める。

「魔剣を抜いて注目を集めるより、レンメル先輩に予備の武器を作ってもらえって、兄様が言ってたよ」

セイジの伝言を聞き、朱翠は頷いた。

「星司さんはどこに？」

聞かれ、ラフィルは周囲を見回す。そういえば姿がない。

十三期生ハイエンドの生徒が集まる机にはセツナしかいないし、ロウエンドでは琴葉しかいない。そこでもう一人いない人物に気がつく。

天宮璃摩の姿がなかった。

中庭の噴水横のベンチで璃摩は月を眺めていた。

髪をポニーテールにし、ブレザーを腰に巻き、ワイシャツの袖を捲る。髪は姉同様に濡烏色。璃央とそっくりではあるが、姉に比べて、より女性的な身体をしている。

月下で銀の燐光を纏い、気持ちよさ気に月光浴をする。

「ボクに何か用です？」

璃摩は暗がりを見ずに言葉を紡ぐ。

外見だけでなく、声もよく似ている。違うのは、印象。

記憶の覚醒前はおとなしげ、しかし記憶の覚醒後は凜として聞く者の心を惹きつける姉。

悪戯っぽい口調で聞く者をからかって遊ぶような感じでありながら、どこか突き放しているような冷たさ。それが妹。

月下に、セイジは璃摩へと近づく。

「人にあらず、巫神にあらず、そしてリンカーにあらず」

その言葉に璃摩は、声の主を視界に収めんと顔を向け、確認。

「さりとてライナーにもあらず」

セイジは歩きながらシフトを行う。

「月読、貴様、何をした？ ここにいる理由はなんだ？」

璃摩はセイジの雰囲気が変わったのを見て、その魔力をセイジ同様に視て、蠱惑的に笑みを作った。

「ああ、甕星さん。幾星霜ぶりと言ったところですか？」

「問いに答える」

甕星は右拳を握りしめる。歩みは止めない。

「時を経て、ふさわしい器を得て、完全復活ですね」

「答えると」

ドスツと音を立て、右拳が璃摩の腹にめり込んだ。

「かはっ」

「言っている」

璃摩は噴水に落ちた。腹を押さえて上半身を起こす。

髪が銀に染まり、水滴が、髪を流れる。

璃摩は青い目で、ただ甕星を見上げる。その頬がやや赤い。

「ボクはただ、甕星さんと再会するために、そのためだけに人の子として生まれただけです。人の腹を経てね」

「何故だ？」

「あなたが好きですから。あの時もそう言いましたよ？」

あの時というのを思い出す。

天津神相手に反乱を行い、力を封じられる少し前のことだ。
吐息。

「貴様、男だろっ?」

言われ、璃摩は自分を見下ろして、アハハと笑った。

「ボク、男に見えますか?」

あなたが愛したヒルメの姿をしているでしょう?」

甕星の頬が引き攣っていく。

「ボクはね。甕星さんや姉さんと違って、神話の時代ってやつからずっと生きてきたんだ。あなたがまた生まれるまで、ずっと待って生きてきた。」

日崎の血統が天津甕星の再誕を目的にしていたのは知っていました。だから、監視することは簡単でした。

まあ、ここまでかかるとも思っていましたけど」

(ずっと生きてきただと? どういうことだ?)

話し方も表情も、すべて昔のまま。

「なにをしたと聞かれて答えられることと言えば、再誕をやっただけかな?」

転生の準備段階にあった姉の神魂を盗み、母の胎内に共に入り、同じ容姿、同じ性別の双子として生まれました。

しかも璃央と違って、こんなにも、ちゃんと成長している。ヒルメとして完成しているでしょう?」

ここで璃央を引き合いに出す。

「ええ、ボクはあなたが璃央に会ったことを知っています。姉の神魂が動き出したのが証拠ですしね」

「どういうことだ?」

「簡単な話です。」

神祇院が姉を封じる時に細工を施しました。

天津甕星から魔法をかけられた瞬間に、ヒルメの人格が蘇るように、ね。

天津甕星が、天照と会って、何もしないなんて考えられないから」

噴水に踏み込み、璃摩の胸ぐらを掴む。

「貴様、それが原因でリオが記憶に飲まれる羽目になったことを知らんのか」

「それは違うなあ。」

ヒルメの人格こそが、璃央を記憶の奔流から護る防壁になったはず。

それが、天宮璃々の胎内にいる時に、姉からされたお願いという奴ですからね」

璃摩は胸ぐらを掴まれたまま、甕星のネクタイを掴んで引き寄せらる。顔が、近い。

「だから、ですね？」

囁くように。

甕星は間近で璃摩の顔を見て硬直。

髪の色以外のすべてが、璃摩の言う通り、天津甕星としての記憶の中のヒルメに一致する。不覚にも見惚れた。その気の迷いは一瞬。その一瞬の隙に、口を吸われた。

時間が、止まる。

バツと璃摩から身体を離す。止まっていた時間はきっかり一分。

「お、おお、お前、な、なんてことをするんだ?! し、しかも舐められた?!」

驚きのあまりシフトが解けたらしい。顔が真っ赤にして、震えている。

「あれ? その反応 やった、甕星さんの新人生の初吸いGET」

ガッツポーズを決める璃摩。

セイジ、涙目。

「結果的に姉を助けることをしたんですから、これくらいのご褒美があってもいいんじゃないかと」

璃摩は噴水から出る。

自分の衣服をトンと指で叩くと、それだけではじめから濡れていなかったかのように、水分が消え、皺だけが残る。かぶりを振って、

髪を黒に戻した。

「お前、本当に、何をしにここへ来たんだ？」

セイジはかなりムツとした顔で問う。

「実を言えば、西の果てがとても面白くなる、と占いに出たものですから来たんですよ。あと、世界最先端の魔法とやらも興味合っ
たし。」

あなたと逢えたのは本当に偶然ですよ」

「お前がリオのそばを離れなければ、少なくとも、彼女が護衛を必要とすることに巻き込まれることはなかった」

「でも、必要としたから姉と出会えたのでしょうか？」

「それは……そうだが」

言葉を濁す。

結果は間違っていないが、納得も出来ない。そんな感じである。

「でも七年前、ボクは姉の近くにいたけど、誘拐は発生。結果はあなたも知ってる通り」

(やはり、あの時の矢はツクヨミか)

セイジは盛大に溜息を吐いた。

「ああ、お前の落ち度を言ってもしょうがない。

あの時、俺も周りを押しつけて、天津神どもを敵に回してでも彼女のそばに残っていれば。そう思うことはあった。終わったことだ、もう言ってもしょうがない」

璃摩が一步、セイジに近づいた。セイジは一步、後ろに下がる。

さらに、一步ずつ。

璃摩が「えー」と漏らす。

「乙女ですか」

「やかましい。近寄らすと何するか分からん奴、警戒する方が普通だ」

吐息。璃摩は肩をすくめた。

「ちゃんと問いには答えましたけど、別の意味で警戒させてしまったようで、残念です。」

ボクは先輩になら、腹パン入れられても全然構わないですけどね」
唐突に声色を変える。

「頬を染めて言うことか!？」

「腹パン入れられて惚れた、でどうです？」

ボク、先輩相手ならいつでもどこでも、フルオープンでいけますよ?」

「何が言いたいのがよく分からん」

そもそも、天照のそばにいない月読に腹立てて接触したようなものだが、軽率すぎたと反省するセイジ。

(こいつの魔力が普通ではないことを確認した時点で、もっと慎重にやるべきだったか)

「問いの結果、答自体が納得出来ない場合はどうすればいいか知ってるか？」

「終わった結果がどうしようもないものなら、諦める。それが長く生きて発狂しないためのコツ。」

まあ、未練を残すのは自由だけど」

セイジは璃摩から二歩離れる。

「なら俺は未練残さずここを離れることにする」

「今は見逃しますけど、あとで覚えておいてくださいね。腹パン」

「そこかよ」

舌打ち。

悪いのは完全にセイジである。

セイジが立ち去り地下へと降りるのを眺めながら、璃摩は微かな痛みとともに熱を帯びる腹に手を当てて、うっとりとする。

たとえ痛みであっても、そこは触れられた場所には違いない。

「本当に、まさかこんな地の果てで逢えるとは思わなかった……カガト」

(今日までにここで見た現代の超越者達。

庭の護り手、北欧の魔法神、騎士の王、東の龍王、風の天使、それに、無銘と鸞星)

「ああ、梧桐先輩を止めた彼もいた」

楽しげに笑って月光浴を再開する。

ここなら姉の対などという立場とは無縁。

ここなら自分を隠して日陰になることもない。

「でもね、麿星さん。あなたも皆も覚えていない。姉でさえ忘れてしまった。」

姉とボクは父の右目と左目から生まれ落ちたモノ。似て非なる存在。

司るものは非ず、でも似ているが故に、弟、ではないんですよ？
誰が聞くでもない庭で、璃摩は寂しげに、そう呟いた。

チーム分け

翌朝、第三学生寮の談話室のソファで、セイジが死んでいた。

「ああああああああ」

向かいでは、ラフィルがセツナの髪を梳き、セツナはファッション雑誌を読む。

朱翠の姿はない。朝早く、老教官に連れられてどこかへと行ったらしい。

「昨日、どこかから帰ってきたかと思えば、キングフィッシャー一気飲みしたりして」

セツナは視線だけ雑誌越しにセイジを見る。セイジの死にっぷりは見事な二日酔いである。

「失恋したおっさんかつつの。」

十八になって飲酒解禁になったからって、あんな飲み方したらパに禁止されちゃうでしょ」

イギリスでの飲酒は十八からである。

「でも私、気づいたわ。亜神化すれば二日酔いしないという事実に！」

「わあ、姉様すごいです」

だからテーブルの一角が光っていたのか、と今更ながらに気がつく。

「二日酔いが治るまでが宴会だと」

「いや遠足じゃないんだから」

妹に突っ込まれつつ、ポケットから色とりどりの上生菓子三個と薬の瓶を取り出す。

「それが天幻の恩恵だとしても、入れ物の大きさからそれ以上の物が出てくるとビビる」

そう言っつて、桃花を模した練切を手を取った。

「あ、それ、昨日作ってたお菓子ですね。朱翠がネリキリとか言っ

てました」

「おいしい？」

「とっつても」

満面の妹を見て「そう」とセツナはそれを一口食べる。

「俺の傑作に何するんだ。食べて薬飲むんだから返せ」

「薬飲むならちゃんと食事でしなよ」

立て続けに二口三口と食べ尽くして、ごちそうさまをした。

「てゆうか、ラフィルは二日酔い治せないの？」

「父様は治るそうですが」

ラフィルはセツナから離れると、トコトコとセイジの下へとやってきてソファアに座り、膝をポンポン叩いて「どぞ」と言う。

兄はもぞもぞ動いて妹の膝に頭を乗せた。

「妹に膝枕させる兄ってどうなの？」

「五月蠅い」

ラフィルはセイジの頭を軽く撫でながら「
~~~~~」と聖歌  
を樂しげに歌う。

セイジが良い感じに微睡んできたところで、外が騒がしくなる。

「大変だ！ テレビをつける！」

セイジ達の座るソファアとは対角線上のソファアに生徒達がワツと集まってくる。

やや軽くなつた頭を押さえつつ、身を起こせばラフィルが支えてくれる。

セツナは座つたまま身を捻つてテレビに顔を向けた。

流れるのは火災の現場。燃えるのは、小ブリテン島。

ガーデンの名で、この場の生徒の誰もが記憶している、妖精王国の現在の映像であつた。

三十分後、学院長室では、学院長の他に老教官・神薙煉龍の姿があつた。煉龍は琴葉の祖父でもある。

「ガーデンには今、ホリンの奴が行っていたな。なんか連絡はあつ

「たんかよ？」

「鎧が襲ってきた。それを最後に音信不通もつとも、と捕捉する。」

「現在、妖精王国との連絡自体が取れなくなってるがな」  
学院長の表情は優れない。

ずっと息子として育ててきたホリンとの音信不通は、なかなか堪えているようだ。

ホリンとゴートに血の繋がりは無い。

それは二人を長く知る者皆が認識していることだ。それでも二人の仲は親子並には良い。ぱつと見、祖父と孫ではあるが。

「国防騎士団から連絡があった。ロンドンが巨人兵に襲われているとな」

「巨人兵ついていやあ、日崎の倅の報告にもあったし、神聖メシーカを追い込んだって話にも出てくるな」

学院長は頷き、一枚の衛星写真を机上に置いた。  
「アラン諸島より西に二十キロの地点で確認された」

老教官は何気なく見て、目を見開いた。

「おいおいおい。なん〜で、聖堂の置き土産がありやがる？」  
翼を大きく開いたドラゴンのような姿をした、巨大な空挺母艦。

胸にはアメリカの国旗が塗装されている。

「口からは数隻の空挺を吐き出している。おそらく、この空挺に巨人兵が積まれているのだろう。」

「こいつあ、日崎の奴が聖堂の赤い竜共々、でっけえ湖に叩き落としたりじゃねえのかよ。バラツバラにしてよう。アメリカの……なんつったっけか」

「スペリオル湖」

「そう、そこだ」

「回収して直したとしか考えられませんな。なにせあの国には」  
ギアがいる、と。

「こんなところにエンブレムつけちゃってよ。これ許してるってこと、

アメリカ公認の喧嘩ってことだよなあ？

戦後速攻、聖堂批判やつといて自分達は遺産掘り起こして兵器運用ってか」

「まあ、言っても仕方ありませんな。

今我々がやるべきことは大国批判ではなく、彼らを撤退させることです。国防騎士団がロンドンで耐えているなら、これを墜とせば光明が見える」

老教官は腕を組んで吐息。

「耐え抜いてくれつかねえ」

「ロンドンには現在、ツカサがいますし、それに、アレがある」

「本当に動くのかよ。魔構つつうより、九割方魔法だろ？ アレ」

「そこはメルメルさんの実力次第ですな」

学院長が「さて」と紙のリストを並べる。

「数名、クエストでいないのでチームを再編しましょう。基本は十三期生。他は立候補で」

「チームリーダーは、これとこれとこれと」

老教官は数名を選び出す。

「ロウエンドの第二班は全員分けですか」

「星司の奴はもともと司令塔だし、琴葉の奴は救護班が必要。

秋の奴は指揮官には向かねえが、ロードウエル指揮のチームに入れて突っ込ませる。おそらくこのチームなら、現状最速のストライカーズになるぜ」

学院長は老教官ご推薦の最速チームを確認する。

「アオギリ君にロードウエル君に……ほお、バーグシュタイン君。

アオギリ君、両手に花ですな。

なんにしても、ストライカーのみで組ませるとは。確かに最速かもしれないな」

「あと、この二人は入れる」

それは朱翠と璃摩。

「日崎の推薦だ。榊はラフィール・エルと組ませる」

「相性ですか」

「柁はあの信仰なき聖者の息子……メサイアンだ。メサイアン同士、これ以上の相性はない」

「いいでしょう。ラフィル・エルが前線に出れば、損害も減るでしょうしね」

「ああ、で次は天宮だが……」

そんな感じで、生徒達の再編が決められていった。

グラウンドに生徒達が集められる。

十三期生、クエストで不在のロウエンド三名を除き総勢三十名。全員が制服ではない独自の装備で身を固めている。

その後ろには十四期と十五期の生徒達が合計で百名ほど、学院指定のクロス・アーマーで装備を固め待機する。後方支援である。弓兵の中には璃摩の姿もある。

黒い龍鱗のチャイナドレスの上に白衣を着た琴葉が腰に手を当てる。

「いい？ 怪我したらちゃんと戻ってくること。自力が無理なら素直に下級生も頼りなさい」

「カンナギの治療受けられるなら怪我しなくても戻るぜ！」

「それはやめろ」

調子に乗ったハイエンドの男子に周りからツッコミが入り、琴葉が「よろしい」と頷いた。

「なんだよ、隊長アリシアかよ」

秋と赤毛翠眼の少女が頭を抱えた。

赤毛の少女は両腕に肩まである巨大な鋼色のガントレットを装着し、足には同色のグリーヴを履いている。他はタンクトップにスパッツという服装で、あまり防御を考えていないように見える。

「不満か」

アリシアが腕を組んでムスツとしている。

「命令違反したら、ソレでガチ殴るじゃん」

「しなければいい」

少女、ネコ・バーグシュタインがソレと称したのは、アリシアの剣帯の鞘入りバスタードソード。

「グラスキャリバーの餌食になりたくなければ、愚直に進め」

「へいへい」

秋とネコはやるせなく返事した。

秋が背負うのは巨大な剣というより槍だろうか。ロンパイアと呼ばれるその槍は、柄が長い大剣にも見えた。

「我々が進むのはベルファストからゴールウェイまでの街道ルート。途中、誰が襲われていたとしても、すべて無視して駆け抜けることが仕事だ」

「いやいや、そりや変だろ？ そいつら助けに行くんだからよ」

「助けるのは後衛がやってくれる。我々は我々以降の仲間が安全に進軍出来る道を確認することだ。やることを間違えるな。」

ゴールウェイには敵の上陸拠点の存在が確認されている。我々はそこを陥落させる。後ろは任せた！

街道ルートの中衛以降の生徒達は「任せて下さい！」と親指を立てた。

「てめえら、一人でも助けられなかったら、叩つ斬るかな」

「はい！」

元気よく返事する街道組を眺めて、青い龍鱗の武闘着を来た少年は溜息を吐く。

青い髪を風になびかせ、ボヘーツと立っていた。

「セレス、神化の触媒は足りてるか？」

セイジが少年、セレス・ウォルターに話しかける。

「触媒なくても大丈夫くらいまでには回復した」

「そうか」

セイジは紙袋を持って離れようとする。

「しかし空腹を埋める」

「ああ。味わって食えよ」

セレスがスコーンをもふもふ食べ始める。

セイジの傍らにセツナが来る。

昨日のチャイナドレスの上にブルゾンを羽織り、髪を三つ編みにして後頭部にお団子を作っている。

「俺達は消火班だな」

「三名のみつてところが燃える。ある意味、花形よ?!」

「燃やすなよ」

「そういう意味で言ったんじゃない!」

セツナの蹴りがセイジのふくらはぎに入る。驚いたのか、セレスが胸を叩いた。

セイジはセツナが着けるグローブを見る。

「以前、ミイルが設計描いていたマテリアル生成器だな?」

「魔力を流すだけで特定箇所、常に特定のマテリアルを設定した値で生み続ける。」

昨日便利さを証明したけど、問題点は殴ったらまとめて爆発する可能性が大つてとこ」

「へえ」

妹の手を取って、グローブの表裏を確認する。

「平側に気のための植物の種か。この配置なら移動しながら、木々の回避も出来るな」

「基本は燃える箇所の孤立。火のマテリアル化。セレスの水域。この順番ね」

妹の言葉に頷く。

「ああ。」

俺達はウォーターフードから消火しながら北上。ホリンが消息を絶ったアスローンを目指す。ホリンと合流次第ゴールウェイ行きだ」

「小ブリテン中部。あそこには妖精宮殿がある」

セレスがスコーンを食べ終えて会話に参加する。

「あの地に入れるのはホリンを除けば俺達とコトハの四人のみ。こ

の人選はベストだな」

「ベストなのは分かったけどさ。いつまで手取ってんの？ このまま甲にキスでもしてくれんの？」

セイジが「は？」と顔を上げれば、セツナが頬を染めて、なんかくねってた。

キスの単語に昨晚の出来事を思い出し、顔を沸騰させ、妹から光速で離れた。

「そ、そんなことするわけないだろ?!」

「どんだけ過敏な反応なのさ!」

そんな双子の会話を老教官が離れたところから眺める。

「つたく、あいつらは」

老教官に呼ばれた朱翠、ラフィル、璃摩がやってくる。

この三人は制服。

朱翠は用意する時間が無く、

ラフィルは前衛が苦手で持ってなく、

璃摩は制服が動きやすいから。ちなみにスカートの下はスパッツ。

「榊朱翠とラフィル・エル・ヒザキは、基本はアリシア・ロードウ

エルの指揮下だが、徹するべきは遊撃だ。上の判断が違うと思った

ら、自らの意志で行動しろ」

「はい!」

ラフィルはがんばって返事をし朱翠は普段通りにコクリと頷く。

「天宮、お前さん、山消すほどの一発を撃ったことあるかい？」

「消したことはありませんけど……月天弓ならいけるかも？」

「それがお前さんの神剣か」

「はいです」

「二十キロ程度先的的はやれるか？」

「それが屋外で夜なら可能かと。月が出てたら、尚良し」

「よし。お前さんは榊朱翠とラフィル・エル・ヒザキの二人と行動

を共にしろ。そしてゴールウェイを目指せ」

「ラジャったつす」



ビシイと敬礼する生徒に老教官は苦笑した。

「よおし、おめえら！ くそつたれな、アメ公どもにミスロジカルの膝元で暴れたことを存分に後悔させてやれ！」

ここで大まじめに「イエッサー」と答えた十四と十五期生とは異なり、十三期生達はバラバラに同じような言葉で応じた。

「まあ、がんばってみる」

学院裏の船着き場にフェリーとボートが一艘ずつ用意されていた。船着き場の前で、制服姿の少年が「間に合った」と息せき切っていた。

「みんなの足、用意したよ！」

丸眼鏡を鼻に乗せた人なつつこそうな少年、レンメル・クロケツトは拳を握って天を突いた。

「あのフェリー、絶対、弾丸特急だよな」

「シートベルトあつたら当たりだね」

秋とネコがヒソヒソ話す。

声に出さずとも、同期の十三期生達……日崎兄妹とセレス以外の全員が青ざめた。

これは急ぎの任務だと自分を納得させ、彼らはフェリーへと乗り込んでいく。

「君が榊朱翠だね？」

ラフィルを連れた朱翠にレンメルが話しかける。その手には一メートルほどの細長い袋を持っていた。

「これ、日崎のおじさんから注文されてた奴ね。一年遅れだけど受領してもらっていいかな？」

「これは？」

「魔剣代わりの予備」

つまり、魔剣は抜くなという意味だ。

袋を受け取って紐を解けば、現れたのは、刀身が80センチ程の刀だ。

柄には五種のマテリアルが埋め込まれ、鍔には鳳凰の文様が刻まれる。

「神州の魔匠御影と我がクロケットとの合作第一号。刀身は神州製、柄はクロケット製で魔力制御の魔構品」

「銘は？」

「スイオウ……翠鳳だね。命名者は」

「榊朱禅」

「ご名答」

「借り受ける」

朱翠はレンメルに頭を下げ、翠鳳を背中に差した。

「あと、これ、魔構部分の説明書。英語だけど、皆の会話同様、読めなくても理解は出来るはずだよ。バベルシステムの恩恵で」

表裏にビツシリと英文で埋まったカードを渡される。朱翠は頷き、胸ポケットに入れた。

フェリーに乗って、ラファイルは朱翠の背中に生えた長物を物珍しそうに見る。

「どうして名付け親が分かったの？」

「翠鳳は母の、剣士としての二つ名だ」

レンメルは朱翠とラファイルを見送って、最後に残っていたアリスアのチームがやってくる。

「君達の移動手段ね、ネコはシュトゥルム・ヴィントでいいんだよね？」

「アタシにはこれしかないからね」

ネコは自分のガントレットを叩いて自慢する。

「そんなネコ君に朗報だ。

先週、ドイツの魔構屋がクルツ・フリーデンの下にいくつか合併されて、カートリッジの互換保証されたのが出てきた。そこには君のソレも入ってたよ。」

というわけで、これが君の実家から送りつけられてきた」

渡すのは10×20ほどの木箱。そこそこ重い。

「おお？ 新型カートリッジと見た！」

「多分そう。じゃ、がんばって」

ネコは乗り込みながら「おうよー」と答えた。

「新型カートリッジかあ。解体したいなあ」

そんなときめきを覚えつつ、アリシアと秋、秋に絡まれていたセイジのところまで来る。

「星司、君のバイク、アリシアに貸してあげて」

「事後承諾で積み込み済だろ？」

「ばれたか。じゃあ、はい、ジエスター・コア」

ガラスケース入りの琥珀の水晶を手渡される。

「アリシア用の調整は？」

「済んでるよ。あと、ブーストチャリオットをつけたかな」

「お前……ワンオフ用のサブパーツ作るの好きだよな」

「アークセイバーを最強のバイクにするのが夢だからね」

今、聞き慣れない単語が出た。

「何だ今の、言っても聞いても恥ずかしい名前は」

「言ってなかったっけ？ 君のバイクの名前だよ」

「聞いてねえよ!？」

名付けたの、お前とシュウだな？

おい、そこ！ なに、したり顔で頷いている？」

セイジが突きつける指から顔を背けて、秋は口笛を吹いた。その首が勢いよく前に倒れる。後ろからアリシアに殴られた。

「さっさと行くぞ」

「殴らなくてもいいじゃんよ」

よほど痛かったのか、後頭部をさすりながら涙目。ぶつくさ文句垂らしながら、棧橋を渡っていった。

「アリス！」

棧橋を渡ろうとしたアリシアを呼び止める。

その呼び方は、師とセイジとアリシアの間でだけ通用する愛称。他に呼ばれることを嫌うものでもある。

アリシアはセイジを振り返る。

「気をつける」

たった一言。

それだけでアリシアは表情を緩め、蒼珠の指輪をした右手をかかげる。対してセイジも蒼珠の指輪をした左手をかかげた。

「そつちもな」

互いに頷き、アリシアは棧橋を渡りきり、セイジはセツナとセレスが乗るボートへと向かう。

その光景を、フェリーから眺める璃摩の姿があった。

## 街道ルート(1)

フェリーはアイリツシユ海を北上し、ベルファストへと向かった。その速度、およそ200キロ。到着までにかかった時間、3時間弱。

今はベルファストの町が見える沖で停泊中。

船内に十三期生達の姿は既になく、夕刻で上陸することを言い含められた下級生達が残る。時はまだ、夕刻には遠い。

そして、ベルファスト。

全長三メートルはあろうネイビーカラーの甲冑が宙を舞い、街路に落下。バラバラになって動かなくなる。中に人の姿はなし。

甲冑の吹っ飛び下には、アッパーの格好で固まるネコの姿がある。

「これでラストか？」

アリシアがインカムの先に問う。問い先は、上陸した観測車両で付近一帯をサーチする仲間だ。

【都市内で確認されたNB(身無し)はな。郊外で確認された反応は、オリヴィエ達が排除した】

「幻獣の反応は？」

【港で救出した妖精達だけで、他は確認されていない】

(発見された命令書の通りなら、既に空挺でゴールウェイに輸送されたか)

秋とネコを呼んで移動の準備をするよう手で合図を送る。

「よし。我々第一班は先に決めた通り、まずはネイ湖を周回してからエニスクリンまでの道を開く。それと森には入らないよう徹底させる。帰ってこられなくなる」

【了解した。では、エニスクリンで会おう】

観測車両との連絡を終える。

「オリヴィエ！」

【聞いているよ】

インカムから第二班のリーダー、オリヴィエ・ファースの返事が来る。

「第一班が周回を終え次第安全経路を指示する。それまで待機だ」

【了解】

仲間への指示を終え、アークセイバーに跨がる。

後輪の後ろに鋼鉄の戦闘馬車、チャリオットを接続している。チャリオットは両脇に見た目物騒なロケットエンジンが積まれていた。秋がチャリオットで足を固定し終わり、ロンパイアを肩に担ぐ。「行くぞ？ ネコも準備はいいか？」

ネコはレガースの踵で街路を蹴る。足裏と路面の間に風が発生し、ホバリング状態になる。

「いつでもいいよ！」

元氣よく返事して、ガントレットの両拳を打ち合わせる。ガチャンと装填音が響き、背中にも風が発生する。

「ではこれより、全力で疾駆する。秋、攻撃は任せた！」

「おう！」

背中に信頼を置いて、機体を発進させた。

ネイ湖を西回りに周回し始めてすぐに、敵の攻撃に遭う。

バイク速度を一切落とさず、鎧の集団に突っ込むアリシア。通り抜けざまに、暴風が巻き起こり、鋼鉄の残骸が宙に舞う。斬り漏らしは次に来る拳に粉碎されていく。

バイクがネイ湖を一周し、ベルファストを通過する時点で、ネイ湖を北ルートで迂回するように指示を出す。北側に二回目の暴風が通った後には、そこら中に原型の分からない残骸が撒き散らされた。エニスクリンに到着し、町の様子を探る。

ベルファスト市内と街道で排除した鎧と同型の集団に襲われるが、これを排除。

鎧の残骸を前にして、秋は首をかしげた。

「ベルファストで数体いた大型がいねえ」

中身がない身無し……NB (NoBody) とそのままに名付けられた彼らには、小型軽装型と大型重装型がいるようだ。

街道に設置されていたのは、そのすべてが小型軽装であった。

アリシアは腕を組み「ふむ」と一考。

「偵察隊か？」

サイト・マジックを使用してみる。

破壊間もない鎧の中身は人型の魔力体。身をよじりながら消滅していく。どこかに向かって流れていくでもない。

鎧の正体さえ分かっていない。不透明なことが多すぎる。

「シユウ、ネコ、破壊した時の感触を教えてください」

対して。

「生物って感じが全然しねえ。感覚的には魔構兵斬ってる感じだ」

「だね。鐘突きしてるみたいな感じ」

秋とネコがそれぞれに答える。

「けど、意志のありそうな行動はしてんね」

「そうか？」

「ほら、アタシはあんたの斬り漏らしを担当してたけど、斬り漏らしというより、鎧が自分の意志で、命からがら逃げてるみたいな感じがした」

三人の感想は「気味が悪い」で統一される。

魔構兵は魔力を動力とした機械兵士。奏者と言われる使い手が遠隔操作をする物が大半である。攻撃をされるとして、生身が傷つかないのに逃げ惑うなど聞いたことがない。

そもそも、ベルファストでもそうだったが、奏者の反応が一切無い。

「なあ、アリシア。小ブリテンの森は幻獣か幻獣に認められた奴しか入れないんだよな？」

ネコの問いにアリシアは頷いた。

幻獣の身体を構成するものは魔力のみ。

魔力はイコール生命力ではあるが、基本的に生物は生命力だけで動いているわけではない。幻獣との違いはそこにある。

この地の森にかけられた呪いは、魔力によつてのみで生きる存在には適用されない。という単純にして強力なものである。

「実は森の中で幽鬼のように歩く鎧とかいたんだよね」

ネコは言う。

目と鼻の先の街道が見えずに森の中を彷徨つて出口を探してるっばい鎧がいたと。

「鎧が魔力のみで動くなら幻獣と変わらないから、彷徨つとかなさそうだけど、魔力……魔法以外のもので動かされているとしたら？」

「魔力以外ってなんだよ？」

「魂……とか。幻獣は魂さえも魔力とされるから、幻獣以外で意志があつて、二足歩行で逃げようとす魂？」

秋とネコが想像して青くなった。

「いやいやいや、怖いよ?! 超怖いよ! 中身ないとか幽霊かよ?!」

(半神が幽霊怖がるなよ)

アリシアにそんなツッコミされてるとは知らず、「やっぱり実体超重要」とか言つてチャリオットに乗る秋。そして座席をバンバン叩く。

「後続の道は確保したんだから、もう行こうぜ。細かいのはオリヴィエ工達がやってくれんだろ」

「それは、そうだが」

渋るアリシアにネコが頷く。

「第二班の移動速度を考えれば、彼らがオーマに到達する段階がアタシ達の移動可能の最速だね」

「そうだな。あまり速く進みすぎても、後続との距離が開きそこに妨害を投入されては意味がない。あと三十分は待機だ」

決定に秋がダレた。



第二班がオーマを通過したという情報が入ってから、再度移動を開始する。

太陽は既に沈み、月が顔を出している。

夜だろぅが視界に困らない幻獣が多いせいか、小ブリテン北部：北アイルランドには街灯がない。バイクのライトと視力強化系の魔法が頼りだ。

しかし、今は南の空が明るい。中部付近が燃えているのだ。風が南に向かって吹いているせいか、北への影響はないように思える。

スライゴを経由しバリナへの道で、今また数十体の鎧を片付けた第一班に、観測車両から報告が入った。

【消火班が行動を開始した。路面に注意せよ】

【了解。こちらはこれよりバリナへ入る】

【……カスルバー以南にNB以外の反応を確認。バリナで陣を敷くよう指示が来た】

【設置場所を確保する】

NBの襲撃が途切れる。

秋は南の空に目を向ける。雨雲が広がり月が隠れた。

(始まった)

【シユウ、集中しな！ 本日最後の宴会が始まるよ！】

ネコに注意され、正面を向く。

バリナが明るい。街路が灯っているのだ。

NBは光のないところでは行動出来ない。というより視野が確保出来ないらしい。

本当に生物っぽい反応だ、と思う。

町への入口前に、ここに来て大型重装型の影を確認する。

「アリスア！ ブーストだ！」

【なんだと?!】

運転中のアリスアからの大声がインカムから聞こえる。

「町の手前でブレーキをやれ！」

【……そういうことか。了解した！】

アリシアの返事を得て、秋は自らを固定する器具を外した。

「ネコ！ 手前の連中は任せた！」

【了解！ 着地失敗すんなよ〜】

「誰に言っただやがる！」

右でロンパイアを握り、左で手綱を握る。

カーブで吹き飛ばされそうになりながらも、足に力込め手綱任せで耐える。

「エンチャント・パワー！」

【カウント、3】

【2】

【1】

【ブースト】

シュゴッ

そんな音を左右で聞いたのは一瞬。

身体が後ろに持っていかれる。

「ぐっ！！！！ こんのっ！！」

ふんばって前傾。強化された筋力でもギリギリ。

ブースト点火の瞬間、並走していたバイクの姿が消えネコは口笛を吹いた。

アリシアは速度メーターが、300キロを振り切って増築され600キロ台を示したのを見て冷や汗を垂らす。

彼方の光景が手前まで瞬間移動してくる感覚に恐怖するとともに、口元が歪むのを感じる。

感覚は数秒、すぐにブレーキをかける。

若干の減速はしても止まらない。

数体の小型鎧を轢いても止まらない。

【エンチャント・パワーだ！】



「ここは多いな」

「まあ、この程度なら、シュウに任せておいても問題なさそうだけどな」

「NBが第6段階以上の魔法を使えるなら問題は出てくるだろうが今のところ、NBが魔法を使用するところは見ていない。」

「数と頑丈さが命っぽい」

ネコの言葉に頷く。

その頑丈さも、秋とネコの前では紙も同然ではある。

ネコは南の空を見る。

火はこの三十分ほどでずいぶん落ち着いたようではあるが、まだまだ明るいことに変わりはない。

遠くで、腹にも響く咆吼。

「あれ喰らうと、常人じゃ気絶しちまうんだよな。弱いと死んじまうし」

「あれを喰らって平然とするのは、お前達ロウエンドの連中くらいだ」

「ヒザキ妹とアリシアだつて平気じゃないか」

ネコはそう言つて笑つた。

「さて、そろそろ終わったかな」

町中での破碎音がやんだのを確認し、ネコはぶらつと歩いていった。

アリシアはここより雨の強いであろう南を見つめる。

「向こうには、ドラゴン・ロアを必要とする敵がいるのか」

雨の中、無言。

(アスト……)

同門の少年を想い、目を伏せ胸に手をあて祈る。

(ウエルシュ、赤き竜よ。どうか彼に勝利を)

ネコが呼びに来るまで、その場で祈りを捧げていた。

雨の中、陣を設営する下級生の姿を眺め、電気の通っていない町のホテルロビーのソファで秋は伸びをした。

「おつかれたね」

銀髪の少年が、湯気の立つコーヒーを秋に差し出す。

「夏場でも雨に打たれ続ければ風邪引くからね」

「サンキュー、オリヴィエ」

少年、オリヴィエ・ファーストは「舌に気をつけて」と女性に見間違いそうな優しくそうな笑顔を浮かべて手渡した。

「あの鎧どもは一体なんなんだ」

「NBだけど、僕は見たことあるような気がするんだ」

「マジで？」

「うん。しばらく前にGSからのクエスト受けたでしょ？」

「ええつと……ああ、あれか。確かワールド・ギアの工場潰した奴だったよな。魔構兵の生産工場」

「僕達にはそう説明されていたけど、僕、魔構が起動していないはずの鎧が動いたような気がしたんだ。シユウには気のせいって言われたけどね」

秋は当時のことを思い出しつつ「あの時か」と呟く。

「もつとたくさん工場潰してれば、こんな事態にもならなかった？」

「被害は押さえられた可能性もあるけど……って、どうしたの？」

秋がオリヴィエをやや感動気味に、目をキラキラさせて見上げていた。

「星司や琴葉だったら、ここではまず否定だからな。ちょっと感動しちまって。握手してくれ」

「あ、あははは」

苦笑するオリヴィエと握手する秋。

そんな二人を軒先で雨宿りする金髪碧眼でやや軍服チックな服装の少女が、興味津々な風で眺めていた。

隣ではネコが設営をぼんやり見ている。

「ネコ！ ネコ！」

ネコのタンクトップをギュッギュツと引っ張る少女。身を捻ったネコが少女の顔をアイアンクロー。少女がプランとぶら下がった。「伸びるだろ？」

首がコクコク動いて「もごもご」となんか言つのを確認してから下ろす。

「ネコ。あれ、どう?!」

「どつて……」

ネコは少女、アルマ・ラインハルトの示す方を見て納得した。

(まったく、好きだねえ、この子も)

ルームメイトにして同郷、しかも昔馴染みの少女の好きな展開が視線の先で展開されようとしていた。でもきつと誤解。

「オリヴィエが女装でもしてないかぎり、アルマの好きな展開には発展しないだろ」

「じゃ、じゃあ、今すぐ女装させてくる！」

鼻息荒く拳を握る友人の様子に「おいおい」と苦笑。

(ま、ここ最近、あの二人の蜜月はよく目にする。クエストも一緒に行くみたいだし、これじゃ誰がパートナーか分からないね)

設営していた下級生がアルマの下へ走ってくる。

「ラインハルト先輩！ 設営終了しました！」

「ごくらう！」

敬礼で応じる。

「じゃ、ネコ。仕事してくるよ」

「頼りにしてるよ。あんたら観測班がアタシらの目だからな」

「おうよー」

ハイタッチ。

アルマが陣に走っていく。

これからあそこでは、小ブリテン全域をカバーする大観測魔法が発動される。その出来次第で、明日の戦闘が楽になるはずである。

(NB以外の反応。本格的な幻獣兵器か対人戦か)

何者が相手でもやることは変わらない。

何気なしにロビーの二人、秋を見る。

(あんたが誰をパートナーにするかはどうでもいい。作戦に私情さえ持ち込まなければね)

鼻を鳴らす。

「にしても、消火班は一体何を相手にしてんだ？」

強くなる雨に、思わずそう呟く。これじゃ今頃、ここより雨の強いであろう中部は豪雨である。

首を巡らしアリシアを探せば、中衛のクラスメートに囲まれていた。あれは彼女の取り巻きだ。

思い出すのは、ゲートで祈るようにしていた彼女。

(ヒザキ兄、ね。あの天幻学者のどこがいいんだ?)

LR最初の神殺しから人造聖剣を継承した少女が、人造聖剣の継承から漏れた兄弟子に抱く感情とは何か。

考えてかぶりを振る。どんなゴシップだよと苦笑。

ネコは雨の中に出てアリシアの下に向かう。

どうせあの少女は、取り巻きのねぎらい一つ一つに丁寧に返しているに違いない。

「まったく、さつさと休めつてえの」

そうすれば、心配の一つ増やしても外野に惑わされることはないだろう。ネコなりのお節介であった。

## 消火ルート

「燃えてるな」

「うん、見事に」

ウォーターフォールドに到着し、北の空を見上げてのヒザキ兄妹の言葉である。

セレスがその場に座り地図を取り出し広げる。

三人は地図を囲む。

地図には、学院を出発する時点での火災場所が赤ペンで囲んであった。

「判明しているのは、妖精宮殿のあるアスローンに、非常に強い火の魔力があること。キルケニーから西が燃え広がっていること。だな」

セイジの言葉にセツナとセレスが頷く。

「ともかく、火を消す前に水路を構築しよう。」

セレス、どういう水路ならこの一帯を沈められる？」

セイジはセレスが指差す箇所に、赤ペンで線を追加していく。

「ふむふむ。キルケニーからリムリック一帯はダーグから繋ぐのね。」

これだと、カシエルまで行く必要があるか」

セツナはそう言っただけ北西に顔を向ける。黒煙に吐息。

「道空けて」

腕を組んで溜息混じりのその言葉にセイジは「そのつもりだ」と答えて立ち上がる。

「先にダーグ湖へ行く」

「準備が出来たらキオーンを寄越す」

「待とう」

セレスは一人、先に行く。

「俺達も行くぞ」

「こっちの準備はOKよ」



ヒザキ兄妹もまた、進路を北西に向けて移動を開始した。

アスローン以南は街道だろうが町村だろうが、そのすべてが森に覆われている。森に浸食されていた。

言葉を理解し伝える生きた木……霊樹達が、繁殖を続ける土地である。

それが、燃えていた。

所々から木々の悲鳴が聞こえてくる。

セイジは燃え残る枝から枝へと移動しながら、火という火をマテリアルへと構成し続ける。両の手は常に赤光を湛え続けている。

「この炎、魔法だね」

「ああ。霊樹を対象にひたすら燃え広がる奴だな」

「狙いは呪いの排除、か」

霊樹こそが、森に人を閉じ込める呪いを広げている原因である。これを排除すれば、人の手による制圧が可能になる。

途中、逃げ惑う妖精達を見る。

妖精の上に倒れる大木を赤光で処理していく。

「南に抜ける！ そっちまでは燃え広がってはいない！」

大声を張り上げて逃げ場所を指示しながら進む。

「北には逃げないで！ ほらそこ！ お年寄りを担いで行きなさい！」

ヒザキ兄妹は妖精達の間ではそこそこ顔が知られている。

呼びかけに答え、妖精達が南へと向かっていく。

カシエルへと到達する。そこは木々に覆われた町。

セツナは一際高い家の屋上へと登り、家を覆う蔦を掴んで集中。

「よし、ここなら森に繋がってる。

セイジ！ すぐにでも始めるよ！」

「分かった。そっちの魔法終了後、水路予定以外の鎮火を行う」

一度、両手の赤光を一体化させ、取り出した石に内包させる。赤

い宝石と化したそれをしまい、グリフォン型幻獣、キオーンを呼んで空へと駆け上がる。

近くに兄がいなくなったのを確認。

蔦からここ一帯の大地にアクセスする。

両拳の黄石と掌の種が強く輝き出す。やがて足場にする家の周囲の土と木々が盛り上がり、セツナを覆った。

(把握、解析完了。やりますか！)

「最初にカオスが生まれた」

セツナの詠唱が開始される。拳の緑石、青石、赤石が次々に灯る。「カオスから最初にガイア、エロス、タルタロスが生まれた」

セイジは上空でセツナを中心とし、五種の魔力が周囲に伝搬するのを見る。その流れはまるで枝。キルケニーからリムリックを通る円状の巨大な方陣を形成している。

(霊樹を媒介して広げる、か。あれなら少ない魔力で広域をカバー出来る)

セイジは方陣から外れる火災現場へと飛ぶ。水路外の火は細々と撤去しなくてはならない。

「カオスからはエレボスとニユクスが生まれ」

方陣の内側に燃える森が集められていく。

「両神交わりニユクスはヘメラとアイテルを生んだ」

燃える森が沈下した。所々から根を引っ張り、木々を落とし、沈下地帯から伸びる道を作る。

「ここに大地の原初を仮想し、崩壊と再生を生みださん」

拳のマテリアルが消えていく。

「アウターフィールド」

それがこの魔法の名。領域限定の天地創造の模倣。

名を告げて、両拳のマテリアルがすべて砕けるのを感じ、ぐったりと色気の欠片もなく、五体投地で寝そべった。

使い切った。カラッケツである。

「あとはまかせたー。夕暮れまで休憩っ」

聞こえたわけではないだろうが、言いたいことは言ったと盛大に溜息をついた。

聞こえたわけではないが、セツナがいるであろう方角を向き「休んでよし」と兄は答えた。

ダーグ湖の畔で微睡んでいたセレスの下に純白の鷲が舞い降りる。足に手紙をくくりつけている。

隔離場所の消火はしたが、再燃の可能性が高い。頼んだ。

セレスは手紙に対して頷くと、湖へと入り腰まで浸かる。鷲が飛び立った。

ゆったりと、両手を開いて湖水をすくい上げる。

目を閉じて、大きく静かに深呼吸。

水が身体を登っていく。やがて水は覆い、重力に従い流れ落ちる。水の下から、流水の如き長い青髪を持つ青年が姿を現す。開かれた瞳は、金色。

すくわれた水を弄ぶ。

水が宙に浮かび、右手にまとわりつく。払わずそのまま右手を東に向かって伸ばす。

まとわりつく水は蒼光に変わり、周囲の湖水を取り込み輝きを増していく。

直視出来ないまでの輝きになる。

「デ……リユージ」

呟き。

蒼光が右手から勢いよく放たれた。蒼光は濁流となって森を浸食しだす。

右手を右に左に動かし、濁流の進む先を操作する。

濁流は、沈下した一帯に流れ込み、火をくずぶらせる木々を飲み込んでいく。

木々を沈下先から出さず、水だけが根の作った水路を流れていく。

青年は手を下ろし、吐息。あとは勢いに任せても問題ないということか。

そのまま後ろに倒れ、湖面に浮かび目を閉じた。

セイジがセツナを乗せてキオーンでやってくるまで、彼は湖水に浸かり続けていた。

セイジ達はダーク湖の北に位置する、ポータムナ跡からアスローンを目指す。

移動しながら、セツナと青年状態のセレスは、錠剤型の魔力補充食を口にする。

「これ、味とかけられないの？」

「失敗した」

セツナの問いに、セイジは即答。

「せめて柑橘系とか」

「失敗した」

即答。

「補給剤に関してはそれ専門の研究機関があってもいいと思う」

「セレスにしてはいいこと言うじゃないの」

「補給剤に関しては、大中連の仙丹や神州の兵糧丸が優れている。出来るとすればそちらだろう」

どちらもミスロジカルには無縁の代物である。

(ヒョウロウガン……そんなものまであるのか)

神州の食文化恐るべし、とセイジは妙な誤解を受けるのであった。アスローンを見渡せる丘の上に出る。

三人ともまずは無言。

「セレス、アレ、何だと思う？」

「見た目通り炎の巨人でいいのではないか？」

セイジは目頭を押さえて揉む。

神州で見た鋼鉄の巨人の強化版にしか見えない。

関節や口から炎が吹き出している巨人が、かつてアスローンと呼ばれていた町に鎮座する大樹の前で仁王立ちしている。

あの大樹こそが妖精宮殿。この地の幻獣を治める妖精王と妖精女王がいるはずの場所である。

大樹の周りには霊樹をはじめとする木々の姿はなく、クレーターと炭化した木々の残骸が転がるのみである。

仁王立ちの巨人は巨大な槍を携えている。

「熱そうな巨人が更に槍とか、いつでも必殺気分なのね」

「というか、量産されてるのか。またあのとんでもない砲撃してくるんじゃないだろうな」

「どゆこと？」

セイジは二人に神州で戦った巨人のことを話す。神魂砲という兵器は要注意だとも。

「この距離では分かりにくいけど、あの巨人に神魂が入っていることを確認次第、砲塔の破壊をするのがいいか。なんの手段を用いたんだ？」

「ガーランドのオーバーリミットで動きを止め、カカセオでトドメだな」

「今日も神剣は使えそうか？」

「それ自体は問題ないけど、どうもあいつ引つかかるんだ。なんとかして宮殿に入れればいいんだが……」

「最良は、宮殿にホリンがいるかどうかだ」

第一に消火、第二にホリンとの合流。

ホリンは、アメリカ軍の襲撃時、妖精宮殿でのクエストを遂行中だったはずである。運の話になってしまいが、運が良ければ宮殿で合流出来るはずである。

「セツナ、魔力は回復したか？」

「やってやれなくもない、かな」

そう言って、拳のマテリアルを復活させる。

兄妹は揃って西の空を見上げる。

「最悪、亜神化で無理矢理回復させるしかないか。セツナは時間以外で亜神化出来るのか？」

「そうねえ。私はいつでも美しいから美神の娘としては常に亜神化状態よ？」

「そうな。それだったら俺も亜神化しとるわ。外見の話じゃない」

「冗談よ。感情面における亜神化なら……」

セツナはセイジを見つめて……吐息。

「今は無理」

「今はの意味が分からんが、亜神化を使つての戦闘は長引けないというわけだな」

急ぐか、と三人は丘を駆け下りた。

クレーターに足を踏み入れた途端、巨人は動き出した。  
槍を、構える。

「何？」

「え、あれって」

「セイジの嫌な予感とはこれか」

巨人の構えを、三人は知っている。

セイジはコートからミネラルウォーターのボトルを出してセレスに投げる。セレスは左で受け取り蓋を開けて右手にかける。

次の瞬間、水は龍紋の棍へと変貌した。

散開。

セツナはセイジの背後、三步下がった位置で追従する。

巨人と距離を取りながら、三人共巨人の魔力を視る。胸の辺りに虹色の魔力、神魂の輝きがあり、その魔力は紛れもなく。

「ホリンの、神魂だと?!」

ここでセツナは妖精宮殿の入口に存在を見つける。

「セイジ! あれ!」

示した場所には、ホリンが宮殿の入口に槍でかんぬきをかけ、自

分の身体で封じるかのように仁王立ちのまま頂垂れていた。足下に神州で見た神魂を巨人に流し込む箱が転がっていた。

宮殿の奥に、複数の幻獣の反応がある。

「自分を壁にしたのか」

【だがまだ死んではない】

インカムからセレスの声が聞こえる。

そう、ホリンからはまだ魔力……生命力が放出されている。

【ホリンはライナー。リンカーとは神魂を抽出された際の結果が異なっているんだろっ】

「だが、それも長くは持たない。あれはおそらく、気力で生きてるに過ぎない」

【我々がやるべき行動は決まっている】

セレスが巨人の槍を受け流している。攻撃に躊躇が見られる。

「ここで、瀕死の仲間を見捨てるという選択肢は存在しない」

「どうするの？」

「巨人を黙らせ、尚且つ、ホリンの神魂を取り戻す。まずは宮殿の安全を確保する。セツナ、セレスのサポートにまわれ」

「オツケ」

セイジはセツナと別れ、宮殿に向かって走り出す。右に琥珀の長剣を構成し、走りながら地面に剣線を刻んでいく。

セツナは巨人の行動を把握する。

（関節の炎がブーストの役割を持ち、巨人の行動を加速させている？）

「セレス！ 合わせて！」

【了解】

セレスと巨人を挟んで対角線上に立ち、パンツと両手を合わせる。

「四大の一、ウンディーネ」

離れた掌の間に蒼光が宿り、拳の青石が砕ける。

「その身を雪に換え我が敵の動きを凍らせよ　フリージング」

蒼光は冷気となって巨人を背後から襲う。

セレスは巨人の槍に棍を絡め、関節を曲げさせて、炎をより大きくさせる。火が噴いた。と同時に冷氣と触れる。セツナはその場にうずくまった。

ドンッ！

爆発音。

セレスは目を反らさず、爆発の直後に棍を捻り、巨人の腕をもぎ取り捨てた。

「さすが！」

捨てる動作の流れで巨人の足を払うが、巨人は爆発と腕がもがれた反動に身を任せ、槍をなぎ払う。

セレスは思わずバックステップで避け、距離を取った。

【間違いなくホリンの動きだ】

【神魂の記憶をトレースしてるとでも言うの？】

【速い】

【腕がなくなったら肩からの噴射で速度上昇とか】

セレスはガトリングのような突きをさばく。さばききる。今はまださばききれている。

巨人の関節という関節、肩口から炎がジェット噴射のように断続的に吐き出されている。

【やりすぎで関節炎になって関節溶けるんじゃない】

【……ち】

【笑え！ 笑いなさいよ！】

【準備は？】

【もう少し！】

剣線を結び、戦場を振り返ったセイジは、セツナが水と風と火の魔力を練り合わせて魔法を構築しているのを見る。複数のマテリアルを公式で発動させ、魔法を形作る前段階で作り替えている。

（火を小さく、水を大きく、風でそれらに振動を？ あの火は風の



強化か？)

【出来た！ ほらジャンプ！】

【分かっている！】

セレスは突き出された槍を足場にして上に退避。

セツナは作り上げた魔力の塊を巨人の足下に投げつけた。

【アブソリユート・ゼロ！】

着弾。閃光が辺りを包み込む。

突風と刺すような冷気が閃光と共に襲いかかってくる。

【四大の一、シルフ。我が意に沿え】

突風が外ではなく内に向かって収束。冷気を拡散させず、風の結界の中に閉じ込めたまま巨人を覆った。

突風が消え無風となった場に、氷の彫像が出現する。

降ってきたセレスが彫像の残った腕と両足を砕き、距離を取る。

彫像の中に魔力は健在。腕と足を失った付け根から湯気が噴出する。

セイジは大樹に向き直る。

剣線の手前に両手を置く。

「ワールドプレーン解析開始」

大樹を中心にアスローン全体の情報が脳に直接送られてくる。

「詳細把握　ねじれ矯正……終了　断界開始」

剣線から琥珀の光が出現。大樹を囲み地から空に向かって光が強くなっていく。

【もう溶けた?!】

【ホリン同様生き汚いということだ】

【こいつ、神魂あるかぎり止まらないってこと?】

背後、巨人から魔力の増大を感じる。

「処置終了」

イメージするのは断層のズレ。

「プレーン・シフト!」

琥珀の剣線に魔力を流し込み、叫ぶ。

剣線の内側の世界が歪み、層気楼のように臃になる。

(時間がかかりすぎる。更なる短縮を編み出さなければ)  
立ち上がり西の空を見れば、ようやく姿を現した星があった。

セツナの傍らに来れば、巨人の異常に気づく。

「炎で手足を生み出している、だと？」

巨人を視る。中には炎と神魂の反応しかない。否、違う。

「この炎、神魂だ」

【神魂が二つ存在している？】

「いや、炎そのものが超越者だ！」  
爆発。

鋼鉄の胴と頭を自ら脱いだ炎の巨人が立ち上がる。

爆風で炎が撒き散らされ、クレーターの外の森が燃え出す。

「！！！！！！」

聞き取れない叫び。雄叫びだ。

「二段構えってわけね」

鋼鉄の巨人であればホルンの神魂を使い、鋼鉄の鎧が意味をなさなくなれば、炎の巨人が目覚めます。

しかしセイジは、炎の巨人とその神魂を視て、違和感を感じる。

(こいつ、誰かに似ている？ 舊星時代の……なんだ?)

「ともあれ、亜神化しよ」

「そっだな」

「mode QuasiDeity」

兄妹が共に黄金の燐光に包まれた。

セイジは左に白金のガントレットを出現させる。

セツナに溢れた魔力に呼応するように、消費されたマテリアルが拳に復活する。

【倒す算段はあるのか？】

「奴が超越者ならば、どのような姿でも精神が存在する。俺達の中

で精神への攻撃手段があるのはセレスだけだが」

【短時間であれば、可能だ】

攻撃手段の確約は取れた。

「問題はホリンね」

妹の言葉に頷く。

「神魂もある意味、魔力の塊。奴と分離出来さえすれば」

ロート・ラヴィーネによる転生狩り。方法は知らないが、器が確実に死ぬ方法など神魂が無事とは思えない。これは考えと選択肢に入れるだけ無駄だ。

「神魂のマテリアル化？」

「降神器作成の方法か！」

セツナの呟きを拾い、方法を一つ見つける。

超越者を器に入れるには、前段階として神魂を宿らせる核を作らなければならない。

(マテリアル化した神魂を、あの箱を使ってホリンに挿入させる)  
今取れる方法はそれくらいしかない。模索の時間はない。

「ホリンの身体が消える前に決着を！」

「何をやるの？」

「ホリンの神魂に直接触れてマテリアル化を行う」

ホリンの神魂は炎の巨人の胎内。炎の壁の向こうにある。

「また、あんたは、無茶苦茶な」

「無茶を無難に変えるのはタイミング次第だ」

ガントレットをオーバード化させ、右手で蒼光を生み出し握りつぶす。拳が凍結した。

「俺が奴と殴り合う。セレス！」

【了解。気をしっかりもて】

「セツナ、アブソリュート・ゼロをもう一度使え！」

「しっかり耐えなさいよ！」

指示終了。

セイジは炎の巨人の眼前に立って身構えた。

セレスは棍を水に戻して飲み込み、右手で自らの左肩を抱く。  
「龍体顕現」

言葉。宣言。

その身が一瞬無数の水滴に変化したかと思うと、セレスの立っていた場所から青鱗の龍が出現し、空を駆け上がる。

龍は雲を足場に天を駆け、雨雲を寄せ集める。かき集める。

眼下では、炎の巨人とセイジが殴り合っている。

巨人の槍は炎に耐えきれず融解し、巨人もまた拳を叩きつけてくる。神州の巨人と違って機敏。ホリンの神魂の影響を少なからず受けているようだ。

後のことを考えて剣は使えない。ただ拳で、殴り合う。

たとえコートに耐熱耐火の魔法がかけてあっても、ここまでの熱を完全には防げない。コートが白から焦げて黒くなりつつある。

防御を無視した殴り合い。否、亜神化の魔力をすべて防御にまわし、拳を炎に叩きつける。

セイジの拳は巨人を突き上げ、巨人の拳はセイジをひしゃげる。

凍結させた右手は既に火傷で爛れ、だが霧散する水の魔力を微々に繋げて凍結を繰り返す。

【こっちはいつでもいけるよ！】

妹の準備完了を聞く。

雨がザツと降ってきた。

セイジと巨人の周囲は一瞬で蒸発したが、外はその恩恵を受ける。土砂降りはやがてクレーターに雨水を溜める。

雨水は沸騰し蒸発していき、セイジは周囲を水蒸気で覆われた。水蒸気を媒介にして巨人に接触し巨人の炎をマテリアルとして奪いだす。足下に、赤く輝く宝石が落ちていく。

雨が更に強くなる。

やがて、セイジに雨が届いた。

準備が整った。

「セレス！」

天空で山鳴りとも地鳴りとも思えるような、すさまじい鳴き声が響き渡り、それはまっすぐに巨人へと叩きつけられた。

巨人の動きが止まった。

「アブソリユート・ゼロ！ ストームバースト！」

巨人を中心に凍結の空間が広がり風に閉じ込められる。

巨人の炎が凍りだすが、凍ったり溶けたりを繰り返す。

セツナは更に二個、三個とアブソリユート・ゼロを風の結界の中に放り込む。冷気の爆発した領域の魔力を更に遠隔操作で練り上げる。

「冷結<sup>れいけつ</sup>の絶対領域生成完了！ 超凍結魔法、名前はまだない！！」

クレーターの中の時間そのものが凍結。一人を除いて。

下半身と左半身を凍結させたセイジは、指に琥珀の水晶を挟み、凍った巨人の左胸に水晶を叩きつけ指で水晶を弾いた。

水晶は砕け円を生み出し、セイジは円に右腕を突き入れる。円の先に虹色に輝く光があった。

「クリエイト・マテリアル」

琥珀を基点にして、全力で神魂をマテリアル化する。

【急げ！】

「分かつてる」

口では答えられても細心の注意で構成を続ける。

五分、十分と感じるが実際には三分と経っていない。

巨人の氷が溶け始める。ヒビが入る。

（あと少し）

バリツと音がしたかと思うと、左半身を凍ったままの巨人の腕に掴まれた。凍結で感覚がないのが救いである。

マテリアル化完了。

掴んで巨人の胸から腕を出すのと、巨人の全身の氷が割れ、再び燃え出すのは、ほぼ同時。

炎はまだ完全には蘇っていないが、セイジの凍結を解凍することは出来ている。

セイジには既に黄金の燐光がない。それは魔力による防御がないということ。

防げない。それはつまり、痛みの復活。

「ぐああああああああああああああああああああああああ」

ミシミシと骨が悲鳴を上げている。既に左の手足は骨が砕け、巨人に立たされているにすぎない。

ここで意識を失うわけにはいかない。まだ終わってなどいないのだ。

【これで、ラスト！】

セツナの本日最後の魔力で生み出された凍結魔法。炎はまだ復活していない。それが救いとなった。

巨人の身体が再度氷に包まれる。だが、セイジを掴む腕の力は健在。

さすがに意識を失いそうになった時、眼前で巨人が細かい氷の欠片となって四散。否、粉碎された。

巨大な青鱗の尾が巨人を叩き潰していた。

衝撃で飛ばされ、倒れそうになるが、巨人を叩き潰した龍は人の姿に変わり、セイジの身体を支えた。

「いいタイミングだった」

「帰ったら飯だ」

「おやすいご用だ」

セイジはセレスに肩を貸され、クレーターから脱出するのであった。

ブレーン・シフトを解除し、ホリンに箱のコードを繋げ（口に入

れて、マテリアルを筒に入れ挿入した結果、ホリンは目を覚ました。代わりに、セイジが意識を失った。セツナは最後の凍結魔法を使った時点で気絶。

周囲の森の火はセレスの呼び起こした豪雨によって広がる前に鎮火されていた。

大樹から多数の妖精達が出てきた。

彼らはセイジとセツナを担架に乗せて大樹へと連れて行く。ホリンとセレスが彼らについて大樹に消える。

この光景を、大樹から離れた木の先端に立つ怪人が眺めていた。

「神魂……再移動……可能」

銀刺繍の黒いローブを身につけ、顔をベネチアンマスクで覆った怪人はそれだけ呟いて、姿を消した。

セイジが目を覚ますと、そこには端正な顔立ちで肌の白い少年と見間違えそうな小柄な男が豪華な服を着て立っていた。

「オベロン？」

「気づいたか。いやまだ起きるべきではない」

身を起こそうとして生じた痛みで顔を顰めた。

「霊薬で骨は復活させたが、まだしばらく痛みは続く」

再び身を寝かす。

「王様、無事だったか」

「今この宮殿で、そなたより重症な者はいない」

答を聞いて吐息。

「よかった」

本心である。

「宮殿の主である我と我が妻、我が臣下、そして我らが騎士クー・フリーン殿を救っていただき、感謝するぞ」

「ここを助けるのは仕事だし、ホリンは友人だ。他の何を見捨てても友人は助ける。助けたことで礼を言われることでもない。こちら

「こそ、治療を感謝する」

「まあ、と付け足す。」

「この妖精王国の皆も、俺にとっては友人に違いはない」

「そうであるな」

オベロン王は満足そうに笑んだ。

オベロン王が言うには、突然空から降ってきた鎧達に多くの妖精が、妖精を餌にホリンが捕まり、ホリンの最後の指示で皆が宮殿に逃げ込んだのだという。

復活したホリンの報告によれば、捕まった妖精は空挺によって西に運ばれたようだ。

「俺、どんくらい寝てた？」

「さて。日付は変わっておらんが」

「ふむ、と寝たまま頷く。」

「この地の神々を動かすことは出来ないかな？」

「多くはこの地におらんぞ」

「妹が、セツナがかつて、マナナン・マクリルに会ったことがあるらしい」

「マナナン・マクリル……ティル・ナ・ノーグの王、か」

「十年ぐらい前の話。」

司について小ブリテンを訪れた際、セツナはコリブ湖に落ち、マナナン・マクリルと名乗る男に助けられたのだという。

「ティル・ナ・ノーグはこの地に点在する湖から行ける鏡面の世界。マナナン・マクリルは彼の世界に籠もったまま出てこない。転生すらしないと聞く」

「湖からというと、北のリー湖からも？」

「うむ」

「統治する世界のある神が、自分の世界が侵略されるのを黙って見ているはずもない。神は自分の世界に関しては、どうしようもなく貪欲だからな」

「ティル・ナ・ノーグも侵略されるか」



「妖精を連れ去ったということは、奴らの目的は幻獣だ。いずれ、より幻獣の多い世界を求める可能性は極めて高い。」

「こっちの妖精王国は向こうとは交流ないのかな？」

「向こう出身の者が大半だ。行き来も出来れば、交流もある。」

「こちらとしても今回の件を向こうに教える必要もある。早急に使者を立てよう。」

忙しくなると肩をすくめたオベロン王は、控えていた家臣団を連れて病室を出て行った。

一人残され、首を巡らせコートを探せば、壁に掛けてあった。

（届かないな）

棒はないかと探してみるものの、都合良くは落ちていない。

コートのポケットに痛み止めを常備してある。骨が繋がっているなら、それでなんとか動けるはずである。

寝ているベッドは床に固定されているため、ベッドごと移動することは出来ない。

（そつだ！ ナースを呼ぼう！）

天啓。

枕元に何かないかとゴソゴソやれば、手振りのベル。とりあえず振ってみた。

「ご用〜？」

入ってきたのは身の丈10センチくらいの妖精。看護婦さんの格好をしている。

「コートの中の薬を頼めば、快く持ってきてくれたのだが。」

「違う」

「これ〜？」

「左のポケット」

「これ〜？ おいしそ〜」

「ああ、それ……って、コンペーター！」

生菓子を作る課程で作っておいたコッソリ用。存在を知るのはラフィルと朱翠くらいだ。

「おいしい」

「そうな。確かにおいしいよ」  
薬探し再開。

セイジが目的の薬を手にしたのは三十分後のことである。  
薬は即効性。すぐに左手足を動かして起き上がる。

「いい？」

妖精が金平糖の入った5センチほどの瓶を抱えてきた。

「報酬な」

「うん」

満面な笑みを浮かべ、病室から飛んでいった。

煤けた服に着替えて宮殿を歩けば、吹き抜けで壁に寄りかかった  
ホリンと出くわした。

互いに「よう」と挨拶。しばらく無言。

「助かった」

「次はホリンの番だな」

「急いだ方がいいか？」

「俺の予想通りなら、シユウが使い物にならなくなる」

「今回の件はある意味機会か。」

「分かった。俺もティル・ナ・ノーグへ行くでしょう」

「ゴールウェイで合流な」

「了解だ。お前の予想通りだったら、とりあえずシユウは殴るとし  
よう」

「当然だ」

互いに手を挙げて、吹き抜けを上と下に進んで別れた。

ホリンは宮殿を出たところで、セレスに遭遇する。

「ガーデンにいる間はその姿なのか？」

青年のままのセレスはホリンに気がついて顔を向ける。

一度頷き、また前を向く。何を見ているのかと思えば、炎の巨人  
と戦ったクレーターだ。

「ヒザキ妹と組むのは二年ぶりだが、あれはすごいな」

素直な感心。

「複数の系統を同時に使い分けるからな、あいつ。即興で魔法構築するし。」

ガキの頃にあいつを第二のツカサと評した奴の先見に感服するぜ」

「学院長か？」

「至源の徒だな。今はアルマの姉の同僚……アルマの姉も至源の徒だったな、そっぴや」

至源の称号を持つ日崎司が各系統を専門的に教え込んだ直弟子四人を指して、至源の徒と呼ぶ。

「至源の徒を軍人として二人も持つドイツか。敵対国にはたまらないな」

セレスの言葉にホリンは「まったく」と肩をすくめた。

「じゃあ、俺はそろそろ行かせてもらおう。ゴールウェイで会おうぜ」

「うむ。何をしに行くかは知らないが、成功を祈る」

ホリンは雨の中、北へ向かって走っていった。

## 街道ルート(2)

翌朝、雨はやみ、太陽が顔を出していた。

陣では観測班が小ブリテン島の地図を展開。地図上に光点が表示されている。

アリシアとオリヴィエとアルマが頭を付き合っていた。

「連中がゴールウェイを上陸拠点とし、アスローン、カスルバー、レターフラックを経由して部隊を展開していた？ 何故過去形なんだ？」

そう言っつて、アリシアはオーターアード地方を見る。ゴールウェイからレターフラックへと至る道一帯には、NBどころか人の反応さえない。

「コリブ湖の西、か。コリブと言えば、マナナン・マクリルの名を与えられた湖でしたね」

オリヴィエがそんなことを言う。

ここで神など関係ないだろうと指摘しようとしたところ。

「夜半の時点では、オーターアード地方にはNBの反応があった。

しかし、空が明るくなる頃、コリブ湖で、ある反応があったから、ゴールウェイからモイカレンバイまで展開していた光点が消失した」

「ある……反応？」

「君の兄やホリン・マルキスが持つのと同種類の反応だ」

アリシアは兄とホリンの共通点にすぐに思い至る。

「それはつまり、ケルト神族の」  
アルマが頷く。

「リンカーかライナーか、どの存在かも判別は出来ない。しかし、神族は間違いない」

「可能性からすれば、アスローンが開放され、妖精達が何かしたのかもしれない」

オリヴィエのそれは予想。

アスローンに向かった消火班からの連絡がない以上、確定も出来ない。

「それで、コリブ湖西の部隊が消失した結果がこれかい？」

オリヴィエはカスルバーの西、ウエストポートへと移動している光点を指差した。

「カスルバーとの合流？」

オリヴィエの予想をアリシアは光点を差して否定する。

「部隊が伸びている、これは敗走だ」

「敗走するなら南か東に行くのでは？」

「どっちに行ってもコリブ湖周辺を通る。かといって森に逃げ込むことも出来ない。進む以外に逃げ道が残されていない。」

カスルバーとの合流を狙っていることは間違いない。しかし戦力の増強ではなく、未だ安全の可能性を求めての行動でしかない。パニックになっていると指摘する。

「第一班はカスルバーへ向かう。十四期生は我々が通った後のカスルバーの制圧を、第二班はカスルバーを素通りし、ウエストポートを経由してくる彼らを迎え撃て」

「え？ 第二班だけでですか？」

「安堵間近の方角から敵が来れば、思考停止を誘える。念のため十五期の三名を連れていけ」

「敗走じゃなかったら恨みますよ？」

オリヴィエを準備のためにテントを出る。その背中を見送って、アルマが隣に近寄る。

「レターフロックからの軍が敗走じゃなかったら、ファーロスやばいんじゃない？」

「問題ない。十五期三名の保険があるからな」

三名とは朱翠達のことである。

「サカキとタカミヤは協調性がなくても、実力だけなら第二班の合戦を凌駕し、ラフィル・エルという彼らの良識が暴走を抑制しよう」

「今日が結成一日目のチームが、果たして上手く動くかと」

「少なくとも、オリヴィエ独裁の第二班よりは役に立つ」

アルマを残してテントを出ようとする背中に「どんだけファール嫌いなんだ」とアルマの呟きを聞いて、振り返る。

「私は、謀略を尽くす男は嫌いだ」

吐き捨てて、アリシアは出て行った。

（謀略……あの噂のことかな？）

オリヴィエが秋の力を欲し、ロウエンド第二班をバラバラにしようと画策しているというものだ。

噂が流れた頃から、セイジと琴葉は研究に没頭し、秋を除いたメンバーでクエストをしている。そして、秋はオリヴィエ達第二班と行動を共にすることが多くなり、卒業後の進路もオリヴィエと同じGSを選択している。

（そういえば、あの辺りからか。アオギリがヒザキ兄との勝負を急ぎだしたのって）

「こつちとしては、あのお姫様が私情で作戦立てたんじゃないことを祈るか」

ここで戦力を減らされても困るからだ。

アリシアはテントを出た足で第一班を招集し、アークセイバーに跨がる。

ネコはすぐに来たが、秋が来ない。

「シユウはどうした？」

「さっき向こうでオリヴィエといるの見たよ」

「ファーロスと？」

ネコはアリシアの眉間に皺が寄ったのを見る。明らかに不機嫌だ。ようやく秋がやってくる。

「なあ、俺、オリヴィエの方向っていいか？」

やってきての第一声がそれであった。

思わずアリシアもネコも「何言ってるんだこいつ？」な顔で見ているまじ。

「一応、理由を聞こうか」

「理由も何も、アリシアの予想で仲間危険にさらすなよ」  
秋まで「何言ってるんだこいつ？」な顔である。

(うわ、こいつ)

ネコは頬を引き攣らせてアリシアの横顔を見て、思わず一步下がった。

物凄い冷たい目をしているだけで、目以外は完全に無表情。

「分かった」

「お？ OK？」

「ああ。アオギリ、お前はファーストの指揮下に入れ」

「話せるなあ。じゃあ、ちよつくら行ってくるわ」

シユタツと手を挙げて背を向けた秋を「待て」と呼び止める。

「サカキの班をこちらに回すようファーストに伝える」

「あいよ」

秋がホテルへと入っていく。

「構わないのかい？」

「待ってくれ。今、再構築する」

皺を濃くして考え込むアリシアの下にオリヴィエが寄越したであろう下級生がやってくる。

ラフィル・エルは衛生兵として第二班で使用する。榊・天宮両名は彼女の護衛で、と。

アリシアの表情が完全に固まった。

(これでは……これでは犠牲者が出る。出て、しまっ)

震える手で蒼珠の指輪に触れる。

(落ち着け。私を取り乱しては駄目だ。今すぐにも出なければ)

榊班は観測班の十四期生から作戦の説明を受けていた。

そこに第一班から第二班へ秋が人事異動になったことと榊班も変わらず第二班の補佐をしるという命令が届く。

未だ事態が進行している地図を眺めて「なるほどね」と璃摩が漏

らす。

「どつゆつこと？」

ラフィルはキョトンと自分より背の高い同級生を見上げた。柙班は全員同級生、十三期生のロウエンドということになる。

「第二班の頭が第一班の頭の判断を信じなかったってことだよ。

所謂一つの……下克上？」

朱翠は地図を注視する。

「時間がない」

「そだね。時間も余裕もないね」

朱翠の言葉に璃摩が同意する。

そこに第一班が二人で出撃したと情報が入ってくる。

地図上におけるカスルバーの現戦力。NBだけで三百を超えるが、それを直接統御しているのは軍隊。バリナとバリナへと至るまでの相手とは規模も質も違う。

「ラフィル」

「ラフィル・エル」

朱翠と璃摩がほぼ同時にラフィルを呼び、呼ばれた方は右と左を交互に見て戸惑う。璃摩が一步引いて朱翠を促す。

朱翠は胸ポケットからカードを取り出し、二人に見せてこう言った。

「飛行系最速の魔法を頼む」

バリナ・カスルバー間を駆け抜ける。

【これよりダブリンロードに入る】

【了解！ シュトウルム・ヴィント、砲撃モードでいくよ！】

【任せる】

チャリオット上で、ネコのガントレットが変形。肘で風圧を発生させていた機関が拳にかぶる。

「ホークアイだ！」



視力の強化を施す。

【エーテル・バレットモードOKだよ！】

【残量は？】

【アタシの魔力が尽きるまでさ！ なあに、適度にレーションで補給はするさ！】

【……すまん】

【気にすんな。ゴールウェイに着いたら、ファースとアオギリぶん殴るよ！】

【そうだな】

アリシアの言葉に、少しだけ楽を感じ、ネコも笑みを浮かべた。

【まもなく敵の最前防衛ラインと接触する】

【十三期生一の射撃の腕前って奴を見せてやんよ！】

遠方にNBを確認。

ガントレットが圧縮された魔力、魔弾を撃ち出し破壊する。立て続けに、アリシアの視界の敵が倒れていく。

やがて魔弾の攻撃対象に、NB以外、生身の人間が含まれるようになる。

【敵さん、待ち構えてるよ！】

報告通り、強化していないアリシアの視界でも、前方で陣形を敷いて待ち受けているのを確認する。視線の向こうで、砲撃が開始された。

砲弾を避け、銃弾を避け、ひたすら進む。

【突っ込むぞ！】

【おうよ！ ガトリングモードって奴を拜ませてやらあ！】  
スロットル全開。

ネコが倒したNBを台にしてジャンプ。敵陣営の最前を飛び越して中間で着地。アクセルターンを繰り返し、魔弾を撒き散らす。

ターンしながらも、カッスルバーの方角に展開する更なる陣営が見えている。敵に乱れなし。

最前を殲滅。侵攻を再開する。

ネコはレーションを取り出し、噛みもしないで飲み込んだ。

【こりゃあれだね。昨日のアオギリの撃破数超えちまうぜ！】

ネコの軽口が頼もしい。

【ブーストを使う！】

【ぶっちぎっちまいな！】

3カウント後、カスルバー市内までBCで突っ込み、鎮座していた鉄巨人に追突した。

目の前が赤い。

遠くで魔弾の射出音が聞こえている。

最後に見たのは、鋼鉄の巨人。

BCによって白金の牙と貸したバイクは、軽装型でも重装型でもない巨人の足を弾き飛ばした。宙に舞った鋼鉄の足を、バイクから放り出されながら見たことを、覚えている。

でもそんなことはいい。全身が痛い。頭が重い。

【目を覚ましな！ おい、アリシア！】

地に落ちたインカムから、呼び声を聞く。

閉じかけた目をうつすらと開ける。赤い視界の中で、ネコ・バードグシュタインが巨大な影を殴っていた。それには両足がある。自分が足をもいだのとは別物。

（あんなものが複数体いるのか）

起きなければ。起きて加勢しなければとは思っただが、指が動かない。足が動かない。

徐々に視界が暗くなる。

消えていく。身体を動かそうとする意識が消えていく。

（風？）

ネコの暴風だろうか。それにしても柔らかい。

風の後、白い羽毛を見た気がして、アリシアは意識を手放した。

「焰華」

アリシアを呼んだ直後、巨人の振り下ろしを防ごうと腕をクロスしたネコは、その声を聞いた。

巨人が腕を空振る。否、打ち下ろした拳。肘から拳にかけてが宙を舞っていた。ネコの目前に焼き切ったような断面があった。

そして、学院の制服、群青の背中が振ってきた。

チンツと金属音。

「翠鳳術式三の太刀……風華」

背中を持ち主は抜刀。鞘と刃から生み出された風刃が鋼鉄の足を切断する。

巨人が背中から倒れ、地響きが上がる。

「斉射」

【ラジャった！】

空から、無数の光の矢が降り注ぐ。

巨人から向こう、カスルバーの四方の一角で悲鳴と断末魔が沸き起こる。所々でハリネズミとなった兵達が動かなくなっていく。

その手前で、藻掻いて起き上がるうとした巨人は腹部に刀を突き立てられて動かなくなる。

「有人」

【じゃ、おなか射貫くよ！】

背中を持ち主、マスクで口元を隠した後輩、朱翠はネコを振り返る。

「弱点は腹にいる」

返事もなく自分を見つめるネコに、朱翠は首をかしげる。

「……死体？」

「生きてる……ああ、生きてるよ！」

コクリと頷かれた。

再び、金属音を立てて納刀。

「残り三体」

朱翠の向いた先で巨人が一体腹を極太の一閃で撃ち抜かれて膝から崩れ落ちた。

「二体だった」

「になった！」

コクリと頷く。

残った二体に向かい、朱翠とネコは分散して排除する。

巨人の拳を避けて腹に刀を突き立てる。

巨人の拳を受け流してガントレットを打ち込み、内側に魔弾を乱射する。

その間も矢の雨は続き、更に、最大戦力だったらしい巨人を排除され恐慌状態になった軍の大半が投降してくる。

武装解除して王立劇場に放り込んでおくが、そこら中の建物に投降していない兵がいる。まだ油断は出来ない。少なくとも、後衛の後輩達が辿り着くまで気は抜けない。

王立劇場のロビーでは、寝かされたアリシアの前でラフィルが聖歌を歌い、朱翠とネコが入口を護る。

璃摩はどこぞの高いところにいるらしいが、詳細までは分からない。

「よくファーストが先行を許したね」

遮蔽物の陰でネコは言うが、朱翠は首を振った。

胸ポケットから翠鳳の説明書を出しネコに渡す。

「裏の下」

言葉通り裏返し下段を見る。

途中、梧桐秋は必ず班を離れる。その際はアリシアを頼む。

b y . S . A . H

「あの天幻学者、アオギリを理解しすぎだろ」

ネコは呆れた。

「間に合わなかった」

【ブースト速すぎ】

朱翠の後悔とインカムからの璃摩の文句がほぼ同時に聞こえた。

三十分ほどして中衛以降がカスルバーに到着し、町の制圧を開始する。

「捕虜はこちらで回収します」

十四期生に王立劇場の軍人達を引き渡し、到着した治癒班が聖歌中のラフィルのサポートに入る。

そこに第二班でオリヴィエに従う十三期生ハイエンドの生徒がやってくる。

「おいサカキ班！ お前ら、何勝手に行動してんだ！ さっさと第二班に戻れ！」

朱翠は首を振り、ネコは渡されたコップをひしゃげさせた。

「遊撃班」

「んな最初の命令なんかとつくに終わってんだよ！」

朱翠はネコに顔を向けた。対してネコは肩をすくめる。

再度第二班に顔を向け、やはり首を振った。

「命令系統が乱立するならば、俺の従うべきはただ一人。少なくとも、オリヴィエ・ファーストではない」

「はあ？ おいおい、後輩が何言っ」

【観測班聞こえてます？】

全員のインカムに向けて璃摩の間の抜けた声が入る。

【準備出来た？】

アルマの返事が流れる。

【ばっちしっす】

【んじゃ、やっちゃって】

【ラジャったっす】

観測班のアルマ・ラインハルトに返事をした璃摩は、ホテルの最上階で銀の髪を風になびかせていた。

左に握るのは、三日月を彷彿とさせる銀の弓。右で番えるのは淡い銀光放つ光の矢。

青い目が見据える先には、峠の向こうに現れた巨人の姿。その腹に狙いを定める。

（第二班の仕事、いただくよ）

璃摩は薄く笑い、銀を放った。

視線の先で、巨人が崩れ落ち疲れ果てていたらしい兵隊達がパニツクに陥るのを確認する。

続けて現れた巨人を二体、三体と狙い撃っていく。

「いいですよ」

観測班への合図。

そして放たれるのは、軍回線へのカスルバー陥落と降伏勧告。

視線の先で、多くの軍人達がその場で立ち尽くすのを見た。

元々の駐屯場所ではほどの恐怖でも味わったのか、精も根も尽き果てた感じである。

璃摩はインカムを外し、髪を戻して伸びをする。

「ん……と、先輩にどんなご褒美ねだろっかな」

実に楽しげに笑うのであった。

## 合流

翌朝、消火班の姿はゴールウェイ空港にあった。

空港にはアスローン以南からかき集められた妖精達の姿もある。

彼らは思い思いの装備を身につけていた。

「コリブ湖西の件、ちゃんと北に伝わるかな？」

「アリシアなら気づく」

セツナの問いに、セイジは即答。

「問題は気づかない連中だ」

セレスの言葉に、セイジは頷く。

セツナは背後に居並ぶ妖精達を振り返る。

「ゴールウェイの駐屯軍はこっちに気づいてるかな？」

「これだけ幻獣が揃ってれば気づいてるだろ。彼らにとっての問題は、幻獣の集団が東にだけ展開しているわけではない、ということだ」

東は消火班に率いられた妖精。

西はホリンに率いられた妖精。

北はマナナン・マクリルが派遣したティル・ナ・ノーグの軍勢。

ゴールウェイに駐屯するアメリカ軍は背後のアイリッシュ海以外の三包围を囲まれていた。

指揮権はティル・ナ・ノーグ軍に任せている。あとは突撃命令待ちの段階だ。

オベロン王からの使者とホリンが説得するまでもなく、ティル・ナ・ノーグでは軍の編成を終えていた。

使者とホリンから伝えられた情報は、彼らの怒りを増大させるには十分だったらしく、ミスロジカルとの連携が快く承諾された。

カスルバーが陥落することが、ティル・ナ・ノーグ軍北上のきっかけと決まっている。

セイジは痛み止めを飲み込んだ。

妹は兄の行動をただ黙って見ないフリをする。言っても聞かないことくらい、とづくに理解しているからである。

「昨日のような奴がゴールウェイにいたら、洒落にならないよね」

「巨人がいたとしても、この空港跡を警備していた鋼鉄の奴くらいだろうな」

「十分硬くて厄介だけどね。有人に気づかないと、あの硬さで嫌になる」

確かに、と頷く。

「来た」

セレスの呟きに、兄妹は北西の空を視る。真世の視界を持つ者には見えない合図が空に上がっていた。

「さあ。最初に奪われた領地の奪還と行こうか！」

妖精の軍が三方からゴールウェイに向かって進軍を開始した。

魔法戦を得意とするセツナ達に鋼鉄の巨人を任せ、セイジは琥珀の双剣を手にしてセレスと共に軍人達の排除に徹する。

銃弾を避け、敵を盾にし、一歩進むごとにその手を赤に染める。

屋内からの銃撃を半身で避け、右で宙に縦の剣線を刻み、左で撃ち出し横の剣線を刻む。建築物が何もない空間から出現した壁らしきものに切断されていく。

セレスの着地点に横に刻んだ剣線から撃ち出した壁を配置し、そこを狙った掃射から護る。壁の端を蹴り上げて斜めにする事で、セレスは掃射していた集団の直中に滑り降り、棍で中心からなぎ払う。

視界に角を曲がってきた軍人達が入ってくる。

左の小剣の形態をかぎ爪へと変化させ、今蹴り上げた壁に引っかけて放り投げる。こちらに向けて銃を向けた集団が悲鳴を上げて切断された。

周囲の魔力を視渡す。



(この地区の人間の反応は今ので最後。残るのは中身の入っていない鎧どもか)

あの鎧が、天宮の屋敷を襲ったモノと同じ存在だとすれば、いずこかにデータを送信しているはずである。

(魂のデータ化。はたして送信するのは、魔力か電波か。観測班がいればいいが、今はないものねだりをしてもしょうがない)

剣線から壁を引つ張り出し、六面の檻を作つて鎧を一体閉じ込める。観測班が到着次第、調べさせるためである。

こうしている間にも、人間の反応を見つけた妖精達によって、駐屯軍が徐々に数を減らしていく。

ゴールウェイにいる人間は、全員が敵である。区別に面倒がなくていい。それがセイジ達の考えた。

空に駆逐終了の合図が上がる。しばらく前にカスルバーへの進軍を知らせる合図も上がっている。これにより、現在アメリカ軍の拠点となっている場所はなくなったことになる。

ゴールウェイからカスルバーの間には駐屯軍による検問があるようだ。ティル・ナ・ノーグ軍が襲撃するのはこの検問である。

(あとは北の連中と合流し、奴らの母艦を叩くだけだな)

母艦の情報は観測車両がゴールウェイに到着した時点で送ると言われているが、情報を先送りされてる時点でろくな情報ではないだろう。

セイジはベンチに座り、休む。ちょうど痛み止めが切れてきた。今は痛みを感じながら微睡むことにした。

「ゴールウェイ戦は終了だ」

セツナはセレスの言葉を聞き、ようやく脱力する。魔力どころか体力の限界だった。

「これでようやく休めるー」

「向こうでセイジも休んでいる。そっちでまとまって休め」

「あいあい」

言われて向かった先では、確かにセイジは休んでいたのだが。  
「なにこれ」

グツタリしているセイジの周りに、妖精達が集まって休んでいた。  
膝の上では、金平糖の瓶を抱えた妖精がチヨコンと座っていた。

「マヴ？」

妖精はセツナが知っている相手だった。

妖精、マヴはセツナに向かって、口に指をあてシーツとした。

「そうだけ。せっかく休めてるんだ。ここは何も言わず、そこらの  
芝生で休んどけ」

近くの壁に寄りかかっていたホリンからお言葉をちょうだいする。  
立ち位置からして、セイジを含めここで休む者の護衛といったと  
ころだろう。

「そうね。好意に甘えておくわ」

セツナもまた妖精達に混じって座り込むのであった。

ウエストポートからの部隊が投降してきたことにより、カスルバ  
ーで活動する学院生徒は若干の心の余裕を得る。

町に散乱する死体を片付け、火葬し、埋葬していく。放っておけ  
ば、死体は腐り疫病を撒き散らす。これら进行处理するくらいには頭  
が回る余裕をである。

これには十四期生以上が当たっていた。十五期生には刺激が強す  
ぎるからである。

「ほらそこ、ちゃっちゃと浄化しちまいな！」

陣頭指揮をしていたネコの下に、カスルバー以南に動きがあった  
と観測班から連絡が入る。

【北上してくる一団アリ。幻獣の集団が、途中に展開するNBらを  
駆逐しながら北上してきている。現在位置、バリンローブ】

「幻獣に対しては一切の攻撃行動をするんじゃないよ。偵察班にも

徹底させな」

【了解】

吐息。

（妖精王国の軍か？）

当たらずとも遠からずの予想を抱いて、ことを報告するためにアリシアが治癒を受けるホテルへと入っていった。

その後ろ姿を確認してから第二班の生徒が、このことをオリヴィエへと報告する。

オリヴィエは宿泊の機能を失ったホテルの一室で、ヒビの入った窓から外を眺めていた。近くに人の姿はない。秋も瓦礫の撤去などになり出されていた。

親指の爪を苛立たしく噛む。

（妖精の軍が動いた。これで今回の戦争は終わったも同然）

舌打ち。

大した活躍の機会も得られぬまま、戦争が終わる。たった二、三日で。

秋を引き込んだままでは良かったが、後からノコノコやってきた一年と観測班によって、第二班の仕事を奪われた。結果判明したことは、西からの軍がアリシアの予想通り、敗走軍だったことだ。

西からの軍を皆殺しにしていれば、敗走軍である事実など闇に葬れたはずである。

（リマ・タカミヤ、アルマ・ラインハルト。いつか必ず、今回、僕の邪魔をしたことを後悔させてやる）

鬼の形相で、町へと入ってきた妖精達を見下ろした。

夕刻、観測車両でゴールウェイに入ったアリシアは、その光景に目を奪われる。

町は霊樹に覆われ、ゴールウェイ奪還戦で戦死した軍人達は霊樹の養分となり果て、町全体が目に見える魔力でぼんやり輝いていた。

その中で、妖精達が楽器を奏で踊り、騒いでいる。

北を進軍してきた学院生達を宴の輪に誘う妖精達に、少年少女はおっかなびっくりでその輪に入っていく。

ふと、ある笛の音に惹かれる。

誘われて進んだ先で、笛の音をまったり聞いて微睡む妖精達の姿を見る。

笛を奏でているのは、青年状態のセレスであった。

微睡む妖精に囲まれて、ヒザキ兄妹がワインを飲み交わしている。

「やっぱりワインは炭酸入ってるのが好みね」

「シャンパン飲んでるよ。これは俺が責任もって空けてやるから」

「飲まないとは言って……お？ ありしあ〜」

「ちよ、ば、振るな！」

ワインのボトルを持ったままアリシアに向かって手を振るセツナ。振り回され、ワインの中身が飛び散っている。

「はは、もったいねえなあ」

ホリンが腹を抱え、セイジは必死になってセツナからワインを取り上げようとしている。セイジの動きがおかしいことにアリシアは気づく。

左腕をコートに通さず、動かしているのは右腕だけ。ベンチからは腰を浮かす素振りも見せない。しかも、下手な魔法では傷一つ付かない白いコートが、焦げてやや黒い。煤けている。

「ぱーっす」

突然放り投げられたワインを慌てて掴む。

「何故投げ……うわっ」

さしてジャンプも出来ないのに空中でキャッチしようとして、足下で寝転がるトロールにつまづき、アリシアの足下にぶっ倒れるセイジ。

受け身を取れず、もろに左から落ちたせいか、その場で悶絶する兄を、妹が指差して笑い転げる。

「酔っ払いめ……」

右手で地を押ししてゴロンと寝転がり、アリシアを見上げた。

「怪我したらしいな。もう治癒済か」

タクティカルベストの襟から包帯が覗いているセイジを見下ろす。  
よく見れば、両手とも包帯で包まれている。

「ラフィールは優秀だ。セイジも見てもらえ」

「後でな」

「……嘘だ」

「嘘じゃない。ちゃんと学院に帰ったら見てもらっさ」

それはいつの話だろうか。

右手を差し出して「握手」と言えば、条件反射からかアリシアの手を「握手」と応じたセイジは次の瞬間には、やっちゃった、な顔をした。アリシアの口元が嗤ったのを見たからだ。

そのまま引きずられ、治癒班の下へ運ばれた時には、根とか瓦礫とかにぶつけたせいか、涙目で気絶したセイジの姿があった。

「いやあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああん」

兄のボロボロな姿を見たラフィールの悲鳴が木霊した。

炭酸水を月下独酌していた璃摩の傍らに、朱翠が立つ。

「強いな」

「いやいや、榊君ほどでは」

無言。

「結成一日でそこそこの戦果だよな」

「間に合わなかった」

「うん、まあ、そこを除けばってことで」

「ああ」

また無言。会話は続かない。

互いに顔を合わせることなく、璃摩は月を眺め、朱翠は妖精の宴を眺める。

(今宵月が出ている間に、もう一仕事しないと。この宴が無駄になっちゃうな)

それは嫌だ。こんなに気持ちのいい夜が無駄になるのはご免である。

「そろそろ日崎先輩も復活かな？」

「ラフィルは先程眠っていた」

「よっ、と璃摩は立ち上がった。」

「じゃあ、もう平気かな」

「本日最後の仕事」

「なんだ、榊君気づいちゃうんだ」

「20キロ先の的」

「耳、いいね。ともかくそれをやらないと、次の指示来ないかんね」  
行ってくる、と手を振った璃摩を見送った。

治療班のテントには、今、セイジしかいなく、中は薄暗い。

ラフィルの治療が終わわり、治療班もラフィルもホテル跡に設えた仮眠室で眠っているはずである。

琴葉を含めた他の治療班はカスルバーに待機し、負傷者の手当をしているという。

左腕を動かしてみる。

痛みはない。元々妖精の霊薬によって、骨も肉も回復し、あとは痛みだけの段階になっていたため、ラフィルの治療もすぐに終わった。

休んだ方がいいのだろうか、生憎と眠気はない。

魔力も回復している。少し空腹ではあるが。

と、誰かがコソコソとテントに入ってきた。

「起きてます？」

声は璃摩。ベッドの傍らにやってきた。

「寝られない」

「それは好都合」

何が、と答えようとして止める。璃摩がベッドに上がり、しなだれかかってきた。

テントを通して入り込むうっすらとした外の明かりで、白い肌が艶めかしく闇に浮かび上がる。

ヒルメではないと分かっているにもかかわらず、その姿を見るだけで息を飲んでしまう。

耳元に璃摩の顔が近づく。

耳に熱っぽい息づかい。

「せんぱい」

甘ったるい囁き。

「合体、しましょ」

耳を疑う。何言ってるの?! である。

「が、がったい?」

「はい」

耳元がくすぐつたい。

「敵の母艦、撃ち落としますよ」

くすぐつたさが消え「ああ」と合点がいつて冷静になる。

「合体技、絶技か」

「なんだと思ったんです?」

クスクスと耳元で笑われる。

(この野郎、遊んでやがる)

引っかかったことに苛立ちを隠さず、璃摩をベッドに残して立ち上がる。

「転神は出来ます?」

「誰にモノを言っている」

愛用のエンジンニアブーツを履き、コートに袖を通す。エンジンニアブーツはバックル部分が溶けていた。ちよつと凹む。

「ここでやるのか？」  
「この南にトウエイン島という小さな島があるんで」  
「いつまでベッドで遊んでるんだ。行くぞ」  
セイジの物言いに璃摩は小さく笑った後「はい」と乱れた服装を正して、その後を追った。

ゴールウェイの南、トウエイン島に立って北を眺める。あそこではまだ宴は続いている。

セイジは既にシフト済。両の手に夕星と明星を握っている。璃摩は髪と眼を銀と青に輝かせ、三日月型の弓を手にして西の空を見つめている。

「神薙教官の情報通り、いますね。デカイのが」  
「甕星も西に目を向けて、視る。」

「魔力ではないのか。何がいるのだ？」  
「なんか大きなドラゴンです」  
「幻獣の？」

「んー、あれは金属製ですかね。巨大なドラゴン型の空挺空母でしょうか。どうやって浮いているのかは、謎です」

翼が動いてもいるわけでもなく、魔力を放って魔法で浮いているわけでもない。本当に謎な代物である。

「正体は落とした後に分かるう」  
「双剣を槍へと変える。」

「翼で飛んでいるわけでもないのなら、狙うは翼ではないな」  
「胴体に風穴空ける方向で」

璃摩の背後に立ち、弓を構えたその手に自らの手を添える。槍を弓に番えて、共に引く。

「視覚共有 完了」  
「甕星も巨大なドラゴンを認識する。」

「ん？」



「どうしました？」

一瞬、ドラゴンの中心部に神魂のような何かを視た気がしたが、一瞬過ぎて次には見えなくなっていた。

（気のせいかな？）

「まあ、いい。神気共有を開始する」

「ラジャったつす」

神々が放つ力は今では魔力と呼ばれるが、神代における名を神気という。

魔力ではなく、神気と呼ぶのはただの願掛けである。

自分以外の力は異物でしかなく、それを理解し受け入れるにはそれなりの精神力を使う。ただ、慣れてしまえば苦痛ではなくなる。ある種の高揚感。

久しぶりの慣れ親しんだ感覚に、璃摩は頬を染めて呼吸を速くする。

「萎える」

「それは男性としてどうなんですか」

文句を言う璃摩には見えていないが、西の空を見つめる甕星も若干顔を赤くしていた。萎えるとも言っておかなければ、思考が止まりそうになる。それだけ、相性がいい。

「「共有完了」」

神気が融け合って、膨大な奔流が二人を包んでいる。

「相も変わらず破壊系最高クラスですけど、やっぱり半減してますね」

「封印されているのだ、仕方なからう。」

威力調整はこちらでやる」

「はいです。命中関係はこっちで」  
深呼吸。

「夜天穿つは輝けるもの　そこに穿てぬものなし」

「月光は照らす 地の果てあまなく在るものを そに辿り着けぬものはなし」

西の空に浮かぶ巨軀に集中。  
そして、放つ。

「「絶技 天破烈吼」」

まばゆい銀光が地上から西の空に向けて、駆け抜ける。逆行する流星。

20キロの距離など一瞬でなくし、流星はドラゴンの喉元を貫通し背骨部分を通り抜け夜空へと消えていった。

遅れてくる爆発。落ちる首。身をひしゃげさせて海へと落ちる巨軀。海が大きく歪み、波紋が広がる。

津波だ。だが、これは想定内。

東へと移動を開始した波紋が無理矢理散らされる。セレスによる実力行使。

あらかじめセレスに協力を願ったのは璃摩である。

「良いチームワークだ。褒めてやる」

囁き、彗星はシフトを解いて璃摩から身を離す。

空母の姿を確認次第、学院から観測班に命令が下るはずである。

璃摩も色を戻す。

セイジを振り返り、一歩で間合いを詰めた。唐突すぎて、セイジの拳動が遅れる。完全に油断。すっかり忘れていた。たった二日しか経っていないのに。

首に抱きつかれ、また口を吸われる。今度はすぐにセイジから身を離すが、首元をホールドされた。

「とりあえずご褒美下さい！」

「とりあえずで俺のセカンドまで喪失?!」

「カスルバーでは変な陰謀も潰したんで、それも合わせて！」

変な陰謀で思い当たるのは、秋の離脱か。

「それは、まあ、よくやつ……うわっ」

押し倒され組み伏される。それでもグググッと璃摩から一生懸命顔を背ける努力はする。

「ステイ、ステイだ！ リマ！」

「いやーですー！」

大体、なんで駄目なんです?!」

「なんでって、俺はリオが」

「そんなの、せんぱいの感情じゃないじゃないですか！」

「あ？」

「うきゃっ」

唐突に支えを失い、璃摩は突っ伏してセイジに覆い被さったが、予想していた抵抗がない。訝しみ、身を起こしてその顔を覗き込む。

「我は俺だ。俺以外の感情のはずがない」

目の前のものを見ていないかのようだ。

(俺はこのセイジ=A・ヒザキとしてリオと会って、心を惹かれた)だがそれは、一体、何に惹かれたというのか。

そんなことは考えたことがない。

これが前世もなく、ただの人であれば、理由がないと一蹴し一笑に伏して終わる問題。

「先輩は、璃央じゃなくて、璃央の先のヒルメに惹かれたんだよ」でもそれって、と付け足す。

「転生までしてやりたいこととかあるはずなのに、過去に囚われてどうするの？ って話です。」

あ、ボクはこれがやりたいことなので、あしからず」

天照を護るのは神代の契約による義務。

(俺のやりたいことか)

それは確かにあるし、神州は関係のないものではある。天津神と関係を持ちたくないから、外に転生を求めもした。

「とりあえず、お前を受け入れることでないことだけは確かだ」

「神気共有受け入れてくれたじゃないですかあ」

「それはそれ、これはこれ。というか任務じゃないか」

「も、もてあそばれた?!」

「誤解される言い方はよせ。むしろ俺がもてあそばれている」

「もてあそんでません。ボクのは本気ですから」

エツヘンと胸を張る璃摩。ついでにセイジも上半身を起こす。璃摩の顔が近いが気にしないことにする。

「ともかくだ。俺は今、お前とそういう……個人的な関係になるつもりはない」

「この後なるかも?」

「しらん。まあ……、月読は俺にとって有用な相手ではある。利用くらいはするかもしれん」

「そういうの本人目の前に言っちゃっていいんです?」

「言えば引いてくれると思っただが、駄目か」

「まかりませんね。壘星さん相手なら利用されてもむしろ……な感じだし」

「頑固だな」

「頑固じゃなきゃ、生きてこられませんでした。ナ・ニ・カ?」  
しばらくはらみ合う。

吐息。漏らしたのは、セイジ。しょうがないな、と。

一つ聞く、と前置く。

「お前は、世界を、敵に回せるか?」

(世界?)

それは璃摩が想像していたものの斜め上に行く問い。

せいぜいが、姉を敵に回すのか? とか、同胞の神族が黙ってないがどうする? とかそこら辺かと思っただのに。

相手はとても真剣で、煙に巻くような問いじゃないと思える。

「どういふことですか?」

「さあな」

セイジは璃摩を置いて立ち上がる。

「お前が、俺の問いに、俺が満足出来る答を持っているなら、お前をそばに置こう。受け入れるってことだ」

「それは璃央も？」

それには答えず、少し悲しげに笑ってから、璃摩の頭を左手でポンポンと撫で、ゴールウェイへと去っていった。

(なんか、理不尽な檻に入れられた気分)

座り込み月を見上げる。

「敵……敵か。一体何を相手にしたら、世界が敵になるの？」

璃摩がそれを知ることになるのは、これからもう少し先のことである。

## 墜落艦

観測班宛に学院から指令が届く。

アレン諸島から西に20キロの地点へ行き、海上を漂う敵母艦を沈めろ、と。

アルマが「ええと」と指令書に目を通す。

「消火班、ラフィル・エル・ヒザキを除いた遊撃班の五名でことに当たれ。だつてさ」

「私は？」

アリシアの質問に「そうそう」と応じる。

「アリシア・ロードウェルは残った面子の指揮のため残ること。

残る面子は、クロケットのフェリーにてベルファストへ寄り、移動済の治癒班を回収してから学院に直帰することだつて」

敵母艦へのトドメは少数精鋭ということらしい。

「足は？」

「泣いて喜びたまえよ、セツナ君。ティル・ナ・ノーグから船を提  
供された」

「泣いて喜ぶ理由が分からないわ」

船、に朱翠と璃摩が無言になる。

森に住む妖精から提供されたという事実が、腑を落としてくれな  
いようだ。

「誰も疑問に思っていないみたいなので質問！」

「どうしたラフィル・エル」

「梧桐先輩が入っていません」

誰も触れないようにしていたことにラフィルが触れた。

唐突に静かになった周囲に「え？ え？」と動揺する。

「ラフィル。シュウは直帰組の護衛として一緒に帰るんだ。しっか  
り護ってもらえ」

「そうなんですか。はい、兄様。がんばって護ってもらいます！」

セイジの言葉を素直に信じたらしい。はにかんで頭を撫でられている。

「ラインハルト。観測班で鎧が送受信している力が魔力なのか電波なのかを調べる」

「ヒザキ兄が捕まえた奴だね。うん。それが終わったら捕虜達と一緒にロンドン行きに加えるよ」

「調査が終わったら、護送でも何でも好きにやってくれ」  
伝えることを終わらせて、港へと向かった。

提供されたのは、妙に精巧に出来た木製の近代型ボートだった。

「エンジン動かしたら燃える？」

「エンジンないな」

「魔構じゃないってことか」

「珠がある」

「や、そんな驚掴まなくても……動かない？」

朱翠と璃摩のそんな会話。二人とも弱った表情でセイジを見た。

「これは多分俺では動かないぞ？」

船には魔力が通っている。気と水の源理の魔法に似ている。

「はいはい。じゃ、私がやりますよ」

「しゃあねえな、な感じでセツナが珠に触れると、珠が青く光った。船が、動き出す。」

「これ、結構難し……うは」

制御失敗で、揺れる船。

「集中しろ」

「分かっているつつうの。でもこんなのはじめて。ちょっと待って」

「視たところ構造は魔構の類ではない。」

固定されている魔法にアクセスして……ああ、神剣の類に似ているのか」

超越者が扱う専用の武具を神剣といい、それ自体が一個の魔法に

形を与えた存在であるため、セツナにもセイジが言わんとしていることはわからなくもないのだが。

「なるほど神剣……て分かるか！」

転生でも降臨でもないセツナには専門外の説明であった。

「魔法……魔法の操作……外部からの操作？ それだと確か」

ブツブツ言いながらセツナが悪戦苦闘している後ろで、璃摩がお弁当を広げた。

「弁当？」

朱翠が首をかしげる。

「第二班から回ってきた弁当なんだけどね。なんか嫌な予感がするんだ」

セイジはコートの中に手を突っ込み、金毛の猫を取り出す。

「え猫？」

「フーツ！」

キオーンはセイジに持たれたまま、璃摩に対して前足でシャドウボクシングを決める。

「キオーン、その食い物は平気か？」

「にゃ？」

弁当の前に置かれ、鼻をひくつかせ前足で数度叩く。振り返って、前足を左右に振った。

「にゃあ」

「腹壊すからやめとけだよ」

そう言ってキオーンをコートに戻した。

「オリヴィエの取り巻きか」

「奴らはあまり物事を深く考えないからな」

セイジにセレスが同意した。

「ハイエンドはプライドばかりの馬鹿が多いからな」

「私、ハイエンドなんだけど？」

セイジの発言にセツナがジト目で振り向いた。

「全員とか言っただろ」



「あいつら、ハイエンドっただけでこっちも自分達の同類だっ  
てするから……あ、動く」

ようやく船が再出発を開始する。

そこそこ速いが、クロケットのフェリーほどではない。

「これだと一時間くらいですかね」

璃摩の言葉にセイジは頷く。

「あそこから動いてなければな」

「あと、妨害がなければ」

「そうだな」

「で、なんでそんな離れてるんです？」

セレスを盾にして璃摩と話すセイジであった。

「シユスイ、レンメル・クロケットから渡された予備刀を貸せ。マ  
テリアルを補充してやる」

セイジに言われ、素直に翠凰を渡す。柄のマテリアルは、昨日使  
用した火と風に該当する石が光を失ったままである。

懐から、昨日、炎の巨人から奪った火の力を込めた赤い宝石を出  
し、柄の赤石に魔力の移送を始める。

「やはり、レンが一年の頃に開発していた補強装置だな」  
「補強？」

「説明書にあっただろ？ 振ってる内に周囲の魔力を吸収して石に  
溜めると」

確かにそんなことが書いてあった。

「使い続けることが条件だからな。平時にはこうやって他から持っ  
てくるしかない」

赤石を灯してから、周囲の風から生成し緑石にも移送する。

「ラファイルが出来るから、あいつといる時はやってもらえ」

朱翠はコクリと頷いた。

作業を終了し翠凰を返却する。

「で、ラフィルやタカミヤとは上手くやっていけそうか？」

セイジの声でタカミヤと呼ばれ、璃摩はセイジと朱翠に顔を向けて、セイジから目が放せなくなった。

思わず、ほう、と溜息をが漏れる。

優しそうな表情だった。神代でさえ見たことがない。思わず、見惚れてしまった。

(下級生間で伝わってる、ヒザキ兄のレア顔見たら絶対惚れるって、これかあ)

顔はいいものの、源理魔法が使えないというだけで、学院内のセイジの人気は高くはない。というか低い。

天幻云々は同学年や教員、クエストを共にした十四期生くらいしか知らないため、十五期生に至っては狙いの対象に入ることはない。もちろん、恋の鞘当ての対象にである。

だがそれも、身内や一部の友人に向けるレア顔を見るまでは。

「そうか。それはよかった。ラインハルトからの情報だけではないとも分らなかったが、朱翠自身がそう言うなら、まあ、問題なしだ」

「セイジは身内に甘いな」

セレスからのツツコミに「そうか？」と応じる。

「セツナからは厳しいと言われるが」

「照れだな」

「おいそこ黙れ！」

運転中のセツナの怒声。

セイジとセレスは苦笑。

「それはそうと、セイジは教壇に立たないの？」

シユウの妹やそのタカミヤの姉には基礎を教えたそうじゃない」

「大したことは教えていない。神州は魔法行使を生命変換法で教えていたから、そこを矯正しただけだ。あとは魔力運用だな」

「基礎、教えてるじゃない。てか、代用品で魔法教えてるところってまだあるのね。タカミヤは代用品で？」

いきなりセツナに話を振られ璃摩は「ふえ？」と反応。

「あ、ああと、矯正されました。学院に入学してすぐに」  
慌てて辻褄を合わせた。

「矯正入ってから、魔法や魔構使うのが結構楽になりました」

「でしょうね。魔力運用の基礎は夜寝る前の日課でやっておくと、下半期から始まる魔鋳剣運用の授業でヒーローになれるわね」

「学院に戻ったらさっそくやってみます」

「シユスイは矯正必要なの？」

話を振られ、朱翠は首を振るが、運転中のセツナには見えない。

「基礎は父から教わっている」

言葉に代えて答え直す。

「とうかだな。魔力運用出来ていないと、クロケット製の道具使えないだろうが」

「それもそうね……と。」

無駄話終了！ 見えてきた！

セツナの言葉が船内に緊張を呼び戻す。

海上に巨大な金属製の島が浮いていた。

落ちた衝撃によるものか、翼がもげ、尾だけがついたエイのような島だった。

消火班三人が条件反射的に中を視通す。

「魔法でも魔構でもない？」

セツナが三人の心を代弁した。

(やはりか)

セイジは確認を取ったのみ。

「鎧……NBだっけ？ その反応はあるけど、それ以外の反応がないわね」

「胴体下部に眠っているような反応を見せるのが大量にある」

「あら、ホント」

二人から「どうする?」と聞かれ、セイジは船内の四人とドラゴンの成れの果てを見比べる。

「胴体下部の反応は外……海中からセレス」

「分かった」

「セツナはあそこの」

胴の横辺りにハッチを見つけて指差す。

「あそこから侵入。シュスイ、セツナと行け。NBを排除しつつ解体しろ」

「OK。よろしく」

朱翠はセツナに向かって頭を下げた。

「タカミヤ、お前は俺と来い。あの抉れた頭頂から侵入する」  
返事はない。

「おい」

呼びかけても考え中のようで反応がない。

「をい」

ぐわし。

「ぴっ?!」

顔面驚掴まれ、驚いて妙な声を上げた。

「にゃ、にゃんでしょう?」

「お前は、俺と、侵入だ」

「お、お前に俺が、侵入!」?

メキイ。

すごい音がした。

「セレスと息継ぎなしの海底散歩させてやるうか」

「じよ、じょうだ……でしゅ」

ものすごい低音の脅迫に、ガクガクブルブルと璃摩が首を振った。

ハッチを朱翠に斬り開かせて侵入したセツナは、内部の様子に目を見張る。

「なんて近未来チック」

父から見せられた旧暦製のSF映画に出てきそうな宇宙船の通路がそこにはあった。

「これ、どうやって破壊したらいいと思う？」

問われ、朱翠は首を一度かしげる。

「手当たり次第」

「帰ってこられなさそうね」

ふむ、と再度悩む。

「炉の暴走」

「炉？ 確かにそんなのがあるそうね。こういう大きいのだと、特にやばげな大きさのが」

よし、とセツナは頷く。

「じゃ、炉みたいなのを探しましょ。まずは地図を手に入れる」

朱翠を従えて、ところ構わず部屋を漁りだした。

しばらく漁って、通路の一角に区画マップなるものがあった。漁った成果は地図ではなく、数枚のカードキーくらいか。

「ふうん。艦橋と居住区は上か」

「そこはない」

「外観的に吹っ飛んでたね」

艦橋と居住区画を示す位置は、一直線に決られ、消滅していた。

「ええつと、engine room……？ これかな？ どこから行けば」

朱翠が横の壁に顔を向ける。

次にチンツと金属音。

「こっち」

壁を押すと、ガコツと音を立てて壁に円形の穴が開いた。

セツナ、無言。そして、吐息。

「つまらないもの斬りすぎじゃ」

「どうせ壊す」

「いや、そうだけど……まあ、便利だから許す」

「では」

再び金属音。そして、浮遊感。落ちていく。

「足下禁止!」

ともあれ、原始的なショートカットで進んだ先で、いかにも強固な扉が姿を出現する。

朱翠は扉に手を当てて、首を振った。

「厚すぎる」

「ということは、これが役に立つわね」

出したのはカードキー。セツナが見るのは壁に設置されたカードリーダー。

カードの数は四枚。

カードリーダーの数も四機。

「カードの数字と一致するリーダーに通すようね」  
「とりえず一枚通してみる。」

ピッ……………ピー

通して数秒すると、通した時に点灯するランプが消える。

「他のも光った」

朱翠の指摘。一枚を通したら他のも連動したらしい。

「同時に通せつてことか。じゃ、はい」

二枚を朱翠に渡し、自分も二枚持って一緒にリーダーに添える。

「さん、はいで」

コクリと頷く。

合図に従って、四枚同時にカードが読み込まれると、強固な扉はスライドして開く。

「正解つと、ありゃ、後ろから鎧さんご一行の到着」

ショートカットしてきたおかげで遭遇してこなかったが、ここに来てようやく、NB達が群れをなして殺到してきた。

朱翠はセツナとNBの間に立ち、翠凰を構えた。

「君ならそんなに時間もかからないでしょ。ってことでよろしく」  
朱翠の頷きも見ずに、セツナは開放されたエリアに侵入する。

「んん〜？ エンジンとか言うから船のそれを想像してたんだけど……」

見回して首をかしげる。

「ええつと、書庫？ なんで書庫？」

広大な空間にギツシリと金属製の本棚が埋まった部屋。中に収まるべき本は床に散乱している。

（宇宙戦争物にロボット戦記物？ というか、そんなのばっかり。うっわ、偏りすぎ）

蔵書の偏りっぷりに辟易しながら、最奥まで来ると、そこには一台のパソコン。本棚から伸びた無数のコードがパソコンに接続されていた。

パソコンは壁に直接埋め込まれているのか、特に損傷は見られない。

とりあえず電源をオンにする。

周囲にNBや人などの魔力もないため、椅子に座ってパソコンの立ち上がりを待つ。

「遅い………お？ 来た来た」

【Please CardKey】

「カードキー？ さっきのやつ？」

パソコン周囲の右を見て左を見て、リーダーを発見。四枚とも順に通してみる。

【………OK】

【Search】

いきなり光に照らされる。それはスポットライトのようだったが、すぐに消えた。

【国連対聖堂鎮圧部隊少尉・日崎司の遺伝子を確認………本人ではないことを確認しました】

唐突にスピーカーから旧日本語による機械音声。

「はい？」

内容に、セツナの頬が引き攣る。

【聖堂日本支部長代理の指示により、閲覧を許可します】

「なにがどうなって」

セツナの戸惑いなど関係なく、モニターにザッと情報が流れていく。

戸惑いつつも内容には目を通す。

(てか聖堂って何?)

ほとんどの情報はデータ破損により閲覧が出来ない。遺伝子確認とか訳の分からない機能は生きているのに。

セツナは肩を落とした。

(エンジンルームに来たはずなのに、書庫はあるしパソコンも……  
てゆうか、なんでここでパパの名前が出るの?)

気づけば、モニターの中で【Y/N】の表示が点滅していた。

「? とりあえず……Y?」

ポチ。

再び情報が流れていき、パスワードの入力画面が表示された。  
入力画面の後ろになにやら文章が浮かんでいる。

「んーと、これ何語?」

英語でもなければ、フランス語、ドイツ語でもない。

「ラテン語」

後ろからの声。振り返れば、朱翠がやってきていた。汗の一つもかいてはいない。

「おつかれ」

「そうでもない」

「読めるの?」

「一応」

『天の水門は開かれ、大いなる泉は地に満ちた』

『そも原因となりしネフィリムは神の子と人の子の過ちにより生まれ』



『神の子が抱く心なくば過ちなし』

『我、人の子に知識与えし神の子を断罪せん』

『地に死を蒔いた神の子の名を唱えよ』

『神の如き強者の真名を』

読み終わった朱翠は眉をひそめ、セツナは首をかしげる。

「ヒントってこと?」

「ヒントは二段目と最後の二節。他は死者の恨み言」

「分かるの?」

朱翠は頷く。

「神の如き強者、それはアザゼル」

「スペルは?」

「A Z A Z E L」

言葉の通りに入力してEnter。

「はてさて、どんな情報が来るのかしらん」

【炉の再起動コードを確認致しました】

「そういう方向かよ?!」

「失敗」

セツナ、愕然。

朱翠はキョロキョロと辺りを見回す。

セツナもとりあえず周囲を視る。視て、上を向いたまま止まる。

最初に見た時にはなかった反応が、上に在る! 天井よりも更に上にだ!

(これって、神魂? そう、神魂だ!

ラファイルに近い、でもホリンに近いと言われても納得しそうだけど、間違いない!)

近くには、セイジの反応もある。

「ライナーがいる！ シュスイ、上行くよ！」

そう言っつて、拳の緑石に集中しようとして、モニターが視界に入る。

パソコンは電源が落ちようとしていたが、最後とばかりにあるメッセージを表示させていた。そしてキーボード上に今までは存在していなかった紙切れが載っていた。

それを見て、一瞬、集中を途切れさせるが、すぐに再集中。

「天井を斬りなさい！」

「承知」

「アップドラフト！」

飛行でも浮遊でもなく、自分の周囲を一気に上へと巻き上げる魔法。屋内で使用するには危険極まりないものだが、今は朱翠がいる。セツナは朱翠と共に、上の階層に向けて最速でかつ飛んだ。

ドラゴンの背骨付近を目指して、セイジは璃摩と共に、貫通粉碎されてもげ落ちた首元から上に登る。

爆砕した辺りには、たまに人の身体の一部とも思える炭化したものが転がっている。

（首はどこへ行ったんだ？）

沈んだんだろうか。どこかに飛んだ可能性もある。

（首は今考えてもしょうがない。まずは胴体だ。めぼしいものがあるればいいが）

気になるのは絶技前に一瞬だけ見えた奇妙な反応。璃摩は気づいていなかったが。

「タカミヤ、絶技前に本当に何も見なかったのか？」

「あの時は、甕星さんの神気を感じてうれしくなっていたので」

「悪い。忘れてくれ」

「というかですね？ 昨日のようにリマとは呼んでくれない、と」

「そんな記憶はない。事実があつたとしても俺の記憶には、ない」  
璃摩は、ムーツと頬を膨らませた。

見事に穿ってしまっている場所を登る。

「ほら、さっさと来い」

傾斜の強いところは、後ろを振り返り手を差し出す。むくれてはいるが、素直にその手を取ってついてくる。

「どうしてボクと組むんです？」

「相性の問題だ」

「そこはかたなく恥ずかしい響きがあるんですが」

璃摩の反応に吐息。

「おま……俺と君は魔力の相性がいい。おそらく、現状不可能と思える天幻と融合する攻撃手段が可能になる。

戦闘スタイルだけなら相性の合う相手は見つけやすいが、魔力の相性というものは、そうそう合うものでもない」

珍しい、と言う。

「昨夜言つてた利用つて奴です？」

「そんなところだ。ここがてっぺんか」

見回せば、ベッドやら椅子やらの破片が転がっている。居住区画のようだ。

「人のいるべき場所はアレで消えた、か」

「後悔でも？」

「まさか。セツナならまだしも、リンカーの類にそんな神経はない。君もそうだろう？」

「まあ、それも、そうなんですが」

（じゃあなんで、そんなに悲しそうな目をするんですか？）

本人が気づいていないだけで、まったくくないわけでもないのだろう。それとも、ないフリをしているのか。

「ここから入るぞ」

爆砕した時に空いたの思われる穴に煤けた背中が消えていく。深く考えることはやめて、その背中を追った。

通路は狭く、弓を構えて射るには難しそうな場所に出た。通路の先にNB二体が護る扉が見える。

「NBがいるな。ダーツは出来るか？」

「誰に物言いますかね」

指の間に手品のようにダーツを出して見せた。

「てか、あの鎧結構硬いで、ダーツ意味ないっすよ」

「問題ない。ちゃんと魔力は通せよ？」

「そりゃ、まあ。外見ちゃちいけどちゃんとした魔構なんで構え……セイジに顔を向ける。」

「ホントに投げますよ？」

「Hurry」

知りませんよ、とダーツを交差でNB二体に向けて投げた。

直後、セイジがパチンと指を鳴らす。射線上に琥珀色の小さな方阵が出現し、ダーツはそこに吸い込まれ 恐ろしい速度の弾丸と化し、NBへと命中。NBごと爆散した。

「は？ え……はい？ や、確かに火薬入ってるけど……や、ホント、ちよつと……ねえ？」

投げた本人は混乱。救いを求めてセイジを見つめてくる。

「道行く速度と破碎の速度を上昇させる位相を使っただが……、ふむ、ちと強かったか」

「ちと、とかそんなレベルじゃないです！

そういう便利なものがあるなら、瞬間移動とか出来そうじゃないですか?!」

「無理だ。」

距離の位相の変位した空間は、全身が魔力の幻獣や物品であれば通れるんだが、生物がそれをやろうとすると魔力以外の部分が壊死する。

場所を動かさず、位相だけを変位させた空間なら生物も存在出来るんだがな。例としては、俺の工房。位相ずらして物を詰め込んでいる」

さつさと先へと歩き出すセイジに置いて行かれそうになり、慌てて追いかける。

「実証は出来た。学院に帰ったら、他の実験にも付き合ってもらおうとしよう」

「や、ボクにだって予定というものがですね」

「それは残念だ」

さして残念そうでもない口調で残念がりながら、NBが護っていた扉に触れる。

鍵はない。扉は大して厚くもなさそうだ。

「レイ・オン・ハンド」

ガントレットを起動させる。

「エンチャント・パワー。少し下げれ」

璃摩をどけてから、思いきり扉を殴りつける。三発目で扉は折れ曲がり、先への道が開く。

「天幻とかで開けられないんすか？」

「こつちが手っ取り早い」

「美しくはないですね」

「手っ取り早さと美しさは反比例する。覚えておけ」

そんな会話を交わして入ったのは、薄暗い円筒状の一室。明かりはなく、部屋の中央になにやら円柱がある。

セイジはコートからガラス玉を取り出し、指で弾いてから床に転がす。室内が明るく照らされた。

「う？」

「これは」

璃摩は呻き、セイジは知らず呟く。

円柱は緑の液体が入ったカプセル。中には青年が一人入っていた。「マッドでサイエンティクな人の研究所か何か？」

「でかくて奇抜な研究所だな」

「死んでる？」

璃摩の言葉を受けて、青年を視る。微かに魔力はある。だが、近

く目を凝らしてみないと分からない程度の強さだ。

「冬眠でもしてるんじゃないか？ うん？」

突然、周囲に明かりが灯る。見回そうとしたが、それはやめる。

ゴボツ

カプセル内に変化が生じる。青年が大きく息をしたらしく、水泡が大きく発せられた。

そして、目が開く。

思わず、視直す。

(な、に?)

ほんの数分前には微弱だった魔力が、今、徐々に回復していつている。しかも、セイジを驚かすのは別の理由。

「タカミヤ、離れる！ こいつ、超越者だ！」

二人ともカプセルから距離を取る。

青年はただジツと、セイジのことを見続ける。

そして、カプセルが内側から粉々に割れた。

緑の液体が床に流れ、野性的な裸体の青年がユラリと立つ。

赤髪翠眼の青年は自らを見下ろすと、パチンと一度指を鳴らす。

身体が黒い革ジャン革パンツの古っぱいファッションに包まれた。

「司……にしては色が派手だな。璃々といえるのもおかしい」

青年の表情は怪訝。

「うちの父を知っている？」

「なんで母のこと」

セイジと璃摩が漏らした言葉に、青年はニツツと口の端を歪ませた。

「なんだてめえら、あいつらのガキか」

ハハハ、と笑った後に、獰猛な笑みを浮かべる。

「ああ、そうか。司の餓鬼か！」

バサリと青年の背に一对の深紅の翼、炎の翼が開かれ、熱風が吹

き荒れた。

天井も壁も溶け落ちる。床も溶け落ちそうになったその時、床の一部が斬り開かれ突風。セツナと朱翠が飛び込んできた。

「なんでこお、二日連続で熱いの相手にしないといかんのだ」

溶けた天井から、セツナの風で巻き上げられたセイジと璃摩。思わずセイジが愚痴を言う。

「セイジ！ あいつがこの母艦の炉よ！」

海上に浮くドラゴンの翼に着地し、あの青年の姿を視界に収める。（そうか。あの時見たのはあいつの光だったのか）

ドラゴンの浮遊などエネルギーを消費する際に、青年の力が使用されていたらしい。

「あれはやばい。昨日の巨人の比じゃないぞ」

「そうね。私もあんなライナー見たことないわ」

夕刻にはまだ遠く、亜神化など出来そうもない。

青年は増えた闖入者を見て「ほお」と漏らす。

「裏使徒の侍に似てるのもいるとは、千客万来じゃねえか。まあ、とりあえず、司の餓鬼だな」

フツ、と嗤う。

「アレは……絶対に……」

大きく羽ばたき、邪魔な壁も何もかも溶かし飛ばし、腕と足に紅蓮の爪を生み出してドラゴンの翼へとぶっ飛んできた。

琥珀の双剣を出す暇もない。

セイジは跳躍し、青年を受け止める。翼を越え、海上に出て、青年の上へと勢いをつけて乗り越えて背中に膝を落とす。

「あつっ」

青年ごと海に落ちる。

海水は一瞬で沸騰し湯立つ。

青年を蹴り押し、自分は海上へと逃れようとする。とどまるのは

危険過ぎる。

エンジニアブーツのバックルに触れる。ブーツが光り、海上へと押し上げられた。

そのまま海上を走り、青年から離れようとする。

（ともかく海中はまずい。海中で戦う方法なんか持ってないぞ）  
かといって、空中戦も出来ないのだが。

【セイジ、胴体に捉えられていた幻獣は解放済だ。あれを足場にしろ】

インカムからセレスの助言。

「ありがたい！ エンチャント・ヘイスト！」

高速で足を動かしてドラゴンの胴体へと向かう。海上を、走り抜ける。

走りながら空間に左で爪を立て、右で海からマテリアルを抽出し、胴体を一周して至る。

セイジが胴体上に到達し、青年からやや逃げ気味に攻防を開始。

「シユスイ、あれに介入出来る？」

「止めなくていいのか」

「止める？」

「敵ではない」

あのパソコンが最後に写したメッセージ。

「見たの」

朱翠は紙切れをセツナに渡す。持ってきていたらしい。

「刹那さんはどうしたい」

「私は……そうねえ」

ふむ、と一考し紙切れを見る。

「傷をつけずに拘束しなさい。コッソリ隙を突けばやれるでしょ」

朱翠はコクリと頷いた。

「タカミヤは……？」

璃摩にもセイジの援護を頼もうとして、当の本人がいないことに気がついた。



「雲は薄衣 朧羽衣」

遙か上空、雲に立った璃摩は髪を銀に染め、自らの神剣・月天弓を構え、セイジと相對する青年に狙いを定める。

「追の射」

呟き銀光を放つ。

紅蓮の爪を避け振り抜かれた腕の逆側へと回り込み、空いた脇腹に蒼光を押しつけ、体内に押し込む。

裏拳を寸前で避けて距離を取る。その直前にクリエイト・マテリアルを解除。魔法によって圧縮されていた魔力が一気に膨張する。

青年は脇腹に生じた異常事態に即刻反応。爪で腹ごと抉って異常事態を排除した。

「小賢しい！」

炎の噴出で加速された蹴りが飛んでくる。

受けようとして迫る魔力に反応。バックステップしながら、指弾で琥珀を飛ばして飛来するモノに合わせる。接触、速度を倍加したソレが青年の片翼を貫き爆砕。青年が大きく体勢を崩す。

セイジは仕掛の糸を引く。

周囲に爪を立てられた空間の刃が中央に向けて引き絞られる。刃は青年を捉え、そのまま振り抜き、その身体を真つ二つに斬り裂いた。

分かれたる青年を安堵して見ようとして、その顔を引き攣らせる。青年が嗤ったのだ。

右と左の腕で分離した左と右を抱き留めて、合わせてズラして元通り。

（馬鹿な。ライナーも人間同様死ぬ存在のはずだ。こんなデタラメなはずが）

分断されて再生する存在を倒す方法など知らない。  
甕星の記憶にすらない。

どのような幻獣でも、死に繋がる一手は必ず存在する。  
だがこの青年に対しては何も思いつかない。

琥珀の双剣を構成し、青年の爪を受ける。受け流し、斬撃を受けられて腹を蹴られ、飛ばされる。

青年の外見、シルエットは天使に見える。魔力の構成はホリンよりもラフィルに近い。だが近いだけで同質とは思えない。

(裏使徒のジーニアス神父に似ているとも言えるが)

師との旅の途中であった神父は墮天使であったが、それとも異なる断言出来る。

(じゃあ、こいつは本当になんなんだ?)

攻撃をすべて剣でさばかれて、青年は舌打ち。

一端距離を置いて爪を消し、左腕に電気を纏い、動きを止めた。

背後から、首筋にピタリと添えられた刃があった。

「魔剣。これなら殺せる」

「幻想武器かよ」

マスクをした朱翠が青年の斜め後ろに立っていた。

「シユスイ、ナイス。あなた、いいINJAになれるわよ」

セツナは「うんしょ」と登ってきてそんなことを言う。ノンビリと。

忍者は嫌だな、と思いつつ、朱翠は微動だにせず、青年の動きを阻害する。

「殺るのが殺らねえのか。それとも殺り合いたいのか、はっきりしやがれ」

「セツナ、危ないから下がってる」

がんばって登ってきた少女に、殺気だった言葉が投げられる。二人分も。

「セイジはシフトしないなら黙って観戦するか逃げるかしなさい。  
どうせ神剣じゃなきゃ倒せないんだし」

「お前、こいつがなんなのか分かるのか？」

「知らない。でもなんとかする」

(起動させたの自分だし)

それなりに、適当にYを押ししたことを気にはしていられない。

「あなたがアザゼルね？」

セツナはそう、青年を呼び、青年……アザゼルはセツナを睨みつけた。

「とりあえず言うておくわ。

なんとか戦争というのはとっくに終わってる。ツカサ・ヒザキはもうあなたの敵じゃないわ」

「「なんとかか？」」

セイジと朱翠がそこに反応。意味不明すぎる。

「ふん。戦争が終わったことくらい知っている。あいつが死んだんだから終わって当然だ。終わってなかったら、無理矢理にでも終わらせる。」

何より、司や璃々を親つつつてるでかい餓鬼がいるんだ。時間が経ってることくらいも分かる」

「じゃ、無駄な戦いはしないことね」

そう言って、紙切れをアザゼルの目の前にかざす。

書かれているものを読んで、アザゼルは無言で手を下ろす。

「一つ聞く」

「なにかしら？」

「こいつを浮上させたのはお前らか？」

「解体してぶち壊そうとはしてるわね」

つまり違つと。

「ぶち壊す、ね」

クククと喉を震わし、愉快そうに腹を抱える。

「てめえも司の身内か」

「娘で、あなたが殺り合ってたこいつの双子ね」

「こりゃ、いい。」

「一応言っておくと、別に殺してやろうとしていたわけじゃねえ。遊んでただけだぜ？」なあ」

セイジは話を振られ「いや、殺し合いましたよ？」と応じる。あんなじゃれ合いは嫌だ。

セツナに目配せされ、朱翠が刃を収める。

「それじゃ、お遊びは終了ということでOK？」

「OKOK」

「ツカサ・ヒザキは敵ではないでOK？」

「本人にあつたら分かんが、今はそれでOKだ」

「いささか不安の残る答だけど、今はそれでいいわ。

「じゃあ、私達はもう戦わない。OK？」

「お前ら、とはな」

「嘘付いたら腹パンね。今度は処理なしで」

アザゼルが自身で抉った腹部を指差す。そこにはもう新しい腹が再生していた。

「分かった分かった。こつちも痛みはあるからな」

セツナはパンパンと手を叩く。

「はい、じゃあ、物騒なの終了。こいつ沈めてさっさと帰るわよ！」

「それが一番物騒だ」

妹の言葉に突っ込んで、剣を収めた。

セイジの背後に璃摩が降り立つ。色は既に戻っている。

「どうなったんです？」

「セツナが場を仕切った」

「刹那先輩すごいですね」

「まあ、な。かなり無理矢理だが、らしいと言えばらしい」

視界の中で、セツナに文句を言いながらも空母を熔解しているアザゼルを眺める。

アザゼルはセイジに「悪かった」とだけ言った。悪びれもせず、

ただ笑ってだが、別に悪い気はしなかった。そんな笑いだ。

(服ボロボロだけどな)

膝を入れた時に膝は炭化して燃え落ち、右足だけ半ズボン状態。

コートも半壊。袖がない。

「それより、援護は助かった。タイミング良すぎて泣ける」

璃摩にそう声をかける。

「惚れました？」

「君が答を出せたら、その場で抱きしめて口吻をしてもいいと思えるくらいには」

「がんばって答出します！」

「出す頃にはそんな気持ちも薄れているだろうがな。吊り橋効果と言うんだろ？」

「酷すぎる。でも薄れる前にがんばる」

璃摩と冗談を言い合い、解体作業中のセツナ達から離れ、海の上に立つセレスの元へ行く。

セレスの後ろには、巨大な泡で包まれた数十体の妖精達がグツタリしていた。

「眠らされている。一応、問題はなさそうだ」

「しかし、早いところ彼ら専門の医者に診せないとな」

「ああ。先に行ってもいいか？」

セツナ達の解体はもう少しかかりそうだ。

「ああ。ゴールウェイでな」

泡を引っ張っていくセレスを見送り、木の船へと乗り込む。解体ではやることがない。

ぼんやりとアザゼルを眺める。

(魔法が効かず、魔剣を幻想武器と呼んで恐れる存在。魔法と魔剣・神剣は違うのか?)

新たな研究課題として認識する。

「今回のって、なんなんすかね？」

唐突にそんな質問がくる。

「アメリカとしては無駄に人命を失い、巨大空挺母艦を墜とされ、  
幻獣をまつたく連れ帰れずだ。損失しかないように見えるな」

「実験とか」

「実験、ねえ」

実験と言われて思い至るのは、スピーカー越しに聞いたロイド・  
ギアという男の声。

あれを思い出すと違うと否定出来なくなる。

ホリンを巨人に閉じ込めたのは間違いなく Re Human Pro  
jectの一端。あれがあるということはあの男も関与しているの  
だろうか。

あの変態とだけは因縁とか持ちたくないと思うセイジであった。

ワシントン、ホワイトハウスの大統領執務室で、マイケル・ラッ  
クスター大統領は頭を抱えていた。

数時間前、東海岸が津波に襲われた。襲われる前に魔構兵が出動  
しており、被害はふせげたものの、マスコミが騒ぎ出した。

その後、軍施設内で任務中であった二千人の兵が全滅したこと、  
津波が兵の死亡に関与していることがニュースで報じられた。

今、ホワイトハウス前はデモ隊とSP達で悶着が起こっている。  
ブリテン連合王国に派兵したこと自体は問題になってはいない。  
問題は、短期間で全滅させられたことである。

時間と金をかけて再生させた空挺母艦ハルパーまで墜とされた。  
ハルパー撃墜で、暴動まで発生した州もある。

電話のコール音。

出て告げられたのは、神聖メシーカが反撃を開始。奪い取った領  
土が奪い返され始めたとのことだ。

トロイ・ギアとは連絡が取れない。

ワールド・ギアでもギア財団でも、誰も自分と連絡を取ろうとし  
ない。

再びコール。

【マイケル】

「おお、エド」

相手はエドワード・ギア副大統領。

【残念だ。とても残念だよ】

ひどく沈んだ声で残念と繰り返される。

「それより聞いてくれ。国防長官と連絡が取れないんだ」

【エイムズなら先程自決した】

「なんだって？ すまんがもう一度頼む」

【エイムズ国防長官は、今回の責任を取って自決した】

聞き直し、聞かされたことにしばらく思考が停止する。

【我々は、神聖メシーカを長く打倒出来ないばかりか、ブリテン連合に派兵し貴重な兵を損失させた君には、大統領の責務を果たし権限を執行出来ないと判断し、君を更迭することにした】

エドワードの言葉が理解出来ない。

「ま、待ってくれ。ブリテンへの派兵はギアが」

【許可を出したのは君だ】

電話が切られた。

震えが止まらない。

自分はある時、一体何に了承のサインをしてしまったのか。こうなって尚、マイケルは頭を抱えるばかりで理解しなかった。

「神聖メシーカから撤退し、防衛に魔構兵を当てる」

マイケルとの電話を切ったエドワードは、目の前に揃うトロイとロイドにそう告げる。

「はい、副大統領。では、私はこれで」

トロイが退室し、ロイドが残る。

ロイドはエドワードの机上のチョコレートを口にする。

「ここからだね」

「うむ。だが、ハルパーを失ったのは痛いぞ」

「まあ、ね。」

まさかコアを再起動させられるとは思わなかった。僕達で出来ないことをやられると、さすがにへこむね。

あれがあればセカンドをすぐにでも起こせたのに……」  
時間がかかると嘆く。

「とはいえ、Re Human Projectの方はちょっと進んだかな。問題なく次の作戦は遂行可能だよ」

「ならばよい」

「そういえば、結局メルカード……いやこの場合はアルカナムか。彼らは将を使っただけで結局奥の手は出さなかったんだよねえ？」

「ロンドンの急襲は、国防騎士団と数名の傭兵により失敗した。アルカナムの介入に関しては、将を傭兵に派遣したとあるくらいか」

「あそこも、さつさと表舞台に引きずり出さないと、ね。そうしないと、本格的な世界大戦は起こらないからね。」

将じゃ、駄目なんだよ」

チョコレートを驚掴みで数個取り出して、副大統領のオフィスを出て行った。



## エピソード

空挺母艦を直径五メートルほどの鋼鉄の玉へと変えて、海に沈めた。

木の船へと乗り込んだ四人は、海の上で羽ばたくアザゼルと向かい合う。

「星司と言ったか。多分、てめえは面白い。だからもっと遊びたいんだが」

セツナをチラリと見て肩をすくめる。

「そっちの刹那って方がおっかねえから、今はやめとく。つうか、刹那やそっちの侍少年ともやってみたいが、それも今はいい」

「あんた、どこ行くんだ？」

「カテドラルを起こした奴をぶつ殺しちまいたいが、それよりまずやることあるからな。とりあえずは、地球上のどこかだ」

「カテドラル？」

「今沈めた奴のこと。まあ、親父にでも聞いてみる。答えるかどうかは知らねえけどよ」

司は過去の大戦のこと自体言っていない人である。聞いて答えるとも思えない。

「あと、俺はアゼルだ」

「アザゼルでしょ？」

「そうだけだよ」

セツナに返されて苦笑。

「昔、俺をそう呼び続けた馬鹿共がいたんだ。俺はそっちの方で呼ばれていた。それだけだ」

ふうん、とセツナは頷く。

「じゃあ、アゼル。ミスロジカル魔導学院まで来たら顔出しなさい。ごちそうするから……セイジが」

「そうな。それが俺の家での役割だけだな」

そんな少年少女を乗せた木の船が遠ざかっていく。

見送って、アゼルはもう海底奥深くまで行ってしまった金属の玉へと思い馳せる。手にはセツナから渡された紙切れを握る。

『魔女と踊り歯車を壊せ。オルゴールが壊れれば指揮者は顔を出す。』

P・S・俺はアゼルやサヤの忠告を無視して司と戦ったけど、結果に後悔はしていない。お前もするな』

「P・S・じゃねえよ」

呟き。紙切れは炭と化し風に消える。

空となった手を握りしめ、目から涙が落ちる。目をこすって涙を止めた。

「カテドラルの復活なんざ、ナンバーズ以外じゃギアにしか出来ねえ。」

司の餓鬼がでかくなるくらい時が経って尚、奴らが健在だってんなら、俺も魔女の掌で踊ってやるうじゃねえか」

しかし、と思う。

（指揮者？ 奴らの後ろになんかいるのか？）

「お前は一体、何を知っていたんだ」

アゼルはしばらく海を見つめていたが、やがて羽を一枚残して飛び去っていった。

三日後、ロンドンにおいて、遅れていた超鬼ごつこの賞である女王への謁見を終わらせた璃摩はバッキンガム宮殿の門を出る。

（はあ、肩凝った）

行われたのは勝利者謁見だけではなく、ロンドン防衛に尽力したメルカード財団所属の傭兵と小ブリテン防衛戦に参加した学院生代表への叙勲式もあった。

財団からはリチャード・ロードウェル……アリスアの兄、学院からは辞退したアリスアの代わりにオリヴィエ・ファールロスがそれぞれ

れ来ていた。

代表にオリヴィエが選ばれたのも、アリシアが辞退し、セイジが辞退し、しょうがないから第二班であったオリヴィエにお鉢が回った、という事情があつてのものであつた。

だから、璃摩は門前で腕を組んで待つていた少年に言う。

「式典辞退しておいてここに居るのつて、まずくありません?」

ミスロジカルの制服姿のセイジは顔を上げる。

「式典に制服着崩したまま参加した君に言われたくはない」

「嫌だなあ、これがボクの制服ですよ。つまり着崩してこそその正装と言いましようか」

「とりあえず、間違はなく卒倒したであろう学院長には謝れ」

そう言つて、ヘルメットを璃摩に渡し自分はバイクに跨がる。

「星司先輩も大変ですよ。解体でほぼ何もしなかつたからつて、ボクの送り迎えやらされるとか」

修理されたアークセイバーの後ろに跨がつてヘルメットをかぶる。

「まかり間違つてもそんな理由じゃねえ」

自身もヘルメットをかぶり、バイクを発進させる。

【君も一応は神州のお姫様だからな。一人で行かせるわけにもいかないだろうが。

主にうちの父親がそつちの母親を怖がつて決めたことではあるが】

【母さんと電話してる時の先生、青ざめてましたねえ】

【過去に何やらかしていても不思議じゃないからな。

すまんがもうちょっと身を離してもらえないだろうか】

【え、なんです? 聞こえませんが】

しつかりヘルメット付属のイヤホンから聞こえている。

【だから、押しつけるなど。いいか? 事故つて怪我するのは君もなんだぞ?】

【安全のために抱きついてるんですが】

【くそ、間に鉄板とか仕込みたい】

ボソツと呟かれた。

【何か？】

【なんでもねえよ！】

しばらく無言。

ニユーベリーに差し掛かったところで、ようやくセイジが話す。

【答は出たか？】

「お前は、世界を、敵に回せるか？」

いつでも思い出せる、あの問い。

【世界がなんなのか悩みましたが、世界の対象がなんであれ、一つ確実に言えることがあります。

甕星さんの敵がボクにとっての敵なんで、甕星さんが世界を敵に回したなら、ボクも回します。出来るかどうかじゃなくて、ボクにとってはそれがボクの筋なんですよ】

【俺が敵になったら？ その命を差し出すのか？】

【嫌です】

即答。

【敵になったら、敵でなくなるようがんばって、味方になります。死んだら一緒にいられないじゃないですか。

敵になるのも、死に別れるのも、もう、二度とごめんです】

そう答えて、更に強く抱きついた。

【重い奴だな】

【重くて結構です。それでも思わなければ、ずっと独りで生き続けるなんて出来ませんよ】

【そうか】

また無言。しばらくして、プリストルに入り、小さな公園で休憩を取る。

「結果はどうです？」

「そうだな……、とりあえず、敵になったらがんばって味方になる、は感動した」

「本当ですよ？」

「疑ってねえよ」

吐息。

「クエストや天幻の研究以外でもそばにいていい」

「利用目的以外ってことです？」

「だからそう言っている」

セイジの言葉「そばにいていい」を反芻してみる。

「あ、でも、それって、恋人とかそういうんじゃないですよね？」

「そっちの付き合いではないな」

「これからそうなるかも？」

トウエイン島で言ったことと同じことを聞いてみる。同じ答が来ると予想するが、来たのは違うもの。

「半神は親の力を受け継ぐ。俺は不用意に誰かを愛せない。愛せば、相手に加護を与えてしまうからだ。」

愛未満の感情、好意を寄せるレベルであれば、亜神化出来る程度で済むが、それ以上、愛を語り合うレベルまでいってしまうと……君も分かるだろう？ 個人に加護を与えることの意味を「

真剣な横顔だった。

「相手が加護に耐えきれなければ、良くて変異。悪くて崩壊」

「ああ」

「でもでも、ボクはそもそも人では」

「どうなるか分かったものではない。母の神族と君の神族は別物だからな」

神族が同じであれば、神話上のように問題もない、という。

「まあ、母はあまり気にしてはいない。気にしていたら、俺もセツナもこの世にはいない。」

たまたま父が母の加護に耐えられただけという話もあるがな」

あそこまで加護を扱いきれる人間も珍しい、とセイジは笑う。

「神州では一度、リオに対する欲に負けかかったが、あれは本人には知られていないはずだ。それに手の甲と額なら問題もないだろう、

うん」

ハハハとその笑いはよく乾いている。

「そばにいて好意を向け続けられれば、いつか好意以上に転ぶかもしれんが、期待しないでがんばれ」

「茨の道過ぎる」

「やめとくか？」

「まさか！ いつか来る大問題に耐えて、璃央その他大勢から勝ち取ります！」

拳を固め、フンと息巻く璃摩。

その他大勢？ とセイジは首をかしげる。

「ということなので」

前置きをしてから璃摩はセイジに抱きついた。

「キスしましょう」

「人の話聞いてた？」

「今後がんばるためにも！」

「君の今後を考えると、がんばらせないのが俺の取る道とも思える。いや、マジで」

（実を言えば、加護を与えるだけなら問題はない）  
神族関係はフェイク。

甕星自身が悪神とはいえ天津神に在籍するのだから、加護があったとしても璃摩とは同族のため問題などあるはずもない。

（感情は暴走する。愛から生まれる加護の暴走。それが問題。

正直なところ、月読は信用出来るし信頼も出来る。俺はそれを知っている。こいつの答に感動したのも偽りなし。だからこそ）

だからこそ、変えたくない。加護を与えるような状況にもなっ  
てほしくはない。

それがセイジの本心であり、問題の一端。

ただ神として加護を与えるだけなら問題はない。だが、そこに感情が加わると制御する自信がないのだ。

なんだかんだと言ってはみても、結局は、甕星の力にオリンポス

の愛神の力が加わった状態を制御する自信がなければなのである。  
その情けなさを自覚しているからこそ、自制出来ていると言えた。  
「ほら、さっさと帰るぞ。神州からの短期留学にも備えないといかんからな」

璃摩のハグを解き、バイクに跨がる。

「ありましたね、そんなイベント。天宮からなら、ボクはあまり関係ないと思いますけど」

「ミカドというところからも来るらしいぞ」

「ボクの母校じゃないですか」

天宮学園の姉妹校に当たる御門学園。璃摩はその中等部出身である。

「ミカドからは三人来ると聞いている。二人は俺が要請したが、もう一人は知らん」

（神州では九曜頂の立場しかない先輩が要請とか。日崎家関係？ひよつとしたら）

予想通りなら、久しぶりに楽しい思いは出来そうだが、下手したら嫌な相手も来るかもしれない。

悲喜ない交ぜで、バイクに跨がり、少年の背により強く抱きつく璃摩であった。

ミスロジカル魔導学院の地下闘技場は開放されているが、今は自主練している生徒の姿はない。

秋は独り岩に腰掛けていた。

その頬は腫れ上がり、絆創膏がそこかしこに貼ってある。

小ブリテンでの一件の後、ホリンとセレスとネコに思いきりぶん殴られ、セツナからはひっぱたかれた。しかし……。

「くそっ」

右拳を固め、左手でそれを思いきり握る。その表情は物凄く辛そ

うに歪んでいた。

ベルファストで合流した琴葉は事の次第を聞くと、怒りも叩きもせず、ただ「そう」とだけ呟き、いつもと変わらない様子で接した。学院に帰った秋は老教官からこっぴどく叱られ殴られたが、自分が正しいと評されたアリシアは秋の行動を一切咎めもしなかった。

遅れて戻ったセイジは「消火班には関係ない。ただ、怪我しなくてよかった」と言ったただけだ。アリシアが怪我したことには触れもしない。

仲間の決断を信じ、護ろうとした行動は間違っていない。それは皆に責められた今でもそう思う。だが、それによって仲間の一人が傷ついた。責められるべきことをしてしまった。

だから、責められないことが一番きつい。一番責めるはずの相手が責めず、ただ、普通に接してくる。それがどうしても辛くてしょうがない。

今、学院には、セイジもオリヴィエもない。

秋は独り、拳を握り、奥歯を噛みしめ、声を殺して涙を流した。



## 前日

「今更ですが、煉龍さん考案のストライカーチームは失敗だったと思っんですよ」

ドッグズランに繋がれた人工島施設の一室で、司はそんなことを口にした。

フィッシュ&チップスをつまみながら耳を傾けるのは、十代前に見える金髪碧眼の白人の、幼女である。腰ほどに長い髪を三つ編みにし、フリルの着いたベージュのドレスを着ている。

「聞いてますか、メルメルさん」

「聞いたるよ」

幼女……メルメルさんは頷いてまた、白身魚のフライに手を伸ばした。

「本当に今更だな」

「そう付けたじゃないですか」

「何が失敗かと挙げれば、ロードウエルの息女にグラスキャリバー以外の武器を携帯させなかったこと。あれは対人用ではないからの。

あとは、その割に聖剣開放を許可しなかったことだなあ。

おい、フィッシュなくなつたぞ。補充せい」

受け皿をメイドに渡す。

「日崎星司様からご提供の品は終了致しました」

流れるような赤い髪で頭に金刺繍のカチューシャを載せたメイドはそう言って頭を下げた。

「ぶっちゃけ食い過ぎでございます」

頭を上げてそう口走った。

「じゃあないの。チップスだけで我慢するか」

食い過ぎは敢えてスルー。

「僕、一切れしか食べてなかったんですけど」

「いやあ、日崎の倅の作るものは美味しい。夏休み中はずっとそばに

置いておきたいぞ。

「司は良いではないか。家に帰れば食べられるのだから」  
「言われてみればそうである。」

「家というか、子供達が入っている第三学生寮に行けば、大概はセイジが用意している何かしらの作り置きがある。」

「チップスを小さい口ではむはむ食べて飲み込む。」

「今日からだったか。例のは」

「天宮と御門の両学園から数名見繕って送り出された先遣隊ですね。今回の成功が見込めれば、本格的に短期留学の話はまとまるそうですね。」

「ふむ。数週間でよくまとまったものだな」

「元々そういう構想はあったんですが、九曜頂で半数以上の反対があり構想で終わっていました。ところが、反対側だった天宮が代替わりで賛成に回ったばかりか、日崎まで賛成に参加してようやく、と」

「九家の内五家が賛成で可決。完全にギリギリである。もっとも、残り四家の内反対は二家で他は中立を貫いているのだが。」

「そういえば、今回の人数は十一ですが、二人は天宮でも御門でもない監査役が入ってますね。あ、監査役は一人です」

「VIPだな」

「ええ、VIPです」

「して、司は教壇には立たんのか？」

「授業明日からなのに教官がこんなところで何をやっているのか、と。」

「実演込みで十三期生がやることになってますね。」

「源理に関しては主にうちの娘が。戦技に関してはホリン君とセレス君が。」

「あと、魔鋳に關してもやるそうですね。果たして短期でそこまでいけるかはちょっと疑問ですが」

「梧桐の倅はどうした」

「へこんで使い物になりませんねえ」

へこんで穴空いてます、と肩をすくめた。

セイジと琴葉からの対応に悩み続けているらしい。

「あの二人が口も手も出さない理由は分かりますが、問題は秋君がその理由に気づいていないことなんですよね。彼は言わないと分からないタイプですから」

「日崎の倅も龍也の妹もそれを知っていて放っておいているのだろっ？」

「でしょうね。」

言わないと分からないからといって、安易に自分達から教えるわけにもいかないってところですかね。

そこは気づけ、みたいな。

もつとも、あの二人は秋君からちゃんと疑問として聞かれれば答えてしまうのでしょうか」

「それが、理由をちゃんと理解出来る自分達以外の相手から教わるのもアリだな。」

誤解なく伝えられる相手を見つける運も必要だ」

「ですねえ。と、そろそろ僕は行きますかね」

司は時計を見て立ち上がる。

「足はどうしようかな」

「箒に跨がっていくがよい」

「お尻痛くなるから嫌ですよ？ ロンドンからベルリンとか裂けちゃいますよ」

メイドが無言で掃除機を差し出した。司が受け取ると、メイドは親指を立てて片眼をつぶった。無表情で。

「掃除機に乗れと」

「大変間抜けで新聞に載ること必至でございます」

「ゴモリーさん」

「キメ顔でなन्दございませう」

「おっぱい揉ませてくれたら掃除機に乗りましょう！（キリッ）」

メイドのゴモリーさん、無言でメルメルさんを見て「こつちを見るな」と目を反らされる。

数秒悩んだ後、司に顔を向けた。

「アウレア様にご報告致しますが、よろしいでしょうか」

「うちの奥さん、結構こういふことには寛大なんですよ」

「『美神のおぱーいより悪魔のおぱーいの方が好みだ、と旦那様は熱弁振るいながら揉みしだいていた』と」

「ごめんなさい。二度と言いません。調子こきました。浮気もした  
ことございません。」

「いやいや、そこで第一ボタン外してカモンとかやられても本当  
困るんで」

司は平謝り後に「ありがたくいただく」と掃除機を握って逃げ去  
った。

「へタレだな」

「まったくでございます」

肩をすくめたメルメルさんは司の足音が聞こえなくなっしてから、  
真顔になる。

「して、ゴモリーよ。神州からの客人が乗る船は何者が護っておる  
のだ？」

「神薙殿の眷属の……ミズチでございます」

「龍也め。素知らぬふりしてちゃっかり護りをつけていたか」

「九曜頂として賛成票を投じてもおられますし、当然と言えば当然  
かと。」

もつとも、霧崎殿の弟君がリストに入っているためとも言えます  
が」

メルメルさんは腕を組む。

「ミズチといえど往復は辛かるう。帰りの船にはヴェパルを護りに  
当たらせよ」

「かしこまりました」

ゴモリーを下がらせ、冷めたチップスを手に取る。

（短期留学は二週間余りだったか。

日崎の倅の思惑は呼び寄せた分家に九曜頂・天宮を護る力を与えるため。

龍也の思惑は神州の魔法知識レベル向上のため。

果たして二週間足らずで目的を遂行出来るものなのか）

極東の魔法知識レベル向上は悪いことではない。向上することで、アジアのバランスが保てる可能性が上がる。

（神州に誰か派遣するか？ 教員では目立ちすぎる。生徒として送って内側からでもいいか）

リンゴ色のほっぺを膨らませ、ムムツと悩む幼女がいた。

老教官・神薙煉龍は呼び出した生徒を正面から見ろ。

オリヴィエ以下数名（取り巻き達）である。

「おめえらにはこれからノイエに行ってもらおう。司の野郎も行った。まあ、やつのサポートだと思え」

「了解です。僕の友人達も選別していただきありがとうございます。礼儀正しく頭を下げて言う。」

「サポートをうまくサポート出来る人員を選んだだけだ。礼を言われることでもねえ」

「ノイエ・シユタールは魔構に偏った姉妹学校と噂でしか知らなかったなので、見聞を広める機会をいただけたのは大変うれしく思います」

「おうよ。うまいこと見聞してこい」

「今晚から臨海学校つすね！」

「そっだな」

「到着は今日の夕刻でしたっけ？」

「すみません、そっちの胸肉を」

「誰が来るとか着くまで秘密って、どんな拷問かと」

「サービスですか？　ありがとうございます！」

「爽やかな先輩とかちよつと引きますよ」

「失礼だな、おい！」

マーケットのど真ん中で、璃摩に声を張り上げるセイジ。手にはここまで買ってきた食材の袋が大量に握られている。

今日の夕刻には学院に到着する神州からの短期留学生のため、学院からクエストという形で夕食の食材を買い付けに来ていた。璃摩は神州の人ということでおまけである。

「荷物が多くなることを考えれば、シユスイでも良かったか」

「そんな、榊君とデートしたかったと?!」

ガーンと頭を抱えた璃摩に蹴りを入れる。

「男好きでもデートでもねえよ!?　ク・エ・ス・ト!

俺には不要だがリマには単位1点入るんだから、真面目にやれ」

尻を押さえ涙目の璃摩は「へーい」と返事をした。

「とはいえ、留学先で神州の料理もへつたくれもないと思うんですけど」

「安心しろ。俺も同じ考えだ」

故郷の料理など食べ飽きている。そんな相手に故郷の料理を出してどうなる、と。

「神州料理はまず間違いなく、レンタツのじいさんと父さんの要求と思われる。」

俺は作らない。というか、作れないからなしだ」

「普段から食堂に日本酒隠してシエフに怒られてますもんね、教官達」

「娯楽用くらいは良いと思うんだがな。」

お。これは買わねば……」

白身魚とビールを買う。

「何故、魚とビールを」

「貴族連中はローストビーフをやる気満々だからな。」

伝統と言えば伝統だが、イギリスがただ焼くだけの料理だけと思われるのは癪だ。それ以外もあるということを目わわせてやる」

「あるんです？」

セイジが固まった。

「君、何ヶ月こっちにいんの？」

「いやあ、イギリスのご飯はまずいから絶対食べるなど、母さんから忠告を。」

なので、学食と食堂ではイギリス料理は完全無視でした」

ざわ。

マーケットの空気が変わった。凍りついたと言ってもいい。

セイジは爽やかな笑顔でリマの肩に手を置いた。買い物袋の食材の重みがズツシリと肩に掛かり「ぬお！」と呻いた。

「リマ・タカミヤ、君には俺の手料理を存分に食べてもらおう」

「告白です?!」

「そう、君に罪の告白をさせる」

「ボクが?!」

「ククク、ファーストフードにおいても、アメ公とは格が違うと教えてやるわ」

セイジは時々料理関係でこうなる。

璃摩が女王謁見後の数日でセイジを見て気づいたのは、取得単位修了ということ、

一、研究棟に籠もって天定の幻想魔法の研究。実験には璃摩も付き合う。

一、どこかの国の料理本を読んでいる。挑戦して一日中厨房に籠もる。

一、レンメル・クロケットの試作魔構品のテスト。で時間を潰していることか。

「先輩は他の先輩達みたいに下級生の実習に付き合わないんです？」

「君のに今付き合っているわけだが」

「今は逆ですよ、逆逆」

「ん？ ああ、そういやそうだな」

つい、うつかりという風に頭を掻いた。

「あの実習同行は、下級生側から事務経由で上級生を指定してやっている。俺を指定する下級生がいないから、こうしてまったり出来るわけだ」

「春先、先輩を指定するんだって子、結構いましたけど？」

「俺が源理使えないことが十五期生間に知れ渡る前のことだな。」

事務の方もあらかじめそう言っておいてくれればなあ」

遠い目をしてハハハと笑う。

素朴な疑問で古傷を抉つたらしい。璃摩も口元を歪めて苦笑いである。

セイジの胸元から着信音。

「……クロケットから宅配？ シュスイに？ シュスイなら……いや何処かな。ラフィルに連絡取れば捉まるんじゃないか？」

電話を切る。

「榊君つて、携帯持ちませんよね」

「インカム着けてるから、学院内でなら連絡取れるんだがな。それ以外だとラフィル頼みだ」

「学院内でも連絡取れないことが多々あるんですが……」

「チームがそれでいいのか？」

ガーデンの作戦以降、朱翠とラフィルと璃摩の三人がチームとして学院にパートナー登録された。遊撃隊としての活躍を評価されたためである。

「チームとか言い出したら、先輩のところが一番問題じゃないですか？ 今のところ。」

後輩間での噂第一位は、『十三期生ロウエンド第二班崩壊の危機ですよ』

『班の前衛が起こした不始末に、パートナー達総スカン』



学内新聞でデカデカと飾られた文言である。

「どこから漏れたのやら、だ。」

まあ、探すまでもなくあいつらなんだろうが」

オリヴィエの取り巻きしか思いつかない。

「シユウへの対応はアレでいい」

新聞で取り上げられる前に聞いた時と同じ答。

吐息。

「まあ、今回ばかりはあいつもかなりへこんでいるようだが、今日からのイベントでは多少はまぎれるか」

「臨海学校です？」

「ああ」

「ひよつとして、誰が来るかとか知ってるんじゃない？」

「知ってるが、問題か？」

「ずるい！ ボク知らないのに！」

参加者のリストは当日現在をもって未だに非公開。知るのはい部のみである。

「元々、俺が君の祖父に首を縦に振らせたことから始まっていることだしな。船舶も九曜・ヒザキが用意したものだ。把握してない方が問題だぞ」

「言われてみれば！？ でもずるいのに変わりなし！」

やれやれと、肩をすくめ、セイジはセントマイケルズマウントへの橋に足をかけ、

「やあ、ヒザキ君。これから食事の準備かい？」

爽やかに声をかけられた。

オリヴィエと取り巻き数名が旅支度で橋を渡ってきたところだった。

「そんなところだ。オリヴィエ達は……里帰りではなさそうだな」

「ちよつと学院のおつかいでノイエ・シユータルに行くことになつてね」

「ほお、ベルリンか」

「おすすめはあるかい？」

「とりあえず、ノイエの学食で出すシュニッツェルを食べるといい」  
「シュニッツェル、ね。うん、覚えた」

「ありがとう、と礼を言つて、オリヴィエはマラザイアン駅へと歩いて行つた。」

「シュニッツェルってなんです？」

「カツレツだ」

璃摩の問いに即答。

「カツレツって……なんでそんな庶民的なものを薦めるですか。嫌がらせとか」

「馬鹿野郎。」

ノイエ・シュタールの学食はな。仔牛のヒレ肉を使用した高価な物を出すんだ。退官した軍属シェフが腕を振るつてな」

ドイツは軍国主義で、軍部の食糧事情はやたらといい。庶民では手が出せないほどである。

「学食に使つてる金が違う。」

「ちなみに、今晚はチキンのシュニッツェルを作る予定だ」

「仔牛ではないんすね」

「そんな予算は出ていない」

世の中、金である。

夕日の落ちる頃、セントマイケルズマウント前に一台のバスが停まり、乗員は橋を渡つてミスロジカル魔導学院へと到着した。

「よう、でかくなつたじゃねえかよ、凜。一部は控えめだが」

「お祖父様は変わらないですね。セクハラでぶん殴りますよ？」

神州側からの短期留学生の引率である神和凜は、ミスロジカルの老教官であり祖父の神薙煉龍と再会する。

「引率教員神和凜以下、短期留学生十一名、到着しました。本日よりよろしくお願ひします」

「おう。よく来たな、餓鬼ども」  
挨拶を受け、老教官は呵々と笑った。

## 顔合わせ

宴会料理の運ばれ済の地下闘技場には、里帰りをしなかった生徒達と神州からの短期留學生がおとなく席についていた。

その宴会場に向かつて、梧桐秋は足早に歩いていった。

自室で考え事をしていたら、気づけば学生寮から人の気配がなくなっており、時計を見て慌ててきた。というのが真相である。

（結局、十五期生は大半が里帰りか。短期留学の話自体が降って湧いたもんだし、しょうがねえか）

十五期生と数名のクエストでない生徒を除き、留學生を含めて百人ほどが学院にいることになる。

アリシアを含め貴族出身のハイエンドも何人かは帰省中である。

（オリヴィエ達もいねえし、暇になったな）

今のところ、クエストの予定もない。

セイジに組み手でも頼もうかとも思うが、先日の一件以来、どうもそういうのを頼みづらい。超鬼ごっこで自分を捕まえた女生徒といるのもそれに拍車をかける。

吐息。

（うまくいかねえな）

頭を搔いて、地下闘技場への入口のある中庭で、足を止めた。

ちょうど自分が入ろうとしていた入口に入るところの少女がいた。

少女はふと足を止めて秋の方を見て、目を大きく開けた。

白髪の浴衣姿の少女は「秋？」と口にする。

「紫？　なんで、お前……」

今は京都にいるはずの、秋がよく知る少女・緋桜院紫は、秋を見てうれしそうにはにかんだ。

「ごきげんよう、秋様」

「あ、ああ」

（なんで紫がいるんだ？　留學生って天宮と御門からだけじゃねえ

のか?)

パタパタと草履の音を立てて、小走りにきて、秋の胸元にポフとダイブした。フワリと藤の香がした。

「やっぱり、紫だ」

「どなただと思っただんですの?」

少し怒ったように見上げてくる少女を、思わず強く抱きしめる。

少女は少し苦しかったが、がんばって手を伸ばし、秋の頭を優しく撫でた。

「辛いことがあつたんですね」

しばらく、その状態でいたが、秋は紫を放す。

紫が留学生なら、宴会場に行かなければ宴会は始まらない。

「悪い」

「いいえ」

ばつの悪そうな秋に対して、紫はただ微笑むばかりである。

やや足早に紫を案内し、宴会場に入れば、老教官に「おせえ」と叱られた。

「つまり、そちらがシュウの婚約者の方なのね?」

セツナが秋に確認を取って、紫に顔を向ける。

「お初にお目にかかります。九曜頂・緋桜院紫と申します。今年で十と七になります」

挨拶された。

「こちらこそ、はじめまして。セツナ、ヴィオ・ヒザキよ。九曜頂・ヒザキの双子の妹、と言えはいいの? 少し前に十八になったわ」

「日崎刹那様ですか。至源様のお力を継承するすばらしい方だと聞き及んでおります」

やんわり尊敬の念を向けられて「いやあ」と嬉しくなってるセツナ。こういうタイプははじめてであった。

「つつかよ。アオギリの文通相手するのは実在したんだな。婚約者

とか脳内の話かと思つてたぜ」

「秋も育ちが悪いだけで、家柄が悪いというわけじゃないという」とよ」

ホリンと琴葉がそんな感想を言っている。

そんな琴葉の前には凜と萎縮したおかつぱ頭の少年が座る。

少年は天宮学園中等部の制服を着ており、凜や煉龍によく似ていた。

「凜は秋に突つかからないのね」

「ふん。今でなくともやる機会はいくらでもある」

「やる気満々なのね。引率を買つて出たのも、秋が目的にしか思えないわ」

凜と会話してから少年へと顔を向ける琴葉。

「はじめましてかしら？ 神薙琴葉、九曜・神薙本家の小娘よ」

「は、はじめ、はじめ、まして、神和弓弦……です。よ、よろしく、おね、がいたします」

「ええ、よろしくね。分家の小倅君」

琴葉の挨拶にホリンが噴いた。

「なんで偉そうなんだ」

「あら、私は誰にだつて偉いのよ」

「学院がお前を王室絡みの式典関係に出したくない理由つて奴だな」

「まったく、失礼な話よね」

とはいえ、本家の小娘と言っても、神州には寄りつかないせいか神薙本家は龍也一人という誤解まであるのよね。ねえ？ 勇」

弓弦の隣で黙々とチキンのシュニツェルを食べていた少年に話を振る琴葉。

傍らに刀を置いて正座する、少年は琴葉から顔を反らす。

「まだそのネタ引つ張んのかよ」

少年こと九曜頂・霧崎悠の弟である霧崎勇は、一切れ飲み込んで愚痴を漏らす。

「きつと勇が九曜頂になつても引つ張るわね」

「宣言するなよ」

事情の飲み込めていないホリンに少年を紹介する。

「こちら、龍也と入籍寸前の女性の弟で霧崎勇。姉が九曜頂・霧崎をしているけれど、神薙に入籍すると席空くから弟が跡を継ぐのよ。龍也に紹介された時に、神薙が二人兄妹であることをはじめて知ったらしい。

ちなみに誕生日が私より一日早いせいで義兄と呼ぶ屈辱が待っているわ」

「屈辱とか俺が泣きたい。つうか、年同じなのになんで学年違うんだよ?!」

琴葉も勇も今年で十七歳。セイジ達より一つ年下である。

「それは私が飛び級をしたから」

「マジか」

「嘘よ。こつちの学院は入学資格が十五からもらえるだけの話よ」

「なんで嘘をついたんだと」

「……反応が面白いから?」

「神和先生、あんたの従妹ひでえよ!?!」

凜は無表情で「諦める」と呟いた。

「タツヤの嫁さん、確かリンカーじゃなかったか?」

「ええ。この駄兄もリンカーね」

「姉弟でか」

「しかも敵対神族」

「お前……楽しくなってノリで口走ったよな?」

ホリンのツッコミに琴葉は思わず無言。数秒後、コクリと頷いた。「神族が異なるのは正しいのだけれど。神州の神族とかよく分からないからなんとも言えないわね」

「ふうん」

そこで会話が終わり、勇はキョトンとする。

「誰がなんの転生かとかこつちじゃ話題にならんのか?」

神州でも話題に上がらないが、興味くらいは持たれるものだ。

「だって神州のリンカーって記憶ないから、過去がどんな超越者でもあまり意味ないでしょう?」

琴葉の言葉に勇は黙る。言い返せないからだ。

「姉さ……コホン。悠のように記憶の封印に失敗したでもなければ、リンカーらしいリンカーがいない国ですもの。なんと行っていいか遠慮してしまうわ」

(まあ、天宮璃摩のような異質なものもいるようだけれど)

琴葉は入口付近にいる璃摩に視線を向ける。

神州の公式では、天宮璃摩は記憶を封じられた転生者である。しかし、学院での、特にセイジと接触してからの璃摩は通常の転生者以上に力を使いこなしている。

琴葉は、璃摩が転生者ではないとまで考えている。

(かといって、ライナーでもないのよね)

転生でも降臨でもない。故に、異質と呼ぶ。

「ところで、あの一画にいるのは御門学園の方々でしょうか?」

琴葉が言う一画には、学ランとセーラー服の少年二人に少女一人

「一人、あの九曜頂・緋桜院の和装並に浮いてるのがいるわね」

セイジの斜め前、璃摩の正面に、天宮でも御門でもないガラのセーラー服を着た、セミロングヘアの少女がいた。

「九曜・天宮の分家である九曜日下の長女だな。」

九曜頂・緋桜院の学友で、一応、九曜頂の護衛みたいな感じで参加してるらしい」

勇が言うには、今回の参加者は大半が九曜関係者であり、そこから成果を出さなければいけないらしい。

「九曜じゃなかったら、御門の……あのデカイ茶髪とか天宮分校から来てるあいつらとかあっちにいる子とか、四人しかいない。」

つつても、あのデカイ茶髪は親が烈士隊だったから、ひよとしたらどっかの九曜に雇われてる可能性もいなめないけどな」

「烈士隊、ね。雇われてというと、どこの九曜旗下でもない部隊とということでしょう?」



「どこの旗下でもない、そういうところに所属してるのほど意外にすごかったりするんだぜ。」

黎明期にいた武本翠みたいにな」

「たまに聞くわね、神州黎明期の剣聖の話は。確か……」

琴葉は三人の名前を思い出す。

「佐伯四郎、嘉藤利則、武本翠だったかしら？」

「あっちのデカイ茶髪は嘉藤利則の一人息子でさ。剣の腕も結構立つんだぜ」

琴葉が勇と剣聖の話にのめり込んでいる頃、セイジは御門の制服を着た少年少女を前にフィッシュ&チップスに手を伸ばしていた。

一人は肩まである髪を輪ゴムでまとめた精悍な少年。名を桐生夏紀という。

一人はラフィル並に背の低い小生意気そうな少女。名を水城雛という。

「二人ともよく来てくれた」

セイジの言葉に夏紀は「いえ」と応じる。

「自分達は日崎の分家の中でも末も末。本当に自分達で良かったのでしょうか」

桐生も水城も九曜日崎の分家筋であり、立場は名前だけとまで言われるほどに低い。

セイジは神州を出る少し前に、日崎本家に寄り全分家を招集し今回の件を認めさせるという行動を取っていた。

短期留学の賛成として分家から参加者を選別したのだが、数多い分家の子供達からこの二人を選んだ。その時に言った理由が「分家家長から離れすぎているから」である。

分家達の意向から離れた位置にいるから、と。

分家を招集した段階で、ほぼすべての分家が本家の日崎ではなく分家の御崎に従っていることに気づいたため、御崎には従わず、中

立的な立場を通していた桐生と水城に目を付けたのである。

中立的だった理由は、両家共に先代を亡くし代替わりして間もない。この夏紀と雛こそが両家それぞれの家長である。

若すぎて力もないため、御崎も傘下に加えていなかった。

「九曜頂がアタシ達をほしって言ったんだから、それでいいじゃんよ」

雛が口を尖らせる。

「しかしだな」

「なつちゃんも慎重すぎて恋愛のチャンスも逃がす超奥手野郎なんで、あんま気にしなくていいですよ」

このチキン野郎め、と雛が夏紀の皿からチキンティツカを奪い取った。夏紀はしばし呆然と自分の皿を見つめる。とっておいたらしい。

「いや、まだあるからそこまでガツカリせんでも……」

シユスイ、そっちの取り皿を」

御門のデカイ茶髪少年の前にいた朱翠に鳥料理三昧の皿を取ってもらい、夏紀に取り分ける。

「少しくらい疑問に思ってもらえるくらいがちょうどいい。こっちに來たら言つとも言つておいたからな。」

必要とされることを喜ぶのも重要だけだな」

ちよつとシユンとした雛に対しても言葉を付け加える。

「君らにはこっちで鍛えた後、ミカドからタカミヤに転入してもらう」

転入と聞いて夏紀は眉根を寄せる。

「天宮の先代が気に入らないというだけで、天宮学園に入れなかった生徒が御門には多い。それは日崎の分家も、と言えるでしょう」

「その点は大丈夫だ。タカミヤの頭の了承は得ているから心配しなくていい」

九曜頂・天宮は天宮璃央であると、セイジが神州を出た辺りに正式に発表があった。そのため、天宮の頭とはそのまま璃央を指す。

「うちの九曜頂がりまっちの姉の護衛をしたって話は聞いたけど、生徒の転入をOKさせるくらい懇意にしていると知らなかったなあ」「懇意云々ではなく、君らを彼女の護衛役に回すことを了承してもらっただけだ」

「まあ、アタシは九曜頂に従うよ。分家冥利って奴っしょ」

「そう言ってもらえると助かる」

エへへと笑顔で雛はマンガ肉に食らいついた。

「見出していたいただいた恩に報いましょう」

夏紀も雛同様に了承する。

実際のところ、セイジはこの二人の魔力を見て決めたと言える。

分家の末と言われる割に、資質が本家（本家で老後生活をしていた祖父）に近いと判断したらからだ。

（潜在的には、初代のヒザキに近いか）

カガトを名乗っていた頃の自分に仕えていた一族に思いを馳せる。「てかね。なんでりまっちは、うちの九曜頂の隣に普通に座ってるの？」

「えっ？」

ちょうどスコッチエッグにかぶりついていた璃摩が顔を上げる。

「もふもふ」

「飲み込んでから」

璃摩は隣と正面から注意される。セイジと、セミロングの髪を食事の邪魔にならないよう後ろで留めた凛々しい少女、日下真咲である。

璃摩が、喉を詰まらせる。

「んぐ……み、みず……」

真咲が無言で差し出した水で飲み込み、安堵の息を漏らす。

「助かったよ、真咲」

「……」

「……感謝します、真咲」

「月姫様も天に召されずによかったですね」

一度目のお礼は無言でスルーされ、言い直してようやく返事が来る。セイジは璃摩の額に冷や汗が浮かぶのを見た。

璃摩の服装を見てから、真咲はずっとこの調子である。

「パートナーだから？」

「そんな事実はない」

「すみません。”研究の”を付け忘れました」

二度目でセイジの頷きを得てホッとした表情を見せる璃摩に、真咲の視線が突き刺さる。

（真咲が来るなんて聞いてないよ。もうなんていうか、針のムシロ状態？）

なっちゃんと雛が来たのはうれしいんだけど……）

天宮と御門と聞いていたため、完全に油断していた。

「どうしてこいつは唐突に話し方が変わったんだ？」

セイジは雛と夏紀に寄って聞く。

「学園内では奔放だったけど、家とかの公式では姉とほとんど変わらない、というか見分けが付かないような仕草だったらしいですよ」  
雛が話してくれる。

よく、家では舌がつるとか話していたらしい。

「礼節の部分で家の恥、と天宮に通うことを許されなかったそうです」

「はて、あの学園、シユウの姉などを見るかぎり、そこまで厳しいとも思えないのだが」

「理事長の孫娘としての立場上ではないでしょうか」

「なるほど、そういうことか」

（公式の場に出た時のアリスのようなものか）

アリシアは学院の代表で行動する時など、完全に姫と化す。

男物の剣士衣装での大立ち回りなど別人としか思えない。

（兄のような騎士を指す本人としては複雑なんだがな）

思わず苦笑してしまい、夏紀と雛に妙な顔をされて咳払いする。

（では、分家のお嬢さんを前にして家にいる時と同じ状態になろう

かどうかで現在悩み中といったところか。難儀な奴め)

セイジは右を見て左を見て「ふむ」と漏らす。

「リマ」

「なんですか？」

「ラフィルが酔っている。少し風に当たらせてこい」

「へ？ 今……あ」

セイジの意図に気づいた。

「ラジャったつす」

うれしそうに立ち上がって、小走りにラフィルの元まで来る。確かになんか酔ってる。

「お酒飲んだ？」

首をかしげる璃摩に、朱翠が紅茶を指差す。

「ブランドーで酔った」

「えどんくらい入れたの？」

「一滴」

「そんな馬鹿な」

朱翠に寄りかかったラフィルを揺すってみる。

「うにゃあ、私もキオンと話すですよー」

「駄目だ、この子。じゃあ、ちょっとこの子連れてくね」

朱翠の頷きを見て璃摩も頷いた。

「ほら、ラフィル・エル？ 行くよ？」

ヨイシヨと担いでみる。ラフィルは異常に軽く、璃摩の力でも簡単に担げた。

天使を担いだ少女の背中が中庭への通路に消える。

「ところで、そちら」

「おう、セイジ」

夏紀が朱翠のことをセイジに聞こうとした矢先、ホリンが勇を引きずって現れる。

「こいつ、タツヤの嫁さんの弟だってよ」

「へえ？ 確か、名の読みが同じ弟がいるとか言っていたな。とい

うか、引きずるな」

「ちよつくら腕試しやってくるが、お前も来ないか？」

「酒が入ってるから、いい。遠慮する」

「お前、そんなくらい気合いでだな」

「無茶苦茶言っな、おい」

「んじゃ、シユスイ借りてってもいいか？」

「そうだな……」

そこでふと、セイジは、夏紀の得物を初対面時に聞いていたことを思い出す。

「キリユウ、ホリンと槍で遊んでみないか？」

「自分が、ですか？」

「ああ。ホリンは戦技の手本もやるからな。今の内に見ておくのもいい」

降って湧いた学べる機会に、夏紀は口元をフツと緩めた。

「では、失礼して」

立ち上がり、ずっと無言でいるデカイ茶髪の少年、嘉藤勝利に顔を向ける。

「嘉藤」

「あ？」

名を呼ばれ、不機嫌そうに夏紀を見上げる。

「君の好きな腕試しだ。来るだろう？」

勝利はチラと朱翠を見てから「やれやれ」と立ち上がる。

「じゃ、俺も」

「そうこなくつちなな」

で、セレスは……はあ？ なんでお前そつちなんだ？」

セレスの姿を探したセレスは当人を見つけてキョトンとする。セレスが青年状態で食事をしていたからだ。

「事情がある。そして俺はいかない」

「つれない奴だな」

「んじゃ、予習行くか」

テンションの高いホリンが数人を連れて出て行くと、宴会場がやや静かになった。

雛は夏紀についていったらしく、セイジの周辺はかなり静かだ。

「行かなくてよかったか」

「行ってもよかったが、キリュウの隣は妙にシユスイを気にしていたようだ」

「気づいていたか」

「そりゃな。知り合いか？」

朱翠は首を横に振る。

「ただ、道場で」

見かけたことがあるという。従姉の方の知り合いだ、と。

（少し警戒しておくか？）

「太刀筋で分かるものなのか？」

「父譲りのものは向こうで使ったことはない」

「そうか……」

小声で会話する二人を横目で見つつ、サラダをよそってきた真咲は璃摩が座っていた空の席を見る。

（陽姫様といい月姫様といい、同じ相手をとは……）

研究のパートナーとは本当かも知れないが、璃摩の本音、願望は一言目の方であることくらいは分かる。

（老人達め、天宮と日崎の業とはよく言ったものだ）

九曜・天宮の家としては、たとえ今代の九曜頂が望んだとしても、日崎と組み合わせてはならない方向で一致している。

九曜頂・日崎星司が璃央とくつつかないためには手段を選ぶな。

それが九曜・天宮の分家第二位に当たる九曜・日下の次女である真咲が、今回の短期留学に参加する際に伝えられた九曜・天宮の意向である。

（月姫様がそうなのであれば、いつそそちらで構わないとも思うが、天宮本家以外であれば尚よし。暗殺でもいいがな）

暗殺も手段の一つではある。ただ、璃央曰く「日崎司の子供は半

神でとても強い」とあるため、よほど勝算がなければ返り討ちがいどころだろう。

（まあ、私と八雷の敵ではないか）

そんな自信もある。

「君、チップスはいるか？」

セイジにチップスの皿を差し出される。

「いただきます」

空の皿に盛る。

「ところで、何故、こつも肉が多いのですか？」

聞けば、セイジはある一点を指差した。

「アレが悪い」

一点は日本酒を飲んで陽気になっている和装の老教官。

「肉でバリエーシオンを考えるとか、どうなんだという話。

こつちの肉がローストビーフだけではないことを理解してはもらえたかもしれないがな」

（神薙煉龍、神薙の猿爺か）

「九曜頂・神薙殿の祖父との話ですが、かの御仁の元ではどれほど鍛えられるのですか？」

唐突にそんな話を振られ「えらく飛んだな」と漏らす。

「あ、いえ、すみません。つい気になったものですから」

「構わないよ。」

「どれほど、ねえ」

アゴに手を添えて、ふむと一考するセイジ。

「二年間集中して師事すれば、猫が子獅子になるくらいには強くなるか」

「獅子ならまだしも、子獅子は想像出来ないのですが」

「あれ？ そうか？」

朱翠にも聞いてみるが「分からない」と返された。

腕を組んで「うーん」と唸り、「おお」と手を叩いた。

「卵が焼き鳥になるくらいには」



「……ああ、なんとなくニュアンスは」

真咲の反応に朱翠が「え分かるの？」な顔をした。あまり表情も動いていないのだが。

「本質的には同じだが別次元と言えなくもないレベルに引き上げられる。」

そういうことですか」

「うん名答」

朱翠のみならず、周りで耳だけ傾けていた十四期生達が「すげえ」と漏らした。

セイジの周囲から人が減った頃、レンメルは天宮分校から来た二人と意気投合していた。

「魔構と魔鉞、テックとスペルでござるか」

「うんうん。」

魔構の中だけでも魔法寄りか科学寄りかで分かれるけど、魔鉞は完全に魔法寄りだねえ」

語尾にござると付けるのは、レンメルを太らせた感じの少年で外神田卓郎という。会う人にはまずネタかとも思われるが本名である。「魔鉞剣つてのはさ。スペルブレードとか形状に剣が多いのに、魔法使いの杖とか言われてるよな。ゲーム的魔法剣士の武器つてことか？」

そんな質問をするのは、茶髪で左耳に赤いピアスをした少年で雑原進という。首にボルトを付けたチエーンをしている。

「そうだねえ。スタイルとしては、ゲームの、魔法を使いながら剣で戦う戦士が現実にも多いから、剣などの近接武器の形状にしているってところだね。」

スペルブレードはまだまだ発展途上の技術だから、これからもっと形状は増えると思うな。一応は武器以外の形状もあるわけだし」「魔鉞の制御に魔構を使用しているのが現状だという。」

「自分の魔力と融合させた鉱石で構成する武器ねえ。自分の意志で強度から形態まで自由自在とか、面白過ぎる。」

「やっぱ鉱石は、自分が使える原理の系統との相性に準じるのか？」

「火はルビー、水はアクアマリンとかサファイアといった感じだねえ」

「結果的に高くならねえ？」

「いっぺんに構成しようとする和高くつくね」

徐々に、少しずつ蓄えていって自分に合った形状へと成長させていく武器、ということだ。

「最終的には、自分の魔力を吸いに吸って超高密度のエネルギーウエポンになる。」

「そういうことでござるな？」

「分かってるねえ」

この三人、周囲から人がいなくなるくらいテンション高く会話していた。

周囲に人がいないといえば、セレスの周囲も人がいない。

青年状態で、ひたすらミネラルウォーターを飲み続けるセレスが怖くて、在校生が寄ってこないのだ。

いるのは一人だけ。天宮分校から来ている少女が向かいにいるくらいか。

モデルのように背の高いさっぱりしていそうなショートヘアの少女である。

「まさか、生きていたとはな」

セレスの言葉に少女は「おかげさまで」と笑って返した。

「キプロス艦隊に捕まったと聞いたのだが」

「助けて下さったのは、あなただと父から聞きました」

「船を一つ砕いただけだ」

セレスの言葉は事実ではあるが、どこか照れたように水をあおっ

た仕草に、少女……瀬田綾女は「はい」とだけ答えて微笑んだ。

中庭では篝火で四方を囲んだ略式闘技場が作られ、そこでは汗だくの勇と勝利と夏紀がグツタリと座り込んで、ヤカンから水を飲んでいて。

「強いじゃないか、お前ら」

槍を肩に担いだホリンが、滅茶苦茶楽しそうに笑っていた。

「汗一つ掻いてないのは、さすがにどうなんだよ」

勇は自分用に用意されたヤカンを地に置いた。

「そりゃ、ライナーの体力は舐めちゃいかんだろ」

「降臨者、反則過ぎる」

「いやいや、そう言ってもな。お前さんだつて、リンカーだろう？」

「神州のリンカーは人と大して変わらないんだ」

「そういうもんなのかねえ」

勝利がヤカンを水入れ係に渡して、再度自分用の木刀を手にする。

闘志の死んでいないその目に、ホリンが「へへ」と笑う。

「よっし、十戦目と行こうじゃないか」

正眼に構えた勝利に対し、ホリンもまた槍を構えるのであった。

ホリン曰くの遊びの現場を篝火闘技場の外側から、璃摩はラフィルと共に観戦していた。

「あの木刀の二人、朱翠くらい強いね」

ラフィルの言葉に璃摩は「そね」と答える。

「まさか嘉藤が来るとはねえ」

璃摩の中での嘉藤勝利像といえば『群れない不良で学校行事はよくサボる』だろうか。

内申点でもちらつかされたのだろうかとも思うが、内申点自体を気にしなさそうでもある。

「お？ おお……ああ、駄目か」

勝利がホリンから一本取りそうだったのだが、”取りそう”で終わった。

「ねえ、ラフィル・エル？ 榊君はマルキス先輩から一本取れるの？」

聞かれ、ラフィルは「ん〜」と一考。

「引き分けまで、かなあ」

「引き分けまでいくんだ」

「ただいまっ」と

朱翠すげえ、と璃摩が感心したところで、宴会場からスコーンを頂戴してきた雛が璃摩の隣に座った。

「あっはっはっは、なっちゃん負けてやんの」

グツタリと休憩中の夏紀を指差して雛は腹を抱えた。

中等部時代によく見た光景である。ほんの数ヶ月前の光景だが、璃摩は懐かしいと思う。

「御門から三人とか聞いてたからさ。三人目は結城先輩辺りだと思っってたよ」

「ああ、結城先輩？」

確かに、りまっちがミスロジカル行っただとか聞いたら、このイベントに参加してたかもしれないけど」

「聞いたらって？」

「ああ、うん。結城先輩なら、アタシ達が進学する前に高等部止めでどっか行っちゃった」

「どっか」

「うん、どっか」

結城聖、璃摩に何度か告白してきた不良少年で、璃摩や雛達の二個上の先輩だ。

鬱陶しい相手ではあったが、行き先不明みたいに言われると心配にもなる。

「まあ、あれだ。あの先輩、りまっちにかなりご執心だし、どっか

で会うかも知れないよ」

「ストーカーっぽく聞こえて無性に嫌な感じな予言してほしくないんですけど」

辟易した感じの璃摩を雛はただ笑うのであった。

宴会が終わり、後片付けも終わらせた在校生達はそれぞれの寮部屋へと引き上げる。

紫を彼女のための部屋に送った帰り道、林檎酒の瓶を片手に月見酒をするセイジに秋は遭遇した。

「神妙な様子だったじゃないか」

セイジは秋を見ずにグラスに林檎酒を注ぐ。

秋はセイジを見ずに月を見上げた。

「紫は澄の泣き所だからな」

「……そういうことか」

半神として開花させ、浸食の防衛術を教えたところで、悲しみ自体がなくなるわけではない。

明るいうでいても、夜一人になると紫に電話して話を聞いてもらうらしい。

「澄は本当に、俊太郎のことが好きだったからな。あいつの悲しみは多分、ずっとなくならないと思う」

「悲しみを覚え続けることは悪いことじゃない。忘れることもな」

「まあな」

視線をセイジに移し「ただ」と呟く。

「澄の話じゃ、武本俊太郎は公式的には死亡だが、死体が見つかってないとの話もあるらしい」

「あれだけの惨劇だったんだ。死体が見つからないこと自体は珍しくないもんだろ。」

もつとも、行方不明ということに希望を持つのも自由だがな」

澄は、幼なじみの武本俊太郎が自分をかばって斬られている場面

を見ている。

「兄としては、あいつの希望通りであってほしいとも思う」

「同時に、過去に希望を持つとも言えない。といったところか」  
「なあ、お前さ」

二人で話すのが久しぶりだっただけに、秋はセイジにある疑問について聞いてみようとしたが、ガーデンでの一件が引っかかって疑問を引っ込める。

「なんだよ？」

「なんでもない」

セイジは秋を振り返る。その表情は困り顔。

「俺も、コトハもな。聞かれればちゃんと答える。今まで通り、な」  
(知ってるよ、それくらい)

言葉には出さず、ただ心で答える。

聞けばきつと疑問は解消されるだろう。

解消されなければ、セイジも琴葉も、一緒になって考えてくれるだろう。

入学して、チームを組んで、ずっと、半年くらいまではずっとそうだった。

彼らは君の実力を軽んじている。

だからこそ、君をただ何も考えなくてもいい位置にさせるんだ。

パートナーという単語に疑問を持ってしまったきつかけになった言葉。

澄から相談を受けた時は、迷わず妹の開花を託せたのに自分の疑問については訪ねられないでいる。

「シユウ？」

「なんでもねえよ。ガーデン戦の直前みたいに二日酔いとかになるんじゃないぞ？」

「余計なお世話だ」

笑って別れる。

セイジに背を向けて、表情からは笑いが消える。

疑問が言えない。

朱翠とはどこで会ったんだ？

その一言が言えないでいる。

答を聞けば、良し悪しは分かれるが答の一つを妹に教えてやれるのに、と。

秋の背中を見送って、セイジは吐息を一つ。

グラスを握り潰し、林檎酒を瓶から直接飲み干した。

余談だが、右手を血塗れにして戻ってきたセイジは琴葉に正座で説教を受けることになった。

## 制御

短期留学生全員が代用品ではない魔力制御を可能となったのは、授業開始から三日目の出来事であった。

ミスロジカルにおける魔法学基礎と魔構学基礎に加え、一日の最後に魔力制御に二時間。

学院側の予想では五日かかると思われていただけに、三日はかなり早いと言える。

一日目で一抜けしていた凜は、三日目の担当をジト目した。

「君、神州での授業では算術がとか言っていたが、どう考えても、これが効率上昇の方法だろうか？」

「なんのことやら」

ハハハと空々しく笑うセイジである。

凜の目から見て、二日目と三日目の差は異常であった。

三日目担当として来たのはセイジとレンメル。

一日目から使用していたマテリアルをレンメルが配布しようとしたのを止め、まず神州の学生が使うビー玉マテリアルを配布した。

二日間かかっても完全にマテリアルを崩せなかった者も、サイズが小さく使い慣れたビー玉でなら、全員が崩すことに成功。そこで終わらせず、璃央や澄にさせたように、まずはマテリアル崩しの速度を一定以上にさせた。

次に純度の高いマテリアルに触れさせ、密度の高いマテリアルへと移行。

最後に当初配布予定だったマテリアルへと移行し、全員が一分以内での崩しを成功させた時点で、魔力制御の授業を修了とした。

「君さ、なんで教育ライセンス取らないんだよ」

「源理を使えない俺に何度同じこと聞くのかね。一体何年の付き合いなんだ」

「そんなこと言ってもさ。魔力制御法のこの効率はちょっと異常だ



よ？」

レンメルに対してセイジは吐息で応じる。

「クリエイト・マテリアルで生計立ててる俺が、効率の低い方法を知っているわけじゃないじゃないか」

「それこそ確かにそうだけど……まあいいや」

レンメルは盛大な溜息で話を終わらせる。

「それじゃ、時間も余ったんで、今後の授業に必要として魔鉱の選別をしますね」

魔鉱剣が現代の魔法使いの杖であり、魔法剣士にとっての剣でもあることを説明しながら、大分別される研磨されていない状態のコランダム、アクアマリン、エメラルド、トパーズを一人一種類ずつ配布する。

「その四つに対して各一分の魔力制御を行い、不純物を取り除いてみてください」

不純物除去が出来る鉱石こそが、自分に合った魔鉱になる、と補足する。

「あくまでも基礎の魔鉱なので、今後、更に自分に合ったものも出てくるでしょう」

そして、全員が何かしらの鉱石の不純物除去が完了して三日目の授業が終了した。

後片付けをしていたレンメルはセイジの様子にふと聞いてみる。

「なんでそんなにうれしそうなんだい？」

「そりゃ、お前、魔力制御法の基礎修了で学分分野が魔法学と魔構築の応用に移る。ってことは、俺は暇になるというわけで」

「何言ってるの？ 魔鉱学の方に回されるに決まってるじゃないか」

「なん……だと……？」

レンメルは吐息後、腰に手を当てた。

「いいかい？」

自覚がないのかも知れないけど、君って、魔鉱剣の扱いは学院トップクラスなんだよ？ そんな君を遊ばせておくわけがない」

「そうなの？」

「そうなの！ そんなキョトンとした顔しない……と、質問かい？」  
夏紀と雛が連れ立ってセイジのそばに来ていた。

セイジもレンメルを真似して「質問か？」と聞く。

「質問というか、ですね」

雛が納得していないという顔をしていた。

「なんかね、なっちゃんと同じ鉱石が反応したんですよ」

二人揃ってコランダムの不純物除去が成功したらしい。

「アタシ、幻術系の他に水の源理が得意なんですけど、アクアマリンじゃないんですねと」

「見せてみる」

差し出されたセイジの手に、夏紀からは赤い石が、雛からは青い石が提出された。

レンメルも覗き込んで「へえ」と声を上げた。

「ルビーとサファイアかあ」

「え？ 色違いってだけで同じじゃないんですか？」

「ルビーとサファイアは色が違う同じ鉱石を基礎にしているね」

もっとも、魔力を帯びて色に変化が起きているから、変化後の物としては別物と判断していいんだよ」

別におかしなことはない、という。

「水の源理を得意にする人はサファイアかアクアマリンかに分かれるんだ」

「じゃあ別に変じやないってことですね」

疑問が晴れた雛は「やったー」とジャンプした。

「色の濃さは何か関係があるのでしょうか？」

夏紀はセイジにそう質問する。

夏紀の赤い石はダークレッドのルビーで、雛の青い石はファインライトブルーのサファイア。

「色が鮮やかであればあるほど魔力がよく通っている証拠と言える。キリユウは色も暗いが、光りにかざせば奥に淡い輝きがある。荒

削りなだけで、磨けばチェリー……いやビーフブラッドまで行けるだろう。まだこれからだ。

ミスシロはキリユウよりも段階的に上ではあるが、初挑戦でこれならロイヤルブルーも目指せるだろう。もっとも、その上を目指すのもアリだ」

つまり、二人ともまだまだ上を目指せるのだと。

「魔鉱は使い込んでいけばいくほど、自らの魔力に馴染んでいく。輝きを深めるには相応の時間を必要とする。今輝きが得られないからといって、次にそうではないとは言えないんだ」

「はい。精進します」

「ああ、そうしてくれ」

夏紀の素直な返事にセイジは頷いてみせる。

「九曜頂は何色なの？」

「雛、もうちょっとと言葉遣いはどうにかならないのか」

「いいじゃないじゃない。ねー」

雛の「ねー」にセイジは頷く。

「公的な場でもないからな」

言いながら、剣帯から柄を外し、二人の眼前に持つてくる。セイジの周囲で琥珀の燐光が西日で光を帯びた。

「俺は原理が使えないと最初に言ったと思うが、故に魔鉱は特殊だが、通常の魔鉱でもここまで出来るようになる」

柄に琥珀の刃が形成されていく。

「色で行けば琥珀い……うわっ?!」

ガタタツと仰け反る。教室に残っていた留学生達が周囲に集まり、キラキラした目でセイジと剣を交互に見ていたからだ。

「まあ、あれだよ。そのレベルまで来ると、リアルレーザーサーベルだよ」

「レーザーでもサーベルでもねえよ?!」

剣態を解いて柄をしまう。

「武器の隠匿性は高いが、この形態だと水中戦では使用不可になる

から、まあ、気をつけるように」

思い出すのはアゼル戦。剣を構成する間もなかった。解散解散、と手を叩いて留学生達を散らす。

「魔鉱つて、携帯性が高いんだね」

「九曜頂の形態で問題があるとすれば、目指すべき形態はどうすべきか。それを考えるのも課題ではあるな」

「そだね」

夏紀と雛の会話に、レンメルがウンウンと頷く。

(僕達も最初の頃はこんな会話してたなあ)

一年目の頃を思い出して懐かしがっている間に、教室に取り残されたレンメルであった。

「九曜頂・日崎殿」

教材片手に第三学生寮へと歩くセイジは凜に呼び止められる。

「カンナギ教官か。なんですか？」

「魔力制御に関してもっと聞きたいことがあるのですが、構いませんか？」

「別にいいですよ」

並んで歩き出す。

「魔法学基礎では魔力＝生命力であると習いましたが、魔力制御は突き詰めれば生命力……いや、体力制御にも繋がるのですか？」

生命力制御、体力を制御することでの持続性はどうかだという話だ。

「ご明察。さすがは教師」

セイジは凜を素直に褒める。

「宴会の途中でホリンに連れて行かれた連中は、最終的に体力の限界で負けたわけだが、魔力の制御法を知らない者がライナーであるホリンと対等に体力勝負など結果は目に見えていると言える」

セイジは言う、超越者とは基本、息をするように魔力を制御する

存在であり、常なる循環を可能としていると。

「生命力を魔力として使用し、使用排出した魔力を取り込んで生命力へと還元する。」

この循環こそが魔力制御の応用と言える。

ただ、すべてを完全に循環させるわけではないため、徐々に疲れもする」

これでいいか？ と凜を見る。

「またはぐらかされたらどうしようかとも思ったが……」

「神州では、九曜頂・タカミヤの護衛以外は適当にしておこうと思っていたからな。」

だから、リオとスミに教えたのは気まぐれのようなもの」

スミのことも最初は気まぐれ、シユウに頼まれなければあそこまでの関わりもなかっただろう。

「だが今は、正式にそちらに知識の分与を認められているし、そうするようにも言われている。ここではぐらかしたりはしない」

凜は一言「ありがとう」と伝え、セイジと別れて短期留学生用の宿舎へと歩いて行った。

「で？ 君は何の用かな？」

柱の陰へと声をかける。

柱から吐息が聞こえ、真咲が姿をあらわした。

真咲は背中にメートルほどの長物を背負っている。

時は夕暮れ、そろそろ学院内に魔灯まとうが点灯する頃か。

「九曜頂・日崎殿と戦いたく参上した」

「俺が君と？ それは何故？」

「力試し、という答では納得出来ませんか」

真咲が口の端を歪める。

実力を計るため、真咲を視る。視て、片眉を上げた。

（背に神魂。長物に宿っているのか。とすると）

「降神器使いか」

言い当てられ、真咲は笑みを引っ込める。

(見分ける能力でもあるというのか)

「あなたは半神と聞いています」

「そうなるな」

「神州では半神を明確に見分けることも出来ません。腕試しがしたくてもです。あなたはいい機会なのです、たとえば応じてくださいますか？」

腕試しの機会だという。

「君に勝てば、俺は何か得するのかな？」

「賭けますか？」

「戦技の授業以外での腕を求めるのなら、それくらいあってもいいと思うな」

「戦技の授業に、あなたは参加しないと聞いていますが、担当はホリンとセレスである。」

「あの二人との授業で満足出来ないのであれば、受けてもいい」

だが、戦技の授業はまだ始まってはいない。

魔力制御法が短縮されたため、開始日も早まりはしているが、満足云々の話ではない。

「あのお二方は、第十三期生の方々の中でもトップクラスと聞いていますが、あなたは彼らを超えるのですか？」

「戦い方が異なるだけだ。超える超えないの話ではない」

ただ、と補足。

「彼らに瞬殺されるようでは、俺も相手は出来ないな」

つまり、おとといきやがれ、ということである。

「では後日」

「ああ。後日、君の満足を満たすために」  
言い交わし、二人は別れた。

翌朝、学院の港に大型フェリーが到着した。

クロケット社の移動店舗である。

中には社の製品が旧式から新式、試作品までズラリと並ぶ。

魔法学基礎の授業中、聞こえてきた汽笛に「来たわね！」とセツナが声を張り上げた。

「今の魔力循環で基礎は終了！ 次の魔構にも必要だから、レンの移動戦艦に行きましょう」

そうして留学生達が連れてこられたのが、その店であった。

「自分に合った物を確実に選び出さない。それが次の魔構学よ」腕を組んで生徒達を眺めるセツナの横に凧が来る。

「代金とか大丈夫なのか？」

「代金はセイジとコト八がやっていたマテリアル生成の内職から払い済みだから、気にしなくてもいいわ」

「すまない。ちょっと不安になった」

内職の単語に不安になったらしい凧の耳元でセツナはゴニョゴニョと大体の金額を呟く。

「なんだって?!」

思わず声を上げてセツナを見てしまい、生徒達の注目を浴び「あ、すまない」と謝った。

「マテリアル生成の内職というのは……そんなに？」

「あの二人はレベル高いから」

苦笑するセツナ。

「昔、二人でマテリアルの工艺品作ったら、それがまたすごい値が付いてね。」

超高純度のフレイム・マテリアルで構成された竜の置物なんだけど『ドラゴン・ハート』って名前をつけられて、今、ウェールズの宝物殿に安置されてるわ」

凧は唸る。ネットオークションで見たことがある代物であった。

「最近はそんな高純度のもの作ってないようだけど、前例があるせいか良品として結構売れるみたいなのよね。」

魔構のエネルギー源としてもそうだし、魔法用のマテリアルもね。まあ、セイジといいコト八といい、研究費用のこともあるから、

マテリアルは大事な収入源といったところね」

(クリエイト・マテリアルか)

今になって、本気で学んでみようと考えた。凛であった。

「クロケット様、よろしいでしょうか？」

「はいはい？」

紫がレンメルに質問する。

「昨日の魔力制御法の最後に、魔鋳に関してありましたが、やはりここで選ぶ魔構品は魔鋳剣の制御に直結する物を選ぶのがよろしいのでしょうか？」

「うん。そういうことを考えて選ぶのがいいね。」

完全な魔法使いタイプであると自覚があれば、武器の形状よりも

……「これか」

レンメルは指輪を取り上げる。

「セツナ、これ起動してくれる？」

そう言っつて、レンメルは指輪を放り投げる。

「ほいほい」

キャッチして左手中指にはめて、指輪を起動させるセツナ。

指輪を中心に直径十センチほどの黄玉の盾が出現した。

「防御に特化してしまうのも手だね」

「まあ。こういうものもあるのですね」

口元を扇子で隠して驚嘆する紫。自校の制服である青いブレザーを来ているが、扇子は持ち歩いているらしい。

魔構剣……テックブレードは魔力を糧にして常に一定の効率が出せる物。

魔鋳剣……スペルブレードは魔力で制御して効率に振り幅を与える物。

魔力制御を不得手とする者にとっては魔構剣こそが最大効率となるが、魔力制御を正しく行える者にとっては魔鋳は魔構を超える。



ただ、魔力制御そのものの知識が正しく伝わっていない国では、魔構剣の開発競争が激しく見向きもされない技術ではある。

クロケット社もそういう国に商品売っているため開発競争に加わってはいるものの、近年では魔鉦制御の魔構の開発に力を入れてきているため、この移動店舗には魔鉦剣が充実していた。

(これは……魔銃か?)

真咲が手に取ったのは、魔構のハンドガン。マテリアルを組込、使い手が魔力を制御して威力の強弱をつけるものらしい。

「面白い物に目をつけるわね、あの子」

「ガンタイプは魔鉦よりもマテリアル制御の方が威力高いからねえ」  
「でもあれは魔鉦ではないから、今回は没ね」

「ところがドツコイ、あれも歴とした魔鉦なんだよ。」

炸薬を魔鉦で代用していて、マテリアルバレットの威力を倍加する代物なのさ」

「なのさ、じゃねえ」

思わずレンメルを殴るセツナ。

「倍加とか、バレットの強弱関係ないじゃない」

「なんとというか、弱強と強強？ 倍率制御だと思えば……」

「あんだ、やつぱり、間違いなくマの付くタイプの研究者よ」

「魔砲使いの誕生だね！」

セツナは「駄目だこいつ」と頭を抱えた。

とはいえ、真咲は迷うことなく、そのハンドガンに決定するのであった。

並ぶ品には、神州で見られる形状の物も多くある。

そのせいか、生徒達は特に迷うことなく自分に合った品を選ぶことが出来た。

「とりあえず、今のところはまだ実戦では使えないだろうから、臨海学校の最終の戦技授業までは各々で制御出来るようにしておいて

ください。

あ、魔鋳学の授業ではこの刹那のお兄さんが制御方法教えてくれるから、心配しないように」

魔力制御法で既に実績があるためか、セイジの名前が出ると数人の生徒達から安堵の溜息が漏れる。

それを見たレンメルは本当に残念そうに口を尖らせる。

「刹那からも星司に言つてよ。教授資格の教員部分使つてつてさ」

「そこは私も思うところだけど、本人嫌がつてんだから、いい加減納得しなさいよ」

「まったく、もつたいなさ過ぎる」

明らかに納得の出来ていない友人を置いて棧橋へと降りる。

ゾロゾロと学科棟へと移動するほとんど自分と歳の変わらない生徒達を眺めながら、レンメルの言葉について考える。

（確かにもつたいなさ過ぎるのよね。

あいつ、人にものを教えてる時の自分がどれだけ楽しそうにしてるのか、自覚ないからなあ）

面倒臭い片割れだな、とセツナは肩をすくめるのであった。

一日の最後の授業となる戦技初日が終了し、留学生用宿舎の談話室にて、まだ動けて思考力のあるメンツが集まっていた。

夏紀と勝利と進と真咲と勇の五人である。

五人に囲まれた丸テーブルには、第三学生寮からのお裾分けであるスコーンが載り、真咲の入れた紅茶が五人分用意されていた。

「神和先生の話では魔力制御は体力制御にも使えるとのことですが」  
真咲の言葉に勇が頷く。

「戦技教官との根本的な違いはそこだよなあ」

「けどよ。霧崎先輩も結構体力続くし、実はそこらの制御出来てんじゃね？」

ぼんやりと発言した勇に進が突っ込む。

戦技の授業で、結局、勇は体力的に潰れなかった。宴会時のお遊びの時間が嘘のようである。

「俺はほら、九曜頂・神薙と九曜頂・霧崎の両方から、ちっさい頃から遊ばれてきたから。」

そう、あれはある猛暑日、剣道の防具をフル装備で着させられて、タイヤ付のフルマラソンをだな……」

光彩を失った瞳でフフフと笑いを漏らしながら語る勇はちよつと怖かった。

「こつちは魔法行使のハンデもありましたが、誰も一本取れませんでしたね」

真咲はそう言って肩を落とす。その横で、夏紀が腕を組んだ。

「魔法行使のハンデといえど、実際には源理を実戦で使いきれず、構想による強化がメインになっていた。」

マルキス殿は、源理の行使を練り込んだ戦術を可能とすることが、今回の戦技教練の目的と言っていた」

神州における戦術の基本は、魔法行使と戦技は別々であるとするものである。

二人一組で、一人は魔法に集中し、一人は戦技に集中する。バラバラになれば、互いに援護を失って瓦解するが、ならなければそこそこ戦える型でもある。

「実際のところ、魔力制御を考えながらやれてる奴いんの？」

進の問いに、手を挙げる者はいない。

「魔力制御がメインになる魔鋳剣を使つての実技とか、俺には無理な気がしてなんねえ」

進はその場に大の字で寝転がった。

「魔力制御の鍛錬法でもあればな」

勝利がボソリと呟く。

「魔鋳使った奴になんのかねえ」

「それかマテリアルか」

「ビー玉持ってきてねえ。」

あ、桐生、九曜頂・日崎の兄ちゃんが授業で持ってきたアレ、もらってこれねえ？」

「さすがにそれは」

進の提案に夏紀は逡巡。そこまで世話にもなれないだろうと思うふと、進は勇と真咲がある一点を凝視しているのを見て、釣られて見る。

その方向は大きなガラス窓の向こう。留学生用宿舎と第三学生寮の間にある小さい庭。確か、池があったはずである。

目を凝らせば、御門学園中等部のジャージを着た璃摩が池の縁に座り込んでなんかやつてる。たまに手元に蒼光が輝く。

「あれって……なんかの魔法？」

真咲と勇がすつくと立ち上がり、足早に玄関へ。

残された三人はガラス越しに展開を見守った。

上はTシャツ下はジャージなどという格好をした璃摩は池の水から魔力を抽出し、両手でそおつと蒼光を操っていた。

ようやくセイジがやっているような輝きが生まれ「おおお？」と、楽しくなっていたところに「月姫様、よろしいですか？」と声をかけられた。

「えう？」

集中を途切れさせて振り返ると、蒼光が暴発。パシュツと音を立てて水が弾けた。

残ったのは、ずぶ濡れになった璃摩と声をかけたまま固まった真咲。濡れて透けたTシャツの下のブラを直視してやはり固まった勇の三人だった。

「魔法とか集中している時に話しかけるのは反則だとボクは思うんだ」

丸卓に加わって、シャツを着替えて髪にタオルを巻いた璃摩が、頬を膨らませ口を尖らせて真咲を非難していた。

「霧崎先輩にはブラ見られるし、もう、やっとなんてすわ  
プリプリしてる。」

「平にご容赦を」

「俺は不可抗力だろ」

真咲と勇が土下座をし、勇は真咲に頭を押さえられて下げていた。  
「庭が吹っ飛ぶような事態にならなくてよかったな」

「ちょ、嘉藤！ ボクの乙女的に大惨事だよ?!」

「知らん」

顔を背ける勝利に食ってかかるうとする璃摩。それをまあまあ、と抑える夏紀。

場の全員が幾分か気を落ち着かせた頃になって、勇が璃摩に聞く。  
庭で何をやってたのか、と。

「何って、鍛錬だけど？」

「水遊びが？」

「あれは結果的にそうなたただけだっつうの」

勝利に対してムスツとしながらも璃摩は言う。

「先輩に言われてる課題といつかなんとつか」

「先輩、ですか？」

「せい……九曜頂の方の日崎先輩。」

魔力制御の練り込みが甘いから、基礎から応用までのすべてに共通する鍛錬を每晚やれ！

とまあ、お叱りをば」

真咲の問いに答えて、シヨンボリと肩を落とす璃摩。  
璃摩を除く五人は顔を合わせる。

「あの、月姫様？」

「うに？」

呼ばれ、顔を上げる。

「その鍛錬とは、私達にも出来るものなのですか？」

「そりゃ、基礎から応用まで、だからねえ」

真咲はガシツと璃摩の手を握った。

「教えてください!」

「え? うん、まあ、いいけど……」

真咲は四人を振り返り「言質取りました」と親指を突き出した。

璃摩は五人を連れて、留学生用宿舎の大浴場に入った。

今は男子の時間だが、真咲を除いた三人以外は体力の限界を迎えて寝てしまっているため入浴者はいない。

璃摩はタライに水を張り前に置いた。

「まずは水がどういった魔力を有しているか。それを知るところから始める」

「どうやって?」

勝利の疑問に、璃摩は首をかしげ……「おお!?」と気づいた。

「サイト・マジック使える人って、いるっすか?」

「俺、使えるぞ」

(また、マイナーな)

使えると言った勇を除き、四人が同じことを思う。

「じゃあ、嘉藤と薙原の分お願いっす」

「へいへい」

璃摩は、以前、セイジが璃央と澄に対してそうしたように、夏紀と真咲の額に指を当てサイト・マジックを使用する。

使用された方は目を開けて、風呂場の様子に驚愕する。勇にそうされた二人も同様である。

「で!」

璃摩は少し大きな声で注目を引いて、タライを示す。

タライの水に両手を入れて、水をすくう。両手には、熱と液体と下に流れ落ちようとする力。この三つの存在を視て取れる。

「熱と液体と重力。これらが発する光こそが水が有する魔力。」

これらに対して、魔鉱の基礎で鉱石に対してやった”抽出”で三種類のバランスを崩さないように取り出す。

気をつけるべきなのが、熱を抽出し過ぎると、つまり水から熱を奪い過ぎると水の形態が変化して氷へと変わってしまう。

この鍛錬においては、水という存在を変えることなく”少し借りること”を心がけること」

一つ一つ丁寧に言葉にしながら、少量の魔力を抽出し蒼光の輝きへと変化させ、両手で包み込むようにゆっくりとタライから手を離し、空中に輝きを浮かせる形になる。

「ここまで来たら、自分の魔力を同調させて形態を変化させるって言われてる。」

あ、この段階だとサイト・マジックがなくても目に見えるかんね」  
そこまで言って集中を解き、蒼光をただの水へと戻してタライの中へと落としたりした。

「形態を変化させるというのはどうということなのでしょう？」  
「自分の魔力を水の三種の魔力のいずれかに変化を加えて、気体または固体へと操作するんだよ。」

正確にはそれぞれに同調してズラしていくといふかなんというか」  
夏紀の問いに璃摩は答えて「ああ、肩凝った」と言っただらけた。  
「最初の内はサイト・マジック使わないと、熱湯になるわ氷になるわで、もう……」

失敗を思い出し、璃摩は自分の身体を抱いて涙ぐんだ。

「この鍛錬は研究所などで発見された方法なのですか？」

こんなレベルの高いものを編み出すような研究所がこの国にはあるのか、と。

「んーと、確か、神薙先輩が言うには、日崎先輩が六歳だかそこら辺の時に編み出して、ずっと続けてる鍛錬だとか。」

先輩があまりに魔力制御のレベルがずば抜けてるから、個人鍛錬を真似して成績を伸ばす生徒もいるらしい」

真咲に対して言葉も改めず素な感じで答える。

源理が使えないからこそ編み出された一芸の根幹とも言える鍛錬である。

「とりあえず、慣れてきたらサイト・マジックはいらなくなるかな……って、どしたの？」

「いやさ、これって本当に基礎で出来んのかなと思うわけで  
進の感想に璃摩は「ん〜」と一考。

「皆の魔力制御法三日目の授業内容を聞いたかぎりじゃ、段階を追ってこの鍛錬の基礎は叩き込まれてるから、問題ないんじゃない？」  
璃摩はそう言って伸びをし、腕時計を見て「やば」と口にする。  
「もう夕食の時間だ。早く行かないと先輩産のご飯がなくなっちゃう。」

「じゃ、ボクはこれで！」

なにやら真剣な顔でタライの水を見つめる五人を残し、大慌てで大浴場を飛び出す璃摩。

「レトルトはいやあああああ」

そんな悲鳴が遠ざかっていった。

「効力はもう切れてるはずだから聞くけど」

「勇はとりあえず前置く。」

「サイト・マジック、やる？」

聞けば、他の四人は口を揃えて「やる」と言って頷いた。



## 技術者の共演とおでかけと

短期留學生がミスロジカルに来て一週間が経った頃、レンメルの工房では卓郎と進が騎士甲冑を元に作られた魔構兵を前にして、ああでもない、こうでもないという試行錯誤していた。

「遠隔操作でしか動かすことの出来ない魔構兵には、それ自体が魔力を生成出来るわけではないでござる。」

武体一体型以外の武装に魔構ないし魔鉱を持たせることは出来ないでござるな。」

「そもそも魔鉱は無理だ。」

武装を魔構にしたけりや武体一体型の武装をどうするかになっちゃうな。エネルギーも確保出来ねえし。」

甲冑の腹を開けて回路を露出させる。

進は音叉とドライバーが一緒になったような工具をクルクル回し、鼻歌交じりで回路を確認していく。

「魔鉱は生体……」

卓郎はフムリと一考しながら、そばに置いてあった人形を、指から出した魔力の糸で操る。

世界には魔操師と呼ばれる人形使いがいる。

卓郎の家もそんな連中を輩出してきた家で、卓郎もその技術を使えるが、本人は考え事をする時くらいしか使わない。

魔構兵は魔操師が使用する技術を転用した人形とされる。魔構兵のことを考える時にやっているのと色々と閃きが出てくるのだそうだ。ふと、進の鼻歌がやんだ。

「これ、遠隔操作型じゃねえな。精神接続回路がねえし……」

「それは設置型魔構兵。ガーゴイルって呼ばれてる子だよ。」

工房入り口からノンビリとそんな言葉が飛んできた。

入ってきたのは、ボサボサのピンクの髪で小さい眼鏡を鼻に引っかけた背の低いレンメルによく似た少女であった。

少女はすべてのポケットに工具がささった白衣を制服の上に着て腕まくりしていた。

進と卓郎のところまで来るとキンキンに冷えたミネラルウォーターのボトルを手渡してきた。

「ほい、兄ちゃんからの差し入れ」

ミイル・クロケット、レンメル的一個下の妹である。

「かたじけないでござる」

「サンキュー」

宴会の翌日にレンメルに紹介され、それからよくこの工房で顔を会わせる間柄である。

「ガーゴイルってな、あれか？ 羽と尻尾の生えた像が侵入者に対して動き出すっての」

「うん。で、この子はお城で好んで使われてたタイプ。」

賓客やら何やらが来るお城に、見た目の怖いもの置けないでしょ？

LR以前のガーゴイルは魔法で動いていたものばかりだったけど、今は基本的には魔構兵に代替わりしてる。

まあ、マテリアルの交換とかあって高くついちゃうのがちょっとねえ」

エネルギー源とするマテリアルによって能力に差が出るとされ、設置する場所の重要度で入れるマテリアルを選択するのが、設置型魔構兵の使われ方である。

動力使い捨ての番犬のようなものだろうか。

進は「ふうん」と聞きながら、卓郎の人形遊びを眺める。

ふと、真顔になった。

「なあ、ガーゴイルってさ。動き出したらマテリアルが尽きるまで動くんだろ？」

「ああ、うん、そだね。敵を排除した後は元の位置に戻って、マテリアルを温存する帰巢回路があるけど」

「動力としてのマテリアル。それとは別に対象撃退のためだけの回路を確立してマテリアルを積む。で、エネルギー問題は解決？」

いや結局、魔構兵に魔構の武装を扱っただけの技術も思考もないから……。

待て、俺」

ブツブツ言っていたかと思うと、大きな紙を床に広げ、ペンを取り出して、図面と計算式をガリガリ描きだした。

「タク、魔操の糸で回路間を繋げることが出来ねえのか？」

「糸はあくまでもそういう魔法にござるよ。いわば生体技術。魔構に魔法を使わせるようなものでござ……るっ。」

「そうだ。魔構兵に魔鈹を運用するとなると、武装ではなく回路間の伝達効率の上昇を目指せるはず。だから、こお、でこおやって」  
紙面上は既に力オス過ぎて、卓郎は首を捻るばかりだが、ミイルは「へえ」と感嘆を漏らした。

「魔鈹によって指令システムを確立させて、魔構兵を通して魔構の武装を開放させるんだね。」

魔鈹の制御を魔構でするんじゃないやなくて、その逆の魔構の制御の補助として魔鈹を使うのか。

で、エネルギー源は三つ。動力と武装と魔鈹起動用」

「ああ。これなら鈹構一体の魔構兵が出来るはず」

「くうく、燃・え・て・き・た……！」

進とミイルがテンションを上げて拳を天に打ち上げた。

「魔鈹間で魔操の糸を通せるなら、魔鈹の伝達を用いた魔構武装とそれを中距離ないし遠距離で操作可能とする回路も作れるでござるな」

思案気な卓郎の言葉に、テンションの上がった二人は顔を見合わせてから、揃って卓郎を指差した。

「そ・れ・だ」

「タク、頭冴えてるぜ！」

「タクロウ、すごいよ！」

こうして、レンメルの工房ではテンション上げ上げの三人が油にまみれた青春を謳歌するのであった。

「最近、ミールが相手してくれないのよ」

「それでこっちに来られてぼやかれてもな」

セイジとレンメルの相部屋に、今はレンメルの姿はなく、二人の二段ベッドの上、セイジのベッドでゴロゴロするセツナ。

セイジは座卓上に双剣の柄を出してメンテをしている。柄の横には、超鬼ごっこことガーデン戦でセツナがしていたグローブが置かれていた。

「マテハンのメンテぐらい自分でやれよ」

「お・ね・が・い、お兄ちゃん」

「……気持ちが悪い」

「なんだと!？」

妹の甘えに、兄は吐息一つでグローブを手にする。

マテリアル・ハンズ。ミール・クロケットの試作品とも言える魔構拳。

元となった、現翠鳳の柄の開発にはセイジも関与している。故にメンテをやれと言われて出来ないものでもない。

「ヴィオのプリズマ、まだ完成しないのか」

左にはめて魔力を通しながら、右でマテリアル部分を音叉で叩いていく。叩きながらそんなことを聞く。

「本社の人達もがんばってはいるんだけど、やっぱり、試作段階と比べると正式採用版は色々と能率下がるみたいなのよね」

「源理五種、すべてを制御しようとするとな」

「? ああ、なんだ。ここが歪んで設定ずれてるのか」

赤石の台座部分を外して歪みを矯正する。

「このままだと、ガードとジェスターみたいにワンオフになる可能性大かなあ」

まあ、性能落とされるよりは、それでもいいんだけど」

「おそらくはそうなる。正式採用版は系統選択型になるだろうな」

左を終えて、次は右に取りかかる。

「ワンオフ兄妹」

「言わせておけばいい」

オリヴィエの取り巻きが広げた事実に沿った評価である。

室内にノックが響く。

「空いてるぞ、コトハ」

ガチャツと音を立てて入ってきたのは、確かに琴葉である。後ろに勇の姿もある。

「どうして分かるのかしらね」

「何年の付き合いだ」

互いに溜息混じり。これが挨拶。

「なんのよ〜？」

グツタリという感じのセツナの問いに「ちよつとこの義兄予定について相談を」と琴葉が返答する。

そして、二人は座卓でセイジの向かいに座る。勇は正座である。

ベッドででれんとしたセツナは勇を視てみる。

セイジもグローブから顔を上げて勇を視る。

兄妹揃って無言で顔を合わせた。

「神州はリンカーの記憶封じてるから神魂って活動してないのよねえ？」

「ああ、そうだな。少なくとも、リオは当初していなかった」

目の前の会話に勇は嫌な汗で背中が濡れるのを感じる。

（なんでこつち、こんなに速攻でばれるんだ？）

神魂の活動とかサイト・マジックどころか、真性クラスだぞ？）

まず、琴葉にばれた。

サイト・マジックを複数同時でかける相談をしにいった時に、だ。無言で「ちよつと来い」である。

「と、いうかだな。」

コトハが祖父ではなく、こつちに連れてきたのは、殺されないうめか」

「は？ 殺す？」

目を瞬かせる勇。

「あの老人。元々は政府の指示で地祇を殺して回る立場にいたらしいからな。」

コトハとしては、神魂の系統が俺に似ていたからもしかして、と  
いった感じが」

琴葉はセイジから顔を背けて「どうだったかしら」と呟く。

吐息。

セイジはマテリアル・ハンズを卓上に置き、トンと卓を叩いた。

窓の外の景色が歪み、学生寮の廊下や他の部屋から聞こえていた  
声や音が一斉にやむ。

「この部屋。プレーンシフトのやり過ぎで、内緒話専門ルームにな  
ってるよね」

「しょうがない。それを求めてここに来る奴もいるからな」

「状況の飲み込めてないユウ・キリサキに言うなら、ぶつちやけ、  
君の秘密が暴露されてもここにいる四人以外に話が漏れることはない  
空間に案内されたってことなのよ」

「説明長いな」

「つつさい」

後頭部枕の直撃を受けた。

「君が記憶持ちであること隠してきたのは、国の方針故なんだろう  
？」

セイジの問いに勇は頷いた。

「ばれたら再封印。それを受けると今までの記憶も全部持ってかれ  
ちまうから、正直やってらんねえ。」

先日の末広事件で、一般には公開されてはいないけど、転生の記  
憶封じと有事戦力化についての不具合があることは神祇院から政府  
まで明かされはした。

でも多分、今更、記憶封じの体制がなくなるわけもない。神州は昔っからそういう国だからな」

ここからが問題、と勇は両掌を見せる。

「LR以降、神祇院を組織した天津神は低神格国津神の従属を徹底してきた。従属させる手段こそが高神格持ちの国津神の徹底排除をすることだ。

名のある奴で動けるのは、自分が転生であることか隠して生きてるか神州を出るかで暮らしてるんだ。

ここまで話せば分かるだろ？

俺、国津神で記憶持ち。姉貴同様、記憶封じ効かねえでやんの。

記憶封じ対象どころか、下手したら討伐対象だぜ？」

排除からの逃げとして記憶封じをされているフリをして生きてきたらしい。

「こつちに来てから、こんなにガンガンばれるってことは、神州の魔法知識レベルが上がるとその内ばれるってことなんだろう？」

「日崎兄妹は少し特別だけど、その認識も間違いではないわね。

祖父の話では、神狩り専門家の中には人と人外を見分ける能力に優れる存在もいるそうだから、そこにこちらの技術が転用されれば」

「マジかよ」

勇は頭を抱えた。

「なんとも面倒な話だが、自らの魔力特性を他者から不可視にする防衛術があればな」

「神の視界を塞ぐほどのものじゃないと意味ないんじゃない？」

神狩りってゴッドスレイのことでしょ？ ああいった連中は神を

相手にするだけあって、相応のレベルの魔法を行使するわけだから

「そうなんだがな」

「あれは？ 七年前に入国する時使ったってやつ」

「あれは……」

妹の指摘でその物の性能を思い浮かべるが、すぐに霧散させる。

「常時使えるわけではなく、使ったとしてもディテクト・マジック

「でべれる」

「使われなければいいって問題じゃないのか？」

「形状が指輪でな。使用中は指輪が常に光っているんだ。不審過ぎる」

「た、確かに。じゃ、その指輪をこおペンダントみたいに首につけるってのは？」

「指輪は指にしてこそ効力を発揮する」

「だ、駄目か」

勇に受け答えながら、セイジは腕を組む。

「首……ペンダントか。」

なあ、コトハ。お前のところは魔法の装飾品を作るのが得意なのがいたよな？」

話を振られ、一瞬首をかしげるも、ポンと手を叩く。

「ドワーフのことね」

「指輪の魔法具を、効力をそのままにペンダントにすることが出来るかどうか、聞いてみてくれないか？」

「そうね、それなら……ええ、分かったわ」

琴葉は早速立ち上がり、セイジの傍らに立つ。立って、手の甲をセイジの目の前に差し出した。

「口づけすることを許すわ」

「ちよ、おい！」

琴葉の態度にセツナが抗議の声を上げ、勇がポカンと見上げる。

「ふざけとらんでさっさと行け」

そう言っつてセイジがその手を取ると琴葉の輪郭がぼやけ部屋から消えた。

消える直前「ちっ」と舌打ちが聞こえた。

「あ・の・お・ん・な」

メキツとセツナの拳が音を立てた。



「ペンダントはいい案だった。可能なら早急に手は打てるだろう。どうした？」

セイジに聞かれ、琴葉の消えた場所を凝視していた勇がセイジに顔を向ける。

「いや、あなたとあいつってどんな関係なのかなと」

「幼なじみで、パートナー」

「それだけか？」

「だけと聞かれてもな……大切な友人だ。そうとしか答えられん。他に何かあるか？ と妹を仰ぎ見る。

妹は兄の本気の困り顔に「知らんわ」と顔を背ける。心なしか頬を膨らませていた。

「ところで、九曜頂・日崎。あなたも転生なんだろう？」

「ああ。それがどうした」

「幻術で正体隠すって言うからには、神州の上層に知られちゃまずいのか？」

聞かれ、しばらく無言で応じる。

「どうも、俺、あなたの前を知ってる気がするんだよな」

「あなたの中のこいつってどんな感じ？」

それは過去に対しての質問。

セツナの問いに勇は「うん」と腕を組んで唸る。

「そうだなあ。俺の予想通りの人であれば、一言で言う」と

最もしっくりくる単語を模索し「ああ」と顔を上げる。頭上に豆電球でも点灯したかのような顔だ。

「ヒーローだな」

セツナは一瞬キョトンとしてから「へえ、ほお？」と漏らしてニヤヤした。

セイジは無然。

「人違いだ」

ただ一言、そう答えた。

琴葉の連絡待ちということで、セイジは少し席を外し、内緒部屋で勇とセツナが残される。

「なんでヒーローなの？」

聞かれ、勇は「人違いだったらホント失礼なんだけどさ」と前置く。

「国津神にとっては忘れちゃならない人が二人いる。

一人は建国王。俺……前の俺の嫁さんの親。

もう一人は悪を負わされた人」

悪神だ、と。

「悪と言ったって、別に性悪とか悪党とかそういうんじゃない。

体制の中にあつての裏切り者、王への不忠者。それによって与えられた号が悪。

攻め滅ぼされようとした俺達を助けるために王を諫めた、反逆者だ」

反逆者と間違えたら、それは確かに失礼だろ？ と勇は言う。

「天津神にとつては悪。神代を知る術は神話にしかない。神話を讀んだ天津神以外にとつての神州の悪。

だが、国津神にとつてだけはあの人はまぎれもなく恩人であり、ヒーローなんだ」

「前の記憶としてでもなく、今のあんたとしてもそう思える？」

「当たり前だろ？ 今も前もない。俺は俺だからな」

「そう……、まあ、あいつは人違いって言っちゃったから、残念だけど人違いね」

「ホントだよ」

再度人違いと言われ、勇は肩を落とした。

やがて、琴葉を連れ立ってセイジが戻ってきた。

「魔法具再構築のメドが立った」

セイジの言葉で勇は脱力する。安堵で緊張が解けたのだろう。

「一応聞くけれど、悠はあなたが記憶持ちであることを知らないの

ね？」

「言ったことないし、逆に記憶なし転生者への気遣いと同じのはよくされる」

「そう。それなら龍也も知らないだろうから、足をあそこから借りるのはNGね。」

星司、キーンを貸してもらえるかしら？」

セイジの了承を得る。

「タツヤ、近くに来てるの？」

セツナの質問が来る。琴葉はコクリと頷いた。

「アリスアの兄共々、ウエルズに来ているわね」

「ひよつとして、ロードウエルの実家？」

「今頃、リチャードや悠と共に、あそこのパーティーにでも参加しているんじゃないかしら。」

先日のロンドン急襲ではリチャードが女王謁見とかがしていたら、その件でのお祝い事じゃないかしらね」

勇が「え?!」と声を上げた。

「えちよ、姉貴がパーティーに？ いやいやいや、無理臭くねえ？

すごいお貴族的な響きがあるんだけどさ。姉貴じゃ、そんなのに参加するとか無理過ぎる」

弟は姉を信頼出来ていない。

刃物も花嫁修業的な包丁よりも剣術修行の刀の方が所持時間の長い姉である。

「そんなのを連れてくとか、龍兄、無謀過ぎだろ」

「いや、あの武人どもは武人故の礼節がある。ああいう場ではよくモテる。いい意味での注目を集める存在だ」

琴葉ではなく、セイジが褒めた。

「面識が？」

「そりゃな。不思議がることか？」

「九曜頂・日崎と言えば、神州では幻の存在だからさ。そんな存在が姉貴と面識があるってだけで十分不思議だよ」

勇は姉が神州以外ではどういう場所にいるかなど知ってはいない。というか、想像が出来ないというのが本音か。

姉の口から、九曜頂・日崎の単語が出る場合と例えば、大体は九曜の数が揃わないとか無責任だとかそんなものだろうか。会ったことがあるという話も聞いていない。

「そういうものか……それなら、姉の姿でも見に行ってみるか？」  
「ええっ?!」

セイジの発言に勇だけでなくセツナまで反応した。琴葉に至っては額を押さえて溜息を漏らしていた。

「はい！ はい！ 私も行く！」

「いや、お前には言ってねえよ」

「絶対、ついていく！」

「なんでだ」

「パーティー料理、気になるじゃない？」

「お前もか。お前もそっちなのか」

むう、と唸るセイジに対し「兄妹だからじゃない？」と琴葉の解答が来た。

「つつか、そういうのって参加したいで参加出来るものなのか？」

「コネがある」

勇の疑問には即答。

「ま、まあ、俺もそういうの興味あるし」

「行ったら、姉にはばれると思うわよ」

「マジで？」

「ええ」

まあ、と補足する。

「家族がそれを知っていることが隠すことの有利性を高めることにもなるけれど、ずっと相談もなく隠し続けてきたことを、責められる覚悟くらいはしておいた方がいいわね」

「う、うん」

責められるというか、物凄く怒られるような気はする。

しかし、隠し続けることにまったく気負いが無いわけではない。相談していいものかどうか本当に分からなかったから、家族からも隠してきたわけで。

霧崎家には両親がいない。

数年前に発生した対神祇院へのテロで亡くしている。

肉親は姉の悠のみである。

たった一人の肉親に対して隠し事を続けることは、気負い以外のなにものでもない。

「……よし。姉貴に話すわ」

勇の決定に琴葉は「そう」とだけ呟く。表情は特に動いていないが、セイジは琴葉の横顔を見て、優しい面差しを向けた。

「分かったわ。決定したのが自分の意志でというのであれば、止めることもないわね。」

星司？ 義兄予定を頼むわね」

「了解だ」

答えて、セイジは内緒部屋を解除した。

セイジはアリシアに連絡を取り、勇の記憶云々を伏せた上でパーティーへの参加について了承を得る。

グリフォン型になったキオーンを庭に呼び、琴葉に預けた。

「ヘイストを付与すればかなりの速度になる」

「そうするわ」

琴葉はキオーンの背に腰掛ける。

「この指輪を作ったのはどなた？」

「メディアだ。」

事情を話した上で、勇への譲渡を許可してもらっている。形状を変える段階で呪いがかかることはない

「安心したわ。では、行ってくるわね」

琴葉を送り出し、学院事務所へと足を向ける。留学生を連れ出す

ことの許可をもらわなければならない。

予定人数の申請と許可を得て、留学生用寄宿舎へと向かう。

寄宿舎の談話室に入ると、勇が凜にしばらく出かける旨を報告していた。

「許可は取れたぞ」

「行き先はどこなのだ？」

凜の問いに「ウェールズのカーディフへ」と即答する。

そして、談話室を見渡す。

弓弦が雛相手に魔法学基礎の復習を付き合ってもらっているのと、勝利が魔構関係の雑誌を読んでいる。

と、大浴場の方から真咲が談話室へと入ってきた。身体から湯気が立ち、シャンブーの香りを漂わせている。

「ミス・カンナギ、あと彼女を借り受けたい」

「必要なのか？」

「必須だ。キリサキも彼女で構わないな？」

勇が「え、何が？」と近づいてくる。その肩に腕を回し、スクラム状態で小声で話す。

「同伴のパートナーが必須らしいんだが、現在ここにいる女性で隣にいてほしい相手はいるか？」

「ああ、そういう奴か。ええっと」

教師と騒がしい日崎分家のチビと口うるさそうではあるが割と美人。

「日下で」

「意外に悩まなかったな」

スクラムを解いて、再度、要請を出して凜の許可を得る。

「そういうわけだから、外出の準備をしてほしい」

「一体、何がそういうわけなのですか？」

鍛錬を終えて休む気満々であった真咲が、眉間に皺を寄せてセイジを睨んだ。

「新しい鍛錬でもあるのですか？」

聞かれて「鍛錬？ 鍛錬ね……」とセイジは一考。

「この国のお貴族様と平然とつきあえるかどうか、腹芸の鍛錬が出来る」

勇が口を挟んだ。

「貴族？」

「果たして、九曜にすり寄ってくる馬鹿に対してガン付けて追い返すしか出来ない日下に、対外関係も含めて相手の気分を悪くせずに振る舞い続けることが出来るかな？」

「む……、そう来るか」

真咲が固まる。

(何故、霧崎がそのことを……)

真咲の中ではそれを知るのは護衛をした璃央と紫くらいである。

この二人が他人に言うとも思えない。断られた側から漏れた話とは思わないようだ。

神祇院や政府の催した立食会に、璃央や紫の付き添いとして参加することがある。

そういう場において、九曜にすり寄ってくる権力ほしさの代議士などが好ましくないため、それが態度に直結してしまう。

真咲を付き添いとする璃央達への評価にも繋がっているため、真咲本人も出来れば矯正したいと考えてはいるのだが、なかなかそういう機会はない。

「わ、わかっ……分かりました。行きます」

「確保した」

こうして真咲は勇に捕まえられたのであった。

棧橋に、それぞれの学校の制服姿で集まった四人がいた。

「なんで棧橋？」

疑問に思う勇の目の前に、奇妙な車がやってきた。水上を走ってきたのだから、奇妙としか言えようもない。

時間はまだ夕刻前。明るいおかげで、車がスポーツカーだと分かる。

車からはレンメルが降りてきた。

(うわ、ガルウィングとかリアルではじめて見た)

「久しぶりを見るな」

勇が驚く横でセイジが唸る。

「特にいちじつてはいないから、星司は無理だね」

「ふふん。セイジは助手席で乙女のように震えてなさい」

何故か勝ち誇ったようなセツナ。

レンメルからライダーグローブを渡されてそれを身につける。

「乙女のように震えなきゃならんような運転するのだけはやめろ。」

俺達だけじゃないんだ」

(まっただ)

セイジの注意に内心で頷く勇である。

「はいはい、了解。乗っちゃって」

後部座席にと最初に真咲が乗る。その時、真咲の腰に黒光りする物騒な物を見て、勇は一瞬キョトンとする。

アレは確か、クロケットの移動店舗で真咲が手にしていた魔銃だろうか。

続いて乗り込む。

「なんでそんなもん持ってきてんの？」

「？ 何があるか分からないので」

「いや、まあ、そうだけだな」

勇は刀を置いてきているが、一応小柄をミスロジカルでもらった剣帯に差してはいる。

日下こええ、とか思いながらシートベルトをした。

セイジは助手席に座るとダッシュボードを開ける。

そこには計器類が設置され、マテリアルを入れる穴もある。穴の数は四。それぞれの縁が赤・青・黄・緑に塗られている。

窓から出した右手で外の海面に触れて、蒼光を抜き出して青の穴



に入れるのが見えた。

「こっちは準備いいぞ」

「それじゃ、行きますか」

セツナがハンドルを握ると、グローブとハンドルの接地面からセツナの魔力が車に注入されていく。

エンジンがうなりをあげ、マフラーからレンメルの魔力が排気され、車体がセツナの魔力で満たされる。

「ええっと、スウォンジー？」

「カーディフだ」

妹の思い込みを訂正し、兄はカーナビを起動。車は勢いよく発進した。

魔構のスポーツカーが水しぶきをあげて遠ざかるのを確認し、レンメルは工房へと向かう。

工房に入れば、ちょうど進と卓郎とミールがなにやら回路の制作中であった。

「やってるね」

「おう」

工房の主に対して進が手を挙げて挨拶する。

卓郎命名の『カオスの坩堝』、進の設計図をざっと見る。

（これ……、これって、鉤構一体型？ え、どうやって）  
思わず食い入ってしまった。

（回路はそれぞれ魔構。でも伝達系に魔鉤を取り入れることで、魔構兵に生体の魔力が流れるのか。）

そうか、魔鉤をそれぞれ送受信のアンテナに……）

面白い、と素直に思う。

（でもマテリアルを三つ使うとなると、一体限りのワンオフになるかなあ）

一度起動することに資金がかかりすぎてしまう。

しかし、一体作れてしまえば、次以降の改良型にも繋がるため、それほど悪いことでもない。

「これで……どうでござるか」

卓郎がライフルを一挺ミイルに渡す。

ライフルの外部装甲を外して中を確認してから「これならいけるはず」と卓郎に返す。

そして実験。

卓郎がハンドグロブを身につけて、ワキワキと動かす。

「行けるのかよ」

「任せるでござるよ」

進の挑発に、短期留学生内で一番魔鋳学の成績がいい卓郎がニンと笑う。

卓郎が右手を上げると、甲冑ガーゴイルの右手も動く。

「それじゃ、起動して」

ミイルの指示で、卓郎が中指を動かす。甲冑ガーゴイルが腕を、離れた位置で的に向けて安置されたライフルに伸ばした。

ピッ。

ライフルに内蔵した回路が起動する音が鳴った。

「「おおおお!?!」」

進とミイルが声を上げ、レンメルも手に汗握った。

ガチャツと装填が行われる。

「装填装置も動くのか!」

「うむ。ただ……」

進に対して卓郎の声が沈む。原因はすぐに分かる。ライフルが沈黙したのだ。

「今のところ、起動と装填までは、ガーゴイル側からのエネルギー供給で行けるのでござるが、それ以上は。どこかで混線でも起こっているのでござるつなあ」

「起動系の送受信とエネルギーの流動は別々の魔鋳でやっか」

そんな会話。

レンメルはミイルを手招きした。

「お疲れ、兄ちゃん」

「あの二人は面白いだろ？」

「発想がうちにはないタイプだよ。うち来てくれないかなって、本気で思う」

妹は真剣で楽しそうな笑顔でそう口にする。

「タクロウのテイマーとしての実力はかなり高い。多分、資質としては元々あったんだけど、魔鋌剣を学ぶことで更に磨かれてるんだ。それにシンは……」

ミイルは眼鏡を外し、設計図を更にカオス化させている進を眺める。

「夢想とも思える発想を現実化させられるタイプの技術者、かな」

「気に入ったみたいだねえ。なんていうか、ベタ褒めだね」

「そうかも。だって、楽しいもん」

本当に楽しそうな妹に、兄も楽しくなる。

「確か、進は魔匠御影から誘われてるようだから、うちには来ないだろうね」

「え、ミカゲ？」

「魔構武器のテストーのアルバイトをしてるみたいだからね」

学生が出来るアルバイトで最も実入りのいいのが、魔構企業でのアルバイトである。

特に、魔構武器（剣だけでなく様々な武装）のテストーは危険手当も出るため、その額は一人暮らして普通に生活出来てしまうほどになる。

「ランク、ランクは？」

「ランクA。でも、多分、神州に帰ったら上がるだろうね。」

魔力制御法を身につけたばかりか、戦技の成績もいい。ホリンの話じゃ、開始当初に比べると二、三日でかなり成長してるってさ。テストーにはランクがある。

SS、S、A、B、Cの四段階。

Cは魔構に触りたてで、起動が出来る程度。家庭魔構製品のテストがこの辺り。

Bは魔構の稼働時間が1000時間程度から移行する段階。特定の形状を専門化しだす辺り。

Aは複数の形状を使用可能になったレベルのテストに与えられるランク。ここら辺から企業と専属契約が発生しだす。

Sは企業の試作品が任されるくらいに信頼度のある段階。神州ではそれほど数はなく、ヘッドハンティングの対象となりやすく、一つの企業にずっといることがない。

SSは今のところイギリスとドイツとアメリカに数人いる程度。世界全体でも10人はいない。

「御影と専属契約している段階だから、今回のこの開発も彼としては、ここで完成させて終わらせるくらいの意気込みだろうね。もったいないけど」

(でもミカゲならひょっとして)  
妹はある希望を見出す。

兄が神州の魔匠御影との間で交わした契約が確実な物になれば……、と考えてると進達に呼ばれた。エネルギー周りの相談である。楽しい三人を眺めて、レンメルは考える。

進と卓郎は十四期生のミールと歳が同じ。来年度には卒業である。今回の出会いと研究がああ三人の道に、どの程度影響を与えるのだろうか。

来年度以降の魔構業界に、どれほどの影響が出るのだろうか。業界への影響などは対してないだろう。だが、やがて大きなことが起こる気もする。

鉾構一体など、未だどこの企業も到達していない技術である。それが今、目の前で作られようとしているのだ。  
「テンションが上がるのは分かる。理解は出来る。僕も正直混ざりたい。」

だが、しかし……ねえ、熱くない？」

レンメルが冷房を入れるより前に、ライフルが熱暴走で、折れた。

留学生用寄宿舎の食堂で、ライフル熱暴走でとりあえず今日は終了、と進と卓郎とクロケット兄妹が食事をしていた。

第二学生寮からのお裾分けであるローストビーフを、第三学生寮から渡ってきた特製ソースとパンに挟んで食べている。

「マジでうめえ」

「やはりこのソースでござるな」

肉の量もすごいが、食べる量もかなりのものだ。

「第二で一頭丸々やっても、ヒザキ兄先輩がこういうの作り置きしておいてくれるから、味は飽きないんだよ」

「初日の宴会料理も大半はあの人が作ったんだろ？ なんでも出来そうに見えてきたぜ」

「十四期生の大半はそんな考えだね」

十五期生はまだ恩恵を受けていないから、そういう考えはないのだという。

「星司にとつてすれば、料理も鍛錬の一つだからねえ」

「え、鍛錬？ なんの？」

「魔力制御の」

進の手が止まる。

「マジっすか」

「天宮氏から伝授されたあの鍛錬法を聞いて薄々は感じていたでござるが、確かに料理は鍛錬になるかもしれないでござる」

「マジで?!」

卓郎の言葉に進が大声を上げ「なんだなんだ」と、ちょうど近くにいたらしい凜と弓弦が顔を出した。

「魔力の制御で形態変化とか、まるで料理でござる。こういう味付けをすればこういう風になるとか、膨大な情報を持っていれば応用も効くでござるからな」

「おおお、ござるすげえな」

レンメルは口をポカンと開けてから「よく分かったね」と感嘆を漏らした。

「伊達にファミレスで厨房のバイトとかしてないでござる」

ムフー、と得意げな卓郎である。

「太り損じゃなかったんだな」

「やかましいでござる！」

進と卓郎の掛け合いにクロケット兄妹はハハハと笑った。

話を聞いていた弓弦は姉を見上げる。

「お姉ちゃん、料理……」

「なんだ、何が言いたい。」

「ご、ご飯は炊けるんだぞ？ 本当だぞ？ 混ぜご飯もいける」

姉のレパートリーが炊けるもののみであることくらい知っている。年の離れた弟は小さく溜息を吐いた。

「お、おい、弓弦？ どこに行くんだ？」

肩を落として歩き出した弟を姉は追っていった。

「セツナ先輩の姿を見なかったんだけど、兄ちゃん、なんか知らない？ プリズマのこととかあるのに」

「星司とあと二人、ええつと、留学生の二人と一緒に出かけたよ。」

一人は……そう、魔銃を気に入ってくれた子だね」

魔銃と聞いて「ああ、日下か」と進は思い至る。留学生仲間で魔銃を使っているのは真咲だけであった。

「カーディフ行きだから、多分、明日の夜には帰ってくるんじゃないかな」

「カーディフ？ それってロードウェル先輩のところ？」

「うん。シューティングスターでかつ飛んでいったよ」

ピタッとミイルの手が止まった。

「え……あれ、出したの？」

頬が引き攣っている。

「いやほら、刹那も結構成長してるし、計器制御は星司がしてるか

ら、まあ……平気……だと思っ……多分。

それにお客さん乗ってるんだから、アレはやらないんじゃないかな！ あ、あはは、はは」

笑うレンメルの頬も引き攣ってきた。

「シューティングスターってなんだ？」

「なんていうか、一応、正式採用されてる魔構車の試作品なんだけど……」

なんと言ったものかと模索する兄。

「ドライバーの魔法で水陸両用になるスポーツカーと言えば？」

「正式採用のキャッチはそうだけどさ。」

あっちの方は、とりあえずやるだけやっちゃった、みたいなの。

車って空飛ばしちゃ駄目なんだな、みたいなの？」

妹、額を押さえて吐息。

卓郎の目がキュピーンと光った。

「まさか、飛ばしてみたところ、流星のように墜落したからその名前でごさるか?!」

「……どうして分かった!?!」

兄妹の反応に卓郎が「え、本当に？」と逆にひいた。

「いやあ、使用しているシステム自体は、その後の魔構車のほとんどに流用しているものなんだけど、なんていうか、最初って色々積み込みたくなるじゃない？」

レンメルの言い訳に、三人とも「そりゃ分かる」と相槌を打つ。

「スペック高くなりすぎて、助手席でナビゲーターが常に計器と相談してマテリアルを追加しないとガス欠起こすとか。

速度上昇のために可変機構入れたらドライバーが挟まったとか。

なんとなく腕付けてみたら車庫で腕がもげたとか。

ああ、あと、エアクッションならぬエアハンドでドライバーの身体押さえようとしたら、ボディブロー入れちゃったとか」

「カオス過ぎる……」

さすがに進までドン引きである。

「ボディーブロー。あれは、なんというか、被害者がセツナ先輩じやなかったら死んでた気がする」

「そだね。さすがの星司も隣の惨状に青くなってたし、

その後の僕に降りかかった惨劇にミイルが青くなってたよね」

「そりゃ、まあ、ねえ？」

世の中に溢れる魔構製品などは、大体試作段階で惨劇が起こっているものである。主に開発者に。

「でも最後のドライバーズ・ハイは刹那の挑戦でもあったから、一概に僕のせいでは」

車体への魔法付与実験で、フライとヘイストの魔法を付与して崖からダイブ。結果は名前が付くことになった事態へ。

「刹那が暴走させしなければ、イケルイケル」

「そつはつまり、可変とかブローとかパージしてねえってこと？」

「ブローは外した。可変は……どうだったかな？」

「なにそれ怖い」

「いや大丈夫だって、刹那も馬鹿じゃないんだ。

伊達に十三期生のトップとかやってないよ？」

いきなり封印したはずの機構動かしたりしないって」

不安そうな進にダイジョウブダイジョウブと少し不安を増すように安心を与えようとする。

「きつと明日の夕飯時にはちゃんと人揃ってるって。ええっと、九人？」

「減ってるよ！」

騒ぎに、他の留学生仲間から苦情が入るまで、四人はワイワイ楽しくやってた。



## 逢瀬

日崎兄妹が勇と真咲を連れて学院を出た頃、ちょうどシューティングスターが海上を走っていくのを眺めていた者がいる。

「……釣れん」

暇つぶしに釣り糸を垂らしてみたらしいセレスである。

釣り糸で魚を確保するよりも、潜って直接の方が現実的ではあるが、それでは暇つぶしではなくただの食糧確保である。

が。

「教科書？」

釣れた本を摘み上げる。

「ウォルターさん、こんなところに」

「セタアヤメ？」

バチャツ、と教科書に重なっていた内側の存在が地に落ちた。

四つの目が下に注がれる。訪れるのは無言。

綾女の顔が一気に赤くなり、セレスは無言でソレを海に還した。

一応教科書の方の氏名欄を確認しておく。そこには『梧桐秋』とあつた。

ああ、そう言えば、と以前、何かの授業中に教科書を外に捨てていたな、と思い出す。

（浴衣フェチか）

それ以前に、授業中に何を読んでいるのか。という話。

教科書も海へと還す。

「探していたのか？」

何事もなかったかのように、セレスは綾女を見上げる。

「え、ええ、えと」

綾女はアワアワして後退る。その様子にセレスは眉をひそめた。

再び無言。

「違つぞ」

「いえ、その、別にウォルターさんが何を読んでいても」

「違うと言っているのだが」

様子の変わらない綾女に背を向けて、セレスは再び釣りの姿勢に戻る。

(す、すねた？　すると手違いということ？)

目の前で釣り上がる。かかったのは空き缶。空き缶を無言で脇に置き、再度糸を垂らす。

なんと声をかけていいか分からず、しばらく暇人の釣りを眺める。空き缶の他、長靴や雑誌、壊れた目覚まし時計などなど、ゴミが多いような気がする。

吐息。

セレスはユラリと立ち上がると、海に向けて右手を差し出して深呼吸。

「ふっ」

グツと押し出す動作。と同時に、棧橋から五メートルほど海が押し出され、水の失われた領域である海底が顔を出した。

結構な数のゴミが落ちている。

左で人差し指を立てて下を差す。

「アヤメ、燃やせ」

綾女も吐息。やれやれという感じだ。

「了解です」

答えて、懐から赤いマテリアルを取り出した。

セレスと綾女は、今回の留学騒動が初面識ではない。

セレスが学院のクエスト及び雇い主の要望により、キプロス艦隊を沈めに行った時、現地に旅行しに来ていた神州人を助けた。その助けた相手が瀬田綾女である。

その後どういいう経緯か、セレスと同じ相手に雇われたということが、初日の宴会後に判明していた。

つまるところ、同僚である。

二人は連れだって、コーンウォールの更に南西、シリー諸島にあるセントメアリーズ空港に来ていた。背後には乗ってきたイカダが放置されている。

「受け取りと輸送なら一人でも良かった」

物陰に隠れ、空港の警備を確認しながらそうぼやく。それでも立ち位置は、常に綾女を護る位置に置いている。

「私もそう伝えたのですが、どうしても二人だと総帥が」  
「魔女め」

舌打ちを一つ。

空港の警備は厳重。警備をしているのは、イギリス国防騎士団ではない。違うということが既におかしい。

いかに国土として辺境だろうが、騎士団のいずれかの隊が配備されているはずである。

誇りある騎士団が、迷彩服に小銃を構えて歩哨しているなど、どう考えてもおかしい。

（まだ西の駒がいたか）

動きがゴールウェイで排除した部隊と同じである。

「詳細を」

問われ、綾女は仕事の詳細を話す。

「セントメアリーズ大学において研究されていた、バベルシステムの遠隔受信機（新型）を空港第三格納庫で受け取り、スウォンジーのクロケット支社に配送すること。」

尚、バベルシステムを他勢力に奪われる場合はそれらを撃退すること」

「場合によっては奪い返せ、か」

「早速確保して脱出しますか？」

セレスは首を振り、近くの水道管に手を当て、目を閉じる。

（歩哨と同じ動きは近くの二人、ここより西に二人、更に北に一人。空港の職員は……）

「まずは占拠している連中を排除する。数は多くはない」

青年の言葉に綾女は「はい」と少しうれしそうに応じた。

(アヤメの実力は至源の徒、エルザ・ラインハルトに匹敵する。ならば、可能と判断する)

綾女に手を差し出す。

「水域からリンクし、その一帯の熱を奪う。分かるか？」

「はい」

手を取り、集中を開始。セレスは空いた手を水道管に突き入れて内側の水に触れる。

空港内部のすべての水が通る場所、水の存在を感知。場所を指定し、その一帯に綾女の力を流し込む。

綾女の能力は火熱の操作。

魔法ではあるが、魔法の形を取らない現象操作。

必要とするのは、ただ、圧倒的な人智を越えた集中力。

比較的近い歩哨が慌てた感じで無線機に応答を繰り返す。

「排除完了。残りを無力化する」

「了解です」

水道管を氷で塞いでから散開。

物陰を伝って歩哨の背後にそっと近づき、その喉元に巻き付けるように掌を当て、気脈の流れを乱す。

歩哨は唐突に力を失い、膝からストーンと落ちて、こんにやくか何かのようにその場に倒れ込んだ。

「排除完了しました」

綾女が傍らに戻る。

すぐに綾女が眠らせた歩哨共々、縄で縛って転がした。

第三格納庫へ行けば、空港職員が集められており、彼らを解放し雇い主の組織である雇い主経由でイギリス国防騎士団へと連絡。シリ―諸島周辺の警備を固めるように伝えた。

そして二人の目の前に、二人乗りのジェットスキーが鎮座している。

「二人で……こういう意味か」

クロケットの支社に配送するということは、開発に絡んでいる。そういうことであろう。

（アークセイバーといい、乗り物にシステムを載せるのが好きなのか）

レンメルの趣味である。

「運転出来ますか？」

「問題ない。国防騎士団が到着次第に出る」

「了解」

セレスは角材の上に座り、空港職員から受け取ったミネラルウォーターの蓋を開ける。

喉に染み渡る清涼に安堵。

フワリと風と熱。隣に綾女が腰を下ろした。

しばらくは、二人ともミネラルウォーターで渴きを潤す。

「何故、アルカナムなのだ？」

会話を求めて出たのは、綾女が学院に来て何日目かになる同じ問い。

「足手まといですか？」

「違う」

そして何日目かになるやりとり。

だから、この後に続くセレスの言葉も予想出来る。

割に合わないだろう？

危険度と報償が割に合っていない。

アルカナムとは、メルカード財団を元にして建国宣言がなされた国土無き国家。

国土は目下建造中、とのことだが、先行き不安度度外視過ぎて、

財団への就職希望率が激減した原因。

「理由なんて、この時期にアルカナムへ内定をもらいにいつている、超越者と大して変わりません」

「リンカーでもライナーでもない君がか」

「リンカーでもライナーでもないウォルターさんも、でしょう？」

綾女からジェットスキーへと顔を向け、最後に一滴まで飲み干してペットボトルをゴミ箱に入れる。

「どちらでなくとも大して変わらん」

答えて、外へと歩き出す。

近海警備の隊が到着したらしく、外が慌ただしくなってきた。

「あ、待ってください。折衝は私が」

慌ててセレスの背中を追いかけた。

スウォンジーのクロケット支社にジェットスキーを渡し学院へと戻ってきたのは夜半。もしも門限があるなら、怒られるべき時間帯である。

足場になっていた丸太から棧橋に降り立ち、抱きかかえていた綾女を下へと下ろす。

グツと伸びをして、綾女は月を見上げる。

「臃ですね」

丸太を沈めたセレスも空を見上げ「そうだな」と応じる。

「アヤマはまだ神州の学生として卒業までは向こうか」

「ノイエを卒業していますから、実はもう学生でいる必要はないのですが」

学生でいた方が都合がいい、と返ってくる。

イギリスのミスロジカル魔導学院の入学資格は十五歳前後だが、ドイツのノイエ・シユタールは十歳には入学出来る。

魔法使いの能力開発よりも魔構使いの技術開発をメインとし、魔構は長く使えば使うほど心身に馴染むから、使い始めを早くしてい

るといったところだ。

「総帥のお話を聞く限りでは、もうしばらく神州に必要がありそうです」

「そうか」

ふむ、と腕を組んで吐息。

「それよりウォルターさん？」

「なにか」

顔を上げて綾女を見る。

「何度目かになりますが、発声練習です」

「……またか」

「なんと言いますか、やはり片言っばいよりも……その、分かりません？」

そんなことを言う綾女は若干頬を赤く染める。

「ちゃんと呼ばねば名で呼ばんと」

「そ、そうです」

本当に何度目かになる夜の発声練習。

セレスは「ん、ん」と喉を整える。

「ん……あーやメ」

「違いますよ？」

「拳を握るのはよせ」

ミスロジカルにいとバベルシステムに頼ってしまうため、外国語の発音に影響が出てくる。外国語を習熟する必要がなくなるためだ。

「ウォルターさんには神州の血が四分の一入っているとのことですが、言葉を習ったことはないのですか？」

「まだ人の子であった頃の話だ。覚えてなどいない」

ニツコリと笑い「思い出してください」と言う。目が笑っていない。

「真剣さが足りませんよ？」

「魔女の遊びに真剣に付き合うのもな」

綾女は肩を落とす。

「ウォルターさんは神州のお仕事には来てくれないみたいですよ」

「そういうわけでは」

むう、と悩む。

神州の名前持ちの同期生ですら、まともに呼べていない。一番呼びやすそうな秋でさえ、ちゃんと呼べていない気がする。

国の名前などは呼べるのに人名になると一気に分からなくなる。

「でははじめからもう一度」

「瀬田」

「！」

「アやめ」

「はあ」

こんな感じで、二人の夜は更けていく。

時をセレスと綾女がシリー諸島へと向かっていた頃に戻す。

秋はその頃、戦技補習の教員代わりを終えて中庭のベンチで休憩中であつた。

学院に残つた十四期生と留学生数人を相手にした後である。

留学生は紫と夏紀が参加していた。

（星司のとこの分家だつたか。あいつ、結構強いな）

正直なところ、十四期生で夏紀に追いつけていた生徒はいない。

十四期生の大半が戦技よりも魔法戦闘を専門にしている。戦技の極みのような夏紀に追いつけるはずもないか、とも思える。

十四期生と戦技の面で同レベルなのは、紫か。

秋の記憶上では、紫は戦技とはほど遠い運動神経の持ち主である。神州における魔法使いの典型。術者輩出の家系。それも九曜に数えられるほど高位の家である。かつては陰陽師の一画でもあり交流を持っていた家。



起源は、神降ろし……人型降神器の名家。

緋桜院の人間に運動神経など必要はない。

神の器でしかなく、魔法使いとしても人の盾を浪費することで大成するのだから。

そんな家の現当主様は、許嫁としばらく文通のみで会話している間に、がんばって本当に基礎程度の体術を身につけ、今、許嫁のいる学院へと留学してきている。

自校の制服に着替えた紫が小走りにやってきて、秋の隣にちよこんと座った。

「お疲れ様ですわ、秋様」

「ん。紫もな」

庭に流れくるそよ風を気持ちよさそうにする紫を、しばらく眺めていると、視線に気づき、首をかしげて秋に顔を向けてくる。

「いかがなさいましたか？」

「あ、いや、この一週間、着物以外の紫に慣れなくてさ」

「似合いませんか？」

シユンと俯かれ、慌てて「似合ってる！ 超似合ってる！」とフ

オローする秋。

「これはこれでいい」

「よかった」

真顔で言う秋に対しやや恥じらいながらもにこやかな笑みを向ける。

そつと手を伸ばし、紫の髪に触れる。銀に見えなくもないその白に、触れる。

秋に触れられて、嫌がりもせず、気持ちよさそうに湖水のような瞳を細めた。

幼い頃、初めて会った時は髪も眼も黒かった。

それが、神降ろしをした時に、もっていかれた。

降ろされた存在は自分の色を紫に残し、紫の色をもっていったのだ。

神降ろしをさせたのは神祇院ではあったが、その背後の存在はもつと別の者。

降ろさせた存在も神州に席を置く超越者ではなかった。

それは、紫が神降ろしをした時、近くにいた秋が知っている。

秋の……前の秋の記憶には存在しないモノだから、そう断言する。少なくとも、神州の神族にまつわる存在ではない。

「今でも、神降ろしはやってんのか？」

「それが、緋桜院の勤めですから」

「辛かったら言えよ？ 速攻で神州帰って家からかつさらうからよ」

「お待ちしていますわ」

秋の様子に紫はコロコロ笑う。釣られて秋もヘラツと笑いを作る。

クウ。

そんな音。

(何の音だ?)

訝しむ秋の目の前で紫の笑顔が固まり、徐々に赤くなってきた。

「あ、ああ、あのいま、今のは」

ハツと音の正体に思い至る。

「ああなんだ、腹……」

言いかけてやめる。

かつて似たような場面で同じことを言っただけに殴られたことがあった。その後姉二人の耳に入り、酷い目にあつたトラウマの一種。

(デリカシーつつわれてもな)

ふむ、とこの次の行動について考える。

食堂は今開いてはいない。

マラザイアンに渡っても時間がやたらとかかる。

第三学生寮にセイジの作り置きがあればとも考えるが、確か、先程出かけたとかで、作り置きほしさの連中が学生寮に走っていったのを見ている。

「なあ、今からちょっと、デートしようぜ」

「デ、デートでございますか？」

「マラザイアンにいい店あんだよ。」

ただ、その、男一人では入りにくくてな。

だめ……かな？」

照れて頭を掻きながら誘ってみる。

「あ……はい。はい！是非、ご一緒致したく」

気を遣わせたことくらいはすぐに分かる。

それでも、そのように誘ってもらえることがうれしくて、紫も顔を綻ばせて頷いた。

マラザイアンの、ミスロジカル魔導学院に面したそのカフェで、軽食のセット後に来たケーキを前にして、紫は目を輝かせた。

秋が一人で入れないと言ったのは本当のこと。

ケーキがおいしいと評判の店で、男の姿があるとすれば、それは恋人の付き添いとか周囲の視線にまったく動じない者くらいだ。

一度、琴葉がこのケーキを買ってきて以来、食べにきたかったのだが、客層を人から聞いて諦めていたのである。

余談だが、セイジはたまに来ていろいろらしい。セツナに引きずられて。

紫はケーキを一口食べると頬を押さえてウツトリした。

「とても、おいしゅうございます」

幸せ一杯である。

「そっか」

秋の方もつつい頬を緩ませて紅茶を口に運ぶ。

夏場ではあるがホットである。それは紫も同じ。

一口飲んで、揃ってほっと吐息。

「この苦みもいい」

「ケーキにとても合いますね」

この店はその日出すケーキに合わせて店主の気まぐれで紅茶を決めている。ケーキの味を最大限にするブレンドである。合って当然とも言える。

現在、店内にはこの神州カップのみ。時間帯もあるのだろうが、普段来る客が帰省していることも関係しているのだろう。

店の奥で、店主である白ヒゲを蓄えた老紳士がティーカップを並べながら、この幸せそうにケーキを口にする二人を眺めていた。ふっ、と秋の瞳が寂しげに伏せられる。

「あと一週間したら、帰っちまうんだよな」  
弱気になっている。理由は簡単。本来のパートナー達を避けている自分に嫌になっている。

避けられているわけではない。常に門戸を開いてくれている。それが分かっているのに避けているのは自分。

ティーカップを持つ手に紅茶とは違う温度を感じる。

秋の手に紫の手が添えられていた。

「一緒に、帰りますか？」

「そうするか」

それも一つの答。

だが……。

「それも手だけだな」

秋は目の前に吐息を得る。

「秋様のお手紙には、ずっとうれしさをいただいております。

それが半年ほど前から、どこか悲しさを感じております。それも寂しさでしょうか」

手紙から感じた悲しみこそが、紫が今回の留学に参加した理由だという。

「あなた様の悲しみは、この紫には癒せないものなのでしょうか。

紫は、秋様がお沈みになっている。それだけで心苦しゅうございます」

（やっちまった）

それが秋が最初に思った言葉。

今にも泣きそうな紫の表情と紫の言葉。そこへの感想である。

「それまで、九曜頂・日崎様や九曜・神薙様のことを、あれほどに親愛溢れるお言葉に満ちておりましたのに、もう半年もそれがございません。」

この一週間、かのお二方ともお話し致しましたが、秋様のことを本当によく思ってくれていらっしやいます。

一体、何があったのでございましょうか」

静かに、しかし確かに強い紫の言葉に、秋は紫を見られなくなる。

他の友人からの言葉で、元からの友人を疑った。疑って、競争意識を持って、それからずっと、すれ違っている。

自分でも分かっている。ガーデンでの一件も、結局はそれなのだ。

半年前のことは自分でなんとかしたい。だが、ガーデンのことだけでも相談すべきなのだろうか。

(相談してもいいのか?)

紫を正面から見つめれば、強い意志を込めた瞳で見つめられていた。そうしたら、いつの間にか、ガーデンでの一件を話していた。

結果として、セイジと琴葉とアリシア以外からは殴られ罵倒されたが、問題の三人からは何もなかったことを話し終える。

「秋様、一つお詫びを」

話し終えたら謝られた。謝られたから気づく。疑問に思った瞬間、その内容を話す意志なしに話していたことを。

「話を引き出す魅了を使ったんだろ?」

「……申し訳ありません。」

言い訳になってしまいましたが、少しでも話して楽になってほしいだったのでございます」

「いや、いい。俺にもそういうきっかけは必要だったと思うし」

紫がそういう魔法を行使する相手であることぐらい、とっくに知っている。

「ロードウエル様に関しては、私も分かりません。」

九曜頂・日崎様と九曜・神薙様に関してであれば、プラスとマイナスがゼロなのでございましょう」

「プラマイがゼロ？」

紫はコクリと頷く。

「あくまでも秋様のお手紙と私がお話しした上での判断でございませぬが、お二方の、特に日崎様のお考えはおそらく、と」

仲間を護ろうとして命令違反を犯した秋の姿勢を、評価したのではないか。

結果として被害がアリシアのみだったからといって、他に被害を出す可能性を生じさせたことは決して評価してはならない。

「仲間を護るのはアリだけど、手段を間違えたことを怒った？」

「予想、推測でしかありませんが。」

九曜頂・日崎様のことを、秋様はお手紙では『隊の頭で理性過ぎる』だけど『ダチ思い』だと褒めてございました。

であるならば、このような評価をしても、おかしくはないのではないだろうか」

セイジは優先順位を付けて護るタイプである。

セイジ自身がすべてを護る選択をすることは、まずないと言ってもいい。場合によっては、任務優先で一般人さえも見捨てる選択をする。

任務の役に立たない一般人などより仲間や友人の命が優先だ。

そう発言して、かつては秋とぶつかることもよくあったが、仲間が無事なら無事な奴が『自分が見捨てた命を絶対に助ける』という確信を持っている。

それは、付き合っただけで分かったことでもある。

（俺は……仲間への被害を考えなかった。）

オリヴィエの作戦を支持するとしても、支持する仕方はもったいなかった。

少なくとも、カスルバー攻略には参加するべきだった）

「何で俺は、あの時……」

強く手を握られる。

「気づけたのなら、素直に”ごめんなさい”をしてください。

半年のわだかまりがどのようなものであるかと、ガーデンの一件に関してを氷解させることが何かのきっかけになるのではないでしょうか」

紫の表情は真剣そのもの。その顔を見ているとやれる気はしてくる。

とはいえ、秋は俯く。

かなり格好の悪いところを見せた。ただの愚痴野郎である。

「とりあえず、悪かった」

一度顔を上げてから紫を見つめ、すぐに頭を下げた。

「頭をお上げになってください。

紫は秋様が笑ってくださっていられば、それで良いのでごめい  
ます」

気にすることは無い。そう言って、下げられた秋の頭を撫でるの  
であつた。

夜、紫は自室にて水を湛えた鏡を覗く。

（魅了をかけた時、秋様の意識化に何か杭のようなものが見えまし  
たが……）

「あれは一体」

水鏡を用いて正体を探ろうとしていた。

あの杭は、秋にとって悪いモノとしか思えなかったからである。

「千里を視通す水鏡」

水面に小さな波紋が生じる。

「心さえ視通す 詮理せんりの鏡」

波紋が徐々に数を増やす。

「かのお方の心を乱すモノをここに」

鏡が光を放ち、一瞬、何かが過ぎ去った。

ピキツと音を立てて鏡にヒビが入る。水鏡の魔法が何者かに破られた。

しかし、紫は一瞬だけ鏡面に過ぎ去ったモノをしつかりと見ていた。

（今は……魚？ 尾の長い、鮭でしょうか）

どのみち、はっきり分かったことはある。

秋は何者かに精神を乱されている。かなり強い呪いをかけられているとも言える。

呪いの種類を特定は出来ず解呪することも出来そうにないが、弱めることは出来そうではある。

（材料はここで手に入るのでしょうか）

確か、琴葉がそういう方面で強かったはずである。

琴葉は今出かけている。戻り次第、相談してみようと思う紫であった。



## パーティー

セツナはケルト海を南から西回りで大ブリテン西端を回り込み、北東に進路を取る。

「個人的にはバリーからかつ飛ばしたいのよね」

「カーディフベイから普通に入れよ」

「暑い。換気おかしくない？」

「お前のテンションの問題だ」

言いながらも車内の熱をマテリアル化して熱操作をするセイジ。

マテリアルは作成次第ダツシュボードの中へと放り込む。

その様はSLを走らせながら炭をくべているかのようでもある。

現在速度は既に200キロは出ている。運が良いのは、進路に船が出ていないことだろうか。

「ところで、服装は制服のまままで良かったのですか？」

真咲の質問。それは勇も気になっていたところである。

「レンタルするから心配しなくていい」

解答はすぐにセイジの口からもたらされる。

「場所はカーディフの城でとのことだ」

「ロードウエルって城持ちじゃないでしょ？」

「嫡男が雇われ兵だったとしても国都を護ったんだ。」

その活躍に敬意を持ってウェールズの連中が、一族内のささやかな立食会を、国賓さえ招く大仰のパーティーに大変更したのさ」

コーンウォール公の末妹を妻に迎えているロードウエル家に、国を、女王を護れるだけの活躍をする嫡男がいることを、ウェールズの貴族が世に知らしめたい。そういう思惑もあるのだろうとセイジは言う。

「でもそれ、リチャードさんは嫌がりそうね」

セツナは苦笑混じりに言う。

「なんでですか？」

勇の質問も当然か。

貴族の嫡男にいる者が実家の名誉となることを嫌がるのもおかしい。

「嫡男リチャード・ロードウェルにとって、主君はイギリス女王ではないということだ。

彼はミスロジカルを卒業後、当時まだアルカナムとして建国していないメルカード財団に入っている。

建国後、財団を出ることなくアルカナムにいる以上、彼の主君はメルカードの魔女ということになる。

現在のロードウェル家は親子で主君とする相手が違う」

「周囲に押し切られる形の今回のパーティーは、状況として、城を用いることで敬意の対象をイギリス女王へと無理矢理持ってきているわけですか。

名誉欲しさに王の立場を地に落としてしているようにも見えます。貴族とはどこの国でもいかんともしがたい存在ですね」

セイジによるロードウェルの主君違いから今回のパーティーを評価した真咲。それを勇は「万感こもってんな」と感想を漏らす。

「状況が日下の貴族パーティー勝利への道を茨化しているように見えるんだが」

その感想に真咲は「むっ」と唸る。

「そこはほら、キリサキがエスコートすれば解決でしょ」

「エスコート!？」

セツナのからかいに勇が目を見開いた。

「エスコートってどうすりゃいいんだ？」

「私がエスコートをしますので、問題ありません」

璃央や紫でやりなれた真咲が言って勇が少し安堵する様がバツクミラーを通して見られた。

(問題大ありだろ)

日崎兄妹が揃って同じことを内心で呟いた。

「セイジはちゃんと私のエスコートするのよ」

「言われんでも分かっている」

「ほっ」

唐突に、セツナが一瞬ハンドルを切った。

「うわっ?!」

「くっ!」

速度故か、前を見ていなかった後部座席がシェイクされた。

セイジが窓から頭を出して背後で小さくなっていく影を振り返る。

「メロウ?」

「珍しいわね。ちょっと東に来すぎじゃない?」

セツナが避けたのは人魚であった。

「ホリンに教えた方が良さそうだな」

「そうね。よろしく」

セイジは携帯を操作してメールをマルキス学院長経由でホリンへと送る。ホリンは携帯を持っていないため、個人への連絡は学院長を通すのが手っ取り早い。

カーナビで現在地を確認する。

(スウォンジーの南か)

スウォンジーには魔構企業がいくつか支社を置いている。中にはクロケットの支社もあったはずである。

「いたた」

シェイクされた後部座席で勇が頭を振りつつ身を起こし、なんか柔らかいものを握った。

(なんだ?)

上げた顔を下に戻し、自分のすぐ下に怒ったような顔で見上げてくる少女の顔があることに気づく。やや頬を赤く染め、パクパクと口を動かして震えている。

無言で自分が握るものに目を向ける。

紫と真咲が通う私立天原学園の校章が縫い付けられた胸ポケット

がある位置を、ガツシリと驚掴んでいる。動かしてみれば、なんとも柔らかく、癖になりそうな感触である。

（ふむ。なんとというかお、大きすぎず小さすぎずそれでいて、俺の掌にじっくりと来るような……じゃねえ!？）

背筋をフルに使って勢いよく飛び退いて、車の天井に頭をブチ当たって落下し、自分の膝に顔面を落として悶絶。

「フゴツ?!」

（痛い！ 超痛い！ 顔の前後が痛過ぎる!）

「ふ、ふふ、ふふふ」

チャキツと音がして、なにやら酷く冷たくて硬い物が頬に押しつけられた。

「いい度胸してますね?」

真咲がニツコリと目以外が全力で笑っている。

「ご、ごご、ごめ、ごめんなさい」

対する勇は目に涙を浮かべてカタカタ震えた。

セツナはバックミラーを除いて首をかしげる。

「なにやら後部座席に少女が二人いるわ」

「面白いことにはなっているが、マードー一人にドーター一人だな」

真咲が勇を銃身で殴りつける場面がバックミラーに映し出される。車体が大きく揺れた。

「冷静じゃない?」

「冷静でなくなった時が、この車の沈む時だと思っている。」

おい、何キラキラした目でフロントのボタンに目をやって……いや、本当にやめる。そこはまずい」

「ここは?」

「お前の身体がくの字に曲がった事件の」

「あ・れ・か。」

「じゃあこれは?」

「速度減少用の前噴射。おい、手を伸ばすな。引火して前面吹き飛んだの忘れたのか!？」

「つまんない」

「つまんなくていい。安全に全速で行け」

「はい」

本当につまらなさそうに返事をして、更に速度を上昇させた。

カーディフベイに入ってから速度を落とし北上する。

「どこでレンタルするの？」

「キャピトルだ。今ナビに出す」

カーナビに進路が示される。

「そこからまたこれで移動？」

「メアリとシエリーが移動手段を用意して待っていてくれるはずだ」  
聞かない名前だ。

「ええつと、誰？」

「アリシアの従者だ。」

まあ、学院には来ていないから、知らなくても問題はない。

それとキリサキ？」

後部座席を振り返れば、もう、いい感じでボロボロになった勇が  
「ういっす」と応じた。

「……」

さすがに言葉をなくすセイジ。

「あー……、組めるか？」

まず真咲に聞いてみる。

「問題ありません」

無表情で返される。ちょっと怖い。

勇に顔を向けてみる。こっちは無言で頷いた。

「まあ、向こうで暴れるなよ？  
で、だ。」

これから会う奴からエスコートについてレクチャーしてもらえ。

一応、ここの文化としては男がするものはあるからな」

「が、がんばります」

緊張気味で勇は返事した。

キャピトルに到着したのは夕刻。そろそろ町が街灯で照らされる頃だ。

車をレンメルが指定していた場所に停車し、率先するセイジの後について三人が辿り着いたのはあるブティック。店内では二人の人物が待っていた。

（メイドと執事！）

勇は口にこそ出さなかったがかなり驚いた。

セイジよりも年上らしい女性と青年で、勇の感想通り、メイドと執事である。

「お待ちしておりました、アステール様」

「久しいな、シエリー。」

こつちが妹のセツナ「ヴィオ。後ろがユウ・キリサキとマサキ・クサカだ」

頭を垂れた執事ことシエリー・ヴェインに、セイジは連れを手短に紹介する。

「メアリ、ヴィオとクサカを頼む」

メイドことメアリ・ヴェインにセツナと真咲を託し、勇を連れてシエリーの案内に任せ二階へと向かった。

小一時間後。

「なんか疲れた」

燕尾服を着てホールに戻ってきた勇がグツタリしていた。

着慣れない服装でシエリーから最低限のエスコートを学び、妙に疲れていた。ある意味、初日にホリンとやった遊びよりも疲労感はあるかもしれない。

「まだ本番前だぞ？ 大丈夫なのか？」

「本番は大丈夫……だと思……」

一階奥から戻ってきた真咲を見て言葉を忘れる。

イブニングドレスなど見慣れる以前に見たことがない。というよ

り、真咲の美人度が上がっている。

勇は赤くなつて啞然。

啞然の表情に、真咲は自分を見下ろして「やはり似合わないかと憮然とする。

「そんなことないわよ？ マサキは女性として自信がなさ過ぎると思つわ」

遅れてやつてきたセツナに「ですが」と真咲は反論。勇は心臓を止めかかった。

勇だけでなく、ブティックにいた男性客がすべて、と言つた方がいいだろうか。

そこには美神みしんがいた。

服装は真咲と同じく黒いイブニングドレス。装飾も華美ではなく至つてシンプル。しかし、内側から溢れ出る輝きを隠せるものではない。

「馬鹿野郎、何テンション上げてるんだ。少し抑えろ」

勇同様、燕尾服を着たセイジがホワイトタイを締めながら下りてきた。

今度は女性客が言葉を失つた。

真咲もまた啞然と本家家長の思い人を見つめる。

(この男、危険過ぎる！)

真咲は『男は外見ではない』を信条とする。しかし、今、確実にその信条が揺らぐのを感じた。

頑固であろうとなかろうとこの少年の外見に惹かれない異性はいない。確かにそう思った。

それほどまでに、正装し髪型も整えたセイジは魅力的に見えた。

「見て見て、セイジ！ 初ドレスよ！」

「はしゃぐなよ。似合ってる。似合ってるから、とりあえず亜神化を解け」

「え？ あら、いけない」  
セツナは輝きを抑える。

「なんで無意識で亜神化が起こるんだよ。ガキじゃあるまいし」  
「いいじゃない。減るもんじゃないし」

「意味不明過ぎる。少なくとも」

「ブティックにいたカップルの何組かが喧嘩を始めるのを指差す。  
「人口は減りそうだ」

セツナが亜神化を解き、ようやく勇は動けるようになる。

（危なかった。なんか知らんが危なかった！）

無意識に額をぬぐった。

（この兄妹に正装させるのは危険ということが分かった）

真咲も嫌な汗を掻きながら、店外へと向かう。

店外ではリムジンと戸を開けて待つシエリーがいた。

セツナとシエリーを先に乗せ、勇が乗った後にセイジが乗ろうとするとシエリーに止められる。

「アステール様、こちらを。お嬢様からです」

差し出されたのは宝石箱だろうか？

開けてみれば、琥珀のイヤリングが一個とカードが入っていた。

「俺、別に戦いとか起こしに行くわけではないんだが」

カードに目を通し、吐息。

（あいつも、しょうもない）

「分かった。受け取るう」

セイジが受け取ってリムジンに乗るとシエリーは一礼して、助手席へと向かった。運転するのはメアリの方である。

車内でイヤリングを左耳に着ける。

前を向けば、対面に座る勇と真咲が落ち着かない様子でキョロキョロしている。

「アリシアの奴がそれなりに賓客待遇で用意してくれたんだ。あいつにだけは恥をかかすなよ」

「どうすれば恥とか、かかないもんですかね？」



「あんまり緊張するなつてことだ」

緊張も過ぎれば失敗を誘発する、とセイジは言う。

「そつだな……、これから向かう先は試合場だと思え。貴族って名前の相手と勝負をしにいくとな」

「勝負……」

「俺も最初は君達くらいの緊張はあつたが、師匠の言葉でなんとかなりはした。

あとは、ほどよい緊張感に慣れれば、勝負は勝てる」

勇だけでなく、真咲も真剣に聞いていた。

どうやら二人とも、勝負という言葉には反応するようだ。

（九曜というのもよく分らん）

九曜・霧崎が剣の道に関して厳しく育てられることは、姉の悠に聞いていたから、自分が師に教わった方法が通じると思つて『勝負』の単語を出したのだが、璃央や紫と付き合いのある真咲までそこに反応するとは思つていなかった。

九曜・天宮の中の武人といったところなのだろうか。

「で、だな」

セイジは隣に顔を向ける。

「お前は少し緊張しろ」

まったりとオレンジジュースを飲んでいる妹に、そんな注意を促す兄であつた。

カーディフ城の会場にセイジはセツナを、勇は真咲をエスコートして入場する。

勇の様はなんとかなつていた。

多少ぎこちないところもあるが、問題ないと思える程度にはなつている。

妹を腕に絡ませたセイジはまずは目的の一人を奥の方に見つける。勇と真咲に動かないよう言い含めてから、その場所へと向かう。

二人が移動する場所のすべてで二人に対する感嘆の溜息が漏れる。

「やっぱり、私達が揃うとすごいのね」

「外見はな。亜神化せずともこんなものだ」

「でもおかしなものよね。」

亜神化しなければ性別関係なくこんな感じなのに、亜神化したら異性しか惹きつけられないだなんて」

「のみということもないだろうが、やはり母さんがアテナやヘラの姐さん達と反りが合わないことにも起因するんだろう」

面倒臭いことだ、と苦笑する。

「間違つてもあの人達の前で亜神化だけはするなよ？」

「分かってるわよ。第二次パリスの審判なんて笑えないわ」

「っと、アリス発見。失礼」

群がる男の人垣をかき分けて、目的の人物の前へと到着する。

いたのは、清楚なイブニングドレスを着た少女。学院での男装剣士と同一人物とは思えないほど可憐で保護欲をかき立てられそうなお姫様。アリシア・ロードウェルその人である。

(え、誰?)

同じハイエンドで二年以上共に学びパートナーとしてチームを組んでもいる対象のはずなのだが、セツナは一瞬、相手が誰なのか分からなかった。右手に光る蒼珠の指輪がなければ、学院のアリシアとは結びつかなかったかもしれない。

「ごきげんよう、アスト。それにセツナもよく来てくださいました」

「こちらこそ、唐突の無茶ブリを受けてくれたことに感謝を。」

セツナ？」

兄に促されて「ええっと」と自らの啞然の痕跡を消そうとアタフタしてから姿勢を正す。

「一週間ぶりに再会出来たことをうれしく思うわ。元気そうで何より」

「ええ。ヴィオもお変わりなく」

口元を隠して楚々と笑むアリシアに違和感。

「受け取っていただけましたか」

アリシアはセイジの左耳にキラリと輝く琥珀を見つめる。

「少し、警戒のし過ぎとも思えるがな」

「今回のゲストを考えれば、し過ぎるくらいがちょうどよろしいかと」

「護衛に何を連れてきてるか、分かったものではない。そんなところか？」

彼らだって馬鹿じゃない。俺達のような突発以外の参加者くらい把握済だろう。手を出す愚くらい理解していよう……あ

アリシアの警戒心に忠告を言っていて、はたと思いつく。

「突発以外の参加者。リチャードの友人関係枠はどこだ？」

「アルカナムの方々ですか」

近くの給仕にリチャードの所在を聞くアリシア。答はすぐに判明する。

「そろそろいらっしゃる頃と」

「では、まあ、アリスの警戒には付き合おうが、こちらもその前にやることはやっておく」

また後で、とアリシアに背を向けて数歩進み、再度振り返る。

セツナがアリシアと歓談を……。

「おい」

ちよっと低いセイジの呼びかけにセツナとアリシアが顔を向けてくる。

「キリサキの用事に私は不要でしょ？」

その返事にセイジは肩をすくめる。

「うちの妹、頼める？」

「よろこんで」

嫌がる素振りのないアリシアに「悪いな」と返し入口付近へと戻った。

入口ではちょうど人垣が出来ていた。

人垣が割れて、どこぞの貴公子然とした青年が歩いてくる。その

面影はアリシアによく似ていた。

青年が戻ってきたセイジの顔を見て、右手を軽く挙げた。

「やあ、アステール。人工島以来かな？ 元気そうでなによりだ」

「あんたもな」

握手を交わす。

「モナコはどうだったんだ？」

「楽しかったよ。ああいう仕事ならいつでもOKだね」

人が死ぬことがない、と付け加えられた。

パーティーの主演と別れ、別れ際に示された方へと向かえば、ちょうど勇と真咲が、目的のカップルと向かい合っている場面に遭遇した。

セイジも長身ではあるが、それよりも多少高い琴葉に似た感じのする青年。左腕に鬼灯色の宝玉を埋め込んだ濃緑の腕輪をしている。イブニングドレスを着ているものの本人が持ちうる凛々しさ一切損なっていない長身の女性。その容姿は勇と似ている。セイジの記憶では髪をポニーテールにしていることが多いが、今回は下ろしてストレートにしている。

青年は神薙龍也。琴葉の実兄であり、神州においては九曜頂・神薙と呼ばれる人物である。

女性は霧崎悠。勇の実姉であり、神州においては九曜頂・霧崎と呼ばれる人物である。

二人とも勇達と遭遇して若干驚いた様子ではあったが、近寄ってきたセイジを見て二人がセイジの連れであることを知って表情を柔らかくした。

「よう、勇。彼女連れで社会科見学か？」

「か、かの……や、彼女じゃない。本当だぞ？」

龍也に聞かれて、勇は真咲を見てから、違うことを訴えた。

「天宮の系列だったか」

悠は真咲の情報を脳内から引つ張り出し、天宮の分家筋にあたる、日下の次女であることを思い出す。

「今回の臨海学校は九曜の関係者が多いと聞いているが、天宮は日下を出してきたか」

「お初にお目にかかります、九曜頂・霧崎様。日下の次女、真咲でございます」

「うむ。まさか遠く神州から離れた地で初見になるうとはな。霧崎の頂、悠だ」

悠も真咲も互いに小さく会釈を返した。

「日崎の長兄も久しいな」

「長兄と言われても弟はいないんだがな。ま、久しいことに変わりはないか」

「はっ、変わらん」

「変わる要素がない。そっちもまったく変わらないというのはどうなんだ」

セイジと悠はどちらかともなく口元を歪めて笑う。

真咲の目から見て、あまり仲がよさそうにも見えないが、かといって敵対視しているようにも見えない。妙な空気である。

「して、うちの弟をこの場に連れてきたのは、どういう了見か」

「弟から姉への報告、とでも言えばいいのか？」

悠からの質問に、勇を見て頷きを得てから、そう答える。

「勇が？」

「姉貴に報告というか、相談というか……とにかく、話がある」

「ふむ……龍也？」

勇の頭を撫でていた龍也はバルコニーの方をアゴでしゃくった。

「対処はこつちでやる。姉弟仲良く相談事でもしてこい」

対して悠は「ん」と頷くと、弟の襟首を掴み、バルコニーへと引きずっていく。

「え？ ちょ、姉貴？ 俺、歩ける。ぐえ、喉が……」

消えゆく勇に軽く敬礼をしたのは龍也の冗談だとして、真咲は龍也にも挨拶をする。

九曜の分家筋といっても、学校が同じとかそういう接点でもない

かぎり、九曜頂と出会うことなど珍事以外のなにものでもない。

(異国で九曜頂が三人とは……)

それだけで十分珍事ではある。

「星司は引率か?」

「そんなところだ。」

発端はコト八だが、相談を受けた手前もあるからな」

(あいつが祖父さんではなく、こいつに相談を持ちかけたとなると、それなりに重大な案件か。

勇のことどとなると)

龍也は腕輪に視線を落とし「あの件か」と呟いた。

(姉弟の問題ではあるが、結果、更なる大問題になるだろうな。神州としては)

「ところで、天宮の日下となると、日下遊馬の妹、でいいのか?」

龍也はどこか真剣な顔で真咲を見下ろした。

真咲は、今ここで、唐突に兄の名前が出たことに驚き、弾かれたように龍也を見上げた。

知り合いなのかというよりも、どうしてそんな真剣な顔で聞かれるのか。そこが分からなかった。

「九曜頂……?!」

『九曜頂』の単語を真咲が口にするのに合わせて、その唇の前に人差し指を立てる龍也。

「ここは神州じゃない。もっと碎けてしまっただい」

「え? な、なんとお呼びすれば?」

「神薙でいい。琴葉もいねえし、イコール俺だろ? あと悠の方も……弟と分けるためには、そうだな。なんかあるか?」

龍也に話を振られて、セイジは首をかしげてから答える。

「フツ又シのフツちゃん?」

「それはやめろ。お前だって、そっち連呼されたかないだろ」

「んー、まあ、そうだな。」

ユウでいいじゃないか。クサカだって、弟の方をキリサキで呼ぶ

んだから、区別くらいつくだろ」

呼び方は「じゃ、それで」で決まっちゃった。

「で、ですが」

「大丈夫だ。ここなら名で呼んでも不敬罪になんかなりやしねえ。なにより、俺達自身がそうしてほしいんだからな」

むしろ、これ以上『九曜頂』と呼ぶことが不敬だとまで言われて、真咲も無理矢理自分を納得させる。

「で、では、神薙さん」

「うん。で、なんだ？」

「どちらで兄と？」

九曜頂・神薙が九曜頂・霧崎と共に長く神州に帰っていないことは、周知の事実である。

近江にいるはずの兄と接点があるようには思えない。

いるはず、というのは、あくまでも実家にそういう連絡が入っているということであり、真咲自身はもう数年兄とは会っていない。

「直に分かる」

直接的な答ではなかったが、直にとはどういうことだろうか。

「星司、お前、ロウ・エクシードと旅をしていた頃、ヴァチカンの白鬼さんとは会ったか？」

何故か話を振られる。

「白鬼？ アポクリファの笑鬼のことか？」

確か、そのようにも呼ばれていたなと思いついて頷いた。

正直、酷い目にあつた記憶しかない。

「これから、誰と会っても騒ぐんじゃねえぞ。日下のお嬢さんもだ」

「話の流れで行くと、あの鬼がここに来るとしか聞こえないんだが」

「ああ、聴力は間違いじゃない」

「そうか。護衛はあの鬼さんか。あまり相性がいいとも思えないな」

白鬼とか笑鬼とか聞かされても、真咲としては兄の話題からどうしてそんな単語が出てくるのかが分からない。

ヴァチカンとか無縁過ぎる。

真咲の兄は、神州は近江の魔構研究所に勤務しているはずなのだ。  
「神薙さん、あの」

その時、来場者のチェックをしている方からざわめきが伝播してきた。

やがてざわめきの中心が入口のホールへとやってくる。

まずカソックを羽織った老人が入ってきた。老人は首元に十字架を下げていた。

続いて、茶髪翠眼の赤いベストを着た少年が顔を出す。少年は白い羽型の耳飾りをしている。

次に、今度は一応とばかりに燕尾服を着た青年が続く。白髪で、常にニコニコと笑いを浮かべ、うっすら見える目は血のように赤い。

白髪の青年を見た瞬間、真咲がその場に立ち尽くした。髪も眼も色が違う。しかし間違えるはずがない。

「にい……さま？」  
思わず、言葉が漏れる。

「ふうん。カノンとアポクリファを一人ずつ連れてきたか。連携が取れるとは思えん」

「実際、奴らが連携を取ることはないだろうな。  
ヴァチカン内でも神聖十二使徒と裏使徒の仲の悪さは半端ないからな」

下手に連携を取らないからこそ、たちが悪いと龍也は言う。  
デタラメだ、と。

白髪の青年が龍也に気づいたらしく、こちら側に顔を向け、自分を呆然と見つめている真咲の存在を視界に収める。一瞬、口の笑いの角度が変わったが、すぐに元に戻る。

老人になにやら耳打ちした後、頷きを得て、こちら側へと進路を変えてやってきた。

「やあ、アルカナムの神薙君。一週間ぶりですね」  
大仰に挨拶してきた。

「裏使徒の曰下遊馬さんよ。」



なんだ？ ロンドン血の海にしちゃってごめんなさいとでもしに来たのか？」

「したのはアメリカ軍であって、僕ではないなあ。

ちよつと攻め時のタイミングが合っっちゃったただけだって、謝ったじゃないですか。その後、ちゃんとお手伝いしたでしょ？ 主にうちのリーダーが」

「共同張つたらさっさと姿消しやがって。てめえが壊した騎士達はまだベッドの上だぞ？」

「はっ、壊される脆弱さこそが罪なんじゃないですか？」

「ああん？ と白と黒の青年が額をぶつけてガンつけ合う。白い方は笑顔ではあるが。

（ロンドン防衛線、急襲したのはアメリカ軍だけじゃなかったのか）  
バッキンガム宮殿周辺がほとんど無傷だっただけに、どれくらいの戦闘があつたのかが分からない。そこら辺の情報が一般に提示されていない。

（しかし、クサカ、ね）

セイジは真咲の横顔を斜め上から見下ろす形で確認する。

龍也からあらかじめ騒ぐなど言われたから黙っているというより、なんと話していいか、話しかけてもいいのか、そこら辺の葛藤で話しかけられなくなっている。が正解だろうか。

勇のエスコート対象としてかなり適当に選んだ結果、選んだ対象が予想の斜め上からの来襲でかなり危険になった気がしないでもない。

（先程の茶髪野郎も気になるが、ここも無視出来ないんだよね……）

遊馬の視線が龍也から真咲に移った。

「兄への挨拶はないのかい？ 真咲」

見るからに真咲がビクツとしたのが見えた。

「あ、あの……遊馬兄様？」

「うん。なんだい？」

「その色は」

「綺麗だろう？ 使徒になった時からずっとこの色なんだ。

ああ、そうか。真咲が知る僕は研究所に置いている端末人形だけだから、戸惑ってるのか」

驚かせてごめんよ、と笑ったまま謝り、妹の肩に手を置く。

妹の震えが手から伝わってきてても、ただ、その顔は笑い続ける。

(嘘だ。こんなモノが兄様であるはずがない)

遊馬は真咲の頭を撫でながら、耳元に顔を近づけて「真咲」と囁くように名を呼ぶ。

「綺麗だろう？」

「は……は、はい」

ガチガチと奥歯を鳴らしながら、兄の問いに、兄の望む答を口にする。

泣くことも許されず、ただどうしようもない怯えだけがある。と、唐突に腰の後ろを引つ張られて、頭から遊馬の手が外され、背に熱を感じた。

「申し訳ない。兄妹の会話を邪魔することになってしまっが、こちらにも予定というものがあつてな」

聞こえてきたのは、観察対象または暗殺対象の声。

遊馬の肩の向こうで、龍也がさっさとここを離れるとのジェスチャーをしている。

「おやパラディン・ロウの直弟子君じゃないですか」

「その直弟子君が引率している娘があんたの妹だったことに驚きを隠せないが、ここは失礼させてもらいたい。

ほら、お別れをさっさと言うんだ」

色々驚きすぎて、真っ赤になったり真っ青になったりと忙しい真咲の口が開いたり締まったりしているのを見て「よし」と勝手に頷く。

「では、失礼」

「失礼、では……」

ない、とセイジを引き留めようとした遊馬は龍也に行く手を阻ま

れる。

「もう少し面貸せよ」

その言葉を背に聞いて、真咲の腰に手を添えつつ、そそくさとその場を退散した。

パーティー会場へと入る辺りで、ようやく真咲から離れ、給仕からオレンジジュースをもらって顔色の悪い彼女に手渡す。

「偶然とはいえ、不快を誘発する場に連れてきてすまなかったな」

セイジの詫びに、真咲は首を横に振った。

「偶然なのだから、謝ってもらっても困りませんが」

一口、ジュースを飲んで吐息。セイジを見上げる。

「兄と知り合いだったのですか？」

「知り合いというほどじゃない。少し、襲われたことがあるだけだ」

「襲われ?!」

「……その、なんと言っていていいか。すみません」

「君が謝ることもない。」

それに、狙いは俺ではなく師匠の方だったから、あまり関係はない」

死にかけはしたのだが。

セイジとアリシアの師にあたるロウ・エクシードという人物は、大戦時にヴァチカンを出奔した聖戦士の一人であり、教会上層部から背信者の名を与えられている。

背信者ということで、教会から抹殺対象とされており、特にカノンと呼ばれる神聖十二使徒から狙われている。セイジとアリシアと共に世界を旅していた頃はよく襲われもしていた。

「ほら、もう、そばに白鬼さんはいないんだ。下を向かずに前を向きたまえ。」

「こんなことで萎縮してしまっっては、俺に勝負を挑むなど出来ないぞ?」

「そんなことは……」

ないとは言い切れない。

俯く真咲の向こうに、真咲を捜しにきたらしい勇の姿を見つけ、セイジはフツと笑う。

「君のパートナーも戻ってきた。事情の知らない彼に暗い顔など見られたくもないだろ？」

勇が戻ったと聞いて、顔を強張らせる。

確かに、彼に弱いところを見せるのは癪ではある。まだ若干暗くはあるが、顔を上げた。

「その調子だ」

そう言って、真咲の身体の向きを180度変えて、こちらに気づいてやってくる勇に向かって押し出した。

「俺はまた今回のVIPのところに行かせてもらう。君は今回参加した本来の目的に従事するんだ。いいな？」

勇に「クサカは渡したぞ」と伝えて、セイジは、アリシアとセツナの二人と別れた場所に向かって、足早に立ち去った。

アリシアとセツナのそばでは、赤いベストの少年を連れた老人がリチャードになにやら長つたらしい祝福の言葉を捧げている。

セツナは欠伸をしてアリシアに肘鉄を入られた。

「くっ、こういうところだけいつものアリシアだなんて」

「ヴィオは少し場所をわきまえてくださいな」

小声での会話。

「あのじいさん、話長すぎ」

「聖職者なんてそんなものでしょう」

「一神の祝福と奇跡がヴァチカンにのみもたらされた時に、この国での聖職者は権威を失ったわけで。今更、本山から坊さん呼んだところで、もうこの国じゃ一神教なんてやってけないでしょ」

この時代、加護も奇跡も与えず助けられない神など信仰の対象にさえ

ならない。

敬虔に信仰を守り続けるのは、大戦前からそうであった者くらいか。

彼らは神と呼ばれる存在が人を助けられないことに疑問など抱かない。大戦前の世界では加護も奇跡も、魔法さえもないことが普通だったのだから。

セツナの言う”一神教”の下りは、この時代に生まれて生きる者故の言葉と言えた。

「アリシアのところに残るの失敗だったかな。ご飯おいしかったけど」  
「目的が果たされた時点で離脱すべきでしたね」

「そうなんだけど。というか、いい加減、言葉くらい普段に戻さない??」

「こちらがここでの普段ですのぞ」

（やりにくいなあ、もう）

セツナは面倒臭そうに、暇潰しで老人達を視てみる。

（あのじいさんは普通か。多分、あの魔力じゃ魔法は使えないわね）

次に赤いベストの少年へと視線を移して「ん？」と眉を震わせた。

（ラフィルっぽいと言えはばいけど、シユスイのようと言われても

……色はラフィルなんだけどな）

首をかしげてしまう。

一言、言えることがあるとすれば、

（純然の人間じゃない）

である。

（使徒とか今までに会ったことないし、よく分からないわあ）

彼が使徒という者であることは、あの老人がリチャードに挨拶した時に紹介したから知ってはいた。

（というか、あれって神州の人？）

容姿の造形が父親の系統と言えなくもない。

ふと、何の気はなしにアリシアを横目で見て「へ？」とビビる。

とても厳しい目で、少年を見つめていた。

「アリシア？」

「気をつけてください。何かあります」

何かと言われて、再度少年を視るが、特に魔力が変化しているわけでもない。魔構の類が起動状態になった、というわけでもない。

もう一度、アリシアの名を呼ぼうとしたその時、ガシャンツと会場となつているホールの上から窓の割れる音が複数回響いた。

「なんなの?!」

襲撃者だ。

襲撃者はまっすぐに真下へと降ってきた。

しかし、リチャードに動きはなく、リチャードはまっすぐにホールの入口を見つめ、小さく頷いた。

直後、襲撃者達がヴァチカンからのゲストの真上へとナイフを構えて落ちてきて、老人の数メートル直上で止まった。足下に、琥珀色で半透明の床が煌めいた。

襲撃者達の間には漂つたのは戸惑い。

しかし時間は待たず、襲撃者を六面で囲む琥珀色の檻。

何が起こつたのか。

それを分かるのは、ロードウエル兄妹とセツナ、そして、ホール入口に立つ左耳から琥珀の耳飾りを失つたセイジくらいであった。

アリシアは見た、少年が柳眉を逆立てて、老人直上の襲撃者を見上げたのを。そして、襲撃者の視線を追って背後を振り返り、セイジの姿を見て小さく舌打ちしたのである。

## 逃走劇

リチャードが襲撃されたことで今回のパーティーは中断となり、学院からの四人の姿は今、ロードウェル家が用意したホテルに在った。

ただし、このホテルには龍也達も滞在しており、日崎兄妹は龍也達の部屋に呼び出されていた。

部屋には日崎兄妹と龍也、機嫌の悪そうな悠である。

セイジが最後に勇を見た時、勇は真咲に絆創膏とか貼られていた。どうも姉に殴られたらしい。

強烈に殴られた後「後日、家族会議だ」と怒鳴られたことを、報告された。霧崎の姉弟に関しては、もうセイジ達が口を出す問題はなくなつたと言える。

後顧の憂いはない、と今回の襲撃についての会話がなされる。「まさか、こういう手を使ってくるとはな。ったく、めんどくせえな」

プシュツと龍也はビール缶のプルタブを立てた。

龍也は燕尾服ではなく、黒字に赤で縁取られたどこぞの軍服を着ており、袖を腕まくりしている。ここ数年、セイジやセツナにとっでは見慣れた彼の服装である。

悠の方もドレスを脱ぎ、龍也と似た服装をしている。下はズボンで動きやすそうである。

「リチャードを護らなくてもいいの？」

セツナの素朴な疑問。襲われたのがリチャードなのだから、とした質問だ。

「問題ない」

妹の疑問に兄が即答した。

「今回本当に狙われたのは、ヴァチカンからのゲストだった老人であって、リチャードではないからな」

断言である。

「襲撃者に関しては一応調べはついたとリッチから連絡はあった」  
「教会関係者だ」

「……星司は本当、話早くて助かるな、おい」  
「ヴァチカンだろ？」

「ん？ 調べじゃイギリス国教会だったんだが、なんでそう思うんだ？」

「重心の移動が、かつてロウを襲った暗殺集団と同じだったからな」  
残る三人は思わず無言。

「確かか？」

悠の問いセイジは頷く。

「俺とアリシアが連中のせいで何度死にかけたことか。

あれだけ襲われれば、さすがに覚える。

アリシアも気づいていると思うぞ」

兄の言葉でセツナは襲撃前のアリシアの警戒を思い出し、そのことを話す。

「襲撃犯がイギリス国教会であれば、大戦末期に行われた教会間闘争に基づく報復とか、一神の奇跡を独占することへの復讐とか色々理由はついてくる。

そしてその理由を餌に使って、今回ロンドンを襲ったヴァチカンへの報復に使ったのだろうなどと、事件を好き勝手にねじ曲げられたかもしれないわけたな」

龍也は「本当にめんどくせえ」とビールに口をつけた。

「だが襲撃の被害者と加害者が同じであれば、話は変わる」

悠は龍也からビール缶を取り上げる。後にしろということだろう。「アリシアが結城を警戒したとすると、奴は襲撃を知っていたか。となると、背後で動いているのはカノンか」

「コウキ？」

聞かない名にセツナは口を挟む。

「結城聖。かつて御門学園に席を置いていた男で、しばらく前にカ



ノンに引き取られて受肉した神聖十二使徒所属の天使様だ」

「天使つて、ラフィルと同じってこと？」

悠の説明に更なる疑問を持って聞けば龍也から解答が来る。

「ラフィル・エルや桝柚樹はお袋さんの胎内にいる時点で受肉している。この場合、リッチや悠、星司のようなリンカー同様、記憶を持ったまま成長していくことになる。」

だが、人間として成長後に受肉した天使は、その人間の記憶と人格を持ったまま、天使の肉体と知識を植え付けられた存在だ」

「天使に記憶と人格を植え付けたって言った方が良さ気ね」

「多少は違うが、それでもいいと思うぜ。大して変わりやしねえ」  
セツナの納得が得られたところで話は続く。

「ヴァチカンからのゲストは用意された生け贄、か」  
セイジの言葉に龍也が頷く。

「襲撃犯が国教会であるうとなかろうと、襲撃位置としてはそんなるか。」

まあ、襲撃対象がリッチだったと言われても頷ける位置ではあった。

目的が何であれ、一つ確かなことは、襲撃の画策者にとって、鼻を挫いて計画を頓挫させたのがロウ・エクシードの関係者で、それはもうばれている。ということだな」

日下遊馬がセイジのことを知っていること。

壁の色こそ異なるが、ロウもまた空間に壁を出す能力を行使していたことを、カノンに知らされていないことはないということ。

セイジと龍也は、町中での襲撃はないと判断する。

この町にいるかぎり、教会の者達は被害者として対応される。目的がある以上、その立場を放棄することはない。

「日下の野郎は、対応こそ酷いが身内にはそれなりに甘い」

(あれでか)

龍也の言葉にセイジは頬を引き攣らせる。

「野郎が妹に被害の出る作戦に参加することはない。」

つつか、アポクリファ側が今回の件に首を突っ込むことはない」  
向こうのリーダーには既に確約済だと言う。

問題は天使様の方だ、と。

「カノンは確実に来る」

「これは、ユウの弟達とは別に帰った方が良さそうだな。レンにバイクでも送ってもらおうか」

肩をすくめて携帯電話を取り出すセイジ。

ここでセツナが腕を組んで不敵に笑った。

「シューティングスターの実力発揮の場面だと思うのよ」

「思わなくていい」

「ええっ?!」

妹の不敵を兄は速攻否定。拒絶である。

龍也は襲撃犯の情報を電話でリチャードへと伝えている。その横で悠が勇の持っているのと色違いの竹刀袋を引っ張り出していた。

「勇と日下真咲は私の方で送る」

「手間じゃない?」

セツナの問いに悠は「いや」と首を振る。

「私がミスロジカルに用がある。ついでだ」

「星司、アリシアからだ」

龍也が投げて寄越した携帯を手にして耳に当てる。

【アスト】

「声が震えているぞ? アリス」

数秒、電話越しでゴソゴソ音を立ててから、アリシアが【申し訳ありません】と言った。

【では、状況をお教えします】

「頼んだ」

【カノンの天使と思しき方は既にカーディフをお出になりましたが、メアリの報告によればそのお方は海上へ出たとのこと】

「他は?」

【笑鬼殿は教会使節団の護衛としてお残りに。】

私と兄様は、アスト達が学院に帰り着くまで彼らを町から出しません】

彼らの攻撃対象をセイジに担ってもらうことに対する、それが自分達の援護だ、とアリシアは言う。

【本来であれば、ゲスト参加に過ぎない貴方達を危険な目に遭わせるわけにもいかないのですが】

「こっちは君の警戒に乗っただけ。君が気に病むことでもない」

その警戒こそが、ガーデンでの一件から記憶新しいこの地を、余計な戦いから守る一手となったのだとも思える」

アリシアからのイヤリングの贈り物がなければ、襲撃は成功していたかもしれない。

「可能性を一つ潰したのだから、胸を張れ。」

こっちはこっちで、勝手に来て勝手に目的を果たしたに過ぎない」  
電話を切って龍也に返す。

「俺達がカーディフに来た手段を奴らは既に知っているだろうから」  
「海から車で来た奴ら、な」

セイジの言葉の途中で、悠がフツツと笑った。

事実だが、なんとなくむかつく。

「そっだが……。」

とにかく、シューティングスターしかないわけか」

「実力発揮を御所望かしらん？」

ふふん、とどこか勝ち誇った感じのする妹に、兄は口をへんの字にして「所望所望」とのたまった。

龍也達の部屋で割と真剣な会議が行われている頃、勇は自室の窓から外を眺めていた。

カーディフの町が魔構で照らされて、綺麗だとさえ思える。

しかし、勇が考えているのは、パーティー会場でのこと。

家族会議の予定は、姉が転生者としての勇を否定しなかったこと

のように思える。殴られたけど。

しかし、後日というのは神州に帰った後だろうか。

姉の様子を見るかぎり、すぐにでも神州に帰るようには見えなかった。

(てか、龍兄と何やってんだ?)

友人の護衛とか婚前旅行とも思えない。

「解せぬ」

解せぬと言えば、真咲の態度もだ。

会場に来た当初、セイジを待っている間は神州同様、真咲のあしらい方はガチガチだったのだが、これ以上怖いものなどないかのように、妙に堂々としたものだった。

(人間の成長つてのは早いんだなあ)

妙な方向に納得していると、ノック。

姉の訪問である。

どこの軍服ですか!? な服装で、髪は普段通りのポニーテールで腰に刀を差していた。格好良くて惚れそうである。

「どうしたんだよ、姉貴?」

「荷物はないのだったな。すぐに出るぞ」

「へ?」

驚いていると、早くしろと急かされる。

「リンカーなのだろう? 意識を内に向け落ち着きを得ろ。」

隠してきたのなら、若干の平和ボケがあるはずだが……、根性で振り払え」

よく分からない根性論だ。

「自覚を持て。そういうことだ。」

五分やる。早急に精神を立て直せ」

「ご、五分?!」

「不服か」

「や、やるであります!」

額に指を置かれた。

「黙想、開始」

姉の言葉に従い、目を閉じて意識を内に向ける。  
見えるのは、自らの神魂。

隠そうとせずとビクビクしていた思考が靄となって覆っている。

あの靄を晴らすものをイメージし、精神のハタキを生み出す。靄を叩き払って、神魂の存在を明確にする。

身体を流れる魔力に以上はなし。あるとすれば隠そうとする意志。「隠れ生きる道を選ぶくらいなら、はじめから転生など手段として必要はない」

姉の声が聞こえる。

「隠すな、自らの意志に従え。」

誰もお前の道を塞ぐことなど出来はしない」

手助けされる形で意識がクリアになってくる。

かかる霧を裂いて晴らしていく。

再度自らの神魂へと目を向ける。

かかる霧も靄もなく、魔力は正常に自分を満たしている。問題は  
ない。

吐息。

うつすらと目を開け……。

「遅い！」

右頬をグーで殴られて錐揉み状で宙を舞った。

「痛い!？」

涙目で頬を抑え女々しく身を起こす。

「姉貴、酷すぎ」

意識は晴れて、頬が腫れた。

うーん、と鏡を確認。意識が晴れようと外見に影響が出るわけでもない。

ただ、なんとかく、妙に落ち着いた。

「で、どこいくんだ？」

「お前達を学院へと送る。私が学院へ行くための土産になつてもら  
う」

「……代官への貢ぎ物かよ。九曜頂・日崎は？」

「後から別途で来る」

「分かった。後で理由教えてくれよな」

弟に対して「気が向いたらな」と返し、廊下へと出る。

向かうのは地下駐車場。

「日下は？」

「既に先に行っている。待たせたかもしれん」

（だから五分ね）

時間をかけるなという意味だったらしい。

「女を待たせる男は最低だ」

「別に日下とはそういう関係じゃねえ」

「じゃなくても、だ」

進んだ先はエレベーターではなく非常階段。そのまま下りるの  
かと思えば、弟を外に向かって突き落とした。

「ちよっ……うわあああああああああああああああああ  
ああああ」

部屋があつたのは、ホテルの四十階辺りだっただろうか。

風で身体が上に追いやられる。

（洒落になら……？）

今、勇の視界が姉の姿を捉えた。

姉は勇同様、非常階段の更に外に身を置いているが、風に持って  
いかれることなく、ホテルの壁を下に向かってすごい速度で走って  
いった。

「先に言えつつうの！」

身を捻り、風の抵抗を操作し、ホテルの壁に足から魔力を放出し  
て引っかけて接地。下に向かって走り出す。全力疾走である。

先に言えと叫んではみたものの、言葉より身体で教える姉が言う  
はずもなく、否、見て覚えるくらいは言うのであろうか。

エレベーターで下りるよりも圧倒的に早い短時間で地下駐車場へと辿り着けば、夕時に乗った例のリムジンが待っていた。

ただ、待っていた運転手はメアリでもシェリーでもなく、悠と似た軍服の初老の男だ。

「急いであるということとは目立ってもいけないんじゃないか？」

「より目立つのが表から出る。気にするな」

弟の意見を否定したが、姉は「しかし」と付け加える。

「その思考は正しい」

珍しく褒められて、勇は照れた。

姉に促されて後部座席に乗れば、真咲が既に乗って待っていた。

悠は助手席に乗った。

リムジンが発車してしばらくしてから、真咲が助手席との会話用の受話器を手に取った。

「兄、ですか？」

【何かあったらしいな。だが、相手は君の兄ではない】

「兄の……仲間でしょうか？」

【さてな。詳しいことは分からないが、君の兄からの敵対行動は確認されてはいない】

詳しいことを知ってはいいても分からないと言う悠。

言うことでもない。

【一つ言えることは、今回の騒動に日下家は関与していない。偶然現場にいただけだ。

偶然を君がどうとらえるかは勝手だが、マイナスに考えた先にある答は間違いだと言っておく】

通信は切られ、運転席と後部座席の間の仕切りが閉じた。

会場で会った兄のことが頭から離れない。

（駄目だ。兄様のことを思い出すと身体が言うことを聞かなくなる。他のことを考えなければ）

むむむ、と眉間に皺を寄せて「違うこと違うこと」と違うことを一生懸命探す。

兄へのショックと同じくらい違うことを考えて、浮かんだのは…。

「どうした、日下？ 顔赤いぞ」

勇に突っ込まれた。

「な、なんでも、ない」

「ふうん？」

深く突っ込まず、勇は足を伸ばしてノンビリすることにした。

真咲の方は窓側に顔を向ける。確かに指摘通り、顔が赤い気がする。

(こつちも駄目だ。日崎は危険過ぎる)

兄からかばったセイジのことを思い出してしまっていた。

怯えるだけの自分を兄から離し、支えるように立っていた彼の熱を、だ。

思い出し、全身がカツと熱くなる。

駄目だ、アレは刺激が強すぎる。

腰の魔銃に手を添えて、一生懸命落ち着こうとするが、ふと気がつく。兄への恐怖心が不思議と消えていたことに。

地下駐車場からリムジンが出て行ったのを確認。

「よし、行きますか！」

セツナはシューティングスターを魔力全開で発車させた。

「いだっ」

シートベルトを着けていたセイジが車体の跳ね上がりで頭を助手席の天井に打ち付け、屋根を開こうとしていた龍也が顔面を天井にぶつけた。

「おい！」

「じゅめ〜ん」

タイヤを叫ばせながら、規制のかかった道路を南下し、カーディフバイへと進路を取る。



「いいか？ 天使の野郎はフラットホルム付近で気配を立ちやがった。」

「あそこをかすめていけ」

「あいよ」

龍也の指示にセツナが間の抜けた返事をする。

そこに注意することなく、セイジはダッシュボードに入れるためのマテリアルの予備を作成していく。

龍也はセイジから青いマテリアルを受け取ってから屋根を開けて上半身を出した。

左腕から鬼灯色の輝きが生じる。

「いいぜ。派手にぶっ放そうぜ、岐神！」

岐神。

龍也がその名を呼んだ瞬間、腕輪が数十倍にも膨張し、蛇体のバズーカへと変化した。

変化の間に、マテリアルを口に放り込み、バリバリと咀嚼。龍也の瞳が金に輝く。

バズーカが喉を鳴らした。

「ねえ、ギシンって、蛇よね？」

「それがなんだ」

「お酒飲んだらパワーアップするとか」

「うわばみと蛇違いじゃないか？」

大して違わないんだろうが、と付け足す。

「ところで、さつき誰に電話してたの？」

「さつき？ ああ、あれか」

発車前にセイジは携帯でどこかに連絡を取っていた。

それを聞かれて「今は内緒」と答える。

答えたセイジの視界に港の姿が入ってきた。

「ベイに入ったぞ！」

セイジの呼びかけに龍也は腰を落とし、蛇体のバズーカを構えた。照準は夜を視通す金色の肉眼。

蛇体は龍也の魔力を吸収していき、開かれた蛇の口が赤光を放つ。  
「いやがった」

龍也は、南方の夜空に白く輝く翼を持つ存在を捕捉し呟く。  
向こうがこちらに気づき、身体の向きを変えるのを確認。

「よっし、食いついた！」

捕捉した存在の周囲に、ポツポツと翼を生やす白い影が出現しだす。それはやがて、カーディフの南の空を白く染め上げていく。

魔構車が海上に出る。

「あれが天使。なんか絶望的な数ね」

「少女のようできていいんだぞ？」

兄の笑いを込めた言葉に妹は「はっ、冗談！」と笑い飛ばした。

「私は美少女なのよ？ こんな面白いイベントにただの少女で参加するわけないっしょ！」

「世に言う美少女とやらはそういう台詞は言わないと思うぞ」  
「うっさい。」

「タツヤ、やっちゃって！」

屋根の下から響いたGOサイン。

「とりあえず、後で言っておくか」

溜息を一つ。

「さん、をつける！ 馬鹿ガキめ！」

照準。

「対象はあの白い空の端から端だ！」

溜まりきった赤光で既にお腹いっぱい蛇はクワツと鬼灯色の瞳を見開き、龍也の腕に蛇の尾が巻きつき締め上げる。

「ConflagBlaster！」

蛇の口からカツと赤光のレーザーが放たれた。

レーザーは白い空を赤で染め上げていく。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

「おおおおお」

レーザーを放つまま、砲塔を右から左へと動かし、白いキャンバスに赤い線を引いていく。線は上下に赤を浸食していき、白を消していく。

反動を腕と身体全体で吸収し車体への伝達を防ぎつつ、腕を左に振り抜きレーザーを吐き出しきつて、荒い息を吐く。

「はあ……はあ……はあ……。どおよ」  
空が赤く染まっている。

白が増えるどころか減っている。それでも数は千を超えていそうだし、赤いベストの天使は健在。

それでも、道は空いた！

龍也は車内に引っ込んでドサリと後部座席に座った。

「しっかりつかまってなさいよ!？」

ギヤをトップに入れて、ヘイストの魔法を車体に流し込む。

「それじゃ、予定通りエクスマーアまでかつ飛ばすよ!」

海上を魔構車が矢のように疾駆。

まずは南に、白い空の真下まで来て、天から降り注ぐ魔法なんだからよく分からない光線の雨の中をドリフトで潮吹雪を巻き上げる。すぐに再加速。セツナはフロントのボタンを一つ押した。

禁断の加速装置。少し改良版。

ギヤ周辺が後部先に引っ込み、運転席と助手席がくつつき、車幅が縮んだ。

幅なく並んだ兄妹が目の前にいる。

「お前ら仲良いな」

そんな、龍也の言葉。

「不可抗力だ」

「なにをう?」

兄の不可抗力発言に妹が片眉を上げた。

空気抵抗の減った車は更に加速。

計器は既に300キロ超を示している。アークセイバーのように

速度メーターが変化することはないらしい。

運転しながら、セツナはサイドミラーを確認。

「この速度でも普通に追ってきますか」

赤いベスト天使が単独で追ってきている。他の天使はやや遅れて  
いる感じだ。

「そろそろマインヘッドだ。速度を落とせ」

後ろにきたナビを見ていた龍也が指示をする。

加速形態が解除され、速度が一気に落ちた衝撃でシートベルトが  
身体に食い込んだ。

200キロ超の状態でエクスマーア国立公園に飛び込む。

土煙を上げ、車体を滑らせていって木にぶつけて止め、急いで魔  
構車から飛び降りて、近場のあまり大きくはない林に逃げ込んだ。

「Fang……よし」

腕輪をバズーカから格闘用の爪型ナックルへと変化させる龍也。

爪は両手に装着。

「ギンンって便利よね」

「酒代かかってしょうがねえけどな」

セツナの便利発言にぼやく。

(やっぱりお酒いるんだ)

こうしてセツナに、蛇は大酒飲みというよく分からない知識が追  
加された。

バズーカやら爪やらに姿を変える龍也の腕輪。

降神器『岐神』。九曜頂・神薙が継承し続けてきた神喰いの蛇を  
封じ込めた腕輪である。

セイジは龍也に再度青いマテリアルを渡し、残りをすべてセツナ  
に渡す。

龍也はマテリアルを咀嚼する。

ゴクリと音を立てて飲み込むと、大きく深呼吸。

周囲に漂う水気に自身の魔力を同調させていく。

木々の間に天使の姿が見え隠れするが、そこに一喜一憂するのはセツナのみ。

龍也は同調に集中し、セイジはインカムを装備してから琥珀の双剣を構成する。

天に雨雲が寄せ集まっていき、やがてポツポツと降り出す。

「水域顕在 完了」

同調の集中が解かれる。

「じゃ、好き勝手に暴れるとするか」

「怪我とかするなよ？ あんたが怪我すると俺達がユウにぶつた斬られる」

「ばあか。俺が天使なんぞに負けるわけねえだろが。」

「じゃ、俺はこっち、お前はあっち、セツナはそっちな」

「了解」

「OK」

担当区域を決定し、三人は散開した。

強くなる雨の中、セイジは高く飛べない天使を斬りつけると共に空間に剣線を刻み、天使と剣線を足場にして空中戦を展開する。

一カ所には留まらず、常に移動し続ける。

眼下ではセツナの原理が展開し、遠くでは龍也が天使を殴殺蹴殺している。

天使はそれほど頑丈ではなく、光線を撃つことに特化しているらしく、斬りつければ羽を残して消えていく。羽もまた時間が経てば消える。

すべて彫像のように同じ顔をし、体格も同じ。視て確認すれば、魔力は存在せず、虚ろ。魔力が確認出来るのは、遙か上で指揮する赤いベスト天使、結城聖のみ。

(ともかく、あいつが来るまでにそこら中に道を作る)

右で斬り、足場として遠い天使を形状変化させた左で引き寄せ移動する。その足下では。ガーデンで溶けたままのバツクルを付けたエンジンアブーツが光を放つ。

夜の空ではとても目立つ。琥珀をばらまく誘蛾灯に、羽虫の如く天使が群がっていく。

その様子を遠くで眺めて戦っている龍也とセツナは「獲物が！」と悪態を吐く。

四方を天使に囲まれれば、セツナからの援護が飛び、少し硬そうなのがいれば、龍也の方に蹴り飛ばす。

そうやって飛び回った頃、インカムに反応アリ。

【綺麗ですねえ】

どうやら誘蛾灯状態のセイジに対する感想らしい。

「今どこだ？」

【雲の上です】

「ど・こ・の・だ？」

【ああと、えつくすフォード？】

「ホークアイ」

視覚を強化し天使を踏み台に少し高く跳躍。南西の空に銀の輝きを見る。

「確認した。全力で撃て！」

【ラジャったつす！】

璃摩の楽しげな返事。南西に輝くより鮮明な魔力の輝き。続く言葉。

【月天弓！】

放たれて飛来する銀の一閃。

それはまっすぐにセイジへと飛び、セイジは一閃に右の琥珀を叩きつけた。

刻まれる剣線と銀矢が交差。

ちょうど龍也が地に下りたタイミングだった。

ここに至るまでに、刻み続けてきたすべての剣線を一閃が通り抜け、味方の存在しない射線に、存在する天使が全貫通された。

「な……に……？」

結城聖が思わず呻く。呻きながら、落下軌道に入り、誘蛾灯だった少年が右手を左肩に添えるのを見た。

このタイミングでのシフト。天から飛来する二筋の銀光が結城聖を護るように飛んでいた天使を撃破し、シフトし黄金をまとう転生者の手に収まる。

脳内で警鐘が打ち鳴らされる。

(全滅だと？ くっそ、これじゃ)

「穿ち貫け！ カカセオ！」

敵の手から放たれた閃光。

舌打ちを一つ。翼をたたみ、真つ逆さまに下へと落ちて一閃を回避。今まで飛んでいた空間が螺旋に穿たれ、それは上空の雲を貫通して天へと消える。

舌打ちをするのは甕星も同じ。

結城聖は地表に叩きつけられる寸前に翼を開き、海上に向けて撤退を開始する。

それを追うように身をかがめた甕星を「追うな！」と龍也が止めた。

「先輩のお呼びに即参上でござるよ〜ん」

シフトを解いたセイジに璃摩が抱きついてきた。

「いじわる……」

セイジは苦笑しながらも、抱きつかれるままに任せて「よくやった」と璃摩の頭を撫でた。

「なんつうもんをぶつ放すか！」

タイミングがずれていたら死んでいたと思われる龍也が、地面に座り込んで抗議の拳で天を突いた。

「ちゃんと九曜頂が落ちるタイミングで撃つたもん」

璃摩は龍也に、んべ、とあかんべいをした。

「ああ、あの電話つてタカミヤだったのね」

璃摩と璃摩に抱きつかれるままのセイジをジト目するセツナ。

「対空攻撃が可能な奴ですすぐ呼べるのがリマだけだったんだ」

対空攻撃が出来ることと、先程の合体攻撃らしいものが出来ること。この条件であれば、すぐも何も、璃摩しかいないだろう。

「ま、天使は撃退出来たし」

パンツとセツナが手を叩く。

「さつさと学院に帰りましょうか」

場を仕切る一言に、全員が「賛成」と言った。

夜半過ぎ、クロケット支社のフェリーから学院の棧橋へと降り立ち、霧崎姉弟と真咲は龍也の出迎えを受ける。

それを、第三学生寮の屋根の上から眺めるセイジと璃摩の姿があった。

「あの天使とかいうの、魔力ありませんでしたねえ」

「聖戦士や使徒にはあるのにな。」

やはりあれは、生命を元に作られた存在ではない、ということなのか？

一様に彫像のような容姿。まるで一つの行動に特化しているかのような強度。

（仕事に合わせた、使徒の駒、か）

魔力を持たないということは魔法を使わないということ。

今回は剣で倒せたからいいようなものの、相手の魔法を無効化するセイジにとっては相性の悪い相手であることに変わりはない。



将来的に戦う羽目にもなるのだろうか、と溜息をついた。

「ところで先輩」

「あ？」

「今日は研究なしです？」

「あー、さすがに疲れた。鍛錬だけやって寝る」

「ラジャったつす。」

「……それで、ですね？ お電話の時に言ったものは」

揉み手の璃摩に、セイジは「ああ」と電話の内容を思い出す。確か、約束させられたことがある。

「今回は、本当に助かったからな」

そう言って、璃摩を抱き寄せる。

「や、やた！」

今回の受けたら先輩からお願いします！

月の下、少し長い口吻を交わす二人の姿があった。

「あいつらって、そういう……」

「どうした？」

学生寮の方角を眺めていた龍也は「いや」と悠の問いには応じず、先に行った留学生二人の後について歩き出す。

首をかしげ連れの眺めていた方を見た悠は一度目は流し、現場を二度見する形で目撃する。視界の先で二人が離れた。

顔を真っ赤にして硬直。

慌ててツカツカと龍也を早歩きで追って隣に並ぶ。

横に並んだ相方の様子に龍也が吹き出した。

「キスシーンに弱すぎ」

「う、うう、うるさい！」

反応にカラカラと笑う。ふと、笑いをやめる。

「あの嬢ちゃん。先程は神剣ぶっ放してたが」

「天宮の次女がか？」

相方の頷きを見て「そうか」と視線を正面に戻す。

「弟の相談は記憶のことか？」

「知っていて……ああ、オロチか」

「神喰いの蛇が、神魂が正常に動いている超越者を見過ごすはずがない」

味のふるい分け、といったところか。

「本人が姉にさえ必死に隠してたんだ。言えねえな」

「そこはいい。だが……」

吐息。

「転生者は神州では暮らしづらい。分かるのには分かるのだな」

「そりゃな」

ふむ、と相方の相槌に応じる。

（月読は神州には戻らないつもりか）

でなければ、要請があつたからと神剣を使つたりもしないだろう。記憶が封じられた転生者として海外留学をしても、使えばその内本国にはばれる。何らかの形で監視は受けているからだ。

（しかし、麿星と月読か。万が一にも二人の関係を知れば、姉はどう反応するだろうか）

悠はずっと龍也の傍らにいる。

だから、末広の事件があつた頃にセイジが璃央に関わっていたことや璃央がヒルメの記憶を蘇らせたことも知っている。

ここで悠が考える姉とは、天照のことだ。

神州に帰りたくない和本気で思う悠である。

「このまま天宮を退学してもいいだろうか？」

「は？ あと半年在学してちゃんと卒業する約束だろ？」

唐突に何言い出すんだ？ と隣を訝しげに見る龍也。

「龍也の隣にいたいから、では駄目か」

「それはそれ、これはこれ」

「むう。龍也は変なところで大人ぶるから嫌だ」

「嫌って、お前、大人だつづの」

相方の反応にガーンとショックを受ける。

神薙龍也、当年二十四歳。アルカナム就職済。十分、大人である。「悠さん、時々子供ぶるがそこは好きだぞ？」

気を取り直して真顔で発言直後、ドスツと柄頭が龍也の脇腹に突き刺さる。

「ぐふっ?!」

脇腹を押さえて崩れ落ちる龍也。

顔を赤くしながら早足で歩き去る悠は、先で待つ弟に顔色を心配され「なんでもない!」と大声を上げるのであった。

余談だが、今回の口吻でテンションの上がった璃摩は浴場でのぼせた結果、翌日風邪を引いた。

## 神薙さんの家庭事情

ミスロジカル魔導学院には、所々に林檎の木が生えている。

林檎は一年中実り、学院生の魔力回復に役立つ。

星の魔力を根吸いして実らすとも言われるが、年中実る詳しいことは不明。

ただ一点、確実に分かっていることは、人が手間暇かけて実らす林檎よりも格段にも美味しいということだ。

シャリツと林檎にかじりつく龍也は、ベンチでまったりしながら、目の前で仁王立ちして日陰を作る従妹の説教を聞き流していた。

九曜・神薙は、先々代九曜頂・神薙煉龍の次女の本家・神薙、長女が嫁いだ分家・神和で構成される。読みはどちらも”カンナギ”である。

神和家には、辰哉、凜、弓弦の三兄妹がおり、辰哉と凜が双子で龍也と同年の従弟達ということになる。

「龍也が外から指示を出したりするから、辰哉が国内で自分の勢力を」

「へいへい」

龍也は九曜頂ではあるが、神州には滅多に帰らない。

本家、分家への指示も外で報告を聞いて外から出す、といったものであり、神州での指揮は実質、神和辰哉が執っている。

どうやら辰哉は、すべての指揮を自分がしていることにし、評価を自分が受け、それにより自分の派閥を国内に持つようになったりするようである。

凜は兄がおかしくなっていると考えているようで、龍也に帰国して兄をどうにかしてほしいらしい。

ただ、神州国内での辰哉の動きは龍也の方で把握し、さして問題がない程度の存在と認識しているため、従妹の説教を完全に聞き流しているのである。

実際、末広の事件の時でもそうであったが、九曜頂・神薙としての指示は関係各庁に正常に通る。従弟の権力に問題などは感じるはずもない。問題は違う部分にあるのだから。

(悠、まだかね)

悠は現在、霧崎の家族会議実施中で龍也の傍らにはいない。

ここはのんびり昼寝か、留学生の塩梅を見に行くのもいい。と思うのだが、怖い従妹が進路を塞いでいる。

(さて、どうすっかね……おお)

名案を思いつく。

真顔で、凜の顔を見上げる。唐突の真顔っぷりに凜も「やっと真面目に」と話を聞く姿勢を取った。

「凜」

「なんででしょう」

「ズボンのチャックが開いてるぞ」

「……………は？ え、ええっ?!」

一瞬の沈黙後、ババツと慌てて下を向いて、チャックがちゃんと閉じていることを確認して安堵。

「いきなり何言い出す……………?」

発言の張本人が忽然とベンチから消えていた。

啞然。

震えだし、拳を握る。

「あんの、クソ従兄おおおお!!!」

寮周辺に凜の怒鳴り声が響き渡った。

鼻歌交じりで地下闘技場へと足を運び、戦技の授業の現場を見学に来た。

手すりにもたれかかって授業風景を眺める龍也。

現在、勝利がセレスを相手に木刀で斬りかかっていた。セレスはそれを木の棒で受け流している。

腕輪からチヨロチヨロと小さな蛇が顔を出した。蛇の目は鬼灯色。腕輪の宝玉と同じ。

「なんだよ、オロチ。寝るんじゃないのか？」

「シヤ」

「ああ、東に惹かれたか」

蛇が舌をチロツと出した。

「惹かれるというか、気になるといえば、気になる奴がいるな」

それは今、セレスに木刀を叩き落とされた少年である。

（わざと負けてるな。さすがにウォルターも気づいてるみたいだが）  
実力を隠す理由が分からない。

「留学生どもも、それなりに思惑があったりするのかねえ」

視線を下へとズラし、順番待ちの留学生とは離れた位置にいる少年を見る。

誰もが濃いと思われがちな留学生の中で、一人だけ存在を薄め影に溶け込み周囲を観察してメモを取る少年がいた。

色白のその少年は、至って普通の容姿と背格好だった。目を反らしたら見失いそうな感じがする。

（鎬木のじじいのにいたな）

龍也の記憶にある顔であった。

彼もまた、九曜の関係者である。

（アレが監察か。確か、津村蔵人といったか。）

立場だけなら緋桜院と思われがちだが、あの嬢ちゃんは梧桐に甘いから監察には向かんからな）

知り合いだからといって、ここで接触するのははばかられる。

もし学院に寄ることがあっても、監察官には接触するな、と九曜頂・鎬木に釘を刺されていた。

（あのじじい、怒らせるとおっかねえしなあ）

下手に刺激すれば、痛くない腹を探られかねない。

「怖い怖い」

眺める対象を求めている間に、蛇が腕輪に戻った。おやすみらしい。

「お？ あれは」

地下闘技場の入口から入ってきた人物がいる。和装の老教官、龍也の祖父である。

煉龍も龍也に気づき、歩き寄ってきた。

「よう、じじい」

「よう、坊主」

互いに挨拶。

「凜の奴が怒り狂って探しとったぞ」

「こええな、おい。」

「冗談通じなさ過ぎだぜ」

「奴あ、真面目が取り柄だからな」

煉龍は呵々と笑った。

「あいつ、梧桐に手え出してねえだろうな？」

凜が引率でこっち来るって話は穂月から聞いたが、もっぱら弟の安否の問い合わせだよ

「きつく言つてあるから、でえじょうぶだろうよ。」

梧桐も凜には近づかないようにしているしな

「きつくねえ。」

近づいたらどんな罰を与えると云ったんだよ？」

「嫁に出す」

祖父の言葉に、龍也は天井を見上げて遠い目。

思い出すのは、三年前、悠に手を引かれて駆けつけた道場で見た光景。

血塗れの男を掻き抱いて泣く凜と、こちらに背を向けて立ち尽くす梧桐秋。その拳は血に濡れて……。

「罰なのか？ それ」

視線の先を祖父に戻してそう言った。

「むしろ望むところじゃねえ？」

このまま辰哉の相方させられるより、よっぽど懸賞だろ」

「弓弦を辰哉の元に残していく。は十分な罰だと思うがのう」

祖父の言葉で考えが即変わる。

「鬼か、あんた」

「だから罰だと言っておろうが。凜もそれは理解しとるから、素直に従っている」

（ふん。一時の罰か永遠の罰か。どのみち、孫に与える罰でもないだろうが）

恨みの相手への復讐を耐え、耐えられなければ他の罰が待っている。

龍也はこの、引退して尚本家と分家に力が及ぶ祖父への怒りを飲み込む。

ここで暴れてもしょうがない。

ここで排除してもしょうがない。この祖父を排除しても、何も変わらない。

出来れば早くなんとかしたい問題でも、その時ではないことが分かっている。だから手を出さない。

その時が来る頃には、すべてが悪い方向に進みきっていることが分かっている。だけど手は出せない。

祖父への怒りも従妹への憐憫も、一時の感情でしかないことくらい、自分がよく分かっている。

（俺もじじいと変わらねえな）

吐息。

「で？　じじいは留学生の相手しなくてもいいんか？　東の一人じやきついんじゃない？」

「じゃあ、てめえが行きやいいじゃねえか」

「俺は今回の教官とか関係ねえからな。ここでまったり見物だ」



答えて欠伸。やる気なしをアピール。

眠そうに順番待ちを眺める。次はまた、あの嘉藤勝利である。

「なあ、あいつって、何者だよ」

孫の指差す方を見て「嘉藤の倅か」と漏らす。

「嘉藤利則の忘れ形見だ」

聞いたことのある名だ。

「確か、鳴沢暴動の追悼式典で聞いたか」

六年前、神州鳴沢村で起こった暴動事件。

天宮学園の富士分校消失事件の直後に発生した暴動で、多くの烈士隊員が駆り出されて命を落としたとされる。

当時、一隊を率いて参戦し死亡。追悼式典で名を読まれた隊員の名の中に、嘉藤利則の名があったはずだ。

「神州三剣聖の一角……とか、そんな単語もあったな」

「それで合っている」

「剣聖の息子、ね」

剣聖の血を引くから強いと納得するわけではない。

セレスの一撃に合わせて、有効打が入る位置に身を置く動きをしているから、出来ると思うだけの話だ。

「奴あ、強くはなるかもしれんが、どうもなあ」

「真剣でやりあった時、どういう反応をするか見てみたい気もする」

「殺す気か」

「なわけねえだろうが。物騒なじじいだぜ。っと」

携帯が震える。メールで呼び出した。

「次はドイツか。またずいぶん引っ張り回しやがるな」

肩をすくめる。

モナコからイギリス、次はドイツ。のんびり休みたい気もするが、今はその暇はない。

「んじゃ、俺はもう行くわ。結局、半日程度しか休めなかったぜ」

「おう。魔女よろしく言っといてくんな」

祖父と別れて学生寮へと向かう。悠と合流するためである。

第三学生寮と留学生用寄宿舍の分かれ道に差し掛かったところで足を止める。

不審者だ。

不審者が寄宿舍の様子を窺いながら、うろろろしている。

「おい」

声をかければ、そいつはビクリと動きを止めて、ゆっくりとこちらを振り返る。

秋だ。

「なんだ龍也さんか。そーいや、学院に来てたとか」

頭を掻きながらそんなことを言う。

「ちつとは強くなったかよ？」

「ぼちぼち」

「ぼちぼち、ね」

居心地の悪そうな秋の肩越しに、寄宿舍方面に凧の姿を見る。

どうやら、寄宿舍に行きたいけど、凧がいるからいなくなるのを待っていたところらしい。

「三学の屋根から行きゃいいじゃねえか」

「繋がつてるところが凧ちゃんの一部屋なんすよ」

「そりゃ残念なこつた。」

まあ、ちよつとばかり待ってな。隙くらい出来るだろ」

ヒラヒラと手を振って、寄宿舍へと向かう。

「りーん」

凧を呼べば、柳眉を逆立てた本人が走り寄ってくる。

「何処行つてたんだ！」

「見物」

「この……」

「まあまあ、落ち着けよ。」

この程度で腹立ててたら、これから待っているであろうお見合いの惨敗記録更新に耐えられねえぜ？」

凧が額を押さえた。

「惨敗するような相手を寄越すのか」

声に力なく目がくくになっている。

「九曜の不破から長男でも」

「妻子いるじゃないか！ 申し込み時点でアウトじゃないか！」

両手を握りこんでブンブン縦に振る凜。

ちよつと面白い。万年、男物のスーツで拳系の凜がするにはギャップを感じる態度である。

この隙に、秋が寄宿舎の裏口に回り込む気配を感じた。

「ん？ ああ、そっぴや学生婚だったな。高三でよくやるわ」

龍也と不破正義とは天宮の中等部時代に同級生というものをやっていた。その同級生には凜と穂月、それに正義の妻も含まれる。

真面目な風紀委員が、今や六歳の娘がいる。二十四歳でだ。

「ナニがあつたか知らねえが、ほんと、よくやるわ」

「どことなく不潔な響きがある」

(いい歳して不潔も何もねえだろうが)

思っても口には出せない。だから違うことを言う。

「あいつもそろそろ九曜頂になるだろうし、縁談としちゃいいとは思ったんだがな。」

「じゃあ、穂月辺りと」

「同性だよ！ 従妹と友人をどんな目で見てるんだ！」

「ん、百合？」

「ただの親友で同僚だ！」

いい感じで泣けてきたっばい。

従妹で遊ぶのはもうやめておこつと思う龍也。

「それはそつと、霧崎家の家族会議は終わったかな？」

「……霧崎弟なら弓弦と弓の訓練に行った」

相当へこんだらしく、口はへの字で懨然と報告してくる。

「だが、どうしたことだ？ 霧崎が弓を使えるなど知らなかったぞ？」

「教師失格だな」

「う」

(ああ、しまった)

声を詰まらせた従妹に、毛ほどの罪悪感を感じ、沸き上がった嗜虐心をごんばって散らす。

「じゃあ、悠は手が空いたな」

携帯を出して悠へと送るメールを打ちだす。

「霧崎姉はいつになったら学校に出てくるんだ？」

「二学期には神州に帰す」

「九曜頂も戻るのか？」

「俺は……」

打つ指が止まる。

「……用事が終わったら帰るかもしれん」

再び指が動き出す。

それは、終わらなかつたら帰らない、という意味。

そして龍也には、帰る気がそもそもにおいて、ない。

凜が龍也の気など知ることもなく、ただ「そうか」と残念そうに頷いただけであった。

送信完了。用意が出来次第、悠も出てくることだろう。

「とりあえず、俺はまた出ななきゃならなくてな」

「え？ あ、はい。分かった」

「なんか質問とかあるか？ 一応、答えるくらいはしてやるぞ」

「質問？」

聞かれて、凜は「うん」と腕を組み悩んでから質問を捻りだした。

「クリエイト・マテリアルはどれくらい儲けが」

「そんなに教師の給料薄いのかよ」

質問の途中で即ツッコミが入る。

「いや、だって」

「答えると言ったしな……」

ふむ、と脳内で計算を終える。

「天宮の売店で売ってるビー玉程度を目指すなら、純度ではなく密度に気を配れ。それなら秋葉原のマテ屋で単価五百円程度で売れるビー玉で高純度を目指すのは危険だから、絶対にやるな」

最悪暴発する、と付け加える。

「九曜頂・日崎殿が持ってきたようなものならいけるかとも思っただが」

「アホか。あいつのレベルを基準や目標に考えたら逆に破産するぞ？せめて目標は琴葉辺りにしとけ。あいつもレベルは高いが、あくまでも副業だから星司ほどには鍛えちゃいねえ」

「そうか……うん、がんばる」

「マテリアルの売買にはレートやランクが存在するが、そこら辺は自分で勉強しろ」

「うん」

「よし、もういいな？」

玄関に悠の姿が見えたため、話を終わらせる。

元々、荷物など持ってきてはいない。身軽なものだ。

「では、神和先生。次は神州で」

悠は凜に挨拶をして、先に寄宿舎の敷地から出る。

「じゃあな、凜。見合いの相手が決まったら、拳を握るのだけはやめとけよ？」

「ぐっ……、気をつける」

それを最後の会話にして、龍也は悠を追いかけて隣に並んだ。

学院を出て、マラザイアンへと渡り、魔構列車の駅へと向かう。

その道すがら「何を笑っているんだ？」と悠に聞かれた。

「どうやら、笑みを作っていたらしい。」

「いや、なんでも……なくはないか」

「どつちだ」

呆れられた。

笑みの理由は簡単。凜は穂月を差して親友と言ったからだ。

(親友が、穂月という親友がいれば、あいつもまだまだ平気だろう)

龍也は梧桐穂月を信頼している。龍也にとっても穂月は親友だからだ。それ以外の関係でもあるのだが……、だからこそ信頼も出来る。

「次はベルリンか」

駅で電車を待ちながら、悠が呟く。

思考から神和家のことを隅に追いやり、切り替える。本来、この思考に浸かる暇を持っている頃ではない、と。

「日崎のおっさんでは抑えきれなかったらしい」

「サポートの質が悪かったか」

「祖父さんの人選なんだがなあ」

「良い人材は学院に残ってしまっていた。ふるい分けを間違えたな」

「最近の祖父さんは、どうも不調らしい。元気なのは身体だけか」

元々、こういう間違いを起こす人物でもないからこそ、不調と感じてしまう。

「まあ、良いお歳でもあるからな」

「それには同感だ」

悠の言葉にウンウンと頷いた。

ロンドンのドックランズ、メルカード財団の人工島でリチャードと合流を果たした龍也は、財団が用意したジェット機で今回の協力者と顔を合わせて啞然とした。

和な黒装束上にカソック。首から十字架をぶら下げたそいつは、目を疑うような友好さで右手を軽く挙げた。

「やあ、どうも」

いつでも変化なく、にこやかに空々しく挨拶をする日下遊馬に、龍也は「えー」と脱力した。

脱力している間に、黒鱗の龍紋が入った黒コートを悠に着させてもらう。

「なんでてめえがここにいんだよ？」

「共闘するからに決まってるじゃないですか。

ああ、結城君を半泣きにさせて撃退した件は気にしないでいいですよ?」

「気にしてねえよ。むしろ、てめえが気にしてやれよ、山仲間。

共闘つっても、てめえが一番近くにいたからとか、そんな理由なんだろうが」

「あっはっはっは、よく分かっていらっしやる」

カラカラと笑う遊馬に龍也は背を向けて自分の席に座る。

(くそ)、なんでよりによって日下なんだ)

今回のドイツ行きに、嫌な予感しか覚えない龍也であった。

LR25年夏。

ベルリンの東、ポーランドとの国境線において、大戦後二体目とされる超大型幻獣ベヘモットが出現し、ベルリン東からワルシャワにかけてが壊滅した大惨事の三日前の出来事である。

それはまた、別の話。

## 試合

神薙夫婦（予定）が学院を離れた日の夜半。

グラウンド隅で鍛錬代わりの薪割りをしていた朱翠は、視線を感じて鍛錬を中断する。

服装は制服。

汗をかかずにやることを前提とした鍛錬のため問題はない。

「小山が出来るくらいやっても、本当に汗一つかかないんだな」

だから、このように話しかけられても問題はない。

声は背後から。

振り返れば、寝間着なのか、甚平姿の嘉藤勝利が壁に寄りかかっていた。

「いつから」

気配を感じなかった。

「それだけ集中してたってことか。隙だらけだぜ？」

自己鍛錬で集中するのはいいことだけだよ？ 平時じゃなかったら斬られて終わりだぜ。

かつて、神州で聞いたことのある言葉がよぎり、一瞬、身体が緊張する。と同時に目の前の少年がフツと小さく笑ったような気がした。

「ま、鍛錬に集中出来るってのはいいことだよ、本当」  
そう言った後に「俺は無理」と来る。

「この留学で周りに合わせて強さを求めてもみたが、やはり無理そうだな」

留学生仲間という時よりも若干砕けた物言い。

しかし、朱翠はこの物言いにこそ、この少年にじっくり来る。そう思うのは、やはり面識があるからだろうか。



「そうだろう？ お前だってそのはずだろう？」

実際に剣を合わせたことはない。

「髪の色変えたり、色に合わせて服装変えようが、例え剣の型を違えようが」

木刀でも真剣でも、いつだって彼と一合も交えずに済んだ。

「あいつを失った思いは同じはずだよなあ？」

あいつ……武本梢がいたからだ。

寄せた心に違いはあっても、喪失から生じる結果は同じはずだ、と勝利は謳う。

そう。

朱翠はこの嘉藤勝利と面識を持つ。

あの紅蓮の日に失った人を接点にしての面識を。

武本俊太郎の名前と共に持つ接点を。

秋相手には通じても、こちらには通じなかったようだ。

(甘かったか)

僅かに後悔。

「なんでお前はあいつを失って尚、力を鍛えられる？」

「報いのため」

たった一言。

この学院の者なら、ここに来てからの朱翠を知るから、彼が長く話さないのを知る。だから不思議ではない。

しかし、朱翠の過去を知る者なら？

「あの宴会の時からそれに騙されたが、そのしゃべりは舐めているのか？」

そうは言われても困る。

「報いのためだ」

再度答を口にする。

「侍は恩に報いる者」

今度はちよつとがんばった。

「お前が受けた恩は、あいつより重いつてことかよ」

「それは」

違うと言おうとしたが言葉には出来なかった。そもそも、比べるものでもない。

勝利は口を閉ざし、奥歯を噛みしめた。

「お前さ、あの日、道場にいたんだろ？」

道場で死んだことになっているお前が、いなかったはずはないよなあ？」

少し笑いを貼りつけて、それを聞いてくる。

朱翠は勝利の様子を疑問に思いつつも素直に頷いた。

神州の公式記録では死亡になったことは、後日、司からの連絡で聞いている。

「なんで、お前、生きてんの？」

それは助けられたからだ。

「なんであいつが……」

朱翠に向かって一歩踏み出した勝利は言葉も足も止める。

パタパタとそんな羽音を聞いたからだ。

舌打ちを一つ。

身を翻して、姿を消した。気配一つ残っていない。

音の主は朱翠の近くに降り立った。

「ごっはん〜 ごっはん〜」

ラフィルは降り立ってすぐ、手提げ袋からパックされたおにぎりを朱翠へと差し出す。

ラフィルのご飯ソング（時間的には夜食）で、殺伐としなかった空気が消え去った。

「朱翠？」

ふと、ラフィルは朱翠を見上げて、首をかしげた。朱翠はまだ、勝利がいた壁を見つめたままだった。

ハツとして、下を見る。心配そうなラフィルに、眉尻が下がる。

「もらっ」

そのたった一言で、ラフィルの表情が心配からうれしに変化し

た。

まだ付き合いは短いが、この天使娘には癒されている。

そのことは、ちゃんと自覚している。

手斧を片付け、手を洗い、パッケージを受け取る。

セイジが鍛錬後の夜食用に作っておいてくれていたものだ。

どうも、今は、和食の練習をしているらしく、米が余ると言っている。ついで、とは言っても具材が在り合わせではないから、ついではフリだろうとラフィルは言う。

ガツガツと勢いよく、食べ尽くす。目の前に、湯気を立てるホットの緑茶が差し出された。

最初はキンキンに冷えた緑茶だったが、留学生勢におにぎりには熱いお茶だと突っ込まれてから、ホットに変わったという経緯がある。

茶を飲み干して、一息ついた。

「~~~~」

ラフィルが歌う。それは天使の歌。治癒でも聖歌でもない、ただ気の向くままに紡ぐ音。

透き通るような真っ白な翼が開かれる。

勝利が寄りかかっていた壁に、今度は朱翠が寄りかかる。

腕を組み、天使の歌声に耳を傾ける。とてもよく落ち着く。

(嘉藤勝利、か)

初見はいつの頃だったか。

梢に連れられて行った御門学園中等部の剣術道場で会ったのが最初だったはずだ。

同い年ですごく強いのがいるから、腕試しをしてこい。そんなことを言われてのことだった気がする。

不良の問題児だが、剣術道場では敵なしの学園期待のホープ。

学園の期待さえなければ退学になってもおかしくないような同い年。

母親が彼のことを知っていた。確か「嘉藤さんの息子さん」と懐

かしげに語っていた。

気がつけば歌が終わり、ラフィルは翼をグツと伸ばしていた。あれが天使のノビだ。義妹も時々やっていた。

「帰ろ」

ラフィルの言葉にコクリと頷いた。

翌朝、秋が唐突に訪ねてくることもなく、普段通りの朝を迎えた。勝利は朱翠のことを秋には話していないようだ。

普段通りではないとすれば、二日ほど前にホリンに連れられて学院を出ていた夏紀が帰ってきていたことくらいか。

短期留学生達が神州へと帰るまで、あと五日。授業は残すところあと四日である。

第三学生寮談話室に、セイジと朱翠と、病み上がりなのに元気な璃摩が三人でテーブルを囲んでいた。

「魔鉱はどれくらい進んだんです？」

「起動、追加の基礎と応用、あとは拡散基礎だな」

追加は自身の魔鉱剣の魔鉱を他から持ってきて追加していく方法だ。

最初は制御の魔構がなければ、追加することもままならないが、完全に慣れれば宝石化した鉱石でさえも支配下に置けるようになる。

拡散は支配下に置いた鉱石を砂状などに形態変化して隠匿する術である。

「応用まではやらん。そこは自身で到達してこそだ」

実際、拡散の応用に関しては教科書は存在しない。

到達している者が少ないということもあるのだろうが、魔力操作の最終形態とも言われるだけあって、他からの教授は推奨されていないのである。

「追加習っても、戦闘に耐えるだけの武器化が出来たのはいないんですよね？」

「さすがにな。」

武器以外でなら、レンの工房に入り浸っている連中が魔鋳間リンクに到達しているくらいだな」

「それって、すごいことなんじゃ」

「すぐにも魔構の企業から呼び声がかかってもおかしくはないレベルだな」

卓郎と進をベタ褒めである。

「まあ、どこかの誰かさんが、俺の鍛錬法を撒き散らしたのも原因なんだろうがな」

「藪蛇!？」

椅子の後ろにババツと隠れた璃摩に「怒ってはいない」と告げる。結果として、璃摩のうっかり行為は留学生達のレベルアップに繋がっており、それはセイジが望んだ通りのものに近づくことになったのだ。

「さて、そろそろやろうと思うんだが、どうだろうか？」

セイジの「どうだろうか？」に朱翠が頷く。

「雛となっちゃんねえ」

雛は源理の使い方がかなり上達した。

水が得意と言ってはいたが、不得手で口にさえしなかった火も若干使えるようになり、水城家の人間が本来得意とする水蒸による幻術魔法のレベルが上がった。

夏紀は元々、セレスからもホリンからも良い線行っていると言われていたが、ここ数日、ホリンに連れ回されたせいかわ、戦闘以外での魔力の使い方が異様にうまくなった。それは戦闘中での使い方も上達したことになる。

「今なら、そうそう死なないはずだ」

「そうですねえ。先輩が転神さえしなければ、かなり楽しいことにはなりそうっすね」

悪巧みではない。

『留学生達の上達具合を計って、学院側が少し本気で相手をする』

は、はじめから決められていたことであった。

「榊君もなっちゃんとやりたいんです？」

「マルキス先輩と違う」

ホリンと夏紀では使っている槍のタイプが違うから、と。

「意外に腕試し好きだったかー」

イメージ崩壊だよ、と璃摩は何故か親指を立てた。

「で、一体どういう組み合わせなんです？」

「俺とシユスイがキリュウとミスシロを受け持つ。リマはコトハの従弟だな」

「ほうほう。弓弦ちゃんですな」

ちゃんは可愛いかららしい。本人はかなり嫌そうではある。

「あと、シユウがカトウとキリサキ弟。ホリンがナギハラで……」  
と組み合わせを告げていく。

魔法関係は基本的にはセツナが受け持つため、雛は特別とも言える。致死率が。

「真咲は？」

「彼女は君」

「えー」

璃摩は『 』 こんな口をして脱力した。

(多分、リマじゃ満足出来ないんだろうな)

挑まれた勝負は未だしておらず、最後のお試し以降に必ず発生するイベントだと自覚するセイジである。

「いつから」

「早ければ今日には」

朱翠の問いに即答するセイジ。

「向こうの教官には昨晚の時点で話が行っている。今朝方にはもう組み合わせのことも話しているんじゃないか？」

いざという時の治癒もあるため、魔法戦が先で戦技戦が後になると予想される、とも言つ。

「と、いうわけで、そろそろ文」

「くよーちよー!!」

バーンツと雛が談話室に降臨した。

「句が飛んできた」

セイジの予想通り過ぎて璃摩が腹を抱えた。

今回のお試し戦では、紫と卓郎と蔵人が戦闘系ではないため免除となっている。

今、地下闘技場ではセツナと綾女による、かなり本気な戦闘が行われており、学院全体にドカーンとかバリバリとか物騒な音が響いている。

セイジは屈み込み、ひたすら地下闘技場の結界を強化し続けた。

頭の向こうでは、すさまじくレベルの高い魔法戦が繰り広げられていた。

「クリムゾン・フレア!」

「アブソリュート・ゼロ!」

超高熱と絶対零度が地下闘技場の中央でせめぎ合う。

どう考えても、学院指定第七階級同士のせめぎ合いだ。

中央は戦場。

綾女は右手でクリムゾン・フレアを支えながら、二大魔法の接触で今にもスチーム・ボムが起きてもおかしくない魔力の渦に左手を突っ込む。だがそれは、セツナと同じ。

奪い合いである。奪うのは共に、風。

綾女が奪う対象を増やす。

炎が巻き起こす炎熱の風。火を構成するのは熱と風である。

(この子、合体魔法もやるの?!)

セツナは自分ができるからこそ、その難しさも威力も熟知する。

（早く早く早く早く早く早く早く早く早く早く早く早く！！）

マテリアルよりも濃い衝突の魔力から必要な分の風を抜き終わり、同時に練り込みも終了。

「ストーム・バーストッ！！！！」

セツナが使うのとまったくの同タイミングで、同じ魔法が使用される。

「あ」

セイジが一音発した。直後、パリンツと結界が割れた。

地下闘技場全体に吹き荒れる、高低の熱の暴風。

長いようできて短い暴風が収まると、中央で目を回して倒れる女性二人。

セイジは周囲の暴風をマテリアル化したおかげでなんとか無傷で済んだ。

「まったく、セタが高能力過ぎて焦ったな」

兄は妹のミスに早くも気づくのであった。

セツナはセイジが引き取り、綾女はセレスが引き取って、この戦闘は終了。今頃は、外で璃摩と真咲がサバイバルバトルの最中である。

魔法戦をする数が少ないため、射撃戦も今日に組み込まれたのだ。しかも、二対一。

「いいのか？」

セレスが天井を見上げて言う。璃摩のことだろう。

「リマには本気でやれと言ってある、問題はない。ただ……」

「む？」

「いや、なんでもない」

真咲がただの魔銃を使うかぎりには、問題ない。

真咲が降神器使用であることは、彼女の家の本家に当たる璃摩が知らないことはないだろう。互いに知らない情報があるとすれば、璃摩が記憶持ちでシフト可能な存在であることか。

（まさか、本家の人間に降神器を使用したりはしないだろう）



セイジの予想通り、璃摩は問題なく真咲と弓弦を気絶させて戦闘を終了させていた。降神器が使用されることもなかったという。しかしそれは、真咲が本気を出さなかったということである。お試しの本番を翌日に控えて、前夜祭とも言えるこの日は終了。そして、朝を迎える。

青い旋風に勝利と勇が弾き飛ばされる。

柄による殴打は二人の剣士をまとめて飛ばし、浮いたところに、胴体を軸に遠心力で速度を増した刃の峰が襲いかかる。

「ちいつ！」

勇は空中で勝利を蹴り、反動と腹筋で無理矢理バランスを調整。離れた二人の間を豪風と共に刃が通り過ぎた。

ドガガガッツツ！！

グラウンドに峰がめり込み、大地が割れる。まともに食らえば峰打ちで死ぬ。

恐怖心など持つ暇はない。

着地した二人が揃って、手甲を鞘代わりに円を描いて秋へと抜刀の一閃を叩き込む。割った地面に武器を食い込ませる今が狙い目だ。勝利も勇も速度は必殺。

(とつた！)

共にそう思った二人の耳は、キンツツという金属音を捉える。音と共に腕に衝撃。当たったのは地に垂直に突き立つロンパイアの刃。秋の姿がない。

秋の姿は柄頭の上に片腕で逆立ちをしていた。

柄頭から弧を描いて下りる反動を利用して柄を蹴り飛ばし、地から刃を弾き出す。着地して止まらず、勢いのついたロンパイアを振り回して横に一閃。

二人の剣士は撃ち飛ばされて城壁に叩きつけられた。が、勝利は叩き付けられる直前、絶妙なバランス感覚で空中ターンを行い、壁

には足から接地。グツと足をバネにして衝撃を吸収させ、折れて逆間接になった左腕は垂らしたまま、刀を右で操り前にかざす。

鏢に組み込まれた黄石が光を放って消えていき、勝利の前に爪状岩が出現。

「一意穿石」

壁を蹴り、矢となって秋へと飛ぶ。

終わらない秋の連撃。

二人を薙ぎ払った時よりも強い暴風を生み出す破壊の塊が、岩爪の矢と衝突した。

生み出される均衡。だが、一瞬一瞬で爪が暴風に削岩されていく。「ぬう、エンチャント……パワーアア!!」

強化される筋力で、全力で無理矢理振り抜く。飛散する石礫と打ち抜かれる勝利。

暴風が止まる。

残ったのは、肩で息をする秋と地面に倒れて「降参」と呟く勝利。壁で「無理無理」と手を振っている勇であった。

（やっぱあれか？ 姉貴が言うように”前”と同じ身体を目指して鍛えた方がいいのか？）

姉が家族会議で言っていたが、多くの転生は”前”の身体に近づくように鍛えるのだという。一致すれば、転神のリスクがなくなるし、なによりこっそり転神しても外見ではばれないとか。

ロンパイアを下ろした秋を眺めて思う。

（とりあえず、アレを半神化させられるくらいには鍛えるか）

半神化を使わずに二人を撃破した秋は倒れる勝利を、鋭い目で見つめる。

（なんだこの微妙な手応えは？ まるで暖簾じゃねえか）

腕は勇を巻き込んだからへし折ったようなもので、それ以外の衝撃はどこかに逃がしたのだろう。

(こいつらはどっちも本気を出しちゃいねえ。どういう内容であれ、奥の手がありやがる)

城壁上には超鬼ごっこの時のように十四期生達が観戦しているが、その誰もが、留学生の二人が本気でやっていたように見えた。見通しが甘いのではない。この二人の隠し方が巧妙。

自分の中にリミッターを作って、その中で本気だった。そんな戦い方だ。

そこに気がつく秋も秋だが。

「ま、なんであれ……」

吐息。

「最後のは良かったと思うぜ」

秋の賛辞に勝利は「そりゃどうも」と応じた。

セレスは無言で正面の少年が手にする武器を見つめた。

薙原進が手にするのは、なんというか……箱？ だろうか。

鋼鉄の槍の中程から先端まで箱がかぶせられ、穂先が杭。槍の柄と箱の内部に組み込まれたトリガーを掴んで振り回している。

セレスの木の棍は中程で砕かれている。これはあの杭を防ごうとしてやられた。防いだ瞬間、撃ち出されたのだ。

(なんだ、あれは)

パイルバンカーなどという武器の存在を知らないセレスは驚愕を持って進の武器を見つめていたのである。

あとで他から甘いと言われるかもしれないが、セレスはここで降参をした。

セレスの中では武器破壊は十分賞賛に値している。文句を言われる筋合いはないのである。

勝利は城壁の上を歩いていって、今回の治癒班の居場所へと向か

う。

場所は現在、非常に目立っているから迷うことはない。

観戦中の第十四期生達が同情の視線を下に向けている。下は今、夏紀と雛が朱翠とセイジを相手にしているはずだ。

「えげつねえ。去年の自分達を見ているようだ」

「あの人の迷宮、ほんつときついよな」

「勝利条件に迷宮突破とかありえねえ」

そんな会話に釣られて下を見れば、ちょうど雛がグラウンドの直中でパントマイムをしているところだった。

視線をずらせば、少し離れた場所で、十字槍の夏紀が刀の朱翠とかなり熱い戦闘を繰り広げていた。鋭い視線を朱翠に向ける。

（あの型は俺の知るものじゃない。武本の剣などいらないうことか）

記憶の中の武本俊太郎は武本梢と同じ剣を不格好にも使っていた。あれは、自分が修める剣と違う故のものだったからだ、と納得する。

未知の剣。

（あれとはいずれ、だ。こんなお遊びなんかじゃなくてな）  
つい、と視線を反らして治癒班の元へと歩き去った。

雛は右手に青いマテリアルを、左手に赤いマテリアルを握り込む。周囲は見えない壁で迷宮が形成され、不用意に歩けば、壁に顔がぶち当たる。もう何度当たったか数えていないが、いい加減、鼻が痛い。

透明の壁の向こうで、夏紀と朱翠が一進一退の勝負を続けている。この迷宮を抜けられれば助勢してもいいと言われている。

（なっちゃんが終わる前になんとかしないと）

幻術にも色々と種類はある。何も、相手を騙すだけが幻術でもない。

雛は目を閉じた。

「我、北辰の独神に望む」

両手の中でマテリアルがカツと輝く。

「右に明星、左に夕星」

朗々と、雛の詠唱に離れて眺めていたセイジの眉がピクリと震えた。

「その輝きは混迷の闇を払う一縷の光明」

両掌を開けばマテリアルが崩れ去り、合わさり、風さえ許さぬ迷宮に流れて消える。

「心に差し込む幻実の光」

雛の目が開かれる。

何も変化してはいない。見ていて何か変わった様子が、まったく  
ない。

城壁の上の観戦者達が見守る中、雛は一切迷わない様子でテクテクと歩き、ある一点で立ち止まった。

パチパチパチ、とセイジが手を叩く。

「合格」

一言。そのたった一言で、雛が拳で天を突き「よっしゃあああああ  
ああ」と飛び上がった。

グラウンドにパリンと音が響いた。

(この先に道があるという幻想を砕くのが目に見えない壁。砕かれた幻想は自身の思考に霧をかけて閉ざす。

幻術魔法は想像力がすべて。強すぎる想像力が自分に幻術をかける愚行を犯していたわけだが、そこに気づいての幻術破りは、十分に合格と言っている)

雛は夏紀のサポート要員である。

この一週間、幻術魔法の向上に合わせて、思考の切替速度をも鍛えさせていた。サポートの思考が緩慢であれば、相方には死の危険が常に付きまとうからだ。

幻術を受けている状態での思考の切替が可能であれば、鍛えの成

果が出ていると言える。

「とはいえ」

セイジは眺める対象を朱翠と夏紀へと移す。

「あれにはさすがに、介入は出来ないか」

刀と槍の舞踏。観戦者の目を惹きつけるそれに、雛までも目を奪われた。

突きを点に合わせて避ければ、斬撃に襲われる。だからスレスレの回避などは出来ない。

槍の穂先、十文字の内側を刃で受けて流し抜き、空いた胴へと鞘を突き出す。それは柄で防がれて決定打にはならない。

夏紀は流された槍を引き戻さず手の中で滑らせる。二人の間に一線の壁が生み出され、それは刀の戻しと前への進撃を阻害する。

夏紀の十文字槍、穂先の中央に埋め込まれたマテリアルが宙に赤の一線を描く。滑った槍は石突きで止まるが、流れは止まらず夏紀はそのまま右足を軸にして左足で朱翠の足下を払いに来る。躲すためにバックステップをすれば、石突きを掴んだ状態で柄という名の棍が上から降ってきた。バックステップでは足りない。戻した刀で切り上げて柄を受けた。

ガリリリリリ……！！

柄が物凄い速度でスライドを開始し、戻ってきた穂先が刃に引っかかり、前へと体勢を崩された。

受けを解除して身を離れた朱翠は、赤の線が端を結んだのを見た。すぐに納刀。翠凰に魔力を流し込み練り上げる。

「雀艶<sup>しやへん</sup>式」

「翠凰術式一の太刀 焰華」

突き出される十文字の穂先と抜刀された刃が衝突。カッとグラウ

ンドに真つ赤な光が誕生した。

キユゴツ！

大爆発に観戦者達がその場にしゃがみ込んだ。爆音に皆が耳を押さえた。

地響きが収まり、耳を押さえたままの観戦者達がヨロヨロと立ち上がってグラウンドを見下ろせば、土煙が風に流れて消えていく。

「ちよっ」

「うっわ」

「なんじゃこりゃ」

所々で何とも言えない眩きが漏れる。

グラウンドに、直径五メートルほどの黒いガラスのクレーターが出現していた。

朱翠と夏紀はそれぞれが遠く飛ばされ、対岸の壁際に打ち付けられていた。雛はセイジに抱えられ気を失っている。

「だぶるのつくあうと〜」

観戦していたセツナが城壁の上で宣言するのであった。

後に爆発の原因が、両者の魔構が熱暴走した状態で炎熱系の能力を行使したためである、と発表された。

「ナツキの成長っぷりはすごいわねえ。ん……あ、そこ」

留学生寄宿舎の談話室にて、風呂上がりでホカホカなセツナが猫柄パジャマでソファアに寝転がって、朱翠に肩と腰をマッサージさせていた。

「シユスイに何やらせてんだ」

「だって、ラフィルは治癒のしっぱなしでダウンしちゃってるし、セイジは嫌って言うんだもん」

「だもんじゃねえ」

「後輩の胸しか揉めないというのか!」

「揉んどらんわ! つうか、どこ揉ませる気なんだ!」

そんな兄妹の会話を、テーブル席で夏紀と雛がセイジの向かいに座り、顔を赤くして俯き聞いていた。

「まったたく」

吐息混じりで夏紀に向き直るセイジ。

「いやあ、爆風で吹っ飛ばされるとか貴重な体験だったよー」

顔が赤いのを誤魔化すように雛が大袈裟に手を動かして、本日最大の衝撃を語る。

咄嗟に前面に水の壁を展開したものの、爆炎は防いでも爆風で飛ばされた。セイジが後ろに回らなければ、雛も今頃自室でお眠りコースである。

「キリユウもシユスイ同様、怪我は重くなくて良かったな」

セイジの言葉通り、朱翠も夏紀も多少の火傷と打ち身はあったが、重傷にはならなかった。

爆心地にいた朱翠と夏紀はあまり怪我をしていない理由としては、衝突の直後、膨張する魔力を二人が息を合わせて押さえ込んだからである。

放出した炎熱と発生した衝撃の大半を武器内に吸収という武器にとっての想定外をやらかした結果、朱翠の翠鳳は柄の赤石が割れ、夏紀の雀艶は穂先が折れた。双方、武器を修理に出す羽目になった。息を合わせたというより、ここまで演じた舞踏から相手の息に合わせた。合意ではなく互いに自分の意志で一方的に。

十四期生の反応はたった一言。

「ヒザキの関係者は化け物揃いか」

これには雛が「自分は一般人」発言をして更に引かれたのだが。「君ら二人の行動に触発されて、レンがそういう用途の装備を作るとか言っていたな。」

神州に戻ってから、クロケットから何か送られてくるかもしれない。その時は、まあ、使ってやってくれ。邪魔にはならないはずだ」



「はい」

本家頂の言葉に分家の末は素直な返事で応じた。

「うーっす」

勇が炭酸ジュースを片手にやってきて、同じテーブルに着いた。

「明日つて、何やんすか？」

「明日？ 明日は」

聞かれて、明日の予定を確認するセイジ。

「国防騎士団所属の学院OBが戦略講義をする予定のはずよ」

談話室に更に新しい声。私服チャイナの琴葉が談話室入口に立っていた。

「おかえり」

「ただいま」

セイジとの挨拶に、どこか安堵したような琴葉。その様子に勇が遅れて「おかえり」と呟いた。少しムツとしているように見えなくもない。

「ええ」

対する琴葉は少し素っ気ない。

腰のポーチから金鎖のペンダントを取り出して勇の前に置く。

「はい、これが例のものよ」

勇はそれを摘み上げて装飾箇所を視る。白光を覆い隠そうとする黒光で形成された魔力の渦を確認出来る。

「ありがとよ。九曜頂・日崎にも琴葉にも超感謝だぜ」

机の上に両手を着いて頭を下げる勇。

「この件に関しては星司にだけ感謝しておきなさい。私にはこっちで将来的に感謝しなさい」

琴葉は紫の組紐を勇の左手首に巻いた。

それはミサンガ。紫一色で地味ではあるが、確かに何かの魔力を帯びている。

「なんだ、これ？」

「あなたが、取り戻すべき姿を取り戻した時に切れるわ」

「お、おお、なんかよく知らんけど、ありがとな」

本当によく分かっていなさそうな顔で礼を言う勇に、琴葉はフンと鼻を鳴らす。

「魔女が作った呪物だから、効果はちゃんとある。だろ？」

「ええ、私の手作りに効果がないわけないでしょう？」

セイジの問いに琴葉は腕を組んで胸を張って、偉そうに答えた。

それを聞いた勇が「え、マジで手作りなの?!」と素っ頓狂な声を上げ、驚いた琴葉がセイジの後ろに隠れた。

雛が「ああ、なんだ」と勇の反応にニヤリと笑った。

「青春ですなあ」

「いきなりどうした」

「む？　これが分からないとは……」

雛は夏紀の反応に、大袈裟に肩をすくめて首を振った。

「そんなんだから、彼女いない歴が実年齢×2年なんだよ」

「……自分、三十超えても無理か」

本気で泣きそうな夏紀に「やべ、言い過ぎた」と雛が逆にオロオロしだす。

テーブルの様子に、朱翠のマッサージから起き上がったセツナは朱翠を見る。その表情には変化がなく、だが、その目は穏やかだ、と断言出来る。

（将来、ここにいる連中が血で血を洗うような関係になることだけは、本気でなあってほしくないわね）

そう思い、セツナも彼らをまったり眺めるのであった。

## 私闘

十三期生との戯れで浮き彫りとなった反省点や目標がはっきりし、その部分を押さえた授業が終了したことで短期留学の全行程が終了了。

翌日は夕方まで勉強も何もない休日ということになり、ゴラン・ヘイヴンでの海水浴が決定している。

翌日の準備も終え、夕暮れ時にその日の鍛錬をしていたセイジは背後に気配を感じる。

(来たか)

背後には、ある力を感じる。それは神魂。以前、真咲と共に現れた気配と同じ。つまり。

「九曜頂・日崎殿」

「リマとの遊びに降神器を使わなかったからか」

バラを砕いて振り返り、呼び声の主へと身体を向ける。

「やるか？」

「はい」

交わす言葉はそれだけで、互いにやることは決まっている。

「さて、場所は移すぞ？　ここでやるのも問題だ」

「お任せします」

琥珀の長剣を構成し、空間を斬りつけてキオーンを出現させる。

現れたグリフォンに、真咲が目を丸くした。

セイジはキオーンの黄金の背を右手で撫でる。

「キユ」

幻獣はうれしそうに短く鳴いた。

左手を真咲に差し出した。

「行くぞ？」

「あ、はい」

手を取って、幻獣の上へと案内される。

跨がると、すぐに背に背負う長物越しに熱を感じて顔を赤らめる。

「エクスマーアに行くぞ」

「そこは？」

「学院には超越者関係で面倒事がありそうな時に、使用を国から強制される地域がある。」

授業であれば結界でなんとかなるものだが、それだって限界もある。神魂のぶつかり合いは極力さけるとも言われてるんだ。

だから、広くて、破壊が起こってもある程度目を瞑れる場所をあらかじめ用意するから、そこでやれってな」

大概是学院内で始めてどうしようもなくなる、と苦笑した。

グリフォンが飛び去るのを、朱翠は談話室から眺めていた。

朱翠はこれから鍛錬である。

手拭い一つ持って、寮を出る。

ラフィルは今頃、長湯で（風呂場で魔力制御をやっていて）のぼせた紫と雛を介抱している。

どこの寮も、二週間のイベントのラストに向けて浮かれている。

悪いことではない、と思う。

普段と変わらない歩幅に速度、浮かれも沈みもなく、鍛錬場に行っているグラウンド隅までやってきて、早速手斧を掴み薪を手にしようとし、手斧を一闪。飛んできた薪を両断した。

「さ・す・が」

壁際の暗がりから勝利が顔を出す。やはり今回も甚平だ。ただし、その手には……。

ドクン。

朱翠は思わず口を手で覆った。

（なんだ、あれは）

内なる魔剣が、全力で、拒絶している。

「なんだよ？ お前、こいつが分からないのか？」

勝利は右手に持った刀を前にかざす。

分からないはずがない。刀の外見を持つ存在だ。

だが、魔剣の拒絶は続く。より強く。

この二週間あまり、勝利を前にしても魔剣がこんな反応を示した  
ことなどはない。

（なんなんだ、これは）

朱翠の疑問など知ったことではないと、勝利は鞘を左手に持ち、  
右手を柄に添え、腰を落として右足を一步前へと出す。

「さあ、武本、俺と戦いな。ここで俺を黙らせなけりゃ、お前の存  
在を直毘に言うぜ」

戦う理由などないと断ろうとした最中の単語。

「何故、直毘を知る」

「俺の親父も直毘衆に消された口だからな。連中の手口はよく知っ  
ている。」

梢が直毘衆の標的になるわけがない。だとしたら、標的はお前し  
かない。武本翠廉は凡庸故にはじめから選択肢になど入らん」

つまり、と勝利は眼光を鋭くする。

「梢はお前が殺したようなものだろう？」

「それは」

否定出来ない。自覚しているから。

「構えるよ。武器がなけりゃ手斧でやってもこっちは構わないんだ  
ぜ？」

それとも、梢を殺した罪を背負って自決でもするか？」

その言葉に、朱翠は口をきつく一文字に結ぶ。

それは出来ない。出来るはずがない。この身は既に、日崎の頂に  
忠を誓ったのだ。勝手に死ぬなど問題外だ。

手斧を地に放り、右手を横に伸ばす。開かれた掌の前に黒金の鞘  
が塵気楼のように出現。無言でそれを掴む。剣帯に差し、右足を一

歩前に出し、左で鞘を、右で長い柄の根を掴んで腰溜め構えた。

黄金の柄が夕日に輝き、朱翠の髪と眼が血の色を濃くした。

(面白いもんをもってやがる。解封した俺のとどっちが上かねえ)  
リーチは朱翠が上。だが、勝利の方が短い分、速いはずである。

「嘉藤利則が一子、嘉藤勝利だ」

「榊朱禅が一子、榊朱翠」

「「参るっ」」

踏み込みは同時。

勝利の右、抜刀が放たれる。朱翠は左で鞘を引き、右で抜刀。

抜刀の速度は勝利がやや上。

しかし。

勝利の左から右へと抜ける斬撃の根元に、朱翠の左下から右上に抜ける斬撃が衝突。

キィィィン。

甲高い金属音を立てて、鈍色の輝きが空を舞った。

朱翠の遙か後方に、鍰の先から斬り落とされた刀身がグラウンドに突き刺さる。

観戦者がいれば、ここで終わりだと誰もが言いそうな場面。だが、朱翠は抜刀後すぐに柄を左手で掴み、上段を経て更に踏み込み、斬り下ろす。

一見トドメとも言えそうな行為の正体は直後に判明する。

刃を失った虚空で魔剣の斬り下ろしを受けたのである。

「魔剣」

「違うね」

鍰迫り合い。

勝利が朱翠の大太刀を絡み上げて、踏み込んで右肘を鳩尾に突き

入れ、グツと押し出す。崩れる体勢。だが、朱翠も右足を引いて半身となって肘打ちの力を流す。そのまま無理矢理太刀の絡みを解いて距離を取る。

上段に構えて、間合いを取りジリジリと円を移動する。視線の先で、勝利の刀が、柄が折れた刀身をペツと吐き出した。そして、新しい刀身が生えてくる。

勝利が刀を振れば、刀身にヌラリとまとわりついていたと思われる胃液のような液体が払われる。生えた刀身の側面に、一眼の目が開いた。遠くに刺さった折れた刀身が枯れ崩れて消えた。

もしここで、真性の視界を持つ者が彼のかざす刀を見たなら、同じ感想を持つかもしれない。

#### 幻獣

と。

「元は妖刀。だが、長く人の血を吸いすぎて幻獣になったのさ」  
刃を上段に構える勝利。

「付喪神」

「はっ。神州じゃ古くからそう呼ぶらしいが、俺はこいつを神だなんて認めねえ。こいつは幻獣で十分だ」

吐き捨てる。

「お前のと俺の幻字村正どっちが折れるか。勝負と行こうじゃねえか！」

「テイルヴィング」

「それがそいつの名かよ」

互いに間合いを計る。

朱翠は左に力を込め、右は添えるだけ。基本中の基本。やることは一つ。ただ、斬り落とすだけ。

勝利は下段を变形させる。

身をかがめ、刃を上段に左斜め下に構える。狙いは逆袈裟。

妖刀に自身の魔力を食わせる。刀身が冴えてくる。一眼は充血し、もつと寄越せと獰猛さを増した。

「あまり剣戟響かせても人を呼んじまう」

「これで」

「ラストだ」

天に昇った月の光が互いの刀身で白く光った。

日は落ちて、月が顔を出す。

天の話だけでなく、学生寮の屋根上に、神州の月の神様が顔を出した。

ん……、とノビをする。

寝ていた。それはもうゲツスリと セイジのベッドで勝手に。

(んー、先輩どこー?)

寝ぼけ眼で周囲をぐるっと見渡して……「んん？」と一点を二度見した。

射手の目は、グラウンド隅で物騒な物を構え、今まさに斬り下ろしと斬り上げを行わんとする二人組を確かに見た。

「ちょ……ちょっと待てええええええええええええええええええ」

思わず叫び、ラフィルを呼びに寮内に引つ込むのであった。

剣光閃き、上と下から斬撃が解き放たれる。

互いに防御など考えていない。ただ、斬り伏せることのみ。

朱翠は、テイルヴィングが勝利の左肩に吸い込まれ、刀身が左胸に到達する前に自身の左腕が飛ぶのを見た。

勝利は、村正が朱翠の左腕が宙を舞い、左肩にかかった重さと熱で視界が斜め左にずれるのを見た。

奥歯をギリリと噛みしめ悲鳴を飲み込む。

終わっていない。



朱翠は添えるだけの右に力を込めて押し込もうとし、勝利は刀を返して首を落とすに行こうとし、互いに刀を引いて飛び退る。間を銀の一闪が貫いていった。

勝利がボタバタと足下を赤で染めて膝をつく。村正を杖にし、大太刀の剣先を下げて肩で息をする朱翠を睨む。

「くそ」

それは、邪魔が入ったことにか。それとも致命傷を左に受けたことにか。

やがて多数の足音が向かってくるのを聞いたのを最後に、勝利は出血と共に意識が抜けた。

倒れることなく意識を失った勝利から目を背けず、魔剣から血を払って鞘に戻す。

魔剣は嫌悪を訴えない。どうも勝利が気を失ったことで、嫌悪の元が眠りについたようだった。

（魔剣の長さはまだ調整が必要）

切れ味は万全でも長さから最速が出ない。現状では、調整するには実戦が足りていない。

そんなことを考えながら、視界に靄がかかっているを感じる。

左手に感覚がない。そこから意識が流れているような気がする。

ぼおつと立ったまま、背後から誰かに支えられ、緊張と共に意識が抜けた。

朱翠と勝利が互いの肉を斬りつけ合った頃、エクスマーア国立公園にセイジと真咲が降り立った。

セイジは西の空を見る。そこに金星の姿があるにはあるが、あまり長くありそうにもない。戦闘中に切れるのは目も当てられない。

（亜神化は無理かね）

降神器使い相手に生身は自殺行為。亜神化が無理ならシフトしか

ない。

「さあ、やるか」

そう言ったセイジに対し、真咲は手をかざして制す。

「その前に聞きたい」

ですます口調ではない。素の口調である。

「あなたは璃央様や璃摩様とどういう関係なのだ？」

「リオは元護衛対象。リマは後輩兼研究の相手……になるのか？」

気絶中の璃央に告白したことや”前”の話はしない。

告白は璃央の与り知らぬことだし、”前”のことは神州に住む転生者にとってはタブーだろうと判断したからだ。分家だからといって、璃央がヒルメの記憶を取り戻したことを知っているとも限らないし、例え知っていてもそれを良いことと考えているかも分からない。

「璃摩様と……その、キ、キスをしていた……との噂があるのだが」  
言われて無言。

天使と戦った後のが見られたのだろうか。

屋根の上が誰にも見られない密室なわけがなく、見られたとしても、別にコソコソしていたわけでもないから問題はない……はずである。

「あれは、報酬として約束させられたものだ。リマに対して恋愛感情というものがあるわけではない！」

素直に断言。

「うちの本家の次女に身体だけの付き合いとか、なにしてくれてるんだ、殺すぞ！」

そうしたら怒り心頭の顔で殺害宣言をされて「あれ？」と首をか上げた。

真咲が背中からメートルほどの筒を取り出す。

(ライフル?)

セイジは知らないが、それは種子島銃と呼ばれる神州の古い長銃である。博物館などにあるような代物ではなく、大型の回転式弾倉が取り付けられた改造種子島である。

銃口をセイジへと向ける。

(ちよつとは良い奴だと思つたのは間違いか)

兄からかばつたりされて道を踏み外しそうになつたらしい。

弾倉を回す。

「出番だ、起きろ!」

神魂が活性化し、種子島の中に魔力が満ち、放電を開始する。

「さあ、そちらも亜神化するがいい」

「それなんだが、亜神化だと長くもちそうにない」

だから、と付け加える。

「別の手段をとらせてもらう」

言つて、左肩に右手を添える。

「神州の言葉で言うところの 転神だ」

「てん……しん……」

呟いてから「転神だ!?!」と驚愕する。そんな情報は聞いていない。

驚愕などお構いなく、手が引かれる。

紫が暗く輝き、髪はより明るく。吹き荒れる威圧感。

「転生者……だっただと? 九曜頂・日崎が?」

「ほう? 誰かと思えば……」

転神した転生者を見たことがないだけに、表情の厳しさも、威圧

感も、口調も、すべてが未知の存在に見える。

「賭を、するのであつたな?」

「私が勝つたら死んでもらう!」

「分かつた」

真咲の条件に即答で頷く。それに真咲は「な……に……?」と反応。否定されて当然の条件のはずだからだ。

「では、我が勝てば」

甕星は真咲を上から下まで眺めてから、フツと小さく笑う。

「女。貴様をいただくでしょう。その身、その命に至るまで」  
同条件だ、と両の手を広げた。

同条件に聞こえるが、何か違う気がしないでもない。

（命を賭ける分には構わないのか？）

真咲は頷く。

「いいだろう」

「掛け金は揃った。では、始めよう」

ガチンツと上がった撃鉄が始まりの鐘となる。

「大雷！」

五メートルと離れていない位置へ向けて引き金を引く。装填されていた神魂から雷撃砲が撃ち出される。

甕星は微動だにせず。ただ一言「明星」とのみ。

直撃の寸前、天から打ち込まれた一撃が雷撃砲を大地に縫い止める。

大地に、電撃を帯びる蛇を縫い止める銀の長剣。

（あれが神剣か）

甕星が剣を抜き手首を返して構えるのを視界に収めながら、再度撃鉄を上げる。

甕星が左に柄を出し琥珀の小剣を構成。その場を斬って横に飛び退る。

「逃がすか！ 火雷！」

二発目の雷撃砲が地を焼き尽くしながら迫る。逃げても追って地を焼く蛇。振り返りざまに長剣で斬り伏せる。

カツと周囲を照らす閃光。

舌打ち。

真咲の姿が消えている。

視渡しても周囲に満ちた神魂の魔力が濃すぎて、真咲の魔力を捕

捉出来ない。

雲が流れ月が一瞬隠れて闇になる。

「黒雷」

そんな囁きを聞いた気がし、背後にふくれあがった魔力に反応して振り返って斬りつける。確かに何か強い力を斬った。月を覆う雲はない。だが、周囲の光が消えて闇が濃くなり視界が遮られる。

(上手く使う)

留まるを良しとせず、闇の中を移動。

(この闇も時で晴れようが……)

音を聞く。軽い者が草を踏みしめる音だ。

音源と逆方向に跳躍し、音源に向けて神剣から太刀風を撃ち出す。地の削れる音に紛れて足音が消えていく。

(さすがに当たらん)

そこから中に琥珀の剣線を刻みながら移動し、真咲を捜す。

気配だけで上から飛来した蛇を斬り捨てた。落雷の轟音。聴力が消えた。これで視力と聴力があてにならなくなる。

源理の火が使えれば熱源を探せるが、その術は持っていない。

「ならば」

空に向かって跳躍。黒の闇を抜け、エクスマーアを広く視界に収め こちらを仰ぎ見る真咲を見つける。

明星を逆手に持ち、地の真咲に向けて投げつける。銀の燐光を放つで一閃が空気を穿つ。

「折雷！」

地よりの雷が銀を砕いた。

地の闇を避けて着地。確認してあった真咲の位置から離れた茂みに踏み入って 何か踏んだ。

見下ろせば、今まさに放電を開始した蛇が自分を見上げてニヤリと笑った。

爆音。茂みの外に吹き飛ばされた。

「夕星」と掲げた右に、二振り目の銀が至る。

「二本目だと？」

神剣は砕いたと思ったただけに真咲には予想外。だが、今更敵に武器が増えようがやることは変わらない。

手首を返して神剣を構えようとした矢先、着地をしたその地点で足場が消失。崩れるとか割れるとかではなく消えたのだ。消えたのは一瞬。だが体勢を崩すには充分。

雷撃砲が甕星の眼前に迫る。雷を纏う蛇が口を大きく開けて飛来する。そこに二振り目を投げて相殺。爆風を利用して体勢を立て直そうとする。

(今で終……なんだと!?)

真咲の降神器に宿るのは黄泉の八雷神。すべての効果と雷撃を合わせて今ので八つ目のはずだ。

だが。

回転弾倉が高速で回って放電し、甕星に向けられる銃口の先で空間が歪むほどの魔力が収束しているのを見る。

手を振って、砕けた剣の残滓を集めて槍に再構成。向こうと違って溜めなど不要。

「穿つのみ！」

体勢を立て直しながらの投擲。真咲はそれよりも速い。

「フル……バースト!!！」

バリバリバリバリッ!!!

最初の雷撃砲のように一直線に、これまでのすべてを足して尚高い威力の雷撃砲が手から離れる前の力カセオと衝突。

「ぐううううっ」

奥歯を噛みしめ、眉間に力を込め、注げるだけの神気を自分最高の威力の神の威に注ぎこみながら、徐々に押し返していくが宙で拮抗。しかし完全に明星と夕星を合わせたわけではない力カセオは、やがて押し負けだす。

最終手段。腕力でぶつかり合う神の威を直線ではなく横へと反らしていく。

そして「ふんっ」と横へと押し切り、斜め後ろの地表が粉碎された。跡形もなく、茂みも木もなく雑草一つない爆心地が完成する。「ばかな」

自分の最大の一撃がねじ伏せられた。

甕星は髪と眼の輝きを失いつつある状態で前へ向かって踏み込む。それは踏み込みというよりも、跳躍。

真咲は左手を腰に回し、魔銃の銃口を甕星に向ける。だが、左手が動きを止めた。自分は止めていない。動かない。原因は一つ。横合いから出現した琥珀の蔦が魔銃を握る手を拘束していた。

甕星から視線を反らして左手の状態を確認したのは一瞬。だが、視線を戻した時に見たのは広げられた掌で、次には顔を鷲掴まれて頭から地面に叩き付けられた。そこで、真咲は気絶した。

ガバツと身を起こす。

(気絶……していた?)

「痛っ」

後頭部が異様に痛い。ついでに首も。

「ふむ。黄泉を出たのは最近ではないのか。いや、我は長らく彼の地には……」

声に真咲がそちらを向けば、甕星が胡座をかいて種子島に言葉をかけていた。その言葉に反応するように弾倉でパリパリと放電が発生する。

「大神の元には今……」

「おい」

呼びかけられて顔を真咲に向ける甕星。

「なんだ、もう目を覚ましたか。ヤクサの主をやるだけあって頑丈だな」

ほらよ、と種子島を真咲へと渡す。

「私の勝ちで、構わんのだよな？」

「まだ」

気絶する前の記憶が混濁している。

だから、負けていないと、錯覚。その錯覚も。

「なら、もう一度やるか？ 次は気絶ではなく」

真咲に右手を伸ばし顔を掴むかのように広げられた掌と。

「問答無用で、殺すぞ？」

一拍開けて言われたその言葉に。

頭の痛みと共に蘇るフラッシュバックする大地に叩き付けられた記憶。

降神器は既に力を放出し終わり、再装填には時間がかかる。目の前の存在と戦う術を探せば魔銃が目に入る。だがそれは、目の前の存在によって分解されていた。

息を飲む。

「だが、どうせ殺されるなら」

「命をとほ言ったが、殺すとは言っていなかった」

「え？」

自分と引き替えにでも殺すという思考も止められる。

女。貴様をいただくとしよう。その身、その命に至るまで。

そう。確かにそう言っていた。

「はっ」

貴様をいただく いただく!?

言葉を思い出して呆然。

気がつけば、目の前で、金髪紫眼の青年が膝を突き、真咲の頬に手を当てていた。



一気に顔が、火が付いたように燃え上がる。

青年は真咲の耳元に顔を寄せ

「さあ、女。日下真咲よ。契約の話をしようか」

低い囁きに、意識が蕩け、日下真咲は頷いた。

後押しなんてものがあつたとすれば、それは既に、兄からかばわれたあの時にされていたのだと、後になって真咲は知つたのだ。

学院に戻つたセイジと真咲は、妙な慌ただしさに顔を見合わせる。バタバタと目の前を走り抜けようとした十四期生を呼び止めて事情を聞けば、朱翠と勝利が斬り合いをやり、勝利の方は致命傷を負つたとのこと。

ただそれも、発見と処置が早かつたため、今はラファイルが全力で治癒をしていると。

「嘉藤……？」

真咲が思案気にアゴに親指を当てた。

「御門の剣聖Jrが負けた、ということか」

「致命傷を負つたことがイコール敗北でもないだろ」

「それは……まあ、そうですが……」

セイジに反論されて語尾がゴニョゴニョする真咲。

「発見が早かつたということは、決着がついていない可能性もある。ついていけば、この程度の騒ぎではないだろうがな」

さて、と真咲に寄宿舍への帰りを促す。

「風呂に入つて、早々に休め」

「ですが」

まだ何か言いたげな真咲に、第三学生寮の屋根の上を指差す。

「なにやら怖い顔してご立腹だ。巻き込まれたいか？」

言われるままにその方向を見て「あ」と漏らす。

璃摩が屋根の上で胡座をかいて二人を見下ろしていた。

真咲は頬を引き攣らせ、セイジは肩をすくめた。

「あれは、あいつの耳に入ったかな。天宮も早いな」

「そ、それでは、私は」

「ああ」

真咲と別れて第三学生寮へと入り、まっすぐと屋根を目指す。そして、着いて早々に「どういうことなんですか？」と璃摩のちよつと苛ついた声が投げかけられる。

「日下のおうちから、真咲が神州に帰らないって連絡があったって。しかもその後には先輩と二人でどっかから帰ってくるし」

「ちよつと命を賭けた勝負をして俺が勝った。その結果で彼女を預かることにした」

素直に、結果だけを即答して返す。返された方は「は？」と目を点にした。

「ちよ……と待ってください？ 命を賭けてとかどゆこと？」

「彼女が勝ったら俺が死ぬ。俺が勝ったら彼女の身も命も俺のもの。OK？」と。

「あれだな。今頃、分家から本家に連絡がいつて、リオが、マサキが自分の庇護を離れたことを知ってキレている頃だな。」

ヒルメは独占欲強いからなあ」

ハハハ、と笑ってみせるセイジ。

「庇護つて」

璃摩は言葉の意味を考えてから、顔を上げてセイジをガン見した。「天照の庇護下にある相手を甕星の庇護下にぶん盗ったってことですか？！」

「本人の了承は得ている。後は上の問題だな」

「いや、もう、笑い事じゃ あ、電話……うげ」

鳴り始めた璃摩の携帯電話。表示されている相手は『姉』。璃摩の顔が明らかに嫌そうに歪んだ。思わず、そんな感じで切る。

「き……切っちゃった!？」

>>>な目で頭を抱える璃摩。

「あゝあ」

「ボク？ ボクが悪いの？」

「いや、どう考えてもそうだろ」

再度電話が鳴る。相手は同じ。

ガクガクしながら電話に出る。

「も、もしもし？」

【ふふふ？ どうして切ったの？】

マイクを押さえ、璃摩はセイジに顔を向ける。

「わ、笑ってますよ？」

「あれだ。人は怒りが一定を通り越すと笑いがこみ上げてくるとい  
う」

「なにそれ怖い」

恐る恐る再開する。

「ドウシタノ？ ナニカアッタ？」

棒読みである。

【ねえ、璃摩？ あなたの学校に九曜頂・日崎さんがいるでしょう？  
ちょっと探して変わってもらえる？】

「ヤダナア。ソクナニスグサガセルホド、ヒトスクナクナイヨ」

【……………】

しばし無言。

【璃摩】

「ひゃいー」

【妾に同じことを二度言わせるつもりか】

ぶふっ、と噴いた。

(で、電話の向こうで転神していらっしやる！)

なんかもう助けを求めてセイジを見つめちゃう璃摩。涙に濡れて、  
ちよっと可愛いかなと思ってしまっちゃうセイジである。だから、無言で  
携帯に手を伸ばした。

【疾く行動に移しなさい】

「選手交代だ」

【……………ん、んん】

璃央に無言が生まれた。スピーカーの向こうで慌てて喉の調子を整える声がした。

【ご無沙汰ですね、星司さん】

「ああ。声の様子では元気そうだな。それはもう受話器を溶かさなばかりだな」

【ええ。怒っていますからね】

「ほお？ 是非、今の君を見てみたいな。さぞ、美しかろう」

【妾を怒らすたびにそのように言う。過去も今も汝は変わらぬ】

最初は璃央として挨拶してきたものの、セイジの挑発で口調がガラリと変わる。

「我は俺だ。変わらなくて当然だ」

それで？ と。

「用件は何かな？」

【言わなくても分かっていますよ？】

「さあな。君の口から甘い囁きと共に我が耳に届けてほしいものだな？ ん？」

セイジは璃摩が目の前でやっていたジェスチャーに従ってマイクを押さえて「なんだ？」と問う。

「喧嘩売ってどうすんすか！」

「安心しろ。それは既に売約済みだ」

「ちよ」

電話再開。

【汝が妾の末を強制的に引つ張ったのは既に判明している】

「だから？」

【だからじゃと?!】

「信仰の鞍替えなど珍しくもない。

ただ、鞍替えのきっかけが個人の契約だっただけの話だ」

【契約？】

「内訳は話せないな」

【そのようなことで妾が納得すると思うてか】

「納得する必要などあると思っっているのか？」

君はただ結果を受け入れて、手元を離れた末の先を涙ながらに見守ってればいい」

【なんと傲慢な。他の誰でもなく妾の末に手を出して、ただで済むと思っっているわけではあるまいな？】

フツと小さく笑う。そして言う。

「俺を誰だと思っっている」

絶大な自信と何者をも従える威圧感。傍らの璃摩が「うわあ」とその威圧感に身悶えした。

「記憶を戻したのなら、俺がお前達天津神に対してなんの遠慮も持たない存在であることをよく思い出せ」

これ以上話すことなどないと電話を切っつて璃摩に返す。

電話を受け取っつて、とりあえず璃摩は聞く。「で？」と。

「先輩は何から真咲を護るんです？」

その質問に、セイジは、ムツと慄然。

「先輩のそばにいるボクなら、力を貸すなんて造作もないですよ！それに、真咲はボクの縁者なので、むしろボクが真咲を護らないとなのです」

「そっつえば……そうだったな」

ふむ、と頷くと、カーディフでの経緯を璃摩に話すのであった。

「ええつと、つまり、真咲を遊馬から離すための手段として、日下を経由して真咲を庇護する天照の力から切り離す手を使った、とそっついうことですか？」

「元々、彼女とは腕試しで賭をする約束があつたから、代償としてここに留めようはしていただが、いや、まさかこつちの命を狙つていたとは思わなかつたんでな」

「はあん。命を賭した契約で忠誠という名の信仰を変更させたわけですか。」

九曜分家の本家に対する忠誠は、そのまま始祖に対する信仰ですもんねえ。

で、その変更はずっとですか？」

「甕星の庇護を中継ぎにして魔女の庇護下に入れる。彼女の了承は得ているし向こうには話を通し済だ」

「魔女……ですかあ。確か、先輩達の就職先のトップでしたっけ

あれ？」

「どうした」

「へ？ あい、いや、なんでもないです」

にはははと愛想笑い。

（真咲はつまり、卒業後の先輩とキャツキャウフフをする可能性大ということか！）

ピシャーンと背後に落雷のイメージ。

「とりあえず、マサキの件は終わりでいいか？」

話を終わらせて階下へと行こうとするセイジ。

「榊君のどこにでも行くですか？」

「ああ。あいつは致命傷でもなんでもないんだろっ？」

「左腕切断くらいですかね？ 今はもう繋げて包帯だらけだけど」

「なんだ。ある意味致命傷じゃないか」

大太刀という両手持ちの武器を使う者としては致命傷だ、とセイジは言う。

「先輩は榊君のあの刀について知ってるんすね」

「立ち会ったからな。詳細は秘密だが」

「えー」

不服そうな璃摩を残し、セイジは朱翠の元へと向かった。

神州の九曜・天宮家にて、璃央は溶けて面影のなくなった受話器

を置いて、しばらくその場で立ち尽くす。

呼吸を整えて、全力で気を落ち着かせる。

ヒルメの記憶が戻ってから、逆上すると力がやや暴走気味になる。まだうまく神魂と身体が馴染みきっていないのだ。その逆上でさえ、自身のコントロールがうまくいっていないことであることは理解していた。

（私達に遠慮をしない。手元を離れた……先？）

落ち着けば、手元を離れさせる理由があるはずだ、と考えていた。遠慮をしない件に関しては、確かにそうだったとは思う。

遠慮をしなくなったのはいつの頃からだったか。遠慮をしないで何をしたか。

そこを考えてから、璃央は家人を呼び寄せた。

「日下の現状を調査しなさい」

そう指示を出してから西へ行くための用意をし始める璃央であった。

ところ変わって場所は、紫の部屋。

ベッドには秋が仰向けで寝てピクリともせず、傍らで紫が水鏡の術を使用。水鏡を見つめる琴葉の姿があった。

「尾の長い鮭、ね」

鏡には、尾の長い鮭が網にかかっている絵が映し出されている。

「琴葉様からいただいた材料で煎じた薬のおかげで、呪いを封じることがは出来たのですが、そこまでが限界でした。これではふとした拍子に活性化してしまいます」

「呪いをかけた相手をどうにかするか、この呪いを正当な手順で解呪するか。手はそれしかないわ」

吐息。

「心を乱す……不協の呪い……いえ、心に隙を作る、かしら？」

（秋の現状を考えるのなら、仕掛け人はあいつくらいしか考えられ

ない。でも、理由が分からないわね)

秋の心を乱して、何がしたいのか。その部分がまったく分からない。

「呪いをかけた相手に心当たりがあるから、そちらは私で対処しておきましょう」

「お願い致しますわ。ああ、やっぱり、神薙様にご相談して正しかったですよ」

紫の笑顔に琴葉は苦笑を見られないよう背を向ける。

秋の様子がおかしい。それだけで呪いにまで辿り着いた紫には素直に感心する一方で、その疑いさえ持てなかった自分を恥じてもいた。

「まあ、この手の呪いは、かけられた側が自覚を持って自分を強く持てば解呪出来ることもあるから、そこに期待するのもアリかしらね」

「それでしたら、秋様なら大丈夫でございますね」

「まあ、あなたが安心して国に帰ることが出来るくらいには大丈夫じゃないかしらね」

安心した紫を残し、第三学生寮の自室へと戻った琴葉は溜息を吐く。

(尾の長い鮭　ロキ、ね。

転生そのものが確認されていないだけに、今回の件への関与が今ひとつはつきりしないのだけれど、あいつがロキの呪いを秋にかけたと考えるのがしっくりくるとはいえ、どうも、ね)

はつきりしないから気持ち悪い、と思う。

いずれかの神族に属する超越者は転生すれば、した事実は遅かれ早かれその神族に把握される。神であれば司る存在に力が宿るといったことで存在を隠せない。

ただ、転生していることが判明しても場所が特定されるわけではないため「あの神に会いたい」と願って会えるわけでもない。

よほど全力で隠れようとすれば転生の痕跡を消すことも出来るだ



ろうが、隠れたければそもそも転生しないだろう。  
(そもそも、あいつはリンカーでもライナーでもない。ただの人間  
半神ですらない。)

呪いに精通しているかもしれないけれど、本当のところは分から  
ない)

事態が見えてこないから気持ちが悪い、と。

「ともかく、秋の目を覚ましてから考えましょうか」

その前に、と琴葉は携帯を取り出す。

神族元に一応の確認はしておこうと電話をかける。

繋がり、二言三言と話して「え？」と一瞬キョトンとする。

「……被害は？」

気を持ち直して聞き、幾度か頷いてから「ええ、薬剤は揃えてお  
くわ」と言って電話を切った。

セイジは部屋で正座をしていた朱翠の前に立つ。

その左腕は包帯で固定されているが、そこ以外に怪我は見当たら  
ない。

「剣は握れるのか？」

セイジの問いに、朱翠は下を向いたまま「長さを調整すれば」と  
応じる。

「なら、これからすぐにここを発ってほしい」

ハッと顔を上げる。

「暇を？」

「暇？ ええつと、ああ、いや、出て行けとかではなく、父さんの  
手伝いに行ってほしいだけなんだが」

朱翠は安堵の吐息を一つ。

「ノイエ・シユタールが今、かなり危険らしくてな」

「ドイツ」

「そう、ドイツだ」

真咲の件でアルカナム……メルカード財団に連絡を取った時に、ドイツの軍と謎の集団との間で戦端が開き、集団が呼び出した巨大生物によってベルリン東からワルシャワが崩壊したことを聞いた。「ポーランドは国土の三分の二が地割れに飲み込まれたそうだ」

「巨大生物？」

「ベヘモット」

朱翠が息を飲んだ。

「神の傑作」

その声は震えている。

「そうとも呼ぶらしいな。」

LR になつてからは、いつだったか、ヴァチカンが北アフリカを攻める時に使つて制御不能をやらかしたんだつたな」

LR 9 年、リビアを襲撃した教会騎士団が使用。制御不能に陥り、リビアという国の存在を地に埋めたとされている。

「集団がヴァチカンか」

「いや、ドイツに招集された中に使徒がいるから、それはないんじゃないかと思う。」

巨獣は現在活動休止中らしくてな。軍はこの隙に、ノイエを経由して戦力をかき集めている。

シユスイは父さんの推薦で呼ばれたんだそうだ」

そこまで話してから聞いてみる。

「強制ではないが、シユスイ自身に行く気はあるか？」

「星司さんは」

「俺は……行きたくても、むしろ来るなと説教をだな」  
ブツブツと漏れたのは愚痴。

ミスロジカル魔導学院の生徒は、クエストとして登録されていない以上、推薦でもないかぎりブリテン連合王国外に出ることは禁止される。

今回の件はノイエ・シユタールにはクエスト登録されているが、こちらでは登録されてはいないのだという。

クエスト登録を拒否したのが司なのだと教えるセイジ。その当人が朱翠を指名してきたのである。正確には、朱翠とラフィルを、だ。嫌ならちゃんと言え」

しばし無言。

「星司さん達の代わりに」

代わりに行ってくると。その覚悟で行くと言う。

（代わり、か。それが気負いにならなければいいが）

一抹の不安。

「そう言ってもらえるのはうれしいがな。まあ、分かった。それでは、明日の夕刻にはここを発て」

「承知」

答えて、朱翠は荷造りを開始した。

朱翠の部屋を出たセイジはまっすぐに留学生寄宿舎へと向かう。

ラフィルはまだそっちから戻ってきていなかった。

学生寮を出て、庭経由で向かう。

（リビアと今回では崩壊の規模が違いすぎる。それはつまり、制御されているということか）

謎の集団、というのが、妙に気になるセイジであった。

## エピソード

「どうなるかと思ったけど、なんとかなったわね」

澄み渡る空、青い海、焼ける砂浜、照りつける太陽。それらを前にして、豊満な肢体を白ビキニで包んだセツナが「ん……」と伸びをした。

留学生達がゴランで調達した水着姿で、思い思いに散らばっている。

皆が楽しそうにしているのを、浜辺の隅のパラソルで、左肩に包帯を巻いて憮然とする勝利の姿があった。

一晩かけてラフィルに治癒されて、琴葉製の薬を塗りたくられてようやく包帯付で外出可能になった。

「まったく、嘉藤のせいで海水浴がお流れになるところだったよー」

雛が日焼け止めオイルを出しながら、頬を膨らませた。

御門学園指定のスクール水着で、胸に『水城』と入っている。

「既に終わったことなのだから、責めても仕方がない。これに懲りて、腕試しを自重することだな」

ドリンクのサーバーを設置していた夏紀が苦言を呈す。苦言に対し、一言「うっせ」と答えてそっぽを向く勝利。御門の三人は三人共、学校指定の水着であった。

あらかじめセイジから「多分泳ぐ時間はある」と言われていたため、臨海学校という形が成立して参加表明した時点で水着は用意していたのである。

「しかし、お二人とも……」

雛が夏紀と勝利の腹を「ほうほう」と見比べる。

「見事に腹筋割れたねえ」

神州にいた頃よりも引き締まり、腹筋が割れていた。

「私は身長も胸も成長しないのに」

「それは鍛えてどうにかなるものなのか？」

雛の愚痴に夏紀が即答した。

「もう！ ちよつとくらい成長してもいいかな？ とか思ったの！」  
あれくらいに、と雛がセツナの名を挙げた。

「無理だから」

「夢見過ぎだろ」

夏紀と勝利が首を振った。

「なんでそんなところで息ピッタリなのよー！」

二週間、厳しい訓練を受けようが関係なく、雛を入れた御門の陣営はうるさいことに代わりはなかった。

「御門の連中は仲いいねえ」

かき氷をシャリシャリ食べながら、進はまったりと雛達を眺めていた。

「うだるでござる」

傍らに、シートの上でグッタリしている卓郎が唸っていた。

「んな、あちいなら、なんで全身水着なんか」

「オタの伝統でござる」

「嫌な伝統だな、おい」

黒い全身水着にそんな伝統はない。

卓郎は進と違ってずっとレンメルの工房に籠もっていただけであつて、まったくと言っていいほどやせていない。むしろ、増えた。

盛大に溜息。

「世界まずい飯ランキング一位のイギリスで、まさかの体重増加でござる」

「そりゃ、おまえ、マイルが持ってきた第三学生寮産の食い物馬鹿食いすりゃ……」

「美味すぎるのが悪いでござるよ」

自制しろよ、と思う進である。

「しっかし、いい景色だなあ」

かき氷を食べ終わり、手足を思いつきり伸ばして海の果てを眺める。東京湾の砂浜じゃ見られない景色だ。

「こういうのをいって思えることは、本当は結構すごいことなんだって、ヒザキ教官が言ってたよ」

眺めていたらそんな言葉が背にかけられる。

「お、おお……」

卓郎が何か感嘆を漏らしている。

声は、昨日まで工房でよく聞いていたものだ。

「ミイルもき……」

振り返って、進は言葉を失って、顔を赤くした。

ピンクの髪の毛の小柄な少女がピンクのビキニ姿で腰に手を当てて立っていた。

ミイルは小柄ではあるが、別にロリツ子なわけではなく（グラマ―なわけでもないが）、進を失語症にするには十分な魅力はあった。「来たわね、ミイル？」

セツナがミイルに抱きつき「うわっ」と抱きつかれた方がセツナの胸で酸欠になりかかる。

「ぷはっ……。工房の掃除は兄ちゃんがやるとか言ってたからね」

「レンはこういうイベントには不参加が普通だからねえ」

「体力的に」

ミイルとセツナがハモって、笑った。

セツナが「じゃ、またあとで」と去り、ミイルは進の隣に「んしよ」と座った。

「泳がないの？」

「海に来て全力で泳ぐ歳でもねえし」

聞かれ、顔の赤さを誤魔化すように横を向いて答える進。

「つつか、眼鏡なくて大丈夫なのかよ？」

「ちよつとぼやけてるけど全然平気かな。かけてた方がいいの？」

「べ、別にそういうわけじゃ。なくても全然……その、か、かわ」

どもって続きが言えなくなる。ミイルは進のことをキョトンと見ていたが、不意に寂しそうに目を伏せた。

「シンとタクロウとも今日でお別れかあ」

”お別れ”という単語に、進も卓郎もそれぞれに「あ」と寂しげに漏らす。

結局、鉾構一体の魔構兵は完成しなかった。完成出来たのは、進のパールバンカーのみである。

「いやいや、そんな寂しい顔とかしなくても大丈夫でござるよ」

卓郎が明るい声を出した。

「どうせ自分ら同じ業界に進むと思われるから、この先顔を合わせる機会なんていくらでもあるでござる」

希望の業界は結局は同じだ、と。

テイマーの道も、魔構使いの道も、魔構開発者の道も、すべてが魔構で繋がっている。だから業界は同じなのだ、と卓郎は言う。

「それに、ネットや電話でいつだって繋がれるでござる」

「そ、そうだな。ははは、文明の利器とか忘れてたぜ」

「そだね」

三人がやや乾いた笑いをした。

そして約束をする。

いつか、必ず、今回完成出来なかった魔構兵を完成させようぜ、と。

そんな、少ししんみりしている三人を、ビーチチェアでまったりしていた凜が眺める。

ビーチチェアは三つ。

凜と真咲と璃摩がそれぞれ座り、傍らのパラソルの下に、弓弦と蔵人がやはりまったりしていた。蔵人に至っては、一人だけ体操服でノートパソコンをいじっている。

黒ビキニの凜、青い競泳水着の真咲、フリフリワンピースの璃摩。

「それはない」

真咲は璃摩の水着を全否定した。

「いいネタだと思っただけどなあ」

自分をネタと言い切る璃摩。

「ある意味、天宮には若さがない」  
凜が呆れた。

「そですか？ 神和先生よりも肌に張りがあると思うんですけど」  
「肌の話ではない！」

璃摩の暴言に凜が無表情で即答。

「しかし、日下の決断も若さなのか？」

凜は話を変えた。

真咲がイギリスに残ることは凜も了承済。というより了承させられた。祖父に無理矢理にである。

「悪い男に引つかかりました」

「なんだとっ?!」

「冗談です」

「おいっ」

真顔だっただけに凜は引っかかり、直後の冗談発言にズルツと滑った。

真咲にしては珍しく楽しげに微笑むのを横目で見て璃摩はムツとしていた。

結局、セイジは真咲との契約のことを一切話していないし、真咲も話さない。あれほどに天宮本家に忠節だった人間がそれを曲げるだけのナニカがあったはずなのだ。

「榊君達と一緒に今日の夕方にはロンドンに行くのでしょうか？」

「ええ。日崎様にはそのように指示を受けています」

（様、ね。お母さんが今回のことを聞けば、九曜・日崎に攻撃するかも？）

あながち予想で済まなさそうなのが怖い。

母はヒルメ状態の璃央より過激である。もつとも、天宮璃々をそのような人間にしたのが日崎司だと聞いたことがあり、元は今ほど過激ではなかったらしい。

璃摩が月読として今の天宮家に関わりだした頃には既に今の状態だったから、過激でない頃などは想像するしか出来ない。



「真咲は今後、星司先輩と……」

「いえ、ロンドン以降はある方の下で修行とのことですよ。」

なんでも日崎様のお師匠様のご友人であらせられるとか

少し楽しみです、と微笑む。

「修行、ね。学ぶことが多いのはいいことよね？」

「はい」

(くそう、ホント気になるなあ)

精神操作でもして聞き出してやるうかとも思うが、現在真咲を庇護している甕星にはその手の魔法が効かない。一度、魅了の魔法をかけようとして酷い目にあつた。それは庇護下にある真咲にも効かないため、意味がない。

この件を考え出すと苛々が募るため、璃摩は話題を反らすことにする。

「ところで、紫さんいないね」

「紫様なら梧桐殿とケーキを食べるとのことですが」

「け、ケーキ？ イメージ合わないわあ」

「こちらにいらっしやる間……といってもここ数日ですが、幾度かお二人で出掛けていたそうです」

「幸せいっぱいなわけね」

璃摩と真咲の会話に凜がうつぶせになり、弓弦があわあわしだす。「紫様はそれほどお体が丈夫な方でもないのです、そこを配慮されたのでは？」

ケーキよりも海水浴の方がイメージから遠い方ですし」

神州からイギリスまでの船旅を秋に会うために耐えたものの、着いて早々気分が悪くなったため初日の宴会にも遅刻したのだと真咲は言う。

その遅刻が秋との再会を早めたことになったのはなんの偶然か。

「よくイギリスまで来られたよね」

「それはひとえに船のおかげかと」

「船、ねえ？」

これから彼らが乗って帰る存在について思い出す璃摩。

（天津神々が使用する鳥船を組み込んだ客船とか、確かにそりゃ快適でしょうよ。九曜頂の参加も神祇官用の外遊船を引っ張り出すための方便……や、紫さんが引っ張り出させたかな）

二週間近い航海は神の船の快適とは関係なく、紫には普通にきつかったようだが。

「天定がもつと有効活用出来ればなあ」

「日崎様が研究なさっているアレですか？」

「あらかじめ陣を敷いた場所と場所を繋げることは出来ても、そこを通れるのが幻獣のような魔力の構成体のみとか……」

「降臨者は可能……とういことでしょうか」

「幻獣でしか実用出来ていなくて、降臨者に関しては要実験だったさ。」

まあ、下手したら死んじゃうわけだから、ちょっと行ってこいみたいなのは出来ないしね」

人間が使用出来るかどうかは、もつと先の人体実験が必要になる、と言う。

「先輩は人体実験はやる気ないらしいから、やるとしたら認可国のどっかじゃないか、とか言ってたな」

とはいえ、と璃摩は肩をすくめた。

「幻想魔法なのは伊達じゃないってのがねー」。

どれだけ陣を敷いたところで、それを効果のあるものに出来るのが今のところ先輩だけとか」

「天が定めた……つまり、神代において神々が人に与えなかった知識の一端を解明しようというのですから、手間がかかるのは当然かと」

当然だと言う真咲だが、璃摩の考えとしては、手間の内容がまったく違う。

（人が神の知識を解明じゃなくて、神の知識を持ってして、神の技を人のレベルに落とす理論を構築しなくちゃいけないってのが手間

なんだよねえ)

人と神の記憶を持つ者の考えの違いである。

「お前達、真面目だな」

横からそんな感想。凜が肩肘ついて真咲と璃摩を生暖かい目で眺めていた。その目は休息の時ぐらい脳も休めると言っていた。

「休むついでに雑談ですよ」。魔法ネタが真面目だとすると、やはりここは恋バナです?!」

璃摩のちよつと興奮気味なソレに、凜が黙った。

「えー、なんで黙るのです?」

「いや、うちにいる方の天宮と同じ顔で、彼女がまったく言わなそうなの発言だったから……」

凜がハツとした顔をする。

「だからうちに入れなかつたのか!」

「余計なお世話だよ!? 天宮の品格がないとか余計なお世話だよ!?」

「や、そこまでは言っていないだが……あ」

凜は璃摩の後ろを見て口を開けた。同じ動作をしたのは真咲と弓弦。つまりは「あ」と。

「ボクだつてちゃんとすれば璃央以じよつ?!」

ゴスツと嫌な音と、バタリとビーチチェアに突っ伏した璃摩の姿があった。これが漫画であれば、璃摩の頭に大きなタンコブと煙が上がっていたことだろう。

璃摩撃沈。その原因は腰に手を当て頬を引き寄せ、右手にステンレス製のシルバートレーを打撃スタイルで握ったセイジである。

「リゾート地で馬鹿なこと叫ぶんじゃねえ。しかも二度も」

ハーフパンツにビーチサンダル、上はヒヨコ柄エプロン。

ちようど弓弦と蔵人へと焼きそばとオレンジジュースを持ってきて、璃摩の叫びに遭遇したらしい。

気絶した璃摩の首を掴んでビーチチェアから引きずり下ろす。

「従業員確保と」

シルバートレーで敬礼。曰くの従業員を引きずって、浜辺の隅でひっそり営業する掘っ立て小屋。もとい海の家へと帰っていくエプロン野郎を、凜も真咲も弓弦も啞然と見送るのであった。蔵人だけが無言で焼きそばをもそもそ食べていた。

海の家前の砂上に璃摩を捨ててセイジは軒下に入る。

海の家では勇がシャリシャリと氷柱を削ってかき氷を作っていた。削る氷柱はセレスと綾女が海水を蒸留と浄化の共同作業で作成中。

「馬鹿を一人確保してきた。だから、キリサキは遊びに行け」

セイジに声をかけられ、勇は手を止めて顔を上げた。結構汗たくさんだが疲れたという顔はしていない。その視線が砂上に突っ伏したフリフリを捉える。

「天宮の次女はかなり馬鹿っぽいと思っではいたけど、ここまでネタに走るのか」

ネタと言われて璃摩がガバツと起き上がった。

「誰がネタか！」

「実際、似合っではないな」

セイジにも突っ込まれて「アイター」と額を押さえる。

「姉には合いそうだが、リマにはフリル部分が邪魔だ」

「いやあ、実はボクもそうじゃないかと思っただんですよねー」

セイジの指摘に即フリルを外しにかかる璃摩。取り外しが効くらしい。外したフリルを繋げてパレオにして付ける。

「ちなみにこの仕掛は手作りっす」

「便利そうだけどなんとなく突っ込みたい水着だよな。てか、天宮の次女さんは制服勝手に改造とかしてるよな」

「改造したら耐熱性消えたっす。御門の制服で犯した愚、再び」

この時代、学生用の夏服というのはあまりない。魔法以外の火ではほとんど煤けることさえない耐熱性を持ったため、大人の世代からは夏冬兼用と見られるが、現代の学生からは耐熱性学生服こそが制

服である。

「耐熱制服の発明が世界から夏服を消し去った、と我が家の大魔法使いは嘆いていたがな」

「確か、うちも数年前までは夏服あったらしいんだけどな。俺が入学する頃にはなくなってた。理由が校長の鶴の一声だったとか何とか」

「校長？」

「当時は理事の娘だな」

「リリ・タカミヤか」

セイジと勇のそんな会話に璃摩が「ああ、それね」と口を開けた。

「我が家の鬼母が」

『あの馬鹿が神州に来る前に好みのものを消し去ってくれる。まずは夏服だ！』

と、唐突に言い出して天宮学園から夏服が消えましたとさ」

「何年前の話だ」

「璃央が誘拐された年の話だからよく覚えてるかな」

「きつとその馬鹿は我が家の大魔法使いのことだろう」

「まあ、時期的にそうとしか」

「うちの父親はどれだけ君らの母親に目の敵にされているんだ？」

暗殺されかかったり一族が天宮学園に入学出来なかったり他にも色々、とにかく目の敵にされている理由が分からないセイジである。司は司でそこら辺は一切話さないため、対処のしようがない。「知らないですね。璃央でも知らないんじゃないかな？」

「日崎と天宮の先代四方山話？ 神州におらん人が知らないのは分かるけど、なんで渦中の人の娘が知らないんだ？ そんなマイナーな話でもねえぞ？」

「こんなところにまさかの情報源」

完成したかき氷を御門の三人へと渡しにいくセイジ。

とりあえず、これでかき氷終了らしく、氷柱作成もこの場の冷却用に大きいのを一塊作って終了していた。

「海水蒸留とかさ、その技術だけで飯食えるよな」

勇に話を振られて、綾女は頷く。

「それは良いかもしれませぬ」

ただ、と反対意見が続く。

「一歩間違えれば、下手なスチームボムよりも高威力の水蒸気爆発が発生しますから……」

「え、そんな危ないものが間近で行われてたの?!」

「魔法はいつだってどんなものでも危険ですよ。」

人が幻想を制御出来て魔法が万能なものであれば、大戦などを経ずにも魔法は世に溢れていたでしょうし、そもそも、神代から現代までに科学が発展することもなかったでしょう」

「あー、まあ、そりゃな」

いつの間にか説教されていることに気づき、目を泳がせて嫌な汗をかく勇。そこら辺はよく姉につつかれた場所でもあった。

魔法は万能ではなく科学同様に万が一は必ずある。人はすぐに暴走する。人の暴走は魔法の暴走に繋がる。万が一を引き起こす可能性は非常に高いのだから、己を常に強く持てるように努力しろ、と。もつとも、隠れ記憶持ちの勇は姉の苦言をかなり聞き流してきたのだが。

「やれやれ、これでしばらく暇になるかね」

セイジが戻ってきた。

「我々はここで失礼してもいいか？」

セイジの戻りを待ってからのセレスの問いに「悪かったな」と応じて、セレスと綾女を海の家からの解放する。二人が消えた海の家に残った三人の内、セイジと璃摩は「で？」と勇に促した。例の四方山話の件である。

「別に長い話でもなんでもないんだけどね」

勇は先に断っておく。

「天宮と日崎の先代が俺らくらいの年の頃、二人がうちの姉貴と神籬の龍兄のような関係だったけど、日崎の側がこの関係を一方的に打ち切って神州を出奔しちまったって話だ」

「タツヤとユウというところ……つまり、許嫁関係だったのをうちの父親が出奔したことで破談になった。そういうことか」

「大戦以降に神祇院が九曜と定める以前からそれぞれの家が持つ能力を高めるために、血を入れるための婚姻があつてさ。姉貴のもその一環なんだけど、天宮と日崎もその例に漏れなかつたわけなんだから……」

ここで勇は吐息。

「日崎の先代の出奔する時に使った手段に問題があつて、天宮の先代がそれに激怒したらしい。直毘衆まで使つくりの怒りっぷりだったとか。」

その一件で、天宮の先代を怒らせるとマジで殺される！ が他の九曜の脳裏に刻まれたって話だ」

かわいさ余つて憎さ百倍の落差が激しすぎたらしい。

「ひょっとして、九曜が呼ばれる宴で璃央に近づく人が少ないのって」

「母親が怖いから。それと、あの母にして……の思い込みもあるかもな」

「霧崎さんって璃央の先輩でしょ？ 九曜のよしみで噂の否定とかしてよー」

「どんなよしみだよ。」

「だいたい、学校が同じだからって、噂を否定出来るほど面識があるわけじゃない。うちの書記だったら……あー」

言いかけて、勇は言葉を濁して唸った。

「忘れてた。夏休み終わる前に決めないと駄目なんだった」

「何をです？」

「いやあ……」。

うちの生徒会さ。先日あつた末広の虐殺事件で壊滅しちまつてな」

「ネットニュースで見ましたね。姉も巻き込まれたみたいで」

どこか他人のように言っているが、勇は気づかない。帰国した時に待っていることで頭がいっぱいである。

「副会長の俺を除いて全滅とか……勘弁してくれよ、もう。書記と会計決め直すの俺とかさ」

「頭を抱えてるとこ悪いんですけど、副会長ってことは、霧崎さんが天宮最強？」

「最強つつつか、全学闘会の優勝者は俺だな」  
キョトンとしてるセイジに璃摩は説明する。

天宮学園と御門学園はどちらも生徒会の決め方が同じで、生徒会長は人気投票、書記と会計は生徒会長に決定権がある。しかし、副会長は五月に行われる全学年参加の闘技大会 通称、全学闘会の優勝者がやることになる。これには体育系の部活の暴走を抑制する役割があるためである。

「書記なあ。あいつ、準優勝者だったんだけどな」  
副会長、書記、会計が今期の天宮ベスト三位までで埋まっていたらしい。

「来年には本校と分校を合併するって話だから、そこらの準備もしなけりゃならんし、下手な人選出来ないとか。この際、一年からでも人気のある生徒引っ張って会長に据えちまうのも手だよなあ」

「璃央据えれば？」

「天宮ねえ。来年は天宮で決まりとか武本は言ってけどなあ」

「武本？」

「末広で死んだ書記だよ。あいつ、天宮のことは九曜とか関係なく買ってたからなあ。正確には梧桐も、だけどな」

懐、広すぎ。と勇は少し寂しげに笑った。神州に戻ってもその相手はもういないのだ。

「あ、そっぴや」

勇が何か思い出してセイジを見た。

「天宮と梧桐ってさ。あいつら、日崎さんに再教育受けたんだよな



「？」

「なんだ再教育って」

「俺らが受けたような」

「合点がいつて頷く。」

「優秀な生徒だったぞ」

「もともと学年一位と二位だしな。じゃあ、あの二人に書記と会計押しつけるかな。決定ー」

「なんかよく分からんが重大事項に聞こえるな、おい」

「大したことじゃねえよ。一年坊主の来年が半決まりする可能性を吐露しただけさ」

それに、と捕捉。

「生徒会の仕事をまともにやって人気でも取りゃ、天宮が母親とは違っつてことを内外に示せることにも繋がられるだろ。怖くなんかねえつてさ」

勇は勇で彼なりに真面目に考えてはくれたらしい。

全学闘会の優勝者は基本的に馬鹿が多い。

天宮も御門も文武の両立が基本姿勢ではあるが、両立が出来ても全学闘会で優勝出来るだけの武特化の学生は文の方が疎かになっていることが多いからである。

そんな歴代の優勝者の中で、霧崎勇に至っては数少ない文武の両立者と言える。姉の教育の賜物である。

ただ、姉の教育とは関係ない部分で一つ予想外の部分がある。

生徒会長は人気投票制のため、立候補ではなく数名の推薦対象から選ばれる。

今期の生徒会長の推薦対象の中には勇も含まれ、僅差で敗北していた。この事実が後押ししたせいで、現在、遠く離れた神州は天宮学園職員室に置いて、霧崎勇に生徒会長と副会長の兼任をさせることで決定していることは、この時点ではまだ、勇は知る由もないのであった。

と、セイジのヒヨコエプロンが鳴いた。否、携帯が着信を知らせ

る。

「一言三言会話してから切るとエプロンを脱いで椅子に掛ける。

「先輩どこいくの？」

「用事」

璃摩の問いに無然と、不機嫌そうに答える。

「俺はこのまま学院に戻るから、あとはキリサキに任せる」

「次女さんとか妹さんとかじゃなくて、俺？」

自分を指差す勇を見下ろして、セイジは小さく笑う。

「副会長なんだろう？　じゃあ、任せた」

そう言つと、璃摩と勇を海の家に残して去つていった。

セイジを見送つてから、璃摩は勇に顔を向けた。

「で、先輩は言つてないし、周りに人もいないんで聞くんですけど、最初にそう断つておく。」

「霧崎さん、前持ちですよねえ？」

「……は？　ええつと」

「ボクも大して変わらないんで、隠さなくていいですよー」

「変わらなくて……じゃあ、次女さんって。あれ？　それって天宮家の連中は知つて……」

「やだなあ、知つてたら留学なんて許すわけないじゃないっすか」

「何言つてんの？　と真顔で言われ、勇も「それもそうだけどさ」と自分で数秒前の自分を否定した。

「なんで明かしたんだ？」

「聞きたいことと忠告があるからだよ。大己貴殿？」

「ちよ、なんで、琴葉にしか神名言つてねえのに」

「分かるでしょ。天津と国津の違いはあつても同じ国の神族なんだから」

璃摩の発言に、勇はしばらく無言で応え、やがて吐息。

「今の神州じゃ聞くことのない言葉だな」

「そお？」

「いや、だって、神祇院つうか、今の天津神の政策じゃ国津神は劣

働力以外は排除の方向で、同じ国なんて言えるもんじゃねえよ」

「そういう考えはあるんだね」

「理解するには考えは必要だぜ。ってこんな話が目的じゃねえな」

何が聞きたいんだ？ と璃摩に促す。璃摩はコホンと咳払い。

「現在の九曜頂・霧崎が神薙に嫁いだ後、本気で九曜頂を継ぐ気なの？」

真顔でそう聞いた。

聞かれた方は無言。面食らった様子はない。質問の意味が分からないわけでもない。ただ、そう来たか、と。

「忠告つてのは、継ぐなつてことか」

「ちよつと違う。神祇院の記憶封印を受けるつもりがないなら、国を出な。これが忠告」

「姉貴にも同じこと言われたよ」

前持ちであることは分かった。だから忠告。決めるのは勇自身だ。

どんな手を使おうが、隠すには限界がある。だから、限界を感じる前に国を出る。

神州だけが世界ではない。

これが家族会議で悠に言われたこと。

璃摩からの忠告とはつまり、姉と同じ内容のものだ。姉のは忠告とは違うが、言っていることは同じだ。

「いずれ、な」

璃摩に対する答は姉への答と同じもの。誰に同じことを言われても答など変わりはない。

(龍兄や義妹予定に言われても変わらないよなあ)

そうは思うが、きつとあの二人は忠告自体しないだろう。揃ってこう言うに違いない「好きにしろ」と。

元々、九曜頂ですらなかつた勇としては、姉の跡を継ぐことが乗

り気ではない。神祇院に従う気もない。姉が九曜頂となる前から、高校を卒業したらやりたいこともあった。だから国を出ることは目的には一致する。だから、まだ学生の間はこの忠告を即実行することはない。

「その気があるなら構わないよ」

「姉貴なら分かるが、なんで次女さんが？」

そんなことか、と璃摩は少しだけ目を伏せた。

「霧崎さんが死んだら悲しむ人がいるとして、多分、その人が悲しむのを嫌がるんだよ。ボクの好きな人はさ。そんだけ」

「それって」

それが誰かを聞こうとするが「りまつち、みつけたー」と雛が璃摩の背中にダイブしてきたことで、その機会はなくなった。

留学生達が帰る予定まで、あと一時間。

学院グラウンドにて、セイジは琴葉と共に、秋に呼び出されていた。

セイジは腕を組み、琴葉は腰に手を当て、秋と相對する。その様子を離れて木陰から心配そうに見つめる紫の姿があった。

「プラスマイナスゼロ、ね」

セイジは秋からの話を聞き終わって呟き、溜息を吐いた。

「他人を分析出来る人材と会えたようではあるが、そんな秋に聞く前置きはそんな言葉。続く言葉は一言。」

「お前はそれで納得したのか」

それは厳しく、冷たく、秋に突き刺さる。

人から言われた内容が正解だろうが不正解だろうが、お前はそれを信じて納得したのか、と。

（助言者は十中八九、ヒオウイン。こいつがその言葉を信じないはずがない）

セイジの予想は寸分違わず正鵠を射貫いていた。

秋が紫の言葉を信じないはずがない。紫への信頼はここ半年におけるオリヴィエへの信頼を軽く凌駕する。それくらい、一年の頃から文通している姿を見てきたからこそ、よく分かるというものだ。「俺が知るお前らと紫の推測が合致したから俺は納得した。だから！」

秋はその場で土下座して頭を下げた。

「本当にすまなかった！」

土で汚れるのも厭わず頭を地に擦りつけるその姿に、二人はしばらく無言で見下ろしていたが、やがて琴葉は吐息を一つ。

「私は許すわ。」

プラスマイナスゼロ。それは間違いなく、私の解答だもの」

土下座は予想外だったが、ガーデンの件における落としどころは秋が自らの間違いを理解して謝ること。ただその一点だった琴葉は一抜けと、秋との相対を解いて少し離れた。

（セイジも私と落としどころは同じはず。でも、違うところがあるとすれば）

ただ一点、セイジと琴葉とでは違う点がある。それは琴葉にとっては非常にむかつくことではある。

「やっと理解してくれたようで良かったよ、シュウ？」

そう言われて顔を上げた秋は、セイジを見上げて、顔を引き寄せた。目が笑ってない。

「理性的とかそういう判断をしてくれることは嬉しい。感謝する。ありがとう。」

「だがな？俺でも理性をぶち抜いてキレることもあるんだぜ？」  
もっと言うと、と付け足す。

「琴葉はプラマイゼロかもしれないが、俺は……マイナスだ。分かるよな？」

セイジの評価をマイナス割れさせた原因。それは悩んで答を引っ張り出すまでもない。

「アリ……シア……？」

「正解だ。ご名答。ほら、拍手は必要か？」

まあ、立てよと秋を引きずり立たせるセイジ。

秋は今回の謝罪で見事正解を引き当てた。

まず三人の間に漂っていた微妙な空気を払拭した。そして、琴葉の許しを得た。と同時に、セイジが理性で蓋をしていた感情部分を引っ張り出した。

つまり、怒りによるマイナス点だ。

「殴るくらいされると思っていたんだらう？」

「あ、ああ」

「喜べ、一発だけ殴ってやろう。間違いを自覚したお前は殴る価値が出た。自覚したからこそ殴られる理由、原因は理解したな？」

言いながら、左の蒼珠を右に装着し、ガントレットをオーバーガード状態で出現させる。

「仲間を護る。その判断は正しい。しかし手段を間違えた。それも正しい。ここまではプラマイゼロ。琴葉と一緒に。」

けどな？」

区切り区切り言いながら、左手を振ると秋の身体が琥珀の光によって空間に固定されて身動きが取れなくなる。

「えちよ……一発？」

「ああ。一発だとも」

右手を左肩に添えて一言。

「シフト」

「なんで殴るのに転神するんだ!？」

「貴様を殴るために決まっているだろっが」

何を言っているのか？ 真顔で答えられ「ああ、そうか」と納得しかけ「いやいやいや」とそんな自分を否定する。

そんな秋を視る。

(心臓に呪詛。これか)

話は琴葉から聞いている。

紫の煎じた魔薬によって動作は鈍く、力も弱々しいが消えずに残

っている。だが、力が弱かろうが鈍かろうが、間違いなく、杭だ。  
「アレは貴様を責めまい。ただ、責を負った心を表に出さず時間をかけて責を解す。そういう女だ。」

他者を責めない。それこそが騎士の美德と信じる馬鹿者だからな。それは違つといくら口ウが治そうとしても、そこは治らなかつた」  
だがな、と。

「アレが他者を責めなかつと、アレの心に責を負わせた貴様を俺は許さん。」

生憎、貴様の行動の結果に負傷した痕は治癒によって完治している。そこは許して、ただの一撃で済ませてやる」

握りしめたガントレットが黄金の燐光を帯びる。  
それを見て、琴葉が後ろの方で噴いた。

(シフト状態で亜神化?!)

セイジがそれをするのを、はじめての目撃となる。

琴葉は思考能力、演算能力の向上でこれを行うことはある。しかし、保つて三分程度。やった後は何も手に着かなくなる。リスクが大きすぎるのだ。

亜神化とシフトの併用については研究はほとんど進んでいないため、リスクが大きすぎる以外にはあまりよく分かっていない。

一つ言えるのは、すごい痛そう、である。痛いので済めば良いが…

「一発……一発か」

秋は観念して、歯を食いしばる。その眼前で、腰溜めに拳を構える姿がある。

一発殴つて終わり、ではなく、一撃ぶち込んで終わらせる。そんな感じの気迫を感じて、秋は目を硬くつぶつた。

そして放たれる、激怒の一撃。

ズドンッ!!!!!!

明らかにパンチでは済まない打撃音。揺れる学院。空間に繋がれて吹き飛ぶことも出来ず、心臓にオーバーガントレットの一撃をめり込ませてひしゃげる秋。

「ぐっふうっ」

繋がれている、腕が千切れる。足が千切れる。そんな感覚。否、そんな感覚ですら幻想。秋に意識はなかった。今確実に、秋は殺された。

目を開ければ左胸には肉も骨も残っていないんじゃないか、そういうレベルの一撃が貫通したのだ。

琴葉は視た。

一撃が秋の心臓から一時的に魔力を根こそぎ奪い、縫い止めるべき心を失った杭は表面化。その瞬間、撃ち抜かれ粉碎したのを。

腕を戻す時の揺さぶりで秋が心停止から回復する。ガラスの割れる音が響き、秋の身体は解放されて前のめりでグラウンドに落ちる。(なんて、でたらめ)

五年ほど出ていた間を除けば、ほとんど一緒だった幼なじみはじめて見せる激怒。そのデタラメさに、さすがの琴葉も扇子で口元を隠すのも忘れて呆然。

呪いは対象の魔力に巣くう病巣である。対象の魔力が失われた状態。対象が死ぬことで巣を失って呪いは逃げる。

セイジは呪いの巣くう先である魔力を根こそぎ、無理矢理位置をズラすことで、ハシゴを落として呪いを現出させて破壊し、ズラした魔力を即戻した。

治癒魔法を修める者の目から見ても、力業過ぎるデタラメである。ただ、呪いは破壊出来ても、物理的に与えたダメージがなかったことになるわけではない。

秋はピクピクと震え、泡を吹いて白目を向いたまま起き上がってこない。

この日、この一撃により、梧桐秋が負った怪我。胸骨肋骨粉碎、手足の筋断裂、鞭打ち。



「この世には、怒らせちゃいけない奴がいる」

後に秋は真顔でそんなことを語ったとか。

ともあれ、セイジは長く息を吐いてから秋に背を向けて、蒼珠を左に戻す。シフトも亜神化も一撃を入れた時点で解けていた。

「琴葉、治癒を頼む」

肩をすくめ、秋の傍らに膝をつき手を当てて一言。

「秋じゃなかったら死んでるわね」

これに対して、セイジは鼻を鳴らす。

「シユウじゃなかったら、殺している」

後は頼んだ、とその場を後にする。

激怒の現場が見えなくなった木陰で立ち止まる。

「辛いものを見せたか？」

相手は着物の裾をきつく握りしめた紫。紫は頭を振った。

「あの方の心が解放されるのでしたら」

実際の様子とは裏腹な言葉に「そうか」と応じる。

「あの日、君に頼みに行ったのは間違いじゃなかった」

セイジは神州へと帰る直前、京都の九曜・緋桜院を訪問し、そこで紫に秋の現状を話した上で、短期留学へと参加するよう依頼したのだ。つまり、この留学での出会いが初見ではないということになる。

「ガーデンの一件がなければ、話はもつと簡単だったかもしれないがな……」

しかし、それはただの不運でしかない。言っても仕方がない問題だ。

「九曜頂・日崎様があの日いらっしやり、今回の留学にお誘いしてくださったことには、とても感謝しているのです。この留学がなければ、私はまた、いつ秋様にお会い出来るか分かりませんでしたから」

「ふむ。初見では、シユウには過ぎた相手と思ったものだが、いや、よく似合った相手だと考え直される」

梧桐秋という存在をサポートする存在としては、緋桜院紫はお似合いだと評する。評された方は口元を裾で隠し目を笑みに細めた。家柄で不釣り合いだと言われることが多いだけに、個人を見て似合いと言われるのは素直にうれしい紫であった。

マラザイアンへの橋で、朱翠はラフィルと二人で、ロンドンまで列車の個室を共にする旅の道連れを待っていた。手には修理が終わった翠鳳の姿がある。

そこに真咲を連れたセイジがやってくる。

「今回のドイツ行きは例外としてクエスト扱いにしてもらえるようになったから、単位は気にしないでいい。いや、ラフィル、そんな目を輝かせたところで戦技の単位は増えないぞ」

突っ込まれたシヨンポリと羽が下がった。

「で、ロンドンの……えと、シユスイが最初にいた治癒魔法研究所な。君らはおそこに向かうように。ノイエまで輸送してくれる足が待っているはずだ」

「足ですか？」

「シンカイの運び屋だ。彼ら……まあ、奇っ怪な連中だから見ればすぐ分かるだろ」

ラフィルに答えてから「で」と真咲を示す。

「シンカイと一緒に待っている人がいるから、彼女をその人へと頼む。目印は腰にぶら下げた大きな十字架だ」

「アポストル」

「元、な。まあ、向こうはシユスイの父親を知っているから、向こうが気づくだろ」

朱翠の頷きを待ってたラフィルが「では、行きましょう」と羽を動かした。

「さっき渡した紹介状はちゃんと渡せ」

「テイラー・ホーキンスさん、ですね？」

「そうだ。十字架を持ってはいるが、およそ聖職者には見えない人だから、まあ、初見でびびるなよ？」

「どんな人なのか。真咲のみならず、朱翠とラフィルまで想像してしまう。」

「では」

「ああ」

挨拶はただそれだけの短いやりとり。

三人が橋を渡りきり角を曲がるのを確認してから、セイジは船着き場に向かう。そこでは留学生達が外遊船に乗り込んでいるはずだからだ。

船着き場では、ちょうど凜が祖父に挨拶を終えたところだった。

蔵人と弓弦は既に外遊船に乗り込んでいるようだ。

「九曜頂」

修理された雀艶を背に担いだ夏紀が近寄ってくる。

「二週間、よくがんばったな」

セイジの労いを受け、目の前で止まる。

「自分は九曜頂の望むレベルになりましたか？」

その問いに、フツと口の端を歪ませる。

「まだだな」

否定されて肩を落とす夏紀。そんな夏紀の膝を後ろから蹴って「まだだつてよー」と雛が笑った。

「仲良いな、本当に」

「まあ、幼なじみだからねえ」

「それだけか？」

「そ、それだけに決まってるじゃん!？」

「そういうことにしておこう」

くくく、と喉を鳴らすセイジにムキーと憤慨する雛。その雛の頭をポンポンと撫でる。

「総合的に見ればまだまだだが、キリュウは戦技、ミズシロは魔法でそれぞれに良い感じ、つまり、二人合わせれば一人前だ」

「二人前じゃないのかあ」

「そうなりたければ、帰っても精進しろ。船の中でも魔力制御は出来るからな」

「それはもう、もちのろんっすよ！」

えへへ、と笑む雛から視線を上げて夏紀を正面から見つめる。

「シユスイと相打ちが出来てくくらいになったなら、おそらく、神州で相手になる奴はあまりいないだろうが、カトウとなら……」

「嘉藤は確かに強いですね。不気味な刀を持っていることには驚きました、ああいうのを制御出来るというのはすごいことだと」

「彼はもっと強くなる。シユスイとの一戦は武器の差に過ぎないからな。」

だから、カトウとは仮想シユスイとして訓練が出来るはずだ。向こうとしてもキリュウは良き相手となるだろう」

「精進します」

「それと、なにやらレンの奴がその槍を強化したいと言っていたが、雀艶を指して言う。これには夏紀も頷いた。」

「おっしやってましたね」

「既にどこか弄られている可能性もあるが……」

「あ。それでしたらこれかと」

穂先のカバーを外し、セイジに見せる。

マテリアルをはめ込む台座部分が見覚えのある姿になっていた。

「これは……スイオウ……いや、マテリアルハンドの？ ということは」

雀艶を借りて柄を調べるが、こっちは”まだ”弄られていなかった。

「あいつ、何か言ってたか？」

「魔匠御影の開発部門に槍を持っていくように、と。雀艶は元々、御影製ですから修理のためかと思ったのですが」

「何かあるな。」

とりあえずコレはな、スペルではなくテックの分野のまだ試作段階なんだが、魔鋺の制御と同様に使用するんだ。集中すべき箇所は台座部分だから間違えるな」

「台座が魔構なのですか？」

「そういうことだ。慣れれば、半永久的にマテリアルの補充がいらなくなる。というコンセプトで生み出された代物だ」

「そうだな、と付け足す。」

「まずはこれを使いこなすことを目指せ。課程でどうしても行き詰まったら、いつでも俺に連絡をしろ。セツナでもいい」

携帯の番号を交換し、最後に「まあ、よくやった」と二人を船へと送った。

セイジが分家の二人と話している頃、大量に食料の入ったリュックを担いだ卓郎を船に押し込めた進は、棧橋に来ていたミイルの前へと戻ってきた。

「あの設計図さ。結局、二週間じゃ完成しなかったけどさ」  
拳をミイルの前に突き出し

「いつか絶対、完成させようぜ！」

そう言っつて、滅茶苦茶楽しそうに笑った。

ミイルはその笑顔に息を飲み、少し泣きそうになったが、堪え、自分も拳を突き出して進の拳を小突く。

「絶対だね！」

そう言っつて、自分も思いつきり楽しそうに笑った。

この約束が果たされるのは、まだしばらく後の話になる。

真咲の代わりに紫の荷物を持った勇は乗船する途中で、セイジと目を合わせ会釈を交わす。挨拶はそれだけ、もう、十分に話した。

それが互いに思うこと。

そんな勇の首には金鎖が見え隠れする。

セイジからもたらされた指輪は今、勇の胸元でペンダントとして揺れていた。

勇の姿が船の中に消える頃、秋を乗せた車椅子を押し、琴葉がやってくる。

(なんで車椅子?)

それがグラウンドの一件を知らない面々が思ったこと。

半日見なかっただけで、結構なボロボロ具合である。

紫との間に何かあったのかと考える者もいるが、紫に他人を怪我させることが出来るとも思えないとその考えは即否定される。

そもそもこの後に展開したものを、不仲説など吹っ飛んだ。

紫から秋に口づけをしたのだ。

それは、立派な成人女性である凜でさえも赤面するほど長い口づけだった。

琴葉は二人から目を反らし、反らした先でセイジと目が合う。

肩をすくめてみせれば、しょうがないという風にセイジは小さく笑みを作り、その笑みに琴葉はそっぽを向く。やや、頬が赤い。

どちらからともなく身を離すと、紫は幸せそうに笑って「今度は秋様が逢いに来てください」と言い、秋も照れくさそうに笑って「当たり前だろ」と応じた。

別れの挨拶はない。

紫が乗船し、最後に凜が続くと第一回短期留学(仮)の人員は日下真咲を除いて全員が乗船したことになり、臨海学校は終了である。船はミスロジカル魔導学院を離れ南南西に向かって進んでいく。船を見送っていたセイジは、船とつかず離れずの位置を進む存在に気がつく。

魔女から船を護衛するよう指示を受けた存在である。その話は聞

いていた。

（まあ、来る時と違って、船にいるのは鴨ではない。よほどのことがなければ護衛も出る幕はないだろ）

正直なところ、彼らの成長には目を見張るものがあつた。その実力は今の神州に波紋をもたらずだろ。小石ではなく大岩の一投を。

「楽しそうね」

「まあな」

自然笑っていたらしい、琴葉に聞かれ素直に認める。

「さて、明日から暇になるな」

工房にでも籠もるか、と踵を返すセイジ。

後に続こうとした琴葉に

「どうでもいいが、放置しないでくれ。海に落ちそうだ」

秋の弱気な声がかかり、琴葉はやれやれと肩をすくめて車椅子の背後に戻るのであつた。

短期留学生を乗せた船が赤道にさしかかった頃の神州 和歌山  
県某所において、璃央は人気のしない旧家屋敷の居間に立って呆然  
としていた。

表札は『日下』。

「駄目ですね。両親だけでなく、お側衆の姿もありません」

真咲をそのまま大人にしたような凛々しい女性、烈士隊海軍所属  
の日下咲良中尉は頭を振って戻ってきた。

近江の魔構研究所では、日下遊馬と会いはした。遊馬の姿をした  
まったくの別物にだ。人ではなかった。人を模した下級天使が遊馬  
のフリをしていたのだ。

次いで日下家に来てみれば、一族郎党の存在が確認されない。

真咲は京都天原学園の学生寮に住んでいたため、実家の様子などは知らないだろう。

「自分も実家にはあまり帰省しないのですが、これは一体……」  
呼び出されてみれば実家を調査するという九曜頂の言葉に従って、現状を目の当たりにしたのだ。混乱してもしようがない。

「中尉が長男の日下遊馬と最後に会ったのはいつですか？」  
問われ、一個上の兄を思い出す。

「昨年の初夏に……ええ、六月に真咲も含めた三人で」  
「変わったことは？」

「兄は元々変人ではありましたが」  
「そこまで言って「あ」と漏らす。」

「装飾品を身につけない兄が銀の十字架を手首に巻いていました。新しい趣味と言っていましたか」

おそらく、その時には既に、日下遊馬は変質していたと見るべきか。

「まだ他に探すと言う咲良と別れ、専用リムジンの中で璃央は思考に沈む。」

（彼はある程度予想して真咲を帰さなかった？）

天津神に対してなんの遠慮も持たない存在

（甕星は私達のような天津神相手には何の遠慮もしない。それは確か。でも……）

何かのヒントにも聞こえる。

日下遊馬は、九曜・天宮の分家だろうと関係なく別の場所へと行った。別の場所とは自分達以外の膝元だ。遊馬の件は別方向から考えれば、自分達以外に持っていたいかれたようなものとも言える。

真咲はちょうど、セイジの言う通り、自分達に遠慮のない相手に持っていたいかれたのだ。遊馬もまた同じだ。

（他にもいる？）



九曜本家だけではない。神祇院の目も行き届いていない場所で、知らず知らずヘッドハントされている可能性を推測する。

九曜の関係者が他に行けば、古来より代々受け継がれてきた知識の漏洩にも繋がる。早急にも他の九曜と共に調べる必要があるのだが、問題は、どこと連携を図るかである。

日崎、神薙、霧崎、緋桜院はそれぞれ頂がない。

かといって、あの倉庫の一件以来、天宮を警戒する長男を有する不破は外す。

残った鎚木、久我、祠上の内、久我は先日、頂がどこかに旅行したと聞いて以来会っていない。祠上ははっきりいつて何を考えているのか分からない。

(やはり鎚木しかない)

鎚木弦遊。九曜頂・鎚木である老人だ。大戦前は政財界の黒幕とまで言われた人物である。

あまり気は進まないが、他に手もない。

東京に戻り次第、鎚木家にアポを取ることにした璃央であった。

その一室は一切の日差しが入ることがない。灯りはランプのみ。多種多様な薬草が整理整頓されているが、魔導書の類は床に塔を作っている。

そんな部屋で、部屋の主はゴリゴリと薬草を煎じている最中であつた。

主こと神薙琴葉は、現在、巨獣対策に追われる神族仲間からの依頼である魔薬調合の真つ最中であつた。ウサギ柄のパジャマ姿で。

神州からの短期留学生在が帰って一週間ほど、ここで魔薬を煎じるか工房内に簡易で作つた寝床を往復するだけの毎日である。

また一つ魔薬を完成させて、最後のメモに目を通す。読み切つて、吐息。

「足りないわね」

さして困つた感じもなく、そう口にする。困つてはいないが、すごいだるそうではある。

ゆらりと立ち上がり、外へ向かおうとして自分を見下ろす。パジャマである。

面倒臭そうに、私服へと着替えだした。

「で、指名クエストが来たと思つたら、依頼主がコト八だったと呼び出されたセイジは制服姿で談話室のソファに深々と座る。黒チャイナの琴葉はキョロキョロと見回す。

「秋は？」

「トージ？」

「ああ、湯治ね」

数日前、秋はギリシア・リトホロにあるという通称『回復の泉』へと湯治に出掛けている。

「全快したのではなくて？」

亜神化させられた状態で琴葉の魔薬を盛られ続け三日で骨も筋も繋がったわけだが、さすがに一度、瞬間とはいえ殺されただけあって体調が戻らなかった。

そこでネット上で噂になっていたオリュンポス山麓に湧く、いかなる病人も快癒するという泉に浸かりに行ったのである。

「リトコロンの豪華ホテル。しかもスイートで現在三泊目だったか」「そういう話が出てくると、秋がボンボンということが分かってしまつてむかつくわね」

揃つて溜息。

「クエストのことだけれど、毒がほしいのよ」

セイジは無言で床を蹴つてソファアを後ろにズラした。

「あらあら、どうして遠ざかったのかしら？ 今のはさすがの私も傷ついてしまつわ」

「コトハが毒とか言い出すとろくなことにはならないと、俺の直感が教えているんだ」

「ろくなことにならないとはまた……覚えはないわね」

「俺はお前の毒入り魔薬を飲んだおかげで、神州ではえらい目にあつたんだが」

「星司が大変だっただけで、私が大変だつたわけではないわね」

「ひど過ぎる」

「元はと言えば、あれは秋が言い出した『眼鏡執事の魅力について語れ』に始まり、じゃあ眼鏡執事を実践しようとかくだらないことをレンが言い出した拳げ句、くじ引きであなたが敗北したのが悪いのではなくて？」

自分は悪くない、と腕を組み胸を張つて断言する琴葉。

「俺は人が少ないからと巻き込まれただけなんだが」

「くじを引いた時点で共犯よ」

で、と話を続ける。

「アスガルドの方で入り用なのよ」

「……ああ」

アスガルドの名前が出て合点がいく。

「例の巨獣退治か」

北欧神族出身の超越者が多く所属する組織アスガルドが中心となつて、ノイエ・シユタールに集まった戦力への援助をしている。

琴葉は学院を卒業後アスガルドへと進路が決まっていた、つまるところ、セイジが就職先とギブアンドテイクな関係を築いているのと同じことをしている。

大方、巨獣対策の魔薬製作を依頼されているのだろう。

「それで、なんの毒がほしいんだ？ 採ってこいという依頼なんだろう？」

「採取には私も行くわ。物はヒュドラの毒ね」

「ヒュドラときたか」

ヒュドラの毒は、不死者がその苦しみから逃れるために不死を手放したと伝えられるほど強力な毒である。

幸い、ヘラクレスの功業によって倒し方は判明してはいる。

「あなたの知り合いにヒュドラはいないのかしら？」

「あつちで蛇系の知り合いはゴルゴーンの三女さんくらいしか……」

「三……女？ 星司、あなた、そこかしこに女性の知り合いがいるようね？」

また別の女か、この野郎と琴葉の視線がきつくなるが、セイジはそれには気づかない。

「ヒュドラそのものを何とかする方法より、メディア姐さんにそこから辺譲ってもらった方がいいんじゃないか？ 余っていたら、の話ではあるが」

「そうね。まずはそちらを訪ねようかとも思っていたから、あなたが間に入って取り持ってくれる？」

「別に構わないぞ」

「それで」

準備をしようと立ち上がったセイジを呼び止める琴葉。

「オリュンポスではどれだけの数の女性を泣かしたのかしら？」  
セイジは無言で琴葉を見下ろし、質問を反芻してから「はあ？」  
と聞き返した。

石造りの町を学院の制服姿でセイジと琴葉が並んで歩く。  
北エーゲ海の島サモトラキ。その南西に位置する小さな港町に二  
人はいた。

動きやすい服にしるということでは制服を着てきたのだが、同じよ  
うな年頃で学生服など着ている少年少女など見かけず、目立つ要因  
となっている。最大の要因は、二人の容姿にあるのだが。

「ギリシアなんて、はじめて来るわね」

「ロウとトルコ行った時は結局ギリシアには寄らなかつたからなあ。  
実際にこつちに来たのは十年ぶりくらいだ」

「キプロス生まれだつたかしら？」

「生まれはな。暮らしていたのはオリュンポスだ」

幼少の半神が生きていくには、現代の町は少々魔力が希薄である。  
力を身につけるためにも神域で暮らすことが多い。

ミスロジカル魔導学院は土地柄、神域や聖域に近い存在でもある  
ため、親の神域に行けない半神が預けられることがある。それが琴  
葉の場合である。

郊外にその屋敷はあつた。

大理石の屋敷で、豪邸の一步手前くらいには広い。

「でかくなつてるな」

「魔女、なのよね？ 生み出す魔薬によつてはこれくらい不思議で  
はないわね」

マテリアルよりもある意味儲かる、と琴葉は言う。

「知識も売れるしな」

魔女の知恵を借りることは珍しくはない。その魔女が、かのコル  
キスの魔女メディアであれば、その知恵を借りる者も多いというも

のだ。

ドアベルを鳴らして出てきた使用人に名前と用件を伝え、待たされること五分程度。

屋敷に通され案内された先に、その女性はいた。

薄紫のワンピース姿の女性は二人の姿を視界に入れると目を細めた。

「久しぶりだ、メディア姐さん」

「ええ。本当に久しぶりね、小アステール。

まさか、あの小さな子がこんなに可愛らしいお嫁さんを連れてくるなんてね」

ぶふっ、とセイジと琴葉が噴いた。

「えちよ、違うぞ？ コレは幼なじみの一人でだな」

「そ、そうよ。コレとはただの幼なじみであって、そんな関係じゃ」

「……コレとか言うな」

言い訳した後、互いに言ったコレ発言をハモって突っ込む。

メディアは口元に手を当てて「プクク」と笑う。

「極東の悪神と北欧の魔法神のリンカーが、ずいぶん楽しい反応をするものね」

冗談、というか、なんかはめられた感がある。

(性悪め)

それが二人の抱いた感想である。

メディアは二十代前半に見える金髪翠眼の女性だ。外見的特徴は、セイジの幼少の記憶にあるものと変わってはいない。

降臨者、ライナーと呼ばれる存在である。

ギリシア一帯出身の超越者はその多くが大戦直後辺りに降臨している。セイジの母やメディアもその一部だ。

「ヒュドラの毒ということだったわね？」

「こっちはミスロジカルの林檎一個だったな」

セイジは内ポケットから林檎を取り出しテーブルに置く。

対して、メディアは十センチ四方の壺を置いた。

「足りる？」

壺の中身を確認した琴葉は頭を振った。

「この量だと半分くらいかしらね」

在庫がないらしい。

半分でも手に入ったのだから、また後日もう半分ということにして、と考えていると。

「急ぎというのなら、手がないわけでもないわ」

とメディアが言う。

エレフシナ郊外の泉跡にヒュドラが住み着いてから、ギリシア各地で湧き出ているという万病を払う泉が枯渇するようになったという。

「それは例の回復の泉かしら？」

「シユウが現在お世話になってるアレだよなあ。そうか枯渇か」

揃って携帯を取り出して……セイジが「お？」と声を漏らす。メールが来ていた。

「【俺の番になって水が涸れた。なんでだorz】だってよ」

「どこまでもついていない奴ね」

かけようとしたらしい琴葉は携帯を引っ込めて苦笑した。

「エレフシナに源泉があると送れば来るんじゃないか？」

「地形的にそんなのあるか！ って拒絶されるのではなくて？」

「霊的な存在に源泉を求めろな、で」

「それならイケルかもしれないわね」

メールを打ち始めたセイジ達を眺めていたメディアはちよつと引いた。

「確かにあの手のものの源泉なんてどんなルート通ってるか知れば笑えるものだけど、なんかあんた達……黒くない？」

「そんなことあるわけじゃないか。いやだなあ」

爽やかな笑顔でアハハハと応えるセイジ。

「これは早く体調を戻してほしいという、パートナー達からの愛に溢れた情報よ」

真顔で「情報よ（キリツ）」と琴葉にされて「そ、そう」と問いを引つ込めるメディア。

メールを送信し終わったセイジは、ふとエレフシナという名が引つかかる。

「なあ。エレフシナってのは『神化の法』のか？」

「ええ、そのエレフシナよ。古くはエレウシスだけどね」

エレウシスの秘儀。デメテルの祭儀とも言われ「人を現世を超えて神性へと到らせ、業の贖いを保証し、その人を神と成し、その人の不死を確かなものとなす（by・M・P・ニルソン）」とされる。

「デメーテルの娘奪還作戦を儀式的に再現することで、冥神の妻のような不死性を得ることを目的にしている。だったか」

「ちゃんと覚えているものねえ」

セイジの説明にメディアはコロコロと笑って、セイジの頭を撫でた。

「そ、そりゃ、まあな。先生前にして間違えられないだろ」

撫でられるままに、セイジにしては珍しい顔を赤くして照れた反応である。そんな幼なじみにそれはもう冷たい視線を送る琴葉の姿があった。



## HydraSlayer | 2

エレフシナでデメーテル神殿跡を眺められるオープンカフェの一角で、セイジと琴葉は軽く食事をし今は食後のお茶を楽しんでいる最中であつた。

「コトハもハーブティーやってみればいいじゃないか。魔薬茶ではなく」

「変な名前を付けないでちょうだい。飲んで疲れが飛びやすくしてあるのだから」

「たまに意識飛ぶけどな」

一ミリリットルでも多く飲んだらアウトな魔薬の実験台にされたセイジは、出来るだけ危険の及ばない方向に話を流したいセイジである。

「それはそれとして、ヒュドラ、実はかなり危険なんじゃないかしら」

「俺もそう思う。やばい予感しかしない」

ヒュドラの倒し方。

ヒュドラは九つある首の一つが不死で他の首は切り落とすと二つに分裂して生えてくる。首の増殖を止めるには切り口を燃やすしかない。首が一つになった時点で身動きが取れないようにする。結局は殺害には至らず、一時封印することで排除するのだ。

また、ヒュドラは常に毒の霧を吐き出しているため、倒す側は口を何かで覆うなどして毒霧に備えなくてはならない。

「倒し方は変わらないんだろうが、いる場所というのが例の泉の源泉だろう？」

ここにそれがあるということは、エレウシスの秘儀が無関係とはまず思えない。泉は秘儀の影響を強く受けているのだから」

「効果を考えると不死性……というより、飲む者に頑健さを与える泉かしらね。」

そんな泉に陣取っていると、増殖やら酷いことになりそうね。ただでさえ、蛇、ですものね」

”蛇”を強調する琴葉。

蛇系の幻獣は不死性が強い。簡単に言えば、並大抵の攻撃では死なない。元々頑丈な存在である。それが常に傷の治る場所に居続けるとすれば、ちよつと洒落になつていない。最悪、不死ではない首まで不死の可能性さえ出てくる。

「考えてみれば、俺らで火の源理を使う奴はいないんだよな。かの英雄のように松明でがんばるか？」

「純度マテリアルは？」

「毒霧の中でマテリアルに集中出来る自信がない。毒の範囲外から出来ればいいんだが」

赤光で刻んだ壁のことを言う。

あれなら切断と炎上が同時に発生する。問題は、壁が到達するまでにそこに切断ポイントがあるかどうか。距離と対象の早さによって、この手段は使えなくなる。

相談中の二人の席に白鷺が舞い降りる。セイジは鷺がくわえていた紙片を受け取った。

アテネにあるギリシア全域のクエスト統括ギルドに、今回の件についての情報開示を求めていた。その結果だろう。

鷺は猫に変わって琴葉の膝に乗った。

「あー……」

溜息混じりに、もう、なんと言つていいものか、とセイジは声を漏らす。

クエスト登録されたのは昨日のことだが、登録者がオリュンポスの代理人で報酬がかなりの額だったようで、もう何組かの賞金稼ぎが請け負っている。が、相当な死者を出していて、詳細も入っていない。

情報を得るためには近づかなくてはならない。必要な距離が毒霧の範囲内でどうしようもない。



「いたたたたた。僕の美しい耳が!? 頬だけじゃなく、耳まで奪おうというのかい?!」

「頬も耳もいらねえよ! 後ろから抱きつくのはやめると何度言えば」

「じゃあ前から」

「前も横も駄目だ!」

右耳まで掴んでギャーギャー騒ぐイケメン二人。

琴葉はおずおずと手を挙げる。

「そちらは誰なのかしら?」

聞かれて、青年はセイジの拷問から逃れると胸に手を当てた。なんか青年の周囲に金色の光が立ち上る。

「シオンです」

「エロスだ」

名乗った直後にセイジが青年の真名をバラし、青年は「早いよ?!」と額に手を当てた。しかし回復は早い。

「この子の兄です」

”エロス”という名と”兄”に、琴葉は思い至る。

「そうね。親がライナーだと、そういう特典がついてくるものなのよね」

「理解が早くて助かる」

アフロディーテとアールズの子、エロス。

アフロディーテであり、ヴィーナスであり、ウエヌスであるかの女神は、セイジとセツナの母親でもあるアウレア・フェリクスの本来的姿であり名前だ。

アフロディーテの子であるということとは、セイジ達の兄ということになる。

シオンとはパスシオンというエロスの別名から名乗っているのだらう。

「そのお兄様が何故こちらに?」

琴葉の疑問にはセイジが応じる。

「ギルドへの依頼をしたオリュンポス代理人だから、退治の様子を見物しにきたんだろ」

「僕の行動を正しく理解するとは、これはもう……愛だね!？」

「ちっがーう!」

セイジの右手をガシツと掴むシオン。掴んで「ん?」と右手に視線を落とすが、すぐに弟に振り払われて「ああ」と残念そうな声を出した。

「スキンシップはこれにくらいにして」

「そう言うならまず俺の足を蹴ってくるのをやめろ。足もぐぞ、この野郎」

「照・れ・屋・さ・ん」

「鉛の矢は、今まさにあんたのためにあると思うんだ。滅多刺しにして二度と愛を語れなくしてやろうか」

ああん? と睨むセイジをシオンは笑って流す。

「君達はイギリスからわざわざクエストを受けに来たのかい? 勤勉だねえ」

「違う。メディアの姐さんからの依頼だ」

「おや、コルキスの魔女さんか。というと、目的は毒かな?」

「こいつの入り用なんだよ」

そう言って琴葉を指す。

「ギルドからの受諾じゃないから、報酬はいらん。いらんよなあ?」  
「ええ、必要ないわね」

琴葉はセイジの案に頷く。

というより、ギルドのクエストなど学生が受けられるものではない。報酬に目をくまませば碌なことにはならない。

かつて、どこかの学生がギルドのクエストに手を出して、クリアしたのはいいものの、同じクエストに参加していた賞金稼ぎの逆恨みを買って学校ごと攻撃の対象になった、という事件があった。

「学校に迷惑をかけるわけにもいかないしな」

「星司にしては殊勝だけれど、それには同意ね」

「お前は一言多い……あ」

ガタツと立ち上がるセイジ。視線の先には、見慣れた制服姿が対岸の歩道をちよつど横切っている場面であった。

「悪い。ちよつと外す」

そう言つて席を離れる。

シオンと二人にされて会話に困る琴葉。そんな彼女に「ねえ、君？」と話しかけるシオン。

「あの子はひよつとして、クアジイとシフトを併用したのかい？  
それも最近」

「え？」

予想だにしていな質問だった。

「右手だけとか、ずいぶん器用なことをやったようだけど  
そう言つてから肩をすくめて吐息。」

「まいつたなあ」

「あの、こちらでは半神化と神化の併用について詳細が？  
これは聞いておいても損のないことだ。」

困るということは、弊害が何かしら判明でもしているに違いない。  
「うん？ うん。他の事例は知らないけど、アステールは小さい  
時に一度やつてそれなりに酷い目にあつてはるはずなんだよねえ」

セイジ専門の詳細だったようだ。

「まあ、その酷い目の記憶が飛んじゃつてるから、これくらい酷い  
んだよくらいのことを思い知らされたから、自分じゃまずやらない  
はずだし……」

「先日のアレは無意識だったはずよ？」

ええ、そりゃもう、無意識に亜神化してしまうくらいの激情だつ  
たわ」

妹弟子が傷ついたことを怒っただけなら、愛神の息子が亜神化を  
無意識でも発動させるようなことにはならない。

「まあ、愛には色々あるから、疑似家族愛とでも言えばいいのかし  
らね」

(絶対にあれば、家族愛とかそんな清々しいものではないと思うのよねえ)

「なにかしら？」

シオンが自分を温かい眼差しで見つめていることに気づく。

「君みたいな美しい人に愛されて、あの子も幸せ者だねえ」

「愛していないわよ！」

ダンッ！ と机を叩き、顔を真っ赤にして立ち上がる琴葉。周囲のテーブルで他の客がビクツと震えた。

周囲の空気に気まずくなって、いそいそと座り直す。

ムスツと膨れてシオンから顔を背けて頬杖をつく。

「幼なじみってだけでそっちに結ばうとする輩が多すぎて、本当に困ったものだわ」

ブンブンと怒る様子をシオンは微笑ましいと思ってしまう。

そこによくやく秋を連れたセイジが戻ってきた。

「やはりシユウだった……コトハ？」

「あんだ、コトハに何をやったんだ」

「ちょ、どっだけ僕は信用ないんだい？」

「口説こうとして失敗したんだろ？」

弟の反応に兄はやれやれと肩をすくめる。

「さすがの僕も可愛い弟の恋人を会ったその場で口説くわけないじゃないか」

「「幼なじみだ！」」

セイジと琴葉から突っ込まれる。同時に、ハモリで。

「突っ込むなら」会ったその場で”だと思っただけだな”

よく話の分かっていない秋が冷静に指摘した。

テーブルを四人が囲む。一匹は変わらず琴葉の膝で丸くなってい

る。

「はあん、あんたがエロスの降臨か。エロスって言ったたら、もつとこお」

秋は弓矢を持った天使のような子供のイメージを口にする。それが世間一般でのイメージである。恋の天使キューピット「エロス。

「いやいや、それは恋愛を甘酸っぱいものに考えた人々の勝手な妄想だよ。」

大体さ、小天使の姿だったら女の子と×××でき痛っ?！」

左に座っていたセイジの拳がシオンの左頬に突き刺さった。

「人間の姿して下界してきてんなら自重しろよ、性愛の神様」

「て、手厳しい。アステールは愛神の息子として、もつと愛を振りまいてもいいんじゃないかなと」

「あんたと一緒にするな」

セイジの言葉にはまったく遠慮がない。ただ、弟に無碍にあしらわれているのをこの兄は楽しんでるようにも見える。

「しかし、ほぼ無敵状態のヒュドラ退治とかさ、そんなクエスト登録して、ここに集まってきてる賞金稼ぎってのはそんなにレベル高いもんなのか？ 良くて、うちの十四期生レベルって感じしかなかったんだけどな」

リトコロンからエレフシナまでの路線で、今回のヒュドラ退治に向かおうという賞金稼ぎを結構の数見てきたらしい秋は、賞金稼ぎの腕に疑問を持つ。

「大方、報酬に群がる人間の愚かさを肴にしようという考えもあるんだろ」

セイジの言葉にシオンは左手を目の前にかざし、人差し指と親指でちょびつと隙間を空けてみせる。

「あるのかよ！」

セイジと秋が仲良く突っ込んだ。

「現代の人間の實力からすれば、単騎でなくとも倒せれば天に上げても良いという声も拳がるような相手ではあるね」



「ちょっと待て。」

単騎で倒したヘラクレスと同じ扱いを集団の賞金稼ぎ相手にやる  
つてのは、それだけやばい相手なのか？」

「アステールは鋭いねえ。ハグしていい？」

「キオーンでも抱いてる……？」

受け流そうとしたところで、地が揺れる。

揺れは震度2くらいだろうか。

「地震か」

「いや、ちょっと待てよ？」

地震と片付けようとしたセイジに待ったをかける秋。

「これ……地響きじゃねえ？」

「分かるのか？」

「身に覚えがあるというか、似てるというか、二度と感したくはない  
揺れではある」

「また、曖昧な」

「ヒュドラって、大ききどんなもん？」

「犬くらいが普通だが……？ まさか、ヒュドラが起こした地響き  
とか言っんじゃないだろうか」

大群で移動でもしないかぎり、地響きなど発生しないだろう。

「その身に覚えというのは、いつの話かしら？」

「”前”だ」

琴葉の問いに即答。

「名前を無くす前？」

「前だな」

シオンがキョトンとして「名前を無くす？」と思わず聞く。

「俺も転生者だけど、訳あって公式上は存在していない存在なんだ  
わ」

名前がない。故に”無銘”だと。

「常々思っんだが」

セイジは苦笑混じりで口にする。

「別に名乗っても問題ないと思うけどな。名乗るのは自由だ」

「そうは言っけどな」

「お前が名乗らないことで神剣も名を呼ばれず出力を落としている」  
名は力だ。

すべての存在は、名があつてこそ現界し力を周囲に見せつける。

その理は人間よりも、超越者こそが最も自覚するものである。

「全力を出せなければ、いつか、お前が一番護りたい者を殺すぞ。

シユウの場合は、彼女か」

「分かつちやいるんだけどな。こればかりはなあ」

これまで名を必要とするほどの相手に出会つたことがないだけに、あまり深く考えてこなかつた問題である。

秋は配膳されたシロップ漬けのカスタードパイを食べる手を止め

……。

グラグラグラッ………

さっきのよりも大きな地震だ。

セイジが座つたまま、頭上に手を伸ばし一線刻んで壁を引っ張り出してオープンカフェ全体の上を覆う。

壁の上に他の建物のガラスの破片やコンクリートの破片などが降り注ぐ。

壁の存在にシオンは目をパチクリとさせてから、久しぶりに出会つた弟に目を向けた。

今の地震の原因がどこで起こつたものなのか、これにはさすがにセイジと琴葉も気がつく。デメーテル神殿跡の裏。山に面する方向で土煙が上がっていたからだ。

「なるほど、地響きね」

「あんなに高い土煙が上がるといふと、どれだけデカイものが……」  
ヒュドラの情報を引き出そうと兄に顔向ければ、ちょうどセイジを見つめていたシオンと目が合う。

「な、なんだよ？」

「アステール、魔法使えるようになったのかい？ それとも構想魔法の一種とか」

言っている内容が上に出した壁のことであることにはすぐ気づく。

「いや天幻。それでヒュドラのことだけだな」

「天幻……天定の幻想魔法だった？！」

解答を得た側は驚きのあまり硬直。

「ギルドからの情報じゃ大きさまでは……おい、聞いているか？ しよ  
うがないな」

「天幻のことを知れば大抵の人は同じ反応をすると思うのだけれど」  
「と言つてもな」

まいったな、と眉尻を下げるセイジ。

「てか、代理人がギルドに伝えた以上の情報をくれるわけないだろ」  
珍しく冷静な秋の指摘に、セイジは頷く。

「それもそうだな。見にいって対策を立てることにするか」

セイジの言葉を受けて、秋はパイの残りを平らげる。

支払いを済ませ、シオンを放置して、三人と一匹はいましたがた土  
煙の上があった方へと歩いていった。

かつての観光地であるデメーテル神殿跡は、デメーテルの意向に  
よる再建築の最中であつたのだが、見事に倒壊していた。

原因の方には人だからと運び出されてくる多くの負傷者達。先の  
地響きは賞金稼ぎ達が挑んだ結果のものだったようだ。

神殿跡一带にいる人々はすこぶる元気である。

ヒュドラの毒はここには到達していないか、毒が神殿跡に入れな  
いか。どちらにしても、ここでなら毒を気にせず情報も集められそ  
うだ。

「あれじゃないかしら？」

琴葉が一点を指差した。

ずっと山かと思っていたものだった。

「ははは、伝承と全然違うな。大きすぎだろ」

セイジは乾いた笑いを出した。

「情報と全然違うじゃねえか」

秋は口を開けて黒い小山を見上げ、学院からロンパイアを取り寄せることを真剣に考え始める。それまでは、アテネに戻って鉄剣でも買った来ればいいかと考えていた秋であった。

運び出されている賞金稼ぎの数は二十人程度。その数では足りないということか。

セイジはとりあえずヒュドラの首の太さを確認するため人混みの間を縫って、前へと進み、今まさに長い首を引っ込めようと動いたヒュドラの姿を目撃する。

首の数は九本。多くの犠牲を出して尚増えていない。誰も、一本たりとも落としていないということだ。肝心の太さは目算で直径五メートルほどだろうか。

ヒュドラの周囲に如何にも毒々しい霧がかかっている。あれが毒だろうか。

「うーん。太いな……」

さすがのセイジも唸る。

正直なところ、人の手に余ると素直に思ってしまう。

地には賞金稼ぎ達が使用していたらしい武器の数々が落ちている。魔構然り、鉄剣然り。どれもあの首を落とせそうな物はない。

周囲では賞金稼ぎの生き残りがもつと数を揃えろとか叫んでいるが、数を揃えようが装備をどうにかしろと言いたい。

琴葉と秋の下に戻って確認した詳細を伝える。

「毒は秋が風で散らす。この方法で対処出来るのではなくて？」

「そりゃ可能だが、周囲への被害は甚大だろ」

琴葉の案への秋の解答。周囲への被害は確かに甚大だろう。毒のみならず、あんな巨大な物を本格的に狩ろうとするなら、暴れ回った時のことを考えるべきではある。少なくとも、オープンカフェで

感じたような揺れでは済まないはずである。

「がんばって第一本落として毒を回収して逃げるか？」

「お前らはそれでいいかもしれないが、俺が」

「そういえばそうか」

セイジと琴葉の目的は毒だが、秋の目的はヒュドラの排除である。相談のためにこの場を離れる。賞金稼ぎの目が邪魔だった。

オープンカフェまで戻ればシオンの姿は既になく、とりあえず展開しておいた壁を撤去しておく。注目を浴びていたからだ。

色々入り用でもあるため、市バスでアテネに至る。

どのみち、エレフシナは賞金稼ぎによって宿泊所も満員で休める場所もなかった。

入ったホテルでセイジと琴葉は秋に対してとりあえず言うことがある。

「「実家かよ！」」

正確には梧桐系列のホテルであった。

顔パスでスイートに通されての一言である。

「ちゃんと俺の口座から引き落とされてる。無料じゃねえ」  
後で徴収な、と言う秋。

金は取られるが、それでも格安ではある。

「リトロンまで行くことなかったんじゃないか？」

「エレフシナの泉は混んでるって話だったんだ」

あまり並びたくないらしい。

「さて、どうするか」

とりあえず、話をヒュドラに戻そうと言ってはみたものの、セイジは次の言葉を発さずに唸る。

無駄に時間が過ぎる。

「蛇繫がりで、琴葉が巫神化して話しかけてみるってのはどうよ？」  
「ちよ、おま」

考えを放棄して秋が琴葉にそう話しかけ、セイジが慌てて秋の口を塞ごうとするが、ちよつと遅かった。

琴葉が胡乱げに顔を上げて秋を睨んでいた。

「私と龍也の父様は、蛇ではなくて、龍の王様なのだけれど……」  
声が低い。怒りを含んでいて恐い。

「んなこと言ってもよ。蛇の神格化みたいなもんだろ？ 龍ってのはさ」

「人間がそう言ってるだけで、全然違うものだとは度目かになる説教タイムに入らせてもらってもいいかしら？」

許可を求めてくる幼なじみをセイジは「待て待て」と止める。

「いい加減その話が地雷ということくらい分かれ」

秋にはそう言い聞かせる。

「なんかキレるの早くないか？ 愚痴とかあるなら後でちゃんと聞くから、今は抑えろ」

この言い聞かせに対し琴葉はおもむろに無言になる。

少し考えてから「ちゃんと聞くのね？」と聞き返し、聞き返された方は「あ？ ああ、もちろん」と応じる。これで琴葉は腰を落ち着かせた。

琴葉の様子に秋は首をかしげた。

「スネークスレイヤーとかあればなあ」

秋は溜息混じりにそんなことを言う。ゲーム用語とか言われても琴葉はさっぱり分からず、また秋の妄言の一種だろうと深く考えないことにする。

セイジは地図を広げて、噂の現場を何度か見返し一言「駄目だな」と呟く。

「どう戦っても周囲への被害は抑えられない。ここで戦うかぎりはない」

対象が動き回る存在なら、場所を移すことも可能かもしれないが、

先程見たヒュドラは賞金稼ぎとの戦いが終わった後に定位置へと戻るように動いた。とすれば、泉から遠ざかるようなことはしないだろう。

（周囲への被害について考えないとシユウはちゃんと動かなさそうだし、それ以前に、下手なこととして神殿跡とか壊したら、後が恐いしなあ）

エレフシナ周囲を眺めていたセイジはある島に目を付ける。

（確かここは……、ふむ、ちよつと確かめてみるか）

ヨイシヨと立ち上がるセイジを残る二人が見上げた。

「ちよつとギルド行ってくるわ」

「まさか、そつちでクエスト受けるのか？」

「なわけねえだろ。調べ物だ」

ギルドにはクエスト以外にも近辺の情報が軒並み集まってくる。

図書館に行くよりも良い場合があるのである。

「ひよつとしたら、あの近辺の被害を考えなくてもよくなるかもしれん」

「マジで？」

「あくまでも可能性の段階だけだな。シユウは戦う準備をしておいてくれ」

「おう……てか、ロンパイア輸送してもらわんと」

「シフトを基本にしないと危険だ」

「神剣使えってか」

秋はしばらく額に手を当てて「うん」と悩んでいたが、状況が理解出来ていないわけでもなく「マーケット行ってくるわ」と立ち上がる。

一人座る琴葉。

秋が先に部屋を出て、セイジは戸の前に立って振り返る。

「先に行くぞ？」

「え？」

「いや、え？ じゃなくてな」

セイジは頭を掻いた。

「コトハの知恵を貸してくれないと困るんだが……」

その言葉に一瞬キョトンとするが、した後にセイジから顔を背けて「しょ、しょうがないわね」と漏らして立ち上がる。

「ちよつと準備してくるから、待ってなさい」

「ロビーで待ってる」

戸が閉まる音が響き、部屋に自分しかいなくなるのを確認してから、琴葉は吐息。慌てて鏡を見れば、顔が真っ赤になっていた。しかもなんかちよつとにやけていた。

「ま、まずいわね」

急いで顔を洗って火照った顔を冷まし、にやけ顔を戻そうとする。セイジから頼られて、素直にうれしい琴葉であった。



エレフシナでヒュドラを確認してから三日経った。

あれからアテネを拠点にして準備を進めてきたが、未だ、ヒュドラが退治されたという情報はなく、あるのは賞金稼ぎの被害が日々大きくなっていることか。

セイジは建設機材を撤去したデメーテル神殿跡の土台に立ち、大理石の床に大きな陣を描き殴っていた。

最後に数式を刻むと陣の外へと出て、チヨーク代わりにしていた琥珀の長剣を大理石に叩き付けて砕く。刻まれた陣が琥珀色に輝き出す。

「アペレス！」

セイジが大声で叫ぶと神殿跡の後ろ、泉との間に五階建てのビルほどの人影が立ち上がる。牧歌的な服装の巨人だった。

セイジが学院に行くまでの間の友人アペレス。久しぶりに会って頼み事をしたのである。

アペレスはむんずとヒュドラの尻尾を掴み顔を真っ赤にして「ふんっ」と力一杯引つ張る。エンチャント・ストレンジスを付与されたの全力に巨体が泉上から引きずり出されてくる。

ず……ず……ず……。

地響きが一緒にやってくる。

急いで用意しておいたタオルで口を塞ぎ、陣から遠ざかる。陣には黒々とした影が迫ってくるところであった。

巨大な爬虫類が降ってきた。

セイジは地に両手をつけ、陣と周囲に漂わせた長剣の欠片、琥珀に魔力を通す。

「ここに魔を通す道を開けよう」

「彼方より此方へ」

「点と点は繋がり線を成す」

陣にそって琥珀の縁を持つ穴が口を開け、影の原因、巨大なヒュドラが毒を撒き散らしながら穴に吸い込まれていく。明らかに穴よりヒュドラの方が大きい、まるで吸引されるように吸い込まれる。ちゅるんっ、とそばでも吸い終わったかのような嫌な音を立ててヒュドラは穴に食われた。と同時に穴が閉じる。蔓延する毒。だが毒は神殿から浄化されて消える。

柄をかざし長剣を構成し直して琥珀を回収した。

吐息。

巨人を見上げて親指を立てれば、巨人もセイジを見下ろして親指を立ててニツとヒゲ面を歪めた。釣られてセイジも笑う。

南西の空を眺め、笑みを消す。

「さあて、後は任せたぞ？ シユウ、コトハ」

真剣な表情でそう呟いた後、南西を指差しながら巨人を振り仰ぎ

真顔のまま一言。

「それじゃ、頼んだ」

巨人もまた真顔で心得たとばかりにセイジに手を伸ばした。

サラミス島。

エレフシナの南に位置するこの島は、本来、無人島ではない。

四年前、サラミス島南東部において、地中海を本拠にする組織アルコンテスとヴァチカンの使徒が衝突した。結果、サラミス島の島民が全滅するに至った。島も中央で真っ二つに割れている。

現在もほとんど廃墟に等しく、被害を気にせず戦闘が行えるというわけである。

琥珀色の陣が口を開け、黒々としたヌラリとテラつく巨体が飛び

出してきた。

「本当に、でっけえな」

頭上を飛び越した先で地響き立てて落下した巨体に、秋は口笛を吹く。

「けどまあ、倒せないほどのもんでもないよなあ」

周囲に、自分とヒュドラを隔絶させる大地の壁が盛り上がるのを見る。それはやがて巨大な土のドームを形成する。

琴葉に注文した『外界に情報が絶対に漏れることのない壁を作れ』が完成したのである。

ヒュドラが暴れ、ドーム内に設置された篝火が倒れていき、地に流された油に点火していく。ドーム内は火の海に変わる。

「舞台は整ったな。じゃあ、やるかね。なあに、奴よりはちいせえ」ニヤリと口の端を歪ませ「転神」と呟く。

足下から蒼い風が立ち上り、髪と眼が蒼く強く輝き、無銘神が顔を上げる。

ギロリと睨みつけ、強烈な威圧感を叩き付ける。ヒュドラがビクリと後退。九つの口から紫の舌をちろつかせた。

マーケットで買った安物の鉄ナイフを取り出して握り潰す。鉄が分解し、ロンパイアとも見間違いそうな長大な鉄製の剣が出現する。違うのは束の長さ、そして、剣身の長さだ。

無銘神は一メートル弱の束を掴み、二メートル半ほどある剣身を振り回して具合を確かめる。

久しぶりの転神となる。少なくとも半年はしていない。だから、愛用のこの剣ともご無沙汰である。

無銘神は剣で傍らの油壺を叩き割り、剣身に火を纏う。

「毒蛇よ。俺を一度でも地に伏せてみせよ。さすれば、褒めの一つでも与えてやるっ」

実に楽しげに語り、ヒュドラに向かって踏み出すのであった。

ドームの外は巨大な魔方陣。

琥珀の数式で形成された陣をルーン文字の陣が囲み、陣の前でミスロジカルの制服を着た黄金の髪を持つ美女が両手をドームに向けている。

よほど内側で派手に暴れているのか、ドームには時々ヒビが刻まれるが刻まれた先から修復されていく。

ドームはやがて草に覆われ、ルーンの陣からは木々が生えドームを囲みだす。

「ing……ing、ing。さっさと満たされなさい」

くわつと澄んだ湖水のような瞳を見開いて口走る。

髪と眼で感じは違うが、美女は間違いなく琴葉であった。

秋とヒュドラの戦場を、セイジと琴葉による二重の結界で生み出していた。戦場として、封印の舞台としてである。

役割分担は、セイジがヒュドラをサラミス島へと轉移させ、秋がヒュドラをねじ伏せ、琴葉が舞台を整え、最後にセイジが封印を施す。

琴葉が舞台を整える 今ココ。

秋の現在の体調ではシフトを続けられるのが一時間程度。密閉した空間に毒が蔓延するのには更にかかるが、火も焚いているための酸欠も加わって、作戦時間は三十分が限度。すべての時間を短縮するため、琴葉もまたシフトしていた。

北東の空から何か飛んできてドーム上を通過していった。

どこか遠くで「ノーコーン」と聞こえ、また地響きが生じる。

やがて、南の方から海水に濡れたセイジが「ゼエ、ゼエ……」と走ってきた。

金髪美女状態の琴葉の隣でドームに両手を当てる。

「じ、時間だ」

「平気？」

チラリとも見ずに短く聞く。

「大丈夫。誰にものを言っている」

「そうね。こっちは豊穰結界は完了済みよ」

了解、と応じて正面のドームを視る。

「ワールドプレーン解析……再開」

ドーム型の結界の内側、既にセイジの陣は敷き終わっている。後は対象を確定して封じ込めるのみだ。

「詳細把握 個体認識……終了。ねじれ矯正……終了 断界開始」

脳内でタイマーが減っていく。

「完了。プレーンシフト プレーン・オブ・ゴルゴーン！」

やがて、最後にやや大きめの地響きがあつて 静まりかえる。

「プレーン・オブ・ゴルゴーンの崩壊を確認。状況終了だ」

隣で吐息を聞く。

琴葉がシフトを解いて、目の前の壁を砕いて道を開く。

秋が出てくるのを待ちながら、セイジはドームを見上げる。

「うーん、やっぱ、豊穰の結界があると内側での魔法行使はやりやすいな」

シフトした琴葉が作ったこの巨大な結界の中では、戦う者は常に能力が強化され、魔法も威力が増す。至れり尽くせりではあるが、それなりに準備期間を必要とするし、なにより、行使出来る存在は限られている。

「おーい！ もっと道を開けてくれ！」

中から秋の声が聞こえてきた。

更に道を大きくすれば、軽く二階建てくらいの大きさはあるヒュドラの頭を一つ引き摺って秋が顔を出した。

「とりあえず、これ、ギルドに渡すんだろ？」

「ああ。そういう条件で人払いをしてもらったからな。で、何首落としたり？」

「八だ。最後は慌てて二同時だったから切り口は汚いか」

「いや、切り口はどうでもいい。そうか、不死の奴以外全部か」

東からヘリが飛んでくる。あれはメディアに手配を依頼した毒抜き班だ。ヒュドラからの毒抜きにはそれなりに専門家の手が必要だからである。とはいえ、大きさが大きさにだけに時間もかかるはずだ。「コトハも疲れただろ？ ギルドに首を譲渡し次第、例の泉という奴を堪能してみよう」

「ええ、そうしましょう……あら？」

琴葉はセイジのブレザーの裾に手を伸ばして、吐息。

「最近、制服での活躍が多すぎるのではなくて？」

「ん？」

制服のほつれ。

「ああ。でもしょうがないだろ？ 俺の服、まだ修復終わってないんだからさ」

「言い訳しないの」

「い、言い訳なのか？」

琴葉はこれみよがしに肩をすくめてみせる。

「後で繕ってあげるわ」

「いつも済まないな」

「済まないなんて思っていないでしょう？」

「そんなことは……ないぞ？」

「今の間はなにかしら」

なんでもない、と首を振ったセイジは、何とも言えない微妙な表情で自分達を眺める秋に気づく。

「あ。その首、生で持ち歩くのいかな」

悪い悪い、と琴葉との会話を終わらせて首を壁で覆う。

「絶つものは重さ……と、これで完成。じゃあ、行くか」

縄を二つ括りつけて、セイジと秋の二人で引つ張る。重さを軽くしても海に浮く程度のもので引つ張るのが容易になるわけではない。

「カカセオに括りつけて海渡らせたらどおよ？」

「どこの町を粉碎させるつもりだ。俺に母方の親戚一同を敵にまわせと言うのか」

「冗談に決まってるだろ」

「シユウなら分からん」

そんな言い合いをしながら運び、海にまで出てくる。

琴葉は先にキオンでエレフシナへと送った。自分達はまずアテネのギルドへと向かうことにする。

紅一点を見送り、用意しておいたボートで牽引しながらアテネへと向かった。

アテネの港でギルドの人間に首を引き渡し、認め印を受け取ってギルドへと向かう。

その道すがら、秋はとりあえず、思ったことを口にする。

「お前ら、もう、付き合っちまえよ」

最初、秋が何を言っているのか分からず、キョトンとしてからはあ？」と怪訝そうに聞き返した。

「俺達は幼なじみで親友だぞ？ 付き合っとか何言ってるんだ」

秋は盛大な溜息を吐く。

「だってよ、お前らの会話って夫婦のもんにしか聞こえぜ？」

「夫婦って、またそれか。なんでここではそんな誤解ばかり受けるのか」

うんざりだと肩をすくめるセイジ。

「親友だと思っっているのはお前だけで、向こうは絶対に違うと思う

「ただけどな」

「節穴アイのシュウが何を言っているのやら」

「セイジの神懸かった鈍感に比べれば、俺の節穴はマシな方だ」

「大体俺は」

セイジが反論を口にする前にギルドへと到着し、話はつやむやになる。

必要な手続きを終え、ギルドを出たところでシオンと鉢合わせた。

「やあやあ、小アステール！ あがっ」

セイジに抱きつかうとして、避けられて壁に衝突した。

「いたた」

「なんでいちいち抱きつくんだ」

「深愛の証だよ？」

「うっ……、なんか嫌な響きを感じたぞ」

「気のせいだよ、気のせい」

顔だけが異様に良いこの兄弟を眺めていた秋は「兄弟仲が良いのはいいことだ」とうんうん頷く。

「分かってるねえ、君！」

「用がないなら行くぞ？」

「つれないねえ。折角、エレフシナの泉が復活したことを教えようと思ったのに……」

おっと、口に出してしまったね」

セイジと秋は顔を見合わせる。

「シュウ、先にコトハを連れて行ってやってくれ」

「それは構わないけどよ。お前は？」

セイジはちよつと嫌そうにシオンへと顔を向ける。

「俺達に用事はないけど、俺には用事があるんだろ？」

「ふふ、よく分かってるね 愛だね」

「ちげえよ」

即否定。

「まあ、そういうわけだから、後頼んだ」



秋は連れだつて歩いていくセイジとシオンを見送り、自分は拠点にしているホテルへと向かうのであった。

セイジは大理石で建てられた神殿を奥へと進む。

シオンは神殿には入らず、外で待つという。

ここはオリュンポス山の頂に程近く建てられた、ゼウスの神殿である。

(ここも久しぶりだな)

「この主のことを、セツナは「じいじ」と呼びその妻を「ばあば」と呼んで叱られる。そんな懐かしい記憶が頭を過ぎる。

どうして「じいじ」は良くて「じい」は駄目なのか。そんなことを五歳くらい兄妹でよく悩んだものだ。もつとも、それをセツナはもう覚えてはいないだろう。十年以上前の話になる。

キョロキョロと懐かしみながら玉座の間へと歩いていく。ここには絨毯なんて洒落た物はなく、ただ、大理石の白が眩しい。

最奥へと足を踏み入れたセイジは、そこで展開されているものに片眉を上げた。

蒼い風を纏う剣士が黒々とした大蛇の首を易々と切断し、頭の消えた首は松明となつてのたうちまわる。

大蛇の吐く濃霧の如き毒は、風が剣士へと届く前に遠くへと誘う。壁を背にしている時に残る首が四方から襲い来る。剣士は右からの首を落とし松明かした空間へと飛び込んで右方へと飛ぶ。大蛇は火の中を追うことが出来ず、剣士への追撃はなく、その隙に予備の油壺を砕いて火を補給する。

舞台は、周囲を地で囲まれたドームの中。数時間前、外界との接触を断つために生み出した豊穰結界の内側での出来事だ。

そう。

蒼い風を纏う剣士は無銘の神。シフト……転神した梧桐秋である。

大柄な筋肉質な白髪の方が玉座に片肘をつき、杯を手にして、壁に投影された毒吐く大蛇と剣士の戦いを面白そうに眺めていた。

ゼウス。それがこの男の名である。この、オリュンポス山に住まう神々の王にして、全能の存在。主神である。

「いい趣味だな」

玉座の間に響き渡ったその声に、ゼウスは戦いの映像から視線を外して声の主を見る。

「おお、小アステールか！ でかくなりおつたなあ！」

落雷の如き轟きが腹に響いた。

「どおも」

何とも言えない笑いを浮かべて、セイジは玉座の間へと踏み入った。

どうやら映像の視聴者はゼウス一人らしい。この映像がここだけ流れているとも思えないが。

(映像の視点がたまにブレる。大方、ヒュドラの目をカメラ代わりにしてヒュドラ退治の英雄を見定めようともいうのだろう。)

まあ、酒の肴としても極上だろうけどな)

それが映像の正体である。映像の獲得手段に関しては完全に誤算だ。

映像は最後に首一本になった大蛇が石化したところで終了する。

終了して、ゼウスは目の前に来たセイジに問う。

「で、この剣士は誰だ？」

「内緒」

即答。

答を求めた方は思わず無言。拒否されるとは思っていなかったらしい。

「もう一度問おう」

「何度聞かれても答は変わらないなあ」

少し強く問われたが、それに対してのらりくらりと応じれば、盛大な溜息を吐かれた。

「知らないわけではないのだよなあ？」

ここに呼び出された時点で、セイジが関係者ということくらいは知っている。情報源はシオンだろう。

悪意で情報をもたらしたのではなく、代理人としての義務。それと、新しい酒の肴として。

彼らにとって、酒の肴を得る心の多くは悪意ではない。

戦いは享樂。ゲーム。クリア出来た者には英雄の座という名の報償を与えようとする。与えられる側に拒否権は存在しない。拒否は、神への反抗でしかないのだ。

それくらい、セイジも知っている。だが……。

「俺達がなんのために外界と遮断する場を作ったと思ってるんだ？」

隠そうって情報晒すわけないだろうが。

ボケでも始まったのか？ 勘弁してくれよ。

お爺ちゃん、ご飯は食べたでしょ？ とでも言わせたいのか？」

ヤダヤダと大袈裟に肩をすくめてみせた。

ゼウスの額に明らかかな怒りマークが浮び、杯がひしゃげた。

「ワシが聞いておる」

ゼウスが玉座から立ち上がる。四度目はない、という威圧だ。立つてこそ分かるのは、ゼウスの大きさか。軽く三メートルは超える。

「誰に聞かれようと、何度聞かれようと、そして、何をされようと腕を組み、視線を反らさず、威圧など気にもせず、答える。」

「変わらない」

ズシツズシツと大理石を踏みしめて、セイジの目の前に巨大な影が落ちる。

見下ろしてくる目を飄々と見上げる。

「俺達は依頼を完遂しただけだぜ？ なんて脅されてまで友人を売るような真似を強要されにやならんのだ」

「ワシらの報償を受け取らせようというのだ、何の不都合がある」

「不都合しかねえんだよ、クソじじい。

てめえらの享樂で他の神族引つかき回すんじゃないよ」

ゼウスの眉がピクリと動く。

「神……族……じゃと？」

(この反応、知らない?)

そういえば、と思い出す。投影されていた戦いの現場からは音がしていなかった。

これは使える、と考える。

オリュンポスの神々は国の政治への介入はほとんどせず、他の神族とも自らの領域を守る以外には戦わず、内に籠もっている。理由はセイジには分からないが、今回の件には使える。

「あいつはリンカーだ。ここ以外が出身のな。」

で、俺達はオリュンポスからの報償はもらわないと決めている。

諦めてくれ」

相手は無言で背を向けて玉座へと戻り落胆した様子で座った。

その後、投影した映像で無銘神の持つ剣が神剣であることを、大理石の壁をバンバン叩きながら口を酸っぱくして言い聞かすセイジの姿があった。

この二人の関係は、セイジとセツナがギリシアにいた頃の義理の祖父と孫である。

母親のアウレアが育児をほぼ放り出し、司に付いてあっちこっちに渡り歩いていたため、兄妹はここオリュンポス山に預けられていた。

ゼウスとしては暇潰しのつもりで預かったただけなのだが、ヘラの方が思いの外兄妹を気に入れて育て、いつの間にか旦那の方も可愛がるようになったとか。

「納得したな? 諦めたな?」

念を押すセイジ。

「しつこいのう。しかし、折角の逸材かと思えばどこぞのリンカーとは」

「現代に神代の英雄なんざ求めるなよ。

今の世にあんな厄介な幻獣を倒せるとすれば、リンカーやライナーの類だ。これ以外だとすれば、エリート教育されたお貴族様とかな。

魔法と魔構が世に広まって、たかだか十数年。人が力を付けるにはこれらの研究に時間と金をつぎ込み、しかるべく学術機関が必要となる。ギリシアにはこの学術機関がない。

人材の育たないこの国じゃ、オリュンポスが望むような英雄なんて生まれやしない」

実際、ヒュドラ退治には百を超える賞金稼ぎが挑戦したが、首一本たりとも落とされなかった。首の二、三本落とせる可能性のあった最新の魔構もありはしたが、結局、扱いきれずに終わっていた。

「学術機関つてのはさ、教えるだけではなく、研究機関で編み出されたものの試験場という側面もある。両者は互いにあつてこそなんだぜ？」

「そうは言ってもだな。アカデメイアを創設しても教育者がおらん」

「メディア姐さんとかいるじゃないか」

「ワシらが直接手を出すのはな……」

セイジは額に手を当てて吐息。

「分かつてないな」

首を振る。

「イギリスのミスロジカル、ドイツのノイエ、インドのヴィシユヴァカルマン。これらが魔法を研究し発展させた裏には超越者の関与がある。」

魔法は幻想、魔構は幻想の歯車。超越者は幻想の体現。一つ欠けても発展などありえない。

ギリシアが未だに鳴かず飛ばずなのは、あんたらオリュンポスの不関与にも原因がある。

報償をちらつかせて腕を上げる、も手段としてはアリだとは思うが、報償に手を伸ばすためのハシゴを持たない人間に何を期待する

というのか」

「ふむ。まずはハシゴを与えよと」

「じゃなきゃ、いつまで経ってもローマは戻ってこないぜ？」

オリュンポスが動かない理由。それはヴァチカンに押さえられたローマが原因である。

ギリシアとローマは神話上切っても切れぬ関係にある。オリュンポスにとっては半身とも言える存在だ。

大戦時、オリュンポス山との道がギリシアとローマの二カ所が開かれたが、ヴァチカンの行動は迅速でローマ側の道は破壊され、オリュンポスからの加護の一切を一神の神蹟の加護によって上書きしたのである。これにより、LRで最初に陥落したのはローマとも言える。

もつとも、ヴァチカンはこの時の行動に全力を注ぎ過ぎた結果、総本山以外の拠点を失うことになり、以降の他国侵略へと繋がっている。また、信徒以外を見捨てざるを得なかったことで、数名の離反者も出している。

「ともかく、祖父さん達が戦力をほしがっているのは知っているつもりだが、それで友人を引き渡すわけにはいかないというわけだ。

戦力がほしければ自分達で育ててくれ」

話は終わりだよな？ とゼウスに背を向ける。

「口が達者になったもんだのう。父に似たか。それとも前が関係あるのか」

「どつちもだよ、どつちも」

感心しているようなゼウスの言葉を背に受けて、セイジは肩越しに手をプラプラ振る。

（しかし、いかな。どうもギリシアに来てからというものの、自分が軽くなったようにも思える。少し浮かれている？）

気分の問題だろうか。学院にいる時よりも、解放感のようなものが心に満ちている。母方の血に引っ張られているようだ。

さすがは十二神の石柱といったところか。この地での母の血は強

力である。

「じゃあ、帰らせてもらう」

「近い内にまた来るがよい」

「学院を卒業したら、一度ヴィオと一緒に寄らせてもらうよ」

半年後にまた会おう、祖父さん、と挨拶して玉座の間を出て行くセイジである。

見送った後になって、ゼウスは「はて？」と首をかしげる。

何か他に聞くことがあったような気がするのだが、どうも思い出せない。

この後、しばらくして、エロスと話してようやく思い出すが、その頃には、セイジは既にギリシアを立った後の話である。

オリュンポス山を出たセイジは見送ってきたシオンを振り返る。

「そっぴや、結局、エレフシナの泉にヒュドラを置いたのはあんたらなのか？」

ヒュドラの視線をカメラ代わりにしていたのだから、そう考えるのが普通ではあるが、セイジにはどうにも引つかかる。

場所がデメーテルの神域そばというのが、だ。

毒が神殿跡より先へと広がらなかったのは幸いだが、結果としてあの騒動のために神殿の改修が行われなかったのだ。デメーテルからすれば迷惑以外なものでもないだろう。

「残念。違うんだよね」

だから、シオンの否定はひっかかりを肯定するものとなる。

「あのヒュドラはいつの間にか存在していたんだ。多分、誰かが持ってきたんじゃないかな」

当初はヒュドラの見たものを遡って犯人捜しをしていたが、良い結果は得られないし気がつけば巨大化しているしで後手後手に回り、ギルドへの討伐依頼へと発展したのだという。

ヒュドラの視線に介入したのは、ゼウスの戯れに過ぎないという。



「まあ、僕達への嫌がらせとしか思えないよねえ」

「それか……実験？」

「実験つて、なんのだい？」

「幻獣の……強化とか。する意味は分からないけどな」

「強化、ねえ。そういうこととする相手に心当たりでもあるのかい？」

心当たり、と言われて思い出せるのは幻獣の兵器化くらいだ。強化と一言で言えるものかどうかも分からないものだ。

「幻獣を改造し兵器として国家戦力に組み込む国もあるが、あの国が地中海くんだりまで入り込んでるなんて話、聞いたことないしな」

「幻獣の改造……。この時代は、本当に、予想の斜め上を行くね。」

これは、やつぱり、山を下りて人界に色々学びに行った神々の判断は正しかったかな」

シオンの言葉の後半にセイジは「ん？」と首をかしげる。そこで、ゼウスの神殿にヘラがいなかったことを思い出す。

「ひょっとして、ヘラとか山にいないのか？」

「ヘラもいないし、アテナもヘルメスもいないね」

シオンによれば、十二神の半数はいないらしい。

神々の伝令役であるヘルメスがいないから、シオンなどちょっと暇している者に伝令の代理役が回ってきているのだとか。

「アポローンとアルテミスに至ってはどっかに転生しちゃったしねえ。別々に」

残りは本当に自分の神殿などに籠もっている。

セイジとセツナがここにいた時点でアポローンがいなかったのは知っているが、更に下りたということか。

「小アステール、モテモテだよね」

「俺は関係ないだろ」

「いや、ほら、アステールとヴィオがここを出た直後くらいから下りる数増えたからね」

「ヴィオが、とは思わないのか」

「それは盲点だね？」

「あんたはいつだって女の尻以外には盲目だろうが」

「うまいことを言うもんだね」

「どこがだ。はあ、もういいや」

会話を疲れて、兄に背を向ける。

「じゃあな」

「また会おう、最愛の弟よー」

「勝手に言ってる」

それを最後に父の違う兄弟は別れたのであった。

## Hydra Slayer | Epilogue

エレフシナの泉を堪能した秋は大きく伸びをする。

確かに体調は万全になっていた。

水筒に湧き水を入れる。セレスから一応汲んで帰ってくれと言われての水筒だ。キュツキュツと蓋を閉めて完了である。

湧き水を飲んで疲れを癒した琴葉がやってくる。

「それじゃ、俺は学院に戻るぜ」

「ええ、お疲れ様。ドイツ方面への寄り道はしないようになさい」

「分かってるよ。俺が寄り道するのは北じゃなくて西だ」

「西？」

琴葉は首をかしげる。

「スペインの闘牛見て帰ろうかな、と。」

「ちょうど系列のホテルもあるし、ブラツとな」

「世界規模のホテルグループは伊達ではないらしい。」

「日崎先生やオリヴィエ工達が帰ってきたら無事を祝して宴会とかやるとして、マタドール衣装とか結構ウケると思うんだが」

「秋の場合、マントに突っ込む方ではなくて？」

「言っと思っていたが、予想はしていてもシヨックだな、おい」

「ちょっとへこみ気味に苦笑する秋である。」

「琴葉も星司とのんびりしてくりゃいいんじゃないかね？」

「そつも言っついていられないわ」

ニコリともしない琴葉に「あー、そついやそつか」と自分の失言にバツが悪そうに頭を掻いた。

「まあ、あれだ。毒が出来るまで、な。」

「依頼側の話じゃ早くても三日かかるんだろ？」

「そつね。毒が揃うまではすることもないし……ああ、コルキスの魔女と交流を持つのもいいかもしれないわね」

「そつちかよ」

「他に何かあるというの？」

「いや、ほら、星司とデートしたりさ」

「？で……」

一瞬、単語の意味に思い至らず、ポケットとしてから、耳まで顔を真つ赤にしながら目が大きく見開いていく。

「お、おさ、幼なじみでそんなことするわけないでしょう?!」

(こんな琴葉見たら学内の女生徒人気ランキングに確変起きるぞ) 自分の言葉の結果に秋もちよつとびっくりする。

学内でも変な人ベスト3に入るような、あの琴葉が動揺し真つ赤になってどもつた。それだけで秋的には確変である。

ちなみにトップはレンメル・クロケット、2位が神薙琴葉、3位がアルマ・ラインハルト(腐的な意味で)である。

アテネへの市バスの駅まで琴葉を送り、秋は海路を使うべく港行き市バスの駅へと行こうとして、パートナーを振り返って親指を立てる。

「色々、チャンスだと思っぜ。ここには琴葉しかいないんだからな  
!」

「ほら、もつ、さつさと行きなさい」

「へいへい」

秋はスペインへ、琴葉はアテネのホテルへ、それぞれ向かうのであった。

魔薬の調剤に役立ちそうなものをアテネのマーケットで揃えてからホテルに帰ってきた琴葉は、部屋に着いてようやく安堵の吐息。

部屋にはまだセイジの姿はなく、秋は既にギリシアを離れただろ  
うし、ここには琴葉一人しかない。

暇潰しに、買ってきた調剤道具を一纏めにする。すべてをまとめ  
終わった頃になって、ようやくセイジが戻ってきた。

「遅かったわね」

「老人の理解が遅くてな」

「老人？」

「ああ。で、飯は食べたか？」

言われて時計を見れば、なるほど確かに夕飯時である。

秋の実家が経営するホテルだけに和食料理屋が入っていた。わざわざ地中海まで来て和食に目が引かれた幼なじみに、琴葉はただ溜息を吐いた。

WASHOKUFULコース。

セイジはこれ一択であった。

琴葉も別に嫌なわけではない。神州にはほとんど行かないから、和食などはほとんど食べたことがない。興味がないわけではないのだ。ただ……。

「どこことなく食器のレベルで違う気がするわ」

ここに秋がいれば、おそらく彼も突っ込むだろう。この、料理の外見と合っていない派手な食器にである。

「これが寿司か」

「神州へ行った時には見なかったのかしら？」

「俺があの時出会った美味は生菓子だ」

「また、そういう……」

「ん？ ライスの上は生のサカナだけじゃないのか」

セイジは炙られたサーモンを指差す。

「ああ、それ、義兄予定が食べていたわね」

琴葉が神州へ行く数少ない機会。龍也と悠の婚姻に関係している、両家の行事のようなもので勇が炙りサーモンを大量に買ってきたことがあった、と話す。

「種類を揃えなかったことで姉の鉄拳制裁を受けていたわ」

「意外にアホだな」

「ええ、まったく」

笑い話に手を伸ばせば「でも確かに美味しい」と舌鼓を打つ。

「で、こっちが多ついていない方が……なんだどっちも美味しいじゃないか」

神州の料理人め、やってくれると不敵に笑う。

「お？ こいつは知ってるぞ」

「お祖父様がたまに焼いてるものね」

サザエの壺焼きである。時々、煉龍がグラウンドの隅で焼いているのを見かける。半分くらいはホリンや秋に奪われるのだが。

壺焼きの食べ方はミスロジカルに来た頃に煉龍に教わっている。

今回も特に失敗はなく容易く中身を引つ張り出すセイジ。

と、琴葉を見れば蓋が閉まったらしい。やや苦戦していた。

無言で手を伸ばせば、助かった、とセイジに渡し、中身を出してもらおう琴葉。互いの手に渡るのを待って共に食べる。

こういうのをそばで二年以上見てきたからこそ、秋はセイジに言うのだ。

付き合ってしまったえ。

おそらく”前のこと”というものが一切なければ、ただ、親が特殊だっただけなら、何にも気兼ねすることはなく、幼なじみの先に手を伸ばしていたかもしれない。

この距離で満足しようなどと、そもそも思わなかったかもしれない。

「ああ、そついやさ。愚痴聞く約束だったな」

「そついえばしていたわね、そんな約束」

「つて、忘れてたんかい」

セイジの突っ込みに琴葉は相好を崩す。

（今こうしてられるだけで、愚痴なんて必要ない。そう伝えたら、この人はどんな反応をするのかしら）

試してみたい。しかしそれは、自分のキャラではない、と心は内

に秘める。

「じゃあ、愚痴りましょうか」

だから、求めに応じて愚痴ることにする。

「最近の星司は後輩とばかり一緒につまらない」

「うん」

「神州にも一人で行くし」

「うん？ 神州行きたかったのか、そりゃすまなかった」

「どこか行きたびに怪我してくるし」

「う、うん」

「料理以外からつきだし」

「うっ……う、うん」

「どこに行っても別の女侍らすし」

「うん？」

反応からして無自覚。それが一番腹立たしい。

・  
・  
・

「私の何が悪いっていうのよう」

「おま、いつの間にも酒を……」

愚痴っている内に、セイジが目を離れた隙に脇に反らしておいた日本酒に手を伸ばしていたらしい。

「あーあー、しょうがねえなあ」

食後のデザートはもう終わっている。

酔っ払いと化した幼なじみに肩を貸して部屋へと帰る。

ベッドに寝かし、制服の上着と靴と靴下を脱がして掛け布団を掛ける。

（半分龍が入ってるコトハがこれだけで酔っとなると、本当にこいつ、精神的に疲れてるんだな）

愚痴の九割はセイジに対するものだった。その大半は”心配”。ここまで心神を傾けさせてしまっているのを見ると、さすがに申

し訳なく思ってしまう。

額にかかった前髪を払う。酔いで火照った寝顔に、一瞬、ドキりとさせられる。

今日、豊穰結界の前で久しぶりに見た琴葉のシフト状態を思い出す。

琴葉の前の名は、フレイヤ。北欧の魔法神、美と愛と豊穰、そして戦いの神。

一部、司るものが母親とかぶるが、母より琴葉の方が優秀と思えるのは幼少からの成長具合を見ている故か。そう、見続けている。

巫神化したセツナは母に匹敵する美しさだ、と父は褒める。しかし、シフトした琴葉の方が上だ、とセイジは思う。

幼少の頃、何度か、シフトした琴葉に押し倒されたことがあるが、あまりの美しさに目を奪われて文句の一つも言えなかった。シフトの反動で悶絶する琴葉には、文句だらけではあつたが。

璃央に対するものが恋慕だとすれば、琴葉に対するものはなんだろうか。

親友だと思わなければ、強く思い込まなければ、耐えられない。

今、目の前にあるのは、色が違うだけで、何度も目を奪われたあの状態にまで成長した存在だ。

知らず、その火照った頬に手を伸ばし、その熱を手に感じて、手を引っ込めて離れる。

「俺は、どうしようもないな」

苦笑。

一つ確実に分かるのは、この幼なじみ相手になら、ただ望むだけで巫神としての加護を与えられるだろう、ということだ。

「本当にどうしようもない」

琴葉に触れた手をきつく握りしめて、ベッドから離れ、自分用の隣室へと引っ込み、セイジもまたベッドに潜り込んだ。



琴葉は差し込む強い日差しに目を覚ます。

「あ……さ……？ え、朝！？」

ガバツと起き上がり時計を確認。AM 8：12と表示されている。愚痴を言っていた後の記憶がない。

「確か、なにか、やたらとフルーティなものを飲んだような気がするわ」

首をかしげ、いる場所を見回す。………宿泊している部屋だ。

部屋の椅子に制服の上着が掛かっていて、椅子に靴下が載せられ、ベッドの下に靴が揃えられている。

どうやらセイジに世話をかけたようだと思がつく。

シャワーを浴び、私服（黒チャイナ）に着替えてから、隣室へと続くドアをノックしてから開ける。隣は静かだ。

セイジがベッドに転がっている。

「まだ寝ているのかしら？」

予想通りグッスリである。その様は警戒心ゼロ。

「可愛い寝顔ねえ」

ウリウリと頬をつつく。

寝顔だけならセツナと本当によく似ているが、これを見るのも久しぶりだ。

セイジの頬を堪能してから、上着を探しだして手に取る。

中を出して机に並べてから椅子に腰掛けて裁縫セットを広げた。

カフェで朝食を採りながら、上着の裾を見る。

「耐熱処理に損傷も与えずに繕うとか、さすがだな。ありがとな」

「どういたしまして」

朝、携帯の着信音でセイジが目を覚ました時、セイジの上着は完璧に繕われていた。

「電話のお相手は？ 何度か鳴っていたようだったけれど」

「メディア姐さんだ。俺達の分の毒は用意出来たとよ」

「もう？ ずいぶん早いわね」

「予定の三倍の早さだろうか。」

「それと……」

セイジが不意に神妙な顔をして黙りこくる。

琴葉はパンをちぎる手を止めて、セイジを黙って見つめる。

「ヒュドラでも復活したのかしら？」

「あ？ あ、いや、そういうんじゃないかな」

周囲に他に人がいないことを確認してからセイジは口を開く。

「どうやら、ヒュドラ退治の報償を諦めきれない賞金稼ぎ達が、退治したのが三人組の少年少女であることまで調べあげ、その行方を探しているという。」

「こういうことが起こらないよう、ギルドへの根回しをやり、オリュンポスからの金銭面の報償を犠牲者への分配にもまわしたりしたのだが……。」

「一生を遊べるような金額だったものね。」

「つまり、毒を受け取って早めにギリシアを出ろということかしら？」

「そうなる。あと、毒はここに送ったと言っていたから、届き次第、さっさとここを出よう」

「移動のすべてをキオーンで行えば、どうにかなるだろう、とセイジは言う。」

「でも分からないものよね」

「なにが？」

「自分達で退治出来なかったモノを退治した相手をどうにか出来る  
と考える浅はかさが、よ」

「ああ」

確かにそうである。

「今回のことにかぎったことではないが、相手が外見的に弱そうであれば、その者が為した結果など見えなくなるものだ。」

「言ってもしょうがないことではある。国が変わってもこればっか

りはな」

どこにでもいるし、どこでもあるのだ。

そんなどうしようもない話をしていると朝食も終わり、部屋へと戻ろうとしたところにメディアからの使いが到着し、先にメディアの屋敷で見た壺よりも大きい壺を渡される。大きさとしては一抱えあるか。

受取証にサインをし部屋へと戻る。

「大きいわね」

「問題ない。量は十分か？」

「十分過ぎよ」

「それじゃ」

琥珀の粉を取り出して円を作り、空間に穴を開けて壺を入れた。

「プレーンシフトの応用よね？」

「ん。遠くに送ることは出来ないが、俺が移動すれば異層に置いた壺も移動する。」

「プレーン・ポケットと命名しはしたものの」

「やはりあなたしか使えない、と」

「う、うむ。ああ、でも、公式を複雑化すれば風と地の源理の合体で可能……と机上の空論でセツナは言っていたぞ」

「まず机上の空論を出してくる辺り、さすがセツナとしか言えないわね。」

問題はこの空論が思いつきで、思いつきなのにやろうとすれば出来てしまうことなのよね」

「そんなだから天才と言われるのだ。」

つまり、セツナに机上の空論を出させた時点で、いつか天幻以外でも源理へと形を変えて似たような魔法の公式が完成することが決定しているということだ。

「便利だから完成に力を注ぐ、とは言っていたな」

「卒業までには完成しそうね」

「やりそうだ。」

ああ、荷物は全部入れてしまえ。手ぶらの方がキオーンも早く飛べる」

身軽になった二人は長居せずにチェックアウトして、ホテルの外へと出たところで引き返した。

ホテルの向かいで二人を指差して「情報通りだ！」と叫ぶ男がいたからだ。

二人とも秋とチェックインしていたため、すぐに屋上へと入らせてもらい、キオーンを召喚する。念のため、学院の上着もプレーン・ポケットに収納して身元を隠してアテネを飛び立った。

「寒くないか？」

エンチャント・ヘイストを付与してでのキオーンはかなり早く風も強い。たとえ夏でも風が強ければそれなりに寒い。

前に座らせた琴葉は袖のない服装である。目の前で「くちゅん」とされれば、さすがに気になって聞くぐらいはする。

現在位置はジブラルタル上空。ヴァチカンの制空権を避けるなら、地中海は西に抜けてから北上すべきで、その結果である。

「平気よ」

(星司が暖かいから)

正直な感想は口には出せない。

「そうか。ここまで来れば、もう飛ばさなくてもいいだろ」

「ここは？」

「ジブラルタルだな」

「国だけなら帰国済なのよね」

「まあな」

しかし、少し北に行けばスペインである。

「そういえば、秋はどこで鬪牛を見るのかしら？ そちらへんで見つけられそうな気もしなくはないわね」

「鬪牛？ それなら多分、マドリッドだろ」

以前、秋がマドリードの闘牛場に行ってみたいと言っていたことを話すセイジ。

「首都だけあって、デカイのがあるからな」

「行ったことが？」

「ああ。アリシアが闘牛に轢かれそうになって、一時期牛が食べられなくなったことがある」

「星司が助けたのかしら？」

「いや。俺達とあまり年の変わらない貴族に助けられていた」

名を聞いていなかったため、セイジはその貴族の容姿しか分からないという。

「カステラの国の人。確か、アリシアはそう言ってたな」

「それって、ポルトガルじゃ」

「聞き間違いに一票だな。俺も同じ突っ込みしたしな」

古い笑い話だ。

そんなたわいない会話をしながら、その日の夕刻にはミスロジカル魔導学院に到着するのであった。

学院に戻って数日、アスガルドからの依頼品をすべて送る頃になって、ようやく秋が土産物を大量に持って帰ってくる。

ドイツに行った面々からは未だになんの連絡もなく、ニュースにもネットにも情報が載らない日々が続く。

そして、ある日、ベヘモットがポーランドを踏み潰して、ベラルーシを抜けてロシア入りしたという情報が世界中に流れた。

夏休み最後の日の出来事である。

夏前に瓦礫の山に埋もれた末広町は国に使役された国津神の尽力によつて、夏休み中には虐殺事件以前の町並へと再生された。

そして、今、十二月に入る頃になつても、本来の住人の大半が消えたままとなっている。

夕暮れ時、梧桐澄は武本道場の戸口に立つて、かけ声も人の気配もしない道場内をぼんやりと眺めていた。

目を閉じれば、今でも子供達のかけ声や叩き合う竹刀の音、元気のいい梢の音が聞こえてきそうである。

ほう、と白い息を吐いて目を開ける。

目を開けて聞こえるのは、人も車も避けて通るこの町で聞こえる音は隣町から響く喧噪くらいか。

時計を見れば、もう夕方六時になろうとしている。

帰るか、と自転車へと身体を向けて、隣町からの音を聞く。

【ぴんぽんぱんぽーん     アキバUDX付近に幻獣の出現を確認しました】

【該当地域にいらっしやる方ブツ……………】

アナウンスが途切れ、澄は「ん？」と鍵を外して身を起こす。

【自信のねえ奴らは小動物のように怯えながら、俺達自警団の活躍を刮目しやがれ！！】

なにやら自信満々な音割れ気味の放送が流れて、アナウンスは沈

黙した。

吐息。

最近のアキバ自警団は調子に乗っている、と澄は思う。

イギリスへの短期留学生がもたらした知識と技術は、僅か数ヶ月で神州の魔法学会の意識を改革したと言える。

魔鉱は基本の財に問題があり流行らなかつたが、魔力制御法の改善により魔構関係の開発が変わりつつある。

特にそこに食いついたのがアキバの住人であった。

秋葉原には多くの魔構企業がアンテナショップを展開しているが、同時に改造屋なる専門店もある。

魔構製品は基本的に制作元の会社以外で改造することは違法である。よって秋葉原の改造屋はアングラでの営業だ。

だが実際のところ、幻獣に対する攻撃手段として、購入された時点での物よりも改造された物の方が効果があるため、改造屋の存在は暗黙されている。

改造屋にとつて、新しい魔力制御法は利益のためにも熟知しなければならぬ存在であるとして、国側にもたらされてまだ扱いきれていない制御法を研究する名目で制御法を買い国側には商品を買った。そこらは改造屋の存在と同様に暗黙の違法行為である。

で、そんな改造屋のテスター集団と言えるのがアキバ自警団であった。

企業のテスターとの違いは、アルバイトであるかそうでないかだ。自分達が秋葉原を護っているという自負と企業物よりも性能の高いチート製品を使いこなしていることのプライドがやたらと高い。そして基本的に、オタクである。新しい技術で効率よく幻獣を退治出来るようになった途端調子に乗り出した。

先程のようなアナウンスは調子に乗った後、たまにあるものらしい。

「ま、アキバからは出ないっしょ」

自警団がミスをしなにかぎりではあるが。

自転車に乗ろう、としたその時「なあ、嬢ちゃん」と不意に声を掛けられた。

声に振り向けば、黒い革ジャン革パンツの古っばいファッションを着こなした赤髪翠眼の青年がやや困り顔で立っていた。

「なんですか？」

「道を探ねたい。いわゆる、エクスキューズミー？ という奴だ」「分かる範囲だったらいいですよ」

青年の話し方に小さく笑みを作って応対。青年は「わりいな」とバツが悪そうに苦笑する。

「万世橋ってのはどこだ？ 警察署が近いのは覚えてんだけどよ」

「あ、それだったら」

大通り沿いに右に左にまっすぐと教えた後に秋葉原で幻獣警報が出ていることを話す。

「げんじゅけいほう？ …… ああ、ここでも出るのか。まあ、世界中どこでも出てるようだからな、幻獣って奴らは」

「そうですねー、と聞き流そうとして「ん？」と心に引っかかる。どこかと考えても今一つ分からない。

「その警報が出ているとアキバには入れねえのか？」

「UDXの方らしいんで、万世橋付近なら行けると思いますよ」

「ゆーでーえつくす？」

「……消防署の方？」

「ああ」

知っている単語に青年は場所を想定して納得した。

「消防署と万世橋だったら、そりゃ確かに離れてるわな。よほど運が悪くないかぎり巻き込まれないか よし、サンキュウ、嬢ちゃん」

礼を言う青年と別れ、澄は自転車を漕いで末広町を後にした。

赤毛の青年ことアゼルは万世橋への道をキョロキョロと物珍しそ



うに歩く。否、凍結した記憶を呼び覚ますように、周囲の景色を意識に取り込みながら歩いていった。

東の方で騒ぎが起こっている。あれが幻獣警報の大元だろうか。空は既に暗く、先程別れた少女の安否を頭の隅に引っかけて、早くもなく遅くもない歩調でブラリと歩く。

「ああ、段々思い出してきた。確かここらにカニの店が……あれ？  
ねえな」

記憶違いかと首を捻る青年。

確かにここいらにはカニを大量に食べられる店がありはしたが、近年閉店している。アゼルがケルト海で目覚めるよりも前のことである。

（司に餓鬼が出来て、あそこまででかくなるくらい時も経てば、街も変わるか）

吐息。

その日崎司とは結局会っていない。

神州までの途中、シベリア付近で巨大な獣と泥仕合を繰り広げる集団の中にそれらしき存在を見ることが出来たが、会うには至らなかった。

その集団が怖すぎて近づけなかったともいう。

（どんだけ時代が変わったんだ、あの混合部隊）

アゼルが眠りについた頃には考えられない構成だった。思わず身震いした。あまり思い出したくはない。

そうこうしている内に万世橋の端が見える辺りまでやってくる。

ここまで来れば行きたい場所への道順は簡単である。

万世橋警察署旧舎跡。

願わくば、そこに、記憶にある存在があればいい、と万世橋の交差点へと来て、一角で足を止めて顔を上げる。

交番のような建物で、地下へと続く階段が口を開け、口の入口には『箱船』と無愛想な木の看板が打ち付けられている。その佇まいには、人を寄せ付けようという心配りが一切感じられない。

なんて懐かしい。それが過ぎった思い。  
思わず口元を緩め、地下へ向かって歩き出した。

澄はようやく家に辿り着く。空は既に黒々としている。

ホテル裏の駐輪所に愛車を停めて、裏口からロビーへと抜ける。居住区は厨房の先にある。

ロビーでは豪奢に着飾った上は初老から下は青年までの一団が三十階にある宴会場へと向かおうとしているところであった。

政財界というものに興味を持たない澄でも知った顔が中にある。あれは確か、官房長官だろうか。お偉方が集まってなんのパーティーがあるのだろうか。

一団は澄の姿が視界に入ると一様に足を止め、感嘆の吐息を漏らす。半神の力を扱えるようになってからは、こういう反応をする人が妙に増えた気がする。愛想笑いでその場を辞してスタッフルームに逃げ込む。逃げ込んだ先で、姉ともう一人に会った。

「おお、澄タン。おかえり」

「おかえり、澄」

聞こえたおかえりにそっけなく「ただいま」と応えてその場を去ろうとし、その場を二度見した。

「兄さん?!」

素っ頓狂な声を挙げて自分の口を押さえる澄。

そこには、姉にしては珍しい割とちゃんとしたスーツを着た穂月と、やはりちゃんとしたスーツ姿の、イギリスに行っているはずの秋の姿があった。

「久しぶりに会った妹に酷く驚かれた俺はどうすりゃいい? 結構へこんだんだけどよ」

「久しぶりに会った姉の顔を見て全力で逃げようとした弟にどうアドバイスをすればいい? こっちも結構へこんだんだけどさ」

どっちもどっちな長女と長男のやりとり。本物だ。

「お、お久しぶりです、兄さん」

「おう。電話じゃたまに話すけど、会うのは久しぶりだな」

ちよつと緊張気味の妹を「ふくん」と眺めて、秋はニヤリと笑う。  
「もう促進剤は必要なさそうだな」

セイジから渡された薬は既に尽きている。それでも毎晩、セイジから教わった魔力の安定法はやっている。あれはやっておくと、昼間の魔力が妙に安定するのだ。

「師匠は亜神化を教えるはくれなかつたけど、知る必要がないからなの？」

妹の問いに兄は「は？」と妹を見返す。

「いやいや。親が違うのに、あいつが澄の亜神化の方法を知るはずないだろ？ まあ、俺の時に色々あったから予想は出来るだろうけど」

「秋、澄タンにそういうのは……」

「え、なんで？ 使えた方が楽だと思っぜ？」

それに、知らないと中坊の時の俺と同じことになるだろうし」

「あれか」

長女は苦虫を噛み潰したような顔で当時を振り返って唸った。

「しっかし、あの事件はどんな風に伝わってんのかね？ お偉いさんとか怖がりすぎて先輩に護衛外されちまつたよ」

秋はハハハと乾いた笑いを出した。

秋が神州に来ている理由は護衛である。

ミスロジカル魔導学院の卒業生がイギリス王室にあり、その護衛として現役学生から神州関係者を選出して来日したというわけだ。

「え、護衛とか大丈夫なの？」

「んー、琴葉と刹那がついてるから平気だろ」

龍也とセイジ、それぞれの妹が来ていると聞き、澄が「マジで？！」と驚く。

セイジの妹は天才と聞き及んでいるし、龍也の妹は話でしか聞いたことがない。

（会場行きてー！）

好奇心全開の妹に、穂月は溜息を一つ。

「あれ？ ひよつとして師匠もこっち来てるの？」

「星司は……んー。」

メルカード財団の方のクエストだとかで成田で別れたけどな」

「え。空港？ 飛行機で来たの?!」

「ああ。王室御用達のクロケット社製魔構ジェット。開発者は絶対あいつだ」

移動手段を思い出して、秋は青ざめた。

「てか、成田で別れたなら師匠も来てるんだ……会いたいと言って会えるのかな？」

「携帯には出ねえし、あいつと同じクエストやってるはずのアルマの奴にも繋がらねえ。」

出られないような仕事をやってるとしか思えねえなあ」

セイジとアルマ。アルカナムへの就職が決定している二人が、アルカナムの基礎であるメルカード財団からの名指しのクエストで神州に来ている。就職先が別口である秋には首を突っ込めないクエストである。唯一方法があるとすれば、彼らと同じ立場でクエストを受けていないセツナに聞くぐらいだろうか。

セツナが財団からのクエストではなく王室からのクエストを受けた最大の理由は、神州のパーティーに参加するという点である。どうも、兄と琴葉から「和食美味しい」を聞いたことが発端であるらしい。

「あそこの兄妹はよく食うからな」

「イメージ追いつかないんだけど？ そもそも立食パーティーで和食出る？」

「ちゃんと確認済だ。」

「今日はない！」

でも教えていないらしい。兄も大概ひどい。

「まあ、アテネ支店であいつらが入った店はこっちに本店あるし、後で教えればいいかなと」

「アテネ支店で和食？ 松川のことかい？ あそこなら浅草から神保町に移転したよ」

姉の情報に弟は「oh」と額を押さえた。

「けどなんで神保町なんだよ？ ああいう店は移すとしたら銀座か日本橋じゃね？」

「今のところ、東京の自警団で力を持つてるのは秋葉原だから、その近辺にいれば安全だとも考えたんだろうねえ」

「アキバ自警団？ 強いのか？」

「装備の質はぶつちぎりだねえ。使う側は烈士隊の正規レベルだけ」

「微妙に大したことないな」

使う側のレベルを聞いて、秋は大したことないとぶつちやける。そのレベルなら、中坊当時の秋が蹴散らしている。

「制御法は伝わってんだろ？」

「伝わって、そのレベルさ。正規軍にはまだ正式採用されてないから、されたら今後どうなるかは分からないけどねえ」

その頃には自警団もレベルアップしてるかもしれないけどね、と穂月は言う。

「へえ。神州の魔法事情も変わってきてはいるんだな」

正直なところ、十人ちよっとの学生が外に留学しようが、国直轄の兵隊がすぐに強くなるとは思っていない秋である。

情報一つを有益と判断するには時間がかかる。今回はその判断が民間の更に個人的なレベルで思いの外早く下されたようだ。

「いつだって民間様々だろう？」

「そりゃまあな」

姉の言葉に弟は頷く。

梧桐はホテル業の他、その民間様々の部分で稼いでいる。十分に領ける内容でもある。

「さって、そろそろ、うげっちゃんのフォーローにでも行くとするかねえ」

「雨月姉……？ まさか多摩で何かあったのか？」

「何かってほどじゃないさ。」

ただ、少し前にうちの従業員に対するデマが流れてね。神祇院がそのデマに食いついて面倒臭いことになってんのさ」

多摩には系列の旅館がある。奥多摩山中に修行やら合宿に来る人々の拠点として使われることが多い。

少し前、秋頃だっただろうか。

【奥多摩に妖怪現る！ 巣窟は多摩の某有名旅館！？】

そんな見出しの雑誌が書店に並び、テレビ画面にもモザイク付で映し出されたのは。

どちらもゴシップ系ではあったものの、火のない所な感覚で季節が冬になった頃に神祇院から視察が入った、ということだ。今日は視察二回目で、九曜から鍋木家系の監査官が派遣されるとのことである。

「鍋木系ねえ。そっぴや、夏の留学にも一人いたな」

「留学か。確か、津村の末子が監査で加わっていたねえ」

「ああ、やっぱあいつが監査か。あいつは結局天宮分校の生徒なんだろ？」

「いや。実際には天宮でも御門でもなく、秋葉原練兵校の生徒だよ。鍋木側のちよつとした外への見得で一時的に天宮に名を連ならせただけさ。」

まあ、こつちの学園にはちよくちよく顔を出す子ではあるから、霧崎に細かい所を納得させた」

「ふうん、そうだった……って、専門学校生かよ」

秋葉原練兵校は秋葉原に拠点を置く専門学校である。練兵校自体は神州中そこかしこに存在しているため珍しくはない。

「津村は鍋木の分家の中でも本当に末の末だね。妾腹の妾腹とか、そっぴやレベルの血筋なのさ」

ただ、と穂月は捕捉する。

「津村蔵人は九曜頂・鍋木弦遊が特別に目をかけるほど優秀な情報分析官の卵でね。彼の後押しと分析があったからこそ、完全反対派だった頭の硬い老人が中立まで立場を変えたと言えるね」

「マジで？ あの老怪をか？」

穂月は頷く。

「すげえな。向こうでの印象じゃ全然パツとしなかったのに」

「監査が目立ってもしょうがないしねえ。」

来る監査が頭の柔らかいのだっいたらいいんだけどねえ。

いいかい、秋？ 澄タンに余計なことあんま吹き込むんじゃない

よ！？ 万が一にも馬鹿になられても困るんだからね！」

「わあってるよ」

少々語気も強く言いつけられるが、手をヒラヒラ振って適当に応じる。

自分の前で余計なことか馬鹿になるとか言われる澄は「この姉兄は……」と二人から顔を背けて吐息。

澄からすれば、セイジから魔力の安定法を教わって以降、姉の締め付けが少々きつくなったことで、今回、短期間とはいえ帰郷した兄から色々聞く機会が持てたのはチャンスである。

しかも姉は席を外す。

姉の締め付けがきつくなつた理由は澄には分かっていない。姉の気苦労など知る由もないからか、内心、完璧に浮かれていた。

二度三度と弟にきつく言い渡してから、穂月は多摩で待つ次女の下へと出掛けていった。

「それで、亜神化はどうやるの？」

早速である。

「お。じゃあ、手っ取り早く行くか」

ほらよ、と兄はポケットから小瓶を出して放り投げる。キャッチ



してみれば、中身は緑色のゼリービーンズのようなものが詰まっている。

「ふ、太れと言っのか!？」

「菓子じゃねえよ!　そもそも、澄ならお袋に似るんだから太りやしねえよ!」

「え?!」

澄、驚愕。

「半神てなよ。親と性別が同じなら似てくるのが普通らしいぜ?　実際、今の澄は俺の記憶上のお袋に結構似てきてる」

似ていると言われても、澄にはあまり母の記憶はない。

「ん〜、私としては可愛い系がいいな〜と」

「美人系だから諦める」

半神として開花前と後では学の内外揃って澄への感想はずいぶん変わり、少なくとも、澄の希望にそった方向ではない。

「つつても、お袋の写真とか残って……ああ、渡の首から提げてるお守りに入ってなかったかな?」

「超初耳!？」

「俺がこつちにいた頃の話だから今は知らね。渡呼んで聞くのが手っ取り早いかな」

末っ子どこよ?　と暢気に尋ねる兄に妹は滅茶苦茶深い溜息を吐いた。

「あの子、多摩なんだけど」

「え、なんで?　天宮の中等部じゃねえの?」

て、……俺か?」

答に思い至った兄に妹は頷いた。

秋の起こした事件が飛び火して奥多摩練兵校に入れられたのだという。澄は兄ほどの危険人物とは判断されなかったため、中等部から高等部に進学出来たのである。

さすがの秋も「む、むう……」と唸る羽目になった。ここら辺は手紙や紫からは伏せられていたため、本当に初耳である。伏せの理

由としては、この判断を下した相手を秋が殴りにくる可能性があったから。

「でもそんなだけ危険視されるような性格でもねえじゃんよ。グレた姿とか想像できねえし」

「そりゃ、まあね。本人としてはかなりノビノビやってるみたい。

高校からはミスロジカルに行くことも父さんに承諾させたしね」

「ふうん……、え？ よく親父が承諾したな。というより、よく他が納得したな？」

秋という前例があったからだと言は言う。

他に対しては、東京都内にいさせるより遠くに置いた方が安全だろう、と。すぐに帰ってこられる距離でもないことで納得させることに時間もかからなかったらしい。

「まあ、父さんとしては、学院卒業で実家グループではなく他に就職を決めた長男より、学院でコネを作らせて国外の事業を次男に、の方向なんだろうけどね」

「らしいっちゃらしいな」

「でしょ？」

雨月姉さんの元で経済系の勉強も叩き込まれてるし、あの子は割となんとかなりそうかな。で、私を割となんとかするための特訓ということで

「へいへい」

話を止めてビンの中身について説明する秋。

中身は蓮の実で亜神化の鍵となっていること。慣れない内はかなり苦いが、そこはもう慣れるしかないこと。をである。

「俺だと戦闘の只中で、だから生で慣れたが、澄なら別にそんな状況にはならんだろうから、自分にあつた味を編み出した方がいいかもしれないな」

「ふんふん。でも、この先どうなるかも分からないから、生と味付けの両方をというのも大事でしょ？」

とりあえず、という感じで澄は一粒取り出して口にヒョイツと放

り込んだ。転がしてみるも味はなく青臭いくらいか。そして、恐る恐る嚙んだ瞬間、澄の時間は止まった。

滅茶苦茶、苦い！

兄は、アゴを動かした瞬間クワツと目を見開いた妹にブツと嘖いた。自分にも覚えのある動作とはいえ、端から見るとさすがにビビる。

澄は口を押さえ涙目で兄を睨みつける。

「言いたいことはよく分かる！ けど、苦い以外に感じるものもあるんだろ？」

ぶつちゃけ、苦すぎて味覚が麻痺するは青臭くて嗅覚が役に立たないは……「ん？」と苦しいながらも一点にのみ気づく。五感から逃れようとして、きつさ以外を探して、腹の奥から妙に暖かいナニカが湧きだしていることに。

「うえ？ おえっえ」

「いや、無理にしゃべらなくていい」

秋は涙目の妹のへソ付近を指差す。

「ここに意識を集中しろ。そうしたら、もつとよく分かる」

言われてみるままに、指し示される部分に集中。そこが一番熱い。父ではない。二人の姉でも弟でも、兄とも違う。とても幼い頃、記憶にも残っていない懐かしい感覚。懐かしいナニカ。そんなモノをへソ付近から感じる。そこからなら、自分が普段編み出す以上の魔力を引き出せる。そう確信させる。

確信して、意識で触れて、引き出してみる。

兄は、妹が淡い緑の燐光を纏うのを見た。

「うっし、成功」

秋は小さくガッツポーズを決める。

ガッツポーズはイコール成功らしいし、その手応えはある。が、口が苦さで麻痺している。

「うゝ」

望んだものに成功してもストレートに表現出来ない、なんというか、こお、すごい物足りなさを感じる。ただ涙目のまま、手をワキワキさせてそれほど広くもない従業員室をウロウロする。

そんな時にノック。

「シユウいる？」

入ってきたのは、白いドレスの金髪紫眼の美少女 セツナ「ヴィオ・ヒザキである。」

セツナは涙目で部屋の中央にて固まって自分を見つめる少女を見つめてから、ゆっくりと秋へと視線を移した。

「あんた、夏にあれだけユカリとイチヤイチャしといて何やってるの？」

言われた方は「はあ？」と間の抜けた声で闖入者たるセツナを見て、しばらくして「ばっ、ちげえよ！」と言う。

「こつちは妹の澄。い・も・う・と！」

「イチヤイチャは否定しないのね」

「そっちは、まあ……否定出来ないっつうか、なんっつうか」

うつすら頬を朱に染めてコホンと咳払いする秋。

セツナは澄が纏う緑の燐光に「ああ」と事態を納得する。

「スミ・アオギリというとセイジが半神修練の面倒を見た子で、今こうなってるというと、つまり、Quasi modeね。てことは、アレのせいで辛そうなのね」

ふうん、としげしげ秋の妹を眺める。

澄の方は師匠と敬愛する相手に雰囲気によく似た美少女に眺められて、口の苦さも相まって完全に硬直。

「あ、と。セツナ「ヴィオ・ヒザキよ。よろしくね」

澄の様子に見物をやめて自己紹介。右手を差し出した。

「あおい……っつう」

澄も自己紹介しようとしたが、舌が自由にならず「あうっ」と残念そうに握手だけを交わした。

「まあ、シユウも最初はそんな感じだったから……えっと、確かここに」

腰に下げたポーチをゴソゴソやって「あつたあつた」と10円チヨコ並に小さな包みを取り出して、紙を向いて中身を澄の口の前に持ってきて「はい、あーん」とやった。釣られた澄もアーンと口を開けてソレを口に受け入れた。

頭に「？」を浮かべてモグモグ口を動かすと、やがて端から見ていた兄が驚くほど幸せそうな顔をした。

「な、なんですか？ これ！」

澄が苦みで口の痺れていない声でそう言った。言つて「あれ？ 治つた？」と自分に驚く。

「あれだろ？ 星司が天宮相手に実験して作つた菓子。確か、味覚回復がどおとか言つてたような。完成してたのか」  
「試供品という奴ね。」

ガーデンの時に魔力回復剤のこと話してて、そこから派生したもののらしいわ」

ガーデンという単語に秋はちょっと嫌そうな顔をする。

「で、これが何かと聞かれれば、タフィと答えるべきなのかな？」  
「タフィ？」

「飴のような食感だったでしょ。だから飴だと思つていいわ。味もいいしね。」

若干、魔力回復の効果もあるみたいだけど、まあ、作つた本人が魔力回復剤としては見たくないとか言つてたから、味覚回復剤だとも思つておけばいいんじゃない？」

「ええ、すごくおいしかったです。」

てゆうか、天宮？ それって、天宮璃摩？」

「確かにリマのことね。私としては、タカミヤは夏に来た神州の学生の母校カリマのどちらかしか知らないけど」

学校の名前としての”タカミヤ”と後輩のファミリーネームとしての”タカミヤ”しか知らないのである。

「九曜の者としてはどうなんだ？ な知識量だけだな」

「九曜なんか知らないわよ。ナツキとヒナから親戚がいるくらいのことば聞いたけど」

分家を親戚として考えれば、セイジとセツナの親戚は同世代だけでも十人近くはいるはずだと夏紀から聞いてはいる。率先して会いたいとは思わないようではあるのだが。

「そっか。師匠は璃摩と会えたのかあ」

そういえば、と澄は最近の親友のことを思う。

連絡の取りづらい妹との電話の後、親友こと天宮璃央の機嫌が悪くなることもある。しかもそういう時に限って、最近、璃央の身近や九曜関係者に知られるようになったヒルメ人格とやらが表に出ていてちよつと怖かったりする。

「ところで亜神化を身につけて、あなたも神州を出る予定でもあるの？」

「え？」

「それがあっても、この国じゃ活かせないでしょ」

兄が半神の基礎関係を教えた事情を知らないセツナに「それはな」と秋が説明する。

「恋人を亡くしたショックで精神の浸食が起こりかかったか」

「や、恋人ではなく幼なじみです！」

「どっちとも取れそうな感じよね？ どっちでもいいけど……写真とかある？」

思いきり興味本位な問いに「をい！」と秋が突っ込む。

「いや気になるでしょ。女の子なら！」

「女の……子?!」

「そこかよ、おい」

クウ……。

唐突にそんな音。

梧桐の兄妹は顔を見合わせ、セツナだけが顔を赤くしてプルプルと震える。

「そう！ 和食の店を尋ねようと思ったのよ！」

「……お前、アイザック先輩を連れていないと思つたら」

「そっちはコト八がついてるから問題なし！ 今頃あの人……ええつと、誰だっけ、引率してきた人」

「凜ちゃん？」

「そうそう。リン・カンナギ！ コト八とその人で二次会行ったから」

秋は額を押さえた。

自分達が護衛していた相手は確かに要人ではあるのだが、半生……否、四分の三生ほど市井で暮らしすぎ、学院を卒業してまだ一年経っていないこともあってちよつとばかり軽い。そこそこ成績の良いこともあって護衛を減らしても大丈夫そうだとでも思つたようだ。「琴葉と凜ちゃんねえ。確か、アイザック先輩は龍也さんのファンだった人だし、人選的には間違いじゃないのか」

「龍兄の……ファン？」

「ああ、うん。あの人、色々記録やら逸話やら残しちゃって、な」  
正確には、神薙龍也とりチャード・ロードウエルのチームがある。

「人気の身内より人気の他人とか分からない価値観よね。」

で、それはともかくとして、和食和食わ・しょ・く！ 店の場所さえ教えてくれたら勝手に食べに行くから情報プリーズ！」

「ただ和食に飢えているんだ、と秋は溜息を吐く。澄は啞然。」

要人警護とかほつぱり出して何をしているんだ、ではあるが、どうもセツナの場合はこういう契約だったようだ。

「あいつら、どんだけ誇張して伝えたんだよ、ったく」

和食ねえ、と秋は壁掛けの時計に目を向ければ既に八時過ぎ。空腹の魔人を納得させそうな店がこの時間から予約なしで入れるとも思えない。

（確か今日はうちのアンテナさんはやってなかったし）

うつむ、と唸ってから澄に顔を向ける。妹は既に亜神化が解け、

少し頬を上気させてぼんやりしている。亜神化に慣れない内は持続が切れた途端にこんな風になるのも珍しくはない。ものを聞くのは後にしようと見る先を変える。

「時間的に諦める」

「ちよ」

セツナが見るからに凹んだ。

「先輩によれば、どうせ二、三日空くんだから、その間に星司と琴葉が行った店の本店にでも連れて行ってやるよ」

「え、本店？ そんなのあるの？」

「や。じゃなきゃアンテナショップなんてねえだろ」

「それもそっか」

「明日でいいな？ 予約入れてやつから」

「お、さんきゅ。でもすぐに取れるもんなの？」

「コネを使う」

「……コネ。あんたがボンボンでいてくれて良かったと思った時が今までにあっただろうか。いや、ない！」

受話器を手に取った秋が電話帳を開いたままセツナを振り返って「やかましい！」と突っ込んだ。

秋が予約の電話を入れている間、澄はホワホワした感じでソファに座る。それをセツナが見つめる。

（亜神化の鍵、ね。蓮の実以外にもありそうなんだけど……）

秋が亜神化を身につけるために色々と試した結果に辿り着いた答である。つまりとところ、母親に繋がる存在を体内入れることで道を作るというものだ。

セツナも一度食べてみたことはあるが、思わず秋を殴ったほど苦かったことは覚えている。

片親に人ではない存在を持ち、転生者を兄に持つ妹という立場。その点はセツナと澄の共通項と言える。

世の中探せばまだまだ半神と呼べる存在は結構いそうだが、中でも転生者を身内に持つ者はそれほどはいないだろう。



なんとなく親近感が湧く。

おそらく、澄も正しく魔法について学べばセツナに匹敵するだけの才能を周囲に見せつけるだろう。そういう存在が自分以外にいるというのは、なんとも楽しいと思ってしまふのがセツナという女であった。

(今ならまだ)

ほわほわ澄を視つめる。

学院の老教官曰くの” 丹田” 付近から緑光が消えつつあるのが分かる。緑光は体内を通って外へと流れて消えていく。

澄の現状は、緑光が体内を通る際に生じる障りのようなものをくすぐったがってる状態である。

ふむ、と頷くと、セツナは澄の隣に座り、その肩に手を置いた。

澄はまだ若干上気した状態でセツナに顔を向けて首をかしげた。その耳元に口を寄せる。

「今抜けそうな力をもう少し留めておくと、もっと気持ちいいわよ」

そんな囁き。声色はただ優しく、蕩けそうなほど甘く、エロい。

秋には聞こえず、ただ、茹だった澄が「ふえっ?!」と驚いて目を回しソファーに沈んだ。予想に反した相手の反応に「あれ?」と囁いたままの格好で固まるセツナ。

「ええっと?」

「じゃ、明日の昼に……って、なにがあった」

受話器を置いて振り返った秋は短時間で起こった室内の変化に眉間に皺を寄せた。

やや遅い夕食の席で、セツナは澄に頭を下げた。

「ほんつと、ごめんなさい」

「もついいですよ」

翌日の和食に思いを馳せ、夕食はとりあえず浅草のどんかつ屋に三人の姿があつた。

秋は革製の私服、澄はチュニックブラウスにジーンズでハンガーにデニムジャケットを掛けている。で、セツナは……。「つつか、なんでお前、制服なんだ？　いつものアレはどうしたんだ」

一人、ミスロジカル魔導学院の制服姿であつた。

「改良中」

「はあ？　なんでよ」

「なんでって」

セツナは秋の反応にしようもない、と吐息。

「卒業試合まで三ヶ月でしょ？　普段は接近戦でやらないあんたやホリンとかと当たったら、アレじゃフリだもん。少しはプロテクト強めないと。」

セイジの分がメルカードで一新されてるらしいから、ついについてことだね」

「ん？　いやいや、メルカードで一新って、軍仕様じゃねえか。学生バトルで軍レベルに一新したもん着てくるなよ」

「何言ってるの？　割と常識よ？」

あの試合はある意味、就職先へのお披露目も兼ねてるから、軍仕様品を使っても勝つための努力として認可されてるし」

「マジで？　GSそういうのないんだけど？」

「それは調べ不足。」

GSはワールド・ギアと敵対している立場上、あそこと敵対する企業と何かしらかで繋がってるでしょ？　今までの卒業生でGSに行つた人はそういう企業で魔構やら衣装やらを調達してるはずよ」

「ほ、ほお？」

どことなく分かつてなさそうな顔で頷く秋に、セツナは額を押さえ、なんとなくなんの会話をしているのか合点の行つた澄は兄の様子にそこはかとない不安を覚える。

「企業調査とか、ちょっとオリヴィエに任せすぎなんじゃない？」  
「なんで分かった!？」

「いや、分担的に」

「オリヴィエもまだ帰ってこないし、いい加減、自分で調べること  
もしないと駄目か」

「普通は最初から自分で調べるけどね」

「くっ」

「あの、オリヴィエさんというのは？」

澄にとっては聞かない名前だ。

「二年時のミスコン潜入クエストで秋が口説いた男よ」

「おまつ、それは忘れる! つうか、妹になんてこと教えやがる?  
!」

「ふふん。元々、出場者を口説いて避難させるのが役割だったとは  
いえ、まさか潜入クエストの参加者を口説くとは誰も思わなかった  
わ」

そんなクエストもある。

「ま、その後、ナニがあつたか知らないけど、ずいぶん仲良くなっ  
たよつで、就職先も同じくするほどには」

「GSはこれから伸びるから良いんだ」

「シユウとの就職パートナーね。んで、今は」

セツナは店内設置のテレビを指差す。そこにはちょうど、現在、  
シベリアで行われている戦闘の光景が放送されている。どうも衛星  
からの撮影のようだ。

「ドイツからずっと連戦であるそこにいるはずの同級生ね。」

引率はうちのパパだし、タツヤとユウもいるし、長引いてはいる  
けど割と安心もしてるのよね」

「そりゃな」

「うちのラフィルとシユスイも一緒だしね」

「朱翠か」

その名を聞いて、口にして、そこで押し黙る秋。超鬼ごっこで撃

墜された記憶でも蘇ったのかとそれほど深くは考えず、セツナは澄と話す。

「ともあれ、さっきの弁解をすると、Quasi modeの魔力を長く体内に留めておくと回数少なめで慣れさせることが出来るわけだ。

ああ、あと、慣れる前なら抜けてく感覚の持続も出来るわね。そこちは副作用のようなものだけだ」

その副作用の感覚は色々と言われているが、ネット上での表現は割と間違っていないとセツナは言う。

”性的な感覚”だ、と。

そういう方面の話に慣れていない澄はやはり顔を赤くしてしまう。セツナも別に慣れていないわけではないのだが。

「亜神化がそういうもの、ということなんですか？ そうすると兄さんや師匠も味わった感覚ってことに」

「ないらしいわ」

断言。

「ないというか、人の神経で神の魔力に溺れる感覚が性的な感覚に似ている、ということだ。ほら、シュウといい、うちのセイジといい、リンカーだから」

「ひよつとしたら味わったかもしれないけど覚えてないくらい普通のこと？」

「そんな感じ。ま、性的というと色々問題があるから、力を抜いて海を漂う感覚とか」

「ああ……その文句なら見たことが。そっかあ、亜神化のネタだったんだ」

元ネタも知らず知っていた言葉だったらしい。それ自体はネットサーフィンをしているなら珍しいことでもない。

注文していたものが並べられる。

鉄板に乗ったとんかつ……焼きカツというものである。セツナは「んん？」と物珍しそうに焼きカツを凝視する。

カツレツはたまにセイジが肉を変えて色々作りはするが、鉄板付ははじめて見る。

「ステーキとかハンバーグじゃないのに鉄板？」

「焼きカツですから」

「焼きカツだしな」

頭に「？」を浮かべるセツナに対して、さして珍しくもないと梧桐兄妹がナイフとフォークを手に取った。

「兄さん、お箸じゃなくなったの？」

「あー、西にかぶれただけだから気にすんな」

兄妹の見様見真似でセツナも食べ始め「これはこれで」と舌鼓を打ちつつ平らげ、食後の茶を飲む。

【次のニュースです。本日18時頃、秋葉原に出現した大型幻獣は……】

澄が「あ」とテレビに顔を向けた。

無事に退治され、怪我人もないとのことだ。映像では、物々しい武装の集団が三つの首を持つ蛇にトドメを刺している。

「蛇？」

「蛇、ねえ」

ここで秋とセツナが幻獣の姿に反応する。

蛇といえば、少し前に秋はギリシアでヒュドラを退治している。

「神州って、蛇は結構出るものなの？」

「大戦以降は神の位に返り咲いてるから、幻獣として人に害をつてのほないはずなんだがなあ」

秋は映像を睨みつける。

「神州産……じゃないかもしれないな」

「え？」

兄の言葉に妹がテレビより兄へと顔を向けた。

「そこは意見同じかあ」

「ええ？」

澄は秋とセツナを交互に見る。

「パパから聞いている神州の蛇の特徴じゃないわねえ。蛇って言うか、割と竜っぽい？」

幻獣は世界各地に現れる存在ではあるが、出現地点における傾向というものがある。傾向と照会した結果、神州の蛇ではない、とセツナは断言する。

秋としては、神の座に返り咲いてそれほど経っているわけでもないのに人に害をなそうとする馬鹿な蛇がいることを否定する。

「少なくとも周りが止めるだろうし、止められなくてもやるうとした綻びなりが人の目に分かる事象として出てくる」

「おお、シユウが神様っぽい」

「そんなすごいもののわけあるかよ。」

あの自警団がそれを理解しているとも思えないが、神祇院か九曜で気づいた奴が動くだろ」

神州はそういう国だ、と。

「なんにしても、明日の飯時に出てこなけりやかまやしねえ」

「そういうこと言ってるると本当に出てくるから」

「嫌なお約束だ」

気になる嫌なことは口に出すな。

日崎司がクエストを受ける生徒達に言い聞かせている格言である。お約束を馬鹿にするな、ということらしい。

「外の学校だと世界各地の幻獣に関しても勉強するんですか？」

澄はセツナに聞いてみる。セツナも秋も神州産ではないとのことだが、セツナのそれは学び事の結果のようだったから気になった。

神州ではそういうことを学ばないからである。

「国内だけじゃなくて国外のクエストをも引き受ける手前、いつ想定外の幻獣と遭遇するか分からないから、ね。」

伝承学といって、まあ、科目としては任意なんだけど、あればあつたでクエストでの危機管理も有利になるし……そうねえ、討伐系の求人が増加すれば今後必須になるかも？」

幻獣の討伐を引き受けるギルドの存在が神州にはない。幻獣が出

れば、烈士隊が自警団の仕事である。

前衛が幻獣と相対している間に後衛が対象の弱点を探る。または検索にかける。欠点としては、後衛が対象の情報を前衛に伝えられなければアウトであることだ。

情報の伝達による時間が前衛の生死を分けることから、検索元のデータベースの充実やアクセス速度の上昇に力が入られている。が、最近、情報更新とインターフェース周りの開発を専門としている企業が音を上げている。年々、幻獣の出現頻度が増加しているのもあるが、それを超えて、検索者が多すぎて焼け石に水になっていた。

「幻獣の情報関連は魔構ではなく、大戦以前から開発されていたスパコンでやっているって聞いたけど？」

「生体に不関与のデータ系は魔構よりスパコンの方が優れてますからね」

魔構関係の話題になった途端、澄の目がキラキラしたのをセツナは見た。

（あー、この目。クロケット兄妹と一緒にだわ）

うん、よく知っている目だ。

なんとなく秋に目を向ければ、兄の方はテレビをポケットと見て妹とセツナの会話は耳に入っていないようだ。

（伝承学は苦手だったわね）

情報源は琴葉。ロウエンドの第二班は役割分担がはっきりしているから、前衛である秋がこんな状態でも立ち行く。とはいえ、愚痴が出ないわけでもないといったところだ。

「伝承学は世界を対象として広く浅くやるか、土地を限定として狭く深くやるか、はたまた場所を限定しなくてもよくて時間とお金でなんとかなるデータ検索か。」

まあ、その検索も、伝承学が下地があれば時間の短縮が出来るのも事実よね」

結局のところ、色々短縮ということ、世界でもまだそこそこス

パソコン性能の良い方の神州なら、広く浅くで検索が一番良い、と。  
「でも最終的には、やっぱり、装備に頼らないようにはなりたいたいですよ」

「そうね。目指すならそこよね。ほら、その落第生。ちゃんと妹の目標を胸に刻みなさい」

「落ちてねーよ!? ちゃんと鬼ごっこに出場出来るだけの成績はとったじゃねえか!」

テレビを見てはいてもちゃんと聞いていたらしい秋はセツナと澄に顔を向けずに大声を出し、お店の人にジロツと睨まれて縮こまった。

「そう言えば、いたわね。撃墜され王」

秋は身体ごとセツナに向き直った。

「嫌なこと思い出させるなよ」

撃墜され王とは、一体誰の命名か。

「例のシーンは編集されて来年の超鬼ごっこで放映されるらしいわ」  
「編集者は間違いなくオットーだな」

「他にいないでしょ。1カメ、2カメ、3カメでなかなか面白いシーンになってたわよ?」

「あの野郎」

カラカラと思い出し笑いをするセツナに、秋は拳を握りしめて後輩へのお怒りを燃やした。

超鬼ごっここのことは教えられてはいたものの、結果までは聞かされていない澄は首をかしげる。だから聞く。

「晴れ舞台は結局どうなったの?」

「聞くな」

「それはね」

「答えるな。マジでお願い」

妹には命令口調で、友人には懇願で応じる秋である。大体それで、妹も兄がろくでもない目にあつたことは想像がついて、吐息。

「シユウも、ね。結局、夏以降からずっと、シユスイも巨獣退治に



駆り出されてるから、このままだと卒業のアレ前にもう一戦やれるかどうか分かんないわねえ」

「朱翠なあ。あいつさ、御門の嘉藤とやらかしたとか聞いたけど、天宮とラフィル・エルが決着前に待ったかけてうやむやになったとか……、そもそも、なんであいつらは決闘まがいのことやらかしたんだろうな？」

同じことをセイジにも聞いてはみたが、一言「知らん」で終わったネタである。どさくさでセツナからも聞いてみるかの勢いの問いだ。答など期待してはいない。

「んー？ あれって、確か……、シユスイが神州にいた頃からのいざこざってやつじゃなかった？ 女性関係っぽいけど」

と、セツナはうる覚えの情報を吐き、その情報に、秋は食いついた。

「え、お前、朱翠が学院来る前の話知ってんの？」

「知ってるって言うか」

セツナは言う。あの日、勝利と決闘まがいの死闘をやらかした朱翠が、ラフィルに正座させられて事情を吐かされていたことを。

「まあ、事情の全部は吐かなかつたけど、ミカドのカトウから私怨を買っているみたいな話だったわね。個人の、且つ故人も交えた事情だからそれ以上はなんと……」

「故人？ そりゃ一体」

「食いつくわねえ。でもこれ以上は、知らんの一言よ。」

大体、シユスイの一件はほんとに私は知らないのよ。裏使徒のシユゼン・サカキの実子ってこと以外はね」

「あまり長くないとはいえ、よく疑似家族なんてやってられるな」  
秋の言葉に対して、セツナは吐息。そして「ぶっちゃんけ」と漏らす。

「素性なんてどうでもいいわ。」

ラフィルだって血なんか繋がってないわけだし、パパとママがラフィルもシユスイも家族だって認めただから、ヒザキは夏から六

人家族なのよ」

「考えなさすぎだ」

「と言つてもね。あんただって、シユスイが悪い子じゃないのは分かるでしょ？ 理由なんてそれだけでも十分なわけよ」

「お前……すごいな」

「ふふん、惚れるなよ？」

「それはない」

きつぱり。分かりきった反応だが、ノリとして「をい」とはつつこんでおく。

「なんにしても、朱翠が神州にいた奴で御門の嘉藤と関係があったことは分かった」

秋は、榊朱翠がイコール武本俊太郎だ、という勘を持つ。しかし、妹ほど俊太郎と付き合いがあつたわけではないので、確信には至らない。まだ何か足りないと思う。

「うーん」

セツナが何か引つかかるようで、首をかしげた。

「まあ、いいや。いずれ思い出すでしょ」

「なにがだ」

「あとあと。じゃ、もうこれ以上出ないなら、アオギリのホテルに帰りましょ」

「そついや、うちに部屋取ってるんだつたな。お前、日崎の実家じやねえのな」

「行つたつて、誰がいるわけでもないし、ヒナの家でも良かったんだけど、他の分家とやらが口を出してきて鬱陶しいからさ」

雛の実家も夏紀の実家も普通の家である。九曜本家の人間を泊めることに反対してポイントを稼ごうとする者もいる、ということらしい。

「コトハもいるし、ま、学生寮と変わらないわね」

「お前らつて、仲良いんだか悪いんだか、ホント分からねえな」

「悪くはないわよ？」

セイジのことがなければ、と内心で呟く。それが幼少から変わら  
ないセツナと琴葉の関係を表す最大の言葉でもある。

セツナはセイジと違って、琴葉のことを幼なじみとは言わない。  
ホリンとレンメルに関しては幼なじみと呼んでやってもいいと人前  
では斜に構えて答えるが、特に間に挟むべきことはなくそれなりに  
気に入った関係ではある。そんなセツナが人に琴葉との関係を聞か  
れれば答えるべき言葉は一つ。

『腐れ縁よ』

答えて、フンと鼻を鳴らすのはもはや定番である。

胡散臭そうに表情を崩す秋を置いて、澄と雑談を交わして夜の浅  
草に出るセツナの姿があった。

「カトウとタケモトと……サエキだっけ？」

「また、唐突ね？」

翌朝、深夜まで飲み過ぎた護衛対象が二日酔いで部屋から出てこない状況で、ホテルの朝バイキングの席を琴葉と共に梧桐兄妹の席にご一緒していたセツナが、そんなことを唐突に口にした。

ブレッドをちぎる手を止め少々思索した後に、神州からの留学生の歓迎会で勇とそんな話をしたことを思いだす琴葉。

「記録によれば、昨年、武本翠が死去したことで全員の死亡が確定された、らしいわね」

「あれ、そうなの？ サエキという人が生きてるんじゃない？ 行方不明という話だったような気もするけど」

あの時、琴葉と勇の会話を聞いていたセツナはそういう話だったはず、と記憶を遡る。

「佐伯四郎に関してはアスガルドで把握していたわ。神州に情報を公開していないだけなんじゃないかしら？」

アスガルドの幹部クラスからは、そこそこ大事には思われているようだったから

「へえ」

「それで、何故今その話をするのかしら？」

「や、そう言えば、スイオウって名前に聞き覚えあるなと」

「それはまあ、あるでしょう」  
ガタツ。

その音は秋とセツナの隣から、琴葉の正面から響いたもの。

秋は吐息、セツナは「ん？」と顔を向け、琴葉は一瞥しただけ。

「あ……ごめんなさい」

澄が謝りながら着席した。

「朱翠が使っている刀の名前よ」

「そうだったっけ？」

セツナの反応に、琴葉は吐息で応じる。

「桐生夏紀と相対して暴発事故起こした結果、その修理にあなたのマテリアルハンドのデータを流用したでしょう？」

「……あ、ああ、うん、思い出した」

うんうん、と頷くセツナ。

確かにそんな流れで、朱翠の予備武器に触れる機会を得ている。

「神州マニアのレンが開発に関わった刀だから、剣聖の称号から名前を付けてもおかしくない、とはあなたが言ったのでしょくに」

「確かに言った。いやあ、もう、ついうっかり」

テヘリとやったセツナと呆れて紅茶を口にする琴葉。琴葉と一緒にだと、セツナは若干だらしなくなる。

以前、秋はセイジと話した後、ホリンから「セツナとコト八を見ているようだ」と言われたことがあるのだが、果たして「こんな感じ……かあ？」と首をかしげた。

それからしばらく静かな時間が流れ、着席者の前の皿はすべてが空となる。

口元を拭った琴葉が最初に立ち上がる。

「先輩は予定通り、ここに押しかける駐日のエージェント相手に忙しくなるから、今日は自由行動にしてくれとのことよ。とはいえ、私はここに残るから護衛面は気にしないでいいわ」

好きにしろ、と。そう言っつて、相方二人を見下ろして、琴葉は二人の次の行動を見守る。

「護衛が自由行動、という奴ね？」

つまり、護衛というの名の自由行動である。

国のVIPの護衛を学生だけに任せることなく、学院の卒業生で構成されるSPもちゃんとしてきている。

（私が自由行動というより、秋と刹那が自由に動けるように手配されているとしか思えない。そんな風に思えてしまうくらい、今回のクエストは不自然なことが多いわね。原案は一体誰かしら？

秋は分からないけれど、刹那なら気づくのでは……)

護衛対象として先輩からの不自然な自由行動推奨命令。よほど浅慮でもないかぎり、不自然さに気づいてもおかしくはない。

「んじゃ、俺達は心置きなくアキバに行けるってもんだな」

「少しくらいの心は置きなさい」

秋の楽観にはとりあえずつつこんでおき、さっさと自室へと帰る  
琴葉。

秋はそれを見送って「それで、どうするの？」というセツナの問いに、うん、と一つ頷く。

「俺はちよつと飯の前に行きたいところあつから、お前ら適当に時間潰して13時に万世橋だ。店はそこからささして遠くない。澄はこいつを連れてきてくれ。学校ねえだろ？」

「ん。分かった」

その後三人は少し雑談を交わしてからそれぞれの部屋に戻った。

琴葉は自室への移動中に電話を受ける。

液晶で表示された名前に、出る前に少し喉を整えた。

「あなたのお願ひ通りに仕向けたから、安心なさい」

開口一番、琴葉は電話の相手にそう言った。

「あなたにしては珍しい”お願ひ”だった。それだけで私は力を貸してあげるわ。それが約束ですものね」

そう言う琴葉は心なしか嬉しそうに見える。

「国のVIPが国外に出てまで協力しようとするクエストの内容に興味がないわけではないけれど……ええ、それは私の受けたクエストではないから、どうでもいいと思うことにするわ」

そこで一旦話を止め、周囲に誰もいないことを確認してから告げる。

「無茶だけはしないでちょうだい」

それへの答を耳にして、やや呆れ気味に吐息。

「ホリンといい、あなたといい、こういう場面での『分かつてる』が空々しく聞こえてしまうというのは如何なものなのかしら。

それじゃ」

電話を切って窓から南の空に数秒顔を向け、肩を小さくすくめてから、再び歩き出した。

陽の届かない暗く淀んだ路地裏が、一瞬、カツと赤光で照らされて、狼とも人とも思える幻獣は叫び声一つ挙げる間もなく炭と化して消え去った。次いで、パリンと何かが割れる音。音源には人影が一つ。

人影は幻獣がいた場所を一瞥。踵を返して路地裏を後にする。

路地を抜ければ日を浴びて、人影が、緋色のブレザーを着た特徴的な濡烏色の長髪を揺らす少女であったことが分かる。天

宮璃央である。

（あれが最近、秋葉原周辺に出る特殊な幻獣？ 確かに、この国特有というものがない）

神保町での用事の前に、フラリと立ち寄った秋葉原。

ふとしたきっかけで感じた嫌な気配を追って路地裏に追い詰めてみれば、漫画やアニメ、ゲームでおなじみの狼男がいた。そこら辺のジャンルに疎い璃央でも、神州臭さがない存在ではある。

右手中指に嵌めた銀の指輪に視線を落とす。本来であれば、そこには護身用のマテリアルがあるはずだが、それを用以て狼男を倒したため、今はただの輪っかである。

吐息。

平日通り、桐生夏紀か水城雛を護衛に連れておけば良かったという後悔を持つが、この後の用事を考えれば、マテリアル一つで済んで良しとする。

ここはちょうど秋葉原。マテリアルの補充がそこから中できく街である。

腕時計で時間を確認すれば、11時30分を少し過ぎた。約束は正午だから、時間はまだある。

とりあえず表通りへ出ようと歩き出すが、璃央はその足をすぐに止めた。通りの向こうを夏紀と雛の二人が横切るのが見えたからだ。(何故ここに?)

揃って遊びにきた。それは可能性の一つだが、それが雛のみであれば領ける。しかし、夏紀のイメージには合いそうもない。彼は用事がなければ鍛錬で時間を潰しそうだからだ。

知らず、二人を見かけた大通りに足が向き、周囲を見回してみるのが、既に姿はない。

しばし通りに佇み、何かモヤツとした心を残してその場を立ち去った。

服の下 勾玉が微かに光るのを気づかずに……。

セツナは至福の溜息を吐いた。

目の前の膳は食べ尽くされ、溜息の主は満腹且つご満悦である。

「ああ、うん……これはいい」

兄の言い分通り、確かに、父の自慢は正しかった。

見た目は芸術品。おっかなびっくり壊してみれば破壊者の汚名を着たくなる。

最初は何言ってるか分からなかったが、セイジが「なるほど確かに」と頷くのを見て同じものをと望んでみれば 超ご満悦。

視界の中では、澄が口元をフキンで拭いて「ごちそうさまでした」と言い、秋が老年の板長に頭を下げている。

(イタチヨ……シエフのことだったっけ?)



「ごちそうさま。すごくおいしかったわ」

「さようございますか。ありがとうございます」

（あれ？）

妙な違和感に、セツナは顔色を変えず、ただ疑問を持つ。

（今、Englishで話そうとして、普通に神州の言葉で会話した？ これは……）

抱く感覚はブリテン連合国内でのモノと同じ　バベルである。

（近くにアークセイバーがある？　ふうん、セイジ達のクエスト、この近辺なんだ）

秋頃にメルカードで改修を受けたセイジのバイクは、搭載されているバベルの機能が向上し範囲が広がったと聞いている。と言っても3キロ圏内が限界とのことだが。

ふと、視線を感じて顔を向けてみれば、板長がセツナのことを懐かしそうに眺めていた。

「失礼しました。ある方にとても似てらしたものです」

「そりや間違いなく日崎教官のことだな、うん。先代の九曜頂・日崎司でそいつの親父だよ」

「ごおりで」

なにやら嬉しそうに納得される。

セツナとしては父にどこかしら似てると言われるのは悪い気はしないから、少し誇らしげである。

「日崎の若様は、浅草の本店に天宮の璃々様とよくいらっしやっていました。懐かしいですな」

板長は、本当に懐かしそうに目を細める。

「ああと、教官が若様で璃々様つつと？」

兄の視線を受けた妹が「璃央のお母さんだね」と答えた。

「ああ、世代同じだったもんな。うちの親父の二コか三コ下だったか」

「アオギリ、タカミヤ、あとウチのヒザキ、親の代で妙な繋がりを持ってたようね」

「妙つつうか、天宮と日崎で婚約とかしてて、んで、うちの親父は両家の当時の頂にとつては先輩だっただけ……いや単純に”だけ”とも思えないんだが」

つまりは”妙”である。

「ま、その妙さえも、更なる日崎当主の妙な国外逃亡でばらけちまっただけで」

秋が、日崎司の”妙”を父に尋ねた時、梧桐葉月はただ「その結果は既にお前の知るところだ」と答えただけであった。

「俺の知るところとか言われてもなあ。手っ取り早く、国外逃亡の結果で星司と刹那が誕生したとでも思えばいいのかと」

「つまらない答ね」

「じゃあ、お前はもつと面白い答でもあるのかよ？」

そうね、とセツナはアゴに指を添える。板長が頭を下げて退室し、室内が静かになった。そこで澄が「こういうのは？」と口を挟む。

「子供の代で惚れた腫れたの運命的な出会いを……とか」

「そういうネタの漫画をリマから借りはしたけどね」

「え？ 璃摩が漫画を？」

「おかしなことでも？」

「あ、いえ」

澄の記憶上の天宮璃摩は、家にも姉にも従順で到底漫画などといったものとは無縁であった。無論、御門の学生としての璃摩のことは知らないから、璃摩が雛や夏紀、それに勝利といった面々とそれなりに学生生活をしてきたことまでは把握していない。

「あの子がセイジにまとわりつくのが、先代の恋愛のやり直しとかだったらまだ分かりやすいものを」

「いやあれは……」

璃摩が転生者であることは分かるが、学院内でその神名までを正確に知る者は少なく、セツナは知らない側に入る。だから、兄と後輩の間に互いの親の何かしらの情報がやりとりされたと見ているのだが、秋はセツナとは違った判断を持つようで、セツナの言葉に何

か口に出そうとして言葉を濁す。

(奴のアレは、大方、長く会わなかったことの衝動か)

「あれは？」

「あ？ ああ、いや」

妹が首を傾げたのに対し、秋は誤魔化しの言葉を探す。そして適当に言った。

「母親の感情が娘に遺伝でもしたんじゃない？」

「秋がそんなことをどうでもよさげに口走ったその時、襖がスパーン！ と両開きに、勢いよく開いた。」

「その話、詳しく聞きましょうか！」

威勢の良い登場をしたのは、緋の和装をした妙齡の女性だった。

「でたーーーーー」

「え校長？」

超驚きの兄とちょっと驚きの妹に、セツナは「ん？ ん？」と女性と梧桐兄妹とを交互に見て、女性を指差した。

「誰？」

「今回の会合はここまでだな」

「そうですね」

烈士隊制服の青年こと不破正義と天宮学園制服の少女こと天宮璃央は、空いた席を共に見つめてそう口にした。

そこに座っていたのは九曜頂の一人である楠木弦遊老人で、先刻、一本の電話をきっかけに席を辞している。

璃央の左にも席が一つ空いているが、こちらは母・天宮璃々が数分前に私用で席を立て空いたものである。

「ところで九曜頂・不破殿？ 先程から気になっていることを尋ね

ても？」

璃央は視線を正義に移してそう口にする。

不破正義。先代である父が病に倒れてから、九曜頂の立場を継いだ新参である。もつとも、九曜頂としては新参であつても烈士隊では”武神”の称号で呼ばれる有名人だ。新参であることを理由に彼を軽んじる者はいない。

「かの武神を負傷させたのは、どちらさま？」

正義は「ふむ」と自らの胸を見下ろす。制服の下は包帯が巻かれているが、外から見て分かるものではないが……。

「熱を視られたか」

熱を視るだけで他者の異常を察する。

天宮璃央は、間違いなく、夏前の”ただの九曜頂・天宮璃央”だった頃よりも、あらゆる面で強い。敵にまわすのは得策ではない。それが、鎚木派と呼ばれる政治家達の出した答である。

九曜・不破も鎚木派に属しており、夏以降、九曜頂・鎚木弦遊に接触するようになった璃央と弦遊の行う会合には、九曜・不破の代表代理。今はもう代理ではない。として出席している。

「後れを取った。それだけだ」

正義は結果を隠さず素直に答えた。その解答を璃央は少し意外そうな顔で受け取った。

「多くの戦士は遅れを恥として他者には漏らさないものだと思いましたが？」

「遅れても命があれば、次に先んずればいい。

恥なのは、遅れを認めないことだ」

間を置いて、正義は「持論だがな」と付け加え湯飲みを手を取った。

「遅れを認める……ですか」

正直、意外である。

「恥によって失敗をしたこともあれば、こおもなる」

璃央の顔を見ていた正義が溜息混じりで口にした。

「こおなつたところで、今、奴に勝てるかと聞かれても結果を想像出来ないのだが」

「奴？」

「そう、奴だ」

奴が何者かは言わず、正義はただ、茶をすすった。言つつもりはないらしい。

「しかし、遅れを認めて先に進むとは、文科省に言い聞かせたい言葉ではありませんね」

正義にはこれ以上突っ込まず、話題を微妙に反らす。反らすというより、この場では話題を戻したとも言える。

今回、九曜頂が三人揃ってした会合の内容とはズバリ、魔法学への文科科学省の対応についてである。

夏にもたらされた西の技術を来年の教科書にはまだ反映しない、というのが文科省の出した解答だが、これに対して神祇院から疑問の声が上がり、九曜を通して抗議しろと通達があり、通達に関してどうするかと頭を付き合わせていたのが、ほんの三十分前のことである。

「どれほど学会が震撼しよう、文科省の上が変わらなければ教科書に反映すらされないというのは悲しい話だ」

「民間での結果を待つとする意見も出ているようですが、昨今の対外関係を鑑みるに、新しい魔法学の浸透は学生間だけではなく軍部においても推し進める必要はあるかと思えます」

「まあ、な」

軍部に関しては、正義が既に推し進めているものがあるが、それを知る者はまだ少ない。

（留学生の彼らは短期間でかなりの成長を見せている。彼らが受けた訓練を軍の一部に行えば民間の成功例を待つ必要はないだろう）

どのような訓練をしたかは既に伝わっている。問題は、それを他者に教授出来る教育者が不在であることか。

（凜が神和の私兵にかかりきりでなければ、な）

正義のかつての同級生は、天宮の学生の他にも実家の私兵への技術教授に忙しくて、烈士隊そのものへの技術提供までは出来ていない。そこには九曜・神薙の分家長である神和辰哉の妨害もあるようである。

（国内で横の繋がりが足を引っ張り合うのは、LR以前も以降も変わらぬこの国の在り方だが、アジア連合の動きを見るかぎり、それをする時間はもつたない。アメリカの動きも不気味だ。

頭を切り換えるだけの危機感が必要という鍋木老人の言葉も分かんなくもないが……）

「九曜頂・天宮殿は幼少に日崎司から学んだと聞くが？」

「私が先生に教わったのは基礎の基礎ですし、星司さんに魔力操作を教わるまではほとんど忘れていました。他者に教えられるほどではありません」

璃央は正義が続けるであろう烈士隊への教育を先に読んで断る。

「願わくば、あの人が……」

璃央が言いかけた時、璃々が戻ってきた。

「まったく、梧桐の男は……」

どこまでも深い溜息と共に。

「おおぎり……浅草の梧桐、ですか？」

娘の問いに、母は「その梧桐です」とくたびれたように応じる。

しかし、母の様子を見た娘のかける言葉は違うもの。

「何か嬉しいことでもありましたか？」

かけられて、母は動きを一瞬止めて、何もなかったように席に着く。ただ、動きを止めたことには璃央は気づかず、気づいたのは正義のみ。

「他人を説教することが趣味と誤解されるようなことを言うのはやめなさい」

「……すみません。」

それで、梧桐の男とは？ 梧桐葉月さんでもいらっしやっていたのですか？」

聞いてはみても、母が遭遇したのが澄の父・梧桐葉月とは思っていない。今まで、璃々が梧桐葉月と会って、嬉しそうに見えたことなど一度もないからだ。

（かといって、梧桐の”男”といえば……渡君？ 神祇院で問題視されても、あの子は先輩と違って母様達にウケもいいし……）

「あそこの長男が一時帰国しているのよ」

「え、そっち？」

「残念なこと」

別段、残念でもないが「そうですね」と応じておく。

正義は「そう言えば」と彼にとつての些末事を口にする。

「昨日、ブリテン連合のVIPがこちらへ到着された際、護衛の中にそれらしき人物がいたとのことだが……」

情報に、璃央は「ああ、なるほど」と頷く。

「ミスロジカルのクエスト、ですか」

（来るなら”あの人”が来ればよかったのに）

秋の存在に納得しつつ、どうせ来るならと本心を胸の内ではいておく。

「アイザック・アルバートの護衛とのことだが……」

「九曜頂・不破殿の情報網に引つかかる相手なのですか？」

秋の護衛対象を知っているかのような正義の反応に、璃々が問う。

「ミスロジカル魔導学院十二期生で第二位の実力者だ。」

その実力は極めて高く、卒業後すぐにグレナディア連隊に配属されている

「ぐれなでいあ？」

璃央の反応に正義は小さく首を振る。

「ブリテンの近衛兵団だ。」

魔法戦が主力の今の世にあつて、ようやく魔構が揃いだしたロイヤルズ・ドラグーンよりも戦いの中枢となっている

正義は湯飲みを置いて続ける。

「各軍のエリートを揃える軍に卒業即配属され、尚且つ、一度市井

に出た血を女王命令で王室に戻して爵位さえ与えている。

異例とも言える立場を考えれば護衛は必要かもしれないが、実力から言えば護衛は不要。

監視はつけているが、今のところは目立った報告はない」

「今、しれつと対外的な問題発言が聞こえましたが」

「気のせいだ、天宮先生」

説明の末尾を聞き咎めた璃々相手に、中等部時代の教え子は「問題ない」と両手を開いてみせた。

と、建物全体を揺れが襲う。揺れは数秒で、微震を残さず唐突に消える。そして、この一帯のどこかに設置されたスピーカーからサイレンが響き渡った。

「幻獣速報か」

落ち着き払った正義が手酌で茶を注ぎながら口にする。

サイレンを聞いていた璃々が「また秋葉原かしら？」と北と思しき方角に首を巡らせる。

「揺れの発生源が幻獣だとして、その後の微震がないのは境界か何かで封じたということか。良い手際だ」

「手際は褒められても、そういう人材のいない軍の長が褒めてもねえ」

「ぐっ……。天宮先生も人のことは……。どうしましたかな？」

雑談に走りつつある正義と璃々は、無言で立ち上がった璃央へと視線を向ける。

「野次馬です」

解答に、正義と璃々は「は？」と口を開けた。照れ笑いと二人の大人を残して廊下へと出た璃央は表情を引き締める。

（先程のはアナウンスがなかった。とすれば”緊急”幻獣速報のはず）

緊急すぎてアナウンスの準備が間に合わない場合、サイレンだけを先に鳴らすようにしている、というのは秋葉原自警団に所属する同級生から得た情報である。



つまり、今、自警団にとって切羽詰まった事態に直面していることになる。それがどういった事態なのか個人的に気になる。所謂一つの興味本位。だが、興味の対象は事態一つに対してだけではない。（梧桐先輩が帰ってきているなら、きっと今回の騒動に首を突っ込むはず。性格上、絶対に）

ミスロジカルの在校生の実力を星司以外にも知っておきたい。それが野次馬の理由でもあった。秋ならば、中等部での實力を知っているだけに現在との差を計算することも可能かと即座に考えたのだ。

料亭を出て秋葉原へと走って移動する璃央の目に、秋葉原から逃げてくる人々の姿が映る。それは奇しくも、末広町での一件を想起させる。人の数も悲鳴もあの時とは比べものにならないくらいに少ないけれど、万世橋手前の高架下で足が止まる。

項垂れて、視線が向くのは足下。こういうパニックを見るのは二度目だが、慣れるものではない。一度目の光景があまりにも酷すぎた。この場に来たのは自身の好奇心だから、ここで足踏みするのはある意味恥だ。だから、一度強く目をつぶり、首を振ってから頭を上げ、正面をちゃんと見て歩き出そうとして 逃げてきた人の肩が当たって大きくよろめいた。

「っつ……っ?!」

転びそうになった璃央は、そつと、その背中を支えられた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1239u/>

---

LR

2012年1月2日11時49分発行